

# スーパーロボット大戦H／ハーメルン

一条 秋

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ハーメルンに掲載されている多数のロボット作品のコラボがここに実現！

ごく普通の高校生・桂木恭弥は、部活の友人たちと街に出かけた際、謎のロボットの集団に襲われる。駆け付けた連邦軍の協力によって避難するものの、その先で恭弥は神秘的な雰囲気を持った銀髪の少女と出会う。

この出会いが、新たな動乱の幕開けとなるのであった。

光を灯せ！暗雲深まるこの世界に！

作 星々

参戦作品

・Scrap girl | 屑鉄の少女 | (青山ブルーマグノリア)

・Eternal girl | 永遠の少女 | (青山ブルーマグノリア)

・The Knight of Atrantia | 贖いの騎士と氷の女王 | (青山ブルーマグノリア)

・スーパードット大戦OGく泣き虫の亡霊 | (鍵のすけ)

- ・ 白い犬 (一条 秋)
- ・ 白き一角獣VS白い犬 (一条 秋)
- ・ 光明機動ネメシスイト (星々)
- ・ Another side【ネメシスイト】 (星々)
- ・ 機械神伝説―桃太郎― (オウガΩ)
- ・ 【主人公】 戦場駆動【喋らない】 (アルファるふあ／保利滝良)
- ・ 【主人公】 戦場駆動【喋らない】 外伝 (アルファるふあ／保利滝良)

・ 【主人公】 人類最初の希望 救世鬼神アウトサイダー【喋らない】 (アルファるふあ／保利滝良)

・ DOUBLE:violence ≪二人の特典付き転生者が異世界でアテもなく暴れ続けるお話≫ (アルファるふあ)

・ 機動戦記ガンダム・ナガレボシ (アルファるふあ／保利滝良)

※ ( ) は作者名です。これらの作品も合わせて読んでいただくことで本作をより楽しめると思います。

# 目次

1	少女と会った日	1
2	宣告と誘い	19
3	それぞれの理由、恭弥の理由	52
4	ルミアイラ	72
5	亡霊が泣く	101
6	伊豆、到着	123
7	敵か味方か？白き機械神顕れる!!	155
8	初めての恋が終わる時	179
9	戦女神たちの砦で 前編	205
10	戦女神たちの砦で 後編	231
11	強襲	259
12	共闘 前編	283
13	共闘 後編	324
14	それぞれの事後	358
15	鉄の拳の来訪者	401
16	The Bravery	418
17	その一秒 スローモーション	452
18	裏切りの決闘 前編	476
19	裏切りの決闘 後編	502
20	屑鉄の少女、熾天使とまみえる	533
21	伊豆、帰還	555
22	日常の先の決意	578
23	笑う黒い鬼姫、嗤う神官	624

# 1 少女と会った日

新西暦80年4月上旬午前10時。

五分咲きの桜並木の下を、私服姿の男子高校生4人が固まって歩いていく。

「はあー……………」

その最後尾を歩く青いTシャツの上に白いワイシャツを羽織り、ベージュのズボンを履いた少年・桂木かつらぎ 恭弥きょうやは、憂鬱な顔をしながら深々と溜息を吐く。

「何だよ桂木。毎度ながら時化しけた顔して」

「ジーナス先輩が生き生き過ぎるだけですよ……………」

先頭を歩くメガネージーナスのニコニコした顔とは対照的に、恭弥はうんざりした顔で応じる。

「春休みも残りわずかだっていうのに……………何で心霊スポットの下見なんか」

「何を言うか！オレたちはオカルト研究同好会だぞ。心霊スポットだろうがパワースポットだろうが、不思議の匂いする所何処にだって行くもんだろうー！」

「そうそう。桂木君だけだよ。未だにこの手のイベントでゲンナリするの」

「そう言ったって、僕はもともとそういうの信じてないし……………だいたいこの部活だって、入学してすぐにジーナス先輩に無理やり入れられたんだし……………」

先を行く2人ーバニングスと速水はやみに応じながら、恭弥はふと思う。

（そういえば、前の部長が卒業で抜けて、この同好会今4人、必要人数1人足りないんだよな……………新学期が始まれば、今度は新入部員確保で忙しくなるのか……………そして今度は夜中の本番にも参加させられるし）

「はあー……………」

憂鬱な気分を深めながら、再び溜息を吐く。

そんなことはお構いなしに、ジーナスは話を続ける。

「そんなこと言ったって仕方ないだろう。定員が足りなかったんだ

し。それに、本物の霊感持ちを入部させないオカルト同好会部員が何処にいるよ?」

「僕自身は自分に靈感があるなんて信じてませんけどね」

きつぱりと言いつつながら、恭弥はジーナスに部室に連れていかれた頃のことを思い出す。

(子供の頃から人魂みたいなのや、幽霊としか言えない人影がよく見えたよな。十中八九見間違えや勘違いだろうけど。でもその所為で変な方面で有名になっちゃって、噂を聞きつけた先輩に拉致紛いに連れていかれたんだっけ……)

と、

「ああー神様はなんと残酷か。我々の様に真にそうした力を求める者には何もくれず、こんな懷疑主義者にだけ授けて遊ばせるとは!」

「神様、あなたはなんと無慈悲なのか!」

「はいはい……」

バニングスと速水の下手な芝居に嘆息混じりの相槌を打ちながら、恭弥はジーナスの後を追って目的地に近付いていく。

10分程歩くと、今回の下見場所である廃ビルの前に着く。

「どうだ?桂木」

「だから、僕に霊視なんてできませんって……まあ、確かに見た感じ薄気味悪いビルですけど」

真剣な顔で問うジーナスに、恭弥は見たまま感じたままのことを言う。

「それより、早く下見済ませて中華街で飯にしましょうよ。僕このメニューで食事ができるから来た様なもんなんですから」

「お前ねえ、もう少しやる気だせよおー」

「そうだよ桂木君。ボクたちの真の目的を忘れちゃダメだよおー」

バニングスと速水の注意を聞きながら、恭弥は思う。

(ホント、オカルト趣味さえなければ普通にいい人たちなんだけどなあ……どうしようもないけど)

そう割り切ると、先に行く3人を追って恭弥は廃ビルへ向かう。と、

「……………?」

何処からか視線を感じ、恭弥は辺りを見回す。と、

(!……………女の子?)

左前―廃ビルの影に、白いワンピースを着、輝く様な銀髪を腰まで伸ばした少女を見つける。

と、

(見つけた)

「え?」

すぐ近くで声―どこか嬉しそうな気持ちを含んだ声が聞こえたかと思うや、恭弥は辺りを見回す。

と、

「……………あれ?」

その一瞬の間に少女は廃ビルの影から消えてしまう。

「どうした?桂木」

「いや、今そこに……………」

ジーナスの問いに、恭弥は少女がいた辺りを指差して答えようとする。

直後、

「お、おい!あれ!」

「!?!」

バニングスが空を見上げながら叫び、視線を追った恭弥は空の一部が波打つ様に歪んでいるのを見る。

「空が歪んでる?」

「いえ、光が歪んでるんです!軽度の時空崩壊ですよ!すぐに逃げないといと!」

同じく空を見上げて言うジーナスに、速水が慌てて訂正しつつ退避を促す。

その間にも波打ちは激しさを増し、一瞬後に歪んでいた辺りがガラスを割る様な音を響きかせながら大穴を空ける。

「空に穴が!……………」

「重度の時空崩壊です!」

驚嘆するジーナスに、速水が今にも腰を抜かしそうになりながら青空に大きく口を開けた赤い穴を凝視して唾然として言う。

「お、おい！何か来るぞー！」

穴の奥から湧き出てくる様に表われた10程の黒い影に、バニングスが動揺しながら指を差す。

「鎧？……ロボット？」

自分たちの近くに降下してくる影を見て、恭弥は思わず呟く。

20メートルあろう体軀を誇る重厚な鎧の様な姿は黒く輝き、胴部には大きく十字架の様な模様が描かれており、背中から羽の様な物が2対のぞいている。

その内の1機が恭弥たちに頭部を向け、暫し見つめると、

「!？」

右手に持つ銃器を恭弥たちに向け、一瞬後に複数の銃弾が吐き出される。

「!……………」

突然のことに恭弥は反応することができず、他の3人も口を開けたまま固まってしまう。

(僕……死ぬのか?)

迫りくる弾を凝視し、真っ白になる寸前の恭弥の頭にそんな言葉が浮かぶ。

一瞬後、殺到した銃弾が恭弥たちの体を粉碎する——ことはなかった。

(諦めるな)

「？」

さつきとは違う声——穏やかながらも強い意志を感じさせる声が聞こえたかと思うや、銃弾の射線上に白い壁が上から割り込み、覆い被さる様にして恭弥たちを庇う。

「……………」

白い壁越しに銃弾が爆ぜる音を聞いて、恭弥の意識は現実に戻る。

同時に白い壁は身を起こし、恭弥たちを見下ろす。



「……巨人？」

それが壁―全長10メートル程の白い人型に対する恭弥の第一印象である。

金属質の外観からすぐに機械―現在連邦軍が主戦力として用いているロボットだということとは理解しているものの、細身で滑らかな体形と、人のそれを模したと思える2つの目に口らしき線が走った頭部が、どこか有機的な印象を与えてくるのである。

『その人たち、無事ですか？』

途中で折れている様な形の角を生やした頭部、そこに付いている緑色の目を輝かせながら、巨人から拡声器越しの声が響く。

「え？……ああ！はい！おかげさまで」

巨人そのものが喋っている様な錯覚を覚えながら、全員を代表してジーナスが応じる。

直後、先ほど発砲した鎧が武器を左腰に提げた剣に持ち替えて巨人の背後に接近する。

「！危ない！」

恭弥の咄嗟の叫びも虚しく、鎧は右腕を一杯に振り上げる。

しかし、刃が振り下ろされる刹那、

「!？」

刀の形をした別の刃が鎧の斬撃を受け止め、振り返った恭弥たちは背後に別の巨人を見る。

人を模した白い体形、どこことなく有機的な雰囲気を放つところは先ほどの巨人と同じ印象を与えるものの、こちらは全長が20メートル程と巨人の倍近くあり、マスクで覆われた様な頭部には先ほどの巨人よりも長く立派な角が生えている。大きく広げた4枚の翼と合わせ、  
「天使の騎士」を想起させる。

と、

『伏せて！』

「！」

天使の騎士からの声に恭弥たちは反射的に身を屈め、その上から巨人が再び覆い被さる。

直後に騎士は刀で鎧の剣を弾き飛ばし、体勢が崩れた一瞬の間に巨人の上を飛び越え、脇に引いた肥大した様な左腕を鎧の胸部に突き刺す。

鎧は左腕の簡素な盾を構える間も与えられず、騎士の手刀、その五指の先端から伸びる光の刃に十字架があしらわれた胸を焼き貫かれる。

「凄い！……」

胸に穴を空けて倒れる鎧を巨人の影から見ながら、恭弥は感嘆の声を漏らす。

巨人は屈めていた体を起こし、後ろの騎士を振り向く。

『ありがたい！が、こいつら実体弾主体の様だ。僕が引き受けるから、織斑おりむら曹長は彼らを安全な場所へ』

『了解です！』

騎士が応じたのを聞くや、巨人は立ちあがって振り返り、上空でこちらに銃口を向けている鎧たちの群れに飛んでいく。

入れ替わりに騎士が恭弥たちの前に膝を折り、持っている刀を光の粒子にして消すや、空いた右手を差し出してくる。

『乗ってくださいー！』

「え？いや……」

『早くー！』

「は、はいー！」

あまりの急展開に思わず呆けていたジーナスだが、騎士の怒鳴り声で気を取り直し、率先してその手に乗る。

それを見て恭弥たちも手に乗り、掌の中央に寄り集まって姿勢を低くする。

『全員乗りましたね？』

「あ、はいー！」

『じゃあ行きます。揺れますから気を付けてくださいね』

ジーナスの返事に応じると、騎士は指を押し曲げ、立ち上がると大きな左手を添えて柵を作り、初めはゆっくりと、少して速度を上げて地面すれすれを滑る様に移動する。

初めこそ揺れたものの、走行が安定してくると、恭弥たちに現状を振り返る余裕が出てくる。

「しかし、こりやいったいどんな事態だ？心霊スポットの下見に来たと思っただら時空崩壊が起きて、そこから出てきたロボットに攻撃されたかと思っただら別のロボットに助けられて……」

戸惑いを浮かべながらのジーナスの言葉は、ここにいる全員の気持ちを代弁している。

「バニングス君はこういうロボットって詳しかったでしょ？何か知らない？」

『『ロボット』じゃない。』ひとがたきどうへいき『人型機動兵器』だ』

速水の言葉に訂正を入れつつ、バニングスは自分たちを運んでいる騎士を改めて見る。

「もつともオレだって、こんな機種知らないよ。強いて言うなら、連邦軍が主力機に使ってる量産型ヒュッケバイン Mk-II に近いけど……最初に助けてくれた方は、サイズのアーマードールかな？でもあれ、確か飛行能力無かった気がするんだけど……襲ってきた鎧みたいなものについてはさっぱり。強いて言うなら、パーソナルトルーパー？」

「……さすが、軍事オタクのバニングス」

自分には未知の言語にしか聞こえない単語を次々と出してくるバニングスに感心しながら、恭弥は騎士の影から上空を見る。

視線の先では、先ほど自分たちを庇ってくれた巨人が鎧たちを相手に空中戦を繰り広げている。

四方から迫る鎧たちの銃撃を、巨人は縦横に飛び、時には体を捻って避けつつ、手近な1機に近づくとや腰に引いた右拳を胸部に描かれた十字架の交点に入れる。胸に穴を空けた鎧は糸が切れた人形のように地上に落ち、それを横に見ながら巨人は次の敵へと向かう。

「……凄いやー！」

そんな巨人の戦いぶりを見て、恭弥は再び感嘆の声を漏らす。

直後、

『そつち行つたぞー！』

巨人が叫ぶや、鎧の1機がこちらを追ってくる。

『歯を食い縛って、しっかり掴まって!』

「?……!」

叫ぶや騎士は速度を上げ、恭弥たちは振り落とされないように掌の各所にしがみ付く。

鎧が銃弾を放つものの、騎士は後ろに目が付いているかの様に左右に大きく動いてそれを避ける。

しかし鎧の追撃、そしてその銃撃は止まず、

『クソッ!』

拡声器越しに騎士の焦った声が漏れる。

と、鎧の銃撃が止み、騎士はすぐさま後ろを振り返るや、

『伏せて!』

叫ぶと同時に左手を鎧に向けて突き出す。

刹那、騎士の左掌から太いビーム弾が放たれ、マガジンを交換していた鎧に直撃して火球に変える。

「すっげえ…………」

ビーム弾と火球に目を細めながらジーナスが呟く。

しかし、

「また来たぞー!」

バニングスが叫ぶと同時に、火球によって広がった黒煙を裂いてさらに2機の鎧が迫る。

直後、

「!?!」

背後から鎧たちに向かって銃撃やミサイルが殺到し、振り返った恭弥は、上空に航空機に手足が付いた様な細身のロボットの編隊を、地上に騎士の1/4程—4、5メートル程度の大きさの4頭身のロボットたちを見る。

「アレは!—アーマードモジュール・リオン!—それにパワードール・サジタリウス!」

バニングスが関心の声を上げる間に、航空機のようなロボト—リオンの編隊は鎧たちを囲みつつ左腕と一体化したレールガンを放ち、地

上からは4頭身のロボット―サジタリウスたちが手に持ったマシンガン撃つてリオンを援護する。

と、

『そのPTI!』

騎士の右隣で銃撃を行うサジタリウスが拡声器越しに怒鳴る。

『こちらは横浜基地第1PD部隊所属の加納だ。ぼさつとしてないで早く手伝え!』

『伊豆基地所属の織斑です。すみません。避難者の誘導があつて』

『そんなもんとつとと終わらせろ!』

『そんな言い方しなくていいでしょう!』

不機嫌そうなサジタリウスに怒鳴って返すと、騎士は振り返って避難を再開する。

『少し飛びます。落ちないように注意してください』

事前通告するや、それまで地面すれすれを滑っていた騎士はゆっくりと上昇し、恭弥たちが通ってきた桜並木の上を飛んでいく。

(……………そういえばさつきの子、大丈夫かな?それとも、またなんかの見間違いか?)

騎士の手の中で背後の戦闘を見ながら、恭弥は先ほどの少女のことを思い出す。

少し飛ぶと眼下に街並みが広がり、騎士は大通りのそばに着地する。

左手を添えた右手をゆっくりと下ろすと、曲げていた指を広げ、恭弥たちは速足で掌から降りる。

『ここまで来ればシエルターがあるでしょうから、そこに避難してください。放送があるまで絶対外に出ないでくださいね』

「わかりました」

ジーナスが代表して応じるや、騎士は振り返って飛び立とうとする。

直後、

『!もうこんな所まで?!急いで!』

急かす様に声を掛けるや騎士はすぐに上昇し、それを追った恭弥た

ちは騎士が向かう先で鎧たちと巨人・リオンの部隊が交戦しているのを見る。

「やべえー！急ぐぞー！」

自分たちの許に迫る戦闘を見てジーナスは慌ててシエルターに駆け出し、他の3人もそれに続く。

が、走り出してすぐに恭弥は視線を感じ、背後を見やると、

「……！」

先ほど見かけた銀髪の少女が少し離れた所に佇んでいるのを見る。

（見間違いないじゃなかった！）「君！」

恭弥の呼びかけに、少女は逃げる様に逆の方向へと駆ける。

「!?ちよつとー！何処行くんだよー！」

「桂木？何処いくんだ！」

「人がいるんです。僕が連れていきますから先輩たちは早く！」

ジーナスの呼びかけに応じるや、恭弥は返事を待たずに少女を追う。

思ったよりも早く戦闘領域が近づいていることに驚くや、騎士——ニコーン・白びやくの操縦者・織斑おりむら一夏いちかはすぐに飛び立ち、自身の上官に通信を繋ぐ。

「光秋さん！」

『加藤大尉だ』

訂正を返しつつ、返事の主である白い巨人——ニコイチの操縦者・

加藤かとう 光秋こうしゅうは、近寄ってきた白と背中を合わせて周囲を警戒する。

『さっきの人たち、無事送り届けてくれたか？』

「はい。シエルターの近くで降ろしました。それよりもうすぐ街ですよ？光秋さ……加藤大尉がこんなに手こずるなんて」

『面目ない。個々の力は大したことないんだが、いかんせん数が多くてね。3機くらい墜としたが、時空崩壊の穴が閉じる前にもう10機くらい入ってきて……』

言いながら、光秋は人間がそうする様にニコイチの緑色の目で周囲を見回す。

「ということとは、俺が倒した1機と合わせて4機……残り16機か」

応じつつ、全面モニターに囲まれた白のコクピットで  
インフイニット・ストラトス びやくしき  
I S・白式を纏う一夏は、右手に意識を集中して日本刀型の  
武器・雪片式型ゆきひらがたを展開し、それに連動して白の右手にも光の粒子が集  
まって白サイズの雪片式型が形成されると、それを両手でしっかりと  
持つて周囲を飛ぶ鎧に対峙する。

直後、距離を取っていた鎧の1機が白に迫る。

「!」

同時に一夏は背部のウイング・スラスターを吹かし、イグニッション・ブースト瞬間加速  
で一気に懐に入る。

「はあっ!」

気合いと共に雪片を突き出し、それは白式の背中に繋がっている  
ケーブルを通じて白の動きとなり、白が持つ雪片の切っ先が鎧の胸を  
貫く。

「残り15機!」

『14機だ』

一夏の叫びに続くや、光秋も手近の1機の胸に腰溜めにした左拳を  
打ち込む。

2人に墜とされた2機が街の近くへと落ちていく傍らで、2機の白  
い巨人が次の目標を求めて空を駆ける。

ジーナスたちと別れた恭弥は、前を行く少女を必死に追いかける。

「君!そっちは危ないって!早く避難しないと……!」

走りながら呼びかけるものの、少女はときどき振り返るばかりで止  
まろうとも引き返そうともせず、その間にも徐々に大きくなる戦闘の  
音に恭弥は焦る。

直後、

「おわっ!?!」

背後から轟音と共に強風が吹き付け、吹き飛ばされた恭弥は地面を  
転がる。

「痛ってえ……!」

コンクリートに打ち付けて痛む体をゆっくりと起こすと、強風が来  
た方向を見る。

「！……」

ほんの数秒前まで少女と自分が走っていた道路に真っ黒に焦げた大穴が空き、所々火が燃えている光景に、恭弥は生唾を飲んで絶句する。

（狙われた？否、流れ弾か？どっちが撃った……）

もう少し通るのが遅ければ死んでいたという恐怖、その恐怖で頭が真っ白になるのをなんとか防ごうと、確かめようがないことを意識的に考えようとする。

と、

「！」

街上空を飛んでいたリオンの推進器に鎧の銃弾が当たるのを見る。

「あつちは確か……シエルターの方じゃ？」

直後にパイロットは脱出するものの、リオンは地上へと落下し、建物の影から爆炎が照りつける。

「……………嘘だろう？」

力なく眩くと、恭弥は崩れる様に膝を折る。リオンの爆発に巻き込まれてシエルターに行ったジーナスたちは死んだー自分の直感を自分で否定するために眩くが、心の深い部分はあつと言う間にそれを受け入れていく。

そして、

「何なんだよこれは！」

耐えきれなくなって叫ぶや、地面に両拳を振り下ろす。

「心霊スポットに行ったらロボットに襲われて、戦闘が始まったと思ったら先輩たちが死んで……本当なら今頃、さっきの所でバカやってたんだ！先輩たちがバカバカしいことを真剣にやって、話振られたら適当なつこと言っただけだからって、それが終わればいつもの店で飯食ってバカ話して……そんないつものと同じ今日になるはずだったのに……………」

途中からは涙目になりながら絶叫すると、恭弥は未だ戦闘が続く上空を見上げる。

地上からサジタリウスの援護を受けつつ、リオンの編隊が鎧を囲む



様に飛んで四方からレールガンやミサイルを放つものの、鎧はそれらを余裕でかわし、時には左腕の盾で防ぎつつ銃器でリオンを次々と火球に変え、余力があればサジタリウスの方にも銃撃を浴びせる。視界に納まる戦況の大部分がそんなものである。

そうした一方で、リオンたちの合間を飛ぶ2機の白い巨人は、片や体術、片や刀やビーム砲を駆使し、鎧の数を確実に減らしていく。「あの2機、やっぱり凄い……………僕にも、あんな『力』があれば……………」

眩く間にも鎧を墜としていく巨人たちに、恭弥は生まれて初めて「渴望」というのを強く感じる。

と、

「貴方は『力』を求めるの?」

「え……………」

唐突な呼びかけに顔を下げると、いつからいたのか、銀髪の少女が正面に立っているのを見る。

その肌は雪の様に白く、赤く輝く瞳が自分を見据えている。

「『力』を求めるの?」

「……………」

少女からの再度の問いに、恭弥は荒くなっていた呼吸を整えると、その赤い瞳を凝視しながら答える。

「ああ。奴らを…………あの鎧たちを追い払えるなら!」

「それは何の為?破壊?支配?」

「どっちでもない。ただこの街を…………みんなを守りたいから、これ以上誰も死なせたくないから!」

「…………認めよう、貴方を」

恭弥の腹の底からの宣言に、少女は微笑んで応じる。

「精霊は常に貴方を護り続ける。だから指し示せ、『光』を」

「はあ?君、何言って……………」

恭弥の問いに答える代わりに、少女は体を屈めて恭弥の顔に右手を添える。

そして、

「常に希望は貴方のそばに……………」

言うや少女は目をつむり、唇を重ねてくる。

「!?」

目前に迫った少女の穏やかな顔、唇に感じる未体験の柔らかな感触に、恭弥はこんな状況にも関わらず脳天が麻痺しそうになる。

しかし、

「……………!?!」

少しして、何かが頭の中に流れ込んでくる様な感覚を覚える。

(これは、何だ? 機械……………ロボットの、動かし方?)

徐々に形を成していく知識に、恭弥はそんなことを思う。

と、

「……………!?!」

呆けていた意識が回復するや、恭弥は自分が空に浮かぶ椅子に座っていることに気付く。

「え?……………ええ!?!」

あまりのことに再度動揺しそうになるものの、

「……………シル……………フィード?」

それを打ち消す様に頭の奥から言葉が浮かび、目の前にある3つの小型モニターの中央の画面にも同じ言葉が表示されていることに気付く。

「これは……………ロボット? コクピットの中なのか」

同じ画面に表示されている概要図を観て、恭弥はようやく状況を理解する。

四方からの銃撃を縫うように避け、どうしても回避できないものは腕を突き出して受け流しつつ、光秋は狙いを定めた鎧に接近し、

「あさあー!」

気合いと共に腰に引いた左拳をその胸部に入れる。

「残り9機!」

的にならないよう素早く移動しながら、残りの鎧の数を声高に叫ぶ。

直後、

「!?」

地上の一点が白く眩く輝き、光の塊の様なそれから放たれる独特の圧に、光秋は操縦席に座る身を固くする。

『光秋さん!』

「一夏君もか……」

近寄ってきた一夏に注意も忘れ、思わず普段通りに呼びながら、光秋は背広下の肌を少々振えさせながら地上の光を凝視する。

それはリオンやサジタリウスのパイロットたちも同様であり、鎧たちでさえ戦闘を忘れて光に見入ってしまう。

少しして輝きが収まると、その光源に1体の巨人が佇んでいるのを見る。

「白銀の騎士……否、妖精か?」

巨人の外見に、光秋はそんな感想を漏らす。

白程の大きさを誇る細身で鋭利な体を佇ませ、背中からは大小2枚ずつ―計4枚の翼を、ニコイチの様に人の顔を模した2つの目が輝く頭部からは白と同じ立派な一本角を生やしている。

「……」

姿がはつきりしたことにより明確に感じるようになった圧―そこにいるだけで斬り付けられる様な痛みを感じさせる威圧感に、光秋は操縦桿を握る掌が汗ばむのを感じる。

直後、

「!」

思い出した様に鎧たちが一齐に妖精に殺到し、出遅れたことに歯軋りしつつ光秋はその後を追う。

が、

「くっ!」

動きを感知したのか、引き返してきた2機の鎧に阻まれてそれ以上進めなくなる。

「……一夏君もか」

自分同様に鎧からの銃撃や斬撃をかわすのに精一杯の白とリオンたち、そして3機の鎧が妖精に迫る光景に、光秋は何もできないこと

に奥歯を噛み締める。

自分が概要図のロボット―シルフィードに乗っているということを理解した直後、けたたましい警戒音が鳴り響く。

「えっ……ええっ!？」

反射的に上を向くや、コクピットの内壁全面を占めるメインモニター越しに、「クロイツリッター」と表示された鎧たちが自分に迫ってくる光景を見、恭弥は慌てて操縦席の肘掛の先端にある球状の操縦桿を後ろに引き、足元のペダルを踏んで後退する。

直後に鎧―クロイツリッターたちからの銃撃が殺到し、一瞬前までシルフィードが立っていた辺りを決る。

3本の銃撃はシルフィードを追う様につき、それを恭弥は後退しながらギリギリのところをかわす。

「武器―ロボットなら何か武器があるだろう!？」

銃撃の恐怖と興奮から叫ぶや、それに答える様に概要図の左腰が赤く点滅し、同時に頭の奥からも情報が浮かんでくる。

「ルミナ……グラティウス?……これか!」

言うや恭弥はシルフィードの右腕を動かし、シルフィードは左腰のハードポイントに提げている実体剣を人が抜刀する様に抜いて構える。西洋の剣そのままの形状と合わさって、白以上に騎士らしい印象を与える。

「こんのおー!」

恐怖を振り払う様に叫ぶやクロイツリッターの1機に迫り、銃撃が当たるのも構わずに両手で大きく持ち上げたルミナ・グラティウスをその頭目掛けて振り下ろす。両手に金属が金属を斬る手応えを感じつつ突き進み、一瞬後にクロイツリッターは真っ二つになる。

思わぬ反撃に意表を突かれたのか、残った2機は銃撃を行いつつ後退して距離を取る。

「くそっ!他に何か……!」

2本の銃撃を避けながら恭弥は他の武器を探し、それに答える様に再び頭の奥から情報が浮かぶ。

それに従ってルミナの剣先を右のクロイツリッターに向け、直後に

刃が中心から2つに割れて細い棒が現れる。それに連動してメインモニターに青い丸が表示され、それがクロイツリッターに重なって赤くなった直後、

「！」

恭弥は右の球形操縦桿のボタンを押し、同時に棒―銃身の先端からビーム弾が放たれる。

灼熱の光弾は吸い込まれる様にクロイツリッターに直進し、一瞬後に巨大な火球が咲く。

「次！」

叫ぶや恭弥は残りの1機に狙いを付ける。

が、

「!？」

照準を合わせる直前に接近警報が鳴り響き、それまでニコイチらを足止めしていたクロイツリッターたちが自分の許へ向かってくるのを見る。

直後に迫ってきたクロイツリッターたちは両脚の装甲を開け、一斉にミサイルを放つ。

「！」

恭弥は上昇してかわそうとするものの、1機につき4発―計24発のミサイルは後を追ってくる。

「ええいー！」

ビームを撃って迎撃するものの、撃ち漏らした1発が真っ直ぐに向かってくる。

(やられる!?)

ゆっくりと迫ってくるミサイルに、恭弥は再び頭が真っ白になりそうになる。

直後、

「!?!……」

背後から飛んできたビームがミサイルを撃ち、振り向くとユニコーン・白が左掌を向けている。

「やっきの騎士！」

撃ち墜としてくれたと察しつつ、振り返った恭弥はリオンたちに援護されたニコイチが次々とクロイツリッターに拳を叩き込んでいるのを見る。

腕を下ろすや白もそれに加勢し、雪片の斬撃でクロイツリッターたちを斬り墜としていく。

瞬く間にクロイツリッターの数は減り、ついに最後の1機となる。

と、最後のクロイツリッターは銃器と盾を捨て、腰から抜いた剣を突き出してシルフィードに直進する。

「…………お前たちがあああ！」

一瞬悪寒が走るものの、クロイツリッターたちへの怒りの叫びでそれを吹き飛ばし、恭弥もルミナを突き出して突進する。

それと同時に、恭弥の怒りを表す様にルミナの刀身が赤く光り出し、クロイツリッターの切っ先が左肩すれすれを過ぎるのも構わず燃える様に輝く刃をその胸に突き刺す。

そして、

「！」

恭弥が刀身に気合いを込めると同時に、刀身を覆っていた光がクロイツリッターの中で四方へ広がり、内側から木端微塵に粉碎する。

「……………終わっ、た？……………」

浅い呼吸をしつつ状況を確認すると、抗い難い疲労感が恭弥を包み、抵抗せずに今度こそ意識を手放してしまう。

そんな乗り手の様子を引き映すかの様に、シルフィードも先ほどまでの威圧感を消し去り、ゆっくりと地上へ下りていく。

『あの機体…………何なんだ？』

未だ鳥肌の立つ光秋の眩きに応える様に、一瞬その目が輝いた。

## 2 宣告と誘い

新西暦と呼ばれる時代。

西暦末期に起こった第三次世界大戦を経て、人類は初の統一政府―地球連邦を設立し、戦後の傷を癒すと共に新たな1歩を踏み出した。

それから20年が経過した新西暦20年代、大戦以前から存在したテロ組織・イスダレンが活動を再開。これに対し連邦は新型機動兵器「A―D」を開発し、彼らに対抗した。

そして新西暦30年、オーストラリア上空に時空の壁が崩壊する現象―時空崩壊が発生、異世界から巨大な物体が転移してくる。これによってオーストラリアは壊滅、以後転移してきた巨大物体は「大陸」と呼称される。

この大陸に対し、連邦は調査隊を数回派遣するものの、未帰還者が相次いだことにより新西暦60年の57回目の派遣を最後に調査を打ち切る。これに前後して、連邦からの分離・独立をはじめとするさまざまな目的を持った勢力が大陸に進出、監視の目が行き届かない事実上の無法地帯と化す。

一方、大陸からもたらされた超技術「E O T」により、人類の技術、特に機動兵器の分野に革新的な飛躍が起きる。新型機動兵器「P T」、及び「特機」の誕生である。

こうして各地のテロや大陸での勢力争いといった火種、散発的に起こる時空崩壊による災害という不安を抱えながらも、人類は束の間の平和を謳歌していた。

しかし新西暦76年、突如出現した謎の勢力―鬼が世界各地を襲撃、甚大な被害をもたらす。これに対し連邦は、鬼対策部隊・フアナテイカーズ、及び非政府組織・ヴァルキリーズを組織し対応に当たらせる。しかし、鬼殲滅におけるフアナテイカーズの非人道的な作戦が民衆からの反感を呼び、ついには連邦軍内部にも離反者を招いてしまう。

そして新西暦78年、離反した連邦軍とアフリカを中心に一大勢力を築いたイスダレン改めイスダレン国を中心に各地の反連邦勢力を

糾合した軍事組織——ディバイン・クルセイダーズD C が結成され、現政権の打倒を掲げた彼らとの間にD C戦争が勃発してしまう。

開戦当初からD Cは、大戦時代から存在する「P D」をはじめとする既存戦力の他、E O Tを積極的に取り込んだ独自戦力「A M」、アイミニック・アーマードル「I A D」を投入し、数で勝る連邦の勝利による短期決戦という大方の予想に反して戦争は長期化してしまう。

しかし新西暦80年、鬼に続いて現れた未知の存在——ゴーストの出現により、各地に甚大な被害がもたらされる。さらに、戦争の隙を突いて鬼の勢力圏が拡大してしまう。ここに至り、連邦とD Cは停戦協定を結び、共に人類共通の脅威に対処していくことを誓う。この際、懐柔政策によってD Cの大部分は連邦に帰属、事実上崩壊することになる。

しかし、それをよしとしない者たちがD C残党として独自に活動を開始。D C内の一大勢力であったイスダロン国をはじめとする各組織もこれに賛同せず、再び独自勢力として活動していくこととなる。

こうして鬼やゴーストといった未知の存在、D C残党やイスダロン国とはじめとする連邦以外の勢力、戦争によって世界中に流出した兵器を用いたテロ、依然散発する時空災害など、さまざまな脅威を抱えながらも、人類はそれでも前に進み続けるのだった。

そして停戦から数カ月が経った新西暦80年4月現在。  
とある少年と少女の出会いにより、事態は再び動き出そうとしていた。

「……………」  
深い闇の中に沈んでいた意識が徐々に浮かび上がり、まだ重く感じる瞼をゆつくりと開ける。

(……………何処だ?)  
目の前に広がる見覚えの無い天井に、恭弥は再起して間もない頭でそんなことを思う。

と、

「パワードー……………第三次……………アーマー……………新西暦……………」  
「……………?」



何処からか声が聞こえ、恭弥は声がする方―左に顔を向けると、黒いスーツを着た男が丸椅子に腰を下ろし、携帯端末らしき物を見ながらぶつぶつ言っているのを見る。

(……この人、誰だ?)

徐々に調子を取り戻しつつある頭でそう思うと、恭弥は男を観察する。

黒髪に黄色い肌という自分と同じ黄色系の特徴を備え、整った顔にはわずかだが幼さが残っている。

(僕と近い歳くらいか?……)

と、恭弥の視線に気付いたのか、男がこちらに顔を向ける。

「あ、気が付きました? ちょっと待っていてくださいね」

言うとなんは端末を上着にしまい、速足で部屋から出ていく。

少しして戻ってくると、恭弥の許に歩み寄り、

「起きられますか?」

と、上体を起こすのを手伝ってくれる。

そこでようやく恭弥は、自分がTシャツ姿でベッドに寝かされていることに気付く。

「……あの、ここは?」

「連邦軍横浜基地内の病院です」

部屋を見まわしながらの恭弥の問いに、男は丸椅子に座りながら答える。

「連邦軍?……あの、何がどうなってるんですか?」

「落ち着いて。今俺の上官を呼びましたから、詳しくはその人が話してくれますよ。そうだ、紹介がまだでしたね。俺は織斑一夏。連邦軍でパイロットやっています」

「……桂木、恭弥です。東高の、もうすぐ2年です」

落ち着いた雰囲気ですす男―一夏に、恭弥も混乱しそうな顔をなんとか冷ましながら返す。

「2年ってことは、俺より1つ年上ですか」

「え?」

「俺、今16歳です」

「……それなら。確かに僕はもうすぐ17ですが……というか、16歳で軍に？しかもパイロットなんて……」

「いろいろと訳ありでして。ただ、軍に入ったのは最近です」

驚く恭弥に、一夏は困った様に笑いながら応じる。

と、部屋のドアがノックされる。

「あ、来た」

一夏が言った直後にドアが開き、黒いスーツにメガネを掛けた男が入ってくる。

「気が付いたようで。気分はどうです？」

言いながら、男は恭弥に歩み寄ってくる。

歳は自分より少し上くらいだろうか。真ん中で分けそろえた髪型に骨格のしっかりとした顔付きであり、左耳にイヤホン型の通信機らしき物をはめ、厚いレンズに拡大されて目が大きく見える。

「ええ、まあ……いいです」

「それはよかった……と、忘れるところだった。私わたくしこういう者です」

答えに困りながら質問に応じると、男は懐から出した名刺を差し出してくる。

「……『アマチュア作家 一条秋』？」

「あ！間違えた！」

恭弥が受け取った名刺を読み上げるや、男は慌ててそれを盗って懐に戻す。

「光秋さん、作家なんですか？」

「いや、前に遊びで作った名刺だ。気にしないでくれ……！あつたあつた。こつちでした」

真顔で訊いてくる一夏に、光秋は懐を探りながら応じると、別の名刺を再び差し出してくる。

『非常事態特殊対策部隊（仮）主任 加藤 光秋 大尉』？」

「はい。よろしくお願いします」

再び名刺を読み上げると、男―光秋は軽く頭を下げたて応じる。

「ああ、これはごく丁寧に……僕は――」

「桂木恭弥さん、ですね」

「え？」

言葉を遮る様に光秋の口から出た自分の名前に、恭弥は面食らう。「さつき財布の中身を確認させてもらいました。東高の新年度から2年生で合ってますね？」

「あ、はい……」

一夏に譲ってもらった椅子に座りながらの光秋の説明、そして確認に、恭弥は頷いて応じる。

「さて、紹介も済んだことだし、ちよつと事情を聞かせてもらいますよ」

言々と光秋は、上着のポケットからボールペンと手帳を取り出す。

「事情……といえますと？」

「あの白銀の機体に乗った経緯について教えてください」

「機体……」

その言葉に、寝起きで鈍っていた恭弥の頭がようやく回転を始める。

そしてそれは同時に、被弾したりオンが友達の許へ墜ちていく光景を思い出させる。

「ジーナス先輩……バニングス、速水……」

「?……どうかしましたか？」

俯き、歯を食い縛る様に呟く恭弥に、一夏が心配そうに問う。

「あの戦闘で、僕の友達が……シエルターに飛行機みたいなロボットが墜ちて、それで……」

「シエルターに墜ちた?……いや、そんな報告聞いてませんよ。そもそも民間人の死者は出てないはずだけど？」

「……え？」

光秋の予想外の返事に、恭弥は東の間思考が止まる。

「まだ調査の途中だから断言できませんけどね。ただ、シエルターに墜ちた機体なんて無いし、その周辺に遺体なんて無かったし。確かにシエルターのすぐ近くに墜ちたりオンはいましたけど、せいぜい大きな破片が2、3個外壁に当たっただけですよ」

「ホント、ここのシエルターって丈夫ですよ」

「もともとはDC戦争時の防空壕だからね。流れ弾にも耐えられるように造ってあるから」

感心する一夏に光秋が補足する。

「それじゃあ、みんな無事なんですか!？」

「!……とりあえず落ち着いて」

「あ、はい……」

少し驚きながらも光秋は冷静に対応し、落ち着いた恭弥は思わず身を乗り出す形になっていた体を引っ込める。

「本当のところは調べてみないとわかりませんが、後で照会しておきますよ。聞き取りが終わる頃には避難者のリストもできてるだろうし」

「お願いします!」

続けてそう言う光秋に、恭弥は深々と頭を下げる。

「じゃあ、まずはあの機体に乗った経緯について教えてください」

「はい」

光秋に応じると、恭弥は一連の経緯を話し始める。

部活仲間たちと街外れにある心霊スポットの下見に行った際、重度の时空崩壊に遭遇し、空いた穴から現れた鎧の様な姿のロボットに襲われたこと。そこに2機の白いロボットが現れて助けてくれたこと。

「そのロボットってまさか……」

「僕たちだな」

「え!？」

一夏の眩きに光秋が答え、それに恭弥は思わず声を上げる。

「2人が、あのロボットの……ちなみに、どっちがどっちですか？」

「最初に現場に着いたのは僕だな。確か鎧の攻撃から人を庇った記憶があるが。そうか、君はその時の1人か……」

「じゃあ、僕たちをシエルターの近くまで運んでくれた騎士は……」

「それは俺ですね。というか、アイツ『騎士』って呼ばれてたんだ……」

恭弥に問いに、光秋は合点がいった様に応じ、一夏は愛機の呼ばれ方に対して関心する。

「そうだったんだ……遅くなりましたが、助けていただきありがとうございます」

「ごぞいますー！」

理解するや恭弥は、2人に深く頭を下げる。

「どういたしました。といつても、俺たちはそれが仕事ですから」

「一夏君の言う通り。その件についてはまた後で話しましょう。とりあえず続きを」

「あ、はい」

光秋に促されて、頭を上げた恭弥は続きを話す。

一夏にシエルター近くまで運んでもらった後、離れた所に女の子がいるのを見つけたこと。その子が何故かシエルターとは違う方向に走り出したので、慌てて追いかけたこと。

「女の子？」

そこで光秋はペンを止め、首を傾げる。

「どんな子でした？」

「長い銀髪に白いワンピースの子でした。歳は僕と同じくらいかな？  
ロボットが墜ちて癩癩起こしてた時に、その子と少し話して……！」

そこまで言って恭弥は、その少女と口づけしたことを思い出す。

（あれって、よく考えたら………ファーストキス!?それもあんな唐突な………）

目の前に迫る少女の穏やかな表情、それまで感じたことのなかった柔らかな感触が鮮明に思い出され、恭弥は若干赤くなつた顔を俯ける。

「………？」

それを見て光秋と一夏は、「何だ？」という表情で顔を見合わせる。

「少し話して、なんです？」

「あ、いえーなんでも………」

光秋に話しかけられてハツとすると、恭弥は気を取り直して続きを話す。

「えっと……少し話をして、気付いたらロボットのコクピットにいました。あとは、もう無我夢中で戦って、戦いが終わったと思つたら意識が遠くなつて、気付いたらここで寝てました」(キスのこと、結局話さなかつたな………でも、やっぱり………)

2人には悪いと思いつつも、自身の恥ずかしさを優先する恭弥であつた。

「なるほど。なにを話しましたか？」

「えっと……………」

光秋の質問に、恭弥はその時の記憶を探るが、

「……………すみません。興奮してた所為か思い出せなくて。ただ、凄く大事なことを話した気がします」

「あ、そういうの俺もありますよ。大事なやり取りをした気がするんだけど、どうしても内容が思い出せないこと」

申し訳なさそうに言う恭弥に、一夏が共感する様に返す。

「うーん……………それについては、時間を空けてまた考えてみますか……………その後女の子が何処に行ったかはわかりますか？」

「いいえ。その子と話したすぐ後にコクピットにいたので……………その子のことも探してもらえませんか？」

「わかりました。ただ、名前がわからないと時間かかるかもなあ……………」

言いながら、光秋は聞いたことを手帳にメモしていく。

と、恭弥はあることを思い出す。

「……………そういえば、僕その子をシエルターに着く前にも見た気がします」

「何処です？」

「下見に来た廃ビルのそばで」

「あそこで……………いつ？」

「時空崩壊が起こる直前に。といつてもすぐいなくなっちゃったし、けっこう遠かったから……………」

「うーん……………」

恭弥の答えに、光秋は首を傾げて唸り声を上げる。

「あそこからシエルターのそばまで短時間に移動した？」

「いや、それは無理でしょ」

思いつきを言う光秋に、一夏が反論する。

「途中ごたごたもあつたけど、俺だってあの時けっこう飛ばして、それで3、4分くらいかかっているんですよ。仮に桂木さんに目撃されてす

ぐ移動したとしても、人の足で白のすぐ後くらいに着くなんて不可能ですよ。どんなに頑張っても1時間はかかります」

「ましてや戦闘が行われていれば余計遅くなるだろうな」

一夏の説明に、光秋はそう付け加える。

「ただ、足でなく他の方法で移動したとしたら？」

「他の方法って？」

「……瞬間移動、とか？」

（うわあ、先輩たちが好きそうな話になってきた……）

一夏の訊き返しに真面目な顔で応じる光秋に、恭弥はいつも部活でジーンズたちから聞かされる話に抱く気持ち―バカバカしさをどうしても覚えてしまう。

「ま、例えばだけどね。どつちにしろ、その銀髪少女がああの機体と何らかの関わりがあるは確かなようだね……」

そう締め括ると、光秋は手帳を閉じてペンと一緒に上着にしまう。

「さて、一通り教えてもらったわけだが、この後現場検証というか、実際にあの機体に乗ってみてくれませんか？体調が優れないならもう少し待ちますが」

「あ、はい。体調は問題ないんで、かまいませんよ」

光秋に応じるや、恭弥はベッドから下りて壁に掛かっていたワイシャツを羽織る。

「じゃあ、ちよつとこちらに」

言うや光秋は椅子から立ってドアへ向かい、一夏もその後が続く。（そういえばあの機体……シルフィードか……外から見るの始めてだけど、どんななんだろう？）

単純な好奇心からそんなことを考えながら、恭弥も2人に続いて部屋を出る。

「……そういえば、僕らが見たことをまだ伝えていませんでしたね」

3人の先頭に立って廊下を歩く光秋が、後ろの恭弥と一夏を振り返りながら言う。

「そつちから見たこと？」

「ええ」

恭弥に応じるつつ、光秋は歩きながら話す。

「と言っても、こつちも何が起こったのかよくわからなくてね……戦鬪中、地上に光の塊みたいなのを見つけたと思ったら、次の瞬間には銀色のロボットが突っ立ってたって、それだけです」

「もつとも、凄いプレッシャーを感じましたけどね」

「はあ……………」

光秋の大雑把な説明と一夏の感覚的な補足に、恭弥は返事に困りながらも応じる。

「とりあえず、行く途中に対策本部に寄っていきましよう。友達とその女の子の照会をしてもらわないと……あ、そうそう。財布返す忘れてた」

「あ、どうも……お願いします」

上着から出した財布を差し出しながらの光秋の提案に、恭弥はそれを受け取りつつやや真剣な顔で応じる。

と、恭弥の右隣を歩く一夏が、

「それにしても、長い銀髪の女の子か……もしかしてその子、左右で目の色違ってました？」

と、なにかを思い出す様な顔をしながら訊いてくる。

「目の色？……いいえ。確かどつちも赤だったと思いますけれど。目の色がどうかしました？」

「いえね、俺の仲間にも銀髪の女の子がいるんですけど、そいつ左右で目の色違うんですよ。右が赤で、左が金色。特に金色に光る目が綺麗で……もつとも、そつちは普段眼帯してるからなかなか拝めるないんですけど」

「眼帯、ですか……」（目の調子が悪い人なのかな？それにしても、オツドアイって本当にいるんだな……）

一夏が誇らしく語る「仲間」に、恭弥はそんなことを考える。

そんなことを話しながら3人は病院を出、少し歩いて事務所の様な建物に入る。

中ではいくつもの電話の呼び出し音がうるさいくらいに鳴り響き、白基調の上着に黒いズボンという連邦軍の制服を着た人たちがそれ



に忙しく対応している。

「すみません！避難者の照会お願いします」

「はいー！」

呼び出し音に負けない光秋に呼び声に、手の空いていた女性軍人が慌てて駆け寄ってくる。

「ほら、桂木君」

「あ、はい」

光秋に促されて、恭弥は駆け寄ってきた女性に部活仲間3人の名前を伝える。

「……それと、銀髪に白いワンピースの女の子なんですが」

「名前は？」

「それがわからないんです」

「ええ？……」

恭弥の返答に困った顔をしながらも、女性は自分の机に戻って今教えたと3人の名前を探してくれる。

恭弥たちも他の人に邪魔にならないよう注意しつつ、事務椅子に座ってパソコンを眺める女性の後ろに歩み寄る。

「東高の生徒は……ああ、3人ともいますね。現在は事情聴取してるようです」

「！……よかったあー……」

女性の報告に、恭弥は胸を撫で下ろす。

「女の子の方は？」

「ちよつと待つてください……ダメですね。外見の特徴だけでは絞れません。やっぱり名前がわからないと」

「やはりそうですか……」

一方で光秋は、予想通りの状況に嘆息を漏らす。

「わかりました。とりあえず後で、ここに候補者のリストを送ってください」

言うや光秋は手帳のページを破り、走り書きしたメモを渡す。

「今回の件の重要参考人になり得る人物なので、念入りをお願いします」

「了解です」

女性の返答を聞くと、光秋と一夏は一礼して出口へ向かう。

「あ。ありがとうございます」

恭弥も頭を下げて礼を言くと、2人の後を追って建物から出る。

出てすぐの所で待っている2人の許に歩み寄ると、

「よかったですね。みんな無事みたいで」

「はい。これでひと安心です」

一夏がかけてくれた言葉に、恭弥は心底安堵して応じる。

「後で会わせてあげる……とは簡単には言えませんがね。こつちと向こうで事情聴取の長さが違うだろうし、それに……いや、これは現場検証が済んでからにしましょう」

「?……」

光秋の曖昧な態度に、恭弥は首を傾げるが、

「さあ、格納庫に行きましょう。えっと確か……」

声をかける前に光秋は歩きだし、一夏もそれに続く。

「あ、あの……」

その背中に呼びかけながら恭弥も2人を追う。

「ん?」

「無理に会わせようとしなくてもいいですよ。無事がわかったんだし」

「でも、直接会わなきゃやっぱり実感湧かないでしょう?」

なにかを探す様に辺りを見回している為顔こそ向けない光秋だが、

若干の心配を含んだ声を寄こしてくれる。

「いや、別に……データで大丈夫ってなってたんだから大丈夫かなって思うだけですけど?それに、後でゆっくり会えるだろうし」

「んー……情報化社会って奴は……」

「?」

恭弥の返事に、光秋はどこか呆れた様な声を返す。

「それに後でって言っても……いや、それこそ後にしよう」

「?」

「……」

「さあ行くうー！」

急かす様に言うや光秋は少し速度を上げ、恭弥はまた首を傾げながら、一夏はどこか浮かない表情をしながら黙ってついていく。

しばらく歩くと、3人はT字路に差し掛かる。

「えーつと、格納庫は……どっちだったかな？」

「ええ？」

左右を見回しながら呟く光秋に、恭弥は若干狼狽した声を漏らす。

「わからないんですか？」

「横浜は初めてでね……一夏君は知ってるだろう？白置いてきたんだから」

「いや、俺も道ちゃんと言えられなくて……」

光秋の問いに、一夏は申し訳なきそうに応じる。

「まあ、1回じゃ覚えられないか……適当に進んでみるか？」

「それだけはやめておいた方がいいですよ。俺もそうやってとんでもないことに巻き込まれたんですから」

「……確かに、一理あるな。それに軍の施設だし、下手に進むと危ないか……」

半ば真剣に言う一夏に、光秋もどこか納得しながら応じる。

その傍らで恭弥は、

「とんでもないことって、何があったんです？」

と、一夏に訊いてみる。

「え？……まあ、今の桂木さんの状況に似てるかも。ただ、そのお蔭で俺のやりたいと思ってたことができるようになったし、こうして光秋さんと一緒に仕事ができるようになったんですけど」

「ふうん？」

オブラートに包んだ様な答えに、恭弥は模糊としながらも応じる。

と、

「あの、どうかしましたか？」

「……」

T字路の左側から声がかかけられ、3人は「よかった」という顔を浮かべてその方を見る。

そこには連邦軍の制服を着た3人と同じ日系の特徴を備えた人が立っている。

(えー……………男?女?)

それが恭弥のその人物に対する印象である。

髪こそ短く切りそろえられているものの、幼さを残した顔はどちらかというとな性的なのである。そのくせ体つきはしっかりしている為、ますます性別の判断を迷わせてくる。

そして、それは一夏と光秋も同様である。

(小学、いや中学生……………なわけないよな?でもどう見ても……………)

(少尉か。ということとは20近く?いや、でも見た目は……………)

幼い顔つきに加えてその背丈が、2人のその人物の年齢の判断を迷わせる。光秋は襟元の階級章からかろうじて20歳前後と予測するものの、170センチ以上ある3人の胸辺りまで届くかどうかという身長が、どうしても10代始めくらいに思わせるのである。

そんなことを考えている間に、その人物は怪訝な顔をする。

「……………俺の顔になにか付いてますか?」

「ああいえ……………格納庫まで行きたいのですがどう行ったらいいですか?」

問いかけられるや、光秋は気を取り直して問い返す。

と、その人物はさらに怪訝な顔をする。

「格納庫?……………失礼ですが、そちらは?」

「ああ。こういう者です」

応じると、光秋は懐から出した名刺を渡す。

「……………作家、ですか?」

「ああすいません、間違えた!……………こっちでした」

再び出してしまった「一条 秋」の名刺を取り返し、正しい方の名刺を渡し直す。

「……………大尉!」

それを見てその人物は顔色を変え、踵を合わせて直立不動の姿勢になる。

「失礼いたしました!俺……………自分は当基地所属のリョウト・キサラギ

少尉であります！」

(リョウト？男の名前か。てことはこの人男だな！よかった……)

よく通るその人物―リョウトの自己紹介でようやく性別がわかり、恭弥は内心安堵する。

「……失礼ですが、歳はいくつです？ずいぶん若いようですが」

「……18です」

光秋の少し迷いながらの質問に、リョウトは溜息混じりに答える。それに対し、光秋と一夏は、

(18か。とりあえず当たったな。しかし……)

(どうしても12、3歳くらいにしか見えねえ……)

と、悪いとは思っていてもどうしても感じてしまう。

「……ああ、格納庫を探していらっしやるんですね？案内します。こちらです」

「あ、ありがとうございます」

気まずい沈黙を破ってリョウトは歩き出し、光秋がそれに応じると、4人はT字路の右の道に進む。

「ところで、そちらの2人は？」

先頭を歩きながら、リョウトは最後尾の恭弥と一夏に視線を向ける。

「お……自分は織斑一夏曹長。こうしゆ……加藤大尉の部下です……であります！」

「僕は桂木恭弥。東高の学生です」

リョウトの視線に、一夏は慣れない軍隊調で、恭弥は普段通りに答える。

「学生？」

「先ほど所属不明機による騒動があったでしょう？その調査に協力してもらってまして」

「はあ……」

光秋の説明に、リョウトは曖昧な返事をする。

しばらく歩くと、高さが30メートルはある胴長の建屋がいくつも並んでいる場所に出る。

「この辺り一帯が格納庫になりますが、どちらまで？」

「あ、ここまで来れば後は俺がわかります。ありがとうございます」  
詳しい場所を訊こうとするリョウトに、一夏が一行の先頭に進みながら応じ、頭を下げる。

「ありがとうございます」

「！……ありがとうございます」

それに続いて礼をする光秋を見て、恭弥も慌てて頭を下げる。

「いえ。では、自分是用があるのでここで」

「用って？」

「作戦前のブリーフィングがありますので。失礼します」

光秋の問いに応じると、リョウトは来た道を引き返す。

と、

「あ、キサラギ少尉！」

「？……」

光秋に呼び止められ、リョウトは後ろを振り返る。

「作戦、頑張ってください。ご武運を。それ以上にご無事で」

言いながら光秋は敬礼し、後ろの一夏もぎこちなく右腕を上げる。

「は、はい！ありがとうございます！」

予想外のことには驚きつつも、リョウトは慌てて返礼する。

（戦果よりも俺の無事の心配か？……軍人にしちやあ変わった人だな）

敬礼を解いて歩き出す光秋にそんな印象を覚えながら、リョウトは急ぎ足でブリーフィングが行われる建物へ向かう。

案内人を変更した一行は、一夏を先頭に建屋の合間を進む。

しばらく歩くと、

「……あ、ここにですね」

と、一夏はシャツターが開け放たれている建屋の前で止まる。

「ほお？こうしてみるとなかなか……」

「？……」

一行の真ん中に立つ光秋が何故か面白そうな声を漏らすことを疑問に思いつつも、その右隣に立つ恭弥も格納庫の中に顔を向ける。

と、

「！……………」

目の前に広がる光景に、思わず言葉を失ってしまふ。

格納庫内には、胸部に穴が空いたり、体の一部が無くなったりした鎧型のロボット―クロイツリッターの残骸が大量に運び込まれ、恭弥が呆然としている間にも作業着や白衣を着た人たちによつて分解や調査が行われており、非常に賑やかな光景が広がっている。

が、恭弥の言葉を奪つたのはそれではなく、格納庫の奥に並んで佇む2機の巨人である。右には自分たちをシエルター付近まで運んでくれた白い機体―ユニコーン・白が、左には自身が乗つた白銀の機体―シルフィードが立ち、それぞれ背中中の翼を折り畳んでPT用の整備ハンガーに窮屈そうに体を収めているもの、白の方は真つ直ぐに、シルフィードの方は少しカーブを描きながら伸ばした額の一本角が凛々しさを損なわせないでいる。

純白と白銀の巨人が並んで佇む光景は壯観であり、芸術品の様な美しさを感じさせる。特にシルフィードは概要図しか見ていなかった為、恭弥に一層強い印象を与えてくる。

(アレに僕が乗つたんだよな？そうして、鎧たちと……)

堂々と佇むシルフィードと周囲に転がっているクロイツリッターの残骸を見比べ、戦闘時の記憶がはつきりと浮かんでくるものの、恭弥は夢を見ている様な感覚を捨て切れずにそんなことを思う。

と、

「さてとね」

「……………」

そう呟くや光秋は2機の許へと歩き出し、一夏もそれに続いたところで気を取り直した恭弥も慌ててついていく。

2機の足元の中央には、2人の作業服がなにやら話し込んでおり、光秋はその2人と距離を詰めると、

「すみませえん！」

と、格納庫内に響く少々耳触りな金属音に負けない声で呼びかける。

「!」

それで気付いた、あるいは驚いたのか、作業服の2人―一方は遅しい体つきの成人男性、もう一方は長い髪をポニーテールにした恭弥や一夏よりも歳が下くらい少女―は、3人の方へ顔を向ける。

「ここにある機体……というか、先ほどの一件の処理を任されています、伊豆基地所属の加藤大尉です」

「その部下の織斑曹長であります」

自己紹介をしながら、2人は挨拶代わりにと敬礼をする。

「あ、これは……当基地整備主任のアキヒロ・ヒラサカであります」  
「見習いのミコト・アオイです」

返礼しつつ、男と少女はそれぞれ自己紹介する。

「で、その子は?」

「こら、ミコト! 中央寄りの上官にその口のきき方はなんだ」

少し碎けた言い方をするミコトを、アキヒロはすかさず注意する。  
が、

(『中央寄りの上官』……)

恭弥はその言い回しに、僅かだが棘を感じる。

「すみません、こいつ軍に入って日が浅くて」

「いえ、別にかまいませんよ。彼は桂木恭弥君。その白銀の機体に乗ってた人です」

「え!? この子が?」

アキヒロに応じながら紹介する光秋に、ミコトは驚いた顔をする。

「まあ、そうなりますよね。とりあえず、今から現場検証というか、彼にもう一度この機体に乗ってもらいたくて。できますか?」

「え? 乗るんですか?」

ミコトの反応に理解を示しながら頼む光秋に、今度はアキヒロが少し驚く。

「しかし……」

「報告は聞いています。というか、僕はその場にいたので。それを承知の上ですので、お願いします」

「……わかりました。ミコト、昇降機持ってこい」



光秋の頼みに渋々応じると、アキヒロはミコトに指示を出す。

「りょーかい」

「俺なにか手伝いましょうか?」

「いいよ。エリートさんはゆっくりしてて」

一夏の申し出をすんなり断ると、ミコトは近くにある下にキャスタ―が付いた昇降機を押しってくる。

(……なんか、壁があるな)

常識の範囲内で肩の力を抜いた接し方をする光秋たちに対し、アキヒロは遠回しに、ミコトはやや露骨に冷たい態度を示し、それに対して恭弥はそんな印象を抱く。

その間にもミコトは昇降機をシルフィードの足元に運び、そばで声をかけるかどうか迷っている一夏に構わず台座を床に固定していく。

「……なんか、雰囲気悪いですね」

それを見て尚更居心地の悪さを感じた恭弥は、左隣に立つ光秋にこっそりと言ってしまう。

が、

「え?すみません、今なんて?」

少し戸惑った顔をして光秋は訊き返してくる。

「え?……え?」

「ああ、言つてませんでしたね」

突然のことに面食らう恭弥に、光秋は右耳を指しながら説明する。

「生まれつき右耳が聞こえなくて。普段はそんなでもないんだけど、

ここはほら……」

「……ああ」

クロイツリッターの調査作業に視線を向ける光秋に、恭弥は煩くて今の言葉が聞こえなかったのだと察する。

「で、なにか?」

「え?……ああいえ、大したことじゃありません!」

再び訊き返してくる光秋に、恭弥はもう一度言う程のことでもないと思つて誤魔化す。

と、アキヒロの呼び声がかかる。

「加藤大尉！昇降機の用意できましたよ」

「あ、はい！」

よく通る声で応じるや光秋はその許へ向かい、恭弥もそれについていく。

先に乗った光秋に手招きされてゴンドラに乗り込み、柵をしつかり掴むと、それを確認したアキヒロが備え付けのパネルを操作して上昇する。

腹部に空いたハッチの前で止まると、光秋は暗いコクピットに入り込み、中から恭弥を手招きする。

「……」

暗いがらんどくに不安を覚えながらも中に入ると、

「ここに座って」

と、少ない光の中でやっと判別できる座席を光秋が指す。

「……」

慎重に座席に歩み寄ると、恭弥は恐る恐る腰を下ろす。

直後、

「!?!」

それまで暗かったコクピット内が突然明るくなったかと思ったら、内壁全面を覆うモニターが点いて外―格納庫内の景色を映し出していることに気付く。

「そんな馬鹿な!?!何をやってもうんともすんともいわなかったのに?」

「……やっぱり、このパターンか……シルフィード、ですか」

周囲の目も気にせず驚愕の声を上げるアキヒロに対し、座席の右隣に立つ光秋は外れて欲しい予想が当たってしまった様な苦い顔で冷静に呟き、小型モニターの概要図に書かれた機体名を読み上げる。

「……動かし方はわかりますか?」

「え?あ、はい」

「じゃあ、両腕を伸ばして手を開け閉めしてみてください。基本挙動というやつです」

「はっ」

落ち着いた様子で指示する光秋に従って、恭弥は球形操縦桿に両手を置き、浮かんでくる情報を頼りに操作する。

指示通りシルフィードの両腕を前に伸ばし、3回程掌を開け閉めしてみせる。

「滑らかでいい動きですね……コレの動かし方はどうやって知りましたか？」

「どうやって……頭の中から情報が浮かんでくるんです。どこをどう操作すればいいって」

光秋の質問に、恭弥はありのままに答える。

「……一夏君と同じか……動かし方は説明できますか？どこをどうするとどうなるって。例えば、手の開け閉めは？」

「手は……あれ？……えーっと……」

小声でなにか呟きながらもさらに訊く光秋に、恭弥も答えようとするが、

「……すみません。なんて言っているのか……腕を伸ばすのは操縦桿を振るって説明できるんですけど、手の開け閉めは……そう考えてできる、としか……」

「？……」

「なるほど……この辺は僕と同じか」

要領を得ない恭弥の説明に、アキヒロは眉を寄せて首を傾げ、光秋は呟きながら納得した顔をする。

「とりあえず、腕はもう下ろしてください……こりゃあいよいよか」

「？……はい」

観念した様に呟く光秋を気にしつつも、恭弥は両腕を下ろす。

と、光秋は座席の前に移動し、少し体を屈めて恭弥と視線を合わせる。

「……」

こちらを真っ直ぐに見据えてくる真剣な眼差しに、恭弥は思わず強張ってしまう。

「桂木君、今から大事なことを言います。よく聞いてください」

「は、はいー」

大真面目な顔で話す光秋に、恭弥は姿勢を正す。

「このロボット……シルフィードですか？コレは君にしか動かさせません」

「……え？」

一瞬言われたことの意味がわからず、思わず声を上げる。

「……どういう、ことですか？」

「そのままの意味です。シルフィードは君しか認識しないようだ」

やっと動かせるようになった口で問うと、光秋は落ち着いた様子で返し、さらに続ける。

「戦闘が終わった後、シルフィードは糸が切れた様に地上に下りましてね、ハッチが開いたんです。そこで操縦席の上で気絶している君を見つけて、さっきの病院に運びました。その後でシルフィードも動かして運ぼうとしたんですが、誰が乗っても全く反応しなかった。おそらく生体認証かなにかによる制限がかかったんでしょう。仕方なく一夏君の白にここまで運んでもらって、さっきまで外からわかることを調べてもらってたんですが……そんな黙だんまりを通していた機体が、君が席に着いた途端起動し、あまつさせ操作を受け付けた。これは少し……否、かなり面倒なことになるんです」

「面倒なこと……」

苦しそうな表情を浮かべながら光秋は言い、恭弥は生唾を飲みながら繰り返す。

「僕は連邦軍の軍人として、君を拘束しなければなりません」

「!?……………」

真正面から言い切られた光秋の言葉に、恭弥は絶句してしまう。

「……………」

少しして、ようやくそれだけ口にする。

「1つは、君は民間人でありながら兵器を用いて戦闘に介入した。これは如何なる理由があっても許されない犯罪行為なんです」

「そんな!?あの時は僕もなにがなんだか——」

「もちろん、情状酌量の余地はあります。場合によってはそのように手配するつもりでした」

半ば取り乱して言う恭弥を制し、光秋はあくまでも落ち着いた様子で続ける。

「問題はもう一つの方。この機体が君にしか動かせないということですよ。何処からともなく現れて未確認機数機を撃墜した、そんな未知の、それでいて強力な“力”を唯一使うことができる人間を、野放しにするわけにはいかないんです」

「力って……」

終始真剣な顔で言う光秋に威圧感を覚え、恭弥はなんとなしに視線を逸らす。

と、

「……」

今まで意識の外に置いていたクロイツリッターの残骸、その内の体の中央から真つ二つになった1機が目に入り、恭弥の中で戦っていた時の記憶が鮮明に甦る。

「……」

自身の腕にも手応えを感じながら1機を斬り裂いたこと。1機をビームで撃ち墜としたこと。最後に残った1機に激怒しながら剣を突き刺して爆散させたこと。

(僕が、倒した？あの鎧たちを？アレに乗ってた人は……！)

そこまで考えが及んだ途端、猛烈な吐き気に襲われる。

「ヒラサカさん。なにか袋持ってますか？」

「え？いえ、俺はなにも……」

「仕方ない」

アキヒロの答えを聞くや、光秋は上着を脱いで恭弥の前に出す。

「こんな物ですみませんが」

「……いえ、大丈夫です」

それを恭弥は手で制し、吐き気を覚えても出す物が無くてどうしようもない体を操縦席に縮こめる。

「僕、人を殺して……」

「ああ。アレは全部無人機でしたよ」

「……え？」

絞り出すように言った自分の呟きに光秋があっさり返し、その言葉に恭弥は吐き気も忘れて拍子抜けしてしまう。

「無人機？」

「はい。そうですね？ヒラサカさん」

「え？……ええ。比較的破損が少ない機体を調べた結果、操縦席や搭乗者の遺体の類は見当たらず、代わりに戦闘用AIらしきものが発見されました。もつとも、これについてはまだ解析中ですが」

確認する光秋に、アキヒロは脇に挟んでいたパッドを見ながら答える。

「しかし、よく無人機だってわかりましたね。この情報が上がってきたのは大尉たちが来る少し前なんです」

「確信したのは今ですけどね。動きを見てそうかなって。いい動きなんですけど、パターンが少ない気がしまして。あと、僕や織斑曹長の機体にはそういうことがある程度わかるようになってるんですよ」

「？……」  
アキヒロの質問に光秋は答えるものの、最後の方に対して恭弥とアキヒロは首を傾げてしまう。

それにかまわず、光秋は話を続ける。

「だから、君は人を殺したわけじゃありません。寧ろ大勢の人の命を危険にさらした物たちを撃退したんです。そのことについては誇ってもいい。だからこそ、僕の方から提案があるんです」

「提案？」

やっと吐き気が治まってきた恭弥は訊き返す。

「それについては場所を改めてゆっくり話したいんです。凄く大事な話なので親御さんとも一緒に」

「親御さんって……」

「ちよつと待ってくださいね」

言う光秋はゴンドラの上に出て、左耳の通信機に手を当てる。

(なんだろう?)

なにか話している様子ではあるが、周囲の音でよく聞こえないこと、なによりも光秋は背を向けている為に口の動きが読めないことか

ら、恭弥には会話の内容がわからない。

少しして光秋は振り返ると、恭弥の許に歩み寄る。

「病室に来る少し前にお母さんに迎えを出してもらったんですが、それがさつき着いたようです。別の場所に待たせてあるのでそっちに移動しますね」

「母さんが?……わかりました」

少し驚きながら応じると、恭弥は操縦席を立って光秋に続いてゴンドラに移る。

(母さん……それにしても、話つてなんだろう?)

自分が出ると同時に暗くなったコクピットを眺めながら、恭弥は不安そうに考えてみる。

その間にもゴンドラは降下を始め、3人を地上へと運んでいく。

恭弥がコクピットに入った頃。

シルフィードの足元では、一夏とミコトが上がり切ったゴンドラを見上げていた。

「嘘!動き出した!」

「やっぱりこうなるか……」

起動を始めたシルフィードを見て、ミコトは驚愕し、一夏は諦めた様に呟く。

「桂木さん、俺みたいなことになっちゃうのかな?」

「?……どういうこと?」

一夏の嘆息混じりの呟きに、ミコトは少しだけ興味を持つ。

「俺もね、面倒なことに巻き込まれて、いろいろあったんですよ。ま、悪いことばかりじゃなかったからいいけど」

「ふーん?エリートさんも大変なんだ」

「俺はエリートなんかじゃないですよ。軍に入ったのだからってついこの間なんだし」

「え!?それでもうあんな試作機だかワンオフ機だかに乗ってんの?それに曹長って?」

「いろいろあるんですよ。詳しくは言えないけど……それとほら、機動兵器乗りは最低でも曹長の階級が必要って決まりがあったでしょ

う」

驚きながら白と一夏を見比べて言うミコトに、一夏は苦笑いしながら応じる。

「それもそうだけど……にしてもさあ、あの機体デザイン綺麗だよな？ ヒュツケバインっぽいけど」

「ユニコーン・白。俺の頼れる相棒です」

気まづくなりそうな雰囲気を変えたいこともあって、格納庫に白とシルフィードが運び込まれた時から思っていたことを言うミコトに、一夏は誇らしげな顔で白を見ながら応じる。

(……リョウトとは違うんだ。あいつはセラフィムのこと嫌ってるみたいだし)

その表情は、ミコトの知り合いのPDパイロット——先ほど一夏たちが会ったリョウトのことを逆連想させ、そんなことを思わせる。

と、

「あ、現場検証終わったみたいですね」

「え？」

一夏に言われて気を取り直すや、ミコトは下りてくるゴンドラを見る。

ゴンドラが台座の上に完全に止まると、光秋、恭弥、アキヒロの順に降りてくる。

「どうでした？」

「見ての通り、一番外れて欲しい結果だったよ」

「そっか……」

少し暗い顔で答える光秋につられる様に、一夏の表情にも僅かだが影が射す。

「とりあえず手はず通り、親御さんも呼んで説明するから、移動しよう」

「はい」

暗さを払う様にはっきりとした声で言う光秋に、一夏は真っ直ぐ前を向いて応じる。

一方、



「ミコト、昇降機片づけろ」

「了解」

アキヒロの指示に、ミコトは手近な固定を外し始める。  
と、

「今度は俺も手伝いますよ。女の子ばかりにこんなことさせられないし」

用意する時は呆然としていたツケを取り返す様に、一夏も反対側の固定を外し始める。

「え？いいよ。私の仕事なんだし」

「そう言わず。いる時くらいやらせてくださいよ」

話す間にも2人は全ての固定を外し終え、ほぼ同時に昇降機を押し始める。

「ホントいいって。パイロットの仕事じゃないよ」

「俺がやりたくてやってるんですよ。気にしないでください」

「……変なところで強引だなあ」

ミコトが半ば呆れる様に言いながら、2人は昇降機を元あった場所に戻して光秋たちの許に速足で戻る。

2人が戻ってきたのを見ると、

「ありがとうございます。引き続き調査の方お願いします」

と、光秋はアキヒロとミコトに頭を下げる。

「ああいえ……こちらこそ、御苦労さまですー！」

その行為に多少狼狽しつつ、アキヒロは敬礼で返す。

「じゃあ僕らはこれで。桂木君、こっちです」

「あ、はい」

光秋に手招きに、恭弥は不安を浮かべた顔でついていく。

「それじゃ」

一夏も頭を下げると、2人の後を追って格納庫を出る。

そんな3人の背中を見ながら、アキヒロは呟く様に言う。

「なんか、不思議な奴だな、あの若造大尉。中央寄りのくせに威張らないし、横暴でもない」

「部下の子も変わった奴だったよ。整備士の手伝いなんかしてさ。

ま、向こうもいろいろ苦労してるみたいだけど」

同じく3人の背中、特に一夏の背中を注視しながら、ミコトは先ほどの会話を思い出す。

「お前が機械以外に興味を持つなんて珍しいな?……惚れたか?あの小僧、顔はよかったしな」

「な!そんなじゃないよ!」

ニヤケた顔で言うアキヒロに怒鳴って返すと、ミコトはクロイツリッターの解析作業を再開する。

格納庫を出ると、恭弥は先を行く光秋の後を追って別の建物へ向かう。

(僕、これからどうなるんだろう?)

光秋の背中を見ながら、不安な気持ちちを口の中で転がす。

「……桂木さん、顔色悪いけど大丈夫ですか?」

「ええ。大丈夫ですよ……」

左隣を歩く一夏が心配そうに声をかけ、恭弥はそれに努めて明るく応じる。

「……どんなことになるのか俺は正直わからないけど、光秋さんは最善を尽くしてくれる人だから。悪いことにはならないと思いますよ」

「そう……なんですか……」(この人が、ね……)

元気づける様に言う一夏に応じながら、恭弥は半信半疑といった目で光秋の背中に目を向ける。

その間にも3人は敷地内を進み、3階建ての小さめの建物に入ると、少し歩いた先にあるドアの前で止まる。

「失礼します」

光秋がノックしてドアを開けると、折り畳みのテーブルを挟んで3つのパイプイスが並ぶ部屋が目に入り、イスの1つに腰掛けている初老程の女性が3人の方に顔を向ける。

直後、

「恭弥!」

女性はイスから立ち上がるやドアの方へ駆け寄り、恭弥を抱き締め

「ちよー母さん！人前で……」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！あなたが戦闘に巻き込まれたって聞いて、どれだけ心配したか」

照れる恭弥に怒りつつも、なんとか落ち着いた恭弥の母は体を離し、光秋と一夏を見る。

「この子が戦闘に参加したって聞きましたが、本当なんですか？」

「ええ。とりあえず座ってください。その辺の事情も説明しますので」

「……わかりました」

光秋に応じると、恭弥の母は座っていたイスに戻り、その左隣に恭弥が、テーブルを挟んで向かいに光秋が座り、光秋の左後ろに一夏が控える様に立つ。

「ああ、申し遅れました。わたくし私こういう者です」

言いながら光秋は懐から名刺を出し、恭弥の母に差し出す。

「……作家さん、なんですか？」

「え？あ！また間違えた！……こっちでした」

（……この人、わざとやってるんじゃないだろうか？）

「またもや名刺を取り換える光秋を見ながら、恭弥は半ば本気でそう思う。が、

（いや、ただの天然か？）

本気で慌てている様子から、すぐに本当に間違えているのだと思いき直す。

「……連邦軍の方ですか？」

「はい。まずお子さんが置かれている状況の説明からさせていただきますね」

正しい名刺を受取った恭弥の母に応じながら、光秋は先ほどの手帳を出し、メモのページを開いて話し出す。

病室で恭弥に聞いたシルフィードに乗った経緯を話し、戦闘経過を自身の見たものも含めて話したところで手帳を閉じると、先ほど格納庫で確認した恭弥とシルフィードの関係の説明する。

「現状、回収した未確認機——モニターの表示から『シルフィード』と呼

んでいます。――コレを扱えるのは恭弥君だけなんです」  
「そんな………」

真剣な顔で言う光秋に、恭弥の母は哑然として応じる。  
それを一見しながらも、光秋は話を続ける。

「戦闘介入の件だけならば、もともとが未確認機、つまり軍の機密に触れたわけではありませんし、状況を考えても情状酌量の余地はあったのでまだなんとかなりました。しかし、特定の人物しか動かせない機体、それを動かせる者をそのまま帰すわけにはいかないんです」

「何故ですか？」

「まず、機体を動かせないことには調査が進められないこと。強力な“力”を持つ人物を野放しにできないこと。もう一つに、あの機体を狙って何者かが暗躍した際、お子さんにも危害が及ぶ可能性があるからです」

恭弥の母の少し噛みつく様な問いに、光秋は冷静な様子で応じる。

「……この子に、危害が!？」

震える声で返すや、母は恭弥を抱き寄せる。

「母さん……」

「そこで、こちらから提案があります。恭弥君もよく聞いてください」  
照れる恭弥の目を、光秋は真剣な眼差しで凝視する。

「は、はいー」

その鋭い視線に、恭弥は慌てて姿勢を正す。

手帳を上着にしまつて呼吸を整えると、光秋は口を開く。

「君、連邦軍に入りませんか？」

「……え？」

「なんでそうなるんです？」

「またもすぐに意味を理解できず恭弥は小さく呟き、母は不安そうな顔をする。

「まず、軍に入ってもらえば降りかかる危害から彼を守りやすくなります。周りは戦闘のプロがたくさんいるわけですからね。もう一つは、僕ら自身が戦力を求めているからなんです。先ほど渡した名刺をご覧ください」

「?」

光秋に言われるや、恭弥と母は名刺を出して読み返してみる。

『非常事態特殊対策部隊』?」

「そう。通称『非特隊』。君にはそこに……僕たちの部隊に入ってもらいたい」

恭弥が名刺に書かれていることを読み上げるや、光秋は説明を続ける。

「4年前から存在が確認されるようになった『鬼』と呼ばれる謎の武装勢力、DC戦争によって流出してしまった兵器を用いたテロ、頻発する時空崩壊とそれに関連した災害、その他ありとあらゆる脅威に柔軟に対処する為に設立された……否、設立中の部隊です」

「設立中?」

齒切れの悪い言い方に、恭弥は首を傾げる。

「ええ。実は現時点でのメンバーは、僕と一夏君しかいないんです。各方面に声をかけて人員の増強を図っていますが、それが思うように進まなくて。本音を言えば、シルフィードの様な強力な機体、そしてそれを操れる唯一の人である君は、是非欲しい人材なんです。ただ、入隊する以上は機体の調査協力だけでなく、戦闘にも参加してもらおうことになります」

「戦闘に参加って……さつきみたいなこと?」

「無論、そうなるでしょうね」

戦闘の記憶を思い出して不安な顔をする恭弥に、光秋は真っ直ぐに目を見ながら応じる。

「もちろん、戦闘訓練はきちんとやってもらった上ですが。一応断ることもできますが、その場合でも機体調査には協力してもらおうことになるでしょうし、常に監視される窮屈な生活になるでしょうね。受けてくれれば戦闘介入の件は白紙にできるし、それなりに高額給料も出る、僕らも全力で君をサポートさせていただきます。ただし、死と隣り合わせの世界に足を踏み入れる覚悟もしてもらわなければなりません。当然、お母さんとも自由に会えなくなる」

「……………」

過酷な宣告に、恭弥は顔を俯け、母は途方に暮れた顔をする。

「まあ、ことがことです。すぐに決められる問題じゃないでしょう。明日の朝まで待ちます。それまでに返事をください。とりあえず僕は部屋の外にいますので、まずは2人でゆっくり相談してください。なにかあれば呼んでくれればいいので」

そう言うとき光秋は立ち上がり、一夏を引き連れてドアへ向かう。ドアの前でいったん振り返ると、

「最後に、こんなことしかしてあげられなくて申しわけありません。でも、これが僕らの精一杯なんです」

そう言つて一夏と共に深く頭を下げ、部屋から出ていく。

「……………」

残された恭弥と母の間には、しばらく沈黙が続く。

部屋から出て少し離れた場所にある自動販売機の所まで移動すると、光秋はその横のベンチに腰を下ろす。

「ふう……………」

背もたれに体を預けて上を向きながら、疲れを含んだ溜息を吐く。

「大丈夫ですか？」

「なんとかね。ありがとう」

心配そうな顔で訊いてくる一夏に、光秋は差し出された紙コップのホットコーヒーを受取りながら応じる。

一口飲み、今の気持ちを表す様なほろ苦さが口の中に広がると、光秋は左隣に座って同じ物を飲む。一夏に意識を向けながら言う。

「一夏君……………僕は鬼だな。さつき話に出た鬼も目じゃないくらいに」「……………どうしたんです？」

「事情があるとはいえ、あんな二十歳はたちにもなっていない子を、軍隊なんて面倒な世界に引きずり込もうとしている……………もつとも、君を巻き込んだ時点で今更なんだが。本来なら僕だけでやらなければならぬことを、力不足とはいえ、君まで巻き込んでしまった……………」

コップの水面に黒く映った自分の顔を見ながら話すと、光秋はまた一口飲む。

「俺のことなら気にしなくていいですよ。怖くないと言えば嘘になる

し、覚悟が充分できたかと訊かれれば返事に困るけど、少なくとも自分はどうなるかわかった上でここに来たんです。光秋さんが気に病むことじゃないですよ。それに桂木さんのことだって、さつき光秋さんが言ったように、これが俺たちの精一杯なんだから。あとは相手の判断を待ちましょうよ」

「それもそうだがね。そう言ってもらえるだけで救われた気になる」  
顔を上げて応じると、光秋は一夏と一緒にコーヒーを一気に飲む。  
「どの道、背に腹は代えられない。僕たちには今『力』が必要なんだ。できるだけ大きな『力』が。今日の前にある脅威に対処する為に。そして……それがいつかはわからないが、来たるべき日の為に」  
「……」

真つ直ぐ前を向いて断じる様に言う光秋に頷くと、一夏は残りのコーヒーを飲み干した。

### 3 それぞれの理由、恭弥の理由

光秋と一夏が退出して少し経った頃。

「……」

重い沈黙に耐え切れなくなった恭弥は、右隣に座る母の方に体を向ける。

「母さん……僕、どうしたらいいんだろう？」

「母さんにもわからないよ……」

弱々しい声で問う恭弥に、母は両手で頭を抱えて息子に負けない弱々しい声で応じる。

「あの加藤って人、悪い人じゃないし、あなたを助けようと精一杯頑張ってる気持ちも伝わってくる。ただ、それが軍に入ることってなるとね……」

「……」

なんとか顔を上げて言う母の言葉に、恭弥の口が再び重くなる。

と、母は体を恭弥に向け、両手を包む様に握る。

「だから、あなた自身が決めなさい」

「え？……」

真つ直ぐに目を見て言う母に、恭弥は戸惑ってしまう。

「無責任な親って思われても仕方ない。でも、母さんにはもうどうすることもできない。唯一できるのは、あなたが選んだ道を歩くのを支えることだけ。軍に入るのら止めはしない。入らずに窮屈な生活を選ぶならそれを一緒に生きる。ただ、どっちを選ぶかはあなたが決めなさい」

「……そんな、急に言われても……」

「加藤さんは明日の朝までは待ってってくれるんだよ。ゆっくりよく考えて結論を出しなさい」

「……もう、そうするしかないのかな？」

言ってみて、恭弥は自分が置かれている状況を実感する。

しばらく経った頃。

ドアが内側からゆっくりと開き、恭弥が悩みを浮かべた顔を覗かせ



る。

「あの、すみません」

「どうしました？」

応じると、一夏と共に向かいの壁に背中を預けて立っていた光秋が歩み寄ってくる。

「どうも部屋の中で考えてもまとまらなくて……ちよつと外に……基地の外に行ってもいいですか？ちよつと行きたい所があつて……」（さすがにそんなのダメだよな）

そう思つていても、一抹の希望を賭けて恭弥は訊いてしまう。  
と、

「いいですよ」

「……え!？」

光秋の予想外の返事に、一瞬面食らつてしまう。

「いいんですか?」

「ただし、護衛というか、監視付きですが」

「それは……そうですね」

「というわけで一夏君、桂木君の護衛兼監視頼む」

「俺ですか?」

光秋の指示に、後ろに立つ一夏は訊き返してくる。

「僕はお母さんと少し話したり、調査報告まとめたりしないといけな  
いからね。大丈夫だとは思うが、いざとなつたら自己判断でソレも  
使つていいから。ただし、桂木君の安全を守ることを優先にね」

「?……」

言いながら光秋は一夏の右手首を指差し、恭弥はそれを追つてみる  
と、彼の手首に白い機械的な物が巻かれていることに気付く。

（腕輪……にしちやあ太いよな?なんだろう?）

「了解です」

「よろしく。とりあえず僕は腹ごしらえだな。お母さんを誘つて食堂  
に行くから、2人もなにか食べてくるといい。それじゃ」

考えている間に一夏は応じ、光秋も部屋に消えてしまう。

「じゃあ、行きましようか」

「え？あ、はい」

一夏に声をかけられて恭弥は気を取り直し、2人は基地の正門へ向かう。

正門をくぐって基地の敷地を出るや、一夏は隣を歩く恭弥に問う。

「それで、何処に行きたいんです？」

「中華街です。もともと下見が終わったならその行きつけの店に行く予定だったんで。気持ちの整理も兼ねて行きたいなって」

「わかりました。あ、そうだ」

恭弥に応じると、一夏は上着のポケットから銀色の×の形をした物を出し、それを頭の左側に留める。

「髪留め……バレッタですか？」

「はい。光秋さんから、その、お守りにもらった物で。さすがに基地内では付けられないけど、今は外だからいいかなって」

「お守り、ですか……」（しかしけっこう……）

一瞬言葉に詰まったことを気にしつつも、バレッタを付けた一夏を恭弥は格好いいと思う。

「えっと、中華街でしたよね？えーっと……ここからだバスに乗らないとダメですね。最寄りのバス停は……こっちか」

起き抜けに見た携帯端末らしき物で道を確認すると一夏は歩き出し、恭弥もそれに続く。

同じ頃。

光秋は恭弥の母と共に食堂へ向かい、テーブルを挟んで食事を摂る。

「1時半か。お昼時は過ぎたから、混んでなくて助かりましたね」

数珠の巻かれた左手首の腕時計を見ながら言うと、光秋はチャームを食べ始める。

「……」

それを眺めつつ、恭弥の母も同じ物を食べる。

「あら、美味しい……」

「ですよ。こういう所の食事って意外と美味しいんですよ」

驚きに眩きを漏らす母に、光秋はレンゲを持つ手を休めずに応じ

る。

が、母はレンゲを置き、不安を浮かべた顔を光秋に向ける。

「息子の我儘を許してくれたことには感謝します。ただ……」

「ただ？」

「護衛に部下の方を付けてくださったようですが、あの人も見たところまだ子供の様ですけど、本当に大丈夫なんですか？」

「ああ。彼——夏君なら大丈夫ですよ。仰る通り息子さんと歳は変わりませんし、まだまだ荒削りなところも多いけど、基本的にはできる人ですから。息子さんの安全を優先するように言っておりますし、奥の手もありますしね」

「奥の手？」

「まあ、それは機密というところで。それに、同じ年頃の同性の方が、息子さんも気兼ねなく話せるでしょうしね」

「そこまで考えて？」

「最後のは後付けの様なものですけどね。今だけでも信じていただければと」

「はあ……」

少しだけ不安が抜けた顔を見ると、母は食事を再開する。

基地からしばらく歩くと、恭弥と一夏はバス停に着き、その前でバスを待つ。

「そういえば、桂木さんの親御さんってお母さんしか来ませんでしたよね？お父さんは？」

「恭弥でいいですよ。父さんは、僕が5歳の時に死んじゃって」

「！……すみません……」

予想外の答えに、一夏は軽い罪悪感を覚える。

「いや、いいんですよ。昔のことだからよく覚えてないけど、父さんレスキュー隊だったらしくて。時空崩壊の余波で発生した土砂崩れの救助中に、2回目の土砂に呑み込まれて殉職したって……といって、もともと家にいることがほとんど無い人だったから、僕にとってはいないことが当たり前だったっていうか。だから、母さんから死んだって聞かされた時も、悲しいって気持ちはどうしても起こらなかった

たなあ……すみません。こんなこと、織斑君に言ってもしょうがないですよね」

「俺も一夏でいいですよ。まあ、確かに親を亡くした人の気持ちって、いまいちわからないかな。俺、親いないから」

「えっ？」

今度は恭弥が予想外の答えを聞かされ、少し驚く。

と、そこにバスが到着し、2人は会話を中断してそれに乗り込む。

最後尾の座席に並んで座ると、大陸から得られたEOTの恩恵で生まれた高性能燃料電池バスは静かに走り出す。

「……さっきの話ですけど」

「はい？」

恭弥の呼びかけに、左手に広がる、現在は横浜基地の一部になっているフェンス越しの横浜港を眺めていた一夏は顔を向ける。

「一夏君は親がいないって、どういうことですか？」

「ああ。俺が物心つく前に蒸発しちゃって、ずっと歳の離れた姉と2人で暮らしてたんですよ。だから、両親のことなんにも覚えてないんです」

「そうだったんですか……なんか、すみません。変なこと訊いて」

「いいですよ。今更だし。だから、『いないことが当たり前の人』がいる人の気持ちなら、少しはわかるかな？……なんか変ですね。今の」

「確かに。いるんだかないんだかわかんないや」

「言ってみて可笑しくなり、2人は微笑みを浮かべる。

横浜港を沿う様に走って数分後。  
バスは中華街近くのバス停に停まり、下車した恭弥と一夏は中華街を指す。

「ところで、一夏君はお姉さんと二人暮らしだったって言ってましたけど、やっぱり大変だったんじゃないですか？家は手当とかいろいろ出てたから、贅沢をしなければそんなでもなかったけど」

「いや、思ってるほど大変じゃなかったと思いますよ。姉の稼ぎがよかったから中古の一軒家に住めてたし、幼馴染みの両親とか近所の人たちが助けてくれたから、そんなに困ることもなかったし」

「そうなんですか？」

「俺としては、そんなふうには守られてばかりなのが嫌で、中学の頃は家計の助けになればと思っただけでバイトしまくったこともあるけど、結局姉に食わせてもらってた感じだし」

「そうなんですか……勤労少年ってしているもんですね。僕なんかそんな発想もなかったな……」

「そんな立派なもんじゃないですよ。ただ俺がやりたくてやってたよいうなもんだし。それと、敬語はいいですよ。恭弥さんの方が年上なんだし」

「そうです……そう？それじゃあ……」

「……あ」

「どうしたの？」

「警護だけに、敬語はいらない」

「……」

(ああ。やっぱり……)

沈黙する恭弥に、いつものことながら一夏は内心落ち込む。

が、

「……フツ！」

「え？」

恭弥の口元に浮かんだ笑みに、一夏はハツとする。

「上手いこと言うな、一夏君は」

「ほ、本当ですか!？」

「ほ、本当に……」

真顔で迫ってくる一夏に、恭弥は思わずたじろぐ。

と、

「よかったあー！」

一夏は心の底から嬉しそうな声を上げる。

「あいつと光秋さん以外で俺のジョークをわかってくれる人がいるなんてー！」

「素直に面白いと思うけど……周りからは評判悪いの？」

「言うの大抵白い目を向けられますよ。酷い時は先に言われちゃう

し」

「そうなんだ。面白いと思うけどな……」

そんな会話をしつつ、2人は中華街の通りに入る。

「それで、行きたい店って何処ですか?というか、あんなことの後でやってるんですか?」

「それについては心配ないよ。だって……」

質問に感じながら恭弥は視線を前に向け、一夏もそれを追う。

目の前に伸びる通りにはちらほらと人が行きかい、左右に並ぶ店からは途切れることのないいい匂いが漂ってくる。

「そうみたいですね。にしても凄いな、ここは。ほんの4時間くらい前にすぐ近くで戦闘があったのに、どの店も普段通りに営業してるなんて」

「行きつけの店の店主が言ってたよ。『鬼が出たくらいでいちいち閉店してたら商売あがったりだ』って。戦時中も何度か際どいところまで攻められてもこんな感じだったから、良く言ってるバイタリテイ溢れる、悪く言って危機意識が低いってことなのかな?」

「なるほど。もつとも、俺の近所も似た様なもんだったかも」

そんなことを話しながら、恭弥が先導する形で2人は目的の店へ向かう。

と、

(お前が、イヴの選んだ男か)

「え!?!」

「?……どうしました?」

突然かけられた声に恭弥は辺りを見回し、一夏は不思議そうに問う。

「いや、今声が……」

直後、

「!?!」

キョロキョロしながら歩いてきた為に、恭弥は前を歩く人にぶつかってしまふ。

「ああ!すいません。大丈夫ですか?」

「……大丈夫ではない」

静かだが激しい怒気を含んだ声で応じながら、ぶつかつた人―灰色のパーカーに藍色のジーパンを着、豊かな金髪をポニーテールに結つた10代始めくらいの白色系の少女は振り返り、

「まだ一口しか飲んでなかつたんだぞー！どうしてくれるー！」

怒鳴りながら両手で持った紙の器を突き出してくる。

「えっ!……」

少女の行動に動揺しつつ、恭弥は少女の背後の路上に大きなシミが広がっているのを見る。

(ああ。スープかなにかこぼしちゃったのか)「すみません。買って返します。どこの店です?」

「もうない」

「え?」

「1日50杯限定の最後の1杯だったんだぞー！楽しみにしていたのに……」

怒りながらも、少女の目は段々と湿気を帯びてくる。

「えーっと……どうしよう一夏君」

「俺に訊かれても……」

狼狽した恭弥は一夏に問うものの、一夏も対応に困ってしまう。  
と、

「………美味しいもの」

「え?」

「なにか他の美味しいものを奢れ!そうしたら許してやる!」

「は、はあ……」

少女の要求に、恭弥は束の間思案する。

「じゃあ、僕たちが行くこうとしてた店に行きますか?小さくて地味な店だけど、味は保証しますよ」

「美味しければいい。早く連れていけ」

「はい……というわけで一夏君、もう1人……」

「まあ、仕方ないですね。行きましょう」

申し訳なさそうに言う恭弥に、一部始終を見ていた一夏は渋々合意

し、不機嫌な少女を加えた一行は店への移動を再開する。

しばらくして路地裏に入り、少し進むと、暖簾の掛かったこじんまりとした店が見えてくる。

「行きつけの店って、ここですか？」

「そう。母さんが仕事が遅くて帰れない日は、いつもここで食べてたよ」

一夏の問いに応じると、恭弥は玄関の引き戸を開ける。

「へいらっしやあい！て、恭弥か」

「どうも」

活気のある店主の挨拶に応じると、恭弥は2人を伴って店に入る。昼時を過ぎた所為か店には3人以外客はおらず、一行は近くのテーブルに座る。

「連れの2人は見ねえ顔だが、恭弥の友達か？」

「いや、友達というか……」

「すぐそこで会ったばかりだ。私を買ったスープをこぼされたのである。その弁償だ」

水を置きながら訊いてくる店主に、一夏が返事に困っている間に少女が棘のある回答をしてしまう。

「はは。そりゃあ嬢ちゃん災難だったな。いつものか？」

「はい。チンジャオロースー3つ。ご飯は……付けますか？」

「俺は付けます」

「私はいい」

恭弥の確認に、右隣に座る一夏と、向かいに座る少女はそれぞれ応じる。

「じゃあ、ご飯2つで」

「あいよおー」

恭弥の注文に応じると店主は厨房に向かい、手際良く調理を始める。

「……すごいですねあのお爺さん」

壮年に差し掛かろうという歳格好でありながら片腕で中華鍋を豪快に振る姿を見て、一夏は感心した顔で呟く。



「俺の知り合いにも、かなり歳いつてるけど元気に料理してる人がいますけど、あの人も負けてないな」

「そうなの？まあ、あの人は僕が子供の頃からあんな感じだったけどね。食事のマナーもあの人に教わった様なものだし」

「俺もそんな感じですよ」

一夏と恭弥が話している間に店主は料理を盛り付け、炊飯器からよそった白飯と共にテーブルに運んでくる。

「へい！チンジャオロースーお待ち！」

威勢のいい声で言いながら皿を並べると、すぐに厨房に引っ込んでしまう。

「おおー美味そうーいただきます」

『美味そう』じゃなくて、美味いんだよ。いただきます」

「……いただきます」

一夏、恭弥、少女がそれぞれの反応を見せると、3人は割り箸を割って食事を始める。

しばらくの間、3人は夢中でチンジャオロースーを食べ続け、特に恭弥と一夏は白飯に乗せたそれを頬張る様にいただく。

と、

「……！」

恭弥はチンジャオロースーを摘む少女が、2人の食事風景を羨ましそうに見ていることに気付く。

「すみません。ご飯もう一杯」

「な！私は別に――」

「いいんですよ。僕の奢りですから。さっきのお詫びもあるし」

「……そ、それなら」

恭弥の言葉に渋々といった感じで応じつつも、少女の顔には明らかに喜びが浮かぶ。

(……なんか、可愛い子だな)

チンジャオロースーを口に運びながら、恭弥は微笑みを浮かべる。

「あいよーお待ち！」

少しして少女の分の白飯も運ばれると、3人はチンジャオロースー

と白飯の組み合わせを堪能する。

「「ちそうさまでした！」」

しばらくして満足した顔で完食すると、恭弥は少女に問う。

「どうでした？」

「うむ。小さくて地味な店だが、確かに味はよかった。さっきの件、許してやる」

「はは。ありがとうございます」

腕を組んで威厳を張りつつも無邪気に喜ぶ少女の姿に、恭弥は少し可笑しくなる。

「地味な店で悪かったな！」

「こいつが言ったのだ」

「恭弥あ！」

「味はいいって言ったでしょう!?!勘弁してくださいよ……」

店主の一喝に縮こまりつつも、恭弥は3人分の会計を済ませる。

「もう変な宣伝すんじゃねえぞ。したら水も出さねえ」

「それだけは本当に勘弁してください」

店主の注意に真面目な顔で応じると、恭弥は店を出、2人もそれに続く。

「そうだ。俺自分の分出しますよ」

「いいよ。付き合ってもらったのはこっちなんだし」

「いや、そういう問題じゃありませんから」

「そう?じゃあ……」

恭弥が応じると、一夏は自分の分の代金を渡す。

それが終わると、少女が少し照れた顔をする。

「その……こんな所にこんないい店があるなんて知らなかった。教えてくれて、その……ありがとうございます……」

「どういたしまして」

歯切れ悪く礼を言う少女の様子が尚更可笑しくて、恭弥はつい微笑んでしまう。

「中華街はよく利用するんですか？」

「いや。少し前に来たばかりだ。ただ、食べ物が美味しいから頻繁に

来てはいる。大通りの店は全て制覇したぞ！」

一夏の問いに、少女は未発達な胸を張りながら答える。

「それじゃあダメですよ。こういう路地裏にこそいい店は隠れてるんだから。知る人ぞ知ってるっていうか」

「う、うむ……それは今回のことで学んだ。不覚だ」

恭弥の指摘に、少女は一気に威勢を失い俯いてしまう。

「今度はこうした所も回ってみてくださいよ。えっと……」

「アリア。アリア・アンダーソンだ。お前たちは？」

「僕は桂木恭弥。アリアちゃんか。いい名前だね」

「俺は織斑一夏。よろしくな、アリア」

「……」

「……さん」

睨みつける少女―アリアの痛い視線に、一夏はすぐに付け足す。

「うむ。恭弥に一夏だな。その……また会おう。運命ならば！」

そう言うと、アリアは全速力で駆け出してしまう。

「……なんか、不思議な子でしたね」

「だね……」

遠くなっていくアリアの背中を、2人は微笑みながら見送る。

「それにしても一夏君、初対面の子をよく呼び捨てにできたね？」

「え？そうですか？俺は寧ろ、女の子をちゃん付けで呼べる恭弥さんがすごいと思いますけど」

「……君って、そういう奴なのか？」

「はあ？なんのことです？」

「いや、いい……」

わからないという顔をする一夏に、恭弥は呆れながら思う。

(この人、加藤さんにも負けない天然だ)

恭弥と一夏と別れ、しばらく走って別の路地裏の奥に入ると、アリアは壁にもたれかかって溜息を吐く。

「はあ……」(シルフィードが現れたと聞けば、偵察の任は解かれたと同じ。ようやく私の本分に戻れる。その前の最後の楽しみのつもりだったのだが……)『また会おう』などと言ってしまったな。この私

が

2人の顔、特に恭弥の顔を強く思い浮かべながら、アリアは自分が可笑しくなってしまう。

(可笑しな奴らだった……否、それは私もか)

そんな感慨を打ち消す様に、横から冷や水の様な声がかけられる。

「今のお前に本来の役目が果たせるのか？」

「……どういう意味だ？」

突然の声に内心驚きつつも顔には出さず、アリアは声のした方―右側に顔を向ける。その表情には先ほどまでの歳相応の笑みなど無く、大きな使命を背負った人のそれだけがある。

視線の先では、短い赤毛の男が仏頂面で腕を組んでアリアを見ている。歳は恭弥と同じくらいだろうか。黒いワイシャツに黒いズボンを着た体を壁に預け、視線だけを寄こしている。

「こちらにも情が移ったかと心配しただけだ。長い時間過ごしたからな。さっきの連中と飯を食っていた時も、表情が緩みまくっていたぞ」

赤毛からの辛辣な言葉を、しかしアリアは顔色一つ変えずに応じる。

「見くびるな。私のあちらへの忠誠がその程度で揺らぐわけがない。まあ、そんなことは無いとは思うが、仮にさっきの連中が出てきたとしても、我らの障害となるならば討つだけだ。私は、アリア・アンダーソン。誇り高き騎士の末裔なのだから……故に、お前の『力』も貸してもらおうぞ。ベネクテイオ」

「……」

アリアの言葉に、『ベネクテイオ』と呼ばれた男はなにも言わず、ただ静かに頷く。

アリアの姿が見えなくなるまで見送ると、恭弥と一夏は横浜基地に戻る為にバス停へ向かう。

「そうだ、ちよつと訊いていいかな？」

「なんです？」

バス停で待つ間、恭弥は一夏にあることを問う。

「一夏君は、なんで連邦軍に入ったの？ 訳ありって言ってたけど、僕みたいに戦闘に巻き込まれて？」

「いや、そこまでじゃないですけど……詳しくは機密ってやつで話せないんですけどね。そうだな……とにかく面倒な事態に巻き込まれたと思ってください。それである機関に強制的に入れられて、ずっとそこで過ごしてたんです。まあ、その時は話に付いていくので精一杯でそこまで頭が回らなかつたけど、今思えばさらに面倒な事態から俺を保護するって意味もあつたみたいですけどね」

「なんかぎっくりだね。でもまあ、大変だつたつてことはなんとなく伝わってきた」

「どうも……ただ、悪いことばかりじゃ無かつたんですよ。離れ離れだった幼馴染みと再会できたし、新しい仲間もできたし。なにより、俺がずっとやりたいと思つてたことができるようになったし」

言いながら、一夏は右手首に巻かれている白い物―ガントレットを見る。

「やりたいと思つてたこと？」

「誰かを……否、仲間を守るつてことです。行きのバスでも説明したけど、俺はずっと誰かに守られて生きてきたから。今度は、俺がみんなを守るんだつて。その為の“力”はもらったから」

恭弥の問いに応じながら、一夏のガントレットに向ける視線に熱が籠ってくる。

「ま、上手くいつてるかつて言うところですけどね。実際何度か死にかけたし」

「そ、そうなんだ……」（結構ハードな人生歩んでるんだな）

壮絶な内容を笑いながらあっさりと言う一夏に若干引きつつ、恭弥は思わず感心してしまう。

と、ちょうどバスが到着し、2人は乗り込んで行き同様最後尾に座ると、一夏は話を再開する。

「……で、こつちに来る少し前に光秋さんと、その上司って言えばいいのかな？ とにかく2人と会って、一緒に仕事しないかつて誘われたんです。内容は俺がやりたいことと合つてたし、俺にはそういう“力”

があるから、断る理由はないと思って引き受けて、それで今こうして光秋さんの部下やっつてるってわけです」

「なるほどね」

「あと付け加えるなら、報酬がよかったっていうのもありますけどね。これで少しは家計の足しになればいいけど」

「あ、結局そうなるか……」

最後に俗な動機を言われたことに脱力しつつも、恭弥は一夏が語ったことを思い返してみる。

(やりたいこと、か……)

横浜基地に戻ると、一夏は携帯電話で光秋に連絡して今いる場所を確認し、恭弥と共にシルフィードと白が置かれている格納庫へ向かう。

しばらく歩いて格納庫に着くと、

「光秋さーん!」

と、一夏は光秋に呼びかけ、片隅でシルフィードとクロイツリツターの調査風景を眺めていた光秋は振り返る。

「おお、お疲れ様。異常は無かったかな?」

「ええ、一応。ちよつと通りかかった人と悶着がありましたけど、あとは問題ありません」

「悶着?」

一夏の報告に、光秋は訊き返し、恭弥が答える。

「僕がよそ見して前を歩いてた女の子にぶつかっちゃって、持ってたスープこぼしちやっつたんですよ。そのお詫びに、行く予定だった店と一緒に行了きました」

「なるほど。今後は気を付けてくださいよ……ところで、気持ちの整理はつきましたか?」

「あ、いや……」

光秋の問いに、恭弥は口籠ってしまう。

「まあ、まだ時間はありますから。ゆっくり考えてください」

「はい……ところで加藤さん」

「はい?」

そこで恭弥は真っ直ぐに光秋を見つめ、光秋も恭弥の雰囲気が変わったと感じる。

「加藤さんが連邦軍に入った理由、教えてくれませんか？参考までに。一夏君からはもう訊きました」

「僕の理由、か……」

光秋は少し考えると、

「ここは少し賑やかだな。場所を変えましょう」

と、格納庫の外に向かって歩き出し、恭弥と一夏もそれに続く。

「そうだ一夏君。バレッタ付けっぱなし」

「あーいけね！」

光秋に注意された一夏がバレッタをスーツにしまうと同時に一行は格納庫を出、調査の騒音が届かない辺りまで移動する。

少し歩いた辺りで一行は止まり、光秋は腕を組んで遠くを見る目になる。

「僕がこの仕事、否、この手の仕事の大元を始めた理由は……どつちかというところの桂木君に近いかもしれないね。ただし僕の時はここまで大騒ぎではなかった気がするけど」

「僕に近い？」

「ある日突然面倒なこと巻き込まれて、知らない場所で一人で生きていかなきゃならなくなりましたよ。そんな時、軍というか、それに準じる組織にスカウトされて、食べていく為にそこに入ったんですよ。もちろんそれだけじゃなくて、自分が得た“力”を活かす為、人を助ける為ってのもありますけど」

「人を、助ける為……」

「その後いろいろあって、人を守りたいって強く思うようになった。今の仕事でも念頭にあるのはそれかな。自分の得た“力”を活かす為……否、ただ目の前にいる人たちを守りたくて“力”を使うと言わなきゃ。無論、僕一人の力なんてたかが知れてるから、こうして組織に入り、独自の部隊を作ってるってことなんですけど……ちよつとキザでしたかね？」

言いながら、光秋は苦笑いを浮かべる。

「守る為、ですか……？」

言ってみて、恭弥の脳裏に言葉が浮かんでくる。

（「みんなを守りたいから、これ以上誰も死なせたくないから！」……  
今のは……）

思い出そうとする恭弥の横で、光秋はさらに続ける。

「ま、高額な報酬が欲しいっていうのもありますけどね。信念は大事  
だけど、背に腹は代えられないっていうか」

「あ、やっぱりそうなりますか……」

一夏と同じ締め方に、恭弥は再び脱力する。

しかし一方で、一夏と光秋の理由を思い返してみる。

（「俺はずっと誰かに守られて生きてきたから。今度は、俺がみんなを  
守るんだって。その為の“力”はもらったから」。「自分の得た“力”  
を活かす為……否、ただ目の前にいる人たちを守りたくて“力”を  
使うと言うべきか」……守りたいから、“力”を使う……僕の“力”  
は……）

思いながら先ほどの格納庫を見、その中に納まるシルフィードを幻  
視する。

と、

（「貴方は“力”を求めるの？」……！）

不意に銀髪の少女の言葉を思い出し、直後にシルフィードに乗る直  
前の記憶が鮮明に甦ってくる。

（「“力”を求めるの？」）

（「ああ。奴らを……あの鎧たちを追い払えるなら！」）

（「それは何の為？破壊？支配？」）

（「どっちでもない。ただこの街を……みんなを守りたいから、これ以  
上誰も死なせたくないから！」）

（「……認めよう、貴方を。精霊は常に貴方を護り続ける。だから指  
し示せ、“光”を」）

（「はあ？君、何言って……」）

（「常に希望は貴方のそばに……」）

（「……って違う違う！」）



記憶の中のキスシーンに再び茫然となりながらも、恭弥はなんとか気を取り直す。

(守りたいから、〃力〃を求めた。そしてその〃力〃は僕にしか使えない、か……だったらさ)

状況と、それ以上に気持ちの整理がついた途端、恭弥は清々しい気持ち覚える。

そして微笑みを浮かべて光秋を見る。

「加藤さん。もう一つ訊きたいことが」

「……なんですか？」

先ほどまでと違う様子の恭弥に、光秋は興味のある目で応じる。

「軍人の給料ってどのくらいですか？」

「……やっぱりそうきますか」

「そうこなくちゃ、でしょ？」

真顔で訊いてくる恭弥に、光秋は悲しい様な、それ以上に嬉しい様な顔で応じ、一夏も微笑みながら続く。

「ですね。少し気に入りました……」

それに返すと、光秋は上着から携帯電話を取り出して電卓を作動させる。

「まず基本給がこれくらい。君の場合は諸々の手当も付くから……」

言いながら、光秋は「0」がいくつも付く数字を次々と加算していき、合計額が徐々に上がっていく。

「概算ですが、1カ月でこんなところですかね」

(……今までの暮らしてなんだったんだろう?)

画面に表示された金額に、恭弥思わず笑ってしまう。

そして、

「わかりました……母さんと4人で話したいんですが、いいですか？」  
「わかりました。こっちはです」

恭弥の頼みに短く応じると、光秋は先ほどの建物に歩き出し、すつきりした顔の恭弥と、彼に頼もしい視線を送る一夏がそれに続く。

事情説明に使った部屋の前に着くと、光秋はノックしてドアを開け、先ほどと同じイスに座っている恭弥の母に呼びかける。

「奥さん。恭弥君からお話があるそうです。よろしいですか？」  
「……はい」

なにかを察した顔で母が頷くと、光秋は恭弥と一夏を部屋に入れ、桂木親子とテーブルを挟んで向かい合い、後ろに一夏を控えさせる。  
「それで恭弥君。話ってなんですか？」

「はい」

光秋の問いに、恭弥は落ち着いた様子で応じる。

「僕、連邦軍に、加藤さんたちの部隊に入ります」

恭弥は光秋の目を見てはつきりと答えると、光秋は左手首の腕時計を見る。

「確認しますが、今は午後4時です。僕が指定した時間までまだ余裕がありますが、考え直す気はありますか？」

「ありません」

続く問いにも、恭弥ははつきりと答える。

「なんとなくですけど、加藤さんと一夏君の話を聞いて、僕がどうしたいのか見えてきた気がするんです。シルフィードは大きな“力”で、それを使えるのは僕だけ、そして、僕も守る為に“力”を求めたから。今知ってる所でそれができるのは、加藤さんたちの所しか無いから」  
「……わかりました」

恭弥の静かだが力強い言葉に、光秋は静かに頷く。

「奥さんは、それでよろしいですか？」

「私は、この子がしたいようにさせてあげるだけです。子供を軍に預けることが不安じゃないと言えは嘘になりますけど……少なくとも、恭弥にここまでしてくれる……いえ、恭弥の同僚であるお二人のことは信じたいですから」

「……わかりました」

「……」

微笑みながら言う母に、光秋は深く頷き、一夏はなにかを噛み締める顔をする。

「……そうと決まれば、時間が惜しいですね。早速入隊手続きに入りますしよう」

決心が着いた顔で言うや、光秋は席を立ち、恭弥たちを手招きして部屋を出る。

それを追って歩きながら、恭弥は新しいことが始まる期待と、未知の世界へ踏み出す不安が入り混じった胸中に思う。

(これからどうなるのか、この判断が正しかったのか、それはまだわからないけど……こうなったら、力の限り守ってやる！)

その時だけは迷い無く断じると、前を行く光秋と一夏の背中を見据えるのだった。

## 4 ルミエイラ

新西暦78年から約2年に渡って続いたDC戦争は、ゴーストの出現と鬼の勢力圏拡大という人外の要因によつて停戦という形で幕を閉じた。

しかし、DCの一部は停戦協定に従わず、DC残党として世界各地で連邦への抵抗を続けていた。中でも戦時中DCの本部が置かれていた大陸では、多くの残党が籠城を続けていた。これに対し、未知なる敵との対峙の準備を急いでいた連邦は、状況の早期終結の為に大陸に大部隊を派遣し、大陸から彼らを一掃する作戦を展開した。一方DC残党も、DC内で一大派閥を形成してしたイスダルン国や革命者などが抜けたことで生じた戦力低下を補う為に、戦前から大陸内で活躍していた傭兵を多数雇い入れて迎え撃つ態勢を整えた。

そして新西暦80年3月上旬、大陸に派遣された連邦軍の部隊・大陸遠征部隊と、DC残党との戦いの火蓋は切つて落とされた。

そしてこの戦場には彼女——ライカ・ミヤシロの姿もあった。

大陸北部の沿岸線。

上下左右前後、全ての方向から雨の様に砲弾やミサイルが飛び交う中を、リオンより遙かに人に近い形をしたAM——ガリオン、そのカスタムタイプに率いられたリオンの上位機種——レリオンの編隊が駆けていく。

先頭を行くガリオン・カスタムのコクピットに納まるライカ・ミヤシロは、前方にDC残党所属のリオンを見つけるや、右手に持つバースト・レールガンを向ける。

(インサイト)

照準が重なると同時に放たれた弾はリオンを背中から撃ち抜き、爆発四散させる。

自身が作り出した目前の火球を意に介さず、ライカは地上へと視線を向ける。友軍の地上部隊と交戦しているPD・アンタレス3機を認めるや、胸部マシンキャノンに向けてそれらを蜂の巣に変える。

それでこちらに気付いたのか、他のアンタレスや旧式PD・レイザーが手に持った火器を上空に向けて放ち、PDの倍程の全長を誇る機種―AD・ルーク数機が脚部キャタピラを展開した高速形態で駆けつけてそれに加わる。

(イスダルン国の置き土産か……子供を守る大人みたい)

自身を攻撃するルークにそんな感慨を抱いたのも一瞬、ライカはガリオン・カスタムを左右に振って対空攻撃を回避し、バースト・レールガンやマシンキャノンを連射してそれらを鉄屑にする。

僚機のレリオンたちも、あるいはレールガンを撃つてその作業に加わり、あるいは接近してくるリオンやバレリオンにミサイルを放って僚機を援護する。

と、

『動力に被弾！ 駄目だ……もう……！ ミヤシロ隊長……!!』

パイロットの絶叫が無線に響き渡り、モニターから「バレット2」という識別信号が消失する。メインモニターの隅で火を噴きながら僚機のレリオンが冷たい海の底に墜ちていく瞬間を見たものの、その一連の流れを見てもライカには何の感情も湧かない。

(何処から?)

すぐに意識を全方位に向け、レーダーに目を走らせてバレット2を撃った敵機を捜し、そして瞬時に見つける。

(まさかここで出会うとは……『騎士』!)

モニターに映し出されたデータを見て、心なしか全身を強張らせる。

レリオンやPD以上に人型に近い姿、白基調ながら赤く塗った上半身とヒロイックな外見が特徴的なその機体の名は「アリシオン」。「騎士」の異名を誇る大陸でトップクラスの傭兵の愛機である。

(叩き落とす……!)

一瞬抱いた恐怖を振り払う様に心中に断じると、ライカは僚機のレリオン2機と交戦しているアリシオンにバースト・レールガンを向ける。

今まで以上に慎重に狙いを定め、縦横無尽に動き回るヒロイックな

機体を照準に確実に納める。

(そー！)

瞬時にトリガーを2回引き、高速で放たれた弾体がアリシオンに吸い込まれる——ことは無かった。

(視界が360度なのか?)

素早く動き回りながらレリオンへ右手のビーム砲を向けていたアリシオンは急に停止したかと思ったら、そのまま後ろへ下がったのだ。そのまま直進していたらバースト・レールガンの弾丸は間違いない、コクピットを食い破っていただろうに。

(これが大陸の傭兵の実力……それなら！)

あまりの動きに思わず舌を巻くものの、ただ眺めているほどライカは愚かではない。

コンソールに映し出されている兵装リストから「ソニック・ブレイカー」をタッチし、モーションへ移行する。両肩のユニットが上下に開き、テスラ・ドライブにエネルギーが十二分に行き渡る。

すると、メインモニター一杯に青いエネルギーフィールドが映し出されていく。ただのエネルギーフィールドではない、電磁誘導及び加熱され、フィールドには金属粒子が固定されている。

文字通り「盾」を獲得したガーリオン・カスタムをメインモニター端の画面で確認し終えるや、推力を上げるべくペダルを踏み込む。上がるGで体がパイロットシートの背もたれに押し付けられる。

(……相変わらず嫌な感覚だ。やっぱり機種変更なんてするものじゃない……か)

こみ上げる不快感に口の中で愚痴を漏らすものの、視線は2機のレリオンを翻弄し続けるアリシオンを見据えている。

(もう少し)

充分加速に乗った。横つ腹直撃コース。

だが、現実はその上手く行くはずがない。

先ほどまで別の隊のレリオン3機の集中砲火に晒されていたはずの黒い機体が、ライカの背後に猛追して来ていたのだ。

表示されたデータに、後部監視用モニターから眼が離せなくなる。

よそ見など三流も良いところだが、生憎相手が悪い。

(こんな時に目を付けられるなんて……) 『死神』！』

右手にバズーカ、左手にガトリング砲を持った黒い重装甲機「タナトス」。圧倒的な火力を以って敵対者を一方的に殲滅する戦い方から「死神」と渾名されるこの機体に背後を取られて、いったいどれだけの機動兵器乗りが平静を保てるのだろうか。

短い距離ではないというのに、ガーリオン・カスタムの推進力が決して低いわけでもないというのに、黒い鉄塊はどんどん詰めてくる。

今からソニック・ブレイカーのモーションをキャンセルし、即刻離脱すれば被弾は免れるだろう。もつとも、そんな「選択肢」はあり得ない。

タナトスのバズーカの砲口がこちらに向けられる。情報では戦艦の主砲に匹敵する威力を誇る一撃は、確実にこのガーリオン・カスタムを木端微塵にする。

(その前に、もらっていく)

それに対策がないわけではない。モーションの邪魔になるので、腰の後ろにマウントしていたバースト・レールガン<sup>パ</sup>を強制排除<sup>ジ</sup>する。狙いは向けられたバズーカの砲口。目潰し、あわよくば誘爆<sup>バ</sup>をしてくれたら御の字だ。

バースト・レールガンが後方へ飛んでいき、タナトスの間近で爆発する。

(どうだ……?)

結果は、失敗となった。死神は爆炎を突っ切って迫り、上に向けたバズーカの代わりにガトリング砲を放ってくる。

「くっ！」

咄嗟に機体を左に振って直撃は回避するものの、間に合わずに右肩のフィールド・ユニットに何発か当たってしまった。瞬く間にエネルギーフィールドは半減し、右側が無防備になってしまう。

そして、一瞬とはいえメインモニターから目を離れたツケが回ってくる。

(やられた……)

目の前にはビーム砲をこちらに向けたアリシオンが。サブカメラを地面に収めて映像を拡大すると、そこにはレリオンドだった。ものの残骸が2機転がっている。

(間に合わなかった)

悲しいという感情はあつたが、それだけだ。

人を殺す機械に乗るということは、皆それ相応の覚悟をしている。あのレリオンのパイロットたちも覚悟していただろう。

仇討ちは趣味ではない。その代わり、倒す。

半減したとはいえ、未だエネルギーフィールドは健在。速度はメーターを振り切る寸前。

アリシオンがビームを撃ってくるが、ライカは左のエネルギーフィールドでそれを受け流し、両者の相対距離が徐々に縮まってくる。

20メートル近くの全長を誇るガーリオン・カスタム、その半分程の全長のアリシオンの細部がよくわかる間合いまで詰めると、

(弾け飛べ！)

ライカは半ば特攻するつもりでフィールドを突き付ける。

しかし、

『不用意に寄りすぎたな』

冷静な女の声―おそらくはアリシオンのパイロットのそれ―が無線から聞こえたかと思うと、アリシオンは右半身の推進機全てを全開にしてソニック・ブレイカーを回避し、そのまま行き過ぎるガーリオン・カスタム、その無防備な右脇を取ってビームを放つ。

だが、

(この程度で諦めるほど……！)

反射的に操縦桿を振って機体を上昇させ、腰から下を持っていかれる代わりにコクピットへの直撃をかわす。

直後にエネルギーフィールドを消すと、強烈な加重が掛かるのも構わず急速な右旋回をしてアリシオンを正面に入れ、左操縦桿を軽く引いて前に倒す。

それに合わせてガーリオン・カスタムは左腕を引き、アリシオンの



顔面に鉄拳を叩き付ける。

(ゲッシュペンストなら……！)

乗っている機体が違っていれば、今で頭部を吹き飛ばせていた。これが意味することは1つ。

(届かなかった……)

直後にアラートが響き渡り、殴るモーションをしていて伸びきった左腕部の肘から先が吹き飛ぶ。バランスが取れなくなり、成す術なく重力に身を任せることとなった。

望遠カメラを地上に向けると、そこには赤い四脚の機体が左腕と一体化したレールガンをこちらに向けている。察するに、それでこちらの左腕を破壊したのだろう。

アリシオンは既に次の戦場へと向かい、死神は遠く離れた所でその大鎌を振っていた。

死神は単にライカにかまっている暇が無くなったのだろう。アリシオンについては、無闇に殺す必要はないということだろうか。

「……私、死ぬのかな？」

我ながら、落ち着いたものである。

こんなこともある。それに覚悟はしていた。人を撃っていれば撃たれるのは当たり前。

脱出機構イジェクトはまだ生きているが、作動レバーを引く気にはなれない。こんなあつさりとした最期も悪くないと思うから。

(だけど、そうだな……)

1つ、賭けを試してみる。ディーラーなんていない、レイズもコールもない。コインの裏表を当てるような、そんなシンプルな賭け。

賭け金リスクは自分の命、リターンは、

「……もし、私がつぶとく生き残れたのなら、今度こそ……今度こそは自分のやりたいことを……。流されるのはもう嫌だ。私の意思で……私の心に正直で……」(そう、ありたい)

1機のガーリオン・カスタムが、暗い海へ墜ちていく。

戦火は続くも、これでライカの戦いは一応の幕を下ろすこととなった。

この戦いにより、連邦は大陸からDC残党を一掃することに成功、その勢力を著しく殺ぐことができた。

しかし、連邦側の消耗も激しく、未知の者たちとの本格的な対峙にはさらなる時間を必要とするのであった。

新西暦80年4月上旬夕暮れ時。

連邦軍に入るといふ決断から1日少々が経った頃、恭弥は光秋と共に横浜基地の正門前を訪れ、門の外で待っていた母の持ってきた大型鞆を受け取る。

「着替えと諸々の日用品入れておいたから。足りなかったら電話して」

「大丈夫だよ。伊豆基地にも売店くらいあるだろうし。ですよね？加藤さん」

「ん？あー……まあね」

「そう、ですよね……」

光秋の回答に、母は少し寂しそうな顔をする。

が、それも束の間。すぐに表情を改め、真剣な目で光秋を見据える。

「加藤さん。恭弥をよろしくお願いします」

「はい。力の限り」

深々と頭を下げる母に、光秋は静かだが力の籠った声で応じる。

顔を上げると母は恭弥を一見し、なにも告げずに去っていく。

姿が見えなくなるまで見送ると、光秋は恭弥に視線を向ける。

「なにも言わなかったけど、いいんですか？」

「……いいんです。なんて言っていないかもわかんないし……休みになればまた会えるし」

一瞬迷いながらも、抱えた鞆を見ながら恭弥ははつきりと応じる。

「……そうですね。じゃあ、行きましようか」

なにかを噛み締める様に返すと、光秋はシルフィードとユニコーン・白が置かれている格納庫に向かって歩き出し、恭弥もそれに続く。

「それと、結局友達に会わせてあげられなくて申し訳ない」

「それも帰ったらまた会えますよ。それより、僕からも改めてよろしくお願いします。加藤さ……加藤大尉！」

「こちらこそ。もつとも、昨日書いてもらった諸々の書類を今朝伊豆に送ったから、正式な辞令が出るのは明日なんですけどね」

「そうなんですか……すみません。まだよくわからなくて」

「最初はそんなもんですよ」

「はあ……あ、そうだ。『大尉』じゃなくて『隊長』って呼んだ方がいいですか？部隊のリーダーなんだし」

「『隊長』はないかな。まだ未完成な部隊ですし。名刺にもあくまで『主任』って書いてあったでしょう？」

「そういえば……じゃあ、『加藤主任』？」

「とりあえず『大尉』でお願いします。それが一番無難ですから。もつとも、今みたいに私的な時は好きに呼んでもらってかまいませんよ。今まで通り『加藤さん』でも」

「そうですか？それじゃあ……『シユウさん』、て呼んでもいいですか？」

「『シユウさん』？」

唐突な呼び方に、光秋は思わず足を止める。

「はい。最初に渡された名刺の名前がどうしても印象に残って……」

「ああ。『一条秋』ね……」

「それにお名前は『光秋』さんなんですよ？だから『シユウさん』」

「なるほど。それもいいですよ。そう呼びたいなら。ただし、仕事中は『加藤大尉』でお願いしますね」

「了解しました！シユウさん」

見真似で敬礼してみせる恭弥が笑いながら応じると、2人は再び歩き出す。

同じ頃。

光秋と恭弥が向かっている格納庫では、クロイツリッターの残骸が専門機関へと運ばれ、ハンガーに納まるシルフィードと白も伊豆基地行きの輸送機に運び込まれようとしており、整備士たちは調査機器や

工具の片づけに動き回っていた。

そんな中、1人だけ作業着ではなくスーツを着た一夏は、ミコトと共にその作業を手伝っていた。

「ホントいいって。パイロットの仕事じゃないよ？服だって汚れるし」

「汚れたら洗えばいいだけですよ。どうせ伊豆に戻ったらしばらく着ないだろうし。それに、俺がやりたくて勝手にやってることですから気にしないでください」

「私が気になるんだけどな……」

そんなやり取りをしながら、2人は大きささまざまな機器を所定の場所にしまっていく。

「こつちに来る前も、偶に整備士の仲間の手伝いでこんなことしてましたし、力仕事なら任せてくださいよ」

「そうなんだ……男の子だね」

微笑みながら応じると、ミコトは最後に残ったひと抱えはある機器を持ち上げようとする。

と、一夏も同じ機器を持ち上げようと手を伸ばし、指先がミコトの手に触れてしまう。

「ひっ!?!」

突然のことに、ミコトは思わず手を引いて悲鳴の様な声を上げる。

「あ、すみません！爪が当たりました？」

「え？……いや、ううん。大丈夫……」(何でびっくりしたんだろう、私？手が触れただけなのに……)

心配そうに問う一夏に慌てて応じながら、ミコトは一夏の手が触れた右手の指先をそっと撫でる。

「……」

そうすることで指先の温もりが全身に広がり、体中が仄かに熱くなる。

「……本当に大丈夫ですか？顔赤いですよ？」

「な！なんでもないから！」

「は、はあ……」

叫ぶ様に返すミコトに少し驚きつつも、一夏は抱えた機器を元の場所に運ぶ。

「よし！これで完了っつと」

「あ、あのさ……ありがとう」

「どういたしまして」

「……」

笑顔で応じる一夏に、ミコトはますます体が熱くなる感じを覚える。

と同時に、これからのことを考えて気分が萎えていく。

「……もうすぐ、帰っちゃうんだよね……」

「ええ。光秋さんたちが来たら。俺はもともと伊豆基地の所属です。でも、伊豆と横浜ってどっちかっていうと近いから、また会えるかもしれませんよ」

「また会える……そうか。そうだよね！」

一夏のその言葉に、ミコトの沈みがちだった気分が一気に回復する。

「あのさ、もう一度、今度は個人的に自己紹介させて！」

「？……いいですけど？個人的？」

「いいからー……ごほん！ミコト・アオイです。生まれながらの技術屋。あとこんな成りだけどー7歳だよ。改めてよろしくね！」

「じゃあ、俺からも。織斑一夏です。今は光秋さんの下で、ユニコーン・白の専属パイロットやっています。16歳だから、俺の方が年下か。こちらこそよろしくお願いします。アオイさん」

「ミコトでいいよ。私も『一夏』でいい？」

「どうぞ……それにしても、やっぱり俺より上でしたか。念の為敬語使っついてよかった」

「なんの話？」

「いえね、昨日ミコトさんたちと会う前、見た目は12、3歳くらいなんだけど18歳って人に会って。まさかと思ってこの喋りにしてたんです」

「あー……それたぶん、いや、絶対私の知り合いだ」

「そうなんですか？」

と、

「すまない。待たせた」

一夏に呼びかけながら、恭弥を伴った光秋が歩み寄ってくる。

「光秋さん。恭弥さんも」

「ちっ！いいところだったのに……」

一夏が応じる横で、ミコトは3人には聞こえない声で怒りを呟く。

「そろそろ出立ですか」

「ヒラサカさん。調査協力に部下の機体の世話と、いろいろとありがとうございました」

「ありがとうございます」

4人の許に歩み寄ってきたアキヒロに、光秋は深々とお辞儀し、一夏と恭弥もそれに続く。

「ああいえ……機体の方は大したことでありませんし、調査も昨日からろくに進展しませんでしたし……」（ホント腰が低いなこいつら）

「まあ確かに。メーカーどころか製造番号もありませんでしたし、何処の誰がどうやって作ったとか、何で動いてたとかわからないままですもんね」

調子の悪さを誤魔化す様にアキヒロは話題を変え、光秋は調査報告を読んだ時のことを思い出しながら返す。

「ま、だから専門機関に引き継いでもらったんですけどね」

「そうですね……」

「ていうか、動力がわかんないのはご丁寧にそこを壊したからでしょ」

「な！バカ！」

「……それを言われると」

「返す言葉が無いですね……」

ミコトの指摘にアキヒロは焦るものの、光秋と一夏はそろって気まぐずい顔をする。

と、

「あの、シユウさん」

恭弥が申し訳なさそうに入り込んでくる。

「そろそろ積み込み始めた方がいいですか？」

「ああ、そうですね。お願いします」

『『シユウさん』?』

思い出した様に光秋が応じると、一夏が首を傾げて訊いてくる。

「僕流の加藤大尉の呼び方です。ペンネームが印象的だったから」

「ああ。なるほど! 『シユウさん』か……シユウさんか……」

恭弥に回答に、一夏は少し考える顔をする。

と、

「……もしかして同じこと考えてないか？」

「あ、光秋さんもですか？」

「シユウさんも？」

光秋の問いに、一夏と恭弥は互いを見やる。

「試しに言ってみるか?……せーの!」

「二週3回休みのシユウさんかい!」

見事に合致した駄洒落に、3人はそれぞれ笑みを漏らす。

その横では、ミコトが少し震え、アキヒロが無理やり笑顔を作っている。

「なんかさ、今夜は一段と冷えるね」

「バカ! 上司のギャグにはとりあえず笑つとけ。それが縦社会でやっていく処世術だ」

「あ、そうなの?……」

アキヒロの注意に、ミコトは脱力した声を返す。

直後、

「!……失礼」

左耳の通信機に連絡が入り、光秋は真剣な顔をする。

「はい?……了解しました。すぐに向かいます」

通信の相手に冷静に応じると、恭弥と一夏を見る。

「非特隊に参加する人の乗った輸送機に所属不明機が接近していると連絡があった。万一に備えてその輸送機の救援に向かう」

「足はどうするんです?」

「伊豆に向かう予定だった機を使うよう指示された」

少し焦りを浮かべた一夏の問いに、光秋は落ち着いて答える。

「大至急シルフィードを積み込んでください」

「りよ、了解！」

光秋の指示に、突然のことに緊張している恭弥は慌てながらも応じ、昇降機に駆け寄ってシルフィードのコクピットに入る。

その間にも、光秋は指示を飛ばす。

「白の積み込みは中止。機を少しでも軽くする為に置いていきます。

一夏君は輸送機に」

「了解！」

「ちよ、ちよつと！置いていかれても困りますよ！どうしろっていうんです？」

「大丈夫。すぐに取りに行きます。その間、危ないから白には絶対に近づかないでください。それと、何が起きても驚かないでください」

戸惑うアキヒロにそう返すと、光秋は連邦軍の主力輸送機・レイディバードに駆けて行く。

一夏もそれを追おうと駆け出すと、

「ちよつと待って！」

「!？」

後ろからミコトに呼び止められ、なにかを走り書きしたメモを渡される。

「私のメアド。落ち着いたら連絡して。いつでも待ってるから！」

「ありがとうございます。伊豆に戻ったらすぐに連絡します。お世話になりました！」

駆け出しながらもそれだけは言うのと、一夏は今度こそ光秋の後を追って走り出す。

2人に続いて腰にルミナ・グラティスを提げたシルフィードが貨物室のスロープを上がり、足場になっていた後部ハッチが閉まると、コンテナに翼が着いた様な形のレイディバードは夜空に飛び立っている。

「……もつと、たくさん話したかったな……」

あつという間に光の点になっていくレイディバードを見送りなが



ら、ミコトは切なそうに呟く。

40メートルはあろう高さの天井を重厚な円柱型の柱が無数に並んで支え、白一色に塗られた大広間は、さながら神殿を想起させる。

その中央には円卓が置かれ、1人の男が席に着いて手元の水晶玉を眺めている。

「おや？シルフィードを確保した連中が動いたようだね」

水晶玉に映るレイディバードが飛び立つのを見ながら、男は面白いものを見る様に言う。

歳は10代半ばくらいか。金髪碧眼に白い肌と西洋人の特徴を備え、微笑みを浮かべた顔には揺るがない自信が満ちている。純白の貫頭衣を着た姿は、若い聖職者といったところか。

「さてと……」

男は水晶玉に手をかざすと、中の映像が一変する。

「アリア、聞こえているかい？」

『はっ！』

男が水晶玉に向かって話しかけると、中に映る金髪のポニーテールの少女——アリア・アンダーソンは跪いて応じる。その服装は恭弥と中華街で会った時の平服ではなく、重厚な甲冑の上に白地に金の刺繍が施されたマントを羽織っており、少女の騎士といった感じである。

「まずは、長期に渡る偵察御苦労だったね。君とその部下たちのお蔭で、そちらの事情は大方把握できたよ」

『勿体無きお言葉』

男の労いに、アリアは頭を下げる。

「合流して早々悪いが、仕事を頼まれてくれ。シルフィードを確保した連中が動いた。その威力偵察と、こちらへの宣戦布告をね」

『私が!?……ですか?』

男の言葉が余程意外だったのか、アリアは目を見開く。

「誇り高い騎士の家系の君なら適任だろう?それに、今動かせる戦力でシルフィード……否、アレを確保した連中と渡り合えるのは君しかない。クロイツリッターを率いてすぐに出てくれ」

『しかし、私1人ではシルフィードの奪還は……』

「奪還には拘らなくていい。アレがいかに強力な“力”でも、敵の手  
に落ちたなら破壊するつもりでかかってくれ。我らが神もそう仰せ  
だ」

『神が!?……では、仰せのままに』

アリアが応じると、その姿は水晶玉から消える。

「さて、お手並み拝見といこうか。連邦の騎士の方々」

歌う様に呟くと、男は映像をレイディバードに戻す。

恭弥たちが横浜基地を飛び立った頃。

ヨーロッパ上空を1機のレイディバードが東へ向かって飛んでい  
た。

乗員は2人——操縦士と、大陸の戦いから奇跡の生還を遂げたライ  
カ・ミヤシロ中尉である。

あの戦いの後、ライカは北欧司令部に所属していたが、非特隊への  
招集を受けて伊豆基地に転属となった。

もつとも、現在輸送機に乗っている理由はそれだけではなく、北欧  
に回されていた“ある試験機”の移送任務も兼ねている。

相変わらずの微妙な乗り心地を覚えつつ、席に座っているライカは  
タブレットをいじりながらこれからのことを考える。

(……また私は……伊豆で……。いや、そんなことは良い。与えられ  
た仕事はこなす。納得いかないことはやらない。……それで、良い  
じゃないか)

そう思いながら窓から外を見ると、雲1つない綺麗な空が広がって  
いる。

伊豆まであと7時間といったところか。

(このまま何も起きないといいですが……)

そう居もしない神に祈る。

「……ん？」

僅かに機体が揺れた気がした。普通なら気にしないところなのだ  
が、何せ載せてるものが載せてるものだ。

(……荒事になりませんように)

そう思いながら、運転席に繋がる扉を開く。

沢山の計器類が忙しく動いている中、ちらちらとそれらを確認している操縦士の背後に立ち、ライカは声をかける。

「……何かありましたか?」

「中尉……今、連絡をしようと思っていました。……たった今、所属不明機の反応が確認されました。進行方向から予測するに、あと5分で目視できるエリアに入ります」

「所属不明機……?」

この辺りで連邦の作戦行動が行われているという情報はない。

DC 残党の可能性を考えたが、恐らく可能性はほぼ皆無。本部が壊滅して以降明確な指導者さえ決まっていない今、こんな所でうろろしているなど考えにくい。

「目視可能領域に所属不明機が入りました」

途端、レーダーに複数の光点が映し出される。

(1……2……4。一個小隊……仮に連邦の極秘の作戦行動だとしても、こんなおおっぴらに行動しているなんて、普通ならあり得ない。それに識別信号が未登録……味方じゃない、なら……)

『その輸送機、停止しろ』

直後にオープンチャンネルに呼びかけが入る。

ライカは機のカメラの倍率を上げ、呼びかけている機体とその後ろに控えている僚機を確認する。

(ガーリオン・カスタムが1機、レリオン3機……か)

正直に言つて、かなり厳しい状況である。ガーリオン・カスタムだけならまだしも、リオンの上位機が3機もあるとは。ここまで来ると、サイリオンやバレリオンがないのが不幸中の幸いと思えない。

そんなことに気を取られすぎた。

「っ……!!」

「中尉、第1に被弾！ 開閉作動ボルトに損傷、航行に支障はありませんが……!」

(分かっている)

今回の移送任務に当たってライカに宛がわれたガーリオンがあるのは、そのたった今使えなくなつた第1ハッチだ。

『繰り返す。ただちに停止しろ』

(警告も無しに撃つてくるとは)

ライカは操縦士にその場に留まるよう指示を出す。

「目的は何ですか?」

そう無線に投げ掛けると、すぐに答えは返ってきた。

『我々の姿を見られてしまったからな。……選択肢をやろう』

「選択肢?」

『1つ目は、こちらに輸送機の中身を全て明け渡した後、我々と来てもらう。……2つ目は』

途端にアラートが鳴り響く。リーダー格であるガーリオン・カスタムの携行武装——バースト・レールガンの銃口がこちらに向けられた。

『この場で死ぬか、だ』

「……時間をください」

『5分だ。その後返答を聞こう』

無線を切つたライカに、操縦士が不安げな視線を向ける。

「中尉……」

「……当然、答えはどちらもノー。……だけど、それを実現するために……」(せめてPTがあれば)

これがライカの悩み所だった。

物資を退かしてガーリオン出撃なんてことをやっていれば、あつという間に蜂の巣である。

打つ手がないように見えたが、ライカは自分の発言にハツとする。

「あつた……!」

「ちゆ、中尉!……どちらへ!」

操縦士の言葉を見無視し、ライカは目的の場所へ駆ける。

目的地は後部格納庫。

案の定、ハッチの片方は瓦礫を退かさなければ使えない。

「……まあ、しようがないですよね」

心なしか嬉しそうな声を漏らすと、移送対象のコンテナの開閉レバーを引く。

圧縮空気が一気に解放され、ただの箱となったその中に灰色の機体が佇んでいるのを見る。

——RPT-007 量産型ゲシユペンストMk-II。

そこにいたのは、ライカがよく知る機体である。

(……これは)

すぐに異常が無いか大ざっぱな確認を始める。

異常は無かったが、自分が知るゲシユペンストとは微妙に細部が違うことに気づく。曲線主体で全体的に太い印象の原型機より僅かに細身で、両肩のスラスターが小型になっており、スラスターノズルのすぐ下には何故かハッチが。バックパックのウイングは折り畳まれ、メインスラスターとサブスラスターが大きくなっている。脇下にまたハッチがあり、両肘裏には小型のスラスターが横に2つ配置されている。細身になった上半身とは裏腹に両足は僅かだが肥大化しており、それぞれ脛と脹脛、外側にスラスターノズルが増設されている。(両腕には取り外しの出来るプラズマバックラー……タイプGの武装が取り入れられているのか……)

昇降機でコクピットまで昇り、ハッチを開けて潜り込む。ボタンを押しシステムを立ち上げ、調整を始める。

その間にも、無線で操縦士に呼び掛ける。

「こちらバレット1、ライカ・ミヤシロ。私が合図を出したら、ミサイルを撃って高度を上げてください。あとは私が叩き落とします」

『こちらシエラ3。バレット1、あと1分40秒だ……間に合うのか!?!そんな調整もされてない機体を動かすなんて無茶だ! ガーリオンは使えないのか!?!』

「あんな機体よりこちらの方が、私は信用できます。そして、この状況を切り開ける確率も跳ね上がる」

喋りながらも、ライカはコンソールを操作する手を休めない。

『やれるのか?こっちは1機しかないんだぞ?それにあと……』

「50秒切りましたね。……上等」

左右の操縦桿を少し引いて傾けると、それに合わせる様に機体の両腕が動く。そして次の調整に入る。

(……量産型の2倍近い推進力だ。それに、反応も申し分ない)

続いて機体の顔を動かし、コンテナの中身を確認する。

(M90アサルトマシンガンが1丁、しかもご丁寧に実弾が装填済みか。アンダーバレルは……対PT誘導ミサイルAPTGMじゃなくて、小型のキャノン砲？カスタムタイプですね。贅沢な……両腕のプラズマバックラーとアサルトマシンガン)

武装を確認するや、ライカはOSの調整に取りかかる。

『30秒切ったぞー』

「話しかけないで。死にたくないなら黙っていてください」

本来ならば時間をかけなければならぬのだが、ライカの操作に焦りは見られない。

(少し、高揚しているのかもしれない……またこの亡霊に乗れるなんて夢にも思わなかった)

高鳴る鼓動を抑えながらも、調整は終盤に入ろうとしていた。

ライカたちが所属不明機と接触する少し前。

恭弥たちを乗せたレイディバードは、中国上空に差し掛かろうとしていた。

20メートル級のPTやAMを最大5機収容できる格納庫も、今はシルフィード1機だけと閑散としており、その片隅にはパイロットスーツを着た恭弥と、スーツ姿の光秋と一夏が集まっている。

「着替えは終わりましたか。調子はどうです?」

「まだちよつと慣れないけど……なんとか」

光秋の問いに応えながら、恭弥は体を動かして緑基調のスーツの着心地を確認する。昼間もシルフィードの起動実験で着たものの、体に密着する感覚にはまだ慣れない。

そんな様子を見ながら、光秋は説明を始める。

「今回の目的は、所属不明機の接近を受けている友軍の輸送機の救援。」

万が一相手が敵対行動を取った場合はこれを迎撃する。それと、コールサインを確認しておきます。僕がホワイト1、織斑曹長がホワイト2、桂木曹長がホワイト3。作戦行動中はコールサインを用いるように。いいですね」

「了解！」

恭弥と一夏は踵をそろえて応じる。

直後、光秋の通信機に連絡が入る。

「はい？……了解しました。ここままでかまいません。迎えの機の手配をお願いします。ありがとうございます。燃料の都合上、ここままでしか行けないらしい。ま、もともと行ける所までという話だったからね。各自機体に搭乗。ここからは僕たちで行く」

「搭乗って……シユウさんと一夏君の機体はありませんけど？」

「もう『加藤大尉』ですよ。それについては心配いりません。桂木曹長はすぐにシルフィードに」

「？……了解」

光秋の説明に首を傾げながらも、恭弥は脇に抱えていたヘルメットを被り、垂れ下がっているワイヤーを掴んでシルフィードのコクピットに上がる。

操縦席に座るやモニターが一斉に映り、肘掛のボタンを操作してハッチを閉じると、球形操縦桿を振ってシルフィードを開ききつた後部ハッチに前進させる。

と、

『それじゃあ、まず俺から。ホワイト2、行きます！』

「？」

外部音声越しに聞こえた一夏の声に足元を見やると、なんの装備もしていない一夏が後部ハッチへ向かって疾走しているのを見る。

「え！？ちよ……」

止める声をかける間も無く、一夏はスロープから夜空へ飛び込んでいく。

レイデイバードから空中に躍り出た一夏は、すぐに右手首のガント

レットを口元に寄せ、心の中で強く念じる。

(研ぎ澄まされた、強い「力」……俺の想いを果たす為の……)

念は一本角と翼を備えた像を結び、それを表す様にガントレットに向かつて叫ぶ。

「コール！ユニコーン・白！」

一夏たちが去った横浜基地では、空のオイルの缶を椅子にしたミコトが、置いていかれた白を愛用のスケッチブックに写生していた。

「はあ……」

手を休めると、小さく溜息を漏らす。

「またなんか考えてるのか？……て、コレあの小僧の機体じゃねえか？」

「!?……いつの間？」

気付かない間にスケッチブックを覗き込んでいたアキヒロに、ミコトは思わず腰を浮かす。

その様子に、アキヒロは少し考える。

「……なあミコト。お前まさかあの小僧に——」

「なーなに言ってるのさー！私はアイツのこと、別に好きってわけじゃ……」

「俺は好きとは一言も言っていないぞ？」

「……」

上げ足を取る様な言い方をするアキヒロに、ミコトはぶっ飛ばしてやりたいという衝動を覚える。

「にしても、機体だけ置かれていてもなー。悪い奴じゃないんだろうが、あの若造大尉、いったいなに考えてるんだ？」

「ま、それはそうだよなー」

そんなことにかまわず白を見るアキヒロの言葉に、ミコトも渋々同意する。

当の白は、光秋の忠告に従って足元にコーンの合間にテープを張った封印がされ、立ち入り禁止となっている。

直後、



「!?!」

白の上空に大きな穴が空いたかと思うと、瞬時にそれに吸い込まれてしまう。

「……………なんだったんだ?今の」

「なにが起きても驚くなつて……………こりゃ、無理でしょ…………」

白の消えたハンガーを呆然と眺めながら、アキヒロとミコトは口をあぐりと開ける。

叫んだ一瞬後、一夏の正面に巨大な穴が空き、中からユニコーン・白が吐き出される。

「よしー来い、白式ー!」

愛機の出現を確認するや意識を集中し、体中が光の粒子に包まれる。

光が収まるや、愛機同様4枚の翼を備えた白い機械の鎧、白の操作ユニットたるIS・白式を纏い、開きっ放しのコクピットに吸い込まれる様に入り込む。コクピット中央の天井から伸びるケーブルと白式の背中のソケットを繋ぐと、内壁全てを覆うモニターが点り、バイザーの奥に隠れている白の2つの目が輝く。

「……………凄い」

一連の光景をシルフィード越しに見ていた恭弥は、あまりのことに思わず驚きの声を漏らす。

直後、

『ホワイト3!次は君ですよ!』

「あーはいー!」

光秋の急かしに我に返ると、恭弥は気を取り直し、

「ホワイト3、出ますー!」

声高に叫ぶとペダルを踏み込み、レイディバードから飛び立つ。

白の許まで来て滞空すると無線を開き、

「ところで、シュウさ……………加藤大尉の機体は?」

画面の中の一夏に今一番の疑問を口にする。

『ありますよ。ほら』

「？」

一夏の答えとレイディバードを指す白の右手を追うと、格納庫に残された光秋の拡大映像が表示される。

と、映像の中の光秋は上着の内ポケットに手を入れ、懐からなにかを取り出す。

光秋は懐から出した物の先端を前に向け、ボタンを押す。白い光の線が1メートル程進むと膨れ上がり、左膝を着いたニコイチが出現する。

ワイヤーリフトを掴んでコクピットに上がり、認証を済ませて立ち上がると、後部ハッチへと歩み寄る。

「それでは。ホワイト1、出ます！」

叫ぶやペダルを踏み込み、背部の円を発光させて浮き上がると、シルフィードと白の許に向かう。

(……僕、つくづくとんでもない人たちと組んじゃったかも)

白の瞬間移動、そしてどこからか出てきたニコイチを立て続けに見せられ、恭弥はしばし呆然とする。

『全員いますね。といっても、3人だけです』

「！あ、はい！」

新たに表示された画面に映る光秋の確認の声に、恭弥は我に返る。

『それじゃあ、現場まで急ぎます。ホワイト2は僕の背中に掴まって。ホワイト3はその後ろに』

「？……了解」

よくわからない指示に応じると、恭弥はニコイチの肩を掴んだ白の後ろに回り、上側の翼に手を掛ける。

「……そういえば一夏君、それ」

『え？ああ、お守りですからね。こういう時にこそ着けないと』

今更ながら恭弥は、画面の中の一夏が昨日中華街に行く時に見た×型のバレッタを付けていることに気付く。

『2人共。もう作戦行動中。私語は慎むように』

『あ！はい！』

「すみません！」

一夏と恭弥が注意に応じると、光秋はニコイチを西に向ける。

『けっこう飛ばすぞ。しっかり掴まっておくように』

『了解！』

「?……了解」

2人が応じると、画面の中の光秋は目をつむり、呼吸を整える。

直後、

『!』

カツと目を見開くと同時に、ニコイチの節々を覆うカバーが開き、露出した骨格から闇夜を押し退ける様に赤い光が広がる。

「!？」

恭弥が目を丸くする間にも光は広がり、ニコイチを中心に3機を包んだ球を形作る。

そして、

『行くぞ！』

光秋の叫びと共に、3機を包んだ赤い光の球は高速で移動を始める。

「……………」

風の如く過ぎていく眼下の景色に、恭弥は思わず目を回しそうになる。

と、

(明るくなってきたる?……違う!昼の面に移動してるんだ!)

早朝くらいの明るさになり始めた周囲に驚く恭弥を乗せて、光の球はひたすら西を指す。

ライカがゲシユペンストの調整を終えた直後、所属不明機から通信が入る。

『時間だ。返答は?』

それには応じず、ライカは深呼吸をし、操縦桿を握りしめ、ペダル

に足を掛ける。

「今です。ミサイル射出後——」

『ぜ、前方から接近する物体あり!』

「!?……すぐに出ます。発進したら離脱してください」

言葉を遮る様な操縦士の困惑の声に一瞬驚くものの、すぐに新たな指示を出し、アサルトマシンガンを右手に持って開いたハッチから空へ出る。

（『テスラ・ドライブ』は標準装備ってところがニクイですね）

予想外の事態に若干焦りながらもそんなことに感心すると、前方に並ぶ所属不明機4機、そのさらに後方からこちらに向かってくる赤い光の球を確認する。

所属不明機たちもそれに気付いたのか、慌てて背後を振り返って各々の火器を赤い球に向ける。

（新手の鬼でしょうか？ガリオンたちだけでも厄介なのに……）

心中に愚痴りつつ、ライカもアサルトマシンガンを構える。

直後に球は所属不明機たちから少し離れた辺りで消え、中から額に角を生やした3機の白い人型機動兵器が現れる。

『前方の所属不明機、及び後ろのゲシュペンスト、聞こえるか。こちらは連邦軍伊豆基地、非常事態特殊対策部隊所属、加藤光秋大尉である』（非特隊?!）

3機の内の一機小さい機体から拡声器とオープンチャンネルで告げられた部隊名に、冷静沈着を絵に描いた様なライカも流石に目を丸くする。自分がこれから所属するはずの部隊が、その前に援軍に来てくれたのだから。

『ただちに武装解除し、投降せよ。従わない場合は実力を以て当たる』  
続く小さい機体からの勧告に合わせる様に、左右にPTくらい背丈の2機が展開し、左の白銀の妖精は剣の刀身が割れて現れた銃口を、右の白い翼の騎士は左手と一体化した砲口を向ける。

（……いけるかもれない）

一連の光景と、小さい機体から響く声——静かだが強い意志を感じさせる光秋の声に、ライカの中に少しずつ余裕が生まれてくる。

さらにいえば、戦力はすでに4対4と互角、しかも所属不明機たちは実質前と後ろから挟まれてしまっている。

「「……………」」

しばしの間、全員の間には沈黙が流れる。

そして、

『!』

ガーリオン・カスタムがバースト・レールガンを撃とうとする直前、小さい機体が瞬時に接近し、首元に右手刀を突き付ける。

(やろうと思えばコクピットを潰せたということですか……………随分と腕が良い)

その行動に、ライカは胸の中で称賛の声を上げる。

『最後通告です。投降するか?しないか?』

『……………くっ!』

先ほどと異なりドスの効いた勧告に、ガーリオン・カスタムが銃口を下ろし、レリオンたちもそれに従う。

『お前、何者だ?』

『先ほど言ったでしょう?非常事態特殊——』

『そういうことじゃない!何者なんだ?お前は……………』

『……………とりあえず、「白い犬」、とでも名乗っておきましょうか』

「白い……………犬……………」

堂々とした返答に、ライカは知らぬ間に生唾を飲む。

その直後、

「!?何です?」

一同の真上の空が歪んで黒い大きな穴が空き、ライカは驚愕しつつもどこか緩んでいた気持ちを締め直す。

『あれは……………時空崩壊?』

「否、前に見たやつと少し違う……………」

一夏の言葉を否定しつつ、恭弥は上空に空いた大きな穴に恐怖と警戒を覚え、球形操縦桿を握る手に心なしか力を込める。

と、穴の中からクロイツリッターの集団が溢れ出てくる。

「…この間の奴ら！」

そうとわかるや恭弥はガリーリオン・カスタムたちに向けていたルミナの銃口を上に向け、クロイツリッターの1機に狙いを定める。

しかし、

『待て！迂闊な行動は取るな！』

「……」

すぐに光秋の叱責が飛び、渋々発砲をやめる。

『とりあえず、距離を取りつつゲシュペンストと合流する。その間は様子見だ。相手が動くか指示があるまで迂闊なことはするな』

『了解』

「……了解」

続けて出された指示に一夏と共に応じると、穴とクロイツリッターたちから離れ、光秋が手招きした灰色のゲシュペンストと合流する。

ガリーリオン・カスタムたちも双方から距離を取り、顔を見合わせてどうするか決めかねている。

『えっと、ミヤシロ中尉ですね。非特隊主任の加藤です。とんだ出迎えになってしまいましたね……』

『いいえ。お蔭で助かりました。といっても、さらに面倒なのが現れたようですが』

(女の女なんだ……)

通信から聞こえた声に、恭弥は少し意表を突かれる。画面に映る顔はバイザー越しではつきりとはわからないものの、自分より少し年上くらいの印象を受ける。

『ええ。状況によつては彼らにも対処します。彼らの機体と僚機のデータです』

言いながら光秋は、事前にシルフィードからコピーしたクロイツリッターと、ニコイチ、白、シルフィードのデータをゲシュペンストへ送る。

『了解しました。こちらのコールサインはバレット1です』

『わかりました』

2人が状況確認をする間にもクロイツリッターは増え続け、最終的

に12機まで出現する。

そして、

『「!?」』』

穴が消える直前に出現した13機目の機体に、非特隊全員が息を飲む。

『黒い……シルフィード?』

全員の思いを代弁する様に、一夏が目を見開いて呟く。

最後に現れたのは、左手にクロイツリッターたちよりも重厚そうな盾を持ったシルフィードにしか見えない機体だからである。しかし恭弥のシルフィードが白銀なのに対し、こちらは日光を不気味に反射する黒銀である。

(何でシルフィードがもう1機!?!……?)

動揺する恭弥に応える様に、モニターにデータが表示される。

『ベネクティオ?……』

『何だつて?』

「黒いシルフィードの名前です。データにそう書いてあつて……」

『……シルフィードはあの機体を……否、あの集団の機体を知っているのか』

戸惑いながら応じる恭弥に、光秋は少し考える顔をする。

と、黒いシルフィード——ベネクティオは腰に提げたルミナと同型の剣を抜き、それを高く掲げる。

『地球連邦をはじめとする全ての勢力に告げる!』

「女の……声?」(どこかで聞いたような……)

オープンチャンネルと拡声器から響き渡る声に、恭弥は意外さと聞き覚えを感じる。

『我々はルミエイラ。救国の騎士である!我々の目的はただ一つ、安息の地を手に入れることである。その障害となるのも、そしてそれを妨害するものは、如何なるものであろうと排除することを、今ここに宣言する!』

ベネクティオのパイロットは迷いを全く感じさせない声で宣言し、それに応じる様にクロイツリッターたちが一斉に剣を掲げる。

「ルミエイラ?……救国の騎士って……」

全くの未知の単語を呟きながら、恭弥は目の前の集団——ルミエイラの放つ重圧に圧倒されるのだった。



## 5 亡霊が泣く

ベネクテイオのパイロットが宣言するや、光秋はニコイチを上昇させ、上空に陣取るルミエイラ勢に少し寄せる。

『ルミエイラ』と言いましたね。目的の障害となるもの、妨害するものの排除とはどういう意味です?」

『その通りの意味だ。我らの邪魔をするものは誰であろうと容赦無く抹殺する。地球連邦はその性質上障害になることは明らかだからな。真つ先に排除させてもらう』

「……つまり、連邦政府への宣戦布告ということですか」

ベネクテイオのパイロットの回答に、光秋は苦いものを噛む顔をする。

「もう1つ訊きたい。貴方がたの目的、安息の地を手に入れるとはどういうことですか?」

『この世界を我らのものとする、という意味だ』

「つまり、世界征服と?」

『そうではない。この世界を我らの……否、これ以上話しても時間の無駄だ。すでに賽は投げられた。者ども、かかれ!』

指示を飛ばすと同時にベネクテイオは剣を非特隊に向かって振り下ろし、それを合図に剣からマシンガンに持ち替えたクロイツリッターの軍団が迫る。

「結局こうなるか。ホワイト1より各機、応戦せよ。ただし、ベネクテイオのパイロットは確保しろ」

『了解!』

『?……了解』

銃撃をかわしながらの指示に、恭弥と一夏はすぐに、ライカは少し疑問を抱きつつ応じる。

「それからホワイト3」

『はい』

「君は後方から援護射撃。あまり前に出るな」

『え? 僕だつて——』

「命令です。いいですね」

『……了解』

有無を言わせない光秋の指示に、恭弥は渋々応じると後ろに下が  
り、射撃モードのルミナ・グラティウスでライカと一夏の援護を始め  
る。

それを確認すると、光秋はガーリオン・カスタムたちに呼びかける。  
「所属不明機の方々。どうです？ここは協力して——」

続く言葉を遮る様にガーリオン・カスタムがバースト・レールガン  
を発砲し、光秋は左腕を前に出してそれを防ぐ。

『こうなったらヤケクソだ！全員まとめて片づけろ！使えそうなモノ  
は後で回収する』

『『了解！』』

言葉通りヤケクソになったガーリオン・カスタムの指示に応じ  
ると、レリオン3機が非特隊、ルミエイラ双方に攻撃を始める。

「こつちも結局、か……なら！」

嘆息混じりに呟いた直後、光秋は手近なレリオンに狙いを定め、一  
気に懐に入る。

「！」

振り上げた両手の手刀を叩き込んで両腕を肩から奪い、そのまま一  
回転して左踵落として頭部を潰す。

「本来ならここで捕まえていろいろ調べるところですが……」

推進機を全開にして戦線離脱するレリオンを眺めつつ呟くと、クロ  
イツリッターの銃撃が飛んでくる。

「今は手が回らないのでね！」

言いきるや攻撃してきたクロイツリッターに接近し、胸部に腰に引  
いた左拳を放つ。

「ホワイト1より各機。所属不明機も敵対行動を取った。応戦せよ。  
ただし、パイロットは極力確保するように」

『『了解！』』

『……了解』

先ほどと同じ様に3人が応じたのを聞くと、光秋は次の目標を探

す。

右手に雪片式型を呼び出した一夏は、上下左右に素早く動いて銃撃を回避しつつ間合いを詰め、

「オオオオ！」

クロイツリッターの胸部に切っ先を突き刺す。

「またミコトさんに愚痴られるな。だが」

背中まで貫通した雪片を一気に引き抜くと、クロイツリッターは地上へ墜ちていく。

（手足を落としても向かってくる無人機を止めるには、動力を潰すのが手っ取り早いからな）

横浜基地での会話を思い出しながら、そんなことを考える。

直後、

「！」

2列の銃撃が殺到し、咄嗟に上昇してかわす。

「ガーリオンか！」

銃撃の来た方向を確認すると、ガーリオン・カスタムがこちらにバースト・レールガンを向けている。

「！」

放たれた弾丸を体を捻ってかわすと、ウイング・スラスタを吹かして一気に距離を詰め、

「はあああー！」

気合いと共に雪片を振り下ろす。

ガーリオン・カスタムは左手に持ったアサルトブレードでそれを受け止めるものの、

『コ、コイツー……』

自身の刃が徐々に押されていく光景に驚愕の声を漏らす。

『ええいー！』

「!?」

直後にガーリオン・カスタムは胸部のマシンキャノンを放ち、一夏は左腕を覆う雪羅を前に出して本体への被弾を防ぐ。純白の雪羅の

装甲に火花が爆ぜるものの、明らかな傷を作ることはできない。

その間に距離を取ったガーリオン・カスタムは両肩のユニットを上下に開き、機体前面をエネルギーフィールドで覆って突っ込んでくる。ソニック・ブレイカーである。

「！」

一夏は雪羅の荷電粒子砲を撃って応戦するものの、灼熱の粒子の塊はエネルギーフィールドの前に弾かれてしまう。

「バリアーか！」

『無駄だ！吹き飛べヒュツケバインのでき損ない！』

「ならー！」

ガーリオン・カスタムの声に応じる様に眩くと、一夏は雪片に意識を向ける。

「零落白夜、発動！」

叫びに連動して雪片の刀身が嘴の様に割れ、割れ目からエネルギーの刃が放出される。エネルギー刃が刀身を形成すると、雪片を両手で持ってガーリオン・カスタムへ接近する。

「オオオオ！」

阻むもの全てを打ち砕くソニック・ブレイカーに自ら飛び込むなど、傍から見れば自殺行為だろう。

しかし、一夏の顔に迷いは見られず、間合いを詰めるや腕一杯に振り上げた雪片、そのエネルギー刃をガーリオン・カスタムに振り下ろす。

輝く刃はエネルギーフィールドに阻まれる、

『馬鹿な!?!』

ことは無く、触れた瞬間にエネルギーフィールドを消し去り、そのままガーリオン・カスタムの右ユニット、右腕、右足を付け根からごっそり斬り落す。

「これでえー！」

体勢を立て直すや、一夏はガーリオン・カスタムの腰にもう一撃放とうとす。

が、

「うっ！」

再びマシンキャノンの銃撃を浴び、雪羅で防いでいる間に戦線離脱されてしまう。

「もう追えないか……エネルギーは？」

雪片を実体刀に戻すと、白式を通して白のジェネレーターの出力を確認する。

「……大丈夫か。なら次！」

許容域に落ち着いているのを見るや、一夏は四方からの銃撃を避けつつクロイツリッターの軍団の中を駆けていく。

クロイツリッターの1機に狙いを定めると、ライカは操縦桿を一気に倒してゲシユペンストを加速させる。

(まずは確実に1機を)

増設されたスラスタールによって通常機よりも速く相手に接近すると、両脛のスラスタールで急停止をかけ、すぐに左肩のスラスタールを最大推力まで引き上げてクロイツリッターの左側面を取る。

アサルトマシンガンを右手で持ち、左手はアンダーバレル辺りに添え、しっかりと狙い、

(さ、1人目の亡霊なまですわね)

右人指し指のトリガーを引き絞る。

銃口から吐き出された弾丸はクロイツリッターの装甲を食い破り、いたる所から黒煙を立ち上らせる。

徐々に高度が下がっていくクロイツリッターを視界の端に見つつ、ライカは次の標的へ意識を向ける。

が、直後にアラートが鳴り響く。

(しまった！)

後ろを取ったクロイツリッターが右腕を向け、手首に納まっているミサイル2発を放つ。

「！」

右ペダルを踏み、左操縦桿を倒して左に動くことで避けようとするが、

「ホーミング？」

ミサイルはゲシユペンストの動きに合わせて軌道を左に変え、あつという間に迫る。

が、

「!？」

背中に着弾する直前に横から別のクロイツリッターが割り込み、それが楯となったことで難を逃れる。

「なんですか？」

『バレット1、無事ですか？』

「加藤大尉！」

直後に入った通信に応じると、ライカはクロイツリッターが飛んできた右を見る。視線の先には、右手にクロイツリッターの剣を持ったニコイチが滞空している。

(まさか、投げたんですか？自分の倍近くある機体を?)

半信半疑でそんなことを考えていると、

「!しまった！」

後ろのクロイツリッターは左腕をニコイチに向け、手首のミサイルを放とうとする。

「させません！」

各部のスラスターを吹かして瞬時に振り返り、アサルトマシンガンを向ける。

が、

「!？」

ライカが銃口を向け切る一瞬前、ニコイチは右腕を後ろに引き、持っている剣——10メートルのニコイチが持つと途端に大剣に見えるそれを槍投げの要領で投げつけ、クロイツリッターの左脇腹から胴部を深く貫かせる。

(やはり投げたのか……見かけより馬力がある)

左腕を伸ばしたまま固まって墜ちていくクロイツリッターを見ながら、ライカは心底納得する。

「助かりました」

『お礼は後。来ますよ』

光秋の言葉に応じる様に、3本の銃撃が2人に襲いかかる。

撃ってくる内の1機に狙いを付けると、ライカは距離を保ちながら牽制をかける。

(先ほどから掠りもしていない。気を引く為なのか、下手なだけなのか……分かりませんね)

狙いをつけたクロイツリッターを中心に、大きな円を描くように回り込む。アサルトマシンガンを単発モードに切り替え、1発1発を丁寧に撃つ。

予備の弾倉は2つ。それが尽きるか、マシンガンを破壊されたら、あとは格闘戦になってしまう。

そんなことを考えた直後、

(……え……!?)

ライカは一瞬、頭の中が白く瞬いたような感覚を覚える。

(今度は“当たる”)

敵機の銃口を見た瞬間、何故か確信に近い直感が脳裏を過ぎつた。

その直感に従い、ライカは倒していたスロットルレバーを引き戻し、メインスラスタの推力を落とす。すぐに両方の操縦桿を引き、ペダルは踵の方に踏み込む力を入れる。

直後にやってきた車の急停止のような慣性に歯を食い縛り、ライカの視界からクロイツリッターが遠ざかっていく。

遠ざかっていく視界と共に、クロイツリッターから放たれた銃撃がライカの真横を通過していく。もしあのまま牽制を続けていたら、今の攻撃はこの機体の排熱ダクトを貫き、近い内にオーバーヒートを引き起こしていた。

(何? さっきのは……?)

まるで今のシチュエーションを知っていたかのような動き。

とりあえずライカはこの感覚の考察を後にして、戦闘に集中することにする。

レーダーを見ると、現在の状況は1対3。クロイツリッターの1機がライカを真正面から相手取り、もう1機が左側面を押さえる。最後

の1機が粘りのある支援射撃をするという布陣だ。危惧されるのは十字砲火に晒されること。

何とか離れるべく、ライカは射撃用のパターンを選択しようとする。ソールのタッチ画面を開こうとする。

その時、また不可解なことが起こる。

「<sup>アサルト</sup>突撃!? 何ですか、これ……!?!」

これが示すことはつまり、突撃が最適ということだ。確かにそれも選択肢として考えていた。だが、機体の損傷は確実だったために敢えて除外していたのだ。

「……………上等」

ライカは謎のパターンをタッチし、ペダルを限界まで踏み込む。

「っ……………!?!」

瞬間、襲いかかってくる強烈なGに一瞬気を失いそうになる。

相対距離にして600はあったというのに、もう手を伸ばせば届きそうな距離まで詰めていた。

当然、クロイツリッターが発砲してくる。

しかし、ゲシユペンストは更に加速し、左腕のプラズマバックラーを起動させる。更に全身各所のスラストが点火し、それによって上下左右に細かく動き、被弾を最小限に抑えていく。

(無茶苦茶な機動……………)

そんな状況でも、ライカは冷静に左操縦桿を一瞬だけ引き、すぐ前に倒しす。思い描いたタイミングで、ゲシユペンストは左腕をクロイツリッターの胴体に叩き込む。

1発、2発、3発。

すぐにプラズマが引き起こした小爆発がクロイツリッターの胴体を蹂躪していく。

ライカはすぐにスクラップの後方にいるクロイツリッターへアサルトマシンガンを連射し、接近しづらくする。今の戦闘機動を見れば迂闊に來ないだろうが、念には念を込めた。

顔を動かし、左のクロイツリッターをロックオンする。

と、メインモニターに赤い枠が8つ映し出される。両手首と両脚部



から放たれたミサイルということに気づくや、一旦後方に下がる。

下がりながらライカは向かってくるミサイルを照準内に収め、

「……今度はおかしなことは起きないようですね」

トリガーを引き絞り、着実に1発ずつ落とすとしていく。

全弾撃ち落とすと、ライカはアサルトマシンガンのアンダーバレルをミサイルを撃ったクロイツリッターへ向ける。敵はジグザグに動いたり、上下させたり、なかなか照準に入らない。

(速い……. . . . . だけど)

徐々に照準に収まっていく。

横から別のクロイツリッターの銃撃が飛んでくるが、敵は自機より低い位置から撃っているので無視。

(もう少し……. . . . . インサイト)

照準が合った瞬間、迷うことなく人指し指のトリガーの1つ下にあるボタンを押す。アサルトマシンガンのアンダーバレルから、対PT用榴弾が放たれる。

反動で一瞬立ちくらみに似たような感覚を覚えるものの、すぐに意識を敵機へ向ける。

鋭く空を裂き、弾はクロイツリッターから メインモニター 眼を奪う。

(もう一撃)

そんな考えを持っていた時点で、ライカは自分の精神状態を冷静に振り返るべきだった。

「……しまった」

アラートに気づかなかつた。

そんな初歩的なミスをしてしまったことに気づいた時には、既にクロイツリッターの接近を許していた。

マシンガンを腰のハードポイントに納めて剣を引き抜くモーシヨンをメインモニターで確認しつつ、ライカは操縦桿を握る力を強める。

クロイツリッターのツインアイが妖しく光ったように見えた。

「私に インフライト 接近戦を挑みますか……」

ペダルを踏み込み、メインスラスターを最大出力まで持つていく。

再び意識を刈り取らんと強烈なGがライカの体を襲うが、今度は耐えきった。

「ゲシュペンストの機体剛性を以てすれば……！」

大質量同士がぶつかった結果、双方が大きく機体を仰け反らせることとなった。

クロイツリッターとゲシュペンストの前部装甲がひしゃげる。

ダメージコントロールもそこに、ライカはすぐさま十字架が描かれたクロイツリッターの胸部へプラズマステークを叩き込む。

(最後の1機)

敵機の沈黙を確認するや、先ほど頭を潰したクロイツリッターを探す。

直後、

「!」

アラートが鳴り響いて後ろを確認するや、頭部の左半分を失ったクロイツリッターが剣を持ってこちらに突っ込んでくるのを見る。

(間に合え!)

すぐに機体を振り返らせ、アサルトマシンガンを向ける。

が、

「!?!」

指を掛ける直前にクロイツリッターは荷電粒子砲に撃ち抜かれ、ゲシュペンストの間近で爆発四散する。

『(無事で?)』

直後に開いた通信に、ライカは上空のユニコーン・白を見る。

その直後、

「!・ホワイト2、後ろ!」

白の背後を取ったレリオンに、ライカは声を上げる。

非特隊、ルミエイラ、所属不明機が混戦する空域から少し離れた所では、恭弥が光秋の命令に従ってルミナで援護射撃を加えていた。

「ええい!・当たらない!」

敵・味方が入り乱れる中に散発的にビームを撃つものの、未だ1発

も当たらず、敵機の牽制に終始していることに苛立ちを覚える。

と、

『!ホワイト2、後ろ!』

「!?」

ライカの声が通信越しに響くや、恭弥は上空に白の後ろを取ったレリオンを見る。

それからの行動は速かった。

「一夏君!」

叫ぶやスラスターを全開にしてレリオンの左下に迫り、左肩をぶつけて弾き飛ばす。

直後に放たれたレールガンは明後日の方向に飛んでいき、それで気付いた一夏は振り返るや雪羅でレリオンに殴りかかる。

巨大なグローブとも言うべき雪羅の拳で頭部を吹き飛ばされ、加えてシルフィードがぶつかったことで所々不調が生じたらしいレリオンは戦線離脱していく。

『恭弥さん!?!光秋さんからの命令は?』

「そんな言ってる場合じゃなかった!それに、君も言っただろう。僕ももう、守られてばかりじゃないんだ!」

困惑する一夏に、恭弥はやや興奮気味に応じる。

直後、

『ようやくやる気を出したか!シルフィードの操者よ!』そうしや

女の声が響くと同時にアラームが鳴り、上空からベネクティオが剣を振り下ろしてくる。

「!?」

咄嗟にルミナを出して受け止めるものの、ベネクティオの勢いに機体が押し出されてしまう。

『後ろでこそそこそそしているのが気に入らなかったが、やはりその機体の操者は自ら前に出てくれねばな!』

「!?!……貴女はシルフィードの何を知ってるっていうんだ!」

少々の喜びを含んだベネクティオのパイロットに怒鳴って返すや、恭弥は渾身の力を込めて相手の剣を押し返し、両肩の近くに装備され

ているレーザーキャノンを発砲する。1発ごとの威力は低く致命傷は与えられないものの、牽制程度には使える。

案の定ベネクティオは左手の盾で光弾を防ぎつつ、高度を上げながら後退する。

しかし、

『この程度！』

距離を取るやベネクティオは剣を射撃モードに変形させ、シルフィードにビームを放つ。

「！」

迫りくる光弾に、恭弥は思わず固まってしまう。

と、

『恭弥さん！』

叫び声と共に白がシルフィードの前に立ちはだかり、前に出した雪羅、その前面に張ったシールドでビームを打ち消す。

『何？』

その光景にベネクティオのパイロットは驚きつつも、すぐに次弾を連続で撃ち、さらにシルフィードと同じ位置に装備されているレーザーキャノンも連射する。

それら全ては雪羅に達する寸前にかき消え、なんの損傷も与えないものの、一夏の表情には徐々に焦りが浮かんでくる。

『恭弥さん。今の内に離脱して』

「え？ビームは防げるんじゃない……」

『このシールドそう長く張れないんですよ。使い過ぎると白白体が動かなくなるし』

「そんなー！」

一夏の説明に、恭弥はどうしていいかわからなくなる。

離脱しようにもベネクティオは未だビームとレーザーを撃ち続けしており、白の後ろから出れば途端に焼かれてしまう。その恐怖が、恭弥の次の行動を鈍らせるのである。

と、

(アダム、何故私たちに刃を向けるの?)

「え？」

唐突に聞こえた女の声に、恭弥は思わず辺りを見回す。

(また空耳か？こんな時に！)

自身の場違いな感じ方に、奥歯を噛み締める。

直後、

『ええい！罫があかない！』

ベネクテイオのパイロットが苛立ちの声を上げると、左手の盾の先を白とシルフィードに向ける。

左右の側面に2つずつ備えられたハッチの1つが開くと、

『!』

小振りなミサイル、否、グレネード弾が発射され、2機の許へ飛んでいく。

(ビームが止んだ？今なら！)

思うや恭弥は白の影から上体を出し、レーザーキャノンでグレネード弾を火球に変える。

しかし、

『!』

火球を突っ切ってベネクテイオが迫り、近距離から剣の銃身がシルフィードに、盾のグレネード弾発射口が白に向けられる。

(やられる!?)

そう思った直後、

『!』

『今です！離脱を』

背後から飛んできたクロイツリッターがベネクテイオに当たり、体勢が崩れた隙に恭弥は一夏に連れられて距離を取る。

『な、なんだ？』

戸惑いながらもベネクテイオは体勢を立て直し、再び恭弥たちに銃身を向ける。

が、

『!』

いつの間にか接近していたニコイチが右拳を放ち、寸前に盾で防ぐ

ものの後ろに吹き飛ばされてしまう。

『そんな……馬鹿な!?……』

大きな凹みができた盾と周囲の状況——クロイツリッターの全滅を確認し、ベネクテイオのパイロットは驚愕の声を漏らす。

『たった4機、否、実質3機にクロイツリッター12機が全滅だど？お前たち、何者だ!?!』

『非常事態特殊対策部隊、通称・非特隊。その主任……とりあえず、「白い犬」、とでも名乗っておきましょうか。すでに勝敗は決まりました。これ以上は無駄死にですよ。大人しく投降しなさい』

光秋の呼びかけに合わせて一夏と、近くに移動してきたライカが各々の射撃武器をベネクテイオに向け、それに倣って恭弥もルミナの銃身を向ける。

しかし、

『誇り高き騎士の末裔である私が、敵に降るなどできるか!』

叫ぶやベネクテイオは残り3発のグレネード弾を乱射し、それを避ける為に非特隊が体勢を崩した間に戦線離脱する。

ある程度距離を取ると、ベネクテイオの前に現れた時と同じ穴が開き、入るやすぐに消えてしまう。

「逃げた、か………」

ベネクテイオの離脱を以てこの空域での戦闘は終了し、そのことを理解した恭弥はルミナの刃を閉じながら安堵の声を漏らす。

『結局逃げられたか。ルミエイラつてのにも、所属不明機にも……もつとも、追える余力も無いですが』

「ですね……」

愚痴る様に呟く光秋に応じつつ、ライカは最後のレリオオンが戦線離脱する様子を眺めている。

混戦の中で被弾したのか頭部は無く、足取りもどこかぎこちない。

「……どこの部隊なんでしょうかね」

そう呟きながら、ライカは徐々に小さくなっていくレリオオンをターゲットに入れてみる。

その瞬間、

「な……!?!? また!?!」

再び異常が発生し、すぐに機体のコンディションチェックをする  
が、ウィンドウを開いたライカはその内容に言葉を失う。

『CeAFoS』起動……。シーフォス……。なんの事?」

答えはすぐに返ってきた。

「何ですかこれ……!?!? 機体の制御が!」

両肩部スラスター下と脇下のハッチが開かれ、スラスターが現れ  
る。

ペダルを踏んでもいないのに推力が上昇し、ゲシユペンストは手負  
いのレリオオンへ真つ直ぐ向かい始める。

『バレット1? 何を!?!』

「機体が勝手に!……バックラーが起動した……まずい……!」

顔に汗を浮かべながらライカは動力供給をカットしようとするが、  
反応は無し。ならば、と強制停止のコードを打ち込むも、まるで聞く  
耳を持たないようだ。

「う、わああ……!?!」

いくつものイメージが脳裏に浮かんでくる。ちらちらと、まるでス  
ライドショーのように場面が変わっていく。そのどれもが、今この状  
況と酷似していた。

「これは……さつきと同じ……!?!」

堪らずヘルメットを脱ぎ捨てる。脱いだ瞬間、氾濫しそうなイメー  
ジの海を抜け出せた。

が、機体はレリオオンを猛追するのを止めない。

いろいろ試したが、それでも帯電したステークがレリオオンの背部に  
迫るのを止められない。

「駄目——!?!」

思わず絶叫し、駄目もとで操縦桿を一杯に引く。

その直後、

『ミヤシロ中尉いいい!』

赤い尾を引いたニコイチが2機の間割って入り、節々から赤い燐

光が漏れる右腕でゲシュペンストの左腕の軌道を逸らす。同時に左腕を胸部に当て、増設されたスラスト出力にも負けない力で機体を押し止める。

ステークが3回爆ぜる間にレリオンは完全に離脱し、機体のクールダウン強制冷却が始まる。

水蒸気に機体が包まれる中、燐光が消え、節々がカバーに覆われたニコイチが頭突きのように頭部を押し当ててくる。

『何してるんですか貴女は！戦闘能力を失った者を攻撃するなんて、虐殺ですよ！』

「暴走……？ いえ、それにしても無駄が無さ過ぎる……！」

光秋の怒声にも気付かず、ライカは未だ混乱する頭でなんとか状況を理解しようとする。

そんな様子と、映像越しの顔色で察してくれたのか、光秋は機体を揺すってさつきよりも冷静な声で呼びかける。

『ミヤシロ中尉』

「え？……はい」

『とりあえず、輸送機に向かいます。ちょうど迎えが来てくれた様だ。そのまま伊豆に向かいます。詳しいことは機体を降りてから話しましょう』

「……了解」

『ホワイト2、バレット1の牽引を。冷却はまだ終わらない様なので』  
『わかりました』

光秋の指示に応じた一夏がゲシュペンストの右腕を肩に回し、そのまま怪我人を介抱する様に光秋が手配を頼んだ輸送機へ運んでいく。輸送機に接近するまでの間、ライカは操縦桿から手を離そうとしない。

「あ……」

ふと耳を澄ましてみると、未だに続いている排熱の音が、まるで泣いている様だった。

もちろん聞き間違いかもしれない。

だが、今のライカには不思議とそうとしか聞こえなかった。



輸送機・レイディバードに接近した恭弥は、光秋からの通信を受け取る。

『ホワイト3、君が先に着艦しなさい。人型機動兵器ならそうでもないですが、離艦より着艦の方が難しいので、充分注意するように』  
「了解」

応じると、恭弥はシルフィードをレイディバードの後部に寄せ、速度に注意しつつ慎重にハッチをくぐる。

「ふうー……」

両足を床に着いて完全に着艦すると安堵の息を漏らし、奥のハンガーにシルフィードを納める。

ハッチを開いてコクピットから出ると、冷却を終えたゲシユペンストが滑らかな動きで着艦するのを見る。

「上手いもんだなあ。さつきはどうなるかと思ったけど」

そんな感想を呟くと、恭弥はワイヤーを伝って格納庫に降りる。

シルフィードの向かいのハンガーにゲシユペンストが納まると、白がシルフィード同様やや慎重な動きで着艦する。

それと同時にゲシユペンストのハッチが開き、恭弥と同じパイロットスーツを着たライカがワイヤーで降りてくる。

(……美人だなあ)

それが、ヘルメットを脱いで顔つきがよくわかるようになったライカに対する恭弥の第一印象である。

黄色系の特徴を備えた顔は若々しく、昨日までの自分がそうであったように学生と言っても通用するだろう。程よい長さに伸ばした黒に近い赤毛はザツクリとまとめられており、犬の尻尾の様な愛らしさがある。

そうして見惚れている間に白がシルフィードの隣のハンガーに納まり、狭いハッチを器用にくぐって白式を着けた一夏が降りてくる。恭弥のそばに來ると一瞬輝き、次の瞬間にはスーツ姿で佇んでいる。

「すごいね、ソレ」

「白式。白と同じ俺の相棒です」

「今の装備が一瞬で消えたの、新しいEOTですか？」  
ワイヤーから降りて2人の許に歩み寄ってきたライカも話に加わる。

「え？……ええまあ、そんなところで……」

「？……」

言葉に困った様に応じる一夏に、恭弥は首を傾げる。

それをあまり気にせず、ライカは話を続ける。

「ライカ・ミヤシロ中尉です。危ないところを助けていただきありがとうございます」

「いえ、仲間を助けるのは当たり前ですから。あ、織斑一夏曹長であります」

「桂木恭弥……一応曹長であります」

頭を下げて礼を言うライカに、2人は少し照れながら応じる。

「仲間』、ですか……」

「……」

どこか悩ましい顔で一夏の言葉を反復するライカに、恭弥はまた見惚れてしまう。

その間にもニコイチが着艦し、3人のすぐそばに膝を折ると、ワイヤーを伝って光秋が降りてくる。

降りるや光秋は3人に背を向け、懐から出したなにかをニコイチに向けて光線を放つ。光線が当たるとニコイチは光秋の手元に吸い込まれ、手に持ったなにかを懐にしまう。

(ま、どっかから出したんだから、当然どっかに消せるよな……)

すでにこの手のことに慣れつつある恭弥がそんなことを考えると、光秋は3人の方へ振り返る。

「改めまして、非特隊主任の加藤です」

「ライカ・ミヤシロ中尉であります。先ほどは危ないところを助けていただき、ありがとうございます」

光秋の挨拶に、ライカは敬礼で応じる。

「いいえ。当然のことですよ……それで、さっきのあれはなんですか？」

少し間を置いて、光秋は鋭い視線を向ける。

「私にもよくわかりません。レリオンに照準を合わせた途端、機体が勝手に動き出して……止めようといういろいろやってみました。こちらからの操作を一切受け付けませんでした」

「暴走、ですか？……」

ライカの説明を聞いて視線の鋭さを収めた光秋は、腕を組んでゲシュペンストを見上げる。

「ま、それについては伊豆に帰ってからゆつくり調べますか。少なくとも、あれがミヤシロ中尉の意思でないことがわかっただけでひと安心です」

「……ありがとうございます。虐殺を意欲的に取り組む程、私は心に余裕を持つて戦闘はしていませんので」

「余裕、ですか……いや、それはいいか……さて、次は桂木曹長」

「は、はいー」

極僅かだが怒気を含んだ呼びかけに、恭弥は体を硬直させる。

「僕は確かに言いましたね？後方からの援護射撃をしろ、あまり前に出るなど。命令だと」

「はい……でも、ああしなければ一夏く……織斑曹長が危なかったから——」

「しかし結果的に、中途半端なところで怖気づいて彼と自分をさらに危険な目に遭わせた」

「それは……」

遮る様に言われた指摘に、恭弥は言い返せなくなる。

「いいですか。僕たちはチームで動いてるんです。1人が勝手な行動を取れば全員に危険が及ぶ。君も組織の一員になった以上、それだけによく覚えておいてください」

「……………はい」

決してわからないことを言われたわけではない。わかることだからこそ、恭弥は俯いて力無く応じるしかない。

と、

「とまあ、大人として、上官としての説教はここまでにして……ここか

らは私人としての言葉です」

言いながら光秋は表情を和らげ、恭弥の両肩に手を置く。

「やり方に問題はあったが、仲間を守る為に進んで行動する奴は好きだ。ますます気に入った。今後は『恭弥君』と呼ばせてくれ」

「え？……あ、はい！」

突然の態度の変化に戸惑いながらも、恭弥はよく通る声で応じる。

「そういう気持ちは大事にしなさい。もつとも、技量が追いつかなければ元も子もないからねえ……伊豆に戻ったら楽しみだ！」

「！……」

最後の方は悪寒を感じさせる笑みで言うと、光秋は手を離して一同を見回す。

その間に恭弥は、隣の一夏に耳打ちする。

「ねえ、シユウさんてさ……まさかのS？」

「いや、俺もそこまでは……」

「さて」

そこで光秋が話し始め、2人は会話を中断する。

「諸々の確認はこれくらいにして、みんな疲れてる様だし休みますか。ミヤシロ中尉と恭弥君はキャビンに行きなさい。一夏君、悪いが白のкокピットに上げてくれ。僕たちはそこで寝よう」

「了解です」

「では、各自解散」

「！……」

光秋の言葉に一同が敬礼を返すと、ライカと恭弥はキャビンへ、光秋と一夏は白の許へ向かう。

白式を展開した一夏は光秋を抱えると、2人で白のкокピットに入る。

一夏が白式を解除している間に、光秋は携帯電話のアラームを設定する。

「……」

「大丈夫ですか？」

「なんとかねえ……やっぱりあれは、短い時間に多用するもんじゃないな」

疲れを浮かべる光秋に一夏は労いの言葉をかけ、光秋がそれに返すと、2人はそれぞれ脱いだ上着を掛け布団代わりにして横になる。

「僕は報告書書かなきやいけないから途中で起きるけど、一夏君は伊豆に着くまで寝てていいから」

「そうさせてもらいます。おやすみなさい」

「おやすみ」

お互い欠伸混じりに言つて少し経つと、2人は完全に寝入つてしまふ。

それだけ疲れていたということだろう。女性と2人きりになった年頃の男子の心情に頭が回らないくらいに。

キャビンに移動したライカと恭弥は、疲労感から着替えもせずそれぞれ簡易椅子に体を横たえる。

イメージの海が余程負担だったのか、ライカはすぐに熟睡してしまふ。

が、

「……」

向かいに寝転ぶ恭弥は、疲れているにも関わらず、目の前の光景の所為で寝付くことができない。視線の先には、自分と同じ体のラインが浮き出るパイロットスーツを着たライカがいるからである。

自己主張の少ない引き締まった体は、猫の様な妖しい魅力を与えてくる。若々しい顔つきは、束ねた髪と合わさつて美しさの中にも可愛さを感じさせる。規則正しく繰り返される寝息は、軽く目を閉じた寝顔と相まつておとぎ話の姫君の呼び声に聞こえてくる。そして……要するに、恭弥はライカに一目惚れしてしまったのである。

(……………いけない！)

流石にこのままではいけないと思い、とりあえずライカに背を向ける。

が、そうすると寝息だけが聞こえる所為で余計にいろいろ考えてし

まう。

(ど、どうする？どうする恭弥？………。そ、そうだ！こういう時は円周率を数えればいいだ。なんかでそう言ってた。よし！………。3・14!3・14!3・14!3・14!………。)

3 桁だけの円周率が、恭弥の頭の中を延々と回り続ける。

こうして眠りについた3人と妙に興奮している1人を乗せたレイデイバードは、ライカがもともと乗っていた機の後を追って一路伊豆基地を目指すのだった。

## 6 伊豆、到着

空に空いた穴をくぐると、ベネクテイオは広大な格納庫らしき所に出る。

野球場ほどの広さを壁で細かく区切り、その壁の両側には整備中のクロイツリッターを納めたハンガーが無数に並んでいる。

格納庫の一番奥にあるベネクテイオ専用のハンガーに機体を納めると、操縦席に座る少女——甲冑の上に金刺繍のマントを羽織ったアリアは通信を繋ぐ。

「グリム閣下」

『アリアかい。首尾はどうだった？』

モニターに映し出されたのは、水晶玉越しにアリアに指示を与えた若い聖職者の様な男である。

男——グリムの問いに、アリアは奥歯を噛み締めながら応じる。

「申しわけありません。クロイツリッター12機を失い、こちらは1機も墜とすことができませんでした」

『クロイツリッターが12機もか。ふむ……………』

「……………」  
考え込むグリムの沈黙に耐え切れず、アリアは思わず口を開いてしまふ。

「この様な失態、言い訳のしようがありません。かくなる上はどの様な処罰も——」

『いや、それはいい』

アリアの言葉を遮って、グリムは考え事の顔のまま続ける。

『僕が君に与えた任務は宣戦布告と威力偵察だ。君はきちんと布告し、その上でシルフィードの部隊と交戦して帰ってきた。少なくとも任務は果たしたんだ。気に病むことはないよ。後で交戦記録をレポートにして提出してくれ。その後は休息を取るといい。以上だ』

言うやグリムの方から通信は切れ、コクピットは静寂に包まれる。

「……………ううー！」

それを破る様に、俯いたアリアから湿った声が漏れる。

(誇り高き騎士の末裔である私が、何の戦果も残せずオメオメと逃げ帰ってくるなど……敵に降ることは防げたが、そんなものがどうなるというのだ!) 「いつそ罰を与えられた方が……」

「気が楽か?」

「!?!」

突然かけられた声に、アリアは驚きのあまり涙を止めて声のした方を見ると、乗機と同じ「ベネクティオ」の名を持つ赤毛が操縦席の左側に背中を預けて佇んでいる。

「いつからいた?」

涙を拭うや、険しい視線を向ける。

「初めて会った時に言ったはずだ。俺は常にお前のそばに……それと、お前は一度の失敗で心が折れる弱い奴か?」

「何?」

ベネクティオの挑む様な視線に、アリアの目がますます険しくなる。

「確かに今回は散々な結果に終わった。今回はな」

「?……」

「お前は連中のやり方を直に感じた。そして生きて帰ってきた。それは連中の手の内を、その一端を知ったということだ。少なくとも、次がどうなるかはわからない」

「……次……」

なんの変哲もない言葉。しかし今のアリアにとっては、一筋の光の様な言葉を呟いてみる。

「……そうだ。これで終わりはいしない。次こそはシルフィードを、そして白い犬を、非特隊と名乗ったあいつらを!」

拳を固く握り締め、アリアは打倒非特隊を決意する。

伊豆基地。

日本をはじめとする極東一帯の安全保障の中核たる連邦軍の一大拠点であり、さまざまな計画の本部が置かれている軍全体にとっても



要所といえる基地である。

そして現在は、非特隊の本拠地が置かれている。

基地に着いた非特隊一行は、真つ先に降りてどこかに行つた光秋を除いて、レイデイバードから機体を降ろして格納庫のハンガーに納め、入れ違いに集まつてきた整備兵たちを離れた場所から眺めている。

「こうやって並べて見ると、ゲシユペンストが一番傷ついていますね」

「まあね。敵機に体当たりしてたし……ふぁーあ……」

「それは恭弥さんでしょうか？ていうか、ちゃんと眠れたんですか？」

「いろいろあつてさ。あんまり触れないで……」

(……始末書、書いておいてよかつたかもしれませんね)

寝違えに顔を歪める一夏と寝不足気味の恭弥の会話を聞き、前面装甲がひしゃげたゲシユペンストを見ながら、ライカは手に持ったディスクを握り締める。

「私は司令に挨拶してくるので、加藤大尉にはそう伝えてください」

「了解です」

一夏が応じると、ライカは司令室へ向かつて歩き出そうとする。

が、直後、

「!?……」

コツ……コツ、と男性らしからぬ足音が聞こえ、3人は後ろを振り向く。

と、何とも珍しい光景が広がっていた。

「貴女にしてみれば初めましてかしら？ライカ・ミヤシロ中尉」

「……」

何ともちまつこい少女が手を腰にやり、これまた偉そうな態度で3人を見上げていたのだ。側頭部あたりで結ばれた栗色の髪が僅かに揺れている。

とりあえず挨拶をされていることに気づいた3人は、それぞれ敬礼をする。

「初めまして。本日付でこちらに配属となりましたライカ・ミヤシロ中尉です」

「織斑一夏曹長であります」

「桂木恭弥曹長であります」

「……えつと、失礼ですが、貴女は？」

3人を代表してライカが問う。

「良く聞いてくれたわね！私はメイシール・クリスタス、人呼んで天才開発者よ！」

少女——メイシールはそう言つて、演劇でもするのかというぐらい大げさに胸に手を当てる。サイズが合わなそうなダボダボの白衣が何だか笑えてくる。

とりあえず嘘を吐いているようには見えない。

(親の手伝いでもしてるのかな?)

(否、このパターンは……)

恭弥と一夏はそう考える一方、別の可能性を思い浮かべる。

しかし、ライカの疑問はそこにはなかった。

(……自己紹介する前に私の名前を?)

確かにこの少女は自己紹介する前に、自分の名前を言い当ててきた。

「不思議そうな顔してるわね。なら教えてあげる。私が、貴女を、ここに呼んだの。非特隊に推薦したのよ」

「……へ？」

メイシールは携帯端末を操作し、その画面に表示されているものを読み上げる。

「ライカ・ミヤシロ、21歳の10月30日生まれ。大陸遠征部隊に選出されると同時に中尉へ昇進。そして、大陸におけるDC残党一掃作戦時に撃墜、生死の境をさま迷っていたが奇跡的に回復し、現場復帰……と」

若干舌足らずな声で読み上げられたのは、ライカの経歴だった。

「……ミヤシロ中尉、今の話——」

「貴女……何なんですか？」

恭弥の言葉を遮る様に、ライカはメイシールに問う。

「何度でも言つてあげる。私が貴女をここに呼んだの。アレに……『シウルフツエン』に乗ってもらうためにね」

そう言つてメイシールが指差したのは、整備を受けている灰色のゲシユペンストである。

『シウルフツエン』、その単語の意味をライカは思い出してみた。

「ドイツ語で『泣いた』、でしたよね？」

「そう。あの子の正式名称はRPT-007 量産型ゲシユペンスト Mk-II “シウルフツエン”。雑な直訳になるけど『泣き虫の亡霊』……つてどこかしら？ 心当たりはあるわよね？」

彼女の言葉でライカは、伊豆基地に来る前の戦闘を思い返す。

(……強制排熱の時の音は聞き間違いじゃなかった……)

「正直、驚いてるわ。初搭乗で『CeAFoS』に負けなかったのは貴女が初めて」

「あのシステムは……何なんですか？ 暴走、にしては随分と論理的でしたし」

「そりゃあ、そういうふうになつてもらわないと困るわよ。あれほど戦闘に特化したものはそう無いんじゃないかしら」

(あんなのが?)

そう言いたかったが、ライカは何とか言葉を呑み込んだ。

「……戦闘中に提示されたBMパターン、何故か見覚えのある脳裏に浮かんだ映像、極めつけはパイロットを無視した動作。……あのシステムは学習型コンピューターに分類されるようなものなのですか？」

「そんなもんね。ちなみにアレの正式名称は『Combat experience of the situation and assessment of forced output system』。頭文字を取つて『CeAFoS』よ。まあ、要するに戦闘経験の蓄積と状況の判断によってデータを強制出力させる装置のことね」

聞く人が聞けばメイシールの説明には何の不備もないのだろう。

だが、実際に搭乗してみたからこそ言える疑問があった。

「パイロットは？」

「機体がパイロットに合わせるんじゃないの。パイロットが合わせるものよ」

言ってることは無茶苦茶だが、これであるパイロットの耐久性を無視した機動には納得いった。

ライカは己の悪運を恨めしく思う。

(なるほど、既に篩ふるいに掛けられていたんですね)

「ま、後でいろいろ教えてあげる。それよりもランドルフ司令へ挨拶に行つたの？」

「まだです。すぐに行こうとしたら貴女に引き留められたので」

「……貴女もしかして私のこと嫌い？」

「はい。少なくとも……」

「ミヤシロ中尉——！」

「子供に何が解る？と言いたいくらいには」

言いたいことを察した恭弥が止めに入ろうとしたものの、メイシールの問いにライカは即答してしまう。

途端にメイシールの表情が曇る。

「なっ……いーあ、そー。そういうこと言っちゃう？」

意地悪そうな笑みを浮かべてきたが、ライカは動じない。

一つため息を吐いたメイシールは、白衣の内ポケットからカードを取りだし、突きつけてくる。

「な……!?!」

(やつぱり……)

カードに書かれている記述を目にして、ライカはついメイシールとそれを見比べてしまい、恭弥と一夏は予想が的中したことに肩を落とす。

ニヤニヤと意地悪そうな笑みを浮かべ続けていたメイシールはついに口を開いた。

「さて問題です。27歳でありながら少佐である私と、21歳で中尉のライカ・ミヤシロさん。どちらが上でしょーか？」

血の気が引く感覚を覚えながらもライカは今の状況を整理する。

背中に流れる冷や汗を感じつつ、ライカは姿勢を正し、答える。

「……数々の御無礼、お許しください。……クリスタス少佐」

「よろしい。さて、それじゃあ——」

「ああ、みんなまだいたか」

「……」

突然かけられた声に自分の言葉を遮られ、メイシールは不機嫌そうに声のした方を向き、3人もそちらに顔を向ける。

と、ライカと同じ白基調の連邦軍の制服に着替えた光秋が、右手にファイルらしき物を抱え、左手に紙袋を持って近づいてくる。

「……こちらは？」

「メイシール・クリスタス少佐。あのゲシュペンスト……えつと……」

「„シユルフツエン” よ！」

「ああ、„シユルフツエン” の開発者で、ミヤシロ中尉を非特隊に推薦した人……らしいです」

光秋の問いに、一夏はメイシールに怒られながら答える。

「ああ。貴女が」

「知り合いなんですか？」

「私は知らないわよ？こんなメガネ」

恭弥の問いに、メイシールは光秋にムスツとした顔を向けて答える。言葉を遮られたことをまだ根にもっている様である。

「申し遅れました。わたくし私こういう者です」

言いながら、光秋は持ち物を器用に保持して懐から名刺を出し、それをメイシールに差し出す。

「……作家が軍の施設になんの用よ？」

「あー！すいません、また……」

「……この人は」

「？……なんですか？」

「違う名刺出したんですよ。よくやるんです」

呆れた顔で呟く恭弥にライカが首を傾げ、一夏がそれに答える。

その間に、光秋は正しい名刺を改めて差し出す。

「こちらでした」

「……あなたが加藤大尉?」

名刺を一見したメイシールは、意外そうな顔をする。

「そうです。直接会うのは初めてでしたね」

「結局、知り合いなんですか?」

知った顔で応じる光秋に、恭弥が問う。

「非特隊の協力スタッフだよ。ミヤシロ中尉を推薦してきた時に少し相談した。といっても、その時はメールでのやり取りだったから、直接会うのはこれが初めてだけだね。以後よろしくお願いします。クリスタス少佐」

「こちらこそ」

一礼する光秋に、メイシールは無愛想に応じる。

そんなことにかかわらず、光秋は一同を見回す。

「さて、みんないるのならば、先に恭弥君の入隊式を済ませたい。外に出てくれ」

「僕のですか?」

「ああ。その為に辞令と制服持ってきたからね。近くの更衣室で着替えてきて。一夏君も。僕たちは格納庫のそばで待ってるから」

「……了解です」

「わかりました」

いきなりその場の主役にされたことに戸惑いながらも、恭弥は紙袋を受け取って最寄りの更衣室へ向かい、一夏は制服を取りに寄宿舎へ駆けていく。

それを見送ると、光秋はライカに向き直る。

「じゃあ、行きますか」

「いえ、私司令に挨拶に行こうと……」

「終わったら一緒に行きましょう。どの道僕も行かなくやいけないから。形だけだからそんなに時間はかからないと思いますし……だからこそ、1人でも多くの人に出て欲しいんです。非特隊のメンバーなら尚のこと」

(……それもそうか)「……了解しました」

少し迷いながらも、光秋の説明にライカは納得する。

「少佐はどうされます?」

「……それ終わらないと、司令室には行かないのよね?」

「そうですね」

「なら、ただ待ってるのも暇だし、出させてもらおうわ」

「ありがとうございます」

言葉通りただ暇つぶしの為に出る様子のメイシールに、光秋は深く頭を下げる。理由はどうあれ、1人でも参加者が増えるのは嬉しい様だ。

と、そのやり取りを聞いてライカに疑問が浮かぶ。

「少佐も司令室に行かれるのですか?何故?」

「何でって……間接的とはいええ、貴女は私の部下になるからよ?

やっぱり上司も行かなきゃ駄目じゃない」

メイシールの回答について立ち眩みを起こしそうになったライカは、もっとカルシウムを摂らなくてはと小さな決意をしつつ、光秋、メイシールに続いて格納庫の外へ移動する。

光秋たちが移動して少しすると、制服に着替えた恭弥が紙袋片手に駆け寄ってくる。

「お待ちせしました」

「ん。あとは一夏君だね。遠いから少しかかるか?」

光秋がそう言って少しして、制服姿の一夏が息を弾ませて駆けてくる。

「ぜー、ぜー……すいません……遅くなりました……」

「遠いから仕方ないよ。それより大丈夫か?」

「……なんとか」

光秋の心配に呼吸を整えて応じると、一夏はメイシールとライカが並んでいる所に移動して直立不動の姿勢になる。

一同の準備が整ったのを確認すると、光秋は入隊式を開始する。

「えーでは、略式ながら入隊式を始めさせていただきます。桂木恭弥、前へ」

「はいー」

若干の緊張を含んだ声で応じると、恭弥は光秋の許に歩み寄る。

光秋は脇に抱えていたファイルを開き、挟まれている辞令を読み上げる。

「桂木恭弥、本日付けで地球連邦軍への入隊、それに伴う曹長への就任、及び非常事態特殊対策部隊への所属を命じます」

賞状でも渡す様に光秋は辞令を差し出し、恭弥は両手でしっかりとそれを受け取って脇に抱える。

「おめでとう。これで君も連邦軍人だ。以後その“力”を連邦の為に活かして欲しい」

「はいー力の限り頑張りますー!」

台詞を読み上げる様に言う光秋に、恭弥は力強く応じる。

と、光秋は少しだけ表情を緩める。

「ん……ここからは、また私人としての言葉を送ろう……この先、いろいろ困難なことがあるかもしれない。だが、自分の信じたもの、成したいことの為に突き進んで欲しい。時には無茶してもいい。誰かに頼ってもいい。その代わり、必ず生き抜いて自分を通して欲しい……僕からは以上だ」

「……は、はいー!」

私人——光秋自身の言葉に多少戸惑いつつ、恭弥は敬礼で応じる。

そしてその言葉は、ライカにも聞こえていた。

(信じたもの、成したいことの為に突き進む、ですか………「私も、今度こそ」

「?……ミヤシロ中尉、今なにか言いました?」

「いいえ」

一夏の問いに即答しながらも、ライカは小さな宣言を胸に刻む。

と、光秋のよく通る声が響く。

「以上で、入隊式を終了させていただきます。以後、頑張ってください」

「……」

締め言葉に、ライカ、一夏、恭弥は敬礼で答え、



「……終わったらかしら?」

メイシールが退屈そうな顔で訊いてくる。

「はい」

「そ。なら行くわよ」

光秋が応じるや、メイシールは司令室へ向かい、ライカもそれに付いていく。

光秋もそれに続こうとするが、すぐに足を止める。

「そうだ一夏君。この後恭弥君に剣術の稽古をつけてくれ」

「俺がですか!？」

突然の頼みごとに、一夏は意外そうな顔をする。

「この中で剣術に一番詳しいのは君だからね。頼むよ」

「はあ……」

「いや、でも……ロボット操縦するのに剣術なんて……」

恭弥が面食らった顔をする。

「シルフィードは剣術を主体とした格闘戦向けの機体のようだし、操作系の特徴を考えたら恭弥君自身の体にも覚えさせた方がいいだろう。それに、生身でもやり合える力を付けておくに越したことはない。というわけで、あとよろしく」

言うとき光秋は今度こそ歩き出し、先に行くメイシールとライカの許に駆け寄る。

司令室へ向かう3人の背中を見送ると、恭弥と一夏は顔を見合わせる。

「……とりあえず、言われた通りにしますか。俺と部屋一緒でしたよね。荷物置いたら道着と竹刀借りて道場行きましょう」

「だね。シユウさんも言うことも一理あるし、上官からの指示だし……」

互いに頷くと、2人は並んで歩き出す。

「それにしても、クリスタス少佐って終始僕たちのことを蚊帳の外に置いてたよね。なんか苦手だなあ」

「俺はデジジャブを覚えましたよ。なんだろうってよく考えたら、知り合いにあんな感じの人がいたなって」

「そうなの？」

「もつとも、背丈も奇抜さもその人の方が上だと思えますけどね」

「ふーん……世の中、いろんな人がいるんだね」

そんな会話をしながら、2人は寄宿舎へ向かう。

司令室へ向かう間、光秋がシユルフツェン、及び『CeAFoS』について問うと、訊かれたメイシールは先ほどまでの不機嫌が嘘の様にライカたちに話したことを嬉々として語ってくれる。相手が誰であれ、自分の作品に興味を持ってくれるのは嬉しいらしい。

「……つまり、勝手に動いたのは暴走ではなく、積んであったものが正常に機能した為、ということですか？」

「そういうこと」

光秋の質問にメイシールが胸を張って応じると、一行は司令室の前に着く。

光秋が代表して衛兵に要件を伝えると、ドアがゆっくりと開かれる。

「失礼します」

部屋に入るや光秋とライカは、机に座ってこちらを見据えている将官用の黒い制服を着た白髪の老人に敬礼をする。

特にライカは、地球連邦軍・極東方面軍司令官でありながらここ伊豆基地の司令であるレイカー・ランドルフを前に多少の緊張を感じていた。

「加藤光秋大尉、横浜での一件の事後処理、及びミヤシロ中尉の救出を終えてただいま帰還しました」

「了解した。御苦労だったな」

「本日付で配属となりましたライカ・ミヤシロ中尉です。よろしくお願ひします」

「歓迎しよう。……早速だが、2人の報告書は読ませてもらった。説

明をしてもらおうか。まず、加藤大尉」

「はい」

(前もって書いておいたのが役に立った……)

内心安堵するライカの隣で、光秋は説明を始める。

「報告にも書きました様に、突然現れた集団は自らを『ルミエイラ』と名乗りました。その行動の意図は未だはつきりしていませんが、連邦に挑戦していることは確かです。他の勢力の動向と合わせて注意する必要はあります」

「そうなるだろうな。もつとも、情報がほとんど無い現時点ではどうすることもできんが……とりあえず、回収したルミエイラ機の解析を急がせよう」

「よろしくお願いします」

光秋が一礼して応じると、レイカーは視線をライカへ向ける。

「次にミヤシロ中尉、君を襲った所属不明機について聞かせてくれ」

「はい……私見ですが、自分は新手のテロリストではないかと考えます」

「中尉。私は中尉の口からもう一つの可能性を聞きたいのだが？」

底冷えのするような視線がライカを射抜く。

(……そうか)

と、ライカはあっさり理解した。自分は今、レイカーに試されているのだと。

「DC 残党的な『何か』ではないか、そう考えています。機体から察するに、恐らくイスルギ重工からバックアップを受けているのは確実です」

「毒にも薬にもなる、というのはあそここのことを言うのだろうな。」

……ライカ中尉。今回の件だが、もう一つ気になることがある」

(ついに来たか)

ライカは腹を括る。

不備がない報告書というのはつまり、自分のやったことが全てさらけ出されているということだ。当然、例の件もしっかり記述されている。

「何故最後の1機を撃墜しようとした？」

「……それは」

「私から説明しますわ」

今まで後ろで黙っていたメイシールが前に出てくる。

「彼女の意思で墜とそうとしたのではありません。私の『CeAFoS』が敵機を撃墜しようとして……いいえ、本来なら撃墜できていたのです。余計な邪魔が入らなければ」

言いながら、メイシールは光秋を睨みつける。

「……」

当の光秋はあくまでも涼しい顔を維持し、その刺す様な視線を受け流す。

「『CeAFoS』だと？ あれはまだ使えるレベルではないと聞いていたのだが」

「……はい。ですから北欧から返してもらって調整をしたかったのですが、その前に今回の件が起きてしまいました」

そんな2人のやり取りにかかわらずレイカーは話を続け、鋭い眼光がメイシールを捉える。

お互い、軽く視線を交わしたのち、レイカーが先に引いた。

「……そうか、後で最新の報告書を私の所に提出してもらおうか」

「はっ。それに関連しての提案なのですが」

「何だね？」

「『シユルフツェン』のテストパイロットにライカ・ミヤシロ中尉を選びたいのです」

「……」

雲行きが怪しくなってきたとライカは感じる。レイカーと光秋の手前、あまり勝手な発言も出来ないので、黙って見ていることしか出来ないのが悔しかった。

「彼女は初搭乗で『シユルフツェン』を乗りこなしました。彼女には、『CeAFoS』完成を手伝って頂きたいのです」

（完全にやられた……）

思いつつ、ライカはメイシールの言葉を思い出す。

（「私が貴女を呼んだの」）

「……と、彼女は言っているが中尉、君はどうかね？」

この状況でそれを聞かれるとは。

ライカはとりあえず冷静になり、この場を見直す。

ここに居るのは、1人は自分よりも2つは上の階級の女——しかも、自分のプロジェクトに勧誘してきているときた。もう1人は自分より1つ上の男——しかし、この話に口を挟む様子は無く、ことの成り行きを見守ることに徹している。

ならば、もう答えは一つしかない。

「自分に来るのであれば、全力で取り組む所存であります」（決意から数十分でこれですか……）

諦めるしかなかった。メイシールが付いてきた時点でライカの負けは決まっていたのだ。入隊式での宣言から数十分後の早い挫折に、我ながら呆れてしまう。

「あら嬉しいことを言ってくれるわね。今後はよろしく頼むわ。ライカ」

そんなライカの気持ちとは反する様に、メイシールは満面の笑みを浮かべる。

「話はまとまった様だな」

言いながら、レイカーは3人を見回す。

「すでに聞いていると思うが、非特隊は私の直属部隊となる。もつとも、実質的な指揮は加藤大尉に一任しているがな。以後頑張って欲しい。以上だ」

「はい！」

レイカーの激励に、光秋とライカは敬礼で応じると、振り返って部屋を出ようとする。

が、すぐにレイカーは付け加える。

「それとクリスタス少佐」

「はい？」

「一つ忘れないでお願いしてもらおう。君のシステムは公には出来ない代物だ。結果を出せなければ開発は即打ち切りとなる。知っての通り、

我々は鬼やゴーストといった未知の敵との対峙を優先しなければならぬ。そんな状況で、不確かな物にいつまでも貴重な予算は割けないのではな

「ええ、分かっていますとも」

(……………)

司令室から出る瞬間にライカが見たメイシールの曇った表情は、恐らく気のせいではなかったのだろう。

司令室を後にした光秋とライカ、メイシールは、廊下を歩いていた。  
「……………完璧に逃げ道を塞いでからのトドメとは本当に嫌らしいですね」

先ほどのお返しの意味も込めて、ライカはボソリとメイシールに対して攻撃を試みたが、肝心の彼女は反応しない。

「貴女なら気づいていたんでしょう？ 『CeAFoS』の最悪の事態を」

代わりに返ってきたのは質問だった。

「はい。あのシステムは有人ではなく無人向けのモノだと思えます。  
……………人間が扱えれば新兵でもたちまちエースになれるのは間違いないんですけど」

「そうね。分かっている。……………だけど、そうはしない、いやさせない。そうじゃなきゃいつか鬼にやられてしまうもの……………！」

「……………少佐？」

ただでさえ小さいメイシールの背中が、尚更小さく見えた。

彼女の放つ空気をライカは知っている。目的を達成しようとするマイナスのやる気。暗い、ひたすら暗い方へ向かっていく者の空気が。

と、

「少佐、お願いがあります」

司令室を出てから沈黙を守っていた光秋が、真剣な顔で話し出す。

『CeAFoS』の封印、ないしはリミッターを設定していただき

い」

「!」

「はあ?なにを言ってるの?」

唐突な、しかし自分も検討していた言葉にライカは意表を突かれ、メイシールは常識を疑う様な視線を向ける。

「僕は正直機械には疎いのですが、一連の話を聞いて感じました。『CeAFoS』は危険過ぎます。前回の戦闘でミヤシロ中尉に見られた負担といい、突然勝手に動き出す仕組みといい、共に戦う相手としては不安要素が多過ぎます。ご存じかと思いますが、非特隊はあらゆる脅威に対処する為に設立されました。それは他の部隊以上に危険に遭遇する確率が高いということです。だからこそ、不安要素は少しでも減らしておきたいのです。お願いします!どうか封印を!」

メイシールの視線にかかわらず一気に言い切ると、光秋は姿勢を正して深々と頭を下げる。

しかし、

「お断りよ」

メイシールはそっぽを向いて即答する。

「『シユルフツェン』は『CeAFoS』をテストする為の機体なのよ。肝心のシステムを封印したら意味がないでしょう」

「確かにそうですが、やはりパイロットの命には代えられません。ミヤシロ中尉は貴女の部下であると同時に、僕の部下でもあるんです。自分の部下が必要以上の危険にさらされるのを見過ごすことはできません」

「そんなのは貴方の独善でしょう?現にライカは自分の意思で私の誘いに乗ったわ!」

(……人を困らせておいて良く言う)

メイシールのあまりのふてぶてしさに、ライカは逆に尊敬の念すら感じてしまった。

「それはそうでしょうか?……ミヤシロ中尉はどう思います?」

「……私ですか?」

光秋から話を振られ、ライカは改めて自分の気持ちを伝える。

「私は……加藤大尉の意見に賛成します。大尉の仰る様に、『CeAF OS』は負担が大きく、集団行動を取る上でも向いていません。封印、せめてリミッターを設けてください」

「貴女まで……！」

ライカの本格的な反撃に、メイシールは唇を噛み締める。

「……いいえ、ダメよ。誰が何と言おうとリミッターは設けないし、封印なんて論外だわ。もしこれ以上この話を続けるなら、私はここで失礼させてもらうわ」

言うやメイシールは顔を背け、2人を置いて速足で進んでいく。

が、少し進んだところで一端足を止める。

「ただねライカ、これだけは言っておくわ。司令室で言ったことは本当よ。貴女と『シウルフツエン』の相性は私の知る限りで過去最高なの。私は『CeAF OS』を完成させるために、貴女を利用してもらうわ」

「……質問が」

「何かしら？」

「何故ゲシユペンストをベースに？リオンやガーリオンでも良かったのでは？ 更に言うならば確保しやすい量産型ヒュツケバインやルーク、サジタリウスの方が良いかと」

今の連邦軍にしてみれば、ゲシユペンストは最早型落ちした旧式でしかない。同じPTでも量産型ヒュツケバインMk-IIが正式採用された今、空にはAM全般、地上にはAD・ルークやPD・サジタリウス、そして場所を選ばないオールラウンダー機・ヒュツケバイン、これらが連邦軍の主力機だと言うのに。

ライカの質問は実にあっさりと返された。

「飛行能力のないADやPDでは『CeAF OS』の真価は発揮できない。使うならPTかAM。その中でもゲシユペンストは信頼に足る機体だと思った。だから、チューンした。質問は？」

「……ありません」

あまりにも淡白な返しであったが、言っている内容に何の疑問も湧かなかった。こんなところで自分と同じような意見を持つものとは



会えただけでも珍しい。

言うところを言うと、メイシールは振り返ることなく2人の許を去っていった。

(……ゲシユペンスト好きに悪い人はいない、ですね)

その背中を見ながらライカは、少しだけ、ほんの少しだけ、メイシールと仲良くなれそうな気がした。

そして、

「結局断られてしまいましたか……」

隣で右手を頭に添えて困った顔をしている光秋に視線を向ける。

「先ほどはありがとうございました」

「いいえ。少佐の仰る様に僕の独善みたいなものですし、見極めの途中だったとはいえ、司令室で何もできなかったことへの埋め合わせと思ってください……と言っても、断られては元も子もないんですが……」

頭を下げるライカに、光秋は途方に暮れた顔をする。

「『見極め』?」

『CeAFoS』に危険な感じを覚えたのは先ほども言いましたが、その上でミヤシロ中尉がどう出るか見ておきたかったんです。例えば良かれと思っても、中尉の意思を無視したらそれこそ「独善」になってしまうでしょう?中尉が自分の意思で少佐のプロジェクトに参加するならば挟みませんでした、どうも違った様なので……やはりお節介でしたか?」

「いいえ。寧ろ助かりました」

「ならよかった……しかし、これからどうするか……」

光秋は腕を組んで考え込み、ライカは顎を撫でる。

(……こうなったら)

「……もしかして同じことを考えてませんか?」

「大尉も?」

「当ててみましょうか。少佐に内緒で封印、最低でもリミッターを付ける。どうですか?」

「その通りです」

光秋の推測に、ライカは即答する。

「ばれたら大事おわこですね……でもま、中尉の命には代えられませんし。早速整備の方々に頼んでみますか」

「いえ、それなら私一人で——」

「なにをするかわかって止めなかった時点で僕も同罪ですよ。肝は冷えるけど、二人でやったことにしましょう。そうすればいざという時の恐怖も半分こで済みます」

「……よろしいのですか？」

「さつきも言った様に、埋め合わせと申ってください。早速」

言うや光秋は格納庫へ向かって歩き出し、ライカもそれに続く。

「ところで、中尉ってゲシユペンスト好きなんですか？」

「え？……」

唐突な質問に、ライカは一瞬返事に困ったものの、すぐに心なしか弾んだ声で応じる。

「いえ、好きというわけではありません……『愛して』いるんです」

「ハハ、そうですか……」

会ってから今までのライカからは想像できない熱の籠った返答に、今度は光秋が束の間戸惑う。

「ところで、何故そのような質問を？」

「深い意味はありません。少佐がゲシユペンストを評価する発言をした時、少し嬉しそうな顔をした気がしたので、好きなのかなって」

「ああ……」

「まあ、僕も好きですけどね」

「！本当ですか？」

「え？……ええ……」

「……！すみません……」

「好き」という言葉を聞くやライカは光秋に顔を寄せ、少々引いているのを見て慌てて離す。

「いえ、かまいませんが……やっぱり、あのデザインがツボですね。あつちこつち太くて力強い感じが……もつとも、僕が本当に好なのは

今の量産型じゃなくて、『元祖』というべきものなんですがね」

「『元祖』？ M k—Iのことですか？」

「いや、それとも違うんですが………どっちかっていうと、一夏君のに近いかな？」

「織斑曹長ですか？……」（何故そこで織斑曹長が出てくる？）

「……いや、この話はまたの機会にしましょう。とりあえず整備の方たちに頼んだら、昼食にしましょう。いい時間だし、早く行かないと食堂が混んじやう」

そう言つて話を切り上げると、光秋は歩く速さを少し上げる。

（加藤大尉……いまいち掴み切れない人ですが、今のことといい、救援に駆けつけてくれた時といい、少なくとも信頼に足る上官ですね）

それについて歩きながら、ライカは尊いものを見る目で光秋の広い背中を凝視する。

ライカたちが司令室で話していた頃。

体育館ほどの広さを誇る道場では、袴姿に着替えた恭弥と一夏が各々竹刀を持って向かい合っていた。

「それじゃあ僭越ながら、俺が指導役を務めさせていただきますが……確認しますけど、恭弥さん剣道の経験は？」

「小学生の頃に少しかじったくらいかな。中学に入ったら部活が忙しくてやめちゃったけど」（あの頃から胡散臭い話に付き合わされてるんだよな……）

「じゃあ、俺と似た様なもんか。俺も中学の時にバイトしまくってた所為で腕が鈍ったことがあって、再会した幼馴染に怒られたことがあったんですよ」

「いや、家への奉公と部活じゃ随分違うと思うけど？」

「理由じゃなくて、置かれた状況を言っただけですよ……俺の場合、その後その幼馴染が鍛え直してくれたお蔭でなんとか感覚を取り戻せたんですが。恭弥さんもまずは基本から復習していきましょう」

「はい。お願いします」

恭弥が頭を下げて応じると、2人は剣道の稽古を始める。

竹刀の振り下ろしから足運びまで、基礎となる動きを恭弥は何度も何度も繰り返し、時には一夏に修正を入れられながら徹底的に復習していく。

しばらくすると2人共汗だくになり、恭弥は道場の隅に腰を下ろす。

「この感じ……随分久しぶりだなあ」

懐かしい疲労感に、道着の袖で額の汗を拭いながら嬉しそうな声を漏らす。

と、

「恭弥さん」

「あ、ありがとう」

礼を言いつつ一夏が差し出したスポーツドリンクのペットボトルを受け取ると、恭弥はそれを一気に半分近く飲む。

「あー！運動の後はこれだねえ！」

「いきなり冷たいもの飲むと体壊しますよ」

恭弥の不健康的な行動を注意すると、一夏もいい具合にぬるくなったスポーツドリンクを一口飲む。

「ふうー……やっぱりこれくらいだな」

「そうなの？……それにしても、一夏君昨日の戦闘凄かったね。ガリオンのバリアーを斬っちゃうんだから」

「ああ。あれは俺じゃなくて、俺の相棒の『力』です」

「どういうこと？」

『『零落白夜』。それがエネルギー質のものならなんであれ無効化する、白式のワンオ……特殊機能です。白はその機能を引き継いで使えるんですよ』

「エネルギーの無効化……てことは、バリアーを斬ったのも、ベネクティオのビームを防いだアレも、同じ機能ってこと？」

「そうなりますね」

そんな会話を挟みながら2人はスポーツドリンクを飲み干し、稽古を再開する。

基礎動作の復習を一通り終え、防具を付けて打ち合いの練習をしていると、

「一夏君。恭弥君」

「……………光秋さん」

出入り口の前に立つ光秋の呼びかけに一夏が気付き、2人は面を外して歩み寄る。よく見ればその後ろにはライカもいる。

「そろそろ昼にしよう。食堂行くから着替えてきて」

「わかりました」

同時に応じると、2人は更衣室へ向かう。

「それにしても、恭弥さん上達早いですね。俺でも感覚取り戻すのにそれなりにかかったけど」

「そう？久しぶりの感覚になんかうきうきして！さつきはあんなこと言ったけど、始まってみるとやっぱり楽しいや！」

稽古の様子を見ての一夏の感想に、恭弥は生き生きと笑みを浮かべて応じる。

制服に着替えて道着等を返却した恭弥と一夏は、光秋とライカと共に食堂へ向かう。

昼時少し前に来たせいか席には余裕があり、注文を済ませた一行は1つのテーブルにまとまって腰を下ろし、各々トレイの上の料理に手を付ける。

「ところで恭弥君、調子はどうだった？」

「いい感じですよ。体動かすと楽しいし。一夏君の指導がよかったのかな？」

「俺は大したこととはしてませんよ。恭弥さんの筋がいいんだ。この分だと、その内俺が指導されちゃうかもな」

生姜焼きを摘む光秋の問いに、正面に座る恭弥は唐揚げを食べながら応じ、その右隣に座る一夏が白身魚の照焼きを食べる手を休めて言う。

(……………和気藹々とはこのことですね)

楽しそうに話す3人を見ながら、光秋の左隣に座るライカはカツ丼を口に運ぶ。

「……あ、そうだ」

恭弥はあることを思い出し、箸を置いて一夏に顔を向ける。

「遅くなったけど一夏君、あの時は助けてくれてありがとう」

「あの時？」

「僕が初めてシルフィードに乗った時。撃ち漏らしたミサイルを墜としてくれたでしょ」

「それなら私もですね。迫っていたクロイツリッターを墜としてくれてありがとうごさいます」

「あ、いや……」

恭弥とライカの礼に、一夏は言い辛そうな顔をする。

「……実は、あれマグレなんです」

「マグレ？」

予想外の返事に、恭弥は思わず訊き返す。

「たまたま危ないところが目に入って、あとは咄嗟に……俺射撃の腕いまいちだから、どっちも上手く当たってよかったです」

（……たまたまで助かったのか？ 僕……）

（そんなものですね）

意外な真相に恭弥はしばし呆然とし、ライカは特に気にする様子もなく食事を続ける。

と、

「……それにしても」

不意に光秋は表情を曇らせ、一同を見回す。

「機体といい、パイロットといい、見事に接近戦向けばかり揃ったな……」

「「あ……」」

嘆息混じりの一言に、恭弥と一夏は思い出した様な顔をする。

「その辺も追い追いなんとかしないといけませんね」

「ですねえ……救いなのは、ミヤシロ中尉が射撃の腕も立つということですね」

ライカの相槌に応じると、光秋は味噌汁をすすする。

「……いつそのこと、部隊の正式名『突撃野郎Aチーム』ってどうですか？」

「昔そんなタイトルのドラマありませんでしたっけ？」

「だったら不味くないですか？」

「あと私は『野郎』ではありません」

「言ってみただけですよ」

一夏、恭弥、ライカの感想に返すと、光秋はもう一口味噌汁をすすする。

「ま、その話はまたの機会に。ところで恭弥君、一夏君」

「はい？」

「午後からは座学で研修をやるから、食事が済んだらそこの売店で筆記用具買ってついてきて。使う部屋は非特隊の待機室でもあるんで、ミヤシロ中尉も一緒に来てください」

「了解」

光秋の指示に3人が応じると、一同は食事に集中する。

食事を終えた恭弥たち一行は、基地内の売店に寄って必要な物を買  
い揃え、非特隊の待機室へ向かう。

部屋に入るや、早速光秋指導の下、恭弥と一夏は研修を受ける。

膨大な軍規や非常時の対処法、諸々の兵器の知識など、正規軍に必要なことを休憩を挟みながらみっちり教え込まれる。

それらが一通り終わる頃にはすっかり夜になっており、一行は食堂で軽い夕食を摂るとシャワールームで汗を流して寄宿舍の自室へ向かう。

「はあ……頭から煙が出そうだ……」

「説明は丁寧だけど内容密ですもんね、光秋さん」

「……」

部屋に着くやTシャツと薄手のズボン姿の恭弥は三段ベッドの真ん中に体を投げ出し、半袖のシャツとズボンを着た一夏は携帯電話を

操作しながら一番上に胡坐をかく。パジャマ姿の光秋は部屋の隅で椅子に座り、文庫本を読みながら自分の世界に入っている。

士官である光秋には本来個室が与えられるものの、現在は部屋の余裕がなく、こうして三人部屋となっている。もつとも3人に不満はなく、今の様に各々自由に行っているのである。

「ところで、一夏君はなにやってるの?」

「ミコトさんにアドレスもらったんで、その登録と連絡を。今まで忙しくてできなかったから……よしっと」

興味を覚えた恭弥は上体を起こしながら問い、それに答えながら一夏はミコトにメールを送る。

その頃。

横浜基地寄宿舎の自室で、ミコトは習慣である新装備のアイデアを考えていた。

「んー……今日はなんかノリが悪いなあ……」

スケッチブックの上でペンを弄びながら、上手く回らない自分の頭に愚痴を漏らす。

(……そういえば、一夏伊豆に着いたかな?ちゃんとメアド確認してくれたかな?)

ペンを置いて顔を上げると、自然と一夏の顔が浮かぶ。

と、机の上の携帯電話が鳴り出し、すぐに手に取って確認する。

(メール?誰から……!)

「一夏です」の題名を見て、思わず携帯を落としそうになる。

「よ、よかったあ……!一夏ちゃんと登録してくれたんだ!……」

突然のことに動揺しつつも、懸案事項が解決されたことに一応安心する。

が、次の瞬間には画面を見つめて呆然としてしまう。

(……)で、これからどうすればいいんだっけ?よく考えたら私、メカ以外のことで男の子と関係持ったことなんてほとんど無いよね。アキヒロは守備範囲外だから参考にならないし……ていうか、そもそ



も私は一夏を『男』として見てるのか？どうなんだ？……………)

未だ形に成りきららない気持ちを持って余しながら、ミコトの夜は更けていく。

「…………さてと、そろそろ寝るか」

切りのいい所まで読み終えた本を閉じると、光秋は一番下のベッドにもぐり込む。

「最後の人、電気消してな。おやすみ」

「おやすみなさい」

そう言っ外したメガネを枕元に置くと、2人の返事を聞きながら光秋は眠りにつく。

「…………僕たちも寝るか」

「それがいいかもしれませんね。明日も早いし。おやすみなさい」

「おやすみ」

そう言と恭弥は灯りを消し、一夏と同時に布団を被る。

同じ頃。

宛がわれた士官用の個室に戻ったライカは、白いタンクトップとホットパンツに着替えた体をベッドに横たえ、今日のことを振り返っていた。

(決意から数十分で挫折しそうになったけど、加藤大尉が手助けしてくれた。あの人の許でなら…………非特隊なら、今度こそ私のやりたいことができるんじゃないか？私の心に正直に生きることが。少なくとも、それを許してくれる雰囲気はここにはある)

思いつつ、和気藹々とした食事風景を思い出す。

(…………あんな空気は、大陸遠征部隊では望めなかった)

連携はする、そうしないと自分がやられるから。僚機の危機は救う、そうしないと自分に攻撃が集中するから…………以前いた部隊の、そんな殺伐とした雰囲気は脳裏を過る。

(……嫌な事を思い出した。時間も時間だし、そろそろ寝よう。明日からは桂木曹長たちの操縦訓練の指導もしなくてはいけないのだから)

思うやライカはリモコンで照明を消し、布団を被る。

翌日から恭弥は、光秋による研修、ライカによる操縦訓練、一夏と共同の剣道の稽古を通じて、軍人として、戦う者として必要なことを身につけていく。

一夏という一緒に学んでくれる者がいるからか、きついことがあっても不思議と苦にならず、操縦訓練や稽古では上達する度に単純な喜びを覚える。

そんな日々が続き、伊豆基地に来てから4日後の朝。

道着と防具に身を包んだ恭弥と一夏は、面を脱いで道場の隅に腰を下ろしていた。

「この間はああ言ったけど、まさかこんなに早く追いつかれるなんて予想外でしたよ。俺結局一本も取れなかった……」

「僕からすれば、一夏君もすごかったよ。何度負けても、『もう一回! もう一回!』って諦めずに向かってきて。それでちよっとビビったくらいだもん」

若干息が上がっている一夏に、恭弥は打ち合いの時の様子を思い出して寒気を覚える。

と、

「それが一夏君の長所なんだろう。しぶといっていうのか」

両手にスポーツドリンクのペットボトルを持った光秋が、ライカを伴って道場に入ってくる。

「光秋さん?ライカさんも?」

「どうしたんです?今日の研修はさつき終わって、訓練は昼からでしよっ。」

「いくつか連絡ができた。あとこれ差し入れ」

「ありがとうございます」

2人の質問に応じつつ、光秋はぬるい方を一夏に、買ったばかりの冷たい方を恭弥に渡す。

「突然だが、もう少ししたら僕とミヤシロさん大陸に行かなきゃいけなくなった。明日には帰ってくる予定だが、それまで研修は中止、訓練も自主的に行うように」

「大陸ってあの？またどうして？」

スポーツドリンクをちびちびと飲みながら恭弥が問う。

「委員会ってあるだろう。連邦の企業にEOTを提供してる。そのの発掘基地に視察に行ってくれて」

「それ俺たちの仕事なんですか？」

『あらゆる脅威に対処する』を拡大解釈して、時にはこういう便利屋みたいなに使われることもあるんだよ。いずれにしろ、仕事ならやるまです」

スポーツドリンクを四半分ほど飲み終えた一夏の問いにも答える  
と、光秋は連絡を続ける。

「それと、今日これから非特隊に新メンバー……というか、一部隊加わることになった」

「一部隊？」

恭弥が目丸くする。

「新型IAD3機と専用母艦、それを運用する人員をまとめて寄こすと。もともとは別の部隊として設立されていたらしいけど、非特隊と目的が重なる部分があったから合流することになったらしい」

「IADって、1機って大部隊と戦えるっていうアレでしょ？それが3機か……少しは楽になりますかね」

光秋の説明に、一夏が率直な感想を述べる。

「さてね。ただ新型は新型でも特別製らしいぞ。確かネクスト、じゃなくて……ネクサス、でもなくて……えー、ネ、ネ、ネ……」

『「ネメシスタイプ」です』

「ああ、そうそう。ネメシスタイプっていうらしい」

ライカのフォローに、光秋はぽんと手を打って応じる。

「まあそういう訳だから、僕たちがいない間は合流部隊の艦長の指示に従うように。連絡は以上だが、なにか質問は？」

「ありません」

「俺も」

「そっか……」

2人の返答を聞くと、光秋はその場に腰を下ろす。

「それはそうと、2人とも操縦が様になってきたよな」

「確かに。2人共呑み込みが早いですね。教えたことを短い間に自分のものにする」

「いや、それほどでも……！」（『2人共』ってのが物足りないけど、ライカさんに褒められたよ！）

複雑な顔の光秋の呟きに、ライカも腰を下ろしながら素直に感心した顔で応じ、恭弥は照れながら心中に喝采を上げると、

「ありがとうございます……ただ……」

褒められたことに頭を下げつつ、一夏は遠くを見る目を向ける。

「竹刀を握る機会が増えた所為か、最近よく昔のことを思い出します」  
「昔のこと？」

恭弥が興味の日を向ける。

「子供の頃、姉に真剣で稽古をつけてもらったことがあるんですよ。その頃はまだ小さかったから、本物の刀なんか持つてるだけで精一杯でとても振えなかった。俺が歯を食い縛って刀を持つてる横で、姉が言うんです。『いいか、一夏。刀は振うものだ。振られるようでは、剣術とは言わない……重いだろう。それが、人の命を断つ武器の、その重さだ。この重さを振うこと。それがどういう意味を持つのか、考える。それが“強さ”ということだ』って……あの時の姉は、なんか眩しかったな」

「重さを振う意味を考える、か……」（重さ——人の命を断つ武器……僕にとってのシルフィード……）

一夏の言葉を反復しながら、恭弥の脳裏にはシルフィードが浮か

ぶ。

と、  
「心・技・体の一つの説き方ということかな。なかなか面白いお姉さんだな」

光秋が合点がいった顔をする。

「『心・技・体』？」

「僕なりの解釈だけだね。もともと持っている能力、これが“体”。それを効果的に活かす術、これが“技”。そしてそれらを制御し、時には歯止めも掛けるもの、これが“心”。これら3つが揃ってこそ、初めて人は正しくあれる……て言えればいいのかな？ “力”を持つ者のあり様と思ってくればいいよ。話を聞く限り、一夏君のお姉さんは特に“心”を重視していたと言えるね」

「はあ………」

「………」

小難しい理論で質問に答える光秋に、質問者である恭弥は圧倒され、ライカと一夏も遠い目を向ける。

直後、

「………」

基地全体に警報が鳴り響き、光秋の左耳の通信機に連絡が入る。

「はい？………了解しました。直ちに………緊急発進だ。横浜に鬼が出現した。全員直ちにパイロットスーツに着替えて格納庫へ向かえ」

「了解！………」

光秋の号令に応じると、一行は腰を浮かせて道場から駆け出ていく。

広大な神殿に置かれた円卓、その席の1つに腰を下ろすグリムは、アリアが提出した報告書の束の隅々に目を通す。

「………やはり僕たちの戦力だけでは力不足か………となると………」

独り呟くと、手元の水晶玉に手をかざして映像を映し出す。

それは街を蹂躪する異形の機動兵器——鬼の群れである。

「ついに動き出すのね」

「戦争？またいつばい戦える？」

いつからいたのか、グリムの背後に赤い長髪の少女と銀髪の少年が現れる。

歳は少女が10代半ばくらい、少年が10代初めくらいだろうか。もつとも、少女は歳の割に胸の自己主張が強く、大きく開いた胸元から2つのものが溢れ出ようとしている。

いずれもグリムと同じ純白の貫頭衣に身を包み、生き生きとした笑みを浮かべている。

「そうだよ。リイム、カース。ついに安息の地を手に入れる聖戦が始まる。が、出だしから障害にぶつかってね」

少女——リイムと少年——カースに応じつつ、グリムは言葉の割に嬉しそうな顔をする。さながら、難しいゲームを楽しむ趣味人のそれである。

「まずは協力者を募るとしよう。最初は……」

言いながら、グリムは水晶玉の映像に口元を細める。

「鬼の方々にあたってみようか」

## 7 敵か味方か？白き機械神頭れる!!

新西暦76年某日。

ある山奥の村が炎に包まれていた。

『ガアアアアアアア!』

燃え盛る炎に照らされ、赤、青、紫色の装甲を纏った巨大な機械――鬼数体が家屋を蹂躪し、逃げ惑う人々を炎で焼いていく。

悲鳴が辺りに響いたその時、雷と共に鬼たちの背後にナニかが降り立つ。

『ガア!?!』

人、いや、巨人が一步、また一步踏み出す度に、辺りの炎がその姿を照らしだす。

頭には桃を模したアンテナが左右に大きく広がり、その体を陣羽織を模した装甲、両腕には猿と犬、胸には雉の顔を型どったエンブレムが輝いている

ソレを見て鬼は本能的に恐れた。コイツだけは相手にしてはいけない、と。

『……お前が、お前がやったのかああああ!!』

陣羽織が金属音と同時に羽を広げた様になり、一気に加速する。

間合いを詰めたソレ――彼は拳を大きく振りかぶり、鬼を殴る。ひたすら殴る。

『ウオオオオオ！モンキーラッシュユ!』

『ガ、ガアア……ア……ア……ア……』

猿を模した拳の連激を受けた紫色の装甲は砕け散り、オイルを血のように流す鬼はふらふら後退りする。

彼が手をかざすと、光が集まり巨大な剣が現れる。半透明な刃には古代文字が刻まれ、構えると同時に輝きを増し、地面を蹴り空高く舞う。

『……悪鬼滅殺！オーガスラッシュユ!!』

大きく上段に構え、凄まじい加速と同時に紫の鬼の体を真っ向両断するや否や、鬼の残骸は大爆発を起こす。

しかし、彼の体は傷ひとつなかった。

『くそ、何で……何でこんなことに………ウアアアアアア!!』  
剣を地面へ突き刺し膝を着く彼の叫びが辺りに木霊すると同時に、ポツポツと雨が降り始める。その赤く輝く瞳から流れ落ちる雨水は、まるで涙の様だった。

この日を境に、世界各地に謎の機動兵器勢力——鬼が出没し、人々の住む場所を襲撃する事件が相次ぐようになる。

同時に、白い巨人が鬼の拠点を潰して回っているという噂が流れるようになった。

新西暦80年4月上旬。

伊豆基地を発したレイデイバードは、一路横浜を目指していた。

その格納庫には4機の機動兵器が納まり、その内の1機、シルフィードの操縦席に座るパイロットスーツに身を包んだ恭弥は、制服の上に防弾ベストとプロテクターを着けた光秋の説明をモニター越しに聞く。

『ランドルフ司令からの指示を伝える。現在横浜にて鬼数機が破壊活動を行っている。非特隊は現場に着き次第、非政府防衛組織・ヴァルキリーズと共にこれを鎮圧せよとのことだ。ちなみに、今回横浜基地からの援軍は期待できない。PDでは鬼にはまず敵わないし、航空戦力のリオンは前回の戦闘でほとんど大破してしまったからな』  
(鬼か……いきなり有名どころが来たな)

映像越しの光秋の緊迫した表情に、恭弥は知らぬ間に生唾を飲む。鬼の存在そのものはニュースでさんざん取り上げられていたので一般常識として知っているものの、実際に自分が戦う、しかも正規の軍人としての初陣の相手となれば、緊張するというのが無理な話である。

と、直後に非特隊全機にレイカーから通信が入る。



『諸君、急いでいるところすまないが、君たちの針路上の街で機動兵器によるテロが発生した。現場に一番近いのは君たちだ。隊の一部をそちらに向かわせて欲しい。詳しい判断は加藤大尉に任せる』

『こんな時にテロ……いえ、了解しました』

不満そうな顔をしたのも一瞬、光秋の意思を表す様に、シルフィードの正面のハンガーに納まるニコイチが3機を見回す。

『……よし。僕と桂木曹長が行く。2人は予定通り横浜へ向かえ。そっちの指揮はミヤシロ中尉に一任する』

『了解』

(テロ阻止か。よかった。鬼よりましだな。でも……ライカさんと一緒に戦えないのか)

光秋の指示に応じるライカの声を聞きながら、恭弥は少し残念に思う。

と、右隣のハンガーに納まるユニコーン・白を見やり、一夏にプライベートチャンネルを繋ぐ。

「一夏君」

『恭弥さん？今作戦中ですよ？』

モニターに映る×型のバレッタに白式を纏った一夏が、光秋たちの方を気にしながら小声で応じる。作戦中の私用無線は禁止とされている以上当然の反応といえる。

「わかってる。どうしても言っておきたいことがあってさ………ライカさんを頼んだよ」

『わかってますよ。仲間を守れなくて、なにが男だ！』

落ち着いた、しかし熱の籠った返答をしつつ、一夏は微笑みを浮かべる。

(男の友情ってやつかな?)

それにつられてか、恭弥も笑顔で親指を立てて応じ、ばれる前に通信を切る。

直後に光秋の指示が飛ぶ。

『送られてきた情報によると、そろそろテロの現場だ。桂木曹長、出撃準備を』

「了解」

努めて冷静に応じると、恭弥は光秋の後を追って開放された後部ハッチへ向かう。

『それじゃあ、そっちも気をつけて。ホワイト1、出ます！』

残った2人への気遣いを最後に、ニコイチは空へと飛び立つ。

（大丈夫。ライカさんが教えてくれて、一夏君と一緒に学んだ操縦なんだ。落ち着いて行けばやれる！）「ホワイト3、行きます！」

呼吸を整えるや恭弥はペダルを踏み込み、シルフィードを離艦させる。

『こっちだ。行くぞ』

「はいー」

光秋に応じると、恭弥はニコイチの後を追ってテロの現場へ向かうのだった。

数分後。

（もうすぐだな……）

徐々に近づいてくる現場を意識しながら、一夏はモニター越しに先ほどからずっと目を固く閉じているパイロットスーツ姿のライカを見る。

（精神統一ってやつか？……俺もやつとこうかな？）

そう思った直後、レイディバードの操縦士から通信が入る。

『間もなく現場上空に差しかけます。出撃の準備を』

『了解』

「了解」

目を開けて応じたライカに続いて返すと、一夏は白をハンガーから出して再び開放された後部ハッチに向かわせる。

右手にM90アサルトマシンガンを持ち、臀部にPT用のバズーカを、腰回りに各種予備弾倉を懸架した灰色のゲシュペンスト——シユルフツェンが右隣に並ぶと、ライカから注意を受ける。

『研修で習ったと思いますが、鬼は武装が強力で馬力もあります。充

分注意してください』

「了解です」(恭弥さんにも頼まれたんだ。俺がライカさんを守らないと)

恭弥との会話を思い出しながら、心中に決意を固める。

と、

『……一夏』

「はい?……てっ!?!」

ライカの呼びかけに応じて顔を向けるや、白の額にシユルフツエンの左手でデコピンが飛んでくる。白式と繋がっているケーブルを介して、一夏自身の額にも薄っすら痛みが走る。

『私の方がこの仕事長いですし、鬼とも何度か遭遇したことがあります。貴方が守らなければと気負う心配はありません』

「はあ……」(いつものことだけど、なんで俺の考えてることはすぐにわかるんだ?)

あくまでもリラックスさせるつもりで言っているライカに応じつつ、一夏はよく抱く疑問を思い浮かべる。

『それよりも、打ち合わせ通りに頼みますよ。期待しています』

「……はいー」(そうだ。一緒に戦うんだ……だったら、その期待に伝えてみせる!)

ライカの激励に決意を改めると、一夏は適度な緊張を含んだ目で機体の最終チェックを行う。

『……それでは。バレット1、出ます』

「ホワイト2、行きますー!」

同時にレイディバードを飛び立つと、2機は並んで現場へと急行する。

地上が近づくにつれて、煙を上げる建物や瓦礫の山、その中央に陣取る鎧をつけたゴブリンの様なPTほどの大きさを誇る機体——鬼たちがはつきり見えるようになり、照会されたデータが表示される。

『雑鬼が2、砲鬼が1ですか。典型的な組み合わせですね。砲鬼の荷電粒子砲には充分注意してください』

「了解!」

ライカの注意に一夏が応じると同時に、ヴァルキリーズ所属の鬼から回収した技術を流用したPTのスピノフ機種——戦機人<sup>せんきじん</sup>5機が降下してくる。

『その戦機人、聞こえますか？こちらは連邦軍非特隊所属のライカ・ミヤシロ中尉です。これより共同で鬼の鎮圧に当たります』

『ヴァルキリーズ極東支部第四分隊隊長のノゾミ・カワシマです。協力に感謝——』

「危ない！」

話しの途中にこちらに気付いた砲鬼が腹部砲口から荷電粒子砲を放ち、咄嗟に指揮官用戦機人の前に躍り出た一夏は雪羅のシールドでそれを防ぐ。

「大丈夫ですか？」

『え？……ええ。ありがとう。助かったわ』

パイロットの声を聞くと、一夏はシウルフツェンに視線を向ける。

「ミヤシロ中尉！」

『ええ。早く始めましょう。まずはあの砲鬼を。打ち合わせ通りに行きますよ』

「了解！」

念を押す様に言うライカに応じると、一夏は砲鬼に狙いを定め、雪羅の前に出し、ウイング・スラスタ―4基を吹かして接近する。

『ガアアアアアアア！』

砲鬼は充填率一杯に溜めた腹部荷電粒子砲を放って応戦するが、灼熱の濁流も白のシールドの前に消滅してしまう。

そうして砲鬼の真ん前まで距離を詰めた瞬間、白が急上昇すると、その影から左腕を腰に引いたシウルフツェンが現れ、帯電したプラズマバックラーを露出した半透明の球体——収束レンズに叩き込む。

『ガアアアアアアア！』

レンズを突き破ったステークは高出力の電撃を体内に流し、各部を蹂躪された砲鬼は断末魔を上げてその巨体を爆発させる。

爆発の光が周囲を照らす中、ライカは前部スラスタを吹かして急速離脱する。

(シウルフツェン。やはりいい機体ですね。これで『CeAFoS』なんてものがなければもったいいのですが……)

増設されたスラスタによって高速戦闘に特化した白にもついていけるシウルフツェンの性能に、改めて感心する。

同時に、

(……妙な映像は浮かんでこない。大丈夫なようですね)

『CeAFoS』の封印が上手くいつていることにひとまずの安堵を覚える。

「バレット1よりホワイト2。エネルギーの方は？」

『まだ許容域です。行けます！』

「ならば、この調子であと2機行きますよ」

『了解！』

自機の許に寄ってきた一夏の応答を聞くと、ライカは次の標的を探す。

一連の光景を見ていた第四分隊の面々は、既に現場にいるにも関わらず、思わず啞然としてしまう。

『凄げえ！……あつと言う間に砲鬼を潰しちまった……』

『絶対的な防御力を持つ機体を前にして接近、零距离から確実かつ強力な一撃を叩き込んで一気にケリをつける。両機の性能、特に機動性を活かした戦い方もそうだけど、一番の武器はそれぞれの役割を明確化した連携』

日焼けが目立つ女性——アキラ・アマネの漏らした驚嘆に、黒髪の女性——ミオ・カンザキが冷静な分析を述べる。

栗色の長い髪を藍色のリボンで止めた第四分隊長——ノゾミ・カワシマも束の間圧倒されるものの、すぐに気を取り直して各機に指示を飛ばす。

「ぼーっとしてないで、私たちも仕事にかかるわよ！アキラとサヨコ

は民間人の避難誘導と護衛、ミオは私と鬼の牽制、アカネは状況報告を」

『『『了解!』』』』

事前に決めていた役割分担を伝えたと、各戦機人はそれぞれの仕事に取りかかる。

直後、

『た、隊長!空が!』

「!?」

ウルフカットにした栗色の髪を右側でカラフルな髪止めでまとめている妹——アカネ・カワシマの動揺に空を見上げた瞬間、ノゾミは絶句する。

自分たちの上空が歪んで黒い大きな穴が空いたかと思うと、そこからデータに無い黒い鎧の様なロボットがぞろぞろと現れる。

『クロイツリッター?ルミエイラですか?』

『こんな時に!』

(……ルミエイラ?)

無線越しに聞こえたライカの呟きと一夏の苛立ちに、知らぬ間に心の中で繰り返す。

次の瞬間、

『!?……クイツ!』

『やめろお!』

雑鬼に試作レールガンの狙いをつけようとしていたミオ機を上空から黒い鎧——クロイツリッターの銃撃が襲い、急接近した白が脇から雪片を突き刺して沈黙させる。

と、今度は雑鬼の背後から接近していたシユルフツエンにミサイルが殺到し、やむを得ず攻撃を断念したライカはアサルトマシンガンで撃ってきたクロイツリッターに応戦する。

「クイツら……鬼を守ってる?」

一連の状況を見て出した考えに、ノゾミ自身驚いてしまう。

非特隊側の様子を見る限り、穴から現れた勢力——ルミエイラと鬼は別物と判断できる。だからこそ、他の勢力が鬼に——人々の営みを

破壊することしかない鬼に助力する意図がわからないのである。

「……コイツら、狂ってるの?」

思わずそんな言葉が漏れてしまう。

そして、

『ノゾミ隊長!新たな鬼が私達の後方距離20に1出現……照合結果……しよ、将鬼しょうきです!!』

追い打ちをかける様に響いたアカネの報告に、いよいよ動揺しそうになる。

(あり得ない、将鬼は拠点にのみ存在する機体……なぜここに!)  
「……今は民間人の避難誘導を優先します!将鬼相手に戦いを挑まな  
い!!」

『『『りよ、了解』』』

「非特隊のみなさんもいいですね!」

『了解しました。私たちはクロイツリッター、あの黒いロボットを迎撃します。そちらは避難誘導と鬼を頼みます。織斑曹長、行きますよ』

『了解!』

ライカンの指示に一夏が応じると、シユルフツエンと白は総勢19機のクロイツリッターの軍団へ向かう。

それを見てきちんと気を取り直し、後方に存在する将鬼に警戒しながら、ノゾミはミオに指示を出す。

「ミオ、雑鬼兵を射線上に誘導できる?」

『……出来ます……では行きます』

応じるや、ミオ機は持っている試作レールガンで注意を向ける射撃を行う。途中でクロイツリッターの銃撃に襲われるものの、駆けつけた白がそれを引きつけてくれたことでなんとか指定された射線上に雑鬼2機を誘導する。

(後少し……)

ターゲットスコープに2機が並んだ瞬間、ノゾミは引き金を引き、試作レールガンの砲口つから黄色い閃光を伴った弾体が放たれる。

一般的な機動兵器も含めた通常兵器では歯が立たない鬼の装甲を

抜く為に威力を上げた試作レールガンの一撃は、2機の胴を易々と同時に貫き、巨大な火球に変える。

「ミオ、お疲れ様……」

『いえ………隊長！将鬼が動き出しました!!』

ミオが叫ぶや否や、背後から地面を凄まじい速さで駆けてくる将鬼を確認する。雑鬼や砲鬼よりも一回り大きく、より凶暴な外見をした鋼鉄の怪物が自分たちの許へ近づく様は、モニター越しでも心臓に悪い。

ノゾミは操縦幹をグツと握りしめて対抗策を考えるが、明らかにこちらが分が悪い。

「各機、散開し距離を一定に……キャッー」

指示の途中で激しい振動と空を舞う感覚を覚え、モニターにノイズが走った後に激しい衝撃が襲う。

体が前後に揺れ、固定具が嫌な音を上げる中、ノゾミは機体各部の被害状況をチェックする

(腰椎アクチュエーターに損傷、右腕、両脚駆動系完全途絶……通信系は大丈夫か……非特隊は……手が離せないようね)

各部にアラートが赤く表示されるのを確認し、未だクロイツリッターたちと混戦を続けている2機をモニター越しに見ると、ノゾミは冷静に通信を開く。

「第四分隊は民間人の避難誘導と同時に現状より撤退……」

『お、お姉ちゃん……今そつちに——』

「来ちゃダメー！」

自機に駆け寄ろうとするアカネを止める様に声を張り上げる。

「今来たら全員将鬼に殺されるわ……それに犠牲は少ない方がいいわ」

『で、でも……嫌だ、嫌だよう……』

「アキラ、ミオ、サヨコ、アカネを連れて直ちに撤退、いいわね」

『………は、はい………いくぞアカネ』

『待って！みんな？離してよ……離して!!』

アカネの機体にミオ機、アキラ機が張り付きブーストジャンプして



この場から離れていくのを見届けると、ノゾミは不思議な気持ちになつた。死が間近に迫っているのに心が穏やかになっている。

モニターに目を向けると、将鬼が目を緑色に光らせながらゆっくりと近づき、胸部装甲を開いて収束レンズがせり出し、光が集まってくる。

(……ああ、最後に桃矢とうやに会いたかつたな……)

凶暴な輝きを増していく光を見ながら、4年前に音信不通になつた幼馴染の顔が脳裏に浮かぶ。

ライカと共にクロイツリッターの軍団に向かつた一夏は、後方に地上の戦機人に攻撃を加える2機を感知する。

「お前らあー！」

叫びと共に反転して加速すると、それに気づいた2機は銃口を白に向ける。

が、

「！」

その時には間合いを詰めた白が振り下ろした雪片で1機を頭から両断し、もう1機の銃弾を多少受けながらもその胸部に切っ先を突き刺す。

(最初に墜としたのと合わせて3機。あと17機！)

そう思うことで圧倒的な数に憂鬱になりそうな心を奮い立たせ、マシンガン撃ちながら迫ってくる1機をすれ違いざまに斬り墜とす。

「あと16機！」

声に出すと共にライカの方へ顔を向けると、アサルトマシンガンで牽制した1機に急接近して左手のジェットマグナムを叩き込み、後ろから剣を抜いて迫ってきた1機に振り返りざまに銃撃を浴びせて蜂の巣にしている。

(ライカさんて、やっぱりすげえ！……)

初めて一緒に戦った時と訓練の時にも少なからず感じたことであるが、場数を踏んできたことがわかる大胆かつ的確な動きにどうして

も感心してしまう。

そうしている間にこちらの視線に気づいたのか、接近してきたシユルフツエンが背中合わせに機体を寄せる。

『こちらは3機墜としました。そちらは?』

「最初のも入れて4機。あと13機ですね!」

雪羅の荷電粒子砲の砲口を向けて牽制しつつ、順調に数が減っていくことにひとまず安堵する。

『そんな喜んででもいられませんよ。先ほどマシンガンの弾倉を交換しました。予備はあと1つ。それも無くなればこちらの射撃武器はバスターカのみになります』

「その時は、俺の雪片で片っ端からぶった斬ってやりますよ!」

ライカのシビアな報告に自身を奮い立たせる様に返すと、一夏は付け入る隙がありそうなクロイツリッターを探す。

その時、宙を舞い地面に倒れ込む戦機人と、それに迫り寄る将鬼が目に入る。

「不味い!」

逃げる気配の無い戦機人に不調を察するや、一夏は両者の間に割って入ろうとする。

が、正面にクロイツリッターたちが立ちはだかる。

「退けえ!お前らの相手してる場合じゃないんだ!」

叫びながら手近の1機に斬りかかるものの、相手も剣に持ち替えて鏢迫り合いになる。

さらには両側からマシンガンを構えた2機が迫り、咄嗟に斬り合っている1機を蹴って距離をとる。

(間に合え!)

戦機人の間近まで迫った将鬼に、「間に合わないかもしれない」という不安に襲われるものの、それを振り払う様にウイング・スラストアに意識を向ける。

直後、

「!?!」

白を介してライカやヴァルキリーズ、鬼やクロイツリッターとは違

う気配を覚え、一瞬後に戦機人と将鬼の間に割って入る白い影を見る。

(白い……武者?)

将鬼の胸部レンズから荷電粒子砲が放たれ、身動きがとれないノゾミの戦機人を襲う。

が、

(……………熱くない?)

戸惑う間にも策敵センサーに別の反応を知らせる電子音が響き、モニターにPTほどの全長を誇る白い武者が映し出されているのを見る。

武者は腕に不可視の障壁を展開し、まるでノゾミを灼熱の暴風雨から守るように立ちはだかっていた。

『おい、動けるか?』

男の声で——おそらく白い武者から——通信が入る。

「え!?ダメ……各部のシステムと駆動系がダウンして動けない……て? 言うかあんたこそ早く逃げな——」

『……………動けねえか……クツ!』

武者が唸った直後、不可視の障壁に亀裂が入り広がっていく。もうダメだと思った時、将鬼の頭に白い何かがぶつかる。

——!?

『アオオオン!』

雄叫びを上げるメカニカルな白い犬が地面に降り立つと同時に、新たな反応が空と陸に現れ、辛うじて生きているカメラで見て驚く。

『キキ!』

『クエクエ〜!』

空には金に黒地のカラーリングのメカニカルな雉が、崩れたビルの上には赤を基調としたメカニカルな猿が、将鬼を囲む様にいる。

(いつの間に現れたの!?)

ノゾミが驚愕する間にも、武者は通信越しに呼びかける。

『遅いぜみんな。あんたに言っておく……こいつらを叩き潰すのが俺の専門だ。ちよつかい出すようなら上の鎧どももな……障壁を張るからここから動くなよ………いくぞー!』

『ワウー!』

不可視の障壁がノゾミの戦機人の周りに展開したのと同時に、武者は地面を蹴り将鬼の顔面目がけ殴りかかる。

堪らずふらつく将鬼の姿に唾然となるが、追撃と言わんばかりに赤い装甲が目立つメカニカルな猿の背中から長身のレールガンが展開して駆けながら連射し、黒地に金の装甲をもつ雉が翼からレーザーを雨のように降らす。

雉が放ったレーザーは迫っていたクロイツリッター数機をも巻き込み、射線上に火球を咲かせながら地上に降り注ぐ。

『ガアアアアアア!?』

地上からはレールガン、空からはレーザーの雨に堪らず膝をつく将鬼の眼前に、ゴキゴキと指をならしながら白い武者が歩み寄ってくる。

その姿に、鬼の本能が恐怖を訴えてくる。

——コイツは俺たち……鬼の敵だ……まさか、まさかアイツは……。

その名を思い浮かべるだけで体は震え、思考が恐怖に支配される。が、自身を奮い立たせると、将鬼は最後の切り札を使う。

『ウ、ウウ……ウガアアアア!!』

体を大きく震わせながら内側から量子分解された駆動系が増設され、装甲が膨れ上がり獣に似た姿へと変わるや否や、白い武者をその何倍にも強化された拳で殴りビルに吹き飛ばす。

ガラガラと崩れ落ちるビルの瓦礫を吹き飛ばし、白い武者が空へと舞い上がる。

『く、くそ……獣化しやがったな……そつちがその気なら………皆!合体だ!!』

『キキ!』

『クエ〜!!』

『ワン!!』

白い武者を中心に光輝く古代文字が螺旋を描いて激しく動き回り、猿、犬、雉に吸い込まれる。そしてその中で変化が起こる。

武者の両腕が肩に収納、脚部がスライドして隙間に駆動系が増設、力強さを増した装甲が纏われ、猿と犬の各部が腕へ変わり接続と同時に拳が飛び出し力強く握られ火花が散る。最後に雉が背中から肩、胸に黒地に金の装甲を着け、頭部に変化が起こる。

桃を模した装飾が施された兜が装着されると同時に真ん中が開き、下から金色に輝くアンテナが左右に開く。両目が赤く輝くと同時に古代文字が消え去り、遂にその姿を表す。

その姿は巨人。その存在は鬼たちにとって忌むべき姿。鬼たちが蹂躪し、絶望に満ちた世界に現れた“希望”。

その名も――

『……手前等、鬼どもの野望を叩き潰す……天下無敵のモモタロウ! 此所に見ツ参ッ!!』

腕を大きく交差し構えた瞬間、辺りに暖かな太陽に似た光が満ちる。

今此所におとぎ話だけの“英雄”――桃太郎が降り立った。

同じ頃。

ヴァルキリーズ極東支部司令管制室では、突如現れた白い機械神――モモタロウの姿に職員たちが騒然となる中、一人冷静に中央モニターを見つめる女性がいた。

「……やはり、叶教授かのうの説は正しかったのか……だとしたらあの機械神に乗っているのは……」

ふと目を向けた先には1枚の写真が。写っているのは発掘途中の何か、いや、中央モニターに映されたモモタロウと酷似している。その隣には1人の少年が、笑顔で顔らしきものに手を触れている姿が。

「……叶教授の一人息子、叶桃矢……最初にアレ……  
【おとぎ話の遺産】を発見した子……遙か昔のおとぎ話の真実が紐解かれる時が来たのかしら……」

背中まで届くウェーブがかかった紫色の長髪に金色の瞳が目立つ女性——リトス・ミッターナハト極東支部司令は誰に言うわけでもなく小さく呟き、さまざまな指示を手元の端末を操作しながら出すと、戦いを見守ることを決めてモニターへと目を向けた。

『行くぞ鬼野郎!!』

30メートルはあろう巨体が推進機から逆噴をかけボロボロの大地に地響きをたて降り立つや否や、陣羽織を模した装甲を展開、スラストを全開にして地面を蹴り、将鬼に殴りかかる白いロボット——『モモタロウ』の動きと声に、ノゾミは昔の事を思い出した。

(うおおりやあ! かったああくむちやくちや固いぜ!?)

(……何やってんのよバカ桃矢)

石灯籠に向けて木刀を振り下ろし、弾かれてしびれた手を押さえる幼き日の桃矢に、ノゾミは呆れながら訪ねた。

(な、何って必殺技に決まってるだろが! 名付けてオーガスラッシュ! どうだカツコいいだろ!!)

(……バツカみたい……鬼なんているわけないでしょ)

(いいや鬼はいる! 新田じいちゃんも父さんたちも言ってるだぜ? それに——)

(おねえちやくん、モモちやくん、お昼できたよ)

2人の会話に割って入る様に、アカネの声が届く。

(ア、アカネ、モモちゃんはやめろよ!? 俺は叶桃矢だから)

(モモちゃんって呼んだらダメなの?)

(い、いや、だからその……)

(ダメ?)

(う。モモちゃんでもいいです)

涙目と上目遣い、さらに着物姿のアカネに観念し、了承する桃矢の姿。

それらは今となっては思い出でしかない。しかし、

(でもあの白いロボットの動きと声は桃矢と被りすぎる……確かめな  
きや)

思うやノゾミはハッチに手をかけるが開かず、仕方なく爆砕ボルトのスイッチを押して強制解放した。

『ウオオオーブrouクンファアアアアングウ!!』

地面を駆け、体を左右に動かして攻撃をかわしつつ迫ると、モモタロウは犬の顔を模した右腕を繰り出す。装甲が展開し殴り抜くと、白銀に輝く衝撃波が将鬼の体を包む。

将鬼は咄嗟に防御するが、無数のエネルギーを纏った衝撃波の前に強固な装甲が切り裂かれていく。

『ガ、ガアアアアア』

衝撃波が止むとずたずたになった装甲の下から火花を散らしつつ、再び荷電粒子砲の再チャージを行う。

しかし、

『んな暇与えるかよーモンキーラアアアッシュツ!!』

いつの間にか背後に回りこんだモモタロウの拳が深くボディに刺さり、続けて無数の拳が繰り出される。

顔面、胸部、腹部の装甲の破片とオイルを辺りに撒き散らされ、攻撃が止むとふらふらしながら将鬼は背後から翼を広げ逃げようとする。

が、

『待てー逃がすかよ……キジツト・ブウラアスタアアアアアア』

陣羽織が左右に開き内側に半透明なレンズ状のパーツがせり出す。





です。現に鬼の中でも高い性能を誇る将鬼を圧倒しました。そのような物を個人が所有する事態を見過ごすわけにはいきませんので』

『だから軍で管理するってか？嫌だ、と言ったら？』

『非特隊として脅威の芽を放置する選択肢はありません。力づくでも基地に連行します』

『そうか……なら断る！』

言うやモモタロウの手に光が集まって巨大な剣を形成し、両手持ちにしたその切っ先をシユルフツェンに向ける。

(結局こうなるか！)

一番外れて欲しかった事態に奥歯を噛み締めたのも一瞬、一夏はモモタロウに迫ろうと一步を踏み出そうとする。

が、

『なっ!?!』

『時空崩壊?!』

上空の脈打ちにモモタロウとライカが驚愕の声を上げ、直後に空にドアくらいの穴が空き、 “白っぽい何か” が吐き出される。

「……!」

白を介して温かな気配を感じ、望遠機能でその “白い何か” を確認するや、一夏の中からは任務もモモタロウも掻き消えてしまう。

すぐに雪片を量子変換し、意思を拾った背中 of ケーブルが自動で外れる。直前に開いていたハッチから外へ出るや、白式の全スラストを吹かして “白い何か” —— 寒冷地用迷彩服らしき物を纏った少女の許へ駆ける。

「諦めるなあああああ!」

白が出る前に少女から感じた “嫌な感じ” を吹き飛ばす様に、一夏は無意識に叫んだ。

絶対的な闇の中を身一つで進んで、どれくらい経っただろうか？

落ちているのか上がっているのかもわからず、全身が万力で押さえつけられるかの様に痛い。

(私、こんな所で死ぬのかな？なんにもできないまま……………！)  
そう思った直後、目の前に光が広がり、輝きが引くと青空と海、都  
市らしきものを載せた地上を認める。

(煙？……………戦場なの？……………！)

眼下の様子にそんな推測を抱いた直後、その景色が徐々に大きく  
なっていくことに——落下していることに気づく。

(ああ。結局死ぬんだ……………もう少し、みんなの為に頑張りがかったな。  
でも、もう……………)

頼もしい仲間たち、大切な人たちの顔が脳裏を過ぎつたのも束の  
間、数瞬後には地面に叩きつけられて絶命する自身の運命を受け入れ  
ると、なにもかもがどうでもよくなる。

が、

「諦めるなああああああ！」

「!？」

明るい世界に出てから風の音以外で始めて聞いた音——強い意志  
を含んだ男の絶叫に、先ほどまでの諦観は吹き飛び、声のした方に顔  
を向けると、4枚の大きな翼を広げた白い何かがこちらに近づいてく  
る。

それは落ちていく少女の前に立ちはだかるや両腕を広げ、抱える様  
に受け止めるとその場に滞空する。

「おい、無事か？」

(……………男の、人？……………)「天使？……………」

切羽詰まった顔で自分を見据える若い男に、背中の翼と合わさって  
そんな感想を漏らすと、少女——城崎ユイしろさきは闇の中で抱えた疲労から  
徐々に意識が薄れていくのを感じる。

「お、おい！大丈夫か？おい！」

(……………素敵な、目だな……………真っ直ぐで、力強くて……………)

体を揺すって呼びかける天使の声を遠くに聞きながら、いつまでも  
自分だけを見据えている目に感動を覚えたのを最後に、ユイは深いと  
ころへと沈んでいった。

(作戦中に独断行動とは……帰ったらグラウンド10周ですよ。一夏)

思いつつ、ライカはモニター越しの少女を抱きかかえた一夏を注視する。

その目には軍人、それも上官としての厳しさの他に、僅かだが一人の人間としての羨ましが含まれていた。

しかしそんな目をしているのも束の間、すぐに視線を正面のモモタロウに戻し、瞬時に状況を分析する。

(敵は詳細不明の特機、僚機は無し、こちらの火器は予備を含めて弾倉2つのバズーカのみ、おまけにシウルフツエンのコンデイションも万全とは言えない。となると……)

結論が出るや、ライカは急速に後退してモモタロウとの距離を離す。

(急速離脱……要するに撤退……)「これしかありませんね」  
潔く呟くと、モモタロウに向けていた敵意を解く。

自機から急速に離れていくシウルフツエンに、モモタロウは心中に安堵の息を吐く。

(ふー……退いてくれたか。こっちも正直ギリギリだったから……  
もっとも、バズーカの砲口だけは絶対逸らさないのは油断ならねえな)

間合いが開いてもぶれることのないバズーカに若干悪寒を覚えつつ、手に持つ大剣——オニキリを光に変え、上空の一夏に視線を向ける。

(あの連邦兵、なかなか粋なことをしやがる。今は敵にならなきやいけないのが残念だぜ……さて、今度こそ帰るか)

そう思い、飛び立とうとする。  
が、

「待って！」

『?』

突然声が響き渡り、後ろを向くとさつき助けた戦機人のパイロットがこちらを見上げている。

「あなたは何者なの!」

『……………モモタロウだ』

「嘘ね!あなたは、あなた桃矢でしょ!」

(なぜ俺の名前を知ってるんだ?……………待て、コイツの声どこかで聞いたことが……………体型から判断して女だな……………)

そう思った直後、メットを脱いだパイロットの顔を見て心臓を跳ね上げる。

栗色の長い髪に幼さが残りつつ強い意思を感じさせる眼差し、それにあのリボンは、

(まさかノゾミなのか?)

思わず口に出しそうになるがグツと堪え、翼を広げる。

『……………人違いだ……………叶桃矢じゃない……………俺はモモタロウだ!!』

断じるや、推進機に光が集まって大空へと飛翔する。

ふと目を向けると、ノゾミが髪を押さえながらこちらを見ている。

(あれから数年であんなに変わるんだな……………アカネも元気でいるといいんだけどな……………)

そんなことを考えながら、モモタロウは光輝く幾何学的紋様——転移ゲートを正面に展開し、活動拠点へと向かう為通り抜けた。

「待って桃矢!きゃっ!」

大きく翼を広げ、光が灯ると凄まじい風が巻き起こる。

揺れる髪を手で押さえつつモモタロウがゆっくり空へ上っていくのを見ながら、ノゾミは先ほどの会話を思い出す。

(『……………人違いだ……………叶桃矢じゃない……………俺はモモタロウだ!!』……………間違いない。アレは桃矢だ。あいつは嘘やほんの少し動揺すると手を握りしめ開いたりする。実際モモタロウの右手が握りしめ開

いたりしていたから間違いない……」何でなの……生きてたんならなんで私達に連絡寄越さないのよ……馬鹿桃矢ああああああああああああ!!」

巻き起こる風になびく髪を押さえながら、幾何学的紋様に飛び込み消えるモモタロウに向けて叫ぶ声が瓦礫だらけの街に響き渡った。

転移ゲートを抜けたモモタロウは、現在の彼の拠点——第二新田研究所、その格納整備ルームに出る。

「お帰り桃兄!」

「おう今戻ったぜ飛鳥!」

中学生くらいの赤毛の少年——新田飛鳥の出迎えに、モモタロウから降りてきた青年——叶桃矢は辺りを見回しながら応じる。

「ところでじいさんは?」

「新しく見つかったテイルレガシイの解析にかかりつきりなんだ……でもそろそろ」

「戻ったか桃矢くん!体はなんともないかの?うん?」

身長が180センチもある白衣を着た老人が駆け寄るなりいろいろと訪ねてくる。彼は新田源三。ここ第二新田研究所の所長で飛鳥の祖父に当たる元気なお爺さんである。

「ああ、大丈夫だぜじいさん……んなことよりも新しく見つかったテイルレガシイってなんだ?」

「……中国にある不死鳥と龍の伝説にまつわるものじゃよ……」

目を向けた先には赤い鳥と青い竜を模った石像が鎮座し、さまざまな検査機器で解析されている。

「……そっか、でも装者はまだ見つかってないんだろ?」

「叶君と息子夫婦が残したデータにはこう書かれておった。テイルレガシイは乗る者……正しい心、魂を持つ者を選ぶ性質がある……とな」

「桃兄!〜じいちゃん!モモタロウの合体解除終わったよ〜」

飛鳥が端末片手にモモタロウの合体解除を終えたことを告げ、桃矢

はモモタロウの格納場所へ向かう。

4つの巨大な整備台の上には、猿型メカ『ロートアツフェ』、犬型メカ『ヴァイスヴォルフ』、雉型メカ『アウルムフォーゲル』、それらの中心に白い鎧武者がさまざまなケーブルに繋がれて置かれている。椅子の様なものに鎮座している白い鎧武者に近づくと、桃矢は人知れず呟く。

「なあモモタロウ……お前は何で……鬼たちへの怒りしかない俺を選んだんだ」

白い鎧武者は桃矢の問いに答えない。

(……鬼達が村を襲ったあの日、村の人たちを、親父やお袋、飛鳥たちの両親を救えなかったのに、何故俺を装者を選んだんだ……)「答えてくれよ……モモタロウ……なんで俺なんだ」

誰もいないモモタロウの格納庫に、桃矢の声だけが響き渡った。

## 8 初めての恋が終わる時

ライカと一夏が鬼の鎮圧に向かっていた頃、レイディバードを発した光秋と恭弥は、少し飛ぶと中規模の都市の建物の合間に散発的に銃撃を行う数機の機動兵器を確認する。

望遠映像が映し出されるやすぐに照会が行われ、恭弥はモニターに表示された情報に目を凝らす。

（PD・レイザーが3機にアンタレスが3機、それに……HMMAS・Bホーク3機？）

比較的見慣れているPD系はともかくとして、その倍の10メートルほどの大きさに迷彩塗装を施した人間とは関節の向きが違う脚が特徴の機種に、思わず首を傾げてしまう。

「シユウき……加藤大尉、あの逆関節の奴って……？」

『ハイ・モビリング・マルチブル・アーマード・システム。大陸で使われているAMのスピントフの一種だろう。だとすると相手は『革命者』の一派かもな。そこが使う機体だから』

「革命者……確か、世界中のテロリストが寄り集まってできた勢力ですよね」

『その通り』

研修で習ったことを復習する様に述べる恭弥に、光秋は静かな肯定を返す。

その間に望遠映像は消え、通常映像で敵機の細かな形状がわかる距離まで近づく。

『よし、桂木曹長。投降勧告やってみろ』

「え？……僕がですか？」

予想外の指示に、思わず訊き返してしまう。

『何事も経験だからな。まずは研修で教えた通りにやればいい。ただし、絶対に気を抜くな』

「……了解」

最後の方の光秋の注意に気を引き締めると、恭弥はシルフィードを上空に滞空させ、腹に力を入れて拡声器越しによく通る声を出す。

「テロリスト各機に告げる！こちらは連邦軍非常事態特殊対策部隊である。即時武装解除し、投降せよ！従わない場合は、実力を以て鎮圧する！」

相手に有無を言わせない高圧的な態度で。研修で習ったことを意識しながら、一言一言を噛み締める様に言う。

しかし、

『煩い！』

「！」

手近のBホークが拡声器越しに怒声を返すや手に持ったアサルトライフルを撃ち、恭弥は反射的に両腕を前に出して本体への着弾を防ぐ。

数回に渡る調査と模擬戦からシルフィードの破格の丈夫さは実証されている為無傷で済むものの、続く言葉に恭弥自身の心が痛む。

『権力の犬が！高い所から偉そうなことを言うな！我々は腐敗した連邦に裁きの鉄槌を下す為に蜂起したのだ！腐った体制の尖兵ごときに下げる頭は無い！』

(……この人たちは……)

徹底的な拒絶を含んだ一言一言が胸に突き刺さり、思わず悲しくなる。

が、

『言いたいことがあるなら場所と方法を考えなさいよ』

「……？」

『了解した。貴官らは実力を以て鎮圧する。行くぞ、ホワイト3！』

「……了解！」

無線越しの光秋の愚痴の様な呟きに気を取り直し、続く拡声器越しの指示に熱の籠った声で応じるや、恭弥は先ほど発砲したBホークに狙いを定める。

が、直後、

「！」

『回避だ！回避！』

上空の一部がうねり出し、時空崩壊の前兆と察した光秋の指示に慌



ててシルフィードを後退させる。地上のテロリストたちも異常を感じたのか、蛇に睨まれた蛙の様に固まってうねりを注視する。

数瞬後に巨大な穴が空くや、PTほどの大きさを誇る頭部に一本角を伸ばし、両肩に赤い宝石の様な物が輝く巨大なマントを纏った鎧——西洋の甲冑の様な姿をしたロボットが現れる。

(鎧みたいなロボット?!)「ルミエイラの新手か!」

断じるや、恭弥は射撃モードにしたルミナ・グラティスの銃口を甲冑に向ける。

が、

『待て!』

球形操縦桿の引き金に指を掛ける寸前にニコイチがシルフィードの右手を押しして銃口を下げさせ、そんな光秋の解せない行動に恭弥は苛立ちの声を上げる。

「何ですか!」

『よく見てみろ』

「え?.....」

言われて改めて甲冑を見てみると、自分たちを、次に地上のテロリストたちを、そして周囲の様子を、何度も何度も見回している。

(.....戸惑ってる?)

「.....ここは?」

「.....リグル、無事?」

まだ朦朧としつつも気を取り直した男物の礼服を着たサイドテールの少女——高槻たかつきカノンは、自分の膝の上に窮屈そうに座る少女の装飾が施されたワンピースの少女——リグル・フォン・エルプールの様子を窺う。

2人がいるのは甲冑型ロボット——アトランティア・ルージュの cockpit であり、計器類やモニターで埋め尽くされた内部は成人男性1人入ればいっぱいになってしまうほどに狭く、比較的小柄な2人でも密着して体を折り曲げた上でギリギリ入っていられるあり様であ

る。

「なんとかか……！カノン！前！」

「え!？」

なんとか首を回してモニターを見たリグルの叫びに、カノンは束の間絶句する。

正面には妖精の様な姿をした白銀のロボットが滞空し、剣の様な物の先をこちらに向けている。直後に半分ほどの大きさのロボットが剣を下げさせ、それが2人の混乱に拍車をかける。

「アレって……機甲兵?」

「でもあんな型知らないよ?地上の方だって……」

「確かに……っていうか、ここは……」

リグルの返答に応じつつ、カノンはモニター越しに周囲を見回してみよう。

四角いビルと瓦敷きの民家が立ち並び、コンクリートで舗装された道路が走るここは――

「私の、元いた世界?……とも違うか?」

周囲の様子はかつて自分がいた世界に非常によく似ている。が、その景色に大した違和感もなく溶け込んでいるロボットたちに、カノンは判断に困ってしまう。

そして、その迷いが隙になる。

『テメエも敵か!』

怯えと興奮を含んだ怒声が響くや、近くの逆関節がアサルトライフルを発砲する。

「え?・ちよー!」

咄嗟のことにカノンは対処できず、瞬く間に弾はアトランティアの胸部に迫る。

が、

「!」

小さいロボットがアトランティアの前に立ちはだかり、前に出した左腕で弾を弾く。その様子と無傷な左腕に、カノンとリグルは揃って目を丸くする。

『(無事で?)』

「え?.....あ、はい!」

通信越しにかけられた男——おそらくは目の前のロボットのパイロット——の声に、カノンは未だ狼狽しながらも応じる。

その間にも他の逆関節や4頭身のロボットが銃撃を加えてくるが、アトランティアの前に滞空した小さいロボットは両腕を前に出してそれらを受け流し、あまつさえ先ほど剣を向けた妖精の様なロボットも右隣に並んで壁になってくれる。

『申し遅れましたが、連邦軍非特隊所属の加藤大尉と言います。そしてコイツは相棒のニコイチ.....またの名を、「白い犬」と申します。そして彼は』

『部下の桂木曹長です。コイツはシルフィード』

「.....ちよつとカノン。『レンポウグン』とか『ヒトクタイ』とか、この人たち何言ってるの?」

「私が知りたいよ.....」

通信から流れてくる意味不明な単語の数々に大量の疑問符を浮かべるリグルに、カノンもお手上げといった様子で応じる。

と、

『今度はこちらから訊きたいのですが、貴方はルミエイラ、もしくはその関係者ですか?』

「ルミ.....エイラ?.....いや、知らないよ」

加藤大尉の質問に、カノンは正直に答える。

『そうですか。では、安全な場所まで下がっていきください。話は彼らを鎮めてから。ホワイト3、相手を無力化後、全員の身柄を確保するぞー!』

『了解!』

「え?ええ!?!」

戸惑うカノンを差し置いて、小さいロボット——ニコイチと妖精の様なロボット——シルフィードは銃弾の雨も構わず急降下し、ニコイチは4頭身のロボット——手元の造りが荒い方——を蹴って近くの半壊したビルに叩きつけて動けなくし、シルフィードは剣を振って斬

り飛ばした逆関節の頭部を左手で掴む。

と、

「！危ない！」

銃を乱射しながらシルフィードに迫る逆関節、その進路上に小さな女の子が倒れているのが目に入るや、カノンはアトランテアを急接近させる。

「足元くらいよく見なさいよおー！」

叫びながら逆関節に右肩から体当たりをかけ、吹き飛ばされて倒れたのを見るや腰に提げた大きく反りのある剣を抜き、シルフィードに倣って頭部を切断する。

直後に女の子を庇う様にニコイチが降下し、逆関節の沈黙を確認したカノンもアトランテアを歩み寄せさせる。

『下がっててくれと言ったでしょう』

「子供が死にそうになってるのを見過ごせるわけないでしょ！」

『それについては感謝します。ありがとうございます』

礼を言うやニコイチの胸上部が開き、道具類にヘルメットで身を固めた加藤大尉がワイヤーで降りて女の子の許に駆け寄る。

『君！大丈夫かい？』

『……………』

『ああ。怖くて腰が抜けちゃったか…………』

顔面蒼白で身動きができない女の子に努めて明るい雰囲気ですと、加藤大尉は女の子を抱きかかえてニコイチに戻ろうとする。

直後、

『シュウさん！』

桂木曹長の焦った声が響くや、手の造りがしっかりしている4頭身が同サイズのショットガンらしき物をこちらに向けるのを見る。

「ヤバー！」

「カノン！ハッチ開けて！」

「！」

リグルの叫びに反射的に胸部ハッチを開くや、リグルは前にかざした右手に光の幾何学模様——魔法陣を発生させる。

途端に加藤大尉と4頭身の間に高さ20メートルほどの分厚い氷の壁が出現し、撃ち出された散弾は全てそれにめり込んで止まる。

その間に加藤大尉は女の子をニコイチの手に乗せてコクピットに戻り、再起動させるや手をハッチに寄せて女の子を膝の上に乗せて機内へ消える。

『助かりました』

「これくらい軽いです」

『ああ。2人いたんですね』

胸を張るリグルに応じるつつ、開けつばなしのハッチを見て2人乗りに気づいたのも束の間、加藤大尉は指示を飛ばす。

『とりあえず、僕はこの子を避難場所に連れていく。ホワイト3、援護頼む』

『了解！』

応じるや、ニコイチの後ろに移動したシルフィードは肩部レーザーキャノンを散発的に撃って周囲の機を牽制する。

『そちらのお二方もついてきてください。今度こそ安全な場所に』

「……いや、私もここに残るよ」

ハッチを閉めながら呼びかけに一瞬考えて返すと、カノンはさらに続ける。

「状況を考えるとき、周りにいる逆関節とチビっこのは街を荒らす悪党……ていうか、もろテロリストで、お二人さんはそれを成敗する正義の味方、もとい軍人なんですよ？」

『そうですね』

「だったら私は戦うよ。ここが何処だろうと、そういう奴を止めるのが私の役目だから。ただ、リグルは——」

「私もこのままです。一人で知らない場所に放り込まれるのはごめんです」

「だつてさ。とにかく、加藤さん、だっけ？あんたが止めても私は……私たちは戦うから！」

有無を言わせない固い意志を含んだ声で言い切るや、カノンはリグルと共にモニター越しにニコイチを見据える。

『……ダメだ、と言って聞くタマでもなさそうですね。了解しました』  
「話がわかる人で助かるよ。私は高槻カノン。で、こっちは……」

「リグル・フォン・エルプールです」

「で、コイツはアトランティア・ルージュ。よろしくね」

『わかりました。とりあえず協力は頼みますが、その代わり、僕がいな  
い間は桂木曹長の指示に従ってもらいます』

「了解！」

『え？丸投げ!?!』

『3分以内に戻る。それまでさっきの命令の継続頼むよ！』

動揺する桂木曹長に構わず飛び立つや、ニコイチは急速に戦線離脱  
していく。

「それじゃあ、いっちょやりますか！リグル、しつかり掴まってる」

「うん。カノン」

リグルが自分の体にしがみついたのを確認すると、カノンは牽制射  
撃を続けるシルフィードの許にアトランティアを駆け寄せさせる。

(シユウさんめえ……といっても、立場上仕方ないか)

遠退いていくニコイチを横目で睨んだのも一瞬、自分の許に駆け  
寄ってきたアトランティアを見て気を取り直すと、恭弥は瓦礫の山や  
崩れかけたビルに身を隠している敵機たちを見ながら状況を整理す  
る。

(僕がBホークを1、シユウさんがレーザーを1、高槻さんがBホーク  
を1行動不能にしたから、残るはアンタレス3、レーザー2、Bホー  
ク1の6機。さっきの氷の壁といい、アトランティアの性能こそ未知  
数だけど、向こうのパイロットたちの腕はそんなに高くない。落ち着  
いてかかればシルフィード1機でも充分対処可能だ。流れはこっち  
に来てる！)

断じると、通信越しに指示を飛ばす。

「じゃあ、1機ずつ確実に黙らせていきます。僕が右を担当するので、  
高槻さんは左を」

『OK!』

「それと言っておきますが、あくまでも全員生かして確保です」

『わかっている。私も人殺しは嫌だからね』

「それとPD……あの小さいのは絶対爆発させないでください」

『そりゃあ、捕まえるんだからね』

「それもあります。アレは原子力バッテリーで動いてるんです」

『……は？今なんて？』

「アレは原子力バッテリーで動いています。爆発させようものなら汚染の危険があるので」

『よくそんなもんに乗れるねあの人たち』

「同感です。じゃあ、行きますよ!」

『了解!』

恭弥の号令にカノンが応じるや、2機はそれぞれ手近の1機に接近する。

瓦礫と飛び越えてショットガン装備のアンタレスの上と取ると、恭弥はシルフィードの右足に意識を集中して蹴りを繰り出す。至近距離からの散弾を意に介さず足は進み、恭弥の意思を正確に再現した絶妙な力加減でアンタレスを突き飛ばす。

飛んで行った先にいたもう1機のアンタレスにぶつかって2機とも沈黙したのを確認すると、アトランティアが頭部を鷲掴みしたレイザーを半壊したビルに投げつけ、後ろを見せた隙を突こうとアサルトライフルを向けたBホークの脚部の付け根に左の踵を入れて蹴り上げる様を見る。

(おお!痛そう!)

自身の同じ箇所痛みを感じたのも一瞬、その2機の沈黙も確認すると、恭弥はレーザーキャノンを構えて、残ったレイザーとアンタレスの許に慎重に歩み寄る。

と、2機はそれぞれ持っていた銃器を捨てて両腕を高く上げ、開いたコクピットからも両手を上げたパイロットが出てくる。

「降伏か?よかった……」

思わず恭弥は安堵の息を漏らし、直後に状況をうかがっていたらし

い防具に身を固めた警官たちが降りてきたパイロットたちを拘束する。

沈黙した各機体からもテロリストたちが引きずり出され、あるいは気絶して運び出されるのを見ていると、ニコイチがシルフィードのそばに降りてくる。

「シユウさん、遅いですよ……」

『加藤大尉だ。とりあえず、この場は片づけてくれたみたいだな……さて』

気が抜けた恭弥に注意を入れて状況を確認すると、ニコイチの頭部がアトランティアに向く。

『えー、高槻さんとエルプールさん、でしたね？いろいろと事情を訊きたいので、御同道願えますか』

『……ま、そうなるよね。どうする？リグル』

『あの時とは立場が逆か……私はついて行った方がいいと思うな。わけのわかんない場所で立ち往生するよりはいいだろうし』

『……だね。そっちについてくよ』

『話がわかる方たちで大変助かります』

カノンとリグルの返答に、光秋はほっとした様子で応じる。

『ただ、僕たちはもう1つ寄りなければならぬ所があります。それにもお付き合いください』

『なんでもいいよ。ゆっくり座って話せる場所に連れて行ってくれるなら』

『ありがたい。ではついてきてください。ホワイト3もいいな』

「あ、はい！」

カノンとの会話を終えた光秋の呼びかけに恭弥は一瞬ハツとするものの、すぐに気を取り直し、先に飛び立ったニコイチとアトランティアに続いてシルフィードを上昇させる。

(……さて、次は鬼だ。ライカさんと一夏君、大丈夫かな?)

有名な恐怖に少し体を振わせると、先に向かった2人の安否を気にかけて、前に行く2機を追ってペダルを深めに踏む。

現場から少し離れて落ち着いたところで、光秋が全機に通信を繋



ぐ。

『遅くなりましたが、先ほどは助っ人ありがとうございます』

『いやいや。私たちが勝手にやったことだから』

光秋の礼に、カノンが謙遜の声で返す。

『それでも、実際助かりました……そうだ、改めて紹介しておきます。加藤光秋と言います。そしてこっちが……』

「桂木恭弥です。さつきは動揺していたとはいえ、いきなり銃を向けずすみませんでした」

『別にいいよ。誤解もすぐ解けたし……そもそも私が言うのもなんだけど、会ったばかりで、こんなロボット乗ってる奴をよく信じたよね。嘘ついてるかもしれないし、そうでなくても敵かもしれないんじゃないよ。いきなり撃ち墜とされても文句言えなかつたよ』

『それについては、さつきまでの挙動——まるで初めてこの辺りを見た様な動きをしていれば、少なくとも何度か現れているルミエイラではないという目星はつきます。あとは本人の証言が得られれば充分。それに敵なら、あんなに長く背中を見せているのに何もしいのはおかしいですからね。だから、少なくとも敵対者ではないと判断しました』

『……よく観ていらつしやいますね』

カノンに応じる光秋に、リグルが感心した様子で返す。

『それよりさ、そのルミエイラって何？そもそもここは何処？お二人さんやさつきの人たちが使ってたロボットはなんなの？』

『いろいろ訊きたいことはあるでしょうが、まずは——！』

カノンの質問に応じる言葉を遮って、光秋に緊張が走る。

(ううわぁー……)

映像越しの光秋の表情、なによりもビルの合間から覗く黒い影から、恭弥もその理由を察してしまう。察したくなかったが。

『何？あの黒い……蛇？』

『まさか、こっちにもドラゴンが？』

『いいえ、アレは……』

カノンとリグルに応じる光秋の言葉を引き継いで、恭弥は黒い影

から生々しくも冷たい感覚に生唾を飲みながら言う。

「……ゴースト」

自ら発したその言葉は、どっちつかずの、それ故に異様な感覚を伴って、鬼以上の恐怖心を覚えさせた。

この数分前。神奈川県中央のとある公園。

「それでさ、でっかい蛇みたいなのがいてさ——」

八分咲きの桜の下を、あるカップルが歩いていた。互いに好意を寄せているが、互いの想いに気づいていないという様子だった。

茶髪の少年——ユウ・ブレイブは、白髪の少女——ユリ・ナノハの左側から楽しそうに話している。

「変な夢。で、その後どうなったの？」

「んー、なんか全身の力が抜けて、気を失った……かな」

「へえ〜」

話しながら2人はベンチに腰掛けて、束の間の休憩をとった。2人の中には靴2つ分ほどの隙間が空いていて、2人とも少し頬を桜色に染めている。

2人は明日に高校の入学式を備えている。

「い、いい空だね」

「何よ急に……？」

ユウが自分の想いを告白しようとしたが勇気が足りず、おどおどしながら隠している。

「えっと、なんか全部が穏やかで、全部が明るく見える。まるで

……」

——オレたちの未来みたいに。

そう続けようと思っていた。

しかし、その時だった。

—— All is calm All is bright ——

何処からか女の歌声が聞こえた。

その声は周りの雑音を貫くようにはつきりとユウのもとへ届いた。

ユウはその声の主を探す。

「どうしたのユウ君？」

「え、今の声、聞こえなかった？」

「声？」

その直後だった。黒い大蛇が現れたのは。

「な、何アレ!？」

「同じだ……」

「同じ？」

ユウは初めて見るはずのその巨大なものに見覚えがあった。

記憶の中を必死に探し、そして気づいた。

「夢に出てきたでっかい蛇……!!」

ユウはそう言うと、ユリの手を掴んで走り出した。

八分咲きの桜木も、大蛇が響かせる地ならしによつてその花びらを落とす。

大地を揺るがしながら大蛇は人々の方へ迫り、あつという間にユウとユリのもとに来てしまう。

(ここまでなのか?)

迫りくる大蛇に死を予感し、反射的にユリを抱き締める。

が、その直後、

「!？」

大蛇の頭部を光弾が叩き、それで動きを止めた大蛇の鎌首を追つてユウも光弾が飛んできた左の空を見る。

「……機動兵器?……連邦軍だ!」

大蛇に銃口を向けた妖精の様な機体、西洋の甲冑の様な機体、2機の半分ほどの大きさの小柄な機体がこちらに向かつてくるのを見て、ユウはひとまずの安心を覚える。

『威嚇でいい!ルミナを撃て!』

「了解!」

僅かだが焦りを含んだ光秋の指示に応じるや、恭弥はルミナの照準

を全長30メートルはあろうゴーストの頭部に合わせる。

(ギリギリ? いけるか!?)

有効射程を気にしつつ引き金を引き、放たれたビームがゴーストの頭に当たるものの、目立った損傷は見られない。

「やっぱりこの距離じゃ……」

『それもあるが、ゴーストの装甲、否、外殻かな? あれの丈夫さは破格過ぎて射撃武器はほぼ通じないらしい』

『じゃあ何で撃たせたのさ?』

『こつちに気を向ける為ですよ』

カノンの問いに光秋が応じるや、それに合わせる様にゴーストがこちらに頭を向け、本物の蛇よろしく大口を開けて怒りを表す。

直後、

「!」

『上昇して!』

言うや光秋は傍らのアトランティアを押す様に共に急上昇をかけ、その一瞬前に正面からのただならぬ悪寒を感じた恭弥は反射的に右に機体を大きく動かす。

一瞬後、3機のいた空域をゴーストの口から放たれた無数のエネルギー弾が横殴りの雨の様に過ぎていく。

『とりあえずこつちに気づいてくれたな。高槻さんたちは下がって』

『だから! 私も戦うよ。ただリグルを降ろす時間だけ——』

『こんな所で降りたら巻き込まれるわよ! それならこのままがいい!』

『……だつてさ』

『……わかりました。ただし、僕の指示に従ってもらいますよ』

『OK! OK!』

カノンのやや軽い返事を聞くと、光秋は恭弥に指示を出す。

『というわけでホワイト3、援護射撃を』

「了解!」

『この前みたいに勝手に前に出るなよ』

「出ませんよ。もう」

釘を刺す光秋に素直に応じると、恭弥は鎌首を上げて迫ってくる。ゴーストに照準を合わせる。

「!」

数発連射してこちらの注意を向けると、その隙に下に回り込んだニコイチが腰溜めにした右拳を喉元に叩き込む。

が、

「ニコイチの拳が効かない!？」

ゴーストの上半体が後ろに倒れ込むものの目立った損傷は無く、恭弥は思わず驚愕の声を上げる。

その間にもゴーストは体をねじって頭を向けるや光の散弾を放ち、ニコイチはすぐに左に避けるものの、まともに当たったコンクリートの地面に無数の大穴が空く。

ゴーストは尚もニコイチを追って首を廻らせ、口を開けようとする。

が、

「おい、ニシキヘビーこつちだ!」

挑発する様に叫ぶや恭弥はビームを連射する。アトランティアも突き出した右手に円形の魔法陣を出現させ、それが回転しながら縮小して一筋の閃光となって飛んでいく。アークブレイズである。

2機の攻撃はゴーストの頭に当たるが尚も損傷は見られず、寧ろ自分たちに向けて放ってきたエネルギー弾を左右に分かれて慌てて避ける羽目になる。

(↑……少しかすったか)

左脰の辺りに切り傷の様な痛みを覚えると、恭弥はシルフィードの同じ箇所を被弾を直感的に理解する。

『大丈夫か?』

「僕の方は左足をちよつと。加藤大尉は……」

高度を上げて距離をとり、自分の許に寄ってきた光秋に応じつつ、恭弥は刃物で切った様な傷があるニコイチの右脚を見る。露出した赤い骨格が筋繊維を想起させ、一瞬吐き気を覚える。

『僕もそんなところだ。骨組みに届かなかっただけ運がいい。高槻さ

んは?』

『ごっちは肩やっちゃった』

そうカノンが応じながら近寄ってくるアトランティアの外側に向かって伸びる右肩は、確かに赤い宝石の近くまで欠けてしまっている。

しかし、

『と言っても……』

そうカノンが続ける間にも、破損箇所が光が集まり、一瞬後には欠けていた肩が元の形に戻る。

(再生!? あんなのアリか?)

その光景に、恭弥は内心目を丸くする。

『あのビームの散弾が厄介だね。お蔭で迂闊に近づけないよ』

『ですね……』

その間にも状況分析するカノンに応じつつ、光秋は眼下のゴーストにニコイチの視線を向ける。上昇してこちらを見失ったのか、ゴーストは何かを探している様に辺りに首を廻らせている。

『せめて一夏君がいてくれれば……』

『零落白夜ですか?』

『ああ。もつとも、いない人のことを言っても仕方ないが……これはいよいよか……ゴースト相手に後のことを考える余裕は無しか』

恭弥に応じつつ呟くと、光秋は意を決した顔をする。

『桂木曹長、初めてシルフィードに乗った時に出した大技、あれ今出せるか?』

『え? いや……難しいです。そもそもあの時は無我夢中で、どうやって作動させたのか未だにわからなくて……』(訓練の時も何度か試したけど、結局わからなかった!)

光秋の問いに正直に応じながら、恭弥は初めての戦闘で最後のクロイツリッターを吹き飛ばしたあの技の感覚を未だに掴めない自分に歯軋りする。

『そうか……なら数で攻めよう。僕が盾になる。2人は後に続いてゴーストに接近。頭部にそれぞれに剣を突き立たせろ』

「盾って！ニコイチだってあの光弾耐えられないでしょ!?どうするんです?」

『こうするんだよ』

突然の指示に戸惑う恭弥に叱ると、ニコイチは2機に背を向け、直後に節々から赤い燐光が漏れ出す。

(これって……ライカさんを助けに行った時の!)

恭弥が理解する間にニコイチの節々を覆うカバーが末梢へ向かって開き、露わになった骨格から燐光が溢れ出す。

『これって……アークブレイズ?』

『……ちよつと違うみたい。そもそも、私もこんなの見たことない』

カノンとリグルが戸惑う間に額の角が伸びて刃物の様な一本角になると、ニコイチは左手をかざし、掌の合間から漏れる燐光を正面に集中させて巨大な円形の盾を形成する。

『行くぞ!』

「……了解!」

『……了解!』

動揺が残る恭弥とカノンの返事を聞くと、ニコイチは光の盾を前にしてゴーストに突っ込む。

それで気づいたゴーストは口からエネルギー弾を撃ってくるが、いずれも光の盾に遮られ、ニコイチにも、その後ろに続く2機にも当たらない。

そうしてゴーストの口元まで近づくと、シルフィードとアトランティアは盾から出て、落ちる様にゴーストの頭にそれぞれの剣の先を突き刺す。

が、

『な!?!』

「浅い……」

加速を乗せた刃は先端が少し刺さっただけで思ったよりも食い込まず、首を強く振ったゴーストの力に負けて2機とも吹き飛ばされ、体勢を立て直す間も無く地面に叩きつけられる。

「うう……」

上下が激しく入れ替わった視界に、恭弥は目を回す。

が、モニターに映る光景——盾を消したニコイチがゴーストの顎に啞えられている——に、それも一瞬で回復する。

「!? シュウさん!」

叫ぶ間にもニコイチは手足を伸ばして抵抗するが、丈夫な空き缶でも潰すかの様にゴーストの口は徐々に閉まっていく。

「嘘だろうか?……」(あれって、『CeAFoS』が発動して推力が上がったシユルフツェンを正面から押さえ込んだ形態だろうか?それがパワー負けしてる?……)

目の前の事実には、恭弥は改めてゴーストに恐怖を覚える。

同時に、別も想いも抱く。

(シュウさんが作ってくれたチャンスだったのに、僕は何をやってるんだ! シルフイードがどんなにいい機体だからって、唯一の操縦者たる僕が使いこなせないんじゃないか? ……なにより、もう守られてばかりじゃなにはずなのに……)

自分の無力さに、無意識に拳を握り締める。

『守る』、か……)

その言葉に、離艦前に一夏と交わした会話を思い出す。

(……そうだ。一夏君にはライカさんを頼んだじゃないか。僕だってシュウさんを助けないと……)

徐々に明らかになっていく決意に呼応する様に、ルミナの刀身が薄っすらと赤く光り出す。以前と比べれば弱々しい、太陽と6等星ほどの差がある儂い光だが、それでも刀身を覆ってくれる。

(それに、一夏君言ってたじゃないか……)「仲間を守れなくて、何が男だ!」

腹の底から叫ぶや、恭弥はペダルを一杯に踏んで一気にゴーストの首の付け根に接近し、勢いのままに光を纏ったルミナを突き刺す。

光の所為か、先ほどよりも気合いが入ったからか、刃は1/5ほど食い込み、ゴーストが大口を開けるやニコイチはすぐに後退する。

「よしー!」

それを見届けると、恭弥も光が消えたルミナを抜いて距離をとる。



直後に痛みにも身をよじるゴーストが、尻尾を地面に叩きつける。

連邦軍がゴーストの注意を惹きつけても、地上の人々の混乱はすぐには治まらない。

ろくな避難誘導も行われぬ中を大勢の人々がバラバラの方向に走り出し、転んだ人は走る人に踏みつぶされる。

そしてユウと一緒に逃げるユリも、その一人になってしまった。

「きゃっー！」

「ユリ!! うっ……ユリ!!」

荒ぶるゴーストに怯える人々の流れに逆らいながら、ユウは土台にされてしまっているユリに手を伸ばす。

しかしその手は虚しくも、流れに負けて引き離される。

そして次の瞬間、ゴーストの尻尾が目の中の地面を抉えぐり、強化型コンクリートで舗装された道が跡形もなく消し飛ぶ。

そう、さつきまで歩いていた道が。初恋の相手が、手を伸ばして助けを求めていた道が。

そこに人の姿は無い。血も、肉片も骨片も無い。跡形もなく、だ。

「うわああああああああ!!!」

その光景にユウは絶叫する。

そして、その絶叫に応えるかのように、空からあるものが降ってきた。

ゴーストから距離をとった直後、

「!? ……何だ?」

ゴーストとは別の、しかしよく似た——生々しくも冷たい、それ故に異様な——感覚が体を突き抜け、恭弥は慌てて辺りを見回す。

と、空から赤を基調とした巨大なものが降ってくるのを見る。

『「ネメシス08<sup>エイト</sup>」? ……ネメシスって……」

すぐに表示された情報に目を通し、出撃前に光秋が話していた新型

IADだと判断するものの、そんなものが空から降ってきた状況についていけず、しばらく呆然としてしまう。

その間にも、ネメシス08は抉られた地面を更に凹ませて、足元の少年に手を伸ばす。

巨人——巨大なロボットが、ユウに手を差し伸べる。

——All is calm All is bright——

ユイと話していた時に聞いた歌声が聞こえてくる。

ロボットの顔には人間のような”目”が2つ付いていて、その目は優しげだった。

そう思った途端、ユウはその手に飛び乗った。

15メートルの巨体が立ち上がり、ユウを胸部に設置されたコクピットに導く。

「やってやる。やってるぞ!!」

ハッチをくぐったユウの顔は、涙で濡れていた。

同じ頃。上空1000メートルに、連邦軍の最新鋭巡洋艦が旋回していた。

青い艦体は大きな翼を広げ、雲を切り裂くように飛ぶ。

「どういう事だシンジ!!何故ネメシス08が勝手に動いた!!」

「そんなのわかるわけないだろリーダー!もともと、詳細も知らされずにパイロットも無しに渡された代物だ!!」

キャプテンチェアの傍にある通信モニターに怒鳴りつけるその艦の艦長は、まだ20歳にもなっていないであろう若いメカニックにそんなことを言う。その会話に上下関係は感じられないが、彼らの年齢差は10歳以上ある。

「おいエリック、シンジを責めるな。それより見ろ、ネメシス08に少年が乗り込んだ」

「本当かレックス!?!」

青い巡洋艦——ヴェーガスのブリッジで、艦長であるエリック・ノヴァがレーダー士のレックニック・ジョンソンの報告を受けてモニターを覗き込む。

「あの少年が……ネメシスの選んだ適合者だというのか……それにアレは、合流予定の非特隊じゃないか？」

消耗気味のニコイチとシルフィード、情報の無い鎧の様な機体を画面越し認めつつ、エリックはその少年のあまりにも戦い慣れしていない、いわば素人っぷりを見る。

「どうするのエリック？あなたの指示を待ってるのよ」

操舵士のカトリーヌ・レインがエリックの指示を待つ。

エリックは艦長席に戻り、冷静にいくつもの指示を飛ばす。

「テンペストとギガンティックを投下する！サクラとフィルシアは直ちに発進準備だ！ネメシス08がいくら世界最強と謳われるネメシスタイプのIADでも、乗っているのが素人だ、現場の指揮官に通信を繋げ。2機は出撃後向こうの指揮官の指示に従え。ヴェーガスは高度を維持」

数分後、ヴェーガスの艦体左右に位置するカタパルトから、2機のIADが発進した。

コクピットに座り込むと、ユウは内部を観察する。

操縦桿が左右にあり、それを握ってみる。足下にはペダルが4つ、内装は全天周モニターになっていて、機械の中にいるという感覚ではない。

「これ、アーモードールA Dだよな……でもこんな機体は見たことないぞ」

言いながら、ユウは操縦桿を押し込む。

するとネメシス08と呼ばれるIADが光のマントをなびかせて加速した。

ゴーストが口を開け、無数のエネルギー弾を放つ。

「うわっ！」

それをユウは咄嗟に回避した。どうやって動かしたのかは、当の本

人の分かっている。だが、ネメシス08と意思の疎通をしている様な感覚はあった。

そんな感慨を抱いたのも一瞬、ゴーストは首を動かしてエネルギー弾がネメシス08を追い、ユウは再度回避するが、すぐにまたエネルギー弾が追いかけての繰り返しになる。

「どうする？ 避けるだけで精一杯だぞ!？」

思わず現状への憤りを声に出す。

直後、

『下がって!』

「!？」

通信越しの叫びと共にゴーストの頭部にビームが当たり、エネルギー弾が止んだ隙にユウはネメシス08を後退させる。

それと入れ替わる様に妖精の様な機体がビームを連射しながら高度を上げつつゴーストに迫り、それに続く甲冑の様な機体もかざした掌から閃光を撃って相手を攪乱する。

(動きが鈍い。疲れてるのか?) 「武器は、何か武器はないのか？」

高速で動きつつも若干キレを欠いた2機の動きに疲労を見ると、ユウは呼びかける様に呟く。

と、その問いかけにネメシス08が答える様にヴァーチャルコンソールを表情し、「ビームランス」という文字が目に入る。

「!」

ユウは迷うことなくヴァーチャルコンソールの「ビームランス」の文字をタッチし、それに合わせてネメシス08は腰に固定してある棒を引き抜き、先端から槍状のビームを発生させる。

武器はあった。しかしどうやって攻撃するかはまだ考えていない。

未だ2機は激しく動きながら交互に攻撃をかけてゴーストを攪乱するものの、それだけの攻撃を食らっても未だ目立った損傷が現れないゴーストに足踏みしてしまう。

そんな時、ネメシス08の傍らに少し小さい白い機体が降り立ち、モニターに連邦軍の制服を着たメガネの青年が映し出される。

『その機体——ネメシス08に告げます。こちらは連邦軍非特隊所

属の加藤光秋大尉です。そちらの名前を——!』

問いかけの途中でメガネの男——光秋は降下してくる青と黄色の機体に気づき、映像の中の顔をそちらに向ける。

直後にもう2つ通信映像が開き、自分と同じ歳くらいの少女たちの顔が映し出される。

『こちら地球連邦軍非常事態特殊対策部隊所属、サクラ・ルル。これより加藤大尉の指揮の下、貴方を援護します』

「え、え?…えと……」

『ほらサクラ、いつも言ってるけど固すぎだつて。はいこんにちは、フィルシア・ナイトウォーカーです。君、名前は?』

「ゆ、ユウです。ユウ・ヴレイブ」

『おーけー、ま、死なない程度にね。で、加藤大尉だっけ?どう仕掛けます?』

生真面目そうな桜色の髪の少女——サクラに動揺し、活発そうなエメラルドグリーン髪の少女——フィルシアに呆然とする間に、光秋は3人の顔とそれぞれの乗機を見回す。

『ノヴァ大佐から連絡があつた人たちですね。そうですね……中距離汎用型1に遠距離射撃型1、近接格闘型1か。こちらはそろそろバテてきたし……よし!桂木曹長、高槻さん、聞こえるか?』

何か思いついた顔をするや、光秋は攻撃を続けている2機にも通信を繋ぐ。

『はい!何です?』

『今取り込み中なだけど?』

焦りを含んだ2人の返答を聞くや、光秋はその場の全機に指示を飛ばす。

『IAD2機は砲撃戦用意。僕が合図したらシルフィードとアトランティアは急速離脱、同時にありつただけの火力を叩き込め。その間にネメシス08はゴーストに急速接近。その槍を奴に突き刺せ』

『了解!』

「え?…ええ!?!……」

自分を置いて急激に進んでいく状況に、ユウは今更ながらパニック

に陥りそうになる。

と、落ち着いた様子の光秋が語りかける。

『えー、ブレイブさん、でしたね?』

「は、はい……」

『僕としては実に不本意ですが、あの蛇を倒すのに協力してください』

「……蛇を倒すにはいいんですけど、オレは何をすれば……」

『さつきも言ったように、僕が合図したらその槍を蛇に……首の付け根の傷に突き刺してください』

「傷?……!」

言われて改めてゴーストを見ると、首の付け根に深めの刺し傷があることに気づく。

『本音を言えば、民間人、それも子供にこんな大役を押し付けたくなんてない。でも、今あの蛇に有効な一撃を出せるのは君の機体だけなんです。お願いします!』

「……わかりました」

映像の中で頭を下げる光秋に冷静に応じると、ユウはゴーストと向かい合って槍を構える。

「いつでもどうぞ!」

『では……』

ユウが心身共に準備ができたを見ると、光秋は2機のIADが配置についたのを確認する。

直後、

『砲撃開始!』

『了解!』

号令がされるや青いIAD——テンペストと、黄色いIAD——ギガンティックから大量の火線がゴーストに放たれ、同時にシルフィードとアトランティアが射撃を続けながら距離をとる。特にこの場で一番、否、一般的な機動兵器の基準から見ても過剰といえるほどの火器を積んだギガンティックの一斉射撃の威力は凄まじく、4方向から加えられる攻撃はゴーストを大いに攪乱させてくれる。

その間にユウはネメシス08に槍を構え直させて、光秋の合図を待

っ。

そして、

『今ですー!』

「はいー!」

光秋の合図に応じるや、ユウはネメシス08を突撃させる。

と、

「お前、飛べるのか!?! jumpじゃなくてfly!?!」

自身の問いにネメシス08が頷いたように思えた。

だが少し躊躇してしまう。現存するAD、というよりも20メートル級以下の機動兵器で、飛行能力のあるものは存在しないからだ。テスラ・ドライブの小型化の目途が立たない為に理論上不可能とも言われていた。先ほどから指示を出している白い機体は自由に飛んでいたものの、あれとてテスト機かなにか、少なくとも正式な技術ではないだろう。

それでもユウはネメシス08を信じ、ペダルを踏む。

すると、ネメシス08の光のマントがその光を増し、更に腰からはスカートのように同じ様な発光現象が起きる。

飛翔と共に、とてつもないGが襲いかかる。

上昇を止めると、一瞬だけ無重力状態になり、そしてすぐに重力に引かれた。

「うおおおおお!!」

青い光の軌跡が一直線にゴーストへ向かう。

4機の攻撃に視界と耳を奪われたゴーストは察知することもできずに、間合いに入ったネメシス08が槍を突き刺すのを許してしまう。

ビームの刃がシルフィードのつけた傷に沿って深々と入り、そのまま槍を勢いよく横に薙ぎ払ってゴーストの頭がもげる。

ゴーストはその苦しみからか、体を何度も地面に叩きつけ、そして赤い光を放ち、形質崩壊した。

それと同時に、ネメシス08は仕事を終えたかのように停止する。

ユウ・ヴレイブの初恋は悲惨な結果を迎え、彼の人生は思いもよらぬ方向へと向かっていく。

少年は薄暗いコックピットの中で虚空に手を伸ばした。

「明日、入学式だ……………」



## 9 戦女神たちの砦で 前編

(……痛い……)

あれからどれぐらい歩いたんだろ。目の前には崩れ落ちた家やお店の残骸が一面に広がる。

昨日まで人がたくさんいたのに、今は誰一人いない。

(……父さん……母さん……蓮<sup>れん</sup>………なんでだよ、何でこんなことに……)

痛みを我慢しながら歩き回り、人がいないかを探す。

でも見えるのは炎と瓦礫の山、山、山……。

(………誰もいない)

そう思った瞬間足がもつれ、地面に倒れる。

(痛い……それになんだか力が抜けてく)「……俺たち何かしたの……か……何も……してない……の……に……クツ……」

手に力を込めて再び起き上がると、フラフラしながら歩きながら思い出していた。

今日は蓮と一緒に、父さん母さんが運転する車で叶おじさんたちが発掘した【お伽<sup>テイ</sup>噺<sup>ル</sup>の遺<sup>レ</sup>産<sup>ガ</sup>】を見に向かう途中、空から眩い光が降り注いだ瞬間気絶して、気がついたら全身傷だらけで大の字に倒れていた。体を起こして目に入ったのは、黒く焦げた車の破片、そして、

『グルルルル』

闇よりも黒い6枚の翼を広げた鬼が唸り声を上げながら、血を流し傷だらけの蓮を掌に乗せ、大きく開いた口へと放り込む瞬間だった。「あ、あああ?………れ、蓮。ウウ……ウアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

『………!』

黒い鬼は一瞬驚いた様にこちらを見たが、背を向けて黒い翼を広げ空へと舞い上がり、やがてかき消す様に消えた。

それからは何も覚えていない。気がいたら村の中心に来ていた。

(痛い……痛いよ……)

痛み、恐怖、他にもいろいろなものが押し寄せ、涙が溢れる。

(……父さん、母さん、蓮、俺もうダメみたいだ……)

本当に心の中で何かが音を立てて折れ、膝をつきそうになった時、暖かい何かに包まれた。

『しつかりしろ！生きろ、頼む生きてくれ!!』

力を振り絞り最後に見たのは、白い鎧みたいな装甲を纏った大きい巨人だった。

「ハッ……またあの夢か……父さん、母さん、蓮……何で俺だけ生き残ったんだろう……教えてよ……」

いつのまにかに寝てしまった飛鳥は、久しぶりに4年前の夢を見て目覚めの悪さを覚えつつ、目の前に鎮座する巨大な赤い鳥の石像に顔を向ける。

あの日以降、偶にしか見ることがない夢。その度に何で生き残ったんだと思ってしまう。

しかし最近、飛鳥は違う夢をよく見るようになった。

(……『目覚めよ、他者の痛みと悲しみを己のモノとして感じる心優しく強き魂を持つ——の継承者よ』)

赤い鳥、青い龍、白い虎、緑の亀が、自分をじっと見ながら話しかける夢。

(でも赤き鳥……『炎凰』ってなんなんだ?)

数日前に祖父・源三から赤い鳥の石像を見せられた時、ずっと昔から知ってる様な感覚にとらわれた。

「赤き鳥……不死鳥……そんなわけないよな……俺みたいなやつが桃兄みたいになれるわけないよ……」

そう結論づけた飛鳥は端末を操作し、赤い鳥の石像の調査を始める。

(早くコイツの装者を見つけなきゃ……鬼たちのせいで当たり前な日常をこれ以上壊させない)

そう心の中で呟き解析を始める飛鳥は、しかし赤い鳥の石像の瞳が淡く輝いていたことに気づかなかった。

神奈川県厚木市に出現したゴーストは、謎多き最新鋭イミユニック・アーモードール

I A D”ネメシス08”の活躍により消滅した。

その機体は、連邦軍非常事態特殊対策部隊に所有権があり、戦闘終了後、彼らの母艦“ヴェーガス”に收容されることとなった。

高度を下げて地上に寄ってきたヴェーガスに両腕をテンペストとギガンティックに取り押さえられて運ばれるネメシス08、その様子をシルフィードのモニター越しに見ながら、恭弥はそのパイロットのことを考える。

(アレに乗ってた人、確かユウとか言ったけ……僕みたいに面倒ごとに巻き込まれちゃうのかな?)

未だネメシス08のコクピットに納まるユウに数日前の自分を重ねると、右隣に佇むニコイチ、その機外に出した操縦席に座っている光秋に顔を向ける。先ほどまで通信越しにライカやヴェーガスの艦長と連絡をしていたようだが、それが終わった今は目をつむり、黙々と前——ゴーストが形状崩壊した辺りに向かって手を合わせている。

視線を追って恭弥も前を見ると、破壊された街にはすでに近隣の連邦軍やヴァルキリーズの救助隊、レスキュー隊が入って救助活動や復旧作業が始められている。

(いつまでも転びっぱなしってわけにもいかないか……)

そう思うことで心中にわだかまるものを抑えようとする、合掌を解いた光秋の通信が入る。

『さて、ここで僕たちにできる仕事は終わった。恭弥君と高槻さんたちはヴェーガスと一緒にヴァルキリーズ極東支部へ向かってくれ。そこで先に行っているミヤシロさんたちと合流するように』

「シユウさんは?」

『僕は一旦伊豆基地に戻る。ニコイチの補修とか諸々済ませてくるから少し時間がかかるが、その間そちらの2人を頼むよ』

光秋に言われて、恭弥は全身傷だらけになったシルフィードとニコイチを改めて確認する。いずれも機体の重要部分に致命傷を負わなかっただけ奇跡といえよう。

この場にいる3機の中では、唯一アトランティア・ルージュだけが無傷の騎士然とした姿を佇ませている。

（光つたと思つたら元通りなんでもんなあ……にしても、実体兵器にはほぼ無敵のニコイチとシルフィードも、エネルギー兵器にはこのザマか……）「了解しました。高槻さん、エルプールさん、聞こえてましたか？」

そんな感慨と抱いたのも一瞬、光秋に応じた恭弥はアトランティアに乗る2人に呼びかける。

『聞こえてたよ』

カノンの返事を聞くと、恭弥はさらに続ける。

「では、上の艦——ヴェーガスの先導についてきてください」

『え？アレに乗るんじゃないの？』

「アレはさつき引き揚げた3機専用の母艦だから、それ以外が乗る場所はないんです」

『そっか……了解』

「ではシュウウさん、お先に」

『ああ。気をつけて』

光秋の返事を聞くと、恭弥はシルフィードを飛び立たせ、アトランティアと共にヴェーガスの後を追って極東支部へ向かう。

ヴァルキリーズ極東支部。

鬼対策の為に設立された非政府防衛組織・ヴァルキリーズの極東における活動拠点であり、世界各地に支部を持ちながらも本部を持たない同組織にとっては、事実上の本部を兼ねている。

その地下整備区画の一角では、横浜から帰還した第四分隊の戦機人の収容作業が行われていた。

「おいおい、コイツはひどすぎだろ……卸したての戦機人がスクラツ

「ブじゃねえかよ」

「ごめんなさい、城田主任……」

「まあ、ノゾミの姉御が怪我ひとつなかったから良かったけどさ……完全に直すには一月はかかるなくそれまでは予備機で我慢してくんない？」

第四分隊長・ノゾミと会話を挟みながら、黄色と黒の縞柄のツナギを着た茶髪の少年が装甲を外され固定されたフレーム状態の戦機人のダメージを整備端末でチェックしながら告げる。彼はヴァルキリーズ極東支部整備班主任・城田虎次郎。伝説の整備士・城田雷三の孫であり、腕は超一流だ。

「おし、みんな集まってくれ。戦機人を各パーツごとに分解して直すぞ」

「はい主任！」

整備端末に示されたプランに従い、流れるように戦機人を分解していく「チーム虎」の面々の半数は女性が占めている。DC戦争が停戦して間もない現在、男手の不足がその大きな理由である。当然年齢も若い子達が多いわけで、ヴァルキリーズは男子2：女子8の女だらけの大所帯になる。

「……腰椎パーツは三番テーブルに移動、脚部は四番と五——」

「すみません！」

整備の指示を出す虎次郎の言葉を遮る様に慌てた声が響き渡り、虎次郎やノゾミをはじめ格納庫にいる者全てが声が出した方向に顔を向けると、隣の格納庫から見慣れない白いワードスーツを纏った男が、比喩ではなく本当に飛んでくる。

「!?……な、なんだ？」

突然のことに虎次郎が動揺する間にも、男——一夏は周囲を見回し、現場で一緒だったノゾミを見つけるとその許に滑る様に駆け寄る。

「すみません！……この医務室って何処ですか？」

「え？医務室って……あ！」

「えつとね……」

そこで虎次郎は、一夏が抱えているぐったりと動かない少女——ユイに気づき、事情を知っているノゾミは基地内病院の場所を教えあげる。

「ありがとうございますー！」

礼を言うや一夏は2人に背を向け、ノゾミが教えた道のりに従って病院へ向かう。

「……なんだ？あいつは」

「連邦軍非特隊の隊員よ。さっき現場で一緒だった」

「ああ。隣に収容されたゲシユペンストとヒユツケバインのカスタム機の」

「ええ……といっても、どっちも下手したら『小型の特機』になりそうだけどね……」

連携して砲鬼を倒した瞬間を思い出しながら、ノゾミはその時抱いた感想を漏らす。

と、隣の格納庫からもう1人、今度は連邦軍のパイロットスーツを着た女性——ライカが2人の許に歩み寄ってくる。

「スツゲー美人！」

ヘルメットを取って顔を表したライカに虎次郎は思わず感動の声を漏らすものの、それに構わずライカはノゾミの前で踵をそろえ、様になった敬礼をする。

「先ほどは協力ありがとうございます。改めまして非特隊所属のライカ・ミヤシロ中尉です」

「極東支部第四分隊隊長のノゾミ・カワシマです。こちらこそ。お蔭で避難活動が円滑に進みました」

礼と自己紹介をするライカに、ノゾミも返礼して感謝を述べる。久しぶりの型にはまった敬礼に懐かしさと、僅かながら不快感を覚える。

それを知ってか知らずか、ライカはボロボロの戦機人を一見し、ノゾミに視線を戻す。

「機体はかなり傷んでいますが、お体の方は？」

「私は大丈夫です。戦機人のコクピットは丈夫にできてますし……」

謎のスーパーロボット」にも助けられましたしね」

ライカの労いに、ノゾミは半ば確信しているモモタロウの操縦者への皮肉を込めて返す。

「それよりも、時空崩壊つから出てきたあの子は？」

「彼女の身柄は最初に接触した我々非特隊が預かります。医療施設を使わせていただいたことには重ねて感謝します」

「いいえ。伊豆基地よりこちらの方がまだ近いですし、人命第一がヴァルキリーズのモットーですから」

頭を下げるライカに、ノゾミは誇らしげに応じる。

「……では、私は彼女の様子を見に行かなければならないのでこれで」「あ、その前に……」

自分たちの許から立ち去ろうとするライカを呼び止めると、ノゾミは胸や腕の辺りに装甲を兼ねた耐Gシステムを載せたライダースーツの様なもの——ヴァルキリーズのパイロットスーツに身を包んだ自分と、連邦軍のパイロットスーツを着たライカを見比べる。

「着替えはありますか？さすがにいつまでもその格好は……」

「……あ」

言われてライカは、普段着ている連邦軍の制服が伊豆基地の更衣室のロッカーに置かれてそれっきりなのを思い出す。

「……よかつたら、私の服貸しましょうか？」

「……お願いします」

察してくれたノゾミの申し出に、ライカは素直に応じる。

「じゃあ、部下の彼にも」

「彼は大丈夫です。制服を……持ってきてあるので」

「？……そうですか。じゃあ更衣室行きましょう。こっちです」

一瞬言葉に困りながらも断ったライカに首を傾げたのも束の間、ノゾミは自分も着替える為にいつも使っている更衣室に案内する。

「あ、ノゾミの姉御。司令が後で執務室に来いだとき」

「了解。着替えたらすぐ行くわ」

端末に入った通信を伝える虎次郎に応じると、ノゾミはライカと共に格納庫を出る。

(たぶん先程の戦闘に現れたモモタロウに関すること……でもあれに乗ってるのが私達姉妹の幼馴染の馬鹿桃矢だと伝えていいのだろうか?)

呼び出しの理由を察し、ノゾミはしばし迷うことになる。

伊豆基地に戻った光秋は、ニコイチを非特隊に宛がわれている格納庫へ向かわせ、その片隅に置かれているコンテナから白いブロックを出してそれを機体のあちこちに塗りつける。

ブロックが触れた箇所のはり綺麗さっぱり消え、そうやって全身を修復している様子は、戦でついた穢れを落とす禊の様である。

「こんなところかな?」

一通り修復を終えると、いくら減ったブロックをコンテナに戻し、それをニコイチに抱えさせて外に出る。

「白の方がどうなってるかわからんが、これだけあれば足りるかね?」

「……さてとね」

独り言を呟くと足をペダルにかけてニコイチを上昇させ、光秋は極東支部へ向かう。

極東支部上空に差しかかった恭弥は、管制塔からの指示に従って前を飛ぶヴェーガスと別れ、シルフィードを地下へ続くエレベーターに着地させる。

すぐ隣にアトランティアが着地するとエレベーターは降下し、通信越しの指示に従って機体を指定された格納庫に移動させる。

「あ、シルフツェンと白。ライカさんと一夏君もう来てるんだ」

入った格納庫のハンガーに佇む目立った損傷の無い2機に安堵しながら呟くと、シルフィードを向かいのハンガーに納め、ワイヤーを伸ばして地面に降りる。

と、

「ウソ? 本物のゲシユペンスとユニコーン!? 見間違えじゃないよね



「？」

「？」

興奮した声に上を見ると、シルフィードの隣のハンガーに納まるアトランティアのハッチから身を乗り出したカノンが目を輝かせて正面の2機を注視している。

「ちよつとカノン！危ないから！」

「え？……ああごめん。今降ろすよ」

ただでさえ狭いコクピットの中、カノンが体を前に出して隅に押しやられているリグルの声に我に帰ると、カノンはアトランティアの手でリグルを地面に降ろし、自分もワイヤーで機を降りる。

地面につくやカノンはシュルフツェンと白の許に駆け寄り、

「私の記憶とは……特にユニコーンの方はだいぶ違うけど、やっぱり本物だあ！まさかこんなところで実物が見られるなんて……生きてて？よかったあー!!」

と、再び興奮した声を上げる。

(演習見学に行った時のバニングスみてえ……シユールだなあ……)

そんなカノンの様子に友達を連想し、男物の騎士の様な服を着て腰に剣を提げた少女がロボットに興奮する光景にそんなことを思うと、恭弥はふと感じた疑問を訊いてみる。

「ゲシユペンストや白を知ってるんですか？こつちのことはよく知らない口ぶりだったけど」

「そりゃあ……て……あれ？」

途端にカノンは首を傾げる。

「えーつと、どこで知ったつけ？凄く好きなものだったんだけど……胸のどこまで出かかっているんだけどな……」

「また微妙な所で……エルプールさんは？」

「私はこんな機体は初めてです。見覚えなんてありません……私としては、シルフィード、でしたか？アレがアトランティアとどこことなく似ていることの方が気になります」

「言われてみれば、確かに」

リグルの指摘に、恭弥は改めて2機を見比べてみる。どちらも西洋

の鎧を纏った様な姿をしており、自然と同じ様な印象を抱いてしま  
う。

「それに、貴方の機体とあの白い機体、あと貴方がたの指揮官が乗って  
いた小さい機体からは、得体の知れない力を感じます」

「力？」

「そこにいるだけでこちらを威圧する様な……直接肌を押されている  
様な圧迫感……とでも言えばいいのでしょうか？常ではないですし、  
時によって強弱はありますが、そんなものを感じるんです……」

「はあ……？」

シルフィード、白、ニコイチに対するリグルの独特な感想に、恭弥  
はなんと返していいかわからなくなる。

と、

「こりやあまた、趣味的な機体だなあ。傷だらけじゃねえか……白い  
ヒュツケバインといい、非特隊つてのはこういう凝ったデザインが好  
きなのか？」

「？……」

突然の声に恭弥は顔を向けると、黄色と黒の縞柄ツナギを着た男が  
格納庫入口からシルフィードとアトランティアを眺めている。

「……………虎<sup>とら</sup>？」

男——虎次郎に顔に見覚えを感じた恭弥は、知らぬ間に声を漏ら  
す。

「……………恭弥？……………お前恭弥か？」

「やっぱり！虎か！」

声が聞こえたのか虎次郎も恭弥に気づき、誰だかわかるやお互いに  
駆け寄る。

「オイオイ！中等部卒業以来か？なんでこんなところに……つうかそれ  
連邦軍のパイロットスーツじゃん！」

「この間横浜で未確認機の……ルミエイラの襲撃事件があったろう。  
その時、成り行きっていうかさ……虎こそ、なんでここに？四天堂園  
辞めたの？」

「辞めてないさ。学業の傍ら、ヴァルキリーズで整備士やってんだよ。

「こう見えても主任だぜ！」

「てことは、部下とかいるの？」

「ああ。各所への指示が一通り終わったんで、息抜きに非特隊って連中の機体を観察にな……ん？この格納庫にいるってことは……まさかお前も？」

「ああ。その所属」

「……てことは、あのスツゲー美人の女パイロットが上官？」

「ライカさん？やっぱ美人だよなあ」

「カー！羨ましいなあ！コノオ!!」

「ちよ！虎！やめ……！」

「……………あのー」

突然の再会に困惑したのも束の間、すぐに昔の調子を取り戻してじゃれ合う2人に、すっかり蚊帳の外に置かれたカノンが控えめに呼びかける。

「お取り込み中悪いけど、お二人は知り合いなの？」

「ああ、すみません。つい……」

我に返った恭弥は虎次郎から離れ、カノンとリグルに紹介する。

「僕の幼馴染の城田虎次郎。愛称は『虎』。小中高一貫の学校と一緒に通ってたんだけど、高校進学の際に僕の事情で別れて、その後はお互い都合が合わなくてそれっきり」

「虎次郎だ。みんな『虎』って呼ぶからそれでいいよ。お二人さんは？」

「私は高槻カノン。今のところ迷子の子猫ちゃんてどこかな。こっちは私の主のリグル・フォン・エルプール」

「どうも」

カノンの紹介に、リグルは手短に頭を下げる。

「よろしく……とところでお前ら、極東支部ごくとうしぶになにしに来たんだ？」

「ああ、そうだ。先にもう2人来てるはずなんだけど、何処行ったわかるか？」

「美人の上官と見慣れないワードスーツ着た奴？」

「そう」

「それなら医療施設の方だな。気絶した女の子抱えていったよ」

「何処だ？」

「その前に、俺の着替え貸してやるよ。さすがにその格好のままじゃよ」

「ああ、そうだな……」

虎次郎の指摘に応じると、恭弥はカノンとリグルの方に顔を向ける。

「ちよつと着替えてくるんで、ここで待っててください」

「言つとくが、ここも機密保持とか危険箇所とかあつから、あんま動かないでくれよ」

「りよーかい。ゲシユペンストとユニコーンを堪能して待つてるよ」

恭弥の断りと虎次郎の注意に応じたカノンは、直後に2機に熱い眼差しを向ける。

周囲を物珍しそうに、あるいは不安そうに見回すリグルを見ると、恭弥は虎次郎の後を追って更衣室へ向かう。

(はあー……気まずかった……)

ヴァルキリーズ部隊長用の白地に赤紫のラインが入ったブレザー型制服に着替えたノゾミは、執務室へ向かう途中、ライカとの着替え中の沈黙を思い出して溜息を吐く。

(ダメね。連邦軍を前にするとどうしても身構えちやつて……それに……)

着替えを始めて早々に気づいた自分の初歩的なミス、それによつてますます気まずい雰囲気を作ってしまったことに、ノゾミは穴があったら入りたい心境になる。

そんなことを考えている間に執務室の前につき、声をかけると空気が抜ける音と同時にドアが開く。

室内中央には大きな執務机が置かれており、デザインは自分と同じながら濃紺に赤のラインが入った司令用の制服を着たウェーブがかかった紫色の長髪の女性が座っている。彼女こそリトス・ミッターナ

ハト。軍のあまりにも非道な作戦を目の辺りにして退役したノゾミをヴァルキリース極東支部所属にするや否や第四分隊の隊長に任命し、27歳で極東支部司令を務める才媛である。昔は軍とは関係ない分野で活躍していたらしいが、詳細を知る者は少ない。

さまざまなデータが送られくる端末を一旦閉じると、リトスは顔を上げてノゾミを見据える。

「帰投早々すまないわねノゾミ・カワシマ第四分隊長……先ほどの戦闘で彼、認識コード『モモタロウ』と会話したそうね」

「は、はい……逃げられてしまいました……でも彼は将鬼から私を守ってくれました……」

「そう……ノゾミ分隊長、特別任務を与えます……今後モモタロウが現れたなら彼と共同戦線、もしくは話し合いの場を設けたいと伝えてくれるかしら」

「共同戦線……それに話し合いですか」

リトスはいつも最善の策をとる人である。それはノゾミも充分知っている。

しかし、

（……でも、桃矢のあの様子だと共同戦線は難しいし、話し合いに応じるかどうか……）

去り際の様子から、どうしてもそんな不安がよぎる。

「ああそれと、時空崩壊から出てきたという少女、彼女はしばらくこの病院に検査入院することになったから。それに合わせて、非特隊も彼女の監視兼護衛ということここで留まると、先ほどヴェーガス艦長のエリック・ノヴァ大佐から連絡があったから、後で他の隊員たちにも伝えておいてちょうだい」

「ヴェーガスって、先ほど滑走路に着陸した青い飛行艦艇……了解しました」

そんな連絡があったことを思い出しながら応じると、ノゾミはドアへ向かう。

（……桃矢との共同戦線か……上手くいくかしら？それに非特隊がしばらく留まるってことは、ミヤシロ中尉ともまた会う機会が……その

時は、改めて丁重にお詫びしておこう)

仕事上と個人的な不安を抱えながら、ノゾミは執務室を後にする。

極東支部に到着した光秋は、通信機越しの指示に従って非特隊に宛がわれた地下格納庫へ向かい、部屋の隅にコンテナを置くと、ニコイチを空いているハンガーに納める。

防具一式を機内に置いて降りると、規格の合っていないPT用ハンガーに佇むニコイチを一見する。

(しまえばいいんだろうが、防具付けっぱなしで歩くわけにもいかなからな……白とシウルフツェンの方はとりあえず目立った傷はないか……)「さて、まずはこの司令に挨拶に行かんと」

傍らの2機の様子を確認して断じると、光秋は作業を行っている隣の格納庫に行ってみる。

「すみません」

「はい?」

作業指揮を執っている黄縞模様のツナギを着た男性——虎次郎に、周囲の騒音に負けない声で呼びかける。

「隣の格納庫を貸してもらってます、非特隊主任の加藤といいます。司令室はどちらでしょうか?」

「ああ、恭弥の上官さん?ちよつと待ってて」

言うや虎次郎は駆け出し、何かを手に持ってすぐに戻ってくる。

「その前に、部外者はこれ付けて」

言いながら差し出されたのは「GUEST」と書かれた札であり、光秋は言われた通り付いている紐を首に提げ、騒音の中執務室への道を教えてもらう。

「……わかりました。ありがとうございます」

所々作業の轟音に潰されて完全には把握できなかったものの、忙しそうな様子に長く引き止めてはいけなれないと思い、わかる部分だけを頼りに歩き出す。

(わからない所は、途中ですれ違った人に訊けばいいだろう)

そう思っていた。

しかし、格納庫から歩き始めて数分後。

「……………まいったな」

予想に反して誰にも会うことなく、曖昧な説明を頼りに適当に進んだ結果、地下通路の真つただ中で道に迷ってしまふ。

（飛んでる時に見えた中央の大きなビル、要はあそこに執務室があるんだよな？ だったら地上を行けば……………）「て、地上への行き方もわからないんだよなあ。階段らしいものはないし……………」

同じような景色が続く周囲を見回しながら、光秋は途方に暮れる。  
と、

「そこで何をしていますか」

「！」

突然の呼びかけに声が出た方向に顔を向けると、茶色地に白のラインが入ったブレザー——ヴァルキリーズ一般職員の制服を着た黒髪の女性が速足で近づいてくる。

「その先は立ち入り禁止区域です。部外者は入らないでください」

「立ち入り禁止？……………すみません。道に迷ってしまって。司令のお部屋はどちらでしょうか？」

「司令？……………連邦軍……………失礼ですが、そちらは？」

「ああ、申し遅れました。こういう者です」

険しい表情で訊いてくる女性に、光秋は懐から名刺を差し出す。

「……………作家がヴァルキリーズになんの用でしょうか？」

「あーまたやっちゃった……………すみません。こつちです」

毎度のことながら間違えて渡した名刺を取り上げ、正しい名刺を渡し直す。

「……………非常事態特殊対策部隊って……………」

「ご存じですか？」

「さつき横浜の鬼の鎮圧に出た時一緒でした」

「ああ、ミヤシロさんたちと戦ってくれた部隊の方ですか。その際は  
どうも」

「……………いいえ。こちらこそ、そちらに助けられました」

部下が世話になったことに対する礼に光秋は頭を下げ、突然の礼に女性は戸惑いながらも会釈を返す。

「……えっと、執務室に行こうとしてるんですよね？それなら案内します」

「いいんですか？」

「また変な場所に行かれても困るので……」

「ありがとうございます。そういえば、そちらは？」

「……ミオ・カンザキ。極東支部第四分隊の隊員です」

自己紹介を終えると女性——ミオは歩き出し、光秋もその後が続く。

(まるつきり逆方向だったか。道理で行けないわけだ……)

進む道にそんなことを思いながら、光秋はミオに続いてエレベーターに乗り込み、奥の壁に背中を預ける。

「……ところで、カンザキさんいやに可愛く見えますね？失礼ですがおいくつですか？」

「か、かわ——!?!……じゅ、19です……」

光秋の唐突な発言に、ミオは思わず絶句しつつ応じる。

光秋は「若く見える」くらいのつもりで言ったのだが、それをミオが知る由もなく、

(何言ってるの？この人)

と、不思議なものを見る目をどうしても向けてしまう。

「まだ未成年か。なるほどねえ……その歳でこんな仕事に就いてるなんて立派ですね」

「い、いえ……」

「因みに僕は今24です。あ、でも、僕も今のカンザキさんくらいの歳にはもうそこそこ面倒な仕事に就いてたかな。流石に鬼とやり合うようなことはしませんでしたが」

「……そう、なんですか……」(悪い人ではないみたいだ)

続けて言われた褒め言葉に若干視線の険しさを抑えると、振られた話に短く応じる。

もつとも、光秋もそう長く話すことはせず、未知のものへの視線を



向ける少女とぼんやりと扉を見つめるメガネを乗せたエレベーターは静かに上昇を続ける。

極東支部滑走路脇の格納庫に收容されたヴェーガス、そのブリッジでは、2人のクルーが確保したネメシス08の適合者の処遇について悩んでいた。

「あの少年……ちゃんと艦内に勾留したな？」

「ええ。指示通り、一番深い区画の部屋に入れておいたわ」

「今のところそれしかないか………あそこなら仮に部屋を抜け出せても、艦の外には簡単には出られんだろうし、被弾した時のダメージも届きにくいしな」

連邦軍の一般クルー用の赤い制服を着たカトリーヌの返答に、艦長の白い制服を着たエリックは嘆息混じりに応じる。

と、ブリッジのドアが開いて2人の少女が入ってくる。1人はタイトなシャツにスパッツ、その上にパーカーを羽織った桜色の髪の少女——サクラ、もう1人はへそ出しTシャツにショートパンツと露出が多い緑髪の少女——フィルシア。

「あれ？他のみんなは？」

「艦内各所の点検に行ってるわ」

自分たち以外誰もいないブリッジを見回しながら問うフィルシアに、カトリーヌが応じる。

と、サクラがエリックの許に歩み寄る。

「エリック、ネメシス08に乗ったあの子、このまま私たちに同行させるんですか？」

「俺だって正直不服だが、貴重な適合者だからな。少なくともこのまますんなり帰すわけにもいかん」

「そうですけど………」

エリックの返答に、サクラは納得しきれない顔をする。

と、フィルシアが会話に加わる。

「同行つていえばさ、非特隊の別働隊も、1人保護したんだよね？確か

時空崩壊から出てきたって」

「そうだ。今はここの病院にいる。報告によると、お前たちと同じ年頃らしい」

「へー……せっかくだし、お見舞いに行こうかな？隊の他のメンバーにも挨拶したいし。サクラも行こうー」

「え？でもテンペストのチェックが……」

「そんなのはシンジにでも任せればいいじゃん。それに同僚同士の親睦を深めるのも大事だし。さ、行こうー」

戸惑うサクラの手を握ると、フィルシアはそのままブリッジを出ていこうとする。

「あ、もし……いや、十中八九会うと思うが、主任の加藤大尉に会ったらよろしく言っておいてくれ。本来なら俺が直接言わなきゃいけないだろうが、ネメシス08の件でしばらく艦を離れられないからな」

「りょーかいー！」

エリックの頼みに応じると、フィルシアはサクラを引っ張って今度こそブリッジを出ていく。

ドアの陰に消える2人を見ながら、エリックはふと呟く。

「……非特隊には、俺たちが合流する以前からあれくらい歳の隊員がいるそうだな」

「……後悔してるの？大人の事情に子供を巻き込んだことを」  
「……」

カトリーヌの問いにエリックは答えることなく、窓の外に広がる無機質な格納庫内の景色を静かに見つめる。

ミオに案内されてしばらく、光秋はようやく執務室の前にたどりつく。

「ここです。執務室」

「よかったあ、なんとかついた。いや、ありがとうございました」

ミオの説明に、光秋はほっとしながら深々と頭を下げて応じる。

「いえ、道を教えただけですから……その……加藤大尉はこの後予定ありますか？……司令への挨拶が終わってからということですが……」

光秋の礼に応じたのも束の間、ミオはやや言い辛そうにしながらも気になったことを訊いてみる。

「この後は……まずこの病院に収容された女の子の様子を見に行かないと。そこで非特隊の他のメンバーとも合流するでしょうね。一通り確認事項を済ませたら、一旦伊豆に戻って大陸に立ちます」

「大陸、ですか……？」

「今日はもともと、その委員会の基地の視察に行く予定だったので」  
「そう、ですか……」（そうになると、しばらく会えない……）

弱々しく応じると、ミオは少し考える。

「……あの、よろしければこの後、病院に一緒に行ってもよろしいでしょうか？」

「え？」

唐突な申し出に、光秋は一瞬返事に困る。

「そりやまた、なんで？」

「え？……いや、その………また迷子になって変な所に迷い込むといけませんから。私が道案内してあげます！」

「……確かに、それがいいかもしれませんね。じゃあお願いします。どこで待ち合わせれば？」

「ここで待っています」

「ここで？……椅子もなにもありませんよ？」

「お構いなく。私はいくらでも待てます」

「……じゃあ、お言葉に甘えようかな。後でお願いします」

「はいー」

ミオのよく通る返事を聞くと、光秋は執務室のドアをノックして中へ入る。

（……加藤光秋大尉。いきなり変な名刺を渡したり、突然私のことを可愛……褒めたり、よくわからない人だ……でも、悪い気はしない。不思議と興味が湧いてくる……）

光秋の入ったドアを見つめながら、ミオは先ほどまでのことをそう振り返る。

(思ってたより若いな)

光秋が執務室に入って最初に思ったこと、そして机を挟んで座るリトスに対する第一印象がそれだった。

基地司令という立場からレイカーの様な高齢者を想像していたのだが、目の前に座る女性はその予想をあっさり裏切るほどに若々しい容姿である。

(僕と同じ、いや、少し上か？少なくとも30前だろう……)

独り遊び感覚でリトスの歳を予想しつつ机に歩み寄ると、光秋は懐から名刺を差し出す。

「はじめまして、ミッターナハト極東支部司令。私こういう者です」

「……貴方が新設された非特隊という部隊の隊長、いえ、主任ですか。こちらこそよろしく」

(よし！今回は間違えなかったぜ！)

恭弥に会って以降初めてきちんと名刺を渡せたことに、心の中で親指を立てる。

「それと、私のことはリトスでかまいませんよ。みんなそう呼びます」  
「そうですか？では、リトス司令……」

名前に肩書きを付けることに違和感を覚えながらも、光秋は話を続ける。

「この度は、こちらが保護した少女を受け入れていただきありがとうございます。すぐにご存じかと思いますが、彼女が回復するまで我々はこちらに滞在させていただきします。いろいろとご迷惑をかけるかと思いますが、よろしく願います」

言いながら、頭を深く下げる。

「お気になさらず。人命第一がヴァルキリーズのモットーですし、こちらの部下も私も部下を救ってくれました。お互い様です」  
「そうでしょうか……」

「それに滞在される理由も理解しています。それに、今後も鬼が出れば、また共に対処することにもなるのでしよう?」

「はい。あらゆる脅威に対処するのが我々非特隊の務めですので」

「……それならば」

何かを考える顔をしたのも一瞬、リトスはあることを話すことを決める。

「加藤主任、今後鬼対策で共闘することを考えて、お話しておきたいことがあるのです」

「なんでしよう?」

「はずはこれをご覧ください」

言うとりトスは机の端末を操作し、画面を光秋に向ける。

「……最近の鬼の活動記録です」

言われて光秋はメガネの位置を調整し、画面に顔を近づける。

「……拠点がこの4年で20箇所ほど完全破壊されている?」

「そうです。知っての通り、鬼達の拠点は鉄壁の守りで固められています。例え量産型の雑鬼兵や砲撃戦型の砲鬼の攻撃を掻い潜ったとしても、指揮官機であり群を抜いた性能を誇る将鬼が待ち構えています……都市を守るぐらいの戦力しか持たない私達ヴァルキリーズではとても無理、DC戦争の疲弊から立ち直り切れていない連邦軍でも似た様な状況でしょう。こんなこと、本来ならあり得ないことなんです。そして最近、この極東支部の近辺でも鬼達が現れて、直ぐに反応がロストしたんです。その際、未確認の鬼らしきものが居たと民間人が証言しています」

言うとりトスは端末を操作して映像を切り替え、特機ほどはあろうかという巨大な人型を写し出す。周辺に立ち上る炎や煙の所為で細部まではわからないものの、白を基調としたソレが鬼数体を叩き伏せ、殴り、貫き、切り裂き、頭を鷲掴みにして握り潰し、オイルと金属片を辺りに撒き散らせながら地面へ叩きつけ、鬼神の様に殲滅している。

『ム、ムモムモツツアルロー………ガベア』

『ウオオオオオ!』

最後の鬼を殴り潰して爆発させると、ソレは鬼達の残骸の上に立ち、雄叫びを上げる。

その姿を最後にノイズが走って映像が消え、光秋はメガネの位置を戻しながら顔を離す。

「白い大型機……コレが先ほど現場に現れた自称『モモタロウ』、と?」  
「おそらく」

応じつつ、リトスは消えた画面を閉じる。

「……私の推測では、モモタロウは味方だと判断しています」

「味方、ですか……しかし、現場で僕の部下が対峙した際は、一触即発の事態になったそうですが」

「……これはあくまで私見ですが、あの機体は映像を撮影した日にしろ、先ほどの戦闘にしろ、民間人を守るように戦っていました……これが理由です。部下の方たちとの件は、彼なりの訳があったのかもしれない。それに、本格的に一戦交える気もなかったのではないのでしょうか。現にアクシデントで戦闘が中断した際は、何もせずすぐに撤収したそうですし」

「はあ……」

あくまでもモモタロウを擁護する構えのリトスに、光秋は曖昧な返事をする。

(僕が直接見たわけでもなし、判断材料も少ないから……)

心中にそんな感想を呟く間にも、リトスは話を続ける。

「それで、ここからが本題なのですが……今後モモタロウが現れた場合、彼と共同戦線、もしくは話し合いの場を設けたいのです」

「共同戦線……話し合い、ですか……」

思わぬ提案に、光秋は束の間返事に困る。

「すでに部下の一人に同様の命令を出しています。非特隊に対してはこの協力、せめて妨害しないことを約束していただきたいのですが」

「……まあ、協力というのがどういうものかはわかりませんが、少なくとも妨害はしません。こちらでも避けられる争いは避けたいですし、話し合いで解決できればそれに越したことはない。ただ、相手が攻

撃の意思を見せた場合はこの限りではありません。部下の命も大事ですので」

「それについては了解しました。もっとも、その心配はないと思いますが」

「……随分とモモタロウを信頼していらっしやるんですね」

「迷いなく応じるリトスの態度に、光秋は感じたままを呟く。

「ただ、鬼対策についてはそちらがプロですからね。この手の判断はそちらに従わせていただきます」

「ありがとうございます」

「その上でこちらからも確認なのですが、ルミエイラ、例の鬼を守った勢力について、現場で遭遇した場合、どの程度こちらに協力できますか？」

「ヴァルキリーズといえど自衛権はあります。鬼以外の勢力についても、相手から攻撃してきた場合には自己防衛の範囲で反撃が認められているので、先ほどの様な事態に再び陥っても積極的に協力して対処していけると判断しています。その点はご安心を」

「それなら結構です。とりあえず、モモタロウの件は了解しました。部下にも連絡しておきます。今回はこれで失礼させていただきます。ありがとうございます」

一礼すると、光秋は振り返ってドアへ向かう。

「加藤光秋……迂闊な即断はしないか……それにしても彼、何者なのかしら？」

部屋を出ていく光秋の背中を見つめながら、リトスは一連の会話の中で抱いた違和感をひっそりと呟く。

執務室を出てすぐ、光秋は壁に背中を預けて待っていたミオに出迎えられる。

「お待たせしました。すみません。思ったより長引いてしまって」

「いいえ。私は問題ありません……では早速、基地内病院に案内します」

「お願いします」

光秋が応じるやミオは歩き出し、その後を光秋はついていく。

「……………」

「……………」

元来口数が少なく2人の間には自然と沈黙が広がり、光秋は特になんとも思わず、ミオはやや気まずさを抱いて執務室がある極東支部中央のビルを出る。

そこから病院へ向かって歩いていると、

「おーい！ミオ」

「…………アキラ。サヨコも」

突然の呼びかけに2人は足を止め、辺りを見回したミオは自分たちの許に歩み寄ってくる茶色い制服を着た2人を認める。

1人は日焼けが目立つ活発そうな女性、もう1人はオレンジのサイドテールが目立つ大人しそうな女性である。

「さつきから何処行つてたんだよ？ていうかこのメガネは？」

「ちよつとアキラ！そういう言い方は失礼でしょう」

日焼けの遠慮のない言い方をサイドテールが慌てて注意するが、光秋は特に気にすることなく応じる。

「いいんですよ。みんな言いますから。ちなみに僕は、人間かけてるメガネじゃなくて、メガネかけてる人間ですよ」

「……………」

光秋の冗談に、女性3人は反応に困った顔で黙り込む。

「ああ、わかんないか。ならしょうがないや…………うふん！改めまして、こういう者です」

咳払いで気を取り直すと、光秋は日焼けに名刺を差し出す。

「…………作家さん？ヴァルキリーズを題材にノンフィクションでも書かれるんですか？」

「え？またやつちやった？すみません、さつきは大丈夫だったんだけど…………こつちです」

横から覗く様に名刺を見たサイドテールの問いに、光秋は慌てて名刺を渡し直す。



「!?……非常事態特殊対策部隊って……」

「そう。私たちと一緒に戦ってくれた連邦軍の部隊。この人はその主任」

正しい名刺を見て目を丸くする日焼けに、ミオが補足する。

「あんたがああのトンデモPT共の上官?……てか、何でお前そんな奴と一緒にいるんだよ?」

「その前に、加藤大尉は名乗った。アキラたちもそろそろ名乗った方がいい」

「……そうですね。サヨコ・シノヅカといいます。よろしくお願いします」

「……悪い、ちよつと動転しててよ。アキラ・アマネだ。さつきは部下の人たちに世話になったぜ」

ミオの促しに、サイドテールと日焼け——サヨコとアキラは礼を交えながら自己紹介する。

「カンザキさんのチームメイトでしたか。こちらこそ、部下がお世話になりました。カンザキさんには、病院までの道案内をしてもらってまして」

「道案内ですか?」

光秋の状況説明にサヨコがさらに問うと、ミオが補足する。

「道に迷っていたところを呼び止めて、執務室まで案内した。その後基地内病院に用があったから、また迷わないように案内している」

「病院?……そういや、現場で保護した女の子が運ばれたんだっけ」

「そこで他のメンバーとも合流するらしい」

思いだした様に言うアキラに、ミオはさらに付け加える。

「ふーん?……しかし珍しいな。ミオが赤の他人にそこまで付き合うなんて」

「そうなんですか?」

普段のミオを知る身には想像し難いアキラの感想に、光秋は意外そうに応じる。

「そうなんだよ。こいつ無愛想でさ、その所為でよくトラブル起こしているんな隊を転々と——」

「加藤大尉。そろそろ行きましょう。時間がもったえないです」

「……ああ、そうですね。お願いします」

さらに続けようとするアキラの言葉を遮ってミオは歩き出し、光秋もこの後の予定を思い出してそれに続く。

「……せつかくだし、あたしらも行くか？」

「いいかもね。非特隊の他の人たちもいるみたいだし、それならその人たちにお礼が言いたい」

「それもあつけど、あたしはあの無愛想なミオが珍しく興味を持った加藤って奴が気になるしな」

「だから、そういう言い方は失礼でしょ！」

アキラの動機にサヨコは注意を入れつつ、2人も光秋たちの後を追って病院へ向かう。

こうして、非特隊のパイロットとそれに関わりを持った者たちは、それぞれに病院を目指すのであった。

## 10 戦女神たちの砦で 後編

はじめに感じたのは、鼻を突く独特の匂いと柔らかかなものに包まれている感触だった。

(この匂い……………消毒液?……………布団で寝てる?……………どこかの病院なの?……………)

覚醒しつつある意識で漠然と周囲の状況を推測しながら、城崎ユイはゆっくりと目を開ける。

眠気の残る目で見覚えのない天井を捉えると、自分を包む懐かしい感覚に、ずっと固まっていた意識がほぐれていく。

(布団なんて久しぶりだなあ……………もうちよつとだけ……………?)  
が、再び眠りに落ちそうになる直前、人の気配を感じて顔を左側に向ける。

その視線に気づいたのか、ユイが寝ているベッドの横の椅子に座る黒っぽい赤毛をポニーテールにまとめた女性が語りかけてくる。

「……………気がつきましたか。気分はどうですか?」

「あ……………ちよつと頭がくらくらするけど、それ以外は……………」  
やや掠れた声で答えながら、女性に手伝ってもらって上体を起こすと、ユイは周囲を見回す。

自分がいるのはやはりどこかの病室、それも個室であり、病床衣を着て左腕に点滴を刺した体をベッドに横たえている。窓のない部屋には自分と横の女性以外は人はおらず、女性は白地のブレザー型の制服らしき物を着て、首から「GUEST」と書かれた札を提げている。  
(この人の雰囲気……………軍人?でもあんな制服を採用してる軍は知らない。それに……………)

女性から自分と似通った匂いを感じながらも、ユイはそれ以上に気になること——サイズが合っていない為にぶかぶかになっている胸周りにどうしても目が行ってしまう。

「……………この服は借り物ですので、あまり気にしないでください」

「あ、はい……………」

「水、飲みますか?」

視線を察したらしい女性の穏やかだが有無を言わせない雰囲気  
ユイが素直に応じると、女性はサイドテーブルの水差しを傾け、手ご  
ろに冷えた水を差し出す。

ちようど喉が渴いていたので受け取り、冷たい水を流し込んで調子  
を整えると、ユイは目覚めてから疑問に思っていたことを問う。

「あの、ここは何処ですか？なんで私こんな所にいるんですか？それ  
に、貴女は誰ですか？」

「紹介が遅れましたね。私はライカ・ミヤシロといいます。ここはあ  
る機関の病院で、貴女は気絶しているところを運ばれました。今は検  
査入院中です……そうそう忘れるところでした」

ユイの問いに一通り答えると、女性——ライカはポケットから取り  
出した物を差し出す。

「これって……」

「貴女の身元を調べる為に貸してもらいました。城崎ユイさんで間違  
いありませんね？」

「……はい」

差し出された物——自身の認識標、俗にいうドッグタグを首に掛け  
直しながら、ライカの確認に首肯を返す。

「……あの、検査入院ってどういうことですか？それに、結局ここは何  
処なんですか？一緒にいた部隊のみなさんは無事なんですか？」

「……………いいでしょう。いずれ知るべきことですからね」

尚も質問するユイに、ライカは何かを決心した様な顔をする。

「最初に言っておきますが、これから話すことは全て事実です。その  
つもりで聞いてください。そして、何を聞いても心を乱さないでくだ  
さい」

「……は、はい」

真剣な眼差しを向けるライカに生唾を飲みつつも、ユイは身を踏ん  
張らせて応じる。

「いいですか。今は新西暦80年。貴女がいた時代から100年近く  
経った未来です。貴女は時空崩壊という現象に巻き込まれて現代に  
タイムスリップしてきた、と私たちは推測しています。発見した際、

おそらくは生身で時空崩壊を通った所為か、著しく衰弱していたので、ここ——非政府防衛組織・ヴァルキリーズの病院に緊急搬送させてもらった……こんなところでしょうか？」

「……………」

矢継ぎ早に出てきたライカの言葉の数々に、ユイの思考がしばし停止する。

「……………え？タイムスリップ？……………100年後の未来って……………!?」

ようやく頭が回り出し、先ほど以上の疑問が溢れ出てくるものの、そもそも何から訊いていいのかわからず、ユイは結局口籠ってしま

と、唐突にノックの音が響き、白地の制服に「GUEST」の札を提げた男性が、両手に大振りのビニール袋を持って入ってくる。

「ライカさん、頼まれた物買ってきました」

「遅かったですね一夏。お疲れ様です」

「一夏」と呼ばれた男性が差し出した右手の袋を受け取りながら労いの言葉をかけると、ライカはそこからあんばんを取り出して噛りつく。

「売店までの道が複雑で……………あ、起きたんですね」

言いながら左の袋をサイドテーブルに置くと、一夏もライカから受け取ったあんばんの袋を破ってユイと顔を合わせる。

瞬間、

「!」

ユイの脳裏にいくつもの光景がフラッシュバックする。

どこまでも続く闇、煙が立ち込める大地、そこへ向かって落ちていく自分、そして、

（髪飾りこそないけど、この顔……………この目は……………）「あの時の、天使……………」

「え？」

「あ！いえ……………なんでも……………」

思わずこぼれた夢見がちな表現に、ユイは慌てて口をつぐむ。

「彼は織斑一夏。私の部下で、落ちてきた貴女を助けたのですが……覚えていますか？」

「切れ切れですが、なんとか……えっと、織斑さんですね。助けていた働きありがとうございます！」

「いやあ、俺が勝手にやったことだし、人助けが仕事みたいなもんだから」

ライカに应じつつユイは深々と頭を下げ、それに一夏は微笑んで返す。

と、再びノックの音が響き、黄色と黒の縞柄ツナギを着て「GUE ST」の札を提げた男性と、男物の制服を着たサイドテールの少女、ワンピースを着て周囲を不安と好奇心が入り混じった表情で見まわす少女が入ってくる。

「失礼します。ライカさん！一夏君も！ご無事でなにより」

「恭弥さんも大丈夫そうですね……ところで、その服どうしたんです？」

「ちようどここに知り合いがいてさ、貸してもらったんだよ」

一夏の問いに答えつつ、男性——恭弥は安堵の表情を浮かべる。

「……その2人が連絡にあった？」

「はい」

ライカに应じると、恭弥は少女2人に前に出るよう促し、礼服の少女が口を開く。

「高槻カノンです。こっちはリグル・フォン・エルプール。来る途中で桂木さんから聞いたけど、そこで寝てるのが、私たちと同じ時空崩壊つてのから出てきた子？」

「そうです。食べながらで失礼ですが、私はライカ・ミヤシロ中尉。こちらは部下の織斑一夏曹長」

「ちゆ、中尉!?……!すみません……!」

改めてされたライカの自己紹介に驚嘆の声を上げ、我に返ったユイは赤らめた顔を俯ける。彼女の感覚では士官など雲の上の存在であり、それが自分のすぐそばにいることが信じられなかったのである。

と、再度ノックが響き、私服姿の少女が2人入ってくる。

「どーもお！本日付で非特隊に合流したフィルシアと、相方のサクラです。あらあら、これまた美男美女が勢揃い！」

照れくさそうに周囲と目を合わせないサクラを引きずる様に入室すると、フィルシアが病院内であることを念頭に置きつつも犬の様にはしゃいでみせる。

「ああ、あのIADパイロットの」

「そういう虎組ファンの君は、妖精の人だね」

「……いや、これ友達の借り物です。野球も特に興味ないし」

「あ、そう？……で、こっちの歌劇団から逃げてきた様なお二人さんが騎士の人？」

「歌劇団って……まあ、そう見えるのかな？」

興味津々に顔を寄せるフィルシアに、恭弥は苦笑いを浮かべて、カノンはどこか納得しながら応じる。

「それと、あんぱん食べてるペった——」

「……」

「——美人なお姉さんと、連邦の制服着てる優男くんやさおとしが、情報にあつたゲシュペンストとヒュツケバインのパイロットさんだね」

言葉を遮る様に向けられたライカのナイフの如き視線に、フィルシアは東の間表情を凍らせながら訂正して続ける。

と、それを聞いてカノンが目の色を変える。

「え？この2人が……あの、ちなみにゲシュペンストのパイロットさんは……？」

「……私ですが？」

あんぱん1個を完食したライカが2個目を取り出しながら応じる。

途端にカノンは顔色も変えて——具体的には長年憧れていた人物にようやく会えた様な喜びを顔一杯に浮かべて——ライカの許にぶつかる勢いで駆け寄る。

「うほお！本物のゲシュペンスト乗り!!流石にロン毛でもなきや髭も生えてない、そもそも女だけど、それでも感激!!あ！握手してくださいよお！」

「はあ……」

一気にテンションが最高潮まで達したカノンに、内心若干引きつつもポーカーフェイスを通したライカはあんぱんを持っていない方の手を差し出し、

「あざあす!!」

と、固い握手を交わす。

しかし戸惑っていたのも束の間、そんなカノンの様子に、ライカは自分にとって嬉しい予想を抱く。

「……その様子ですと、貴女もゲシュペンストが好きなんですか？」

もしそうなら、貴重な同志が増えることになる。平常心を装いつつも、胸躍らせずにはられない。

「そりゃあ好きだよ！特に『究極！ゲシュペンストキック』！あれは漢おとしこのロマンだよねえ。私女だけど……よかつたらこの後実演してくれませんか？」

「……すみません。シユルフツエンにはあのモーションは入ってなくて。それに、この後用事があって実演は無理ですね。そもそも、あの技は脚部に負担がかかるそうなので、使えるとしてもひかえた方がいいかと」

予想以上の喰い付きに喜びと戸惑いがない交ぜになりつつ、カノンの発言一つ一つに丁寧に応じていく。

「ああ、そつか。あの型にしか入ってないんだっけ。それは残念……あ、でも、ゲシュペンストがあるってことはグルンくらいはあるのかな？それなら、本当にアトランティアにドリル付けられんじやね？武装は……まあライオン剣で妥協するか？……」

「「……………」」

嬉々として、それでいて真剣に語るカノンに、病室にいる者全員は呆然と遠い目を向ける。

「……すみません。カノンはときどきおかしなことを言うことがあるので、あまり気にしないでください」

そんな自らの騎士の様子に、主たるリグルは複雑な心境で補足する。

と、またもノックの音が響き、一夏と同じ制服に身を包んだメガネ



の男性と、ライカのどれとデザインは同じだが色が茶色の制服を着た女性3人が入ってくる。

「みんなそろってるな。ヴェーガスのお二人もいらしたか。先ほどはどうも」

室内の全員を見回しながら、メガネはフィルシアとサクラに頭を下げる。

「こちらこそどうも。加藤大尉。エリックがよろしくつてさ」

「エリック?……ああ、ノヴァ大佐か。そっちにも挨拶に行かなきゃいけないけど……今日は無理かな……?」

上下関係に緩いフィルシアの気楽な返事に、メガネ——光秋は腕時計を見ながら気まずい顔をする。

「おいおい?子供ばつかじやねえかよ……」

「俺たちもいろいろあるんですよ」

「あんまり気にしないでいただけると……そちらは?」

茶色制服の内の1人、日焼けが目立つ女性の戸惑いを浮かべながらの感想に、一夏は曖昧に応じ、恭弥が問う。

「ああ。あたしはアキラ。こっちの2人はサヨコとミオ。ヴァルキリーズの第四分隊で、加藤大尉の道案内についてきたんだよ。よろしくな」

「あ、どうも。織斑一夏です」

「桂木恭弥です」

「サクラ・ルルです」

「フィルシア・ナイトウォーカーだよ」

「先ほど現場で一緒でした、ライカ・ミヤシロです」

日焼け——アキラの紹介に、非特隊のメンバーはそれぞれ応じる。

「……あ。あのミニ・ユニコーンに乗ってた人?えつと……ニコチンの加藤大尉だっけ」

「残念。タバコは吸わないんです。ニコイチですよ」

カノンの発言に訂正を入れつつ、光秋はライカの許に歩み寄る。

「突然の指揮と緊急の保護活動、お疲れ様でした。彼女にはどこまで話しましたか?」

「時空崩壊の件と、現状を大雑把に」

「労いの言葉をかけつつユイに視線を向ける光秋に、ライカは簡潔に答える。」

「……なるほど」

「短く応じると、光秋はライカと入れ替わりに椅子に座り、起きてから瞬く間に賑やかなになった周囲に多少戸惑っているユイを見据える。」

「えー、城崎ユイさん、ですね？私こういう者です」

「……えつと……作家さん？早速私の取材ですか？」

「あーまた？……なんで間違えるかな……」

例によって間違えた名刺を取り上げ、正しい方を渡す。

「そんな光秋に、」

「……本当にいつもやってるんですね」

「いつも？」

「うっかりじゃなかったのかよ？」

「私もさつきやられた」

「ライカは合点がいった顔をし、サヨコ、アキラ、ミオは病室に来る前のことを思い出して唾然とする。」

「……あの、今のなんですか？」

「名刺の渡し間違いです」

「よくやるからあんまり気にしないでください」

「……しっかりとしてるようで意外とおっちょこちよいんだね、この人」

「サクラの疑問に恭弥と一夏が応じ、カノンは率直な感想を述べる。」

「そんなやり取りを耳の端で聞きながら、ユイは改めて名刺に目を通す。」

「……『非常事態特殊対策部隊』？」

「はい。現状、貴女の身柄を預かっている所です」

「……その隊長、ということですか？」

「隊長というか主任ですね。体調が優れる様なら、早速事情聴取に協力してください」

「……はい」

「では……」

協力的な態度を示した方がいいと直感したユイの返答に応じると、光秋は懐からメモ帳とペンを出す。

と、

「あ……隊長じゃないけど体調はいい」

「「……………」」

頬を緩ませながらの光秋の呟きに、室内がカノンの時以上に呆然となる。

「くすっ……」

「ふふっ……!」

部屋の隅で笑いを堪えている恭弥と一夏を除いて。

(私、大丈夫かな……………?)

そんな光景に一抹の不安を覚えつつ、ユイは光秋の質問に答えていく。

自分の所属と大まかな経歴を語り、現代に来る前のことに話が及ぶ。

しかし、

「確か、シベリアで共産勢力と戦っていて……………あれ?」

それまで淀みなく語っていたのが嘘の様に、急に口が詰まってしまふ。

「どうしました?」

「……………いえ、時空崩壊、ですっけ?あれに巻き込まれる前のことがどうしても思い出せなくて……………記憶はその中を通ってきたところから始まっていて、その後すぐ気を失って、気づいたらここに……………」

「……………記憶障害ってやつか?」

「彼女が気絶している間に一通りの検査、それこそCTスキャンなども受けましたが、多少衰弱しているくらいで目立った損傷はないとのことです」

首を傾げる光秋に、ライカが説明する。

「てことは、時空崩壊を通ってきた影響か?」

「それなら、高槻さんたちもじゃないですか?」

ペンの尻を顎に当てる光秋に応じつつ、恭弥はカノンとリグルを見る。  
やる。

「え、私たち？……そういや、こっちに来る前何してたっけ？」

「……確か、カノンが野良ドラゴンを退治する為にアトランティアで出てたんじゃなかったかな？で、見物について行って危なくなった私をカノンが助けてくれて……でも記憶に自信ないな……」

「……そもそも、二人は何処から来たんですか？見たことのない機体に乗ってたり、魔法みたいに一瞬で氷の壁を作ったり、拳句野良ドラゴンって……高槻さんに至っては、僕が教える前にゲシユペンストや白について知っていたり」

「白を知っていた？……そういえば、さっき『ユニコーン』って」

互いに天井を向いて頼りないやり取りをする2人に、恭弥がここに来るまでに抱いた疑問をぶつけ、光秋はほんの僅かだが目を細める。

それに対してカノンは、少し考える顔をして答える。

「えっと………わかりやすく言えば、異世界かな？こっちの世界の人たちからすれば、ファンタジー小説やゲームみたいな世界から来たんだよ。それこそ剣と魔法と機動兵器の世界からね」

「い、異世界？」

「そんな漫画みたいなこと……」

「いやでも、城崎さんは過去から来たっていうくらいだし、そういうこともあるんじゃないですか？大陸だって異世界から来たって説もあるみたいですし」

「……一夏君の言うことにも一理あるかな。そもそも時空崩壊って、まだわからないことが多い現象なんでしょう？」

目を丸くするアキラと半信半疑のサヨコに、一夏と恭弥がどこか納得した様に応じる。

「……ゲシユペンストやユニコーンについては、何故か知ってるのか。私自身、何で知ってるのか思い出せないんだよ……」

「……なるほど。城崎さんといい、時空崩壊を通ると記憶に混乱が生じるんですかね？」

続くカノンの説明に推測を述べつつ、光秋は一連の話もメモ帳に書

き加えておく。

「いずれにしても、思い出せないんじゃないかとこれ以上続けても仕方ないか……なにか思い出したら、また教えてください」

「あ、はい……」

ユイの返事を聞くと、光秋はカノンとリグルの方に体を向ける。

「お二人も、こっちに来る前のこと、可能な限り教えてください」

「……まあ、協力するしかないよね」

「カノンがそう言うなら……」

2人が応じると、光秋はカノン、リグルの順に聞いたことをメモしていく。

カノンの場合は、もともとは彼女たちがやってきた世界とはさらに違う世界に住んでいたことと、その世界は機動兵器の有無を除いてこの世界と似通っているという情報を得た以外、ユイの時と大差なくほとんど進む。

しかしリグルの場合は、彼女の経歴を訊いた途端、室内が騒然とする。

「リグル・フォン・エルプール。エルプール王国の王女です」

「お、王女さま!?!」

「……ファンタジー世界の姫君?……マジ!?!」

リグルの自己紹介にフィルシアとアキラが仰天し、サヨコが興味津々に彼女を見つめる。

「……王女でしたか。これは失礼しました。リグル殿下」

光秋も束の間驚いていたものの、すぐに気を取り直して口の利き方を謝罪する。

『『殿下』はいいです。流石に堅苦しいので』

「……では、リグル様で」

尊称を確認して完全に調子を取り戻すや、光秋は聴取を再開する。一通り聞き終わるとメモ帳とペンを上着にしまい、ユイたち3人を見回す。

「みなさん協力ありがとうございました。お返しと言ってはなんです。が、こちらからもこの世界の情報を一通り説明しておきます」

「ごつちとしては助かるよ」

「私も。正直まだ混乱していて……」

「じゃあ、三次大戦の頃から話しましょうか」

カノンとユイの返事を受けると、光秋は掻い摘んだ説明をする。

西暦末期に起こった第三次世界大戦、それを経ての地球連邦の樹立と新西暦への改暦、半世紀前の大陸の出現、それによる技術革新と混乱、4年前の鬼の出現、2年前から4カ月ほど前まで続いたDC戦争、戦争末期のゴーストの出現。

「あの戦争の後、そんなことが……」

「地球連邦に大陸、鬼にDC、それにゴースト?……カオスだね」

「……私たちの世界とは根本的に異なるようですね」

影のある顔をするユイ、出てくる情報に啞然とするカノン、本当に別世界に来てしまったと実感し不安を浮かべるリグルと、三者三様の反応を見せる。

「……さて、情報交換も済んだところで、3人の今後についてですが――」

「3人とも！探したわよ」

別の話を始めようとする光秋を遮って別の声が響き、室内の一同が入口をみると、それぞれ赤と茶のヴァルキリーズの制服を着た栗毛の女性が2人入ってくる。

「ノゾミ隊長?アカネまで?」

「どうしたんですか?というかどうして私たちの居場所が?」

声を上げた女性――ノゾミと、その後ろについて歩くアカネに、アキラとサヨコが目を丸くして問う。

「端末の信号で探したのよ。大事な話があるって……いうのに……?」

「あのお姉ちゃん、ここ病室。もう少し静かに」

「……え?ええ、そうね……みなさんおそろいのところ失礼しました……」

アカネの注意を聞くまでもなく、若干の興奮で見えなくなっていた周囲の大勢の注目によく気づき、さらにその中の1人――自分が

貸したサイズが合っていない制服を着ているライカと目が合い、ノゾミはバツが悪い様子で頭を下げる。

「ノゾミ？」

「ああ。私たちと現場で共闘したノゾミ・カワシマ第四分隊長です」

「ああ。貴女が」

ライカの説明に応じると、光秋は椅子を立ててノゾミの許に歩み寄る。

「先ほどは部下がお世話になりました。非特隊主任の加藤大尉です」

「……貴方がミヤシロ中尉たちの上官？……ああいえ。こちらこそ、協力に感謝します」

気まずさの原因になっている人、その上官が出てきたことに一瞬戸惑いつつも、すぐに調子を取り戻したノゾミは差し出された手を握り返して握手を交わす。

「お若いですね……失礼ですが、お歳はいくつですか？」

「22です」

一瞬迷いながらも結局訊いた光秋に、ノゾミはすぐに答えてくれる。

「22？その歳で分隊長ですか……ああそういえば、そちらの方は？」

返答に素直に感心しつつ、光秋はアカネを見やる。

「私の妹で部下の、アカネ・カワシマです」

「アカネです。先ほどは部下の方たちにお世話になりました」

ノゾミの紹介に続いて、アカネは頭を下げる。

「妹さんですか。確かに、どことなく似てますね……ただ、お姉さんが玄関を守る番犬なら、妹さんは周囲を癒す室内犬の様な方ですね」

「また光秋さんは上手いこといな……」

「……ていうか、そこだけ聞けば口説いてるみたいだね？」

2人から抱いた印象を表現する光秋に、一夏とフィルシアが各々感想を述べる。

と、カノンが遠慮がちに呼びかける。

「あの一、加藤さん？」

「……おっと。失礼しました」

応じつつ椅子に座り直すと、光秋は話を再開する。

「えーっと、それでですね。3人の今後についてですが、当分は我々の保護下に入ってもらいます。その間に、今後どうするか検討していきましょう」

「検討って、具体的になにすんの？」

カノンが問う。

「さつきも話に出たように、時空崩壊はまだわからないことが多い。だから、いつ元の世界や時代に戻るかはつきりしないんです。その間こっちでどう過ごすか、それを考えていただきたい。もちろん、我々も可能な限り協力しますよ。手始めにこの後、3人の戸籍諸々を作る手配をしておくので」

「戸籍って……私はもともとこの世界の人ですよ？時代は違うけど」

「いや……それがですね……」

ユイの質問に、光秋はやや表情を曇らせる。

と、ライカが話を代わる。

「認識標を手掛かりに調べさせてもらったんですが、城崎さんの公式な記録が見つからなかったんです」

「……え？でも、私の名前、それに過去から来たって……」

「役所や軍の記録にはなかったんですが、通っていた学校の記録に名前がありました。それも偶然検索に掛かった様なものなんです。……とにかく、そこから城崎さんの素性を辿っていったんです。おそらく戸籍や軍籍などは、ここ数年の動乱の中で消えてしまったのではないかと」

「私の記録が……ない……？？」

「はい……」

啞然とするユイに短く応じると、再び光秋と話を代わる。

「そうでなくても、従来の記録をそのまま使ったとしても、偽造か記入ミス扱いになる可能性が大なんです。なので、約100年分繰り上げた方がいいのですが、かまいませんか？」

「……おっしやる通りかもしれないですね。こんなに若い外見のお婆



ちゃんというのも変な感じだし……それでお願ひします」

「わかりました。ちなみに今おいくつですか？」

「15歳です」

「私と同じ歳じゃん」

カノンが話に加わる中、光秋は再び出したメモ帳に記入していく。

「城崎さんと高槻さんは15歳ですね。失礼ですが、リグル様は？」

「……16歳です」

「16。了解しました……と、これで言うことは言ったかな」

言いながらメモ帳をしまうと、光秋は背中を伸ばして体を楽にする。

「……あ、そうそう。これは非特隊全員への連絡なんだが、今後あの白い特機、自称『モモタロウ』が現れた場合、ヴァルキリーズの方針に従って共同戦線、ないしは話し合いの場を設けることになったから。次現場で遭遇した場合はそのつもりで……要するに、向こうが何もしない限り、こつちも無視して普通に戦えばいいから」

「……共同戦線、ですか……お疲れ様でした」

「どうも……あ、ありがとうございます」

一瞬不安を浮かべたライカの労いに応じ、差し出されたあんぱんを受け取ると、光秋はそれに噛り付く。

「あとこれも」

「……栄養ドリンク？」

「私のお勧めの食べ方です」

続けて差し出された茶色い瓶に首を傾げる光秋に、ライカは少し誇らしげに説明する。

「……あ、そういえばライカさん、訓練の合間に言っていましたね。あんぱんと栄養ドリンクの食べ合わせは美味いって」

「……言われてみれば……でも、食べるものちゃんと食べなきゃダメですよ。ただでさえライカさんハードな機体に乗ってるんだから」

「……わかってます」

「お前はお母さんか？」

恭弥に続いて思い出した一夏の注意に、ライカは少しだけムツと

し、アキラが思わず突っ込む。

と、恭弥がやや控えめに問う。

「ところで、シユウさん……ヴェーガスに収容されたネメシスのパイロット、ユウ・ヴレイブさんでしたっけ？彼ってこの後どうなるんですか？……やっぱり、僕みたいに変更することには？」

「いや、彼の場合、恭弥君の時よりも面倒なんだよなあ……」

嘆息混じりに応じると、光秋はあんばんを一口噛る。

「確かに2人の境遇は似ている。突然事件に巻き込まれて、唐突に現れたロボットに乗ってしまったところがな。でも違いもある。一番違うのは、シルフィードは完全な所属不明機で、極端な話、回収した僕たちで好きにできた。でもネメシス08は、あくまでも連邦軍の物なんだよ。それを状況が状況だったとはいえ、民間人が使うとどうなるか……」

「そんなー」

言葉を重ねるごとに表情が暗くなっていく光秋に、恭弥は強い憤りを覚える。

「……そもそも、ゴーストの被害だってどれくらい減らせたかわからない。ヴレイブさんをこんな状況に巻き込んでしまったのだから……僕にはシルフィードって大きな“力”があるのに………僕がああの時、もつと上手く戦えていれば………」

「……そういうふうを感じるのには、君なりの優しさや責任感からなのかもしれないがな」

愚痴とわかりつつも言わずにはいられなかった恭弥に、あんばんと瓶をサイドテーブルに置いて応じると、光秋は体を向けて恭弥の目をしっかりと見据える。

そして、

「自惚れもほどほどにしるよ。恭弥君」

怒鳴ったわけではない、しかし圧迫感を伴った声で断じる。

「う、自惚れって!?……僕はそんなつもりじゃー!」

『ああの時もつと上手くやれていれば』。じゃあ訊くが、君はあの時サボっていたとでもいうのか？」

「そんなことないじゃないですか！」

唐突で訳のわからない返答を繰り返す光秋に恭弥は苛つき、病室にいることや大勢の人がいることも忘れて怒鳴ってしまふ。

それに対して光秋は、

「そうだろうな。あの戦い方は真剣だった」

と、深く頷いて応じる。

「君はあの時、今の自分にできることを精一杯やっていた。しかし、それは君一人の“力”だ」

「？」

「シルフィードがどんなに強大な“力”でも、君がそれをどれだけ上手く引き出せるようになっても、一人の“力”なんて高が知れてるんだよ。さっきの君の発言は、それを忘れたただの自惚れの自己満足だ。だからこうやってチームを作り、それぞれがそれぞれの役割を全力でこなすことで大きな脅威に対抗している」

「自己満足って！……そうなんですかね？……」

矢継ぎ早に言われて頭が冷えたのか、恭弥は少し冷静になる。

「……確かに考えてみれば、シユウさんは会った時からそう言ってた。一人じゃ限界がある、だからチームを作るんだって……でも、ゴーストの被害に遭った人たちやヴレイブさんのことを考えると、どうしても悔しくなつて……もつと何かできなかつたのかつて……」

「……あの、恭弥さん」

気づけば両手を握り締め、歯を噛み締めて震えている恭弥に、一夏が努めて穏やかに声をかける。

「俺、昔誘拐されたことあるんですよ」

「[「E:」]」

突然の発言に、恭弥だけでなく室内にいる光秋以外の全員が面食らう。

「何が目的だったのか、未だによくわからないんですけどね……一つわかっているのは、俺もあの時は悔しかった。何もできない自分の無力が、それで姉に迷惑をかけた無力な自分が……でも、だから強くなりたいって思えた。強くなつて、今度こそ大事なものを守りたいって

思えた……えつと、つまりその……また次、頑張りましょうよ！」

「……次？」

「一夏君の言う通りだ」

要領を得ない、しかし何かを伝えようと必死に語る一夏の「次」という言葉が恭弥の中に引っかけかり、光秋が笑顔で同意する。

そうして、光秋は恭弥の両拳を両手で包む様に握る。

「結局人間ってさ、どんなに最善を尽くしたつもりでも、思い返すといろいろ考えちゃうもんなんだよ。ここをもっとこうすればよかつたつて。それが悔しさなんだろうな……だから、その悔しさは次へのエネルギーに変えろ。悔しさを糧に自分を磨け。そうして、次の時は前より悔しい思いをしないようにしろ……人間ってさ、結局そうやって生きていくしかないんだよ」

「……そう、なんででしょうか？……そうなのかも、しれませんが人間って、そんなに便利でもなければ、強くもないから」

「その通りだ」

言いながら、ようやく震えと力みが収まった恭弥に、光秋は笑顔で頷いてくれる。

「その時をただ一生懸命に生きる、それで悔やむ分は次にぶつける、そして、どんなに“力”が強くても、一人つきりじや戦えないから、時には仲間に頼る。それでいいんだよ……あと話が逸れたが、ノヴァ大佐と話した感触では、悪い様にはしないように心がけてくれているよ。うだし、恭弥君がそこまで思い詰めることはないよ」

「……ありがとうございます」

笑顔で、それでも目を離さずに語る光秋に、恭弥もようやく頬を緩ませて応じることができる。

そんな前向きな光景に、他の者たちの間にも自然と笑みが浮かぶ。

「……やっぱり、興味深い人だ」

「なるほどね？お前が珍しく関心持ったわけだ」

ポツリと漏らすミオに、アキラはどこか納得のいった顔をする。

「桂木恭弥か……ユウって子にも感じたけど、なかなか熱い奴じゃん！」

フィルシアが一連の光景を見て感じたことを面白そうに述べる。  
そんなことを意識に隅に聞きながら、光秋は残っていたあんばんを平らげ、それを栄養ドリンクで流し込む。

「……あ、甘いものを甘いもので流し込むのもいいかも……さて」

口の中に広がる甘さに素直な感想を漏らすと、椅子から立ち上がった腕時計を見る。

「そろそろ伊豆に戻った方がいいな。ミヤシロさん」

「はい」

光秋の呼びかけに、ライカは心得た様子で応じる。

「非特隊各自は、僕とミヤシロさんがいない間ノヴァ大佐の指示に従うこと。予定では明日の午前中には帰ってくるがね」

「了解」

非特隊メンバーのよく通る声が応じる。

「それと、パイロットは各自自分の機体のチェックをしておくこと。一夏君については、ブロックを格納庫に持ってきたから。必要に応じて使うように。恭弥君については……とりあえず様子を見るしかないな」

「了解。ありがとうございます」

「……了解」

追加の指示に一夏は頭を下げて、恭弥は傷だらけのシルフィードに表情を曇らせて返す。

「あとそうだ。リグル様と高槻さんは、この後念の為検査を受けてください。一応時空崩壊の中を通ってきたので」

「わかったよ……それとさ、加藤さん」

光秋の指示に応じると、カノンはこの世界に来てから最も思い詰めた顔をする。

「私も、この非特隊つてのに入れてくれないかな。話聞いてたらさ、この世界にもいろんな脅威があつて、それに苦しめられてる人がたくさんいて、そんな人たちを守ろうとしてる人もいるみたいだからさ。だったら、私もその“力”になりたい！私はエルプール王国の騎士、弱い者を護る為にある。ここが異世界だろうと、それは変わらないと

思うから……その代わり、こっちにいる間のリグルの保護をお願いしたいんだけど……」

「また突然ですね……でもま、こちらとしても一緒に戦ってくれる仲間が増えるのは心強いですね。あとま、高槻さん自身の為にも……」  
「私？」

「短い間にいろいろあつて忘れてたけど、よく考えたら、他国の軍が連邦領内で戦闘行為をするとなにかと面倒なことに……」

「……………あー！」

言われてカノンは、こちら側に来てからすでに2回の軍事行動に関わってしまったことを思い出す。

「……………それ、やっぱ不味い？」

「それなりに……まあ、正規軍の僕らもついてたし、ウチに入ってくれと言うならまだなんとななるかと……少なくとも、ブレイブさんの件よりはマシ……かな？そもそも、こいつも超自然的な現象が相次ぐと、何を以て『正しい判断』とするか迷うところで……」

若干顔色が悪くなったカノンに、光秋は努めて明るく対応する。ただし、あからさまに引きつった笑顔だが。

「とりあえず、参加の件は前向きに考えさせていただきます。リグル様の件はご安心を。異世界とはいえ、国家元首の子息に失礼を働くとあとあと問題が……というのがありますが、さつきも言ったように、迎えた責任もありますから」

言いながら、今度は普通の笑顔で言ってくれる。

「とにかく、検査はしっかり受けてください。僕がいない間は、ヴェーガスのノヴァ大佐の指示に従うように」

「わかったよ」

カノンの返事を聞くと、光秋はライカを伴って入口へ向かう。

「……………格納庫まで送ります」

「私も。お見送りさせてください」

「んじゃあたしも」

ミオの申し出にノゾミも続き、アキラも興味本位といった様子でついてくる。

と、ライカが足を止めて振り返る。

「そうそう、忘れるところでした。一夏」

「はい？」

「あのパワードスーツ、白式と言いましたか？補助機能を全てカットしたアレを着て、私たちに宛がわれた格納庫を10周するように。恭弥にはその監視を命じます。誤魔化したのがわかったら、連帯責任で伊豆基地のグラウンド50周ですよ」

「ええ!？」

突然の懲罰命令に、一夏と恭弥は驚愕の声を上げる。

特に当事者である一夏は、思わず食ってかかる。

「またどうして?」

「作戦中、貴方は命令を無視して城崎さんを救出しました。それ自体は立派なことでしょうが、命令違反を犯した以上、落とし前はつけてもらいます」

「それは……了解です……」

ライカの説明に、一夏は一瞬言い返そうとするものの、結局観念して素直に応じる。

「……とにかく、後のことはよろしくな。行ってくる」

「あ、はい。行ってらっしゃい」

「帰りをお待ちします」

一夏と恭弥の返事を聞くと、光秋一行は部屋を出ていく。

「じゃあ、私はリグルさん、じゃない、リグル様と高槻さんの案内をしますね。ついてきてください」

「わかった。リグル、行こう」

「……うん」

アカネの申し出にカノンが応じると、不安そうな顔をしたリグルを連れて検査へ向かう。

「私たちもそろそろ戻った方がいいかな。整備は一通り終わった頃だろうけど、最終チェックは私たちの仕事だし。加藤大尉の命令だしね」

「そうね」

フィルシアの提案にサクラが頷き、2人はヴェーガスに戻る。

これで室内に残っているのは、恭弥と一夏、患者のユイ、ヴァルキリーズのサヨコだけである。

「……一気に静かになりましたねえ」

「今までが賑やか過ぎたんだよ……」

数瞬前と打って変わって静かになった病室に、一夏がぼんやりと呟き、恭弥もぼーっと応じる。

「……さて、ぼーっとしてても仕方なし。とりあえず罰を片づけちゃおう。僕もグラウンド50周は避けたいし……」

「……やるしかないかあ……了解です」

「あの……すみません。私の所為で……」

恭弥の呼びかけにげんなりしつつも腹を決めて応じる一夏に、ユイが心底申し訳なきように頭を下げる。

「別にいいですよ。さっきも言ったけど俺が好きでやったことだし。人が落ちてきたら助けるでしょ？」

「……人が落ちてくるところを見たことがないのでなんとも……」

当然のことに様に応じる一夏に、記憶の上ではその様な事態に遭遇したことがないユイは返事に困る。

そんな様子を見ながら、サヨコは恭弥たちに興味を覚える。

(ふうん？男義の織斑君、熱い桂木君、冷静な加藤大尉か……男装の騎士少女に緑髪の陽気っ娘、若いベテランさんに生真面目なピンク髪、お姫さま……はあんまりいじっちゃいけないんだらうけど……とにかく、面白そうな人がいっぱいいるわね)「……それなら、私が格納庫まで送りますよっ」

「じゃあ、お願いします」

「あ、ちよつと待ってください」

サヨコの申し出に恭弥が応じるや、一夏はサイドテーブルの上に置いてそのままだったもう一つのビニール袋を漁る。

「なに買っているかわからなかったから、とりあえず昔からある物を思っ……」

言いながら、袋から取り出したものをユイに差し出す。



「?.....!」

受け取った棒状の袋に入った栄養食品——ヘルスフレンド・いちじく味に、ユイは記憶上数日前に交わした仲間たちとの他愛無い会話を思い出す。

同時に、それが遠くなつてしまったのだと理解し、堪え切れず目頭が熱くなる。

「売店に売って味は一通り買ってきたんで、他にもあります——!?あの、どうかしました?」

大粒の涙を流しているユイに気づくや、袋を漁っていた一夏は狼狽する。

「もしかして、この味嫌いでした?」

「というか、検査入院なら食事制限とかあるんじゃないか?」

「あ!そうか.....」

「ちよつと織斑君!女の子を泣かせるなんて感心しないわよ?」

「いや、そんなつもりは.....」

恭弥とサヨコに指摘され、一夏はますますうろたえる。

そんな一夏を見てみると、ユイは不思議と泣き止み、彼からどこか懐かしい感じを覚える。

(この感覚.....隊長たちから感じたものに似てる?)

無論、目の前の一夏と記憶の中の仲間たちとは、心身共に似ても似つかないだろう。しかし彼から感じるもの——そばにしていると無条件に安心できる雰囲気とでもいうのものに、荒立っていた心が自然と凪いでいく。

(.....これを買ってきてくれたのは、単に私の時代からあったからで、いちじく味を選んだのも偶然なんだろう。でも、そういうことが自然とできる.....優しい人なんだ)

そんな言葉が浮かんでくると勝手に頬が緩み、未だあたふたしている一夏に笑みを含んだ声をかける。

「すみません。いろいろ思い出しちゃって。もう大丈夫です。いちじく味大好きですよ。ありがとうございます」

「.....あ、そう?.....ならよかった。それと.....やっと笑ってくれま

したね」

狼狽から立ち直って笑顔で応じる一夏に、ユイもますます頬が緩む。

そんな様子を横から眺める恭弥とサヨコは、どこか居心地の悪さを覚える。

「……とりあえず、一件落着いたんなら早く行きませんか？」

「そうですね。早く済ませた方がいいし。一夏君」

「ああ、すみません……じゃあ、俺行きますね。落ち着いたらまた来ます」

「はい。頑張ってください」

ユイが笑顔で応じると、サヨコと恭弥は逃げる様に、一夏はそんな2人に首を傾げながら部屋を出ていく。

3人がドアの陰に消えると、一人残ったユイは手の中のヘルスフレンドを改めて見やる。

（恭弥さん、だっけ？確かに食事制限あるかもしれないから、今はやめておこうかな）

先ほどの会話を思い出し、それをサイドテーブルに置く。

「……不思議だな。知らない所に独り放り出されたのに、何故か安心してる」

我ながら可笑しいと思いつつ、誰に言うでもなく独り呟く。

格納庫に移動すると、光秋はそのまま、ライカはパイロットスーツに着替えてそれぞれニコイチとシユルフツェンに乗り込み、足元で見送りをしてくれているノゾミたちに頭部を向ける。

『案内ありがとうございます』

『私たちがいない間、恭弥たちを頼みます』

光秋、ライカの順に拡声器越しに呼びかけると、2機は地上へ繋がるエレベーターへ向かう。

「お気をつけて！」

「！」

応じつつノゾミは敬礼を送り、ミオとアキラもそれに続くと、2機は地上へと消えていく。

その直後、サヨコに案内された恭弥と一夏が格納庫に入ってくる。「今出ていったのって……」

「シユウさんとライカさんだね。入れ違いになったか」

一夏と恭弥がエレベーターの方を見ながら呟いている間に、サヨコはノゾミたちの許へ歩み寄る。

「ところで隊長。大事な話ってなんだったんですか？」

「……！そうそう！非特隊の人たち、さっきの病室の子……高槻さんだったかしら？彼女の具合がよくなるまで極東支部に留まるから。粗相の無いようにね」

「へー、あいつらしばらくいるんだ」

ノゾミの説明に、アキラが一夏と恭弥を興味の目で見ながら呟く。

「私からはそれだけ。各自次の出撃に備えて、しっかり休んでおいて」

「了解」

ノゾミの指示に第四分隊の3人が応じると、そのまま解散となる。

「じゃあね、2人とも。織斑君は10周頑張って」

「はい……」

すれ違いざまのサヨコの励ましに、一夏は苦笑いで応じる。

第四分隊一行が格納庫を出ていくのを見送ると、一夏は気を取り直して表情を引き締める。

「それじゃあ、とつととやっちゃいますか」

言うやその周囲が光の粒子に包まれ、パワードスーツ・白式を纏った体を床に着ける。

「うっー！」

補助機能を全て停止すると、それまで意識していなかったアーマーの重さが全身に襲いかかる。

「……大丈夫？」

「……なんとか」

「じゃあ、僕が何周したか数えるから、一夏君はとにかく歩くことに集中して」

「わかりました……じゃあ、行きます！」

恭弥に応じ、気合を入れると、一夏は重い一步を踏み出す。

その傍らでシルフィードの左脚、否、各部にできた傷が、時間を巻き戻す様にゆっくりとふさがっていく様子に、ついに誰も気づかなかった。

伊豆基地に戻った光秋とライカは、一度機体を降りて各自の自室へ戻ると、出撃前に作っておいた大陸への荷物を取ってくる。

（今度は制服の予備も持ったし……またあんなことにはなりませんね）

極東支部での気まずい——というよりも苦い経験を思い出しながら、荷物の入った鞆を提げたライカは格納庫へ向かう。

格納庫につくと、先に来ていた光秋が鞆片手に隅っこで待っており、ライカはその許に歩み寄る。

「お待たせしました」

「いえいえ。僕も少し前に来たところですから。それにもう1人がまだ……」

「もう1人？」

言いながら辺りを窺う光秋に、ライカは首を傾げる。

と、伊豆に来た当日以来ご無沙汰だった声が背後から聞こえてくる。

「ふん！……はあー……ふん！……はあー……詰め込みすぎたかしら？」

「!?……」

まさかと思って声のした辺りを振り返ると、自分より少し小さいくらい旅行用鞆を悪戦苦闘して運んでくるメイシールを見る。

「……クリスタス少佐も行かれるのですか？」

「ええ。もしもの時はシユルフツェンの整備してもらわなきゃならぬいし……あれ？言ってませんでしたっけ？」

「聞いてません」

「あ、じゃあ、やっちゃったかな……すみません」

自分のミスを素直に詫びると、光秋はろくに進めていないメイシールの許へ歩み寄る。

「少佐。持ちましようか？」

「これくらい自分でできるわよー！」

「……そうですか？」

噛みつく様に光秋の申し出を断ると、メイシールはなにかの訓練の様な前進を再開し、突っぱねられた光秋は横でその様子を見守る様に立ち竦む。

(年寄り扱いされたくない年長者……というより、ムキになって  
いる子供とその保護者みたいですね……)

離れた所からその光景を見てそんな感想を抱きつつ、声が漏れないようにライカはしっかりと口にチャックをする。僅かでもこんなことがメイシールの耳に入ればどうなるか、それは初対面の時の様子から簡単に予想できる。

(……いずれにしろ、面倒な所に面倒な人と行くことになるとは……)  
伊豆に來たその日に險悪な雰囲気で分かれて以降、再び会うのはこれが初めてなのだと思ひ出し、ライカはメイシールに気づかれない程度の溜息を吐く。

「ほお？ 非特隊は分かれるのか」

水晶玉に映る光秋たちを乗せたレイデイバードを眺めながら、グリムは楽しそうな笑みを浮かべる。

「しかし、隊の戦力そのものは増強された。それに、彼ら以外にも僕たちに対抗する者がいるのは厄介だな……」

水晶玉の映像が切り替わり、蛇型ゴーストと市街戦を繰り広げるネメシタイプやアトランティアを、鬼やクロイツリッターを迎え撃つ戦機人やモモタロウを映し出す。

「……とりあえずは、鬼の方々への協力により力を入れるか。あとは……」

趣味に没頭する者の笑顔で、グリムは広い神殿の片隅で独り眩き続けるのだった。

## 1-1 強襲

伊豆基地を飛び立ったレイディバード。そのキャビンでは、光秋が左耳の通信機と手元の端末を駆使してユイたちの戸籍諸々を作るために関係各所と連絡をとっていた。

「……というわけです。よろしくお願いします」

一通り連絡を終えると、若干の疲れを浮かべて壁に背中を預ける。

「……どうでしたか？」

鞆から出した栄養ドリンクを差し出しながら、向かいに座るライカが訊いてくる。

「どうも……戸籍等の方は目途がたちました。高槻さんの非特隊参加の件はノヴァ大佐にお願いしたんですが……向こうもネメシス08の件があるから時間かかりそうですね」

応じると、光秋はドリンクを一口飲む。

と、それまでライカの隣でパソコンを弄っていたメイシールが、若干の好奇心を含んだ目をして顔を上げる。

「人もそうだけど、ほんの数時間で機体の種類も増えたわね。上位機密級のネメシスタイプが3機に、異世界から来たという未知数機。機動兵器の開発に関わる者としてはどれも興味深いけど……：……：……こうなると白い特機も押さえられないかしら？ テイルレガシイ——鬼殲滅における強力な戦力になり得るのに……」

「テイルレガシイ？」

最後の方は小声で聞き取れなかったものの、聞き慣れない単語に光秋は首を傾げる。

と、ライカが思い出した様に言う。

「数年前に話題になったアレですね。おとぎ話に出てくる桃太郎が、実は巨大ロボットだったという……ご存じありませんか？」

「え？……あ、いや、どうだったかな？……僕そういうのはあんまり……」

(……あの話を知らない？ 一時期メディアを騒がせていたのに)

当時のことを思い出しながら、しどろもどろになる光秋にライカは

一瞬疑念を覚える。

「もつとも、提示された資料の信憑性の低さから、学会では荒唐無稽だと一蹴されたようだけど……でも実際は、こうしてライカたちの前に現れ、あまつさえ共に敵部隊を迎撃した」

言いながら、メイシールはパソコンの画面を2人の方へ向ける。そこには、シユルフツェンからコピーした先ほどの戦闘の映像が——将鬼やクロイツリッター部隊を蹂躪するモモタロウが映し出されている。

「……私としては、クリスタス少佐が——」

「メイシールでいいわ。近しい人はみんなそう呼ぶから」

「……では……メイシール……少佐がそんな荒唐無稽と言われた説を蒸し返したことが少し意外です」

「さつきも言ったけど、私だつて機動兵器開発者の一員よ。ロボットと聞けば興味は持つわよ……上手くすれば、より効率的な鬼への対抗策、その手掛かりくらいつかめるかもしれないだし……」

そう言つてパソコンの向きを直し、メイシールはなにかしらの作業に戻る。

「……」

その表情が伊豆に來た初日に見たもの——ひたすら暗い方へ向かつていこうとするものだったことに、ライカは漠然とした不安を覚える。

その間にも、一行を乗せたレイダイバードは着実に大陸へと向かうのだった。

大陸。新西暦30年にオーストラリア上空で初めて観測された時空崩壊、それによつて異世界から転移してきたと考えられている、その名の通り大陸級の大きさを誇る巨大物体である。

出現当初は連邦政府主導の下に調査隊が何度か派遣されたが、未帰還者が相次いだことにより早い段階で打ち切られ、それ以後政府の目は行き届いていない。一方、貴重な帰還者たちのもたらした情報によ



ると、その地下には現在の人類の技術力を超える文明の遺物——今日でいうエクストラ・オーバー・テクノロジー——が埋まっているらしい。

連邦の目が届かない場所であること、超技術の手掛かりが埋まっていること、この2つの要因が、半世紀の間に多種多様な組織を大陸に招き、各々の目的の為に相争う情勢を作り出してしまった。

社会的弱者の為に独立国家を興そうとする『白虎帝国』。世界各地から流れ着いたテロリストたちが寄り集まってできた『革命者』。EOTの入手及び解析を目的に企業1つが丸ごと移転した『フルハウス団』。大陸での混乱を鎮めるといふ大義の裏でEOT発掘によって富を得ようとする『紛争抑止委員会』。これらの組織に捕らわれず、自分で用意した機動兵器を駆り、報酬次第でどの組織のどんな依頼でも引き受ける大陸において最も自由な者たち——傭兵。

DC戦争開始の少し前から、今から1カ月ほど前までにかけての約2年間、EOT発掘を円滑に行う為に大陸に本部を築き、圧倒的軍事力で他組織を黙らせたDCが君臨している間こそ静かだったものの、大陸遠征隊によって本部が壊滅し、抑止力が無くなった現在、空白期間を取り戻す様に戦火は再燃している。

今日も今日とて、大陸の大地は相容れぬ者たちが流す血を吸い続ける。

ただ、このような事態を未然に防ごうと全力を尽くそうとした者がいたことはあまり知られていない。

政治評論家・ジョー・レイクは、資産家たちから大量の資金を借り、その準備を整えていた。

しかし、彼は志半ばで組織の手の者に暗殺され、遺体は証拠隠滅の為に溶鉱炉に落とされた。彼を殺した暗殺者もその後死んでしまった為、ジョーの死を知る者は一部を除いて誰もいない。ジョーの娘・ミシエル・レイクもその一人である。

ジョーの死後に莫大な借金の存在を知った——彼が正義の活動をしていたことすら知らない——彼女は、父は借金から逃げたのだと考えている。もしかしたら、ミシエルは父の死を一生涯知らずにいるか

もしれない。

——知らないだけ、彼女は幸せだろうから。

ジョー・レイクが今生きていたら、おそらくそう思うだろう。

しかし、彼が融けた鉄が、その娘を助ける為に大陸を駆け巡るトツプクラスの傭兵、その愛機——死神の体にあることは、おそらく世界中の誰も、知らないだろう。

荒涼とした大地に佇む山々の合間に、コンクリートが敷き詰められ、中央に採掘所らしき建屋が並んだ直径数キロにわたる基地が設けられている。

その基地がある地図を映像パネルに映しながら、『死神』と渾名される漆黒の機体——タナトスは出撃準備を整えていた。

『作戦内容を説明します』

狭いコクピットの中、殺風景な大地には似つかわしくない爽やかな女性の声が響く。タナトスのオペレーター・ミシエル・レイクの声だ。『委員会』のEOT発掘拠点が、ここから10000メートル先に存在します』

液晶パネルの映像は、地図と赤い点を示す。赤い点の隣には、委員会基地の文字がはつきり映っている。

『ここを一気に急襲してください』

地図上の現在位置から赤い点に矢印がのび、一瞬後に赤い点が映像から消え失せる。

壊滅させろ、という意味だろうか。

『作戦終了後、敵基地から10000メートル離れた山脈の麓に平地があります。そこを輸送機との合流ポイントとします』

映像は、赤い点から離れた位置に伸びる線を表示した。そこが合流地点となるのだ。

『敵陣の真っ只中は不利と想定します。背部ユニットに予備弾薬を搭載してますが、長期戦は控えてくださいね』

機体稼働音が耳に響く。それは言うなれば、レース前のアイドリン

グ。

『作戦領域到達！タナトス、出撃してください！』

輸送機が地表に近づき、ハッチを開ける。

黒い全身、かなり無骨なボディ、それに見合う太い脚、暗い赤の頭、右手にバズーカ、左手に手持ちガトリング、それらを纏めて飛ばすための背部大型ブースター。異形と呼ぶには圧巻な姿をした死神が、堂々空に躍り出る。

爆音と爆炎と爆発を吹きながら、自慢のブースターユニットが推力を生む。

やがて、黒の機体は、とんでもない勢いで基地に向かっていった。自身のさらに上空の空が、波打つ様に歪んでいることにも気づかず。

真上に昇った太陽が降りはじめ、昼時を少し過ぎた頃。

「み、未確認機接近！」

「傭兵の機体かと思われまッ！」

男性オペレーターの恐怖の声が響く。

敵襲、敵襲、敵襲、敵襲。

基地中のパイロットに緊急発進のアナウンスが掛かる。

「敵機との距離は?!」

「残り1000メートル！後30秒で侵入されますッ！」

大慌てで問う司令官に、無慈悲な報告が上がる。

絶句したハゲ頭の頭脳は、全力で、この基地を守るべく策を練り始める。

「いったいどうすればいい……！」

だが現実はいつも非情だ。

「敵、加速しました！」

死神は30秒もかからずやって来た

委員会基地上空に差し掛かったタナトスは、ブースターの出力を落として基地の敷地内に着地する。

死神が魂を奪い尽くす為に、やって来たのだ。

直後に基地の各所から大量の機銃が吐き出され、ブースター無しではどうしても動きが鈍くなってしまいう巨体に幾つもの擦り傷をつけられる。直撃弾が無いだけマシといったところだろう。

もつとも、やられっぱなしでいるほど『死神』は愚鈍ではない。

右手のバズーカを構え、格納庫らしき建屋に向けて1発放つ。

強烈な爆発が屋根を消し飛ばし、中にあつた機体が誘爆したのか一層激しく燃え上がる。

その間にも死神はブースターを吹かして機体を駆けさせ、左手のガトリングをばら撒いて基地内の機銃やミサイル砲台を潰していく。

と、  
『寸胴野郎が！』

怒気を孕んだ声と共に放たれた銃撃がタナトスの装甲を叩き、攻撃が来た辺りに目をやると旧式PD・アンタレスが建屋の合間からこちらにマシンガンを向けている。

おそらくは予備戦力か重機代わりに置かれていたのだろう。他の建物の陰からも多様な武器を持った機体がいくつか現れて、機銃に混じって攻撃を加えてくる。

銃弾に砲弾、ロケット弾とさまざまな弾が飛んでくるが、その多くはタナトスの重装甲の前には小石を当てているのと大差ない。流石にロケット弾あたりになるとガトリングで撃ち落とすが。

死神はおもむろにバズーカを向けると、アンタレス5機ほどが固まっている辺りの中央に狙いを定め、1発撃つ。

直撃を食らった建屋が吹き飛び、爆発に巻き込まれた5機もそのまま粉々になる。

自身が熾した炎に照らされながら、死神は基地内を巡って各所への爆撃を続け、最初の格納庫を吹き飛ばしてから1分とかからずに全ての機銃やミサイル砲台を潰し、アンタレスを10機ほど撃破してしまう。

基地を1周する間に吹かし過ぎた所為かブースターが限界をむかえ、屑鉄になったミサイル砲台の前で一旦止まると、撃ち過ぎて空になった両手武器のマガジンを詰め替える。外した空マガジンは捨てず、機体に懸架する。解析されて技術流出が起こるのを防ぐ為だ。

しかし、バズーカのマガジンを詰め替えようとしているその時、ホバークラフトの下半身に人間の上半身を付けたような奇妙な機体――委員会の主力HMMAS・ロトスが、浮きながら18機の編隊を組み突撃してきた。

その動きを察知した死神は、機体を旋回させて対応しようとするが、

『敵の左腕部に直撃！』

ロトスの肩に設置されたグレネードランチャーが火を吹き、タナトスの左手に当たって持っていたマガジンを落としてしまう。

『全機、突撃せよッ！』

それを好機と見たロトスが一齐に殺到し、ショットガンの銃身数本を束ねた様な両手の先を向けてくる。加えて、まだ残っている建屋の陰から生き残りのアンタレスたちが現れ、ロトスたちを援護しようと各々の装備を撃ってくる。

タナトスの重装甲もいつまでも当てにできない。現に左腕の装甲は使い物にならなくなっている。

ロトス部隊からショットガンの散弾が放たれるのと同時に、死神は素早くマガジンを拾い上げる。

『遠すぎる！有効打じゃない！』

『弾丸をリロードされる前に仕留めろ！』

右肩に弾を喰らいながらも、ブースターを吹かして後退。そのまま弾を詰める。

『させるかあ！』

それを見逃さず、ロトスの1機が再びグレネードを発射しようとする。

直後、

『『『』』』』

ガラスが割れる様な轟音が響き渡り、その場にいる機動兵器乗りたちは思わず動きを止めて音のした方——基地上空を見る。

死神さえも足を止め、突発的に発生した異常を確認する為に上空を——時空崩壊の赤い大穴を見る。もつとも、バズーカのリロード操作は怠らない。

と、穴の中から人の形をした巨大な物体が現れ、双方の中間辺りに落ちてくる。

若干有機的な印象を抱くものの、どうやらタナトスらと同じロボット、それも特機の様だ。大きさは55メートルほど。赤と白を基調にした曲線主体の巨体をうつ伏せにして倒れていると、両手を着いて上体を起こし、頭頂の左右に角の様なものを生やした頭部で辺りを見回す。逆三角形形状に配置された緑色のレンズが顔に見えなくもない。落ちた際に地面を覆うコンクリートが大きくひび割れ、足で建屋の1つを潰してしまっているが、巨体の方には損傷が見られないことから丈夫な造りであることがわかる。

しばらく周囲を戸惑った様に見回すと、特機はタナトスと委員会の部隊を交互に注視する。

得体の知れない相手、しかも7メートルほどのロトスなら8倍近く、4メートルほどのアンタレスなら14倍近くはある巨体に睨まれて、パイロットたちは死神と対峙するのはまた違う恐怖に震え上がる。加えて、先ほどまでタナトスを相手にしていた興奮が抜け切れていなかったのだろう。冷静な判断能力が低下していたらしい。

『……………う、うわあああああ!!』

ロトスの1機が両手の全ショットガンの特機に放ち、無数の散弾が顔面に当たって爆ぜた。

赤と白の特機——新ゲッターロボ。その空戦形態であるゲッター1が地面に落下すると、頭部に設けられているコクピットを激震が襲う。

「ううううつ……………あつたま痛てえ……………」

落下の衝撃と、それ以上に時空崩壊を通ってきた影響だろう、割れる様な頭痛に顔を歪めながら、パイロットのイシカワ・ケンジはゲッターの上半体を上げさせ、モニター越しに周囲を見回す。

「……何処だ……あ？……荒れ地？つうか、どっかの基地か？……ん？」

周囲を囲む殺風景な荒野と山々、その只中に身を寄せ合うようにして立ち並ぶ建屋群に首を捻っていると、左右にさまざまな形をした人型のロボットたちが立っていることに気づく。

「戦闘マシーン……にしちやあ小せえよな？それにこっちの奴、同じのがたくさんありやがる」

片やホバークラフトらしきものに人型の上半身が乗った様な機体と、その半分ほどの大きさの小さな機体が複数こちらを見上げており、片や両手にバズーカとガトリングを持った重そうな黒い機体がこちらを注視している。

（見たとこどっちもリアル系っぽいな。あっちの重そうな奴はボスかなんかか？）

状況把握というのものもあるが、もともとこの手のものが好きなイシカワは、純粋な好奇心を含みつつしばし両者を観察する。

その時、ホバーの1機がこちらに両手の先を向ける。

「あん？」

何だ？と思った一瞬後、パイロットの心情を引き映した様に小刻みに揺れる銃口から無数の散弾が吐き出される。

それらがモニター越しに爆ぜ、機体そのものに損傷は無いもののコクピットを大きな揺れが襲うと、イシカワの中の何かが切れる。

「……そうかい。そう来んのか……：……上等だッ！そっちがその気ならやってやらア！ゲッターアアアアアア！トオマホオオオオオオクツ！」

跳ねる様に起き上がりつつ、腹の底から怒りの叫びを上げると、それに応える様にゲッターの両肩から棘付きの鉄球が飛び出し、鉄球から柄と刃が生えて50メートルの巨人サイズの斧——ゲッタートマホークを形成する。

トマホークを両手に握った直後、逆方向の黒い機体がバズーカを向けてくるのを視界の端に捉える。

「テメエもかよッー！」

怒声と共に黒い機体の方へ一歩踏み出し、右のトマホークを振り下ろす。

刃が触れる直前、黒い機体は背後のブースターを吹かし、その見た目からは想像できない素早さで右に回避する。

空振りになった刃はコンクリートを砕き、その下の岩の地面にも深い割れ目を入れる。

腕を上げきらない内に黒い機体はバズーカを胸に放ち、損傷こそ無いもののコクピットを再び激震が襲い、イシカワの怒りに拍車をかける。

「クソッー！テメエは容赦しねエ!!！」

時空崩壊から出てきた特機に攻撃される。そんな不測中の不測の事態に直面しつつ、死神はブースターを吹かして特機から距離をとる。

委員会機の迂闊な行動によって開かれてしまった戦端ではあるものの、それが誰であろうと戦力を持ち、それを自分に対して行使する意志がある以上、それなりの対応をとるのが死神である。先ほどのバズーカによる反撃もそれに基づくものだ。

しかし、今は状況が悪い。持ち弾は現在装填した物で全て、短い間に酷使したのが祟ってブースターも悲鳴を上げる一歩手前だ。撤退しようにも輸送機との合流ポイントは今いる地点の反対側。基地から出て山脈を迂回するほどの余力が残っていない以上、向かうには特機と委員会部隊の横を通らなければならない。

ならば必然、強行突破しかない。

『オラァー！』

拡声器越しの怒声と共に振り下ろされた斧をかわし、大股で踏み込んだ所為で大きく開いた特機の股の間をブースターで一気に駆け抜



ける。

『逃がすかッー!?!』

特機は振り返って追おうとするものの、ロトス部隊の銃撃に阻まれて足止めを食らう。

その間に死神は特機から距離を離そうとするものの、こちらも正面に展開したロトスとアンタレスの混成部隊に行く手を阻まれる。

『食らえッー!』

直後に建屋の陰に隠れていたアンタレスが片手持ちのランチャー——ハンドバズーカを放ち、砲弾がタナトスの頭部を直撃する。

安定性に難があるもののPD用携行火器の中では高い威力を誇るハンドバズーカの一撃は、しかし死神の仮面を外すに留まった。

爆発のエネルギーをまともに受けて碎ける頭部装甲。爆炎が晴れて外装の中から覗くものに、兵士たちは恐怖した。

『あれは……!』

『な、なんだありゃあ!?!』

『化け物が……!』

悪趣味な、頭蓋骨を模した骨格フレームだ。

カメラアイが鈍く光る。魂を刈る死神の如く。

『ま、まさか、本当に死神だったのか!?!奴は——あああああ!?!』  
死神の近くにいる委員会機のパイロットたちが震えた声を漏らす中、ロトスの1機が通りすがりざまにガトリングで蜂の巣に変えられる。

『ハ、このッー!』

僚機の撃墜に憤怒したアンタレスが尚もハンドバズーカを放つが、死神はそれをガトリングで迎撃しつつ、アンタレスそのものを銃弾の嵐で吹き飛ばす。

『クソッ! ヤバイヤバイ!』

『マイクロロケットを一斉に撃て!』

『野郎、消し飛ばすッ!』

反撃に2機のアンタレスが肩に設置されたマイクロロケットを、1機のロトスがグレネードを撃ってくるが、死神はそれらもガトリング

で迎撃する。

撃ち漏らした1発が胸部装甲に当たるが、まだタナトスは動く。怒り狂うように頭部のカメラアイが光ると同時に、ガトリングの弾丸が波のようにロトスに襲いかかって鉄屑に変え、すれ違いざまにアンタレスの1機を蹴り飛ばす。

後ろのもう1機もそれに巻き込まれ、胸周りを陥没させたアンタレス2機が採掘所らしき建屋へ吸い込まれる様に飛んでいく。

2機の動力の誘爆か、あるいは採掘物が起爆性の強いものだったのか、建屋を中心にこれまで以上の爆発が広がり、目の前に広がる紅蓮の炎の海に流石の死神も足を止めてしまう。

そして、その後を地響きたてて追ってくる巨人がいる。

『逃がさねえつつてんだろオ!!』

かけられら怒声に振り返ると、炎に照らされて烈火の如き怒りを浮かべた特機が、両手に黒い粘性のある液体——おそらく機動兵器のオイル——が滴る斧を持って駆けてくる。

その後方の地面には、特機に対峙したロトスたちの残骸が転がっている。もつとも、いずれもコクピットを収めた胸部周りは比較的無傷であり、それがかえって特機のパイロットの腕の高さを物語っている。

『ソラーア!』

間合いを詰めるや特機は左の斧を振り下ろすが、死神は真上に飛んでそれをかわし、空振りした刃は死神目掛けて放たれたグレネードやマイクロロケットの集中砲火にさらされる。

『邪魔だつてんだよッ! テメエらア!』

怒鳴ると同時に特機は右の斧を刃を地面と垂直にして振り払い、巻き込まれたロトスやアンタレスはハエ叩きを食らった虫の様に所々歪んで動けなくなる。

その間に死神は特機の頭上に達すると、バズーカの砲口を角の生えた頭部に合わせる。

が、

『この……死神がつ!』

憎悪のこもった怒声と共にロトスの残骸の1機がグレネードを放ち、咄嗟に回避した死神が特機を攻撃するタイミングを失してしま

う。ならばと撃ってきた残骸にバズーカを叩き込み、着弾した機体を中心に周囲の残骸も爆発に巻き込まれる。

性能の低いホバーの上に積むことを前提にしている為、ロトスの上半身はもともと脆い。破損している今なら尚のことだ。おまけに防ぐことも避けることもできない以上、直撃しなくても余波だけで充分致命傷となる。

念の為、離れた場所や先ほど特機が行動不能にした混成部隊の残骸にもバズーカを撃ち込み、案の定全機完全なスクラップに変えると、死神は改めて特機と対峙する。

『他の奴の相手してる暇があんのかよッ!? ゲッターアアアアア! ウィングッ!』

叫びに応じる様に特機の背中から赤い二等辺逆三角形が2つ伸び、それをマントの如く翻して上昇してくる。

斧を構えて迫る特機に、死神もバズーカを向けて応戦体勢に入る。が、直後、

『!? ……何だッ!』

一条の銃撃が2機の間割り込み、特機のパイロットは多少驚きながら、死神は反射的に機体を後退させる。

銃撃の来た方向に目を向けると、白い一本角の機体と灰色のゲシユペンストがこちらに向かって飛んでくる。

この数分前。

大陸上空に入ったレイデイバードのキャビンでは、光秋がどこか落ち着かない様子を見せていた。

モモタロウの話が終わってからしばらく経つが、その間貧乏揺すりが止まらず、目線の方向をしきりに変えているのだ。その上で、絶対に窓に目を向けようとはしない。

(……………これは、もしや)

一連の行動にピンときたライカは、ほんの好奇心から訊いてみる。

「……………加藤大尉」

「はい？」

「大尉つてもしかして……………高所恐怖症ですか？」

「……………いや、恐怖症ってほどじゃあ……………」

応じながら、光秋はバツの悪い顔をする。

「そこまで酷くはないと思うんですけどねえ……………ただ、高い所から下が見える感覚が苦手……………」

「あら、意外ね？訓練の時はビュンビュン飛ばしてたくせに」

補足する光秋に、パソコンの画面から顔を上げたメイシールが言葉通り意外な顔をする。

「自分で動かす分には平気なんです。ただ今みたいに乗ってるだけだと、どうも落ち着かなくて……………」

メイシールに応じる間にも、光秋はそわそわした態度で室内に視線を廻らせる。決して窓は見ないようにしつつ。

(名刺のこともそうですが、どこか抜けてますよね。加藤大尉は)

思いつつ、ライカは少しだけ、決して2人に気づかれない程度に頬を緩める。

直後、

『ぜ、前方に時空崩壊確認！』

「！」

操縦士の慌てたアナウンスがキャビンに響くや、弾かれた様に立った光秋は運転室へ向かい、ライカもそれに続く。

「時空崩壊ですか？」

「ああ、大尉！あれです、見てください」

入ってくるなりの光秋の問いに狼狽しつつ応じると、操縦士は前方を指差す。

指を追って山脈が立ち並んでいる辺りの空に目を凝らすと、青空の一点に染みの様な赤い穴を見つけ、ややあつてそれが消えていく。

「あの辺りは確か……………今向かっている委員会の基地では？」

記憶の中の地図と時空崩壊の起こった空の下にあるコンクリート敷きを重ねながら、ライカは思い出した様に言う。

と、

「!?」

そのコクリート敷きの辺りに散発的な輝きを捉える。

「戦闘?……とにかく、向こうに行ってみましょう。ミヤシロさん、シウルフツエンに。マザー1は別名あるまでこの辺りで待機」

「了解」

ライカと操縦士の返答を聞くと、パイロット2人はキャビンを通って格納庫へ向かう。

当然着替える暇など無く、高Gや気圧の変化などから操縦者を保護するパイロットシートを着ていないことに若干の不安を覚えつつも、ライカはシウルフツエンに乗り込み、機体を立ち上げてM90アサルトマシンガンとその予備弾増2つ、そしてバズーカを装備する。

その間にも行われていた光秋と操縦士のやり取りに従って後部ハッチが開き、ライカはシウルフツエンをその許へ向かわせる。

(戦闘なんて大陸では日常茶飯事というものの、時空崩壊まで重なるなんて……最悪なタイミングに来ちゃいましたかね?) 「バレット1、出ます」

口の中で愚痴を言いながら、ライカはペダルを踏んでシウルフツエンを発進させる。

空中で機体を振り返らせる間に光秋のニコイチも右隣につき、2機は委員会基地へ向かおうとする。

直後、

「!?」

数十キロは離れている現在地でもはっきり視認できるほどのきのご雲が上がり、2人は通信映像越しに顔を見合わせる。

「今のは?……」

『急ぎましょうー!』

言うや光秋はニコイチを駆けさせ、ライカもスラスタを吹かしてそれに続く。

数秒して望遠映像が表示され、黒い鉄塊と赤い特機の戦闘に巻き込まれる形で委員会のロトスやアンタレスが撃墜されていく様子が映し出される。

と、

(……あの機体は)

黒い鉄塊にライカは1カ月ほど前の記憶を呼び起され、それに合わせる様に照会データが表示される。

それに記されている名前は「タナトス」、DCとの戦いで自身を追い詰めたあの『死神』である。

『タナトスって、確か大陸トップクラスの傭兵の機体ですよ？』

「はい。その戦い方から『死神』と恐れられています」

『死神』ですか……赤い方はデータ無し。さっきの時空崩壊から出てきたのはこつちのようですね……とにかく、まずは戦闘を止めないと。威嚇射撃を』

「了解」

通信を続けながらも基地へと近づくと、ライカは光秋の指示に従って、向かい合う2機にマシンガンを向ける。

(……そこ！)

威嚇だから当てることはできない。しかし周囲が眼中にない様子の2機に気づかせる為に、ライカは敢えて着弾の危険がある2機の間を狙って一連射する。

それで2機が動きを止めてこちらを見やるや、光秋の威圧する様な声が通信と拡声器を介して響く。

『交戦中の2機に告げる。こちらは地球連邦軍非特隊所属の加藤光秋大尉である。先ほどの射撃は威嚇である。即時戦闘を中止し、それぞれ所属とここでの目的を明かすように』

直後、

『ゴタゴタ煩せえんだよッ！』

聞く耳持たんとばかりに特機が突撃をかけ、振ってきた斧を2人は左右に分かれて回避する。

(……謎の特機乗りとは、こうも気が短い人ばかりですか?)

右脇を流れていく赤い特機に数時間前の白い特機を重ねながら、ライカは呆れる様に思う。

『再度告げる。即時戦闘を停止せよ』

『俺らのケンカに割り込んできたのはそっちだろうがア!』

光秋の再度通告に怒鳴りで返すや、特機は右の斧を1/5程もない大きさのニコイチに振り下ろす。

「大尉!」

ニコイチの丈夫さはある程度理解しているものの、流石にあのひと振りは無理だと直感したライカは思わず叫ぶ。

が、

(!?……………大尉の機体は化け物ですか?)

『こ、このチビ!?!』

左腕を上げて斧を受け止めたニコイチに、ライカはさつきとは別の意味で呆れ、それまで強気だった特機のパイロットが僅かに驚愕を含んだ声を漏らす。

『了解した。そちらは実力を以て対処する。中尉はタナトスを。パイロットは極力確保するように』

「了解」

斧を受け止めながら出された指示に応じると、ライカは基地へ向かう。

すぐにタナトスが通常モニターに映し出され、ライカは相手の状態を瞬時に観察する。

高い防御力の証たる重装甲は所々傷つき、凹み、場所によっては大きく欠けている。普段は頭部を覆っている仮面状の追加装甲に至ってはすでにパージされている。そして敵への心理的威圧効果を狙ったドク顔も、数多の修羅場を潜り抜けてきたライカには精々“悪趣味なお面”でしかない。

(やれるかもしれない。今回は)

それが今のライカのタナトスに対する思考の全てである。

相手は満身創痍、おそらく見えない部分でもかなり消耗しているだろう。対してこちらは、緊急発進ではあったものの今出てきたばか

り、機体も自身もコンディションは上々。加えて、今自分はゲシュペ  
ンストに——その高機動カスタム機に乗っている。遠征隊時代の様  
に一方的に追い詰められるだけではない。

確かな経験と観察眼に基づいて断じると、ペダルを深く踏んで接近  
速度を上げる。

押し掛かるGに体を押しされつつ、ライカは黒い鉄塊にマシンガン  
に向けて照準に捉える。

タナトスがバズーカを撃ってくるが、全身各所に増設されたスラス  
ターを吹かして当たるすれすれでかわす。

(いける！)

操縦桿のトリガーに指を掛け、マシンガンの一連射がタナトスを襲  
う様を脳裏に見る。

だが、そんなライカの一枚も二枚も上を行くのが『死神』だ。

「!?」

回避の際、ほんの一瞬目を離れた間に、タナトスは全弾撃ち尽くす  
勢いでバズーカを周囲に乱射する。

(追い詰められて錯乱したか?……いや)

一見見境の無い乱射かと思えたが、機体を急停止させてよく観察す  
ると、自分とライカの間に線を引く様な撃ち方をしていることに気づ  
く。

思う間に着弾で広がった厚い噴煙がタナトスの姿を隠し、視界不良  
の中で迂闊に動くべきではないと判断したライカはマシンガンを構  
えながらも様子を見る。

(やはり『死神』。そう易々とはいかないか……これくらいの煙はじき  
に晴れる。その時こそ)

『死神』の意表を突く行動に舌を巻く間に煙は晴れるが、すでにタナ  
トスの姿は無い。

レーダーを確認し、周囲を見回すと、基地から遠く離れた所をブー  
スターを煌々と吹かして駆ける黒い鉄塊を捉える。その装甲の表面  
を、僅かだか炎が舐めている。

(あの火の海の中を突っ切った?……いや、比較的火災が小さい辺り



を見極めてそこを通ったか。いずれにしろ、一步間違えれば炎に吞まれて誘爆する可能性もあったのだから、大した度胸だ)

徐々に表面の炎が消えていくタナトスを見ながら、今だけは敵対関係ということに隅に置いて心の中で称賛の言葉を送る。

(……さて、深追いは禁物ですね。ましてやここは大陸。どんな機動兵器乗りと鉢合わせするかわかったもんじゃありませんから。それなら……)

タナトス追撃を断念するや、ライカはシユルフツエンを振り返らせて特機の相手を続ける光秋の許へ向かう。

突然割って入ってきて、頭ごなしに戦闘をやめろなどと言われたイシカワは、そんな偉そうな態度をとる白い一本角に感情的に斬りかかる。

しかしその一撃を片腕で軽々と止められたのだから、怒りなど吹き飛び、柄にもなく狼狽してしまう。

(何なんだコイツ!? ゲッタートマホークを防ぎやがった。それに……)

戸惑いながらも尚も力を入れてトマホークを押すものの、刃を止めている左腕は微動だにせず、見えない大地に両足を着けているかの様に同じ高さに留まり続けている。

「テメエ………いったい何モンだッ!」

『先ほど紹介したでしょう。非特隊の加藤大尉と——』

『そういうことじゃねえ!………何なんだ? テメエは………』

『………とりあえず、「白い犬」とでも名乗っておきましょうか』

声を荒げるイシカワの質問に、一本角のパイロット——光秋は冷静な様子で応じる。

しかし声の調子とは裏腹に、白き機体からは体を直接押さえつけられる様な威圧感が放出され、人のそれを模した様な緑の目が妖しく輝く。

もつとも、それで畏縮する様なイシカワではない。

『犬』だア?……犬なら犬らしく、地べた這いつくばって尻尾振ってやがれッ!」

怒声と同時に左膝蹴りを繰り出す。

膝が当たる直前に白い犬は後退して距離をとり、その隙にイシカワはゲッターの腹部にある装甲の一部を開き、へその様な砲口を展開する。

「斬れねえならこいつはどうだ!ゲッターアアアア!ビイイイイイイイイム!!!」

腹の底からの絶叫と共に腹部砲口からピンク色の光線が放たれ、正に光の速度で白い犬へ直進する。

『くっ!』

白い犬は当たる寸前に右に避けるものの、直進を続けたビームは背後にそびえる岩山を直撃し、機体越しにも耳を貫く轟音と目を細めなくなる輝きを伴った大爆発を引き起こす。

ビームが直撃した山頂付近は蒸発で消し飛び、欠けた部分から赤々とした溶岩が溶けたアイスクリームの様に麓へと流れていく。

「チッ!」

そんな様子をモニター越しに見ながら、イシカワは攻撃が外れたことに舌打ちを鳴らす。

その傍らに浮かぶ白い犬も、同じ光景をしばし見つめる。

と、

『……その機体、こちらの予想以上に危険な物の様ですね………やむを得んか』

意を決した様に呟くや、機体の節々を覆うカバーが開き、露出した骨格から赤い光が広がる。

「……なんだア?どこぞの一角獣のつもりか?……こけおどしは通じねえんだよッ!!」

心なしか圧力を増した威圧感、それによる狼狽を振り払う様に敢えて強気な口調で叫ぶと、イシカワはトマホークを腕一杯に掲げて斬りかかる。

が、

「なっ!？」

渾身の一振りは空を斬り、一瞬後に白い犬は500メートル後方に滞空している。

(瞬間移動? 否、ゲッター2みてえにメチャクチャ速えのか?)

直後、

「!!」

真っ直ぐに伸ばした右脚に赤い光を集中させた白い犬が、飛び蹴りの要領でこちらに突っ込んでくる。

(かわせねエー!)

巨人サイズの徹甲弾の如く飛んでくる赤い光にそう直感するや、イシカワは脊髄反射でレバーを倒す。

光を纏った蹴りが腹部に入る刹那、ゲッター1は3機の航空機——ゲットマシンに分離し、直前までゲッター1が滞空していた辺りを白い犬が過ぎていく。

その一瞬、ゲッター1の頭部を形成していた赤いゲットマシン——イーグル号に乗るイシカワは、キャノピー越しに白い犬と目が合う。

(何なんだ? コイツは……)

そう思った直後、

『加藤大尉!』

「!」

黒い奴の許へ向かっていたはずの灰色の機体が、3機のゲットマシンに向けてマシンガン撃ってくる。

「チッ!これじゃ合体も満足にできねえ……しやあねえ、逃げる!」

潔く断じるやイシカワはペダルを一杯に踏んでイーグル号を全速力で離脱させる。

白のジャガー号、黄色のベアー号も速度を上げてそれに続き、コンテナに翼が生えた様な輸送機らしき物の上を通り過ぎると、

「とりあえず、ここまで来りゃ大丈夫だろう……チエーンジ!ゲッターアー、ワン!」

白い犬たちを撒いたと確信したイシカワの、いつもよりは控えめな叫びに応じる様に、上からイーグル号、ジャガー号、ベアー号の順に

並び、それら3機が合体してゲッター1を形作る。

「……にしても、本当にここあ何処なんだあ？見たことねえメカや訳のわかんねえこと言う連中が大勢いたが……いや、あの灰色の奴はどっかで見たような………まあいいや。いつも通り適当に進んでみるか」

普段通りの気楽さで断じると、イシカワはとりあえず真つ直ぐ飛んでいった。

赤い特機の離脱が確認されるや、ニコイチは輝きを消して節々のカバールを閉じると、力尽きた様にのろのろと高度を下げていく。

「！」

それに気づいたライカはすぐさまニコイチの許にシユルフツェンを飛ばし、マシンガンを腰に懸架させ、ゆっくりと下りてくるニコイチを両腕で受け止める。

今のニコイチ、というより光秋には先ほどまでの威圧感などなく、シユルフツェンとの身長差も合わさって、大人に抱きかかえられた具合の悪い子供の様だ。

「大尉、大丈夫ですか？どこか不調が？」

『……大丈夫。ちよつと疲れただけです』

僅かながら不安が漏れる表情で問うライカに、光秋は通信映像越しに少しでも血の気が引いた顔を向け、言葉通り疲れを浮かべた笑顔で応じる。

（よかった……）

自分の心配を和らげる為の作り笑いなのは一目瞭然なのだが、それでも笑顔を見せる光秋にライカは安堵を覚える。

（加藤大尉にもしものことがあったら、みんなに顔向けできませんからね……）

そんなライカの心配を知ってか知らずか、光秋はなにかを悔やむ様に表情を曇らせる。

『やっぱり、短い間の連続使用は控えないとダメだな……ただでさえ

消耗激しいし……………ときに、火はまだ消えませんか？」

「……………そうですね」

光秋の問いに答えつつ、ライカはシウルフツエンを委員会基地中央辺りから広がる火災の方へ向ける。

今の彼らに消火用の装備はなく、2機は火の勢いが収まるまで横で見ているしかなかった。

その頃、10000メートル先の合流ポイントに到着した死神はというと、

「なにやってるんですか！」

「まあ、ミシエル、落ち着いたら……………」

「ラドリー、話なら後で聞きます」

タナトスのあまりの損傷にこっぴどく怒られていた。主にオペレーター・ミシエルに。

可愛らしいブロンドを激しく揺らしながら、彼女は目を三角にしてさらに続ける。

「タナトスが重装甲じゃなかったら死んでましたよ！おまけに突然現れた特機級の不明機まで相手にして、連邦軍の部隊とも交戦しそうになつて……………危険過ぎます！」

彼女がこんなにも目くじらを立てるのは、ただ単純に死神への心配からだ。

ミシエルにとって死神は、彼女の親の借金保証人の遠い親戚であり、3年前から傭兵として借金を協力して返す契約を交わしている。

その話を聞いた時、彼女は彼に対して「優しいひと」という印象を抱いたものだ。だから、傭兵という立場上仕方ないことであっても、彼が人を殺すことも、『死神』の異名を頂いていることも、彼女にとっては心を痛める材料にしかない。

実際、前回の依頼を終えた際に言ったものだ。

「戦場で生きるのが辛いなら、辞めたいなら、言ってください、あなたは死神なんかじゃありません」

と。

その後ミシエルの説教は2時間ほど続き、死神を叱る彼女の声を傍らで聞きながら、修理主任の初老の男性——グイン・ラドリーは満身創痍のタナトスを見やる。

「こりゃあ、完全に直すのに1ヶ月はかかるな……………」

今後の過酷な予定を思い浮かべ、修理主任は溜息を吐いた。

DCによる仮初の安定は終わりを告げ、大陸は良くも悪くも従来の勢いを取り戻しつつあった。

そして時空崩壊が多発する昨今、この勢いはますます加速することになるのだろう。

幾万の亡骸の上に横たわる枯れた大地が、後どれだけの血を求めているのか。それは誰にもわからない。

## 12 共闘 前編

光秋たちが大陸へ向かっている頃、ヴァルキリーズ極東支部の格納庫の一角では。

「9周うーラスト1周だよお！」

「おおー！」

補助機能を全てカットした白式を纏った一夏が、傍らの恭弥の激励に応じながら懲罰の最終段階に入っていた。

「ふんっ！……ふんっ！……」

下がりそうになる顎を意識して食い縛り、一步踏み出すにも気合を入れながらも、一夏は全身が鉛になった様な我が身を確実に終着点へ運んでいく。

（後、1周なんだあ……！）

（……根性あるな一夏君。僕じゃああはいかないや……）

すでにかなり堪えているにも関わらず前進を止めない一夏の姿に、恭弥はただただ圧倒され、畏敬の念すら抱く。

と、アカネに先導されてカノンとリグルが入ってくる。

「どうもー」

「高槻さん、リグル様。検査はもう終わったんですか？」

「うん。たくさんやったからちよつと疲れたけどね。異常はないってさ。記憶の方も時間が経つに連れて回復するだろうって。ただ……」

「CTの時が大変だったよね。リグル様を取り乱して……」

恭弥の問いに答えるカノンに続く形で、アカネが苦笑いを浮かべる。

「なんかあったんですか？」

「いや、リグルがさあ……」

「……カノンが、頭を輪切りにするなんて説明するから……」

「……ああ」

バツが悪い顔をするリグルを見て、恭弥はなにがあったのか大よそのことを察する。

（脳の断面映像を、説明が悪かったのか本当に切るんだと思ったんだ

な。話を聞く限り、リグル様がいた世界はこの手の技術は無さそうだし、そんな人なら勘違いして怖がるのも無理ないか)

そう思いながら恭弥が一人頷いていると、一夏が最後の1周を回り切って4人の傍らに到着する。

「お……終わったあ……………」

多分な疲労を含んだ声に应じる様に白式が光となって消え、連邦軍の制服に戻った一夏はその場に尻もちを着く。

「お疲れ様。飲み物買ってくるよ」

「その心配はない。こんなこともあるかと……」

汗だくの一夏を見て最寄りの自動販売機へ向かおうとする恭弥を止めると、カノンは持っていたスポーツドリンク入りのペットボトルを差し出す。

「来る途中で買ってきておいたよ。気が効くでしょ?」

「お金出したのはアカネさんですけどね」

「いやほら、お二人ともこっちの世界に来たばかりだから、お金持っていないし……提案したのはカノンちゃんだし……」

リグルの指摘に、アカネは彼女なりのフォローを入れる。不器用でも他人の顔を立てようとする辺り、彼女の優しさなのだろう。

「どっちにしろありがたいですよ。ありがとうございます」

ペットボトルを受け取って2人に礼をすると、一夏はほどよく温くなったスポーツドリンクを口に流し込む。

「ごめんね織斑君。ちよつと遠い所で買ったやつだから温くなってるけど……」

「いやいや、運動の後はこれくらいがちようどいいですよ。キンキンに冷えたものを飲んだら体が痛むから。それと、俺のことは『一夏』でいいです」

「……なんか、おじいちゃんみたいなこと言うね」

「よく言われる」

アカネの気遣いに应じる一夏、その感想を述べるカノンに返しつつ、一夏はもう一口飲む。

「……それじゃあ、私も『アカネ』でいいです」



「私も『カノン』でいいよ」

「じゃあ、僕も『恭弥』で。リグル様は……………」

「……………」

『リグル様』ですよね……………」

和みつつある雰囲気に乗じて話を振った恭弥を拒む様に、リグルは未だ警戒の抜けない表情を向ける。

「……………それよりも、そろそろアトランティアのマントを直さないと。いつまでもあんなみすぼらしい格好をさせておけませんから。カノン、私から離れないで」

「リグル……………そんなに固くならないくても……………」

「マント?」

恭弥の疑問を受け流すと、氷の様な固い表情を張り付けたリグルは、主の態度に困った顔を浮かべるカノンを伴ってアトランティアの許へ歩み寄る。

驚異的な再生機能に目を奪われて今まで気づかなかったのだが、無傷な機体の陰からはボロボロのマントが窺える。全体穴だらけ、特に下側はすっかりほつれてしまっている。

「流れ弾かなにかが当たってたのか……………カノンはともかく、リグル様はまだ俺たちのこと信用し切ってないみたいですね……………病室ではまだ打ち解けてくれてたけど」

「仕方ないのかもよ。カノンちゃんはまだしも、リグル様は全く勝手の違う世界から来たから……………突然わからない所に放り込まれて、何を信じていいか判断に迷ってるんだろう」

一夏と恭弥がこつそり会話を交わす間に、カノンが乗り込んでハンガーから出たアトランティアは跪く様に身を屈め、マントの許に寄りたりグルはおもむろに下側のほつれに向かって手をかぎす。

と、掌が薄つすらと光り出し、手の動きに合わせてほつれていた箇所が新品同様に折り直されていく。

「凄い。正に魔法ですね。病室で言ったのもあんな感じですか?」

「いや、ここに来る前に見た時は、一瞬で分厚い氷の壁を発生させた。それでシュウさんを助けてくれたんだけど……………あれはあれで確かに

凄いな。繊維工場も仕立て屋もお払い箱になりかねないよ」

「1人だからまだいいのかもしれないけど、リグル様みたいな人が何人もいたら、それはそれで困ったことになるかもね」

淡々とマントを直していくリグルに圧倒されながら、一夏と恭弥、アカネは呆然と感想を漏らす。

手が届く範囲を一通り消し終わると、リグルは少し下がって上の方に空いた多数の穴を見る。

「あー、これ以上は一人じゃ無理だね。誰かに手伝ってもらわないと。肩車とか、他のロボットの手に乗せてもらうとか」

「そういうことなら俺が」

アトランティアから降りてきたカノンの指摘を聞きつけるや、一夏はスポーツドリンクを飲み干して体全体を光で包み、再度白式を展開して白のコクピットへ飛んでいく。補助機能を復活させた白式は羽の様に軽やかに舞い、一夏の顔色からは疲労が消える。

「今のは!?……そういうえば先ほども一瞬で鎧が消えて………こちらの世界にも魔法が?」

「いいえ。僕も詳しい仕組みは知らないけど……とにかく魔法ではありません」

その光景に目を丸くするリグルに恭弥がぎこちなくも応じる間に、一夏はかさ張るウィング・スラスタを器用に狭めてハッチをくぐり、コクピット中央に垂れ下がっているケーブルを背中のソケットに繋ぐと、小気味良い駆動音が響き出して内壁全てを覆うモニターが外の景色を映す。

機体を歩み寄らせて跪かせると、一夏はリグルの許に左手を添えた右手を差し出し、開いているハッチ越しに呼びかける。

「どうぞ」

「……」

(……まだ、警戒されてるのかな?)

しかしリグルは困った顔でその場に佇んで手に乗る気配を見せず、そんな態度に一夏は不安を覚える。

と、

「一夏君！左手のソレ、熊手みたいなのなんとかならないか？僕も一度乗せてもらったからわかるけど、掌が丸ごと砲口になっててちよつと怖いんだよ」

「ああ、そうか。ちよつと待ってください」

リグルとカノンの後ろに歩み寄ってきた恭弥の指摘に、一夏は自身の左腕を覆う雪羅に意識を向け、それが外れる様子を想像する。

直後に白式を介して白の雪羅のロックが外れた信号が伝わり、白の右腕を伸ばして手袋の様に外すと、その下から右腕と同じ直線主体ながら人のそれを模した左手が現れる。

「へー。その大砲付きの腕、外せるんだ」

「ああ。ただ、外すと武器がほとんど無くなっちゃうんだけどな。さあ、今度はどうです？」

カノンの感想に応じつつ、一夏は再度手を差し出す。

「……」

「リグル。私も一緒に乗ってあげるから……一夏や恭弥の……違う世界の人たちの親切、無駄にしちゃいけないよ」

「……………うん」

カノンの説得になんとか頷くと、リグルは恐る恐る白の右手に乗り、その後にかノンが続く。

2人が掌の中央まで移動し、体を安定させたのを確認すると、一夏は左手を添えてゆっくりと立ち上がる。

「では、まず左上の方に寄せてください」

「了解です」

リグルの指示に応じると、一夏は2人が落ちないように注意しつつ右手をアトランティアの左肩の近くへ寄せる。

手を伸ばせば触れられる距離まで近づくと、リグルは掌に光——魔法陣を展開し、それを手近な穴にかざす。

「左から右に動いて、徐々に下へ行く感じに。ゆっくりと」

「はい」

応じると、一夏はリグルの指示に従ってゆっくりと手を動かす。

その動きに合わせて、魔法陣を当てられた範囲の穴が最初から無

かったかの様に消えていく。

「……やっぱり、リグル様って凄いね」

「……ですね。何処からともなく現れる白やニコイチを見た時も驚いたけど、ここまで来るともう……」(よく考えたら、先輩たちが見たら半狂乱になって喜びそうな絵だな)

下で佇むアカネと恭弥は、最早遠い目をその光景に向ける。特に恭弥は、オカルト研究会の面々が目の色を変えて写真を撮りまくる様を想像し、心の中に苦笑いを浮かべる。

その間にも、一夏は指示に応じて手を移動させ、手の上のリグルは魔法陣をかざしてアトランティアのマントを修復していく。

穴が全て消え、マントが新調したかと思えるほどに修復されると、疲労を浮かべたリグルはカノンに肩を貸してもらいながら白の掌を降りる。

「いやアリグル様、お見事です」

「……これくらい。向こうの世界の人間は普通にできます」

称賛という名の感想を贈る恭弥に、リグルはあくまでも壁のある様子で返す。

「……疲れたみたいですけど、大丈夫ですか？」

「ああ、魔法ってたくさん使うと消耗するんだよ。これくらいなら少し休めば治るかな」

「……ゲームのMPみたいなもの？」

リグルの顔色を心配するアカネに説明で応じるカノン。それを聞いた恭弥は、真っ先に思いついた例を上げてみる。

「そんなとこ」

頷いて応じると、カノンはリグルをアトランティアの足元に誘導し、足の上に腰を下ろさせる。

「私としては、こっちのロボットの方が気になるんだよねえ。加藤さんのニコイチとか、灰色のゲシュペンストとか、恭弥のシルフィードに一夏の羽付きユニコーン、もちろんゴースト退治の時に来てくれたあの3機もね」

「……ホント好きなんだな。そういうの」

(……バニングス2号だな)

格納庫内を嬉々とした目で見まわすカノンに、ハッチから身を乗り出した一夏が感心した様子を見せ、恭弥は改めて友人の姿を連想する。

と、アカネが首を傾げる。

「ユニコーンって、一夏君のカスタム型ヒュッケバインのこと？」

「いやいやアカネさん。コレはヒュッケバインじゃないよ。ガ  
……………あれ？」

応じようとしてすぐに、カノンの言葉が詰まる。

「ガ…………ガ…………ガ……………あれ!?出てこない？」

尚も思い出そうとするものの、探している言葉はそれ以上続かず、困惑を浮かべたカノンは頭を抱える。

「どうしよう!私が元いた世界ではすっごい有名な名前だったのに!  
あの『白い奴』の名前が出てこないってどんだけ重症!」

「お、落ち着けカノンちゃん!たぶん記憶障害の影響だよ。今無理に  
思い出さなくても、しばらくすればひよっこり思い出すって」

「…………ホント?」

努めて冷静になだめる恭弥に、カノンはやや涙目になった視線を寄こす。

(うつ!そんな切ない目を向けられると……………というか、カノンちゃんって男装してるくせにこういうところは普通にかわいいというか……………女の子だな……………て、そうじゃなくて!)「…………たぶんね」

「たぶんか……………」

恭弥の頼りない返答に、カノンは困惑こそ消えたものの顔を俯ける。

(ええい!女の子が困ってる時に僕は……………)

その様子を見て居た堪れなくなった恭弥は、腕を組んでしばし思案する。

「……………そうだ!せっかくだし、もう一回白の手に乗せてもらったらっ!」

「え?……………いいの?」

「好きなんだろう。ああいうの。一夏君もいいよな？」

「俺の方はかまいませんよ。じゃあ……」

恭弥に応じると、一夏は再び右手を差し出す。

「……じゃ、じゃあお言葉に甘えて」

満更でもない様子で言うと、カノンは若干興奮気味に白の掌に乗り込む。

(ま、まさか改めてユニコーンの手の上を堪能できるとは！)

先ほどはリグルの安全確保に気を回していた都合上、その感覚をゆつくり味わうことができなかったカノンにとっては、天にも昇る嬉しきだ。

カノンが手の中央で体を安定させたのを確認すると、一夏は手をゆつくりと上げ、開けっ放しのハッチのそばに持ってくる。

「……そのアーマーの動きに合わせて動くの？」

「ああ。普段と同じ要領で動けるから、その点楽だな」

ハッチ越しにコクピット内を窺うカノンの問いに、白同様胸の辺りに右手を持つてきている一夏は感想を交えて答える。

「へー……なんとかファイターみたいだね……『なんとか』の部分が思いつけない……」

「あ、いやー………」

再び物忘れに半泣きになるカノンに、一夏はどう言葉をかけていいか困ってしまう。

直後、

「……」

けたたましい警報音が鳴り響き、格納庫内の5人は続く放送に耳を傾ける。

『ヨコハマ第5エリアに砲鬼10、雑鬼10、将鬼3出現！各分隊は出動準備にかかれ！』

「出動！いかなくちや！また後で」

緊迫を含んだアナウンスに、先ほどまでの温厚な表情を消したアカネは弾かれた様に第四分隊の格納庫へ駆け出す。

それと同時に、恭弥の端末と白の通信にエリックから連絡が入る。

『非特隊各員に告げる。我々はこれよりヴァルキリーズと協同で鬼の鎮圧に当たる。桂木、織斑両曹長は至急出撃準備の上、ヴェーガスに来い。位置は転送する』

「了解！」

「よっしゃあ！早速仕事だ！鬼だかオークだか知らないけど、アトランティアの力見せてやる！」

一夏と恭弥が同時に応じる一方、白の手の上に仁王立ちしたカノンは誰よりもやる気満々な様子で叫ぶ。

が、

「いや、カノンは行かない方がいいだろう」

「なんでさー！」

冷静に止める一夏に、思わず食ってかかる。

「落ち着けカノンちゃん。君が連邦軍に協力するっていう手続き、まだ終わってない——というかこれからなんだよ。今出ていったら所属不明機扱いで面倒なことになるかも」

「あーそっか……」

恭弥の説明に、カノンは納得しつつも悔しそうに両手を握り締める。

「チクショウ！縦割り行政の弊害がこんなところに！」

「……縦とか横以前に、お前まだ手続き上は“部外者”だからな」

今にもハンカチを出して口で引っ張りそうなカノンに、一夏は冷静にツツコミを入れる。

が、直後にエリックから追加連絡が入る。

『高槻という女の子もそばにいるか？』

「あ、はいーいるよ」

呼ばれたカノンは手の上から身を乗り出し、白の通信越しに応じる。

『機体と体調に問題が無いようならお前も出る』

「どっちも問題ないけど……いいの？私の手続きまだ終わってないんじゃない……」

『相手は鬼、それもかなりの規模だ。戦力の出し惜しみはできん。責

任は俺が取る。すぐに出撃準備にかかれ』

『了解!!そうこなくっちゃ!』

エリックの指示に嬉々として応じるや、話を聞いていた一夏にすぐに降ろしてもらい、カノンはアトランティアの許へ駆け寄る。

「リグルはどつか安全な場所について。極東支部の人たちの邪魔にならないようにね」

「どつかって何処よ?」

「知らない。さっきの病室とか?」

不安そうにアトランティアから離れるリグルに言いつけると、カノンはワイヤーを伝ってコクピットに乗り込む。

「僕はパイロットスーツに着替えてから行く。2人とも先に行つてて」

『了解です』

『了解!』

機体に入り込んだ一夏とカノンに言い残すや、恭弥は更衣室へ駆けていく。

『それじゃあ、俺に着いてきてくれ。案内する』

『うん……て、一夏!一夏!コレ忘れてる!』

『ヤベッ!サンキュー』

エレベーターへ向かうとする一夏を慌てて止めるや、カノンは置きっぱなしになっていた白の雪羅を差し出し、一夏がソレを急いで再装備すると白とアトランティアは格納庫を出ていく。

ややあつてパイロットスーツに着替えた恭弥が戻ってくると、一目散にシルフィードへと駆け寄る。

(ただ、シルフィード傷が直つてないんだよな。大丈夫かな……て)「あれ!？」

不安を覚えながらシルフィードを見上げた恭弥は、その体についていた多数の傷が無くなっていることに気づいて目を丸くする。一番目についていた左脚の大きな傷も綺麗さっぱり無くなっているのだから、見間違いではない。

「リグル様!」



「はい？」

「僕のシルフィードにもさっきの魔法かけてくれたんですか？」

「!?……いいえ。アトランティア以外の機体はかまっていませんよ？」

真つ先に思いついた可能性を問い詰めるものの、当のリグルは突然大声で話しかけられたことに驚きながら首を傾げるだけだ。

「じゃあいったい……いや、今は出撃が先か」

自身も傾きそうになる首をぐつと堪えて最優先事項を思い出すと、恭弥はワイヤーを掴んでシルフィードのコクピットに乗り込む。

席に座るやすぐに機体が始動し、大まかな状態チェックをして異常がないことを確認すると、エレベーターへ歩き出す。

「さっきはアクシデントで逃したが、これが初めての鬼戦……やってやる！」

「第一、第二分隊は市民の避難誘導を、第三、第四分隊は将鬼達の迎撃に試作高出力ビームカノン搭載戦車「グレン」の使用を許可します。砲手ミオ・カンザキ、索敵手アカネ・カワシマの編成で」

端末越しに一通りの指示を飛ばすと、リトスは椅子に深く座り、何故鬼達が出現したのかを思案する。

浮かぶ可能性は2つ。1つはモモタロウの活動拠点がわかったか、もう1つは『アレ』の場所がわかったか。

『アレ』は1年前に極東支部付近の地層から発掘された巨大な物体で、解析は進んではない。が、モモタロウが横浜に現れた日、強力なエネルギー波動を発したのを感知したか。

いずれにしてもその可能性は拭えない。

「……せめて新田博士——源三先生が居てくれたら……今どこにいますか……」

机の上に置かれた大きくピースサインする老人と若い4人の男女の肩を抱く写真を見て、リトスは呟いた。

同じ頃、第二新田研究所では。

「へっくし……風邪でも引いたかの？」

「じいさん、タロウの解析どこまですすんだ？」

小さくクシヤミをした源三の許に、桃矢が歩み寄ってきた。

「……ふむ、未解明領域に現れた文字の解析は終わつとるんじやが

……『大地の力』と『海の力』だけじゃわからんワイ……」

「……なあじいさん、飛鳥を横浜地区の学校に通わせるのは無理か？」

「……飛鳥は首を縦に振らんじやろう……シンヤ達と蓮が死んだのは自分のせいだ、そんな自分が普通の生活を送るのは許せない……悲しいほどに優しすぎるんじや飛鳥は……」

浮かぬ顔の源三の返答を聞きながら、桃矢は2人がいる白武者タロウの整備兼解析用ベッドから離れた場所に視線を向ける。

その先には、最近発掘されたティルレガシイの内一体——小さまざまな色のケーブルに繋がれた巨大な赤い鳥の石像を端末で解析する飛鳥の姿がある。

4年前、両親と弟の蓮を亡くして以降源三と共にモモタロウの整備解析を補佐しているが、夜たまたに桃矢が飛鳥の部屋の前を通るとうなされる声が聞こえる。桃矢はそのことを心配しているのだ。

「……飛鳥ぐらいの歳だつたら普通に学校に通つて友達もたくさんできてもおかしくねえんだ……俺は無理矢理でも学校に行かせるぞじいさ——」

言いかけた時、研究所内にアラートが鳴り響き、2人の前にモニターが形成される。映し出されたのは横浜地区に現れた鬼達の姿。

それを見て目付きを鋭くし桃矢は、強く拳を握り締め駆け出した。

「じいさん！モモタロウを出すぞ!!」

「飛鳥、空間転移カタパルトのスタンバイじゃ……ルイーネは射出管制と座標軸算出!!」

『了解しました！タロウ及びレガシイマシン各機転送システムへと移動開始します』

「行くぞタロウ！がしんたい鎧神一体!!」

赤い点滅灯が照らす中、整備兼解析ベッドが静かに動きだす。その直上にある通路から桃矢は飛び込みの要領で大きくジャンプし、同時にタロウの胸部が開く。

半透明な球体から光が生まれ、その中へと吸い込まれて消えると、タロウの瞳が赤く光輝く。その内部では日本風の鎧を模った白基調のプロテクターを纏った桃矢が不思議な空間に浮かび、ゆっくり目を開ける。

『……鬼共、これ以上手前えらの好き勝手にはさせねえ!!』

赤い鳥居を模した巨大な転送装置が姿を現し、同時に幾何学模様のゲートが光輝くとタロウと一体化した桃矢は飛び込み、レガシイマシンも順次飛び込んでいく。

「桃兄、いつてらっしやうい!!」

「……桃矢君、無事に戻ってくるんじゃないぞ」(……近い内に皆に連絡を取らんといかんの……)

最後のレガシイマシンが入り幾何学模様が消えるのを見届け眩くと、源三は飛鳥と共に自身のラボへと向かった。

突然病室、否、おそらく支部全体に鳴り響いた警報と出動を促す放送に、ユイは身を固くし、寝ているベッドの掛布団を不安そうに握る。(鬼って、さつき加藤さんが話してた……あの人……一夏さんも出るのかな?……出るんだろうな。そういうのに対処する部隊って言うてたし……)

連鎖的に浮かんできた一夏の顔、それが遠くに——危険な場所に行ってしまうのだという認識は、ユイの不安をさらに深める。親しい人がそばにいなくても平気でいられるくらいには、まだ彼女の心は回復していない。

『第一、第二、第三分隊、出動!第四分隊は【グレン】の準備を……』

どこからか流れてくる出動経過の放送を右から左へ聞き流しながら、不安に突き動かされた手はサイドテーブルの上のヘルスフレンド・いちじく味を掴み、それを胸の前でお守りの様に抱きしめる。

「……………一夏さん！」

自分でも意識せずに、脳裏浮かんだ者の名を呟くと、

「……………失礼します」

「!?……………リグル様？」

ノックの後に返事を待たずに入ってきたリグルに、ユイは目を見開く。

「……………あの、なんでここに……………」

「邪魔にならないようにする為です。今この基地は忙しいようなので。カノンたちも出ていったので」

動揺しながらも問うユイに壁のある態度で答えつつ、リグルはベッド脇の丸椅子に腰を下ろす。

「はあ……………」(やっぱり、一夏さん出撃したんだ……………)

予想が当たったことに不安を強めつつユイが応じると、2人の間に沈黙が横たわる。未だ放送が流れ続けているが、自分に関係なく、意味もわからない内容は2人にとって風音に等しい。

「……………あの、リグル様」

沈黙による重い雰囲気にかけてか、ユイは恐る恐る話しかける。

「何ですか？」

「リグル様は不安ではないのですか？高槻さんがやられないかって……………」(変なこと訊いちやったかな?)

思わず訊いてしまった内容に、ユイは少し後悔する。

「……………不安が無いと言えば嘘になります。でも」

「でも……………」

「カノンはアトランティアの操縦者であり、私の騎士です。相手が何者であろうと、必ず勝って帰ってきてくれると信じていますから」

言いながら、リグルは強い意志と信頼を含んだ目で真っ直ぐにユイを見据える。

(信じる、か……………。「そう……………ですね。信じるだけですよね。今は……………」

視線を介してリグルの意志が伝播したのか、ヘルスフレンドを握る

手にやや力を込めながら、ユイは自分に言い聞かせる様に断じる。

（みんなが頑張ってる時に何もできないのは悔しいけど……今は信じ  
るしかない。あの真っ直ぐな目の人は戻ってきてくれることを）  
「……………あつ」

脳裏に浮かんだ一夏の顔に一段と力を強めると、袋越しのヘルスフ  
レンドが潰れた。

黒い大蛇との戦いを終え、放り込まれる様にこの部屋に閉じ込めら  
れてどれくらい経っただろうか。

静かだった周囲が扉越しにも騒がしくなり、間を置かず部屋全体が  
微かに揺れ始めたのを感じて、部屋の隅に縮こまっているユウ・ブレ  
イブは薄暗い周囲に首を廻らせる。

「移動するの？…またさっきの蛇？…それとも、別の敵？……………」

その質問に答える者はおらず、沈黙だけが返ってくる室内に、ユウ  
は顔を俯け、手錠で繋がれた両手を無感動に眺める。

「いつまでこうしてればいいんだ。そもそもなんでこんなことに  
……………ユリ……………」

自分がこの先どうなるのか、そもそも今何が起こっているのか。状  
況がわからない不安が胸を覆い、恋人が跡形もなく消える瞬間が脳裏  
を過ると、ユウは脚を抱く様にしてさらに縮こまる。

そんなユウの気持ちとは関係なく、部屋、否、ヴェーガスの振動は  
大きくなっていった。

地球連邦軍最新鋭飛行巡洋艦ヴェーガスは、エリック・ノヴァ艦長  
指揮の下、一路横浜の現場を目指していた。

元来ネメシスタイプの専用母艦として設計されたヴェーガスには  
個室状の格納庫が3つ設けられており、各格納庫内にはそれぞれネメ  
シスタイプ3機が固定されている。

もつとも、各格納庫には若干だが余裕があり、20メートル級以下

の機体ならばもう1機ずつ入ることができる。

現在その余裕のスペースにはシルフィード、ユニコーン・白、アトランティア・ルージュがそれぞれ乗り込み、高速で移動する為に揺れが激しい艦内でなんとか姿勢を安定させようと格納庫内のわずかな出っ張りに手足を引っかけている。傍から見れば、握り棒やつり革にしがみつくと電車の乗客の様だ。

その横には、ヴァルキリーズ極東支部第四分隊を乗せた輸送機が並んで飛んでいる。

『飛行母艦乗って現場に急行！これぞロボットの移動だよねえ！直接飛んでいくのも捨てがたいけどさ』

『カノちゃんってホントこういうの好きなんだねえ』

『カ、カノちゃん？』

『カノンだからカノちゃん。いいでしょ？』

『ほお？そう来たかあ……じゃあ、私は今後フィルちって呼ばせてもらうよー！』

『OK！』

『……仲いいなあの人』

『同感だ。妙に馴染むな』

同じ格納庫に収容されているアトランティアとギガンテック、そのコクピット越しに碎けた会話を交わすカノンとフィルシアを通信で聞きながら、恭弥は一夏の呟きに同意する。

『各自私語は慎め！これより打ち合わせを行う』

直後にエリックの鋭い声が通信に響き、パイロット一同は水を打った様に静かになる。

『カワシマ分隊長、聞こえるか？』

『はい。良好です』

第四分隊への通信状況を確認すると、エリックは説明を始める。

『これより我々非特隊、及びヴァルキリーズ第四分隊は、先行した第三分隊と合流して鬼の鎮圧に当たる。非特隊各機は両分隊と共同で鬼を迎撃せよ。本艦は艦載機降下後、現海上空を通過して離れた空域で待機、状況に応じて支援砲撃を行うが、市街地の真っ只中という都合

上、あまり期待はするな。降下の際、飛行可能な機体はそうでない機体の着地の瞬間を狙われないよう援護するように。また、予想されるルミエイラの乱入にも充分注意せよ。俺からは以上だ。何か質問は？』

『……………ないようなら、各機の役割について説明します。先発は戦機人改ノゾミ機、続いて試作高出力ビーム砲搭載戦車「グレン」——砲手ミオ・カンザキ、策敵及び精密射撃補足担当アカネ・カワシマ、戦機人二番機アキラ・アマネ、戦機人三番機サヨコ・シノヅカ。戦機人3機はチャージ及び砲撃時の護衛を私と共に行います。非特隊各機はこれを援護しつつ、第三分隊と共に鬼の迎撃を行ってください』

『「了解」』

『りよ、了解！お姉……………隊長!!』

続くノゾミの説明に非特隊と第四分隊の面々が応じる中、アカネはあからさまに緊張の現れた声を出す。

『緊張するなって。あたしらが護衛するんだ、泥舟に乗ったつもりでどんと構えてな!!』

『アキラ！泥舟じゃなくて大船でしょ!!あんたってホント緊張感ないんだから!!』

『クスッ……………』

『……………あつちもすごいな。ある意味大物なのか?』

『流石鬼専門組織ってことですかね?』

『……………緩すぎる気もしますけど』

アカネの緊張を受けてアキラがボケ、サヨコがツツコミ、それに笑いを漏らすミオに、恭弥と一夏はどこか畏敬の念を抱き、サクラは眉間に皺を寄せる。

と、再びエリックの通信が入る。

『そうだ、忘れるところだった。非特隊側の現場指揮官だが、桂木曹長に任せる。織斑曹長はフォローしてやれ』

『「ええ!」』

突然の大役宣言に、指名された恭弥と一夏は目を見開いて仰天する。

「ちよ、ちよつと！何で僕が指揮官なんて……」

『現場で直接指揮をする者がいないと困るだろう。正式な曹長という立場と、この中では一番年長ということから暫定的に判断した』

「それは……まあ……でも、僕に指揮なんて……」

エリックの説明に一応理解を示しつつも、恭弥は不安を拭い切れな  
い。役割上の責任を認識しつつ、それに吊り合う知識も自信も無いか  
らだ。

『突然ですまないとは思う。しかし、だから織斑曹長にフォローを頼  
むんだ。2人で考えれば少しはマシだろう。あくまでも判断の優先  
権がお前にあるというだけだ。どうしても困った時はカワシマ分隊  
長を頼れ』

「……………了解です」（やるしかない……………か）

未だ煮え切らない部分はあるつつも、間近に迫っている現場を前に  
恭弥は無理やり腹を決める。

「というわけで一夏君、フォロー頼む」

『俺が役に立つかどうかわかりませんが……了解です』

一夏の方も迷いながらも応じてくれると、少し気持ちが楽になる。

『間もなく降下ポイントに接近。各機はスタンバイしてください』

ヴェーガスの通信士・リン・スメラギ大尉の指示に、恭弥はシル  
フィードの最終点検を済ませていつでも出られるようにする。

ふと後ろを見ると、無人のネメシス08がハンガーに固定されて佇  
んでいる。

（あの時の悔いは今にぶつける。それだけだ！）

そう断じ、一瞬浮かんだユウの件の気持ちを頭から追い出すと、そ  
れを待っていたかの様に正面のハッチが開いていく。

それに合わせてヴェーガスの速度が若干弱まるが、それでも装甲越  
しに鋭い風音が叩きつけてくる。

『艦載機、順次発進！』

「ホワイト3、行きますー！」

エリックの指示に答える様に叫ぶと、恭弥はペダルを深く踏んでシ



ルフィードを飛び立たせる。

同時に左右の格納庫から白とアトランティアが発進し、ヴェーガスからテンペストとギガンテックが、輸送機から戦機人3機とグレンが降下する。

(じゃあ早速！)「ホワイト2とアトランティアへ。降下機の援護を行う。周囲警戒！」

『了解！』

毅然とした声を意識して飛ばした指示に、一夏とカノンはしっかりと応えてくれる。

それに少しだけ自信をつけると、恭弥は2機と共に降下機たちを囲む様に高度を下げ、眼下に広がる都市へと下りていく。

その頭上で空が波打っていることに気づく者など誰もいなかった。

その頃、地上の現場では。

『隊長、民間人の避難誘導8割終わりました！』

「第四分隊と連邦軍のからの応援もあと数分で降下してくるわ……いまが踏ん張りどころよ！」

『ふふ。これが終わったら隊長は虎ちゃんとデートですもんね』

「な？何でミサキがしつてんの!?!」

『バレバレですよ。でも肝心の虎主任は気づいてないみたいツスけど』

「あ、あんた達、後で覚えてなさ……！来たみたいね」

第三分隊長——アリス・神山・ティグリスかみやまが駆る戦機人が見上げた先には、上空から自由落下する複数の機影と、それらを囲む様に高度を下げる3つの機体——第四分隊と非特隊各機がある。

それらの内、試作型高出力ビーム砲搭載戦車「グレン」と戦機人改、戦機人二号機と三号機、2機のIADは着地寸前に各部推進器に逆噴射をかけさせて落下速度を減速し、第四分隊各機は地上へ降り立つやグレンを中心に三角陣を形成して周囲警戒をしつつ第三分隊へと合流する。

『待たせたわねアリス』

「2分遅刻って言いたいけど、今回はあんた達が作戦の要だから仕方ないわ……雑鬼と砲鬼はあたし達に任せて将鬼の相手をお願いするわ」

『了解、終わったらビール奢るわよ』

「おあいにく様、あたしは今日用事があるの」

『虎主任とデートですもんね♪』

「いい加減しなさいあんた達いい!!」

ノゾミとのやり取りに茶々を入れてくる隊員に、アリスはそれこそ鬼の形相で怒鳴り声を上げる。

直後、

「!？」

頭上の空が歪んで黒い穴となり、そこから黒い鎧の様な機体——クロイツリッターの大群が現れる。

「コイツ等、報告にあった……!？」

『ホワイト3より非特隊全機、クロイツリッターを迎撃せよ!』

『『『了解!』』』

突然の乱入者にアリスが動揺する間に、ホワイト3と名乗った白銀の機体が毅然とした、しかし若干不安を含んだ声で指示を飛ばし、応じた非特隊の4機はクロイツリッターへの攻撃を開始する。

『あの鎧は彼らに任せて。あなた達は手筈通り鬼をお願い』

「……了解。ちようど来たみたいだしね!」

やや不安を抱えながらもノゾミに応じると、アリスはビル群を挟んだ遠方に雑鬼や砲鬼の軍団を認める。

『第三分隊各機、鬼共を食い止めるわよ!』

『『了解!』』

隊員たちの応答を聞くと、アリスは自分の乗る戦機人にショットガンを構えさせ、鬼たちの許へ駆けさせた。

(やっぱり来たか、ルミエイラ!)

意識して毅然とした声で非特隊各機に指示を飛ばすや、恭弥は先陣を切る様にシルフィードをクロイツリッターの大軍へ向かわせる。

「数は……30つてどこか」

『第三分隊の人たちは鬼の方で手一杯でしょうから、相手ができるのは俺たち5機だけですよ』

「単純計算で6倍の戦力差……でも、やるしかない！」  
『ですね！』

レーダーを確認し、一夏の指摘に応じる間にも、クロイツリッターたちは二手に分かれる。大多数は鬼の許へ向かう中、5機が非特隊目掛けて突進してくる。

「全機個々に迎撃、方法は任せるー！」

『『『了解！』』』』

僚機たちの返事を聞くと、恭弥はシルフィードにルミナ・グラティウスを握らせ、手近のクロイツリッターに狙いを定める。

相手もそれに気づいてかマシンガン撃ってくるが、機体を上下左右に大きく振ってそれをかわし、射撃モードにしたルミナで応戦のビームを放つ。

1発、2発、3発と連射するものの、回避に専念したクロイツリッターはそれらを全て避けてしまう。

もつとも、恭弥の狙いはそれだ。

「コンッー！」

相手からの攻撃が止んだ一瞬、ペダルをベタ踏みして背部スラストを全開にし、瞬時に距離を詰めるや加速の勢いを乗せたルミナの切っ先をクロイツリッターの胸に突き刺す。

背中まで貫通したルミナを引き抜くと、動力を破壊されたクロイツリッターは糸が切れた様に地上へ落ちていく。

「まずは1機……みんなは？」

周囲に警戒しつつ僚機たちの様子を窺うと、近くの空域を飛ぶ白を見つける。

クロイツリッターの放つマシンガンの一連射を体を捻ってかわすや、真後ろに向けた4基のウイング・スラストを一斉に吹かし、一

瞬で懐に入る。先ほど恭弥が行った突撃戦法の参考とした技法——  
瞬間加速だ。

『オオオオ！』

距離を詰めるや一夏は両手で握った雪片を腕一杯に上げ、気合いと共に振り下ろしてクロイツリッターを頭から一刀両断する。

その横では、アトランティアがマシンガンの斉射を立体的に大きく動いて回避している。鎧騎士そのものの外見と背中を覆うマントと合わさって、その光景はさながら舞いの様な優雅さを伴っている。

弾切れかマシンガンの不調か、銃撃が止んだ一瞬後、カノンはそれこそ銃弾の速さで距離を詰め、クロイツリッターの腹部に剣を突き刺す。

『我に断てぬもの無し……て、突いちやダメじゃん！』

自分のボケに自分でツツコミを入れる。

直後、

『え？ウソ！』

束の間沈黙していたクロイツリッターが再び動き出し、油が切れた様なぎこちない動きながら剣を刺したままのアトランティアにミサイル発射口を開いた右腕を向ける。

「動力を潰し損ねた!？」

事態を察するや恭弥はシルフィードを駆けさせ、クロイツリッターの右腕目掛けてルミナのビーム弾を放つ。

アトランティアの鼻先を掠めた光弾は右肘を直撃し、溶断された腕が未作動のミサイルを抱えたまま地上へ落ちていく。

それと同時に白が背中から雪片を突き刺し、切っ先が十字架の描かれた胸部を突き破るのと合わせてクロイツリッターは今度こそ機能を停止する。

『ありがとう2人共。でもさっきのビームは怖かったよ……』

「ビビるのは後。地上の2人の所に行くよ!」

『了解!』

若干震えた声のカノンに返しつつ指示を出すと、恭弥を先頭にした3機は上空からネメシスタイプ2機に銃撃を行うクロイツリッター

2機の許へ向かう。

上空からの銃弾の雨にさらされているサクラとフィルシアは、それでも互いの機体を背にして負けじと対空砲火で応戦する。

サクラのテンペストは左肩マシンキャノン、フィルシアのギガンテックは左右に2挺ずつ、腕を収納する形で装備されたガトリングガン計4門を斉射し、クロイツリッター各機は上下に動いてそれを避けながら三々五々マシンガンを撃ち返してくる。

そして、

『そこっ！』

『もらいつ！』

弾幕をかわした、というよりも予定の位置に誘導されたクロイツリッターそれぞれに、サクラは右肩ビームキャノンを放って胴部を焼き貫き、フィルシアは両肩のソニックレールキャノンを撃って豪速の弾丸2つが腰部を粉碎する。

ビームを撃ち込まれた方はそのまま爆発四散するが、腰を砕かれて上半身だけが残った方は辛うじて機能しており、両腕を向けて手首の全ミサイルをテンペストとギガンテックに放とうとする。

『やせないよー！』

相手の意図を察するやカノンが突貫し、上空から落ちる様に急降下して剣を振り下ろし、ミサイル発射前のクロイツリッターを真つ二つにする。

『これでさっきの失点回復！……おっと。我に断てぬもの無し！』

『それ言わなきやダメなの？』

剣を肩に担いで決め台詞らしきものを言うカノンに、フィルシアが質問ともツツコミとも言えない様子で問う。

『いやあゝ。こんな世界に来たら決め台詞くらい言ってみたいじゃん。さっきうつかり失敗したし……』

『？』

『おしやべりは後！』

生き生きと応じるカノンと意味がわからない様子のフィルシアにぴしやりと言うと、恭弥は各機の様子を確認する。

「……とりあえず、損傷のある機体はいないね？」

『はい。白はもともと丈夫ですし』

『アトランティアも平気だよ。全弾避けられたしね』

『テンペスト、異常ありません』

『ギガンテックも無事。何発か当たってたけど、この機体<sup>」</sup>防御力高いから』

各自の返答を聞くと、恭弥は次の指示を考える。

「よし、それじゃあ………第三分隊の支援に行こう。優先はクロイツリッターだけど、各自の判断で鬼にも対処。あと、テンペストとギガンテックは後方から援護射撃を。さっきの戦闘を見たけど、積極的に前に出ない

方がいい。特に飛行機能があるクロイツリッターには分が悪いからね」

『了解！』

『りよ〜か〜い！付け加えるなら、ギガンテックはもともとそういう機体だからね。あと足も遅いし』

「そうなの？……まあいい。第三分隊の支援へ向かう」

『『『了解！』』』』

サクラとフィルシアの返事を聞くと恭弥は号令を飛ばし、非特隊各機は第三分隊の許へ向かう。

通信越しに聞いた第三分隊の面々のやり取りにを思い返しながら、グレンの操縦席に座るアカネは心の中で呟く。

(どこの隊も賑やかだな……)

その間にも第四分隊の戦機人3機は各々の持ち場につき、アカネも手を休めることなくグレンのエネルギーチャージと索敵を行う。

その一方で、降下時の秘匿回線で交わしたノゾミとの会話を思い出す。

(お姉ちゃん、モモちゃんに会ったの!?)

(ええ、あなた達が撤退した直後に未確認のロボットが現れて私を助

けたの知ってるわね……そのロボットに桃矢が乗っているの)

(……お姉ちゃん、モモちゃん生きてるなら何で連絡くれないの?)

(わからない、でも病室で加藤大尉が言っていた通り、司令から話し合いの場を持ちたいとモモタロウに伝えてくれと頼まれたわ……アカネも一緒に協力してくれない?)

(……うん、でもモモちゃん私達のお話聞いてくれるかな?)

(もし聞かないときは『あれ』をばらすって言いなさい……もし桃矢なら反応するはずよ)

「……あれをばらすか、モモちゃん怒るかな……でも連絡くれなかったモモちゃんが悪いし……」

「……どうしたのアカネ?……」

「う、ううん何でもないよミオちゃん……」

砲手席に座るミオの呼びかけに我に返ると、アカネは一旦手を止めて遠くを見やる。

グレンのモニターを介した視線の先では、第三分隊と非特隊が、鬼とルミエイラを相手に混戦を繰り広げていた。

『雑鬼10、砲鬼10、クロイツリッター25……改めて見ても大部隊ですね』

『正に歓迎(物理的)だね』

「ルミエイラは何度かやり合ったから、鬼の方はさっきのライカさんたちとの一件で僕らを警戒するようになったから……かな?」

レーダーに映る敵機の数を引き締め直す一夏に、カノンは努めて軽い調子で応じ、恭弥は軍事の素人なりにこれだけの数が来た理由を考えてみる。

『敵さんもウチらのこと買ってくれてるってことかな?腕が鳴るねえ〜!』

『調子に乗らないでフィルシア。敵が強力になるってことは、それだけ私たちの負担と危険度が増すってことなんだから』

『わかってるよ!』

サクラの叱責にフィルシアがブレることのない明るい調子で応じると、鬼と共同で地上攻撃をしていたクロイツリッターの一部がこちらに向かってくる。

その内の1機を捕捉するや、恭弥はルミナの銃口を向ける。

(……武器がマシンガンじゃない? いや、今はそれより)

照準の中のクロイツリッター、その右手に持つ火器がこれまで見てきたマシンガンとは異なる古式の長銃の様な形であることを気にしつつも、一瞬後には構わず引き金を引く。

ルミナから放たれたビームはクロイツリッターへ直進するが、相手は左半身の推進器を吹かして右へ回避する。

直後、

「!?!」

応戦に向けられた長銃からビーム弾が放たれ、跳ねる様に高度を上げてかわした恭弥は——否、今の光景を見た非特隊一同は驚愕する。

『ビーム兵器?!』

中でもルミエイラとの初遭遇時から恭弥と共に戦ってきた一夏は、自分でも知らぬ間に戦慄の声を上げる。

「あんなの……今まで無かったぞ?」

『これまでに得た非特隊の情報に合わせて新型を出してきた、といったところでしようか』

動揺する恭弥にサクラが冷静に分析を述べると、シルフィードのモニターにビームを撃った機体の情報が表示される。

「……やっぱり入ってたんだ……『クロイツリッター・グランツハーケン』?」

『名前とさっきの攻撃からするに、今まで戦ってた奴の強化型っぽいね』

恭弥が映し出された名前を読み上げる横で、カノンが推測を述べる。

『とにかく、エネルギー兵器相手なら白の出番だ。俺が前が出るから、恭弥さんとカノンは後ろについてくれ』

「でも白だって……いや」



一夏の提案に一瞬否定の声を上げかけるが、寸の所でそれを飲み込んだ恭弥は冷静に判断する。

ここ4日の間に教えてもらったことによると、白の特殊機能——『零落白夜』はそれがエネルギー質のものなら何であろうと完全に無効化できるという。シールドに使えばビーム攻撃に対しては正に無敵の盾となる。しかし機能に費やされるエネルギー量は膨大であり、使用時間が長引けばシールドを発生させられなくなるどころか、白そのものが動かなくなってしまうという大きな欠点を抱えている。空のルミエイラ、地上の鬼というこの状況で動けなことは致命的だ。しかし、

「……この中にビームの直撃を受けて無事でいられる機体はいない。なにより、数は向こうの方が圧倒的に勝ってる。戦力を出し惜しみできる状況じゃない、か……わかった。一夏君を防壁にして僕とカノンちゃんで攻撃を」

『了解！』

短い時間ながら吟味した判断を下すと、恭弥はカノンと共に白の後ろに回る。

先頭に行く白が左腕の雪羅を前に出してシールドを張るや、距離を詰めたクロイツリッター5機とクロイツリッター・グランツハーケン3機から銃撃が行われる。

「このっ！」

ビームを無効化し、頑丈な装甲で銃弾を受けてくれている白の陰からルミナの銃身を出すと、恭弥も負けじと応戦のビームを撃つ。

その横ではカノンもアトランティアの掌に発生させた魔法陣からアークブレイズを放ち、サクラとフィルシアも地上からビーム・実体弾織り交ぜた支援射撃を加えてくる。

乱射したビーム弾の1発がグランツハーケンを直撃して火球に変えるのを見るや、恭弥はルミナを剣に戻して白の陰から躍り出る。

「これだけ近づけば格闘戦の方が確実だ！行くぞー！」

『おおー！』

『私もその方がやりやすいしねー！』

一夏とカノンの返事を聞くと、恭弥はマシンガンから剣に持ち替えたクロイツリッターの1機に間合いを詰め、上段に構えたルミナを振り下ろす。

相手はそれを剣で受け止め、鏝迫り合いになる。

しかし、

(！しまった！)

剣を押し合って動けないところにグランツハーケンが接近し、シルフィードの左横につくやビーム銃を向ける。

が、

「!?」

『桂木曹長。貸し一つ!』

「あ……ああ。助かった」

地上から飛んできたギガンテックの脚部ビーム砲に胴を貫かれて爆散するグランツハーケンに一瞬啞然とするが、すぐに気を取り直してフィルシアに礼を言い、目の前のクロイツリッターに向き直る。

「流石、そちらも手慣れてきたか?だが……馬力ならシルフィードが上だ!」

腹の底からの声と共に両腕に意識を集中し、それを受けたシルフィードがクロイツリッターの剣を押ししていく。

「これだけ詰めれば!」

剣を押し付けると同時に体を寄せて距離を詰めると、両肩部のレーザーキャノンを胸部に撃ち込む。

1発ごとの威力は大して無い牽制用の火器だが、至近距離で放たれた二条のレーザーはクロイツリッターの胸部を貫き、直後に相手は糸が切れた様に落ちていく。

「次は?」

自機の陰から出て先陣を切るシルフィードを見るや、一夏はグランツハーケンの1機に狙いをつけて距離を詰める。

(少し無茶し過ぎたか?……でも、まだやれる!)

シールドの長期使用により7割まで減った白のエネルギーに危機感を覚えるが、次の瞬間には気を持ち直して飛んできたビームを雪羅のシールドで受ける。

「オオオオー！」

直後に雄叫びと共に瞬間加速をかけて瞬時に接近し、加速の勢いを乗せた雪片をグランツハーケンの胸部に突き刺す。

すれ違いざまに放たれたビームが左上腕を掠るものの、どうにか相手を沈黙させる。

直後、

「うおっ!？」

下から飛んでくる物体を感知して慌てて後退すると、一瞬前まで自分がいた空域を大振りの瓦礫が下から上へ通り過ぎていく。

「アイツかー！」

瓦礫が飛んできた辺りにこちらを睨み付ける雑鬼を見つけるや、一夏は左腕を腰に引いてその許に急降下する。

「どれだけ硬い装甲か知らないが、コレならどうだ！」

叫びつつ、左掌を雑鬼の胸部目掛けて突き出す。

同時に雑鬼は腕一杯に上げた金棒を振り下ろそうとするが、

『ガッ!?!』

直前に背後から何かを撃ち込まれ、途端に右肩の周囲が凍り付いて腕が動かなくなる。

(?・否、今はー)

突然の異変に一夏は首を傾げそうになるが、構わず掌に備わっている砲口から荷電粒子砲の太い一撃を放つ。

『ガアアアアアア——!!』

実体兵器に対しては鉄壁の防御力を誇る装甲も、灼熱の粒子、それも至近距離で放たれたそのの前には蒸発の宿命から逃れることはできず、胸周りの消失に断末魔を上げながら雑鬼は爆発する。

「今のは?？」

『非特隊の人、大丈夫ですか?』

一夏の疑問に答える様に通信が入り、爆発によって発生した周辺の

ビルを撫でる火災に向けてまた何か放たれる。炸裂したそれは白い煙、否、水蒸気を上げて周囲を覆い隠し、白のベールが晴れると正面に両肩から1門ずつ砲身を伸ばした戦機人を確認する。

「ええ、大丈夫です。今の消火、というか、鬼の肩を凍らせてくれたのはそちらですか？」

『はい。ヴァルキリーズ特製・特殊凍結弾。凍結による鬼の足止めや、今の様な消火活動の為の装備です』

「そんな物まであるんですねえ。ありがとうございました」

戦機人のパイロットの説明、そして先ほどの援護に対する礼を言うと、一夏は白を飛び立たせて次の敵機を探す。

白の陰から出たシルフィードに続こうと、カノンもアトランティアの速度を上げようとする。

直後、

「おつと!?!」

上空から急接近したクロイツリッターが剣を振り下ろし、アトランティアの剣でそれを受け止める。

「積極的だねえ!?!そういうの嫌いじゃないよ?!でも」

言いながら両手持ちした剣で相手の一撃を押し返し、反動で体が泳いだ一瞬を突いて胸部に刃を突き入れる。

「私百合専だからさ、男はお断りってことで!?!……て、無人機に男も女もないか?」

落ちていくクロイツリッターに告げつつ、自分の発言に自分で首を傾げる。

「……と、考えるのは後!?!」

背後に回ったクロイツリッターが両手首と両脚からミサイルを2発ずつ、計8発放ち、カノンはアトランティアを駆けさせてやり過ぎそうとする。

が、

「ホーミング!?!聞いてないよ?!」

右に大きく動いたアトランティアを追う様に軌道を変えたミサイルに驚愕しつつ、カノンは急ぎ高度を上げながら上下左右デタラメな飛行を繰り返して振り切ろうとする。

このアクロバット飛行の中で4発がそれぞれ触れ合って誘爆するが、残り4発は尚も後を追ってくる。

「どうするカノン？アトランティアにチャフやフレアなんて搭載されてないし、撃ち落とそうにも飛び道具ないし……ええい！」

ヤケツパチに下から迫るミサイルを見据えると、左手に展開した魔法陣からアークブレイズの光弾を連射して迎撃しようとする。

1発は当たって誘爆したものの、発生した爆炎に照らされて残った3発が突撃してくる。

「ヤバッ！」

回避も迎撃も不可能な距離に入ったと直感するや、咄嗟に剣を前に出して楯にする。

直後、

「!?」

四方から飛来した5本のビームにミサイルは全弾貫かれ、アトランティアは近距離の爆発に煽られるものもの事無きを得る。

「今のは……テンペスト？」

すぐにビームが来た方向を探ると、四方八方に応戦の火線を張り続けるテンペストを見つける。

指示と共にシルフィードが先陣を切り、それに続いて白とアトランティアが前に出ると合わせて、地上を駆けていたテンペストとギガンテックは上空に援護射撃を開始する。

そんな中、

「……アトランティア！」

数基のホーミングミサイルの追われるアトランティアを見つけたサクラは、すぐにテンペストのニアーマーに装備されているビーム砲を発射する。

放たれた5本のビーム弾は狙いを付けた各ミサイルの動きに合わせて軌道を変えながら前進し、アトランティアに当たるギリギリのところで全弾火球に変える。

(ホーミングビーム……追尾機能を持ったビーム兵器。たいていの物質を貫き、理論上回避不可能となれば、一見最強の武装と思えるけど……)

自らが放った攻撃の性質を思い出しつつ、サクラはテンペストの状態を確認する。

(1発ごとのエネルギー消費が通常のビーム兵器と比べて激しい。あまり数は撃てない……か)

この武装の欠点を復習して自戒の気持ちを持ち直すと、前方から雑鬼の接近を感知して左肩のマシンキャノンを掃射する。

丁度シルフィードに迫っていたグランツハーケンを撃ち落としたギガンテックも駆けつけ、両腕のガトリングガンを撃ってそれに加わる。

が、

『わかっちゃいたけどさー。こっちの弾幕が豆鉄砲だねえ』

フィルシアの愚痴が代弁する様に、2機の銃弾は尽く装甲に弾かれ、傷をつけることすらできない。

そしてその間にも、2機に狙いを付けた雑鬼は降りかかる弾幕を風と受け流して距離を詰めてくる。

『いっそ本当に豆でも撃ってみる？日本のお話ではそれで撃退できるんでしょ？』

「お話ではね」

冗談とも本気ともつかないフィルシアに応じつつ、サクラは右肩ビームキャノンの照準を合わせる。

(さっきのホーミングビームでエネルギーが不安だけど……四の五の言ってられない！)

断じると、機体稼働に対する一抹の不安を隅に押しやり、雑鬼目掛けてビーム弾を撃つ。

『ガアアアアア!!』

放たれたビームは雑鬼の胸部を直撃し、爆発四散させる。

直後、

『!』』

爆炎越しに太いビームが飛来し、サクラとフィルシアは慌てて脇に飛び退く。

「今のは……砲鬼？」

サクラの推測に答える様に、爆炎の向こうから口内を輝かせた砲鬼が現れる。

『砲撃戦用の鬼か。撃ち合いならギガンテックの方が上だよ!』

言うやフィルシアは両肩のソニックレールキャノンを放ち、直撃した弾体は胸部に2つの亀裂を作るが、砲鬼は構わず口から荷電粒子砲を吐き出す。

『もう一撃……て言いたいところだけど……』

ギガンテックを飛び退かせて回避し、応戦の為に姿勢を安定させていたフィルシアのやる気を挫くかの様に、右側から砲鬼がもう1機現れ、間髪入れずに胸部荷電粒子砲を放つ。

(流石に2体同時はキツイ……)

砲鬼2体が繰り出す荷電粒子砲の十字砲火に、回避運動に専念せざるをえないサクラは、手が出せない悔しさに奥歯を噛む。

連射性を優先している為に1発ごとの威力は低いものの、直撃すればネメシスタップでも無事では済まないエネルギー兵器が二方向から断続的に飛んでくるのは大きなプレッシャーとなる。

と、

『鬼共!こつちよ!』

通信越しの叫びと共に右側の砲鬼の背中を散弾が叩く。

『ガ?』

目立った損傷こそ無いものの、予想外の攻撃に砲鬼は後ろを振り返る。

そして、そのチャンスを逃すサクラとフィルシアではない。

「フィルシア!」

『合点!』

右から砲撃が止んだ刹那、サクラはスラスターを全開にしてテンペストを跳躍させながら左肩マシンキャノンを放ち、正面の砲鬼の注意を引き付ける。

狙い通り砲鬼が上を向いた瞬間、

『行つけえー!』

姿勢を安定させたギガンテックが両肩のソニックレールキャノンを先ほど作った亀裂目掛けて放つ。

『ガアアア——!!』

2つの弾体は見事亀裂から砲鬼の体内に飛び込み、豪速の運動エネルギーが内部を蹂躪して断末魔も半ばにその鋼鉄の体を火球に変える。

「とりあえず1機撃墜。もう1機は?」

その光景を推力を使い切って自由落下に入ったテンペスト越しに見ながら、サクラがもう1機の砲鬼を探すと、ショットガンを持った指揮官仕様の戦機人と荷電粒子砲と散弾による応戦を行っている。

「そこか!」

言うやテンペストは脚部スラスターを吹かして着地し、サクラは応援に向かおうと駆け出そうとする。

が、

『サクラ! 後ろ!』

「え?」

珍しく緊迫したフィルシアの声に後ろを振り返ると、金棒を振り上げた雑鬼がこちらに突進してくる。

(間に合わない!?)

回避するには近く、迎撃行動も間に合わない距離まで迫られたと直感する間にも、雑鬼はイノシシの如く迫り、突進の勢いが乗った金棒の一振りを下ろそうとする。

その一瞬前、

『ガッ!?!』

「!?!」

上空から落ちてきた黒い巨大な物体に雑鬼は押し潰され、間一髪で



難を逃れたサクラはテンペストを振り向かせて落ちてきた物を確認する。

「……………脚？」

落下の衝撃で舞い上がった砂煙が晴れた先には、15メートル級のテンペストから見ても丸太の様に太く巨大な黒い脚と、その下敷きになった雑鬼が横たわっていた。

クロイツリッターと銃撃の応戦をしつつ懐に飛び込む機会を窺っていた恭弥は、自身の頭上に空いた赤い大穴に驚愕する。

「時空崩壊!? また?」

声を上げる間にも穴から黒い巨大な物が吐き出され、真下にいた恭弥は慌てて後退して衝突を回避する。

テンペストの背後ギリギリの所に落ちたソレは人型の体を大の字に横たえ、恭弥はすぐに通信を送る。

「ホワイト3から非特隊、第三分隊各機。時空崩壊発生。特機らしき物が1機転移してきた。各自警戒するように」

言いながら、黒い特機に観察の目を向ける。

全長は55メートル程だろうか。黒を基調とした体は全体に丸みを帯びており、胸には三日月の様な形をした赤い板が左右対称に伸び、中央に髑髏をあしらった黄色い紋章が付いている。2つの目と鬚くっわに見える排気口らしき口を備えた頭部の頂には髑髏を模った様なオフジエが鎮座しており、胸の紋章や全体的に刺々しい外見と相まってどこことなく凶悪な印象を抱かせる。

気絶から回復した人の様に多少ぎこちない動きで立ち上がると、黒い特機は状況を確認めるかの様に周囲を見回す。

鬼もルミエイラも特機の様子を見る様に沈黙していると、白とアトランティアがシルフィードの許へ寄ってくる。

『恭弥さん、アレって』

「ああ。カノンちゃんたちが転移してきた時と同じ、戸惑ってるみたいだ」

一夏の呼びかけに、恭弥は初めてアトランテアを見た時のことを思い出しながら応じる。

と、

『そんな……嘘でしょ……!?』

『……カノン?』

信じられないものを見た様な、そしてどこか嬉しさを含んだ声で呟くカノンに、一夏が首を傾げながら訊き返す。

が、カノンはそれに応えることなく、興奮の度合いを高めていく。

『アレって……アレってまさか!!マ——』

続くカノンの言葉を遮る様に、特機に砲鬼の荷電粒子が放たれた。

「……クツソオ……頭が……」

脳を直接揺さぶられる様な激痛を覚えつつ、ナガイ・ゴウトは仰向けに倒れている黒い巨大な自機を起き上がらせる。

『ガ……べ……』

「ん?なんか踏んだか?」

立ち上がる際に機体の右足に違和感を覚えたものの、気に留めることなくモニター越しに周囲を見回してみる。

大きなビルが立ち並んでいるところかして、何処かの都市のようだ。ただしその多くは崩れかかっており、所々火の手が上がっている様子は、地震か市街戦の後を思わせる。

そして最も目を引くのが、ビルの合間や上空に佇んでこちらの様子を窺う様に見据えているロボットたちだ。中には違う形のものいくつか混ざっているが、大多数はビルの合間の鬼の様なもの、空に浮いている鎧の様なものだ。

(戦闘マシンか?そもそもここは何処だ?……)「あ?」

状況整理の最中、不意に聞こえた噴射音に足元を見やると、自機の半分にも満たない全長の青い機体が脚周りの推進器を吹かして急速後退していく。

同時に、右足が鬼型のロボット1機を踏み潰していることに気づ

く。

直後、

『ガアアアアア!!』

「何!？」

近くにいた鬼型の1機が叫んだかと思うと胸部からビームを放ち、周りの鬼型や上空の鎧型もそれに続く様にビームや銃弾、ミサイルを撃ってくる。

「クソッ!」

何発か食らうものの、40メートルの巨体からは想像できない様な俊敏な動きでその場から飛び退き、地面を何度か蹴って手頃な大きさのビルの陰に姿勢を低くして隠れる。

「出会い頭にそうくるかよ……ならこつちも相応な態度で応えねえとな」

静かに怒りを呟きつつ、ナガイは機体の胸に備わっている2枚の赤い板を外して両手に持ち、巨人サイズの拳銃——ブレストリガー2丁を構えてゆつくりと立ち上がる。

「見せてやるよ。俺と、マジンカイザーSKL……俺達が、地獄だッ!」

怒り、否、最早狂気を込めた目で叫ぶや、ナガイは自身の駆る機体——マジンカイザーSKLを天高く跳躍させた。

同じ頃。第四分隊の戦域では。

「センサーに感あり距離500……エネルギーチャージ100%」

センサーが3つの反応を捉えるや、グレンの後部席に座るアカネは素早く各種計測と照準誤差修正位置データを前部席に座るミオに転送する。

「隊長、将鬼3機に対し高出力ビーム砲撃を敢行します……射線から離れてください」

『了解!』

短く言うのと射線からノゾミ達3機の機影が離れるのを確認し、グレ

ンの左右キヤタピラの横にアンカーを打って車体を固定する。同時に中央部分の装甲が開いて長身のビーム砲バレルが延び、発射体勢に入る。

その時、

「エネルギー圧縮完——!?!」

続く復唱を遮る様にグレンを激震が襲い、伴って響いた轟音の方に目を向けると、左前100メートルほどの地点に巨大な塔が建っているのに気づく。

「え?ミオちゃん、こんな所にあんな塔あつたつけ?」

「違う。あれは塔じゃない。さつき開いた時空崩壊から落ちてきたみたいだけど……」

混乱するアカネにミオが戸惑いながらも即答するや、アキラとサヨコの狼狽した声が通信機から響く。

『な、なんだありや!? デツカイ……刀?』

『先端が深く突き刺さってるから正確な大きさはわからないけど……出ている部分だけでも戦機人くらいの大きさはあるわね……特機用の装備かしら?』

『今は関係無いわ!』

そんな一同の気持ちを持ち直させる様に、通信越しにノゾミの叱責が飛ぶ。

『将鬼がすぐそばまで迫ってるんだから、余計なことは後。アカネ、グレンは発射可能なのね?』

「は、はい!」

姉の注意に刀の件を頭から追い出すと、アカネは発射操作を再開する。

「エネルギー圧縮完了。高出力ビーム砲撃開始……」

副座前席にホロスクリーンが展開し、照準ゲージが倍率を上げながら将鬼3機をロックする。

砲塔にエネルギーが放電現象を伴いながら球状に収束して限界まで溜まった直後、凄まじいエネルギーの奔流と極太の光が遠く離れた将鬼を包む。

『ガ、ガアアアアアア——!?』

エネルギーの奔流に包まれた将鬼は断末魔の声を上げ爆発し、それを高感度マイクとソナーで確認しながら砲身の冷却作業と次の砲撃準備を始める。

この試作型高出力ビーム砲搭載戦車グレンは、ロングレンジから将鬼を狙い撃ち撃破するためにリトス司令が開発を進めていたモノだ。まだ連射性やエネルギー圧縮の問題があるものの、現状において最強の武装ともいえる。

(次砲撃までのタイムラグは20秒……でもこれ以上鬼に街を壊させる訳にはいかない……)

砲身冷却完了の電子音が響くと素早くチャージを開始し、2発目のビーム砲撃を将鬼に撃つ。

2機目の反応が消えてあと1機となったのを確認し、再びチャージを始めた時、けたたましい電子音が響き、警告を示す表示がモニターを赤く染める。

「エネルギーバイパスに損傷!ビーム砲撃使用不可!!」

『不味いわ、アカネ!ミオ、ただちに撤退して。将鬼が来る……キヤア!?!』

衝撃音と金属が潰れる音が通信越しにコクピットに響き渡る。

周辺をサーチすると反応が2機——撃破した2機の内1機がこちらに急速接近してくる

(まさかあのビームに耐えたの?)

信じられない光景にアカネが驚愕する間に、アキラの戦機人二番機とサヨコの三番機が前に出る。

『あぶねえミオ、アカネ!サヨコ、援護頼む!!』

『ちよ!?!ああもうわかったわよ!!』

ブーストしながら接近してくる将鬼に、2機は特殊弾頭搭載チェーングンを撃つ。

けたたましい金属音と共に無数の弾丸が将鬼の装甲を叩くものの、わずかな傷をつけるだけであまり効いてない。

やがて眼前まで接近した将鬼は、すれ違いざまに2機に体当たりす

る。

『うあああああ?』

『キヤアアアアア?』

体当たりを受けて装甲が砕けた2機の戦機人が空を舞うが、将鬼はそれに目もくれず、アカネたちが乗るグレンにその拳を大きく振りかぶり、殴りつける。

「キヤアア!」

「クツ!」

凄まじい衝撃と共に転がる感触がコクピットを揺らし、各種計器から火花が散る。

やがて揺れが収まると、アカネはすぐさま計器をチェックする。

(駆動部に激しい損傷を受けて自力での移動は不可能。でも火器管制はなんとか動く)

『ガアアアアアア』

「!?」

思考を遮る様に響いた咆哮にノイズが走るモニターを見ると、全身の装甲が溶けた将鬼と無傷の将鬼がゆっくりとこちらに近づいてくる。

寸前、右腕が根本からとれた戦機人改(予備機)——ノゾミ機が踊り出て、チェーリングンを構えて立ちほだかる。

「お、お姉ちゃん逃げて!!」

『……アカネ、グレンを放棄して早く逃げなさい!』

「嫌だよ!お姉ちゃんも一緒に逃げようよ!!」

『早く逃げなさい、ミオ!グレンを放棄してアカネを連れて逃げなさい!!』

『ガアアアアアアア!!』

アカネとノゾミの口論に痺れを切らしたのか、将鬼が2体同時に襲いかかってくる。

(もうダメっ!!)

そう思ったその時、

『……………オオオオ！タロウ・キイイイイックウウ!!』

『ガバアアアアアア!』

眩い光と共に白い鎧を着たロボットが将鬼の顔面に思いつきり蹴りを叩き込み、堪らず後ろにいた将鬼も巻き込んでビルの残骸へ吹き飛ばす。

その光景を見届ける様に着地する彼の姿を見て、アカネの脳裏にある人が浮かぶ。

『おい、大丈夫か…………』

ツンツンへアーの少し乱暴だけど優しい男の子と同じ声を聞き、アカネは外部マイクをオンにして呼びかけた。

「モモちゃんだよね！私、アカネだよ！幼馴染みのアカネ・カワシマだよモモちゃん!!」

『！アカネ……………何でここにいるんだ……………あ!?!』

白い鎧を纏ったロボットの顔が驚きへと変わるのを見て、アカネは白いロボットに乗っているのが桃矢だと確信した。

## 13 共闘 後編

『俺達が、地獄だッ!』

多分な怒りを孕んだ叫びと共に跳躍すると、黒い特機は両手に持った拳銃を周囲に乱射する。

ガンアクション映画よろしく両腕を肩から大きく振り回し、四方八方へとばら撒く様に放たれた巨人サイズの銃弾は、あるものはクロイツリッターの胴部に風穴を空け、あるものは砲鬼の装甲を凹ませ、そしてあるものは恭弥たち非特隊とヴァルキリース第三分隊に襲いかかる。

『「!」』

自分たちの許にも飛んできた数発に恭弥、一夏、カノンは慌てて散開して回避し、

『「この3機!早くこっちに!」』

「?わかりました。とにかく行こう!」

『了解』

直後に通信から響いた第三分隊長・アリスの声に恭弥が代表して応じると、シルフィード、ユニコーン・白、アトランティア・ルージューは特機から距離をとった所で巨大な盾を展開した戦機人の後ろに降下する。

襖を開いた様な形をした巨大盾の後ろにはすでに戦機人2機とテナペスト、ギガンテックが来ており、ルミエイラと鬼の相手に向かった全戦力が集まったことになる。

恭弥たちが降り立ったのを確認すると、アリスが乗る指揮官機は盾を装備した戦機人を見やる。

『どう?持ちそう?』

『一応特殊合金製だから、簡単には抜けないと思います。でも元が避難支援用の瓦礫避けだからな……』

盾持ちの戦機人のパイロットが不安そうに答える間にも、流れ弾が盾を叩く轟音が散発的に響く。

その横では、カノンが盾の陰からアトランティアの頭を少しだけ出



し、宙返りをしながら鬼やルミエイラに銃撃を続ける特機を観察している。

『あのデザイン、あの武器、あの動き……やっぱりあの機体は……』

『カノちゃん、あの特機について何か知ってるの?』

「そういえば、さつき何か言いかけてたよな?」

嬉しい様な、しかし困った様な様子で呟くカノンに、フィルシアと恭弥が問う。

『……私の記憶が正しければ、アレはマジンカイザーSKL。堅牢な装甲と破格の馬力、多彩な武装、御覧の通りの柔軟な運動性を備えた……ザックリ言えば“ザ・スーパーロボット”だよ』

『またザックリね……』

カノンの掻い摘んだ説明に、アリスが呆れた声を漏らす。

その時、地上に降り立った特機——マジンカイザーSKLの背後から雑鬼が飛びかかり、後頭部目掛けて金棒を振り下ろす。

が、直前に白いものが横から体当たりをかけて雑鬼を押し飛ばす。

『アレはさつきの……!?』

地面に降り立った白いメカニカルな犬に一夏が驚く間にも、カイザーを囲んでいる鬼たちに巨大な猿が尻尾のレールガンを連射し、上空を漂うクロイツリッターたちにさらに上空から巨大な雉がレーザーの雨を降らせる。

一連の攻撃で鬼とルミエイラはカイザーから距離をとり、レーザーの雨に飲み込まれたクロイツリッター機が爆散、レールガンの直撃を食らった砲鬼が左腕を失う。

しかし、

『新手か!?!』

叫ぶと同時にカイザーは手近なビルを踏み台にして雉目掛けて飛び上がり、拳銃の銃身下に備わっている刃を突き入れようとする。

咄嗟に雉はレーザー攻撃を中断、刃が当たる寸前にさらに高度を上げて回避するが、カイザーはそれに拘らず落下しながら地上の犬と猿に銃撃を行う。

『ちよつとちよつと!完全に三つ巴じゃないの!』

アリスの驚愕を表す様に、鬼とルミエイラはカイザーに加えて犬たちにも攻撃を始め、犬たちも三者からの銃撃を掻い潜りつつ各勢力——といったって、あくまでも鬼とルミエイラを優先——に応戦する。

『そういえば、残り2割の避難は完了した？』

『それは大丈夫です。みなさんが鬼やルミエイラを引き付けておいてくれたから』

不安そうに問うアリスに、盾持ちのパイロットは少しだけ安心した様子で答える。

『……チツ』

そうしている間に弾が切れたのか、カイザーは拳銃2丁を繋ぎ合わせて柄の長い戦斧を形作り、近間にいた猿に斬りかかる。

「……………確かに、凄まじい性能だな」

猿が避けて斧刃が地面に突き刺さり、その隙を突いて金棒で殴りかかりに来た雑鬼を左肘打ちで押し飛ばすカイザーを盾の陰から見て、恭弥は圧倒される。

「カノンちゃんが言った通りの多彩な武装と高い運動性、それに怪力。加えて、砲鬼や雉のエネルギー弾こそギリギリでかわしてるけど、クロイツリッターや猿の実体弾は何度か直撃してるのに傷がつく気配すら見えない防御力……何より、パイロットがそれらの性能を高い次元で引き出している。端的に言って……………強い」(いや、でも……………) 言ったこと、状況整理の結論は、いずれも間違っではない。

高い性能の機体を目の前のパイロットが高い次元で引き出しているのは紛れもない事実であるし、カイザーが攻撃を始めてから敵機の数が目に見えて減り、現時点で残っている敵機はクロイツリッター5、グランツハーケン3、雑鬼3、砲鬼3——計14機という状況だ。さらに残っているそれらの機体も無傷ではなく、ルミエイラ機はいずれも盾を失い、砲鬼の1機は左腕を破損、そして全機例外なく傷や凹みがついている。無論、途中から乱入した犬たちの影響もあるのだろうが、カイザーが積極的に攻撃を行っていたことを考えるとその凄まじさは無視できない。

カイザーというものを端的に表すなら、「強い」という表現は間違っ

ていない。

しかし、

(何かが、違う……)

大きな戦果と比例する様に、流れ弾や着地の衝撃でビルがいくつも崩れ、地面に亀裂が走り、それはこうしている今も尚増え続けている。

無論、それは市街地で戦う以上多かれ少なかれ出る被害であり、自分たちもさつきまでの戦闘で出しているのだろう。だが、カイザーにはそうした被害の拡大を抑えるという意思は感じられず、ただ目の前の敵を殲滅するという冷たい意思しか伝わってこない。その感じ方が、恭弥自身の出した結論に違和感を生む。

と、

「……！」

カイザーの近くに生暖かい感じを覚えるや、瓦礫が散乱した地面に倒れ込んでいる老人が拡大映像に映し出される。

『人!? 避難は完了したはずじゃ?』

『まだ残ってたの!?!』

同じ映像を捉えたのか、アリスとキャノン付き戦機人のパイロットが動揺した声を上げる。

直後、

『!』

「!」夏君!」

恭弥が止める間もなく、白が盾の陰から飛び出した。

気がついた時には体が——機体が動いていた。

背部のスラスタ―4基を吹かして地面すれすれを這う様に飛んで、一夏は老人の許へ向かう。

流れてきた銃弾やエネルギー弾、細かな瓦礫などが迫ってくるが、エネルギー弾についてはシールドで無効化し、銃弾や瓦礫などの物質に対しては白の装甲をあてにして受け流す。

散発的な流れ弾の雨の中老人の許にたどりつくと、三つ巴に背を向

ける形で白を停めてバリケード代わりにし、ハッチを開いて白式を纏った体で地面に降り立つ。

「大丈夫ですか？」

「ヴァルキリーズの人かえ？脚を挫いてしもうてな……」

「ヴァルキリーズではありませんが……とりあえず俺の機体に運びますね」

返事を聞くと、一夏は老人を抱えてコクピットへ戻る。

と、

「……！」

ケーブルを背中に差し込もうとした直前、白式のセンサーが接近するミサイルを捉えた。

「不味い！」

『だね！』

座り込んだ白を隙と見たのか、ルミエイラ機のいずれかが放ったミサイルが白に迫るのを見て、シルフィードとアトランティアが上空に躍り出て受け流す。

「一夏君、無事か!？」

『はい！助かりました』

「カノンちゃんは？」

『左腕にちよつちヒビ入ったかな。でも問題ないよ』

恭弥の問いに答える間にも、アトランティアの左腕が輝いてヒビが消える。

「了解」

それを横目で確認しつつ、ミサイルから本体を庇った腕、そこから自分自身の腕に伝わってくる鈍い痛みを吹き飛ばすつもりで2人に対して大きな声で返すと、恭弥は2機を伴って盾の陰へ戻る。

盾に隠れるや白は盾持ちの戦機人に近づき、ハッチを開けながら周りの轟音に負けない声で叫ぶ。

『この人を避難場所に！盾は俺が持ってます』

『は、はいー!』

ハッチから身を乗り出した一夏の気迫に押されてか、盾持ちのパイロットはすぐに応じ、自機のハッチを開けて一夏が抱えていた老人を収容し、白に盾を渡して避難場所へ駆けていく。

直後、

『違うー!』

『!?!』

盾を持った一夏の叫びに、恭弥をはじめ盾の後ろにいる全員が仰天する。

しかしそんな周囲は知らぬといった様子で、一夏は険しい表情を浮かべ、三つ巴を続けるカイザーを睨みつけながら続ける。

『あんなのは、強さ〃じゃない! 大きな〃力〃を誰彼構わず闇雲に振るって……あれは鬼やルミエイラと同じ、ただの暴力だ!』

「!」

「暴力」という一言、そして先ほどの救出劇に恭弥の中で何かが噛み合い、違和感が消えると同時に出撃前の伊豆基地での会話を思い出す。

「……〃力〃の振るい方を考えることこそ〃強さ〃……か」

『え? 何?』

「一夏君のお姉さんの言葉らしいよ」

唐突な呟きに首を傾げるカノンに応じつつ、恭弥は犬たちに大斧を振り下ろし続けるカイザーを見据える。

「一夏君。確認するが、乱入してきた犬と猿と雉のロボット、あの3機はモモタロウって奴の仲間なんだな?」

『え? ……はい。仲間っていうか、パーツっていうか……』

『パーツ?』

一夏の説明にカノンが一瞬目を輝かせるが、今は無視して恭弥は話を続ける。

「確か、シユウさん言ってたよな? モモタロウについては、向こうから何もしない限り無視していいって」

『? ……ええ。言ってみましたね』

「そして、僕たち非特隊はあらゆる脅威に対処する為の部隊だよな」

『……そうですね』

『桂木曹長。何が言いたいのです?』

今更なことを一夏に確認し続ける恭弥に、サクラがややイラついた様子で問う。

「つまり、僕らがこの場で対処しなきゃいけないのは、人々の暮らしを脅かす鬼とルミエイラ、そして、然るべき立場にないのに機動兵器を運用し、意図してかどうかは知らないが破壊活動を行っているカイザーのパイロットつてことだ」

『恭弥さん……!』

「僕もあの人のやり方、どうも納得いかなくてね」

言いたいことを察した一夏に、恭弥は映像越しの微笑みを返す。

『あれだけの性能を持った機体に挑もうつて?……面白そうじゃん!』

『私としてはカイザーとやり合うのはちよつと気が引けるけど……恭弥と一夏の言うことにも一理あるしね』

『ヴァルキリーズとしても、これ以上街を壊されるのを黙って見ておくわけにもいかないわね。そうでしょう?二人とも』

『はい!』

「みんな……」

フィルシア、カノン、アリス、戻ってきた第三分隊隊員たちの通信を聞くと、恭弥はテンペストを見やる。

「ルルさんはどうする?」

『……確かに私たちの任務はあらゆる脅威への対処であり、桂木曹長の主張は妥当といえます。しかし、これまでのカイザーの性能を考えると、やや無謀な行動ともいえます。もちろん私たちの機体も高い性能を有していますが、さっきの戦闘でいくらか消耗した現状では……ましてや、鬼やルミエイラも残ってる状況で……』

問いかける恭弥に、サクラは問題点を指摘しながら表情を曇らせる。

しかし、

『なあに、ハイスペックな機体が5機もいるんだ。連携すればなんと  
かいけるだろう。どっちにしろ、どれだけ手強い相手だろうと、あんな  
奴に尻尾を巻いて逃げるのは性に合わねえ』

『一夏の性分は知らないけど……確かにね。協力すれば言うほど分の  
悪い賭けでもないと思うよ』

『貴方たちの機体に比べれば性能は低いかもしれないけど、戦機人でも  
援護くらいはできるわ。それに、少しは大人に頼ってくれてもいい  
でしょ？』

『……………みなさん』

場を和ませる為か意識して気楽そうに言う一夏とカノン、年長者として頼もしい様子を見せるアリスに、サクラは知らぬ間に下がっていた顔を上げる。

『現場指揮官殿、意見はまとまったようですが？』

『……………だね。じゃあ早速、作戦会議といこう！カノンちゃん、カイザー  
について他に知ってることはある？特に弱点について』

『弱点か……………』

茶化す様にかしこまった調子で言うフィルシアに応じると、恭弥はカノンに問い、弾が盾を叩く音を聞きながらどう攻めるか考える。

同じ頃、ヴァルキリーズ極東支部執務室では。

『……………鬼達の機体はすべて無人……………でも4年前に現れた『ルシ  
ファー』、『ライトニング』、『エリアドミナンスド』は明らかに何者かの  
意思を感じる……………何かしら？』

4年前の鬼達の攻撃が始まった頃に現れた3機、それらの機体に明らかな意思を感じた時、リトスの端末にメールが1件入る。

差出人はG・N。

「！」

そのイニシャルにまさかと思いメールを開くと、膨大なデータと共に映像が添付されており、リトスは迷わずそれを開く。

『……………久しぶりじやのリトス君……………今儂はある少年と共に鬼たちと

戦っておる……しかし個人での戦いには限度が出てきた……今から提示する条件を飲んでくれるなら儂らが持つ情報を君に提示しよう……』

映像の中の老人が示す条件、それを迷いなく飲むとのメールを送信し、数分後に返信が来る。

さまざまなデータ——特に鬼に関する詳細なデータに驚きながら、リトスには提示された条件を飲んだ。

(何でだ……)

『モモちゃんだよね！私、アカネだよ！幼馴染みのアカネ・カワシマだよモモちゃん!!』

(何でアカネが此所にいんだ……)

モモタロウの内部、不思議な空間に浮かびながら、桃矢は必死に考える。

『ねえモモちゃん！モモちゃんつたら!!』

アカネの声は近くの戦車から聞こえてくる。モモタロウの目を向けると内部が透過され、久しぶりに見る癖つ毛混じりの栗色の髪に赤青黄色のラインが入ったカラフルな髪止めをつけたアカネと、やや無口そうな女の子がじつとこちらを見ている。

『……俺はモモちゃんじゃない……モモタロウだ!』

『いい加減にしなさいバカ桃矢、私達にばれないと思った？それにその癖は治ってないみたいね』

片腕がない機体からノゾミの声が響き、「癖」と言われてあわてて手の握りしめを止める。同時に、自分の正体に気付いた理由がようやくよくわかった。

焦ったり動揺したりすると手を握りしめする自分の癖を知ってるのは、ノゾミとアカネの2人だけだ。

(もうごまかしきれねえ……)

『グギ……ガアアアアア!!』

鬼の唸り声を聞いて2人から目を離すと、視線の先で四つん這いに



なりながらヨロヨロと立ち上がる将鬼2体を確認する。

(不味い……)

アイツ等——シロ、ゴクウ、キジツトがここに来るまであと数分かかる。それまで自分がノゾミたちを鬼から守らなければいけない。コキコキと指をならして構えをとりながら、彼女たちがいる周囲に防御障壁『レガシイフィールド』を展開させる。

『レガシイフィールド』はタロウの時にしか使えない広域防御技であり、あらゆる攻撃、例えば将鬼数体の物理攻撃なら楽に防げる反面、光学兵器にはあまり耐性がない。

将鬼2機の内、1機は荷電粒子砲内蔵型。もう1機はやたらと装甲がついた重装甲型——もつとも装甲がドロドロに溶けているにも関わらず動いている。

『2対1か……けどな、男にはな、負けらんねえ時があんだよ!!』(少しきついな……)

叫ぶや、まずは荷電粒子砲内蔵型の将鬼を叩くことを決め、地面を蹴って殴りかかる。

『オラオラオラオラオラオラ!!』

素早く翻弄し、ハイ、ロー、ミドルの順に蹴りを叩き込んで怯ませ、軽い跳躍と同時に体を捻り、頭へと体重を乗せた蹴りを叩き込んで後退させる。

「す、すごい……あの将鬼を圧倒している……」

「なんなのよあのロボットは！常識はずれにも程があるわよ!!」

機能停止した戦機人のコクピットから降りてタロウの戦いぶりを見て驚くアキラとサヨコとは裏腹に、グレンのコクピットから様子を見るミオは違和感を感じていた。

(……あの白いロボットはまるで……防御を、自分の身を守ることを考えていない……)

ミオが感じていることをノゾミとアカネも感じていたその時、今まで動かなかった重装甲型がタロウの背後から羽交い締めにする。

『し、しまった!』

『ガアアアア!!』

もがくタロウを他所に重装甲型は全身の装甲を開いて筒上の金属の棒を突出させ、バチバチと電気を放電させる音がなった次の瞬間、激しい光と共に何十億ボルトの電撃がタロウの体に流れた。

『グッーグアアアアアアアアアアアア!』

タロウはもちろん、内部で操神そうしんしている桃矢にも激しい電撃が襲う。

常人なら即死しているところだが、纏っているプロテクター『アームドギア操神鎧衣』のお陰で耐えていた。

「く、くそ、焼き殺す気かよ……グウウアアア!!」

タロウの内部に浮かぶ桃矢にも電光が走り、瞳から光が消えようとした時、激しい光がタロウを掴む将鬼を襲う。

『がアアア!』

『う、う、うおりやああ!!』

わずかに掴む力が緩み、その隙を逃さず腕を掴んで一本背負いと同じ時に近くにいた将鬼目掛け投げつける。

光が来た方を見ると、グレンを抱え、さまざまケーブルで繋いで固定砲台と化した戦機人改の姿が。

『間一髪、間に合ったわ』

『今のでエネルギーバイパスが完全に途絶、予備回線を使えばが辛うじて1発だけ可能です……』

『バ、バカ野郎!なんで攻撃しやがった、こんな鬼なんか俺一人で――』

『……いい加減にしてよモモちゃん!!』

グレンのコクピットからヘルメットを脱ぎ捨てて出てきたアカネが、普段なら想像もできないくらいに大声で叫ぶ姿に、タロウは思わずビクツと体を震わせる。

『私達の機体じゃ鬼には勝てない、でも2体が相手じゃモモタロウ……桃矢、貴方でも不利よね……』

『何が言いたい……』

『あの3体のロボがない……つまり本来の力が出ない……モモタロウになれないって事。あの3体は今手が離せない事をしている。そ

うでしょ?』

『!.....ああ』

『つまりはあたしらがその3体が到着するまで援護してやるってんだ』

『まだアタシはアンタを信用した訳じゃないけど、鬼を倒せるなら協力してやるわ』

いつの間にか再起動を終えた戦機人二番機、三番機がガトリングガンを構え、タロウの左右を守るように立っているのを見て、桃矢は口を開いた。

『.....3分だ、あと3分したらシロ、キジツト、ゴクウが来る』

『わかったわ、ヴアルキリーズ第四分隊はこれよりタロウと共同戦線を取ります.....桃矢、これが終わったらでいいんだけど私達の司令とあつてくれるかしら?嫌なら.....』

『.....いいぜと言いたいが、じいさんと話してから決めさせてもらう.....いくぞノゾミ!』

背後の戦機人二番機と三番機が放つガトリングガンの援護を追い風に、タロウは地面を蹴って滑る様に将鬼2体へ駆け出す。

「モモちゃん.....後でたつぷりお話ししようね.....ミオちゃんどうかかな?」

「砲身のブレがひどい.....隊長、上方右へ4度修正お願いします.....」

駆けていくタロウの背中を見つつ、アカネはミオが戦機人改に指示を出す横でグレンのビーム砲のチャージを始めた。

うる覚えながらもカノンが教えてくれたカイザーの情報に基づいて即興の作戦を立てると、それに従って恭弥はキャノン方式バックパックを背負った戦機人を抱え持ち、傍らの白もギガンテックを抱える。盾装備の戦機人を中心に、アトランティアが上、アリス機が左、テンペストが右につくと、配置が完了する。

『準備完了！いつでもいけるよ！』

「よし……作戦開始！」

『『『了解！』』』』

カノンに応じる様に響いた恭弥の号令に、アトランティアら4機は各々推進器を全開にしてカイザー目掛けて盾を押し出し、その後ろを戦機人を抱えたシルフィードとギガンテックを抱えた白が続く。

それまで離れた所に退避していた勢力の乱入に、カイザーに注力していた鬼やルミエイラの一部が攻撃を加え、とりあえずといった具合に避けて道を空ける。

クロイツリッターの銃弾が盾を叩き、砲鬼やグランツハーケンのビームが掠つて所々を溶かすが、一行は速度を落とすことなく盾ごとカイザーに突進する。

『今度あなんだア!?!』

新たに乱入者に怒声を放つや、カイザーは両手で持った大斧を盾に振り下ろす。

その時、

『!』』

戦機人とギガンテックを放したシルフィードと白が盾の陰から飛び出し、それぞれの剣で大斧の刃を受け止める。

『クッ!』

「なんのお……!」

予想通りの腕力に機体が押されそうになるが、それぞれスラストを吹かして無理やり滞空を続け、両腕に力を込めて大斧を押し返そうとする。

戦場のど真ん中に突っ込んだ都合上、四方から鬼やルミエイラの攻撃が飛んでくるが、キャノン付き戦機人が凍結弾を撃つて鬼の動きを止め、その隙にギガンテックがビームを撃ち込んで撃破、あるいはテンペストとアリス機が対空砲火を展開してクロイツリッターやグラントハーケンを牽制、あわよくば撃墜する。状況を察してか、犬たちもカイザーをシルフィードと白に任せてテンペストらに加勢してくれる。

そんな光景を周囲に感じつつ、実際に重量物を押ししている様な感覚を自身の両腕、否、体全体に覚えながら、恭弥は苦痛を吹き飛ばす勢いで拡声器越しに叫ぶ。

「こちらは地球連邦軍非常事態特殊対策部隊です！無許可による私設武装を用いての戦闘行為は違法です！すぐに武装解除して安全圏に退避してください！後で事情を聴きます！」

カイザーの腕力に負けないように一語一句を腹の底から述べつつ、モニター越しにその双眼を見据える。

しかし、

『訳のわかんねえこと言ってんじゃねエエエ！』

それ以上の怒声の返すや、カイザーはさらに力をかけて大斧を押しつけてくる。

『結局こうなりますか……』

「突然知らない所に放り込まれているいろいろな言われれば、確かにね。予想もしてたが……でも、勧告はしたからね！」

一夏と個人回線での会話を交わすと、恭弥は再び拡声器越しに叫ぶ。

「了解しました！実力を以て対処させていただきます！一夏君！」

『はいー』

応じるや、シルフィードと白はそれまで地面に向けていた推進方向を真後ろに向け、2機同時に背中に爆炎を灯す。

『オオオオオオオ!!』

『何だ?!』

高速戦闘型2機の全力推進は大斧を押しやるだけに留まらず、その重厚な巨体を後ろへと押ししていく。

カイザーは両足を地面に擦りつけてどうにか止まろうとするものとても抵抗力が足りず、推進器の類を備えていない機体では噴射で勢いを相殺することもできず、ついにバランスを崩して倒れてしまう。

直後、

『パイルダーもらったあ！』

押しやりが始まってからずっと2機の後ろで待機していたアトランティアが上空に躍り出て、両手で刃が横になるように持った剣をカイザー頭部の髑髏のオフジエ、その接合部分へ向けて落ちる様に突き入れる。

しかし、

『カノちん！そっち行っただ！』

フィルシアの声が響くと同時に、高い速度を出した為に急停止や方向転換が容易でないアトランティアの進路上に空と地上から光弾が放たれる。

『え？嘘？！』

『させるか！』

直前に割り込んだ白のシールドによってアトランティアへの被弾は防がれるものの、カノンが動揺して狙いがずれた剣はカイザー頭部の左脇の地面に突き刺さる。

『……剣持ち共が……よくもッ！』

「回避！回避い！」

『言われなくても！』

先ほど以上の怒りを孕んだ叫びを上げるカイザーに、恭弥は悲鳴に近い声で指示を飛ばし、カノンはすぐに剣を引き抜いて慌てて後退する。

『ガアアアアア！』

直後に地上からアトランティアを攻撃した砲鬼が胸部荷電粒子砲を放ち、カイザーは大斧を手放した巨体を転がしてそれを避けると、跳ねる様に起き上がって左拳を突き出す。

『アメエもうっせえんだよッ！』

叫ぶや左肘の周りに設けられた噴射口に光が灯り、ドリルの様な鋭利な刃が付いた前腕部装甲を回転させながら膝から先が飛んでいく。

巨大質量弾となった左拳は砲鬼の胸部収束レンズを粉碎し、推進器の出力にものをいわせて突き進みながら回転を続ける前腕部装甲刃で自らが開けた傷口をさらに削っていく。

『ガッ！！ガ、ベ……………』

体の中を削り出された故だろうか、拳が背中を突き破って飛び出さや、砲鬼は弱々しい声を上げて爆散する。

『ロケットパンチ!』

「流石はザ・スーパードロブットってことか?」

『知らないけど……『突撃!パイルダーぶん盗り作戦』失敗か……』

一連の光景に一夏と恭弥が目を丸くする横で、カノンが自らが中心になって立案した作戦——カイザーのコクピットは頭部の髑髏にあるという曖昧な記憶を頼りに、接近してそこを取り外して無力化するというもの——が失敗したことに落胆する。

その間にもカイザーの許に戻ってきた左拳は腕に再接続され、カイザーの双眼が滞空しているシルフィードたちを睨みつける。

『ダメエらも喰らいやがれエ!!』

怒鳴るやカイザーは右拳を空に飛ばし、砲弾と化した腕は3機の許へ突進してくる。

「散開!」

恭弥が叫ぶと同時に3機は散り散りになってそれをかわし、外れた右拳は3機の後ろに迫っていたグランツハーケン——先ほど上空からアトランティアを攻撃した機体——の胴部を木端微塵にして本体へと帰っていく。

しかしその途中、カイザー本体と右拳の間にクロイツリッターが割って入り、本体目掛けて真っ直ぐに向かってくる右拳、その唯一堅牢な装甲で覆われていない噴射口と接続部分へ向けてマシンガンを放つ。

『なッ!』

事態に気づいたカイザーが声を上げるがすでに遅く、噴射口をいくつか潰された右拳は被弾箇所から煙を上げ、本体に届くことなく墜落する。

推力を失って地面へと落ちていくカイザーの右腕を見て、ナガイは柄にもなく焦りを覚える。

(不味い！片腕が——武器が無くなっちゃった！ブレストマホークは……あそこか……いや)

先ほど放置した大斧——ブレストマホークの位置を確認して回収の為に左腕を飛ばそうとするが、直後に操縦桿に掛けた指を離す。

(飛ばしてる間に左まで墜とされたらいよいよ万事休すか……ここは歩いて取りに行くか)

現時点でカイザーに残された武装は左腕のみ。それを失えば直接殴りかかることも、飛ばすことも、他の武装を使用することもできなくなる。

慎重な判断を下すや、ナガイはブレストマホークの許へカイザーを駆けさせる。

しかし5歩と進まない内に、腹にビーム砲を積んだ鬼が2機とビーム銃を持った鎧が1機ビームを放ち、3機のマシンガン持ちの鎧の銃撃が襲う。

「クソッ！」

悪態をつきながら後ろに跳ねてそれらを避けるものの、6機の残存兵器たちは執拗にカイザーへの攻撃を続け、ナガイはブレストマホークを取りに行くどころか避けるだけで精一杯になる。

「チキショー！両手使いりゃこんなザコ共！」

本格的に追い詰められた焦りと苛立ちに思わず叫ぶ。

その時、

「……しまっ——！」

カイザーが瓦礫を踏んでバランスを崩し、転倒こそ免れたものの、足を止めた一瞬を狙ってビーム銃鎧のビームが頭部のコクピット——スカルパイルダーへ吸い込まれる様に向かつてくる。

(……までか！)

数瞬後には灼熱の光に飲み込まれて焼かれる自分を想像し、ナガイは両目を一杯に見開く。

が、

「……………あ？」

直後に白い影が躍り出て、カイザーに背を向けて滞空する4枚羽の



機体を見た。

カイザーの前に割り込んだ白が雪羅のシールドでビームを防ぐや、恭弥はカイザーを撃ったグランツハーケンに接近し、右脇からルミナを突き刺して沈黙させる。

「間一髪か……カイザーの人、大丈夫ですか？」

危うかった状況に安堵の息を漏らすと、拡声器越しにカイザーに呼びかける。

『……テメエらどういふつもりだ？何で俺を助けた？俺はテメエらを攻撃した、いわば敵だぞ？』

若干の困惑を含んだカイザーの問いに、接近してきた白と背中を合わせた恭弥は周囲を警戒しつつ応じる。

「僕たちの目的は貴方を撃破することではなく、貴方の破壊行為を止めることです。機体を無力化する為の攻撃は加えますが、パイロットの命が危険にさらされれば助けません。できれば、このまま大人しく僕たちについてきて欲しいのですが……」

半ば祈る様に言う間にも、テンペストの放ったホーミングビームがクロイツリッター3機を火球に変え、ギガンテックの脚部ビーム砲4門と頭部ビーム砲3門の集中砲火が最後に残った2機の砲鬼を爆散させる。

敵機的全滅を見届けるや、犬、猿、雉の3機はすぐに移動を始め、カイザーの右腕を抱えて持ってきたアリス機が頭部カメラでそれを追う。

『あつちは確か……第四分隊の方向だわ』

『てことは、モモタロウもいるんですかね？』

『念の為私たちも行ってみますか？』

「……そうだな。ここが片づいたなら合流した方がいい」

一夏とサクラに応じると、恭弥は再度カイザーを見やる。

「それで、カイザーさんはどうしますか？僕たちとしては一緒に来て欲しいんですが」

『着いていつてどうしろってんだよ？さつきも言った通り、状況から言って俺はテメエらの敵だぞ？ハイわかりましたって行ってみすみすやられんのはゴメンだ』

『別に、そっちが大人しくしてればこっちも何もしないよ』

警戒心剥き出しで応じるカイザーに、フィルシアが敢えて軽い調子で返す。

『それに、そっちも異世界から来たんでしょ？知らない世界に独りで行いたらあつという間に路頭に迷うよ』

『!?何でそれを……………その言い草、まさかテメエも?』

同じ境遇の人間がいることに驚いたのか、カイザーはアトランティアをまじまじと見つめる。

『そう。といつても、私もこの世界に迷い込んだのはついさつきなんだけどね。今はこの人たちに保護してもらってるんだよ。そっちも大人しくして頼めば、いろいろ親切にしてくれると思うよ。少なくともこの世界の情報は教えてくれる』

『だが、俺はコイツらと敵対したんだぞ？そんな奴に…………』

「それについては行き違いがあったということなんでなんとか言い訳できます。幸い、今回は死者が出てませんし」

さらに続けるカノンにナガイは尚も食い下がるが、恭弥はあくまでも擁護の態度を示す。

『どの道、機体もそれなりに傷んだし、一人でいたら遅かれ早かれ野垂れ死にますよ』

『……………わかった。テメエらに着いていく』

一夏の言葉にアリス機が抱える右腕に視線を向け、しばし思案すると、カイザーは渋々といった様子で応じる。

『ただし、とりあえず着いていくだけだ。おかしなマネしたらその場で全員ブチノメスからな!』

威嚇する様に言いながら、カイザーはアリス機に右腕をはめてもらい、戦機人2機が運んできた大斧を取って長く伸びた柄を收容し、胸に懸架する。

「了解です。それじゃあ、手始めに第四分隊と合流しましょう」

『『了解』』

恭弥の指示にカイザー以外の全員が応じると、一行は犬たちを追って移動する。

「……そういえば、まだ名前聞いてませんでしたね」

『そういえば。俺は織斑一夏です』

『高槻カノンだよ』

『……サクラ・ルル』

『フィルシア・ナイトウォーカー、よろしくね』

「僕は桂木恭弥です。貴方は？」

『………ナガイだ。ナガイ・ゴウト』

移動しながらの非特隊員たちの自己紹介に、カイザーのパイロット——ナガイ・ゴウトは仕方ないといった具合に返す。

そして、

『にしてもさー、一夏さつきはあんなに怒ってたのに、率先して自己紹介とかしちゃうわけ？』

『いや、それはそれ、これはこれっていうか……一応自分から名乗るのが礼儀かと思って』

『真面目だねえ。織斑曹長は』

『………このお人好し共が』

カノン、一夏、フィルシアの雑談に、小さく悪態を漏らした。

『ウオオオオ!!』

『ガアアアアア』

大きく振りかぶった拳を将鬼の顔面にめり込ませ、反動を利用して空いた脚で蹴りを放ちながらタロウは降り立つ。

将鬼2体は反撃しようとするも、遠距離からのガトリングガンの弾幕で近づけない。堅牢な装甲を誇る将鬼も、対鬼用に開発された特殊弾頭の豪雨には迂闊に動けないようだ。

その時、

『キキッ!』

『アオオオン!!』

弾幕の雨をかい潜った赤と白の影が将鬼2体に襲いかかるや否や、噛みつき、引つ掻き、ダメージを与える。

『な、なんなのよあれ!』

『犬とおサルさんだよな?』

いきなり現れたメカニカルな犬と猿に、サヨコとアキラは驚いて手が止まってしまう。

と同時に、空から光の雨が将鬼目掛けて襲いかかる。

『ピイイ!』

『あれって鳥だよねミオちゃん?』

『鳥って言うか雉………だからモモタロウなんだ………』

上空から翼を広げてレーザーの雨を降らせる雉を見て問うアカネに、ミオはどこか納得した様子で応じる。

直後、空が歪んで黒い穴が空き、そこから5機のグランツハーケンに率いられる様に20機のクロイツリッターが出てくる。

『ルミエイラの増援!?!不味いわ!』

ノゾミが言う間にも犬、猿、雉を銃撃が襲い、3機は将鬼への攻撃を中断して慌てて回避する。

『クソツ!?!これじゃ合体できねえ!』

五方向から放たれるビームを紙一重で回避しながら、桃矢はタロウの目を介して悔しそうグランツハーケンを睨みつける。

と、

『!?!』

ビーム銃を向けたグランツハーケンが横から巨大な弾丸に貫かれ、桃矢は弾が来た方を見ると、黒い特機が2丁拳銃を構えている。

弾の補充が終わっているのを確認すると、ナガイはブレストリガー2丁を持ち、たまたま目についた白い奴を狙っているグランツハーケンを右の1発で撃ち落とす。

『へー。思ったより射撃能力も高いんだね。この距離でワンショット

なんて』

「……」

素直に感心しているフィルシアには応えず、ナガイはシルフィードを見やる。

「さっきの礼だ。この場は協力してやる。この場はな」

『ありがたいです……全機！第四分隊を援護。ルミエイラの増援を迎撃する！』

『『了解！』』

指示と共にシルフィードが突貫し、テンペストとギガンテック、戦機人たちの援護射撃を受けながら白とアトランティアがそれに続く。

その横でナガイは、

「……………ありや……………」

先ほど時空崩壊の穴から落ちてきた巨大な刀を見つけ、思わず驚きの声を上げる。

僚機の銃撃を追い風にした3機が切り込みをかけ、ルミエイラ機をタロウたちから離していく。

『今よ桃矢！』

『オツシヤアアアアアア！いくぞ皆！！』

それを見たノゾミの呼びかけに桃矢はタロウを通して叫び、3機のレガシイマシン——シロ、キジツト、ゴクウは頷いて空高く飛び上がる。

『いくぞ、レガシイフォーメーション！！』

力強く叫ぶタロウの体から光が溢れ出すと同時に、無数の古代文字が辺りを舞い、それらがレガシイマシンへ吸い込まれて変化が起る。

シロは右腕へ、ゴクウは左腕へと形を変え、変形を終えたタロウの肩へ火花を散らしながら接続、同時に拳があらわれて強き握りしめられ、脚部も力強く頑丈さを増した装甲へ変わる。背後から陣羽織状の装甲に変形したキジツトが上体に覆い被され、桃を模ったヘッドギ

ア、マスクが装着される。アンテナが真ん中から大きく開き、目か赤く輝いた。

『手前エ等鬼共の野望を打ち砕く、天下無敵のモモタロウ！ここに参!!』

合体を終えたタロウ——否、モモタロウが腕を大きく交差すると同時に名乗り上げると、辺りに暖かな光が降り注ぐ。

『『『………カ、かっこいい』』』

その眩いばかりの光景に、ヴァルキリーズ第四分隊の全員が思わず眩いた。

ルミエイラの軍団に突っ込んだカノンは、狙いをつけたクロイツリッターに斬りかかる。

直前に相手はマシンガンから剣に持ち替え、アトランティアと鏝迫り合いになる。

「うくん……さすがにちよつときついかな……？」

大部隊、そして短い間とはいえ特機との戦闘を経た後、心身共に多少の疲れを溜め込み、それが動作のキレに現れていることに、カノンは内心焦る。

と、

「……？」

視界の端に眩い光を捉え、顔を向けると、飛び上がったタロウら4機がなにやら光る文字の様なもので繋がっている。

「……、これは！」

目の前の光景、そして先ほど一夏が漏らした「パーツ」という単語が頭の中で噛み合い、クロイツリッターの腰に蹴りを入れて距離を離すや、カノンは顔一杯に興奮を浮かべてタロウたちの許に接近する。

「これは……これは……これはあ!!」

見開いた目をらんらんと輝かせる間にも、4機はそれぞれ形を変え、1機の巨大な人型を形作る。

『手前エ等鬼共の野望を打ち砕く、天下無敵のモモタロウ！ここに見・



『ガ、ギグガアアアアア!?!』

目にも止まらない無数の拳打に装甲は砕け、オイルや破片が辺りに散らばり、やがて力なく膝をつく将鬼2体。

それを見て、モモタロウは天に向け手をかぎす。

「こ、これって!?!」

「どうしたのアカネ? なんなのコレは!?!」

無言で転送されたデータと数値に声を上げて驚くミオ。

今モモタロウが天に向け手をかぎした周辺に未知のエネルギーが集まり始めている事を示すデータが表示され、モニターでは光が集まって現れた巨大な剣をモモタロウが握って構えている。

それは前回の戦闘でも確認された武装なのだが、その時は機器が無かった為にエネルギーの集合や剣が出現する過程を観測できなかったのである。

自身の体躯に匹敵する半透明で幅が広い刀身に古代文字が刻まれた剣『オニキリ』を構えると、刃が赤く輝き辺りを照らす。

『ウオオオオオ! 悪・鬼・滅・殺・オーガ・スラッシュユ!!』

金属音が響くと同時に、推進翼が大きく翼を広げる。最大出力で加速と同時に将鬼2体を横風ぎ一閃してすり抜けた次の瞬間、鬼達の体が上下泣き別れなり大爆発を起こした。

『……鬼退治完……! なに!?!』

『ガアアアアアア!?!』

締めの上を述べた直後、爆煙の中から二対の翼を生やした将鬼が現れる。

それを見て桃矢は、2年前に戦った同じ型の将鬼を思いだした。

(あのタイプの将鬼は……不味い!) 『ノゾミ、アカネ、他の連中も、早くにげろ!!』

『え? どういう意味よ!?!』

『ガアアアアアア!?!』

ノゾミが動揺する間にも、将鬼は大きく広げた翼の先から無数の羽を飛ばし、それらはノゾミ達がいる場所へと降り注ぐ。



『くそ！間に合えええええ』

推進翼を展開して今まで以上の出力で駆けたモモタロウは、当たる直前でグレンと戦機人改の前に立ちほだかり、迫る羽全てをその身に受け止めた。

『グ、グウウウ!!』

将鬼の攻撃に合わせる様にクロイツリッターの一部もマシンガンやミサイルを放ち、周囲一帯を黒煙が包む。

凄まじい爆発の衝撃に耐えるモモタロウ。しかし内部にいる桃矢にダメージは容赦なく襲いかかり、やがて攻撃が止むと崩れるように片膝をつく。

『ハア、ハア、空を飛ぶやつとは相性悪いな……………』

『あ、アンタ、何でアタシ達を庇ったのよ……………』

『…………理由なんかねえよ…………ただ——!』

続く言葉を遮る様に剣を抜いたクロイツリッター7機が迫り、先頭を行く1機が掲げた刃をモモタロウの頭頂目掛けて振り下ろす。

が、

『!?!』

その機体は投擲された巨大な刀に胴部を貫かれて地面に串刺しになる。

啞然とする桃矢が後ろを振り返ると、髑髏を模った黒い特機が両手に持った拳銃をクロイツリッターたちに撃ちながら駆け寄ってくる。

『たく。ギャーギャー口上垂れてたくせにだらしねえなあ』

言いながら、黒い特機はモモタロウの前に立ち、2丁拳銃を乱射しつつクロイツリッターたちを遠ざける。その間にも、巨大な弾丸に撃ち抜かれた1機が爆散する。

『何だど？テメエ何者だ!?!』

『異世界からの迷い人、とでも言うっておこうか。そんな立派な口ポに乗って、いかにもな台詞叫びまくって、その結果がザコにやられるってか？チャンチャラ可笑しいぜ』

『言わせておけばあ……………!』

腕を回して銃撃を続けながらも容赦なく罵声を浴びせてくる特機

に、桃矢は先ほどの痛みも忘れるほどの怒りを覚える。

『だったら突然現れたテメエは何だ！何で俺を助けた？何で鬼や鎧共を攻撃する!?!』

『……………鬼に会うては鬼を斬り』

『?』

突然の口上に桃矢が呆気にとられる間に、特機は右の拳銃を胸に懸架して駆け出し、すれ違いざまにクロイツリッターを串刺しにしている特機の全長に迫ろうという大刀を抜いて跳ね、上空の将鬼に斬りかかる。

『ガッ!』

将鬼はさらに高度を上げてそれをかわすが、間に合わず左脚の膝から下を斬り落とされる。

落下に入った特機を狙ってクロイツリッターたちがマシンガンを向けるが、

『鎧に会うては鎧を撃つ』

特機は左手の拳銃を振り回し、周囲を滞空していたクロイツリッター6機を全て撃ち墜とす。

着地した特機は刀を右肩に担ぐとモモタロウに視線を向け、

『俺とカイザー<sup>達</sup>に大義名分など無いのさッ!……………と聞いてえところだが……………今回に限っては上のお人好し共に借りを返す為だ。テメエも連中の仲間っぽかったからとりあえず庇っただけで、助けたわけじゃねえ。生憎俺はヒーローとか正義の味方なんて柄じゃねえからな。次は無えぞ』

断じるや、刀を背負って拳銃に持ち替え、駆け出しながら非特隊が混戦している空域に向かって銃撃を行う。

『……………なんだよあの髑髏野郎!……………いや、今はいい……………あの鳥鬼をどうすつかだ……………』(あん時と同じタイプだとしたらアレを使うはずだ……………あんなもん撃たれたら街が……………いや必ず守り抜いてやる!……………それに)

遠くなっていく特機の背中にありつたけの鋭い視線を送りつつも、将鬼を優先すべきという理性的な判断に桃矢はなんとか怒りを鎮め、

対策を思案する。

以前あの飛行型将鬼と戦った際は『キジツトブラスター』でなんとか倒せたが、必殺技『オーガ・スラッシュ』を使った今『キジツトブラスター』は撃つ余力もない。

しかし、ふらふらと立ち上がるモモタロウの瞳から闘志は消えていなかった。

(言われっぱなしじゃ悔しいだろうが！)

特機への対抗心を糧に立ち上がりきると、モモタロウはシルフィードたちの攻撃をかわしつつ反撃を行う将鬼を見据える。

と、

『……………アカネ、エネルギーチャージ完了してる？』

『え？あ……………うん終わってるよ』

『……………モモタロウ……………さん？……………グレンを使つて』

『え？…』

いきなりの提案に驚くモモタロウに、発案者のミオは淡々と告げていく。

『……………モモタロウさんぐらいの大きさならグレンを構えて撃つ事が出来る……………アカネ……………説明お願い』

『う、うん……………今あの将鬼の内部にエネルギーが溜まっている……………このままだと最大の砲撃が間違ひなく来る……………』

『……………桃矢、貴方にグレンの引き金を任せるわ……………』

『隊長が言うんなら仕方ないな』

『……………ま、まだあんたを信じた訳じゃないけど……………あんたに任せる……………しくじんじゃないわよ!!』

自分に向けられる信頼が込められた言葉に、桃矢は意を決し、グレンを手を持ち構えた。

『……………自慢じゃないけどさ……………俺……………』

『大丈夫、私が射撃予測補正を……………』

『エネルギー調整や誤差修正は私がやるから……………モモチちゃんは引き金を引くだけでいいから』

ミオとアカネの返答を聞くと、桃矢は将鬼を見据える目に一層力を

込める。

『アキラとサヨコは上空の非特隊を援護！ルミエイラの邪魔を許さないで』

『了解！』

続くノゾミの指示に、2機の戦機人は上に向けてガトリングガンを放ち、乱戦を続けるシルフィードたちを援護する。

四方から銃弾やビームが飛んでくる中、恭弥はシルフィードを縦横に動かしつつ、照準に捉えた飛行型将鬼にルミナのビームを放つ。

が、将鬼は寸前にそれをかわし、直後に放たれた大量の羽をルミナで迎撃しながら距離をとる。

「チクシヨウ！はやり将鬼ってか？手強いな……」

シルフィードを介して感じる将鬼の中の怪しい気配。直感的に優先して潰さなければならぬと断じ、ルミエイラ機の攻撃を掻い潜って仕掛けるものの、いつこうに損傷を与えられない現状に焦りが積もる。

同じ感覚を得たのだろう、白とアトランティアもそれぞれ荷電粒子砲と剣で将鬼を攻めるものの、羽か太い手足の反撃を受け、付いては離れを繰り返している。

「ええいー」

加えてルミエイラ機の対処もしなければならず、苛立ち紛れに撃つたルミナのビームがアトランティアに取りついていたクロイツリッターを撃ち墜とす。

地上からもテンペストとギガンテック、カイザー、各戦機人の支援射撃が加わるものの、敵・味方が高速で入り乱れての乱戦であること、さらには——主にカイザーを警戒しているのだろう——高高度での戦闘とあつて決定打になるような攻撃が届きにくく、あまり効果は出していない。

(……何でかは知らないが、さつきからカノンちゃんが元気なのがせめても救いか?)

モモタロウが合体してから何故か疲れが吹き飛んだ様に軽快に動くアトランティア、その姿に気休め程度とはいえ安心を覚えるが、その間にも将鬼の中の気配は増大を続け、ついに胸部装甲を開いて煌々と輝く収束レンズを露出する。

「不味い！」

『ビーム攻撃!?なら俺が!』

地上に——モモタロウたちに向けて発射体勢をとる将鬼に狙いを察するや、白が射線上に立ちほだかろうとする。

しかし、

『非特隊全機!大至急将鬼から——その周囲一帯から離脱して!』

「?……全機離脱!なるべく距離をとれ!」

『了解!』』

直前に通信機を駆けたノゾミの指示に、恭弥はグレンを抱えるモモタロウを見てその意図を察し、妨害するルミエイラ機を半ば無視して将鬼から高速で離れる。

上空に胸部装甲を展開して発射体勢に入った将鬼を見据え、グレンを構える手に力がこもる。

『ガアアアアア!』

先制をとったのは将鬼。その凄まじい光がモモタロウがいる地上目掛けて撃ち放たれる。

『モモちゃん、今だよ!』

『ああ!』

アカネの合図に、桃矢はグレンの引き金を引く。

しかし、何も起きないどころかビームすら出ない。

『そんな!予備回路が断線してる!』

『……アカネ、他の回路は?』

『ダメ、全部繋がらないよ!』

ミオとアカネのやり取りに、外にいるサヨコ、アキラ、ノゾミにも諦めが漂う。

(くそ、また守れないのかよ！頼むモモタロウ……)

凶暴な光が徐々に迫る中、桃矢は力一杯叫んだ。

『俺に力を貸せえええ!!』

その時、桃矢の声に答えるかのようにモモタロウの各部装甲からさまざまな古代文字が浮かび上がり、グレンへと吸い込まれて光を放つ。

その光の中でグレンの砲身部分が長く巨大化し、中心から二つに割れて基部部分に巨大なレンズ状の物体が着く。同時にグリップが現れてモモタロウの手に再び握られ、内部にいるアカネとミオは不思議な空間に浮かびながらその様を見ていた。

『な、なんなのこれ?』

『でも、なんか暖かい……まるでお日様みたい……』

モモタロウの瞳が赤く輝き、砲身に凄まじい光が集まって放電現象が起こり始める。

砲身から漏れる輝きが限界まで達した時、

『ウオオオオー!グレン・バスターキャノン!!』

引き金を絞り撃ち放った瞬間、モモタロウの巨体が反動で大きく後ずさりして地面が抉れる。

砲身から放たれた桃色の閃光はモモタロウ達に迫っていた光を掻き消し、その先に滞空する将鬼を包み込んだ。

『ガ、ガアアアアアアア——!?!』

凄まじいまでの閃光に呑み込まれた将鬼は、堅牢だった装甲を灼熱の光に蝕まれ、炭化した体を1秒と保てずに消滅した。

それでも勢いを失わない光は大気圏すら突破し、その様子はヴァルキリーズ極東支部をはじめ、周囲の連邦軍基地でも観測されるほどだった。

グレン発射の少し前。

ルミエイラ機の妨害に思ったより距離を稼げなかった恭弥たちは、尚も執拗に迫るクロイツリッターに応戦の火線を放ちつつ内心焦っ

ていた。

正にその時、

『俺に力を貸せえええ!!』

『！間に合わない！恭弥さん、カノン、俺の後ろに！』

モモタロウの絶叫、それに応える様に形を変えるグレンに、白の感知機能も手伝って一夏は一瞬後に起こることを直感し、左腕の雪羅を前に出しながら叫ぶ。

「カノンちゃん！」

おそらくは同じ予感を抱いたのだろう。恭弥も直感的にそれに従い、アトランティアの手を引いて白の後ろにつく。

その直後、グレンから明らかに本来の出力を大幅に上回る極太のビームが吐き出され、射線上に留まる将鬼を呑み込む。

しかしそれだけに止まらず、飛散した大量の高熱粒子が周囲のルミエイラ機の装甲を炙り、天まで届くビームに引き裂かれた大気のうちねりが衝撃波となってポロポロになったクロイツリッターやグランツハーケンたちに襲いかかる。大気の刃に引き裂かれ、露わになった内部を飛散粒子に侵された機械鎧たちは次々に火球に転じ、消えつつある光の柱に華を添えた。

そして飛散粒子と衝撃波はシルフィードたちにも容赦無く迫り、白のシールドで大部分は無効化できたものの、その合間を縫って達した一部が3機の機体にわずかな傷をつけていく。

『フィルちたちは？』

「……あそこだ。ナガイさんに庇ってもらってる」

カノンの問いに、恭弥は自分たちよりもモモタロウから離れた、しかしグレンの副次的被害を少々受けてしまう位置でネメシスタイプと第三分隊の戦機人たちの盾となっっているカイザーを見つけ、シルフィードの指で示してあげる。

その間にもグレンのビームは完全に消し去り、ややあつて灼熱の嵐も収まる。

「鬼は今の将鬼で最後みたいだな。ルミエイラは……そっちも今ので片づいたか……」

モニターとレーダーで残敵の有無を確認すると、恭弥はひとまず事態を乗り切ったことに安堵する。

しかし、

『あーヤバいー!』

『!?!』

突然白が力が抜けた様に落下し、直後に恭弥はカノンと共に腕を抱えて受け止める。

「どうした?」

『……すみません。今のシールドでエネルギーの許容量超えちゃって……しばらく満足に動かないかも……』

恭弥の問いに、一夏申し訳なきように答える。

「ああ、そうか。白ってそういう仕様なんだよな……大丈夫。敵はもういないし、あとは最終確認して帰るだけだろうから。よくやってくれた!」

『ひとまず地上に下ろした方がよくない? うっかりしているとまた落ちるよ』

「だね。とりあえずモモタロウの近くに」

カノンの提案に応じると、恭弥はケガ人を運ぶ様に白の腕を肩に回し、隣のアトランティアも同じ様にするのを確認すると、3機並んでゆつくりとモモタロウの許へ降下していく。

『す、すごい』

『鬼退治、完了……ハア、ハア、ハア……』

誰かの漏らした声に应じる余裕もなく、桃矢は手に構えたグレン——新たな姿になったグレン・バスターキャノンを息を切らしながら優しく下ろす。

瞬間、ソレは元の姿——『試作型高出力ビーム砲搭載戦車グレン』に戻り、コクピットからアカネとミオが姿を現してモモタロウに近づく。

その時、モモタロウに異変が起きた。



『グ、グアアアアアアアアアアアアアア!?!』

全身から放電して瞳から光が消えた瞬間、崩れるように地面へ地響きを立てて倒れた。

「え、どうしたの……モモちゃん……返事をしてよ……」

突然のことに動揺しつつもアカネはモモタロウに近づき、その巨大な顔に触れて語りかける。

しかし、モモタロウは何も答えない。

それでもアカネは何度も呼びかける。

「モモちゃん、お願い……目を、目を開けてよ……モモちゃん!!」

夕焼けが街を照らす中、アカネの叫びが辺り一帯に響き渡る。

傍らに降りたシルフィードたちと、それに合流しようと歩み寄ってきたテンペスト、ギガンテック、カイザーは、その光景をただ見ていることしかできなかった。

## 14 それぞれの事後

タナトス、そして赤い特機との交戦から数時間が経過した頃。

紛争抑止委員会の採掘基地一帯を燃やしていた火災は粗方鎮火し、焼け跡に降り立った光秋とライカは、各々機体のセンサー類を駆使して生存者の捜索を行っていた。

(……反応無し、ですか)

各種センサーの反応を走査し、シウルフツエンのモニターに映る辛うじて原型を留めている黒焦げになった数件の建屋を眺めながら、ライカは心中に淡々と呟く。

DC戦争初期の頃から第一線で戦ってきたライカにとって、目の前の惨状も、生存者無しという探索結果もすつかり見慣れたものであり、死者たちの冥福を祈るくらいのこととはしつとも気持ちが悪く動くことはない。あくまでも“仕事”の一部でしかないのだ。

念の為2回目の走査を行うと、基地跡南側を担当しているライカは北側を担当している光秋のニコイチに通信を繋ぐ。

交戦直後よりはいくらかマシになりつつも、未だ疲労の残る光秋の顔がモニターの端に映し出される。

「バレット1よりホワイト1へ。こちらに生命反応は確認されず。こちらはどうぞです?」

『こっちもダメですね。一度合流するので、その場で待機を』

「了解」

応じながら振り返ると、飛び立ったニコイチが自分の許にゆっくりと降りてくる。

シウルフツエンの正面に着地するや、ニコイチは辺りを見回す様に頭部を左右に振り、通信映像に映る光秋は瞑想でもするかの様に目を閉じる。

『……………本当に、ダメみたいです』

ややあって目を開けながら呟くと、光秋は顔を左に向け、それを追ってライカも同じ方向——西の空を見上げると、赤くなり始めた太陽がゆっくりと山々の間に沈みつつある。

『生存者が無しとなると、これ以上ここに長居するのは危険ですね。日ももうすぐ暮れるし』

現状を簡潔にまとめると、光秋は基地跡から離れた場所で待機しているレイデイバードに通信を繋ぐ。

『ホワイト1よりマザー1へ。委員会への連絡はどうなってますか？』

『こちらマザー1。ここから一番近い基地と連絡がとれました。ひとまずそこに向かってくれと』

『了解。我々も一度帰還します。合流してすぐに向かえるようにしておいてください』

『了解』

操縦士の返答を聞くと、光秋は映像越しにライカを見やる。

『聞いている通り、ここでの搜索はこれで終了。マザー1に合流後、最寄りの委員会基地に向かいます』

「了解」

応じると、ライカはシユルフツエンを飛び立たせ、同時に上昇したニコイチと並んでレイデイバードの許へ向かう。

ふと繋いだままの通信映像に目を向けると、目をつむった光秋が手を合わせている。

「……お祈り、ですか？基地の人たちの」

『……そんなところですね』

ライカの問いに、光秋は合掌を解いて答える。

「……私見ですが、あまり戦死者のことを引きずらない方がいいですよ。機動兵器に乗っている以上、殺されるのはお互いさまです。いちいち気にしていると、大尉まで引っ張られて……」

『いやいや、流石に僕もそこまで考えてませんよ。割り切りがいいというのか、薄情というのかはわからないけど、会ったこともない、しかも状況的に自分の力の及ばない所で死んだ人たちのことまで背負えませんか。ただそれとは別に、合掌の一つもしてあげないと悲しいかなって。要は、僕の中で割り切る為の儀式みたいなもんですから。もう済んだし』

「それならいいのですが……大尉にもしものことがあれば、非特隊のみんなが困るんです。くれぐれも無理はなさらないでください」

『了解』

釘を刺すライカに微笑んで応じると、光秋はレイデイバードの格納庫に降り立ち、ライカもそれに続く。

2機の合流を確認すると、レイデイバードは荒地を滑走路代わりにして上昇し、連絡にあった委員会基地へ向かう。

(どうしてだよ、どうして俺たちを置いて行ってしまうんだよ……！！)

(……◆……、この世界から奴ら……フ……ナ……：カーが消え平和が戻った……だが今回のもやはり末端に過ぎなかった……もうこれ以上あ奴らのせいで辛い思いをする者達を増やさぬために、遥か次元を超え奴らの本拠地を我は叩かねばならない)

——ああ、またこの夢か……。

そう自覚しながら、飛鳥は目の前の光景を見やる。

赤い炎を纏った鳥と、自分に似た大人が会話しているのが見える。

今回の夢は、まるでお別れのようにだと感じた。

(……：……お前は我らと共に身体と心が傷つきながらもフア●テ◆カーと戦い抜いた……ここから先は我、いや我ら四神の王に任せろ)(だからってあんまりじゃねえかよ！ずっと俺の相棒……：……親友で側にいるって約束破るのかよ!!)

(……：……あの日出会ってから十年共に過ごした日々は我にとって素晴らしいモノだ……)

(……：……俺も連れてけよ……：……お前……：……一人じ……：……や戦えないだろ……：……)

(……：……一人じゃない……：……それに……●●にはこの先を共に生きる大事な人がいるだろ……)

赤い鳥が首を向けると、金髪の長い髪に赤い瞳の綺麗な女の人がない安そうな面持ちで立っている。

(……これからはあの子を、●●ト嬢ちゃんを幸せにしろ……今まで心配かけた分……それ以上に幸せにしろ……あとレ●●もな)  
(……わかった、でもさよならは言わないからな！またいつか、例え何十年、何百年、何度生まれ変わっても俺は……お前と友達だ！また会おうぜD!!)

(！ああ、我……俺の友達……仮面を戦士……◆◆飛●の名を忘れな  
い！また会おう相棒!!)

青、白、緑の閃光が空を駆ける中、赤い鳥は光に包まれ空へと消えていった。

「ん……またあの夢か……」

目を擦りながら体を起こすと、赤い鳥の石像が見下ろすように立っている。

それを眺めながら、飛鳥は先ほどまで見ていた夢のことを考える。  
(今日の夢に出てきた大人はまるでオレの数年後の姿にしか見えなかった……それに赤い鳥と石像にはどことなく似てる気がする……)  
そんな思考を中断する様に、祖父・源三の声がかかる。

「ここにおったか飛鳥、今からワシとヴァルキリーズ極東支部に向かうぞー！」

「どうしたのさじいちゃん？」

「桃矢君が意識を失ったとルイーネが連絡を寄越してきたんじや、Dトレーラーを起動させ……いや研究所を極東支部の近くに転移させよう」

端末を素早く操作して転移座標を打ち込み、キーを押す。静かな振動音が響き転移が始まる中、『Dトレーラー』に乗り込んだ飛鳥に源三が思い詰めた顔で話しかける。

「飛鳥、しばらくワシらは拠点を日本に移すぞ……そこでなんだがの、学校に通う気はないかの？」

「……いいよ……オレは……オレなんか……」

「……飛鳥、そんなふうに分を責めるでない……そんな事をシンヤとマリ、蓮が望むと思つとるのか？」

「……でも！オレだけ生き残って……」

「よいかの飛鳥、生き残ったのには必ず意味がある……それに後ろばかりを向いてる今の飛鳥を見たらどう思うかの？……悲しむじやろうて」

「……………」

諭す様に語りかける源三に、飛鳥は口をつぐむ。

「3人とも飛鳥が前向きに生きること望んでおるに違いないとワシは思う……桃矢君も同じ意見じゃ……ん、着いたようじゃな」

転移が終わったことを告げるアラームが鳴り、移動床が動く隔壁が開き、Dトレーターを走らせる。

しばらくし進んで巨大な施設——ヴァルキリーズ極東支部が姿を現す。

「……じいちゃん、オレ……学校に行ってみるよ……父さん、母さん、蓮がそう望んでるならオレ頑張るよ……」

「そ、そうか！すまんがワシはこれから司令に会いに行く、飛鳥はDトレーターをナビが指示する場所へ運んでくれ」

「うん、じいちゃん」

慌ただしくも飛鳥の返答に笑顔を浮かべると、源三は座席から降りて司令がいる執務室へ歩いていく。

残された飛鳥はナビ起動させ、オートモードにしたDトレーターを特殊整備車両ヴァルキリーズ極東支部の敷地内に走らせる。

「……オレが生き残った意味……わからないけど今は桃兄を助けな  
きや……」

そう呟き、Dトレーターが停まったのを感じると、必要な機材をまとめて座席から降り、モモタロウが横たわる整備ハンガーに向かう。

この日、新田飛鳥はヴァルキリーズ極東支部整備主任・城田虎次郎と出会い、キジツト達以外のはじめての親友になった。

この事はすでに定められていた運命。

父と母と弟を失った少年・新田飛鳥と、夢で見た『赤い鳥』が出会

うとき、幾星霜の永き時を超え中国大陸に伝わる伝説の四神の王、新たなテイルレガシイが目を覚ます。

光秋一行が委員会基地へ向けて移動を開始した頃。

鬼・ルミエイラ部隊の全滅を確認した非特隊とヴァルキリーズは、極東支部への帰還準備を始めていた。

そんな中、戦闘の疲労がある程度回復した恭弥と一夏は、2人の事情を光秋から聞いていたエリックの指示に従って伊豆基地へ一時帰還していた。

「にしても、まさか着替え取ってこいって指示されるとはねえ」

『まあ、午前中のスクランブルで着の身着のまま出てきてそのままでしたからね。俺はまだしも、恭弥さんはまた服借りないといけなくなるし』

「そうなんだけどねえ……」

会話を交わしながら荷造りを済ませると、恭弥と一夏は自室を出て格納庫へ向かい、それぞれシルフィードとユニコーン・白に搭乗して極東支部へ飛び立つ。

「……ところで一夏君、白大丈夫か？ 戦闘が終わってからこっち、ドタバタして遅くなっちゃったけどさ」

言いながら、恭弥はモニター越しに右隣を並んで飛ぶ白を見やる。『はい。エネルギーはしばらく休めば回復しますから。伊豆基地から極東支部まで移動する分には問題ありませんよ』

「それもあるけど、何度か弾掠ってただろう。戦闘が終わった時、左腕に痕があった気がするんだけど……」

通信画面越しになんてことない様子で答える一夏に応じながら、恭弥は白の左上腕を注視する。

クロイツリッター・グランツハーケンのビーム弾がすれすれを過ぎていったそこは、戦闘終了直後に見た際には装甲表面が少し爛れていた。しかし今、爛れは完全に消え去り、全身にいくつかついていた細かな傷も綺麗さっぱり消えて、新品同様とっていい純白の艶やかな

装甲が白を包んでいる。

『あれくらいなら大丈夫ですよ。白って自己修復機能があつて、傷くらは放つておいても勝手に塞がりますから。ただ、装甲の材料を定期的に補充しなきゃいけないけど……それを言ったらシルフィードだつて……』

「まあねえ……」

一夏の言わんとすることを察しながら、恭弥は伊豆基地を発する前、搭乗直前に見たシルフィードの全体像——戦闘、特に終盤のモモタロウが撃ったグレンの余波で負ったはずの細かな傷が全て消えていた——を思い出す。

「出撃前にまさかとは思つたけど……やっぱり、シルフィードにも自己修復機能あるのかな？」

『……そういうことなんじゃないですか？状況から考えて……』

半ば確信を含んだ恭弥の呟きに、一夏は緩く同意する。

「……カノンちゃんのアトランティアもそうだけど、アレに比べたら僕らのはまだ地味——！」

さらに続けようとしたその時、視界の端を白くて丸い、さながら火の玉の様なものが行き過ぎていくのを見て、恭弥は言葉を詰まらせる。

『……恭弥さん？』

突然言葉が切れたこと、なにより画面の中の恭弥の顔が引きつりだしたので見て、一夏は心配そうに声をかける。その気持ちを拾ってか、白自体も寄り添う様にシルフィードとの距離を詰めてくる。

『恭弥さんっ』

「!?……あ、ああ、ごめん……」

『大丈夫ですか？急に黙り込んで……もしかして疲れています？』

「いや、確かに疲れてはいるけど、心配されるほどじゃないよ。ただ、今そこを……その……人魂ひとたまが通つていったような気がして……」

献身的に接してくれる一夏に頼もしさを、1歳差とはいえ年下にそんな態度をとらせてしまう自分に情けなさを覚えつつ、多少迷いつつも恭弥は感じたままを正直に答える。



『人魂?』

(……まあ、そうなるだろうな)

返ってきた言葉に眉を寄せる一夏、そんな予想通りの反応を見ながら、恭弥は気まずそうに心の中で呟く。

『え? 恭弥さん? 視える人? なんですか?』

『周りはそういうけど、僕自身は十中八九見間違えか、でなきや今みたいに疲れの所為だと思っただけどね……ただ、昔から人魂を見たかもとか、見かけた人影がすぐに消えた気がするとか言ったら、オカルト好きのサークルに半ば強引に入れられちゃってさあ……以来、軍に入るまで法螺話ほらに付き合わされてたんだよねえ……いや、それはそれで面白かったんだけど』

『へー……大変だったんですね。恭弥さんも』

『まあ、それなりにね……』

懐かしくも素直に楽しめない思い出話を緩く交わしながら、恭弥はなんとなくしに真正面を眺め、視線の先にある極東基地を幻視した。

恭弥の視線の遙か先——ヴァルキリーズ極東支部の格納庫では、横浜地区の戦闘から帰還した機体たちの收容作業が行われていた。

『コードM、モモタロウの收容急げ!』

『主任、ガタイがでかすぎてハンガーに収まりません!』

『ああ、仕方ねえな、じゃあ戦機人用ハンガーを2つ空けるしかないか……』

『わかりました! 今すぐ2つ空けます!!』

虎次郎の指示に従って早急に整備ハンガーが2つ空けられ、そこに戦機人2機に抱えられてようやくモモタロウのが収まる。

その間にも、虎次郎は隣の非特隊が使っている格納庫からの通信に応じる。

『主任、非特隊と一緒に来た髑髏の特機、大き過ぎて戦機人用のハンガーに入りません』

『そつちもかよ……』

モモタロウと同じ事態に呆れながら、問題の髑髏の特機が地下に降りてきた時を思い出す。

30メートル程度のモモタロウよりさらに巨大な50メートル級の巨体は、元来20メートル級の戦機人の運用を前提とした当格納庫にはギリギリの大きさで、身を屈めて窮屈そうに通路を移動していた。

（確か、頭のとっぺんに生えてた角が天井を擦ってたよな……）「わかった。ハンガーを2つ……いや、必要なだけ空ける。あとのことは非特隊の指示に従ってくれ」

『了解です』

通信越しの返事を聞くと、虎次郎は改めてモモタロウに目を向ける。

その巨体をなんとなしに眺めていると、妙な感覚を覚える

（コイツ……昔から知ってるような……？）「……んな訳ないよな……ん？」

考え事をしていて気づかなかったのか、いつの間にか傍らに知った顔が数人佇んでいる。

「アリス、それに第三分隊と……」

「カノンね。さつき恭弥に紹介してもらった」

「あ、そうだったな。で？どうしたんだ？」

「虎、少し時間をくれる？」

「いいけどさ……」

一同を代表して制服に着替えたアリスが問うと、全員が整備ハンガー2つ分のスペースに横たわるモモタロウの許に歩み寄る。

と、全員がいきなり頭を下げる。

「……アタシたちを助けてくれてありがとう……モモタロウ」

「……何があつたんだ？」

物言わぬ巨人に感謝を示す一同、それを横から見て首を傾げている虎次郎の許に、頭を上げたカノンが歩み寄ってくる。

「モモタロウの両腕と陣羽織になってるパーツ——私たちが初めて見た時はそれぞれ猿、犬、雉の姿をしたロボットだったんだけど——そ

れが鬼とルミエイラ、あと途中で乱入してきたカイザーの戦いに割り込んで、私たちに協力してくれたんだよ」

「カイザーって、あの髑髏の特機か？」

「そう。で、お蔭で鬼とルミエイラを全部倒して、カイザーのパイロットともどうにか話をつけて、帰り際に聞いた話じや避難誘導を円滑に進める一因にもなったたそうで、一応みんな丸く収めることができたんだけど……」

虎次郎の疑問に答えながら事情を説明すると、カノンは再びモモタロウに顔を向ける。

「その後みんな第四分隊と合流して、主人みたいな白い人型ロボットと合体してモモタロウになって、将鬼っていうの？空飛ぶ鬼を倒してくれたんだけどね……まさかこんなことになるなんて……」説明を続けながら、カノンはバツが悪い顔をする。虎次郎は知らないことだが、自分の趣味ど真ん中の光景——合体やら、スーパーロボットらしいダイナミックな戦い方やら——を見てはしゃいだ直後にこのようなことになってしまい、カノン自身少しだけ気まずさを覚えていたのだ。

モモタロウの足元で繰り広げられている光景が、その気持ちに拍車をかける。

「モモちゃん、目を開けて……答えてよ……せつかく会えたのに……ひどいよ」

「アカネ、あのバカなら大丈夫よ……必ず目を覚ますわ」

沈黙を返すだけのモモタロウに涙ながらに呼びかけるアカネ、それを姉のノゾミが支えながら立ち去る姿に、虎次郎も胸を痛める。

(痛々しくて見てらんねえ……)

「アカネさん……大丈夫かな……？」

「お前も心配してくれんのか？」

「アカネさんにはさつきお世話になったからね……」

虎次郎の問いに、カノンは出撃前に受けた検査、その案内をアカネにしてもらったことを思い出しながら答える。

その時、

「カノちゃん、ここにいたんだ」

「フィルち？」

突然名前を呼ばれたカノンは辺りを見回し、自分の許に駆け寄ってくるフィルシアを見つける。

「どうしたの？ IAD組はヴェーガスごと地上の格納庫じゃ？」

「カイザーのパイロットの尋問やるっていうからついてきたんだけどさ、カノちゃん呼んできてくれて」

「なんでそこで私？」

「同じ様な境遇の人がいれば向こうも安心するかもしれないって。とにかく一緒に来てよ」

「……けっこう気の強そうな人だったから、あんま効果は期待できない気がするけど……わかった」

「ちよつと待って」

フィルシアの説明にカノンが応じるや、2人の許にアリスが歩み寄ってくる。

「特機のパイロットの尋問をやるなら、私も加えてもらえないかしら？ ヴアルキリーズで彼と最初に接触したのは私たち第三分隊だしね」

「うーん……そういうのはアインに訊いてもらわないとわからないけど……ま、とりあえず一緒に来てよ」

「わかったわ……それと虎、この後してた約束だけ……」

「ん？……ああ、飯食い行こうってやつか？ 今から尋問するってんなら、流石にもう無理だよな。そうでなくてもアリスは分隊長なんだから、報告書とか書かなきゃいけないし、俺もモモタロウどうにかしなきゃいけないし」

「ええ……」

虎次郎の返事に、アリスは浮かない顔になる。

「ま、お互い仕事なんだし、仕方ねえよ。それに飯なら、時間が合えば食堂で一緒に食べばいいだろう？」

「いや、虎、私2人のこと知らないからはつきりとは言えないけど……そういう問題じゃないと思うよ？」

それが虎次郎なりの気遣いなのだど理解しつつも、カノンは半ば呆

れながら指摘し、アリスは悲しそうな顔を俯ける。フィルシアに至つてはやれやれと言わんばかりに肩をすくめ、両手を挙げて首を横に振っている。

「……まあいいや。とりあえず私行くから」

「おう。っ(苦勞さん)」

気まずい雰囲気から逃げることも兼ねてカノンは隣の格納庫へ向かい、フィルシアとアリスもそれについていくと、虎次郎は3人の背中に呼びかけて再度モモタロウに顔を向ける。

「なあ、あんた……早く目を覚ませよ……あの2人、特にアカネはなあんたが生きてることを信じて4年間過ごしてきたんだからな」

そう言つてモモタロウをどうするか悩んでいると、隔壁が開いて整備ハンガーにギリギリ入るか入らないかくらいのトレーラーが搬入されてくる。

それが静かに止まると、扉から赤い髪に白いコートを着た少年が1人降りてくる。

「ん、なんだお前？此所はアブね……」

「……モモタロウの整備はオレに任せてくれるかな？」

注意しようとする虎次郎に短く返すと、少年はコートから見たことのない端末を取り出す。

それを作動させると何も無い空間に無数の画面が浮かび、その中をさまざまな文字が流れていく。同時にトレーラーの後部コンテナからアームが伸びてモモタロウの体を引き上げ、さらに大小複数のアームが伸びると陣羽織の雉、左腕の猿、右腕の犬を外し、モモタロウの合体解除シークエンスを行っていく。

「……各部の損傷の自己修復40%、意識レベルは………じいちゃんに聞かないとダメか」

「すっげえなあ、なあこの端末は何なんだ？見た事ない型だけど」

見たことのない機器に技術者としての好奇心を刺激されたのか、虎次郎が横から顔を寄せてくる。

「……興味あるのか？」

「ああ！もちろんだとも……でさ少し貸してくんない？」

「いいけど……」

「サンキュー……なるほど此所をこうすると……すげえ！戦機人のア  
ナライズも出来るのか!!」

消極的ながらもとりあえず受け答えしてくれる少年に手渡された  
端末を操作すると、さまざまなデータが表示され、思わず感嘆の声を  
上げる。

(正直、俺たちが使う端末より性能がいいな……)「ほしいなコレ……」

「……あとーっあるからやろうか?」

「マジで！サンキュー!!っってお前誰?」

「……………オレは新田飛鳥だ」

「んじゃ俺も、此所ヴァルキリーズ極東支部整備主任を担当している  
城田虎次郎ってんだ、よろしくな飛鳥!」

「あ、ああ……よろしく」

虎次郎が差し出した手を、少年——飛鳥は恐る恐るだが握り返して  
握手を交わす。

それからいろいろと話をしていくうちに、虎次郎は飛鳥が著名人・  
新田源三の孫であること、自分と同じくらいメカに詳しいことを知  
り、先ほどまでの陰鬱な空気を吹き飛ばす勢いで盛り上がった。

同じ頃、隣の格納庫は打って変わって重苦しい雰囲気に含まれてい  
た。

悪戦苦闘の末にようやく整備ハンガーに固定させることができた  
髑髏の特機——マシンカイザーSKLの足元に集まった連邦軍人た  
ち——ヴェーガス砲術士アイン・ドック中佐、同通信士リン・スメラ  
ギ大尉、同機関士シンジ・アンカー大尉——の顔は一樣に緊張で強張  
り、離れた位置からその光景を眺めているヴァルキリーズ所属の女性  
整備士たちも皆心なしか腰が引けている。付け加えるなら、リンとシ  
ンジの肩にはそれぞれヴェーガスから持ってきたアサルトライフル  
が提げられている。

そんな中、ファイルシアに連れられたカノンとアリスがアインたちの

許にやって来る。

「アイン、連れてきたよ」

「ん。ご苦労さん……そちらは？」

フィルシアに応じつつ、アインは想定外の人物たるアリスを見やる。

「当支部第三分隊隊長のアリス・神山・ティグリスです。私もヴァルキリーズ代表として尋問に立ち会いたいのですが」

すぐに姿勢を正して自己紹介しつつ、アリスはこの場にいる軍側のまとめ役と思しきアインに要件を述べる。

「ヴァルキリーズが？」

怪訝な顔をするアインに、アリスはさらに続ける。

「我々もこの特機と遭遇し、成り行きとはいえ戦闘に参加しました。その場で指揮を執っていた者として、パイロットの事情確認はしておきたいと思ひまして」

「……そういうことなら……了解した」

「ありがとうございます」

思案の後に承諾したアインに、アリスは頭を下げる。

その時、カイザー頭頂部の髑髏のオフジエ——カノンによると「スカルパイルダー」——が外れて浮き上がり、下顎が左右に開いて翼を形成すると、小型の垂直離着陸機となったそれが一行の許に降りてくる。

「いよいよだな……各自警戒を厳に」

「了解」

着陸したパイルダーに向ける眼差しを鋭くしたアインの指示に、リオンとシンジは一層警戒を強めながら各々アサルトライフルを構える。

両手でしっかりと保持しているにも関わらず、遠目にも銃身が小刻みに震えて見える様子に、カノンはフィルシアの耳元に問う。

「もしかしてあの2人、銃使うの初めて？」

「初めてかどうかはわからないけど……アポカリプス——特隊に合流する前のヴェーガス隊に付けられるはずの名前だったんだけど、そこはもともと対ゴースト部隊で、こういうシチュエーションにはみんな

慣れてないからさ」

「そういうこと」

と、カノンが納得する間にも頭蓋骨を模したキャノピーが上がり、パイルダーからカイザーのパイロット——ナガイ・ゴウトが出てくる。

周囲を見回して自分に2つの銃口が向けられていることを確認するが、当のナガイは表情一つ変えることはない。

(ま、来る途中の様子からして、予想はできてたけどな……)

気が短いところがあるナガイだが、決して考え無しというわけではない。突然の転移から数時間、自分が現れた場所やここに来るまでに見た光景から、この世界が前にいた世界よりも自分が元いた世界に近いことは察しがついていた。理由がどうであろうと、一応の共闘を行おうと、そんな世界で出会い頭に巨大ロボットに乗って暴れれば良い印象を持たれるわけもなく、銃くらいは向けられるだろう。

そんな冷たい納得をしながら、自分も彼らに抱いている警戒心を自覚しつつ、元来険しい人相を仏頂面にしてアインへ向ける。

「あんたがここのメンバーのリーダーってことでもいいのか？ オツサン」

「そうだ。地球連邦軍非常事態特殊対策部隊のアイン・ドック中佐だ……それにしても開口一番に『オツサン』とは、随分ご挨拶だな。御年40の身としては否定できないのが悔しいところだが」

「悪いいな。育ちはあんまよくなくてよ」

率直な印象を声に出すナガイ、それにアインが敢えて軽口で応じると、半ば自虐的に返しながらパイルダーを降りて床に降り立つ。それに合わせて2つの銃口が向きを変え、パイルダーに乗っている時と変わらず胸周りに合わせられるが、ナガイは気にせず話を続ける。

「それで？ 言われた通りついてきてやったが、これから俺をどうしようってんだ？」

「まず君について教えて欲しい。君が何者なのか、何処からどういった経緯で来たのか、何故戦闘に介入していたのか、その他いろいろとな。部屋を用意したので案内する。ついてきて欲しい」



「要するに尋問かよ……」

予想していたアインの返答に、ナガイは辟易と漏らす。

その時、アインの脇からカノンが躍り出てくる。

「えっと、ナガイさんだよな？さっきも言ったけど、言う通りにした方がいいよ。非特隊の人たちはいいい人たちだし、素直に協力すればナガイさんの力にもなってくれると思うし」

「その声……あのマントロボの奴か。俺の力つてえと、こっちでの働き口でも紹介してくれるってか？」

この場で唯一自分と同じ境遇——異世界から迷い込んだ者であるカノンの勧めに、ナガイは思い付いたことを言ってみる。

「そんなとこ」。私もまだ手続き中だけど、帰るまでこっちで暮らせるようにいろいろ手配してもらってる」

「そうかよ……ま、背に腹は代えられねえか。わかった。部屋に案内してくれ」

「協力に感謝する」

カノンの返答に、ナガイは渋々自分を納得させ、短く応じたアインの後をついていく。

その後をナガイの背中に銃を合わせたリンとシンジが、その後ろをカノン、フィルシア、アリスがついていく。

「そういえばさ、日本ではこういうシチュエーションだと、相手にカツ井食ベさせるんだっけ？」

「それたぶん刑事ドラマの中だけだと思うよ？この世界ではどうか知らないけど」

「こっちでもドラマの中だけよ」

冗談とも本気ともつかないフィルシアにカノンが自信なさ気に返す横で、アリスが律儀に説明してくれる。

その頃、極東支部執務室では、リトスと源三が面談していた。

「久しぶりじゃのリトス君、ああ今はヴァルキリーズ極東支部司令じゃったかの？」

「せ、先生……」

学生時代の恩師の笑顔に、リトスは旧友たち——新田シンヤ、マリ、叶カズヤ、ホムラ、ユン、J——の顔を思い出しながら、自然に頬が緩んだ。

「リトス君には早く連絡を寄越そうとしたんじゃないかなかなかできなくて本当にすまんの」

「い、いえ……それよりもこのデータに記載されているのは間違いないんですか？だとしたら鬼は……」

再会の喜びも束の間、目の前の巨大スクリーンに映し出された鬼の肉声と、地球人の声紋パターン・言語データを見て訊ねるリトスに、源三は静かに頷く。

「うむ、リトス君の予想通りじゃ……鬼達の拠点を破壊した際得られた制御端末らしきものから取り出せたデータから奇跡的に肉声が入ったデータをサルベージすることに成功したんじゃないや聞いてみるかのリトス君？」

リトスが頷くと、源三は手元の端末を操作し、問題のサルベージした音声流れる。

『……ルガス……テラン……ヌコデム……ウラ……シンサス……ハイキス…………テラン…………ムモムモツアロー……ハクニン……』

スピーカーから響く声に、2人はしばし聞き入った。

「……先生、鬼達は……いえ彼等は何が目的で地球に現れたのですか……」

「わからん、ただひとつわかるのは彼等は何か焦っている……」

「焦り？」

「そうとしか思えない行動を4年前の侵攻が始まった時から感じるわい……その焦りの原因、それさえわかれば何かしら対策は出きるかもしれない……引き続きワシは回収した端末の解析を進めるとしよう……あとリトス君……ひとつ頼みを聞いてくれんかの？」

真剣な眼差しを向ける源三の頼みを、リトスはすぐに了承する。

返答を聞いた源三は笑顔を浮かべ、整備ハンガーに収容されたモモ

タロウに関する打ち合わせが行われた。

しばらく飛んで委員会基地に着陸したレイディバード、そこから降りた光秋とライカは、コンクリートの大地に立って周囲を見回してみる。

周辺には格納庫や宿舎、倉庫などになっている建屋が並び、中心部に佇むひと際背の高いビルは司令部だろう。先ほどの報告を受けてか、いつもこうなのかはわからないが、敷地の外縁部には主戦力たるHMMAS・ロトスやPD・アンタレスが一定間隔に並び、人がそうした様に首を左右に振ってどこまでも広がる荒地に目を光らせている。

「……さながら、陸の孤島ですね。数キロ四方のコンクリートの上に肩寄せ合って」

周囲の状況に光秋は素直な感想を漏らすものの、傍らのライカが応じる様子はない。

ライカはライカで、外周警戒を行っている機体の中の1機に釘づけになっていた。

(あの四脚機は………)

「……ミヤシロさん？」

「！……すみません。なにか？」

「いや、さっきからどうしたのかと……」

ハツとするライカに応じつつ、光秋は視線を追ってライカが眺めていた機体に目を向ける。

全長は10メートル少々といったところか。人型の上半身を4本脚の下半身に載せた赤いケンタウルスといった趣のソレは、右手にHMMAS用の大型マシンガンを持ち、左腕はレールガンと一体化、肩と背中にミサイルポッドと思しきケースを備えた、見るからに火力重視型だ。

「……見たところ、アレだけ他の機体と形が違いますね。委員会が雇った傭兵か……？」

周囲を見回して同型機がないことを確認しながら、光秋は首を傾げる。

その疑問に答える様に、ライカが口を開く。

「大陸を拠点に活動する傭兵——マイケル・ジョンソンの乗機、デストロイアですね。御覧の通りの重装備による飽和攻撃で敵を殲滅するパワータイプで、総火力は昼間のタナトスをも上回るとか。その分重量が増して機動性がガタ落ちし、大量に積んだ装備の反動制御を行いやすくする為に四脚を採用したといわれていますが。パイロットのジョンソン氏は長年大陸で傭兵を営んでいるベテランで、実力こそ『死神』や『騎士』には劣りますが、積み重ねた実績、それによって築いた信頼性から、今でも一定数の依頼が舞い込んでくるそうです。知る人ぞ知る、というやつかもしれません」

「……詳しいですね？」

機体の特徴だけでなく、パイロットの略歴まですらすらと述べるライカに、光秋はただ感心するばかりだ。

「……ちよつと、気になることがあったもので」

そう手短かに答えるライカの脳裏には、大陸遠征の際、自分が乗っていたガーリオン・カスタムの腕を吹き飛ばした赤い四脚機——目の前のデストロイアの姿が過る。

あの後奇跡的に生還したライカであったが、九死に一生を得たことをただ喜んでいたわけではない。強敵を前にして生き残った以上、牙を砥ぐことを——対峙した相手を調べて対策を練ることを怠ってはいなかった。名が売れているタナトスやアリシオンと違って、最後に目撃したデストロイアだけはすぐにはわからなかったものの、それでも北欧方面軍時代に暇を見つけては根気よく調べていった結果、いろいろとわかることはあった。今光秋に語って聞かせたのは、そうした調査結果をライカなりにまとめた結果だ。

「要するに、射撃武器が多くて、パイロットは経験豊富なベテランと？」

「そう解釈してもらってかまいません」

「なるほど……」

ライカの返答に、光秋は顎を撫でて思案顔を浮かべる。  
しかしそれも束の間、すぐに手を下ろす。

「いけない、少しのんびりし過ぎましたね。早いところこの司令に挨拶してきますか」

「はい」

短く応じると、ライカは光秋の後を追って基地中央に建つビルへ向かう。

夕日に照らされて赤く染まる空と海、その中にもひと際赤色を映えさせる巨大な人型ロボットが、どこまでも続く大海原上空を真つ直ぐに飛んでいく。

そのロボット——新ゲッター1のコクピットに収まるイシカワ・ケンジは、左手に夕日を眺めながら内心焦っていた。

「たくよー、訳わかんねえ連中撒いて、荒地が終わったと思っただらと海じゃねえか。いつんなつたら他の陸地に着くんだよー……？」

かれこれ数時間。変わることもないモニター越しの景色に愚痴を溢しながら、沈みゆく太陽を見つつ落ち着かない様子で足を上下させる。

(……引き返すか？だが、またあの黒いのと白いチビ、あと灰色の奴に鉢合うのもなあ……)

顔を後ろに向けながら、その先にいるであろう数時間前になし崩し的に交戦した黒と白、灰色のロボットを思い浮かべ、眉間に皺を寄せ

る。  
「にしても、あの灰色のロボットはどっかで見た気がするんだよなあ……どこだっけなあ……」

数種類のロボットたちと交戦したイシカワだが、その中で唯一初めて見た感じがしない灰色の機体の記憶を探ろうと頭を捻るものの、手がかりになりそうなものは浮かんでこない。

その時、前方から3つの影が近づいてくる。

「何だありや——いや、アレもどっかで見たような……」

航空機に手足が付いた様な青い細身の機影に、イシカワは灰色のロボットの時の様な既視感を覚える。

直後、青い機体から通信が入る。

『接近中の所属不明機に告げる。こちらは地球連邦軍東南アジア方面軍である。貴官の所属と飛行目的を明らかにせよ』

(またこういう手合いかよ……)

スピーカーから流れる勧告に数時間前にも似た様なことを言った奴——当人曰く「白い犬」——のことを思い出して渋い顔を浮かべながら、イシカワはペダルに足を掛ける。

(構うのも面倒臭え。このままトンスラさせてもらうぜ)

心中に呟くやペダルを深く踏み、ゲッターの速度を上げて3機の上を行き過ぎようとする。

もつとも3機のパイロットたちからすれば、それは得体の知れない存在——外見的特徴でいえば空飛ぶ赤鬼が突進してくるようにはか見えない。

『う、うわあ!』

『バ、バカ者!』

中央を飛ぶ隊長機が止める間もなく、恐怖に耐えきれなくなった左翼機が左手のレールガンを発砲する。

「チツ」

舌打ち混じりにレバーを振ると、イシカワは55メートルの巨体に似合わない小回りでそれを躲けてみせる。

が、恐慌状態に陥った左翼機の発砲は止むことがなく、遂に右手からミサイルを発射する。

「だー!ウザッテエーッ!」

叫びつつ、迫ってくるミサイルを左腕を盾にして受け流すや、イシカワは右手に肩から出したゲッタートマホークを握らせ、すれ違いざまに左翼機の左腕を肩の付け根から斬り落とす。

「それで言い訳つくだらう?とつとと帰えれッ!」

吐き捨てるや、さらに速度を上げて3機から離脱する。

『隊長!追いましやう!』

『ダメだ。今のまま追撃しても墜とされるだけだ。ええい！パトロー  
ル帰りの遭遇戦でなければ……』

急かす右翼機を止めながらも苦虫を噛む隊長機、その声を通信に聞  
きながら、イシカワは鼻を鳴らす。

「へっ。リオンみてえなヤラレメカが、ゲッターに敵うわけねえだろ  
う……リオン？」

無意識に口を突いて出た単語に、イシカワは我がことながら動揺す  
る。

刹那、記憶の一部を覆っていた靄が一気に晴れていく。

「そうだ！ありやりオンだ！アーマードモジュール・リオン！……待  
てよ……」

青い航空機モードキのロボット——リオンの名を呟きながら、灰色の  
ロボットが脳裏を過る。

「……俺が知ってるのと微妙に形は違うが……そうだ、ありやゲ  
シユペンストじゃねえか！パーソナルトルパー・ゲシユペンスト。細  
けえ型まではわからなかったが……で？俺はそういつた情報を何処  
で知ったんだ？……クソッ。肝心な部分が思い出せねえ」

未だ靄が残っている記憶に唾棄する一方、イシカワは先ほど交戦し  
たパイロットが言っていたことを思い出す。

（そっかやあのリオン、東南アジア方面軍って……てことは、ここは俺  
が元いた世界に近いってことか？だとしたら……）

得られた情報とそこからの推測をまとめながら、赤く染まる地平線  
の彼方を眺める。

（真っ直ぐ行きやあ、この世界の日本にたどり着くってことか……）  
「よっしゃあーひとまず日本に向かうかっ！」

知らない場所をうろついているよりまましといわんばかりに断じ  
ると、イシカワはトマホークを肩にしまい、当面の目的地を定めた乗  
り手の心境を引き写した様に、ゲッターは軽い足取りで前進を再開す  
る。

格納庫から歩くこと数分。

個室に通されたナガイはパイプイスに腰かけ、テーブルを挟んで座るアイン、その後ろに佇むアリスと向かい合う。同道したカノンとフィルシアは部屋の隅に佇み、壁に背中を預けて見物を決め込んでいる。ちなみにカツ井はない。

「では早速、君の簡単な自己紹介を――」

「その前に、そろそろ銃下ろしてくれてもいいだろう？ここまで来たら逃げも隠れもしねえよ」

アインの言葉を遮るや、ナガイは傍らでアサルトライフルを向け続けるリンとシンジを見やる。

「そうだな。失礼した。2人とも、銃を下ろせ」

「しかし……」

アインの指示にリンが静かに従う一方、シンジは不安そうな目をナガイに向けながら食い下がる。

「彼は我々に協力的な態度を示した。こちらもある程度は応えなければならん。もう一度言う。銃を下ろせ」

「……了解」

再度の指示にシンジが渋々銃を下ろしたのを確認すると、アインはナガイへの尋問を再開する。簡単な自己紹介の要求。どうやってこの世界に来たのか。何故出現してすぐに戦闘に介入したのか。

それらに対して、ナガイは記憶の一部が曖昧であると前置きして淡々と答えていく。ナガイ・ゴウト、20歳。前にいた世界から職業や所属といえるものはなく、強いていうならカイザーを足にした旅人の様なことをしていた。この世界に由来した経緯は曖昧なもの、空に空いた大きな赤い穴に吸い込まれ、気づいたら転移先の街中にいた。戦闘に介入したのは鬼とルミエイラが攻撃してきたからで、戦い始めてからのことは無我夢中でよく覚えていない。

「……」応訊くが、転移した直後に頭痛を感じなかったか？

「ああ。頭が割れるかと思っただぜ」

午前中に上がってきた報告を思い出して問うアインに、ナガイはその時のことを思い返してか痛々し気に顔を歪める。



「私と一緒にだね。記憶が曖昧っていうのも、やっぱり時空崩壊を通ってきたからかな？」

それを聞いて、カノンは自分自身のことも振り返りながら推測を述べる。

と、

「私からもいいかしら？」

それまでアインの後ろで黙って問答を聞いていたアリスが、ナガイに探る目を向けながらテーブルに歩み寄ってくる。

「さつき、相手が攻撃してきたから戦闘に介入したと言ってたけど、貴方自身にこの世界の勢力……連邦軍とか、私たちヴアルキリーズとか、そういうものと敵対する意思はあるのかしら？」

(……この女、俺を戦闘狂かなんかと思ってるやがんな……ま、初対面がアレじゃ仕方ねえのかもしれないねえが……)

再び冷たい納得をしながら、ナガイはアリスの目を見て答える。

その所為でアリスは鋭い眼光を直視することになってしまい若干腰が引けるが、ナガイは構わず口を開く。

「二つ言っておくが、俺は戦闘狂とかそういう類じゃねえ。仕掛けてきた分には容赦無く潰すが、少なくとも俺の方から何かしようって気はさらさらしない。この世界の軍隊にケンカ吹っかけたところで一文の得にもならねえしな」

「……そう。それならいいわ。ありがとう」

一応答えてくれたことへの礼を言うと、アリスは元の位置に戻る。

「ま、カイザーとガチでやり合えるようなロボット持つてる軍隊がいるなら、俺がこの世界でカイザーに乗って騒ぐのもアレが最後かもな」(それならそれでありがてえんだが……)

シルフィードと白にカイザーを転倒させられた時のことを思い出しながら呟くと、ナガイはちよつとは楽ができるのではないかと少しだけ期待する。

しかし、

「最後に、戦闘行為に介入した君の処分だが……」

(やっぱいこうなるかよ……)

続くアインの言葉に、薄々予想していたナガイは心中に嘆息を漏らす。

「自衛の為というのは理解したが、やはり然るべき立場にない者が戦闘に介入したのは問題だ。付け加えるなら、意図したものでないにしても、君の所為で我が部隊の隊員たち、そしてヴァルキリーズの方々、余計な危険にさらされ、周囲にも少なからず被害が出た。異世界人に我々の理屈を当てはめていいかどうかは迷うところだが、敢えて当てはめるなら、この責任はとるべきだろう」

「責任つたつてなあ……」

アインの言うことをある程度理解しつつも、具体的に何をしたらいいかわからないナガイは頬杖を突き、逃避したい気持ちを表すように明後日の方を見る。

「そこでだ。君、連邦軍に——厳密には我々非特隊に入らないか？」

「……結局そうなのかよ……」

続いて出たアインの——聞き手によつては典型的な——提案に、ナガイは辟易とした気持ちを隠すことなく顔を歪める。

「正直に話せば、君の機体と、君自身の操縦技術は我々としても是非欲しいところだ。それに入隊してくれれば、戦闘介入の件についてある程度擁護することもできる。加えて、尋問前に君が気にしていた働き口にもなるだろう」

「そーだけだよ……要は協力しなきゃ豚小屋行きつてことだろう？」

「どうとつてもらつても構わん。それに強制する気もない。入る意思がないのならば、我々もできる範囲で君がこの世界にいる間の支援をさせてもらおう。こちらでも保護した責任があるからな。最終判断は君自身が下してくれ」

「……」

表裏のない様子で続けるアインに、ナガイはそっぽを向いたまま無言を返す。

「突然のことだ。すぐに返事をしなくてもいい。明日の今頃までゆっくり考えてくれ。非特隊としては以上だが、テイグリス分隊長からは

？」

「私からも特には。ただ彼の処遇についてですが、一応司令にも報告させていたたくので、ヴァルキリーズとしての正式な回答はしばしお待ちください」

振り返ってアリスの返答を聞くと、アインは再びナガイを見る。

「承知した。それとナガイ君、念の為此の後検査を受けてくれ」

「検査だと？」

「この世界に出現した際、頭痛がしたと言ったな。それに記憶が曖昧とも。万一に備えて、他に異常がないか確認して欲しい」

「ふんっ、まさか別の世界に来て健康を気遣われるとは思わなかったぜ」

皮肉とも感心ともつかない様子で返すと、ナガイは席から立ち上がる。

「で？検査って何処行きやいいんだ？」

「あ、私が案内するよ。さつきも行ったしね」

名乗りを上げるカノンに、アインは室内を見回す。

「なら、フィルシアとシンジもついていってくれ。念の為な」

「りよーかい！」

「了解」

それぞれ応じると、カノンを先頭にナガイ、フィルシア、シンジは部屋を出ていく。

カノンの先導で検査へ向かう道中、フィルシアが好奇心の目でナガイに歩み寄る。

「それでナガイさん、さつきの話どうするつもり？」

「……何のことだ？」

「非特隊に入るか入らないかって話。実際に対峙してみた人間としては、入ってくれるとすっごい助かりそうだけどねえ。カノちゃんもそう思うでしょ？」

「だねえ。今んとこ、戦力はリアル系ばっかだから。シルフィードとかユニコーンとかニコイチとか、あと私のアトランティアとか、一部微妙なのはあるけどさあ。この辺でゴリゴリのスーパー系が1機で

も入ってくれれば、一緒に戦う上ではありがたいかも」

「……なんだよその『リアル系』とか『スーパー系』って……いや、俺も何でだか聞き覚えはあるが……」

カノンの独特の表現に、ナガイは眉間に皺を寄せる。

「二つ言っておくが、俺は戦うことに関しちや他人の都合なんざ考えねえぞ。『戦いたいから戦う』、それが俺とカイザーだ。お前らが助かるとかどうとか知ったこっちゃねえ。さつき助けられた借りもちやんと返したしな」

「うわあ、戦闘中もちらつと思っただけど、そんな台詞が素で似合う人だからすごいよ」

「でもそう言っただって、入らないとなるとこっちでどうやって生活していくの？それとも、元の世界に戻るアテでもあるの？」

「……………」

カノンが素直な感想を漏らす横で痛いところを突いてくるフィリスアに、ナガイは渋顔を作って無言を返した。

日がすっかり落ち、辺り一帯が暗闇に包まれた頃。

基地司令との挨拶を終えた光秋とライカは、レイディバードに戻るや、真っ直ぐ運転席へ向かう。

「今戻りました。どうです？日本の本隊と連絡つきましたか？」

「大尉……いいえ。ダメですね。無線はうんともすんともいいません」

「……やはりですか」

光秋の問いに操縦士はお手上げといった様子で応じ、予想通りの展開にライカは小さく呟く。

『大陸特有の磁気嵐』。話には聞いてたけど、実際体験してみるとけっこう厄介ね」

「……メイシール少佐」

唐突に加わった4人目の声にライカは振り返ると、板チョコをかじったメイシールがドアの隙間に佇んでいる。

「確か、最初の時空崩壊が起こって以降、大陸上空に恒久的に発生するようになってきたんですね。その所為で大陸上空の高高度飛行が難しくなって、今みたいに長距離の通信も繋がりに難くなってる」

「だから機械的な監視も難しくなり、それを利用したテロリストの駆け込み、それに伴う革命者の結成、さらにはDCが居城する理由にもなった」

メイシールが出した磁気嵐の話題に、光秋は現状確認ついでに概要を語り、ライカもそれに続く。

「そういうことね。それで？加藤大尉。これからどうするの？」

「とりあえず、レイディバードの補給は取り付けました。明日の朝には出発できるでしょう。肝心の視察対象が消えてしまった以上、いつまでもいても仕方ないし、あの赤い特機の報告もしなければなりませんね」

「……つまり、今夜は機内に泊まるってことね」

「そうなりますね。基地の宿舎は空きがないようですし」

置かれた状況を簡潔にまとめるメイシールに、光秋は首肯を返す。

「大尉、意見具申です」

「なにか？」

言いながら手を挙げるライカに、光秋は顔を向ける。

「今夜の見張り、我々も独自に行うべきかと」

「というところ？」

「司令部への行き来の際に監視態勢を視ましたが……委員会への失礼を承知で言えば、その多くが見ている頼りないものでした。機体越しにも注意力散漫が見え見えで。あれではどんなに数を並べたとしても、危険を見逃し、気づいた時には致命的な距離まで近づかれている可能性が高いかと」

「だから、こっちはこっちで見張ろうと？」

「はい」

確認する光秋に、ライカははっきりと頷く。

「……………百戦錬磨のミヤシロさんがそう言うなら、そうなのかもしれないですね。委員会にどう言うか少し困るところはあるけど……………」

かりました。僕が先に出て、12時に交代しましょう。ミヤシロさんはその間休んでください。クリスタス少佐はシュルフツエンのチェックお願いします」

「了解」

「わかったわ」

しばしの思案の後に決断し、指示を出すと、光秋はキャビンを通って格納庫へ向かう。

「……！」

それを見て何かを思い出すや、ライカはキャビンに置いてある鞆に手を突っ込み、取り出した物を持って光秋の後を追う。

「加藤大尉！」

格納庫に出るなり呼びかけると、ちょうど何処からかニコイチを出現させた光秋が振り返る。

「ミヤシロさん？何か？」

問われる間に歩み寄ると、ライカは光秋に鞆から出した愛用の栄養ドリンクを渡す。

「まだ疲れが取れていなかったようなので。よかつたら」

「ありがとうございます」

「それと……」

「？」

光秋が受け取ったドリンクの瓶を見ながら礼を言うや、ライカは周囲——特にキャビンを警戒しながら顔を寄せ、光秋も左耳を向ける。

「少佐にシュルフツエンのチェックを頼んでいましたが、封印の件、大丈夫でしょうか？今のところバレていないようですが？」

「一応カモフラージュは嚴重にしてもらいましたからね。少佐といえば、『CeAFoS』に注視して調べないとまずわからないとは思いますが……仮に今バレたとしても、流石の少佐も大陸（こく）じゃ何もできないでしょう。少なくとも帰るまでは現状維持で行けますよ」

「……だといいいのですが」

「考えても仕方ない、もともと思い付いた時点で危ない橋なんだ。ここまで来たら、僕等の運が続くのを信じましょう」

「……そうですね」（あるいは、それしかないですね）

ライカが含んだ返答を見ると、光秋はワイヤーを伝ってニコイチに乗り込み、左膝を着いていた機体を立ち上がらせると後部ハッチから出ていく。

それを見送ったライカはキャビンに戻り、膝の上のノート端末を操作しているメイシールと向かい合う様に腰を下ろす。

「男の見送りなんて、随分マメじゃないの？」

「私と大尉はそんな関係じゃありません。変な言い方は慎んでください」

「あ、そっ……」

心なしか怒りを含んだライカの返しに素っ気なく応じると、メイシールは端末を鞆にしまつて席を立つ。

「大尉の頼み通り、私はシユルフツエンのチエツクをしてくるわ。貴女にはいざという時頑張ってもらわないといけないんだから、しっかり休んでちょうだい」

言うどメイシールは鞆を提げ、返事を待たずに格納庫へ向かう。

（言われなくてもそうします……）

その背中に心の中で返すと、ライカは携帯端末の目覚ましをセットし、靴を脱いで座席に横たわる。

（とりあえず、一人にしてくれたのはありがたいですね。お蔭でゆっくり寝られます）

理由はどうかあれ、もともと苦手意識の強いメイシールと2人きりになるといふ状況を回避できたことに感謝すると、ライカは眠りの世界に落ちていった。

横浜での一件の事後処理を一通り終えたエリックは、自室の椅子の背もたれに疲労が溜まった体を預けたのも束の間、事前に受けていた連絡に従って伊豆基地に回線を繋ぐ。

「非特隊所属、ヴェーガス艦長のエリック・ノヴァ大佐だ。ランドルフ司令に取り次いでもらいたい」

『了解』

おそらく手筈を聞いていたのであろう通信士が短く応じると、手許の端末の画面に白いものが目立つ老人が映し出される。

それを確認するや、エリックは座っている姿勢を正して画面越しに相手の目を見る。

「本日付で非特隊に合流しました、ヴェーガス艦長エリック・ノヴァ大佐であります」

『伊豆基地司令のレイカー・ランドルフ中将だ。ノヴァ大佐、まずは合流早々のゴーストと鬼の鎮圧ご苦労だった』

「いえ……」

好々爺然とした顔で劳いの言葉をかけるレイカーとは対照的に、エリックは知らぬ間に肩を強張らせる。

『さて、その鬼……実際にはルミエイラを合わせた部隊との交戦における人員運用についてだが……』

(……来るな)

本題に入ろうとするレイカーに生唾を飲みながら、エリックは数時間前に通信越しに交わしたカノンとの会話を思い出す。

(鬼相手に出し惜しみなどでできず、使えるものは何でも使った方がいいという判断をしたことに後悔はない。ルミエイラの増援も考えれば、結果的に正しい判断だったのだから……ただ、それと手続き上民間人扱いの人間を戦場に立たせたことは別だな。『責任は俺がとる』とは言ったものの……合流早々に更迭か……)

心の中で嘆息を漏らしながら、レイカーの一言を待つ。

『非特隊への協力を申し出てきたという少女、その手続きに関する書類が昼間送られてきたのだが、どうも不備があったようだな。早急に再発行してほしい』

「……はあ？あーいえ……失礼しました」

一瞬何を言われたかわからず、つい素っとん狂な声を上げるが、すぐに謝罪して状況を確認する。

(どうなっている？書類はまだ作成中だぞ？そもそも今日伊豆に何かを送った覚えも、報告も来ていない。さつきまで事後処理にいつぱい



いっぱいですれどころじゃなかったしな……………となると、司令は  
いったい何を言つて……………)

『ノヴァ大佐』

「……………はっ」

レイカーの声に現実に戻されると、エリックは改めて画面を見据え  
る。

『大丈夫か?』

「……………はい」

『ならいい。再発行した書類だが、また何かあるといけないので私の  
許に直接持つてくるように。いいな』

「……………了解」

穏やかな表情とは裏腹に有無をいわせない強い語調で語るレイ  
カー、その独特の気迫に中<sup>あ</sup>てられそうになりながら、エリックは首肯  
を返す。

『以後、こういうことは極力無いように。私もそう何度も不備を庇え  
る力はないからな』

(……………そういうことなのか?) 「……………はっ。以後気をつけます」

言外に含んだ意味を漠然と察すると、エリックは直立不動の姿勢で  
返答し、それを見届けたレイカーは画面から消える。

途端にエリックは肉体的疲労に加えて心労も抱えた体を今度こそ  
椅子に預けきり、それを見計らっていたかのようにカトリーヌが部屋  
に入ってくる。

「予想以上にお疲れの様ね」

「……………すまない……………ハチミツ入りだな」

言いながらカトリーヌは机に紅茶が入ったティーカップを置き、一  
口飲んだエリックは渋みの中の仄かな甘味に疲労が少しだけ和らい  
だように感じる。

「支部内の売店に売ってたの……………それで、伊豆は何て?」

「……………結論を言えば、高槻という少女の件はなんとかなった……………いや、  
なんとかかしてくれたよ。伊豆——というよりランドルフ司令がな」

カトリーヌに答えつつ、エリックはまた一口紅茶を飲んで口を湿ら

せる。

「流石は極東防衛の要、加えて戦時中から連邦内部の思惑が多数渦巻いていた伊豆基地の司令ということかな？上手く誤魔化してくれたようだ。もつとも、釘も刺されたがな……」

何度も庇えないと言ったレイカーの顔を思い出しながら、力無い苦笑いを浮かべる。

「ところで、髑髏の特機のパイロットの方はどうだ？」

「さっきアインが報告書を送ってくれたわ。詳しいことは後でそつちに目を通してもらうとして……非特隊への参加については、いい反応は得られなかったみたい……」

「そうか……そうだろうな……」

異世界に迷い込み、その軍隊と小競り合いとなり、今はその軍隊と行動を共にしている。急展開の連続にまいつているであろう特機のパイロットに多少の同情を抱きつつ、エリックはもう一つの懸案を思い出す。

(あのネメシス08の少年、どうするかな……)

極東支部上空に差しかかったシルフィードと白は、管制塔の指示に従って地下格納庫の出入りに降下し、そのままエレベーターで地下に下りて非特隊が借りている格納庫へ向かう。

それぞれに乗機を固定し、手荷物を持って機体を降りると、恭弥はヘルメットを脱いで襟元を緩め、ようやくひと息つけた実感を得る。

「ふうー……」

「お疲れですね」

「一夏君もな」

返しつつ、白式を解除していて制服に変わった一夏を見やる。

「とにかく、これでしばらくは息がつけるよ。僕、近くの更衣室で着替えてくるから。終わったら食堂行こう」

「あ、それなんですけど……」

恭弥の提案に、一夏は若干申し訳なさそうに応じる。

「俺、城崎さんの方が気になってて。悪いけどそっちに行かせてください。飯も行く途中で何か買って、見舞いがてら済ませてきますから」

「そっか……………マメだねえ、一夏君も」

言われて懲罰前に病室で会った、本人の言うことを信じるなら「過去から来た少女」のことを思い出すと、恭弥は軽くからかうつもりで茶化す様に言ってみせる。

しかし、

「そりゃあ、最後に見た時は大分落ち着いてたけど……………城崎さん、知らない場所に独りでやつぱり不安でしょうからね。俺も似た様な……………って言ううちよつと違うかもしれないけど……………とにかく少しだけ気持ちわかるから。時間があれば少しでも一緒にいてそれを和らげたいんですよ。光秋さんふうに言えば、『迎えた責任』っていうのもあるし」

「……………ああ、そう……………？」（一夏君って……………やつぱり……………）

予想に反して真面目な返答が来たことに恭弥はやや狼狽えつつ、中華街でのエリアとの一件の際に感じた感触を思い出す。

「そういうわけだから、俺行きますね。あ、就寝時間までにはちゃんとヴェーガスに戻るんで」

「そりゃあ、極東支部（こっぺいぶ）にいる間の宿舍代わりにするって、ノヴァ大佐言ってたからね……………わかった。またあとで」

恭弥の返事を聞くと、一夏は着替え諸々が入った鞆片手に速足で病棟へ向かう。

「……………まあ、誰にでも優しいってことなんだよな……………僕もシユウさんふうに言えば、君のそういうところが好きなんだけどな」

大多数の人々と感覚的な部分で若干ずれている様子を心配する一方、その“ずれ”に対する率直な感想を遠くなった一夏の背中に投げかけ、恭弥は更衣室へ向かう。

途中の売店で夕食を購入すると、一夏は一路昼間の病室を目指す。

部屋の前に着くとドアをノックし、

「……はい？」

若干不安の混じった返事を聞くとドアを開く。

「どうも」

「!?織斑さん！」

一夏が顔を見せるや、ベッドの上のユイは一瞬ぴくつと体を跳ね上げ、病床衣姿の姿勢を心なしか正す。

「無事だったんですね！」

「なんとか。ここいいですか？」

「どうぞ」

数時間前に別れて以来気になっていた相手との再会に嬉々としつつ、ユイはどうかベッド脇の椅子を勧め、一夏は鞆を床に、夕食の入ったビニール袋をサイドテーブルに置いてそこに座る。

「具合どうですか？」

「さつき先生に診てもらった限りでは、明日には退院してもいいと点滴も抜けましたし」

「それならよかった」

管の抜かれた左腕を示すユイに、一夏は心底安堵した笑みを浮かべる。

「……？」

その穏やかな笑顔がユイの中を一瞬ざわつかせるが、本人はそれが何なのかわからず、一夏は一夏でビニール袋から焼きそばパンとペットボトル入りの紅茶を取り出す。

「城崎さん、飯は？」

「あ……さつき食べました」

「そっか……すみませんけど、俺ここで食べさせてもらっていいですか？」

「お気遣いなく。織斑さんは戦いから帰ってきたばかりなんですから。しっかり滋養つけていただかないと」

「いや、そこまで大袈裟じゃ……」

気まずい雰囲気は誤魔化すつもりで大義そうに応じるユイに困っ

た顔で返すと、一夏は焼きそばパンの封を切る。  
と、

「それともう一つ……………『ユイ』って呼んでもいいですか？」  
「……………え？」

迷いながらも唐突に申し出る一夏に、ユイは束の間返答に困る。

「いや、嫌なら別にいいんですけど……………」

「いえ……………そういうわけでは……………でも、突然どうしたんです？」

遠慮がちに補足する一夏に、ユイは気になったことを訊いてみる。

「俺はそういう方が言いやすいから……………あと、タイムスリップとかいろいろややこしいから、とりあえず“今”の年齢差で関わられたらなあつて。昼間の話だと歳近いみたいだから」

「……………言われてみればそうですね」

タイムスリップ諸々の要素が挟まるとややこしいという点に共感しつつ、ユイは一夏の考えに同意する。

「そういうことなら。私もその方がやりやすいですし」

「よかった」

「ただ……………私も『一夏さん』と呼んでもいいですか？」

「全然。よろしくな、ユイ！」

「……………こちらこそ、一夏さん！」

笑顔で自分の名前を——それも呼び捨てで——呼ぶ一夏に、ユイはまたもぎわつきを覚えながらも、負けないくらいの笑顔で返す。

それを見て確認事項を消化しきった一夏は、袋から出した焼きそばパンに噛りつく。

「……………私からもいいですか？」

「ん？」

少し迷った様子で訊いてくるユイに、一夏は紅茶でパンを流し込みつつ、すっかり普段の調子で応じる。

「その……………一夏さん、私とそんなに歳変わらないんですよね？」

「ああ。今16」

「1つ上か……………その……………そんな若い人が、何で軍に、それも見るからに特別なところ入って戦ってるのかなつて……………私がいた時代は大戦の

真っ只中だったから、10代の子が志願して兵隊になるなんて珍しくなかったけど、話を聞く限り流石に今は違うみたいだし………もしかして、訊いちゃいけないことでしたか？」

そこまで言ってみて、ユイは自分がデリケートな問題に踏み込んでいるのではないかと不安になる。

が、一夏は皺一つ寄せることなく答えてくれる。

「んー……詳しくは機密で話せないんだけど、簡単に言うとなスカウトさらたからだな」

「スカウト？」

「もともと軍とは別の機関にいたところを、光秋さん——昼間のメガネの人と、その上司の人に誘われて、俺がやりたいことと合ってたから引き受けて、今こうして非特隊の隊員やってるわけだ」

「やりたいこと？」

「仲間を守るってこと」

ユイの問いに、一夏はさらっと、しかし2人が出会ってから初めて見せる真剣な眼差しで応じる。

「守る、ですか……？」

「俺、両親がいなくてさ」

「……」

唐突な告白にユイは軽い衝撃を受けるものの、当の一夏はなんてことのない様子で話を続ける。

「歳の離れた姉と2人で暮らしてて、ずっとその姉や友達、その親御さんたち、近所の人たちに助けられて——守られて生きてきたんだよ。だから、今度は俺が、俺に関わる人たちを守りたいって思ってた、光秋さんたちの誘いは渡り船だったから」

「……そうなんですか」

どこか誇らしげに語る一夏に、ユイは静かに返す。

「あとは、報酬が結構よくてさ。これで家計の足しになれば万々歳だよ」

「……そうですか」

付け加えられた先ほどまでとは正反対な——非常に世俗的な理由

に、ユイは脱力気味に返す。

「そういうユイは？何で軍隊なんかに入ったんだ？」

「……私は……」

訊き返してくる一夏に、ユイは以前上官に同じようなことを語った時を思い出し、もう手が届かなくなつた懐かしさに口を詰まらせてしまう。

それを見て訊いてはいけなことを訊いてしまったと感じた一夏は、バツの悪い顔をする。

「悪い。変なこと訊いちやつたか……」

「！いいえ。そういうわけじゃ……ちよつと昔のこと思い出しちゃつて……」

余計な気を遣わせたことを慌てて詫びると、ユイは以前語つたことを思い出しながら答える。

「別に国の為とか、正義の為とか、そんな恰好いいことじゃないんです……ただ、まだ私の寿命は長いから……あの悲惨な戦争をこの目で見つて、この目で感じて……後の世代に語り継いでいきたいつて、そう思つて……」

「……そっか」

静かに応じると、一夏は焼きそばパンを一口かじる。もつとも、内心では若干引つ掛かるものを感じていた。

（……俺と大して歳の変わらない女の子が、そんな気持ちでなあ……）と、語り終えたユイの顔に陰が差し、そのまま下を向く。

「でも……まさかこんなことになるなんて……見て語り継ぐどころか、そこから遠いところに来ちやうなんて……」（私、これからどうしたらいいんだろう……）

最後の方は口の中に眩き、その明文化された気持ちだが、ユイを再び先の見えない不安に陥らせる。

その時、

「……でも、今、ここ」にいるのもユイだろう？」

「……？」

静かにかけられた一夏の言葉に、ユイはゆつくりと顔を上げる。

「確かに、もう三次大戦を見ることはできない。でも、その一部始終を知っているユイがこの時代にいるのは……上手く言えないけど、なんか意義があると思うんだよ。ユイだからできることっていうのがさ……どうしたらいいかわからないなら、これから見つけていけばいいんじゃないか？俺も協力する。もちろん恭弥さんや光秋さん、ライカさんだって、今ならカノンやルルさん、ナイトウォーカーさんだっているんだ。こうして出会ったのもなんかの縁だ。一緒に見つけていこうぜ」

「……はい。ありがとうございます……」

ぎこちないながらも必死で思いを伝えてくる一夏。その言葉に悩みながらも柔らかに笑う姿に、ユイは再度広がろうとしていた不安が収まるのを感じ、掻き消えそうな礼に目頭が熱くなるのを自覚する。

同時に、そんな姿を誰かに見られることに恥じらいを覚える。

「……悪い。俺ちよつとトイレ行ってくる」

言うや一夏は食べかけの焼きそばパンをサイドテーブルに置き、そそくさと部屋を出ていく。

「……ズルいですよ。一夏さん……」

自分の心境を察した様なタイミングのよさに、ユイは一夏が出ていったドアを睨みつけながら、笑顔で静かに泣いた。

パイロットスーツから制服への着替えを済ませると、恭弥は支給品の端末を用いてフィルシアたちと連絡をとり、極東支部内部の食堂で落ち合う段取りをつける。

「……速く来過ぎたか……先に注文とって待ってるか」

ピークを過ぎた食堂には、自分以外ヴァルキリーズのスタッフが疎らにいただけであり、とりあえずと受付に行つて注文を済ませ、トレイを受け取って大人数が一度に座れるテーブルに腰を下ろす。

「おっ、お疲れ恭弥」

「虎……それと……？」

名前を呼ばれた方向に顔を向けると、虎次郎と見知らぬ赤毛の少年



が、それぞれトレイを持って自分の許に歩み寄ってくる。

「今から飯か」

「うん。他のメンバーが来るの待ってるんだけど……そっちも？」

「ああ。ようやく仕事がひと段落してよ……」

「そっか……」

疲労を含んだ虎次郎の返事を聞きながら、恭弥は赤毛の少年に顔を向ける。

「その子は？」

「ああ、こいつは……」

と、虎次郎が答えようとしたその時、

「桂木曹長！お待たせー！」

ハツラツとした声がそれを遮り、3人が声のした方を見やると、声の主であるフィルシアを先頭に、サクラ、カノン、リグル、ナガイが各々トレイを持ってやって来る。

「ごめんねえ。リグルが迷子になっててき。見つけるのに時間かかったちゃって」

「……だって、カノンが戻ってきたって聞いて、居ても立っても居られず……そもそもこの砦の造りが複雑すぎるんです！」

頭を下げるカノンの横で肩身狭そうにしたのも束の間、すぐにリグルは目くじらを立てて不満を露わにする。

「いやいや、僕もさつき来たところだから気にしないで」

そう恭弥が応じる間にも、新たに来た一行は席に着く。

「……ところで桂木曹長、織斑曹長は？」

「一夏君なら城崎さんのところ行ったよ。夕食もそっちで済ませてくるって」

「織斑って、あの変なパワードスーツ着てた奴だろう？……不安がつてる女の子にさりげなく寄り添うか……やるな！そいつも」

サクラの問いに恭弥が答えると、虎次郎が——若干邪な——笑みを浮かべながら感心した様に呟く。

「そんな変な意味じゃないだろう。もつとも僕もそんなふうに変化しちゃったんだけどさ……優しいんだよ、一夏君は」

「そういうもんかなあ……」

フオローする恭弥にフィルシアが応じると、誰ともなしに食事を始める。

「……ところで虎、その赤毛の子、誰？」

「ああ、そうだったな」

カノンの問いに、先ほど言い損ねた虎次郎は改めて少年を紹介する。

「新田飛鳥、新田源三の孫だそうだ」

「にった……げんぞう……？」

その説明に首を傾げる非特隊一同を代表して、恭弥が訊き返す。

「あ、お前ら知らないのね……まあいいや。ほら、飛鳥」

「う、うん……」

その光景にお手上げといった様子で応じると、虎次郎は飛鳥に話を振る。

「新田飛鳥です……みなさんが連邦軍の……」

「非常事態特殊対策部隊、通称・非特隊ね」

「早い話が、弱きを助け強きを挫く正義の味方……の様に見える、疲弊した連邦軍が立ち直るまでの間、面倒事を優先的に引き受ける便利部隊ね」

「フィルシア……もう少し言い方があるでしょう……」

恭弥の紹介に包み隠さない補足を加えるフィルシアに、サクラが少し呆れた様に漏らす。

「……………」

それから何を話していいかわからなくなったらしい飛鳥に、虎次郎が助け船を出す。

「こいつさ、一見ただの中坊に見えるけど、スゲーんだよ。特別製の端末片手に、あのモモタロウの整備をサクサクやっちゃまってさ」

「！」

その効果はあったようで、「モモタロウの整備」と聞いたカノンが飛鳥の許に身を乗り出してくる。

「え？君があのスーパーロボットの整備してるの!？」

「え!?…………ええ、まあ…………じいちゃんの手伝い程度ですけど…………」

高揚しながらも真剣な眼差しで訊いてくるカノンに、飛鳥は若干身を縮ませる。

「カノン」

「え?…………ああ、ごめん…………」

傍らのリグルに注意されて自分の様子を自覚すると、カノンは乗り出していた身を引っ込め、さつきよりは落ち着いた態度で話を再開する。

「いやー、私ああいうロボット大好きでさあ。つい興奮しちゃって」「戦闘中もハイテンションだったよね。特にモモタロウが合体した時なんか」

「まーね。合体ロボットはロマンなんだよ。ナガイさんもわかるでしょう?」

その時のことを思い出したフィルシアに応じつつ、カノンはさつきから黙って食事を続けるナガイに声をかける。

「……………何でそこで俺に振る?」

「深い意味はないよ。ただ、なんとなく“同類”の匂いを感じてさ」

「“同類”な…………」

カノンの返答にスープを飲みながら応じると、ナガイは少し考える。

「いや、俺もよくわからんな」

「えー?それがSKLに乗ってる人の台詞?」

「何でそこでカイザーが出てくんだよ……………ただでさえ頭ん中に靄が掛かってんだ。これ以上よくわからん話はやめろ…………」

顔一杯に不満を浮かべるカノンに、ナガイは辟易としながら返す。

その横では、虎次郎があることを思い出す。

「そーいや恭弥、お前まだ幽霊とか視えんの?」

「視える?」

「虎…………」

飛鳥が首を傾げる傍ら、当の恭弥は眉間に皺を寄せる。

「え?桂木曹長ってそういう人?」

「ああ。スゲーんだよこいつ。ガキの頃からさ、どこそこに女の影を見たとか、人魂が流れてったとか——」

「虎！ナイトウォーカーさんも食いつかないで！」

興味を示すフィルシアに中学時代までを振り返って嬉々として語る虎次郎。そんな2人を恭弥が怒鳴る横で、サクラは呆れた顔を浮かべる。

「幽霊ってそんな……非科学的な……バカバカしい」

こうして若干の騒がしさを交えながら、少年少女たちの夜は更けていく。

一方、ヴェーガス艦内のとある部屋では。

「……………」

すっかり時間の感覚を失ったユウが、手錠で繋がれたままの手にプラスチック製のフォークを持って、刺した

物をどうにか口に運ぶという難儀な食事が黙々と行われていた。

食事を運んできた人はトレイを置くやすぐにドアを閉めてしまったので、拘束されてからずっと着けられたままの手錠が外されることはなく、テールやその代わりになる物がないことも合わさって、非常に食べ難い食事だ。

「……食事の時くらい外してくれればいいものを」

誰に言うでもなく愚痴を溢すと、ユウは先ほどから艦内が静かになっっていることに気づく。

（……さっきの用は終わったのか？……そもそも、何がどうなってるっていうんだ!? 何でオレがこんな目に遭わなきゃいけないんだよっ……………!）

状況がわからないことからくる不安、不遇な現状に対する不満、それらが着実に胸の内に堆積し、しかしぶつけようのない怒りにユウはただ悶々とするのだった。

## 15 鉄の拳の来訪者

耳元に響くアラームに顔をしかめたのも一瞬、ライカは音源たる携帯端末に手を伸ばし、交代時間である12時より少し早めに設定した目覚ましを切ると、目を開けて上体を起こす。

「おはよう。よく眠れたかしら？」

「少佐……何ですか？」それ〃は……」

目覚めてすぐに声をかけてきた向かい側の座席に座るメイシールに顔を向けたライカは、その光景に東の間啞然とする。

出発前に苦労して運んでいた大きな鞆、その口が開き、中に所狭しと押し込まれた大量かつ多種多様な菓子袋が顔を覗かせているのだ。すでにキャビンの床には空になったチョコレート菓子とポテトチップの袋が落ちており、こうしている今も座席に置いた飴玉の袋に手を伸ばしている。

「え？……ああ、私の私物だけど」

一瞬何を訊かれたわからなかったらしいメイシールは、ライカの視線を追って飴玉袋に目を止めると、そこから取った飴を1つ口に放り込みながらなんてことのない様子で応じる。

「……あんな苦しそうな顔をしてまで運んでいたものが、まさかのそんな物ですか」

『『そんな物』とは失礼ね。食料は貴重でしょ？それにシユルフツェンの整備に必要な機材だってあるんだし』

あからさまに呆れ顔を浮かべるライカに平然と返すと、メイシールは鞆のチャックをさらに開けて中を示す。確かに小型の検査機器や道具箱も入っているが、それでも9割方は菓子袋に占拠されている。

「……荷物は必要最小限に抑える。長距離移動の基本ですが？」

「最小限よ。余裕があればポテチをもう2、3袋持って行きたかったけど……その所為かしらね。解析の進みが悪いわ……」

ああ言えばこう言うを繰り返しながらも、最後の方は本当に行き詰っている様子で呟くと、メイシールは会話の間も操作を続けていた膝の上のノート型端末から顔を上げて、小さく溜息を吐く。

「……」

会ってから今まで、ほとんど余裕綽々な表情しか見せなかったメイシールの弱々しいところを目撃したことに若干感慨を覚えながら、彼女にそんな顔をさせるものに軽い好奇心を刺激されたライカは、靴を履き直して端末を覗く。

「これは……」

おそらくレイディバードの記録映像からコピーしたものでろう、昼間交戦した赤い特機、それが両手に大斧を持って滞空している静止画像に、小さく声を漏らす。

「50メートルを超えるサイズや、高火力・大質量を活かした武装から見て、特機に分類されることはまず間違いないわね……問題はこれよ……」

疲れを含んだ声で言いながら、メイシールは画像下のアイコンで映像を早送りさせ、特機が腹部から高出力ビーム砲を撃ったところで再生する。直後に赤く光るニコイチが飛び蹴りを放ってくるが、それが当たる一瞬前、特機は赤、白、黄色の3つの航空機に分離して戦線を離脱、本レイディバードの上を行き過ぎたところで映像は終わる。

「……分離機能、ですか」

「そ。技術的には興味深い機能だけど、いったいどういうメカニズムで可能にしているのかいまいわからないのよね……端末の解析機能の限界もあるのだろうけど……」

「はあ……」

生返事を返したのも束の間、ライカは気を取り直して見張りの交代へ向かう準備をする。

（考えてみれば、私は機動兵器を“使う”ことが専門であって、作ったり調べたりするのはそれこそメイシール少佐の様な技術者の領分ですからね……）「では、私は見張りの交代に向かいます」

「そう。シユルフツェンのコンディションは上々よ。頑張っつてね」  
「……」

メイシールの返した「シユルフツェン」という単語に『CeAFoS』の件が脳裏を過るが、それ以上何か言ってくる様子もないので、手

に鞆から出した栄養ドリンクの瓶数本を持って黙って格納庫へ向かう。

(下手に『CeAFoS』の話題を出そうものなら、こちらから尻尾を見せる様なものですからね)

思いつつ、制服からパイロットスーツに着替え、昇降機でシユルフツエンのкокピットに上がると、丁度ニコイチが開け放たれた後部ハッチから歩いて入ってくる。

кокピット・ハッチに足を掛けていたライカに気づくと、正面で立ち止まったニコイチの胸上部が開き、光秋を乗せた座席がせり上がってくる。

「大尉、お疲れさまです……今更かもしれないませんが、お疲れのところを先に引き受けていただき申し訳ありません」

「別に、ほとんど突っ立てただけですから。その分ミヤシロさんともう全開ってことでいいんですか?」

「はい。帰還までの残り時間、責任を持って監視を務めさせていただきます」

「それなら安泰だ。それに、僕は好きなものは後に取っておくタイプだね。これ以後はミヤシロさんに引き継いでもらえれば、朝まで思いつきり寝られるつてもので……あ、ドリンクごちそうさま」

言いながら空の小瓶を示すと、光秋はニコイチを奥側に歩かせてシユルフツエンに道を開ける。

それを見ながらライカはシートに体を預け、ハッチを閉じて機体を起動させると、シユルフツエンの状態を確認する。

(……少佐の言う通り、確かに上々ですね。加藤大尉の負担をこれ以上増やさない為にも、ここからは私が目を光らせなければ)

小さな決意を抱くと、ライカは壁に掛かっているM90アサルトマシンガンを右手に持たせ、腰に予備弾倉を積んだシユルフツエンを1歩前進させる。

直後、

『!?!』

基地中に響いた警報に、ライカと、モニター越しの光秋は身を硬く

する。

『南1キロ先上空に時空崩壊確認！中から何ものかが落下した模様。守備隊は警戒を厳となせ！』

警報のサイレンにも負けないアナウンスが響き渡ると、光秋はニコイチ機内に座席を收容し、直後にシユルフツエンのモニターに通信映像が映し出される。

『シユルフツエンの状態は？』

「？……良好です」

通信が繋がるや早口に訊いてきた光秋に、ライカは一瞬狼狽えながら応じる。

『なら、時空崩壊の調査に付き合ってください。委員会には僕の方から言っておくんで』

「調査ならそれこそ委員会に任せるべきです。ここは彼らの領域なのですから。大尉だって昼間からの疲労が——」

『その昼間みたいなことを繰り返したくないんですよ』

突然の指示に反論するライカ。それを遮る様に、光秋は怒鳴ったわけではない、しかし強い意思を含んだ声を上げる。

『あの基地で僕等が来る前にどういうことがあったかは知らないし、自分の力の及ばない所であった出来事なんて背負えないと言ったのも本当です。でも、今僕たちはここに——力を及ばせられる所にいるんです。そんな状況で昼間の二の舞なんてことになったら、煮え切らないでしょ』

最後の方はどこか自虐的に微笑みながら言うや、光秋はライカの返事を待たずに格納庫を出る。

(……………命令では仕方ありませんね)

光秋の体調に一抹の不安を覚えたものの、そう思うことで無理やり割り切ると、ライカは念には念をとバズーカとその予備弾倉も懸架し、ニコイチの後を追って格納庫を出る。

すでに基地司令部との話し合いは済んだらしく、南側に移動したニコイチがこちらを待っていてくれる。

『調査は僕等に一任させてくれるそうです。ただし基地側から1人



手を寄こすと』

「……実質こちらに丸投げですが」

光秋の報告に、ライカはやんわりと皮肉を漏らす。

その間にも、2機の許に赤い四脚の機体——デストロイアが近づいてくる。

『調査同行を指示されたマイケル・ジョンソン、見ての通りの傭兵だ。以後、調査終了までは貴官等の指揮下に入る』

『連邦軍伊豆基地所属、非特隊主任の加藤光秋大尉です。よろしくお願いたします』

「同じくライカ・ミヤシロ中尉です」

光秋に続いて返しつつ、ライカは通信映像に映る屈強な、しかし多少の衰えが見え始めた初老ほどの男——デストロイアのパイロット、マイケルの顔を見やる。

『では早速、時空崩壊が起きた辺りに行ってみましょう。僕が先頭を務めます。ミヤシロ中尉がその後ろから、ジョンソンさんは僕等から500メートルほど離れてついてきてください。もしもの時は火力支援を』

『了解だ』

マイケルの応答を聞くと、仕事モードに入った光秋はさらに続ける。

『何が出現してきたかにもよりますが、相手が未知のものであった場合、こちらからの攻撃、というより、相手を刺激する行動は、向こうが仕掛けてくるまで禁止します。可能な限り穏便に済ませることを大前提に、しかし気は抜かない、いいですね』

「了解」

『なんとも矛盾した命令だな。大陸の常識ではまず通じないが』

『どうも……では、行きます』

ライカの返事と、マイケルの返事代わりの感想——あるいは皮肉——を聞くと、光秋はニコイチを飛び立たせ、その後ろをライカのシールドフツェンがテスラ・ドライブを作動させてついていく。少し遅れてマイケルが乗るデストロイアが地上を歩き出し、3機は時空崩壊が起

こつた辺りへ向かう。

光秋たちが基地を出る少し前。

「……………」

混濁の中、耳を貫く様に響いた警報音に意識を持ち直すと、ウォルター・コバックは反射的にフットペダルを踏み込んだ。

それに連動して作動したバックパックの噴射機構、その独特の振動を背中に感じ、ややあつて意識が回復した時から感じていた落ちる感覚が消え、代わりに地面の上に降り立った感覚を覚えると、ウォルターは慌ててを首を廻らせる。

「……は？……っ!!」

直後に思い出した様に襲ってきた頭痛を目を固く閉じてやり過ぐすと、ウォルターは今一度自分が置かれている状況を確認する。

自分は今膝掛け周りにレバーやスイッチを備えた椅子に座り、正面と左右、真上にはモニターが設けられている。その見慣れた光景は、もう何年も乗り込んでいる愛機、モビルスーツ・ザクIのコクピットだ。

そのモニター越しに見える外の景色は、何処までも続く殺風景な荒野の夜景であり、1キロほど前方に微かだが明かりが灯っている。

「アイアンフィスト……？…否違う。あれは基地だ。まさか、連邦軍？」  
現在の故郷の名前を呟いたのも一瞬、月明かりも満足に届かない心許ない視界の中で確認できた物々しい影に、知らぬ間に体を強張らせる。

そこに追い打ちをかける様に接近警報が鳴り響き、ウォルターは前方上空に目を凝らす。

「……………何だ？…アレは……………」

視線の先には、見たことのないモビルスーツ——の様な物が2機飛んでいた。

時空崩壊の地点まで慎重に前進し、300メートルまで詰めた頃、シウルフツエンのモニターに望遠映像が表示され、そこに映し出された物にライカは目を凝らす。

(何でしょうか、コレは？……一つ目の……PT?)

判断に迷うものの、ライカの知る限り映っている物に一番近い物はそれと、やや緩い判断をするならAMくらいだ。

全長は20メートルに届くか届かないか、橙色を基調とした曲線主体のパーツを人型に組み上げ、頭部にはこちらを見据える一つ目が輝いている。右手に円盤型弾倉を備えたマシンガンを持ち、腰に大型の戦斧を提げ、両脚に3連装ミサイル・ポッドを1基ずつ装備した様は、まごう事無き人型機動兵器だ。

さらに目を凝らせば、その周囲には予備と思しき円盤型弾倉がいくつか落ちていた。

『……あの一つ目のロボット、どこかで見たような……?』

「見覚えがあるんですか?」

前を飛ぶ光秋の呟きに、ライカは訊き返す。場合によっては、この後の行動を左右する貴重な情報だ。

『ええ……いや、やっぱり違うか?……それを言ったら昼間の特機も……いや、僕が知ってるのとやっぱり違うような……』

「……歯切れ悪いですね」

しかし返ってきたはつきりしない光秋の返答に、ライカは少しだけ眉を寄せて煮え切らなさを覚える。

『……まあ、僕のことはいいんだ。それよりミヤシロ中尉、あの機体への呼びかけをお願いします』

「私ですか?」

『こういうのは女の人の方が相手を刺激しないって聞いたことがあって。一つ頼みます』

「……このメンバーでは、確かに適任でしょうね。強いて知り合いで言えばカワシマ分隊長が最適任かと思いますが……了解です」

言外に「自分には向かない役割」ということを表しながらも、ライカは状況からやむなく引き受ける。

(……駆け引きとか、投降勧告くらいなら何度かやったことはありますが、まさかこんなデリケートなコンタクト役が回ってこようとは……)

相手の隙を窺う言葉の応酬や、返答がYesかNoしかない連絡な  
ら戦時中もたまにやった。それもたまにであって、基本は戦場を機動  
兵器を足にして駆けずり回り、敵を撃ち落としていた。そんな自分  
に、状況上やむを得ないとはいえこんな役が回ってきた現状に、ライ  
カは小さく自嘲を漏らす。

その間にもニコイチとシユルフツエンはさらに接近し、一つ目から  
100メートルほどの所で着陸すると、ライカは拡声器越しに、自分  
なりに「相手を落ち着かせる声」を意識して上げる。

「そのパーソナルトルーパー、聞こえますか？こちらは地球連邦軍  
伊豆基地所属、非常事態特殊対策部隊のライカ・ミヤシロ中尉です。  
そちらの所属と官姓名を教えてください」

(地球……連邦軍だ?!)

目の前に降り立ったモビルスーツの様な物2機、その内の1機から  
女の声で発せられた単語に、ウォルターは右の操縦桿に指を伸ばし、  
自身のザクIが右手に持つモビルスーツサイズの銃——ザク・マシン  
ガンを即時射撃態勢に移そうとする。

地球連邦軍。かつての母国が対立した国家の軍隊にして、未だに自  
分たちの暮らしを脅かす集団。つい先日も地方の部隊とひと悶着  
あつた身には“敵”以外の認識はなく、身に起こった出来事に混乱し  
ていた思考までもが戦闘時のそれに切り替わろうとする。

しかし、

(……否、待て。奴らは今何と言った？……パーソナルトルーパー  
……?)

直後に浮かんできた聞き覚えのない単語に、射撃態勢への移行操作  
をしようとしていた指を止め、一度深呼吸して早くなっている動悸を  
抑えると、改めて目の前の2機を観察してみる。

向かって左に佇む白い一本角の機体は、よく見れば一般的なモビルスーツの背丈の半分ほどしかなく、曲線を主体とした細身の体型をしている。

「……」

もつとも、こちらを見据える2つの目、人の顔を模した様な頭部にはどこか複雑な思い出を刺激するものがあり、それから目を逸らすことも兼ねてウォルターは右の機体に視線を移す。

こちらはモビルスーツの平均身長たる20メートルほどの背丈を誇り、曲線を多用した全体的に太い体型を灰色に染めている。丸みを帯びた頭部に備わるバイザー型の目は、ウォルターの記憶では連邦軍が主力とするジム系を連想させるが、ソレと目の前の機体の共通点といえどそれくらいしかなく、全体的な印象はザクをはじめとするジオン系に近いかもしれない。

(どちらも見たことの無い機種だ。新型……?そもそも、奴等の言う『パーソナルトルーパー』とは……?)

もう一度両機を観察すると、その目はいずれもこちらに向けられている。

(やはり、『パーソナルトルーパー』とは俺に——俺のザクに向けられた言葉か。しかし、何で『モビルスーツ』と言わないんだ?……それに今思い出したが……こいつら、飛んできたな)

ウォルターの知る限り、モビルスーツが先ほどの2機のように自由に空を飛べるなどという話は無い。一部そうした機能を持つ機種も聞いたことはあるが、それらはいずれも特殊な形態をしており、少なくとも目の前の2機のように人型のまま飛行するわけではない。

(……唯一、人型のままでも自由に飛行できる機体を知ってはいるが……“アレ”は例外中の例外だ。あんな物がひよいひよいあるわけが無い。そもそも白い方はともかく、灰色はこのザクと同じ、あくまでも『機械』といった感じだし……未知の機種、未知の技術……こいつら、俺の知る連邦軍なのか?)

自身の中から浮かんできた突飛な——さらにいえば非現実的な発想に、抱いたウォルター本人が自嘲しそうになる。

もつとも、その笑みが結果的に硬直していた精神をほどよくほぐしてくれる。

(まあ、非現実的なものには一度お目にかかっているからな。『異世界トリップ』なんてB級……否、C級漫画もいいところの事態に巻き込まれても、今更か……そもそも、俺が知る連邦軍はこれだけ長いこと無言を通していたら、今頃攻撃してくるしな)

さらに可笑しくなりながら、今度は周囲を見回してみる。

(見たところ、どっちを向いても荒地だけ。人が住めるような環境は、今のところ正面基地以外無しか。あつたとしても、ザクで歩いて行けるかどうか……上手く目の前の2機を撃破するなり撒くなりしたとしても、殺風景の中を彷徨って野垂れ死ぬ可能性の方が高い、か……) 荒地を一から開拓して今の暮らしを手に入れた身としては、それは骨身に染みる恐怖だった。

(ここが何処だろうと、少なくとも『ここで果てる』という選択肢は無い。ここがアイアンフィストでない以上、俺は何が何でもあそこに帰らなければならぬんだ。その為の選択、多少のリスクを冒してでも取るべき道は……)

静かな決意と共に形になりつつある意思を自覚しつつ、ウォルターは改めて2機を見据える。

その時、

『あのー、聞こえていますか?そこの一つ目の方……』

その内の1機から、やや遠慮がちな男の声がかけられる。

(さつきとは違う奴か……まあいい。あちらさんもお待ちかねのようだしな!)

そう思っただけで意思を固めるや、ウォルターはザクの拡声器を作動させてよく通る声を上げる。

「ああ、聞こえている。俺はウォルター・コバック、アイアンフィストの用心棒だ」

『こちらからも確認するが、『パーソナルトルーパー』とは何だ?ザク

「……モビルスーツのことか？」

若干威圧的な、それでいて落ち着いた印象を抱かせるバリトンボイスの返答に、ライカは首を傾げる。

『ザク』?……『モビルスーツ』?……パーソナルトルーパーを知らない?」

『……これは、いよいよですかね?』

未知の単語の羅列に思わず声を漏らしたライカ。それに答える様に呟く光秋に、ライカはその言わんとすることを察する。

その間にも、光秋は後方に待機しているマイケルに通信を送る。

『ジョンソンさん、聞こえてましたか?』

『ああ。ザックだの、モビルなんたらだのな』

『確認しますが、『アイアンフィスト』という言葉に聞き覚えは?』

『……大陸じゃ聞かん。そんな名前の勢力も、あんなPTモドキを使う傭兵も』

『そうですか……これは確定かな?』

その確信じみた語調に、ライカも通信映像越しに首肯で応える。

『その様ですね……どうします?』

『可能な限り穏便に済ませるという大前提に変更はありません。少なくとも向こうはこちらの呼びかけに応じてくれたわけだから、話し合いの余地はあるかと』

『しかし、そうやって油断させている可能性も』

『確かに。でもそこまでするメリットが無い。右も左もわからない所に来て最初に出会った我々を攻撃したところで、向こうが得るのは敵意と、機体の消耗くらい。だいたい、攻撃が目的ならこうしている間に仕掛けてますよ。さらなる接触を図ってみる価値はあるかと』

『……大尉は、異世界人に優しいんですね』

『そうですか?……まあいい。ミヤシロ中尉、周囲警戒を厳に』

カノンとリグル、さらに言えばユイへの対応を思い出しつつ、ライカは率直な感想を漏らす。が、聞き手たる光秋はそれを受け流し、ニコイチの胸部を開けて座席に座った姿を現す。

「!大尉、何を!」

基地外で生身をさらすのは流石に予想外だった為に、ライカは柄にもなく動揺を浮かべる。

しかし当の光秋はそれを風と聞き流し、ニコイチの拡声器を介してウォルターと名乗る一つ目への呼びかけを再開する。

『モビルスーツ』とやらは、こちらは聞いたことがありますね。ただ、貴方が置かれた状況、それに関する情報を提供する用意がこちらにはあります。一度直にお話ししたいので、そこから降りていただけますか？ハッチから顔を出すだけでも構いません』

『モビルスーツを聞いたことがないだど？……』

意外な、しかし僅かに予想していた答えを聞いた様な声が応じると、ウォルターはしばし無言を返す。

(それはそうでしょう。状況もわからない中、目の前に武器を持った者がいる前で生身をさらすなんて……大尉は何を考えているんです？)

沈黙の理由を現状への思案と察しつつ、ライカは若干怒りを含んだ目で光秋を睨む。

(大尉に何かあったらみんなが困ると、あれほど言ったじゃないですか……事が済んだら一言言ってやらないと)

小さく決意するや、命令通り各種センサーに向ける目に一層力を入れる。

その時、一つ目の胸部が上下に開き、望遠映像越しにもくたびれたことが一目瞭然の緑色の上着を羽織った精悍な顔をした男が身を乗り出してくる。

(……向こうも大したものですね)

自分の上官と同じくらい度胸のある、あるいは命知らずともとれるウォルターの対応に、ライカは内心舌を巻く。

と、ウォルターが拡声器越しに再び声をかけてくる。

『言われた通り出てきてやったぞ。ところで、貴様の名前は？』

『これは失礼。連邦軍伊豆基地所属、非常事態特殊対策部隊主任・加藤光秋大尉と言います』



「……連邦軍、な」（これはいよいよもって、俺の年甲斐もない空想が現実味を帯びてきたな……）」

多少の迷いの末、結局は正面のメガネ——本人曰く「コーシユー」の要求に従ったウォルターは、その結果直に目にする事になった相手の姿に、異世界トリップの信憑性が高まったと感じて自嘲を漏らす。

同じように外気に身をさらしたコーシユーの服装は、約100メートルの隔たりと心許ない明るさの中でもよく映える白を基調とした制服だ。ウォルターの記憶にある連邦軍の制服がベージュ基調だったのに比べると明るい印象を抱き、遠くではつきりとはわからないが細部のデザインも大分異なるようだ。

「それで？俺にいったい何を教えてくれるんだ？」

『結論から言うと、貴方は貴方が元いた世界から、別の世界に迷い込んでしまったんです』

「……やっぱりそうか」

拡声器越しに返ってきたコーシユーの返答に、ウォルターはこの非現実的な現実をいよいよ受け入れることになる。

『……随分と呑み込みが速いですね。こちらとしては助かりますが』

「さつきからそんな気はしていた。『連邦軍』を名乗る貴様らと、俺が知る連邦軍はあまりに違い過ぎる。それをまじまじと見せられれば、そんな荒唐無稽な結論も呑み込みまうさ。付け加えるなら、荒唐無稽なものはずで一度目にしたしな……まあ、それはいいんだ」

思わず逸れそうになった話を元に戻すと、ウォルターは今一番の懸案事項を問う。

「それで、別世界に迷い込んだ俺はどうなるんだ？帰り方を知ってるなら教えて欲しいんだが」

『申し訳ありませんが、我々も行き来の仕方まではわからないんです。ただ一つ訊きたいのですが、この世界に来る前、赤い大きな穴に呑み込まれませんでしたか？』

「……確かに。そんな気がする」

言われてウォルターは、空に空いた血の池の様なものに吸い込まれ

た光景を記憶の底から引き出す。しかし、先ほどよりはいくらか楽になったものの、未だ頭に巢食う鈍痛の所為で細かいことは思い出せない。

『我々はそれを『時空崩壊』と呼んでいまして、こちらにとっても未知の部分が多い現象なんです』

「……ということは、俺は元の世界に帰ることができず、こんな寂しい土地で野垂れ死にか？」

『いいえ。すでに貴方のような異世界からの迷い人を何人が受け入れていきます。貴方にさえその気があれば、我々についてきていただきたいたのですが』

「……すでに“仲間”がいるってことか……まさかな」

「仲間」というのがアイアンフィストで共に過ごした本当の仲間ではないかと一瞬思ったものの、すぐに頭を振ってそれを否定する。

(とりあえず、向こうは受け入れてくれるようだな。お高くボツタくられる可能性は高いが、このまま野垂れ死んで確実に故郷に帰れなくなるよりはマシか……身ぐるみ剥がしたいなら、とつくにやつてるだろうしな)

最後の方は笑みを浮かべながら断じると、ウォルターは拡声器越しに応じる。

「わかった。貴様らについていく。何処に行けばいい？」

『ありがとうございます……と、その前に落ちてる弾倉拾っておきましよう。ミヤシロ中尉も手伝って』

『……了解』

安堵の息を漏らしながら礼を言うと、コーシユーは周囲に散乱しているザク・マシンガンの弾倉を見回し、その指示に横の灰色の機体——確か「ライカ」と名乗っていた——が事務的な声で応じるや、ウォルターもハッチを閉めてシートに座り直す。

(まったく、訳のわからん状況に放り込まれて早々、とんでもない連中に会ったもんだ)

今の自分に自嘲とも諦観ともつかない笑みを浮かべながら、ウォルターは黙々とザクに弾倉を拾わせる。

落ちている弾倉を一通り拾い終えるや、一行は委員会の基地へ向かう。

飛行機能のないウォルターの機体に合わせる為に、ニコイチとシユルフツェンも両手一杯に弾倉を抱えて徒歩で移動する中、ライカはプライベートに設定した通信を光秋へ繋ぐ。

「加藤大尉、少しお話が」

『なんですか？わざわざ個人回線まで使って』

首を傾げる光秋に構わず、ライカは先ほど抱いた決意を実行すべく、映像越しに鋭い視線を向ける。

「先ほどのあれは何ですか？敵かどうかもはっきりしない者の前で身をさらして」

怒鳴っているわけではない、しかし明らかな怒りが籠った声で言うや、今度は打って変わって静かな声で、さながら子供に言い聞かせる様に続ける。

「昼間も言いましたが、実質的な指揮官である大尉に何かあれば、非特隊のみんなが困ることになるんです。その意味では、今の非特隊の大尉だけのものではないんです。差し出がましいようですが、くれぐれも無謀なことはしないでください」

『ああ……心配かけちゃいましたか。すみません』

ひとしきり言い終えたライカ、その際の僅かな表情の歪みを察してか、光秋は頭を掻いて一礼する。

『ただね、僕だつて今の自分の立場はわかってますよ。ミヤシロさんが言うように、僕に何かあれば隊全体の活動に支障が出る可能性がある。隊の性質や今の情勢を考えれば、それは極力避けなければならぬということもね。ただそれはそれとして、あの行動はそんなに無謀でもなかったと思いますよ。さっきも言ったように、あの一つ目の人……コバツクさんだったかな？とにかく、あの人を攻撃してこない自信がありましたから。ただ、思い返せば確かに説明不足でびっくりさせたかもしれませんね。重ねてすみません』

一応の弁明を返すや、光秋はもう一度頭を下げる。

「……コバック氏のことでもそうですが、ましてやここは大陸です。突然機動兵器の大部隊に襲われる可能性もあるのですよ？大尉の機体が規格外に頑丈なのは充分承知していますが、それもあんな状況で不意打ちを喰らえば何にもなりません……」

『ああ……それもね、一応考えはあつたんですよ。大陸の勢力は大きく4つ。内白虎帝国と委員会、フルハウス団の3つは連邦軍に迂闊に手出ししないだろうって。委員会とフルハウス団にとって、連邦は大事な顧客の1つなわけだから、その一部を攻撃して客の機嫌を損ねることは考えられない。帝国については大陸の他の勢力を征するのでいっぱいいっぱいだろうから、この上連邦なんて厄介な相手を敵に回すようなマネはしないってね……もちろん、僕の考えに見落としがあるかもしれないし、どの道革命者の反連邦グループはこっちの存在を知られば問答無用で襲ってくるんだろうから、確かに危ういところもあつたんでしようが……その辺は、ミヤシロさんを信じてましたから』

「……私を、ですか……？」

唐突に出た自分への信頼発言に、ライカは一瞬面喰ってしまふ。

『『周囲警戒を厳に』って』

「……！」

コクピットを開ける前に言われた一言に、ライカは光秋の言わんとすることを察する。実際、光秋とウォルターの会談中は、普段以上に念入りにセンサー類をチェックし、僅かな異変も即時発見できるように神経を研ぎ澄ませていたのだ。

『流石にね、僕もそれくらいフォローがなきゃあんな無茶しませんよ。ミヤシロさんがいてくれたからこそ、あんなふうにできたんです。その点についてはありがとうございます』

「……いいえ」

画面越しに、先ほどとは違った意図で頭を下げる光秋に、ライカはむず痒さを覚えながら短く応じる。

『……もつとも、心配かけたことに変わりないでしょうが……もう

この話はいいでしょ。それより……………今夜は眠れそうにないな  
……………」

半ば強引に話を切り上げると、光秋は後ろからついて来ているウォルター機を見やりながら真面目に深刻な顔をする。

それを眺めながら、ライカは先ほどの会話を思い出す。

(……………私がいるからこそ、あんなふうにできた……………形こそ強引で突然でしたが、大尉は私を信頼してくださいっているんですね。それについて悪い気はしません……………でもだからこそ、そんな大尉に必要な以上の危険を冒させる訳にはいかないのですよ)

最後はモニター越しにニコイチの背中に語りかけると、ライカは再度センサーを確認して、基地へとシユルフツエンを歩ませた。

## 16 The Bravery

凹凸の激しい地平線の彼方から、煌々と輝く太陽が昇ってくる。それまで黒一色だった世界が照らし出され、枯れた大地がどこまでも続く大陸の景色が顕わになる。

委員会基地建屋の1つから出てきた光秋、ライカ、ウォルターも等しくその輝きを浴びながら、新しい一日の始まりを生理的に意識する。

「……朝日が眩しいですね」

「ですねえ……結局、事情聴取に一晩かかってしまつて……」

降り注ぐ日光に目を細めるライカに応じつつ、光秋は重い瞼を半分ほど開けた目をただ正面の荒野へ向ける。

(……予想はしていましたが、やはり疲労に完徹は堪えましたか)

そんな上官の様子に、ライカは昨日からの危惧が現実味を帯びてきたことに軽い警戒を覚える。

「……“こちら側”でも、朝日の眩しさは変わらないな……」

誰に言うわけでもなく眩きながら、ウォルターは少しずつ昇つていく太陽を感慨の眼差しで見つめる。彼にとっては、初めてきちんと見るこの世界の景色だ。

「……『宇宙世紀』、ですか」

その様子を見やりながら、光秋は先ほどまで建屋内の部屋を1つ借りて行っていた情報整理、その過程でウォルターから聞いた単語を呟く。彼が元いた世界で使われている暦だ。

「……スペースコロニーによる人類の宇宙進出と、その過程での独立戦争、それによって生み出され、戦後の動乱を経て発展してきた“向こう側”の人型機動兵器・モビルスーツ、ですか……」

それに乗る形でライカもウォルターから聞いた彼の世界の歴史を掻い摘んで呟くと、不意に空を見上げ、ここからは見えないが、この空の彼方、この世界の宇宙空間にも確かに存在するスペースコロニーを幻視してみる。

宇宙世紀では数百を超える数が建造されていると聞くが、新西暦の

それは両手で数えるほどしかない。そもそもは三次大戦終結後、各地の戦後復興と平行して計画された宇宙開発推進、その一環として試験的に建造され、志願者による入植が行われたのだが、今では必要最低限の人や物の行き来があるだけで、昨今の動乱の中では半ば忘れられた存在となっている。

(新西暦の宇宙事情は今のところ落ち着いていますが、コロニーが増えればどうなるかわからないということですか……人類と地球を存続させる為に行ったことが、巡り巡って人類も地球も追い詰めるか……)

ウォルターの話を自分なりにまとめると、ライカは物事の皮肉を感じずにはいられない。

と、光秋の左耳の通信機に連絡が入る。

「はい？……了解。すぐに……出発の準備が整ったようです。行きましょう。コバツクさんもついてきてください」

「了解」

「世話になる」

ライカ、ウォルターがそれぞれ応じると、一行はレイディバードへ足を運ぶ。

その時、

『お前たち、もう帰るのか？』

拡声器越しの音が響き、声のした方に顔を向けた一行は、基地外縁部から格納庫へ向かう途中のデストロイアを見る。

「はい。昨日は……というより『先ほど』と言った方がいいのかな？日付変わってたし……とにかく、お世話になりました。ときに、ジョンソンさんは戻ってから何を？」

一行を代表して返事と、夜間に同行した際の礼を述べつつ、光秋は基地帰還以降別行動をとっていたマイケルのことを問うてみる。

『何って、監視任務の続行だ。一触即発の緊張感の後だったから、正直キツかったがな。委員会は人使いが荒くて……おっと、クライアントの文句は禁物だな』

疲労を含んだ声で半ば愚痴りながら応じると、マイケルはデストロ

イアの視線を格納庫へ向ける。

『ともあれ、ようやくシフト終了。ひと眠りできるつてもんだ……しかし、一晩徹夜したくらいでこれとは……俺も歳をとったもんだ』

どこか自虐的に呟くと、デストロイアはその四脚を歩ませて格納庫へ向かう。

その背中を見送りながら、光秋は感慨の声を漏らす。

「傭兵つてのも大変ですねえ。新西暦の世において最も自由な者たち、なんて言われてるけど……」

「自由である分、全てを自分で賄わなければなりませんからね。物資にしろ、仕事にしろ……」（少なくとも、私には務まる気がしませんね……）

夜に会った時から先ほどまでのマイケルの様子を思い出し、ライカは心の中に率直な感想を呟く。

「……何処の世界も世知辛いもんだなあ」

「……………」

寒いものを含んだウォルターのバリトンボイスに、一行の間に妙な雰囲気が漂う。

「……さーて、いい加減そろそろ行きましょう。日本のみんなも待つてるだろうし」

「ですね。そもそも、メイシール少佐を待たせると面倒そうですし」

「それもそっか……」

意識して快活な声を上げた光秋にライカも続き、あながち冗談ともいえない冗談を述べると、一行は改めてレイディバードへ向かう。

「とりあえず、乗ったら僕寝るんで。ミヤシロさんなんかあつたら起こしてください……」

「了解。ぐっゆっくり」

欠伸混じりに告げる光秋に、ライカが劳いの声で応じた。

同じ頃、ヴァルキリーズ極東支部に停泊しているヴェーガス艦内では。



「おはよー！桂木曹長！織斑曹長！」

「ああ、ナイトウオーカーさん。おはよう……」

「ルルさんもおはよう」

「……おはようございます」

着替えを済ませて宛がわれた部屋から出てきた恭弥と一夏は、朝から元気なフィルシア、対照的に物静かなサクラと挨拶を交わすと、そのまま一緒にカノンとリグル、ナガイのいる部屋へ向かう。

「カノちゃん！リグルさまー！朝だよー！」

フィルシアがドア越しに中の2人に呼びかける一方、恭弥と一夏はナガイの部屋の前へ移動し、恭弥がドアをノックする。

「ナガイさん、いますか？」

「……アア……」

呼びかけに欠伸混じりとも唸り声ともつかない声が応じ、少しして上着を脱いだナガイが、ドアの陰から眠気の残る目をした顔を出す。

「お前らか……やっぱり、昨日のことは夢じゃなかったってことか」

いよいよ観念した様に呟くと、ナガイは冴えた目を2人に向ける。

「で？朝っぱら何の用だ？」

「朝食へに行くから呼びに来たんですよ。食事は支部の方で摂るようについて昨日言われたでしょ」

「……そういや、そうだったかな？」

一夏の返答に昨日の記憶を辿ってみるが、短い間にいろいろあった所為か、細かい所が出てこない。

「まあいい。確かに飯は食わねえといけねえか。ちよつと待つてくれ」

言くとナガイは部屋へ戻り、服装を整えて出てくる。

丁度礼服に身を包んだカノンと、若干の装飾が施されたワンピースを着たリグルも部屋から出てくる。

「カノンちゃん、リグル様もおはようございます」

「恭弥、一夏……おはよー……」

恭弥の挨拶に、カノンは欠伸混じりに応じる。

「にしても、2人共昨日からその格好だよな？」

「しようがないじゃん。突然違う世界に迷い込んで、着替えなんて用意する暇なかったんだからさ……」

「……それもそうだ」

一夏の指摘に、カノンは途方に暮れた様に返す。

「落ち着いたら、他の服も買わないといけませんね」

「その時は私らが案内してあげるよ」

「ありがとう」

サクラの指摘とフィルシアの提案にカノンが礼を述べると、リグルが急かす目を一行へ向ける。

「とりあえず、今は食堂に案内していただけますか？その為に出てきたのですから」

「でした。行こう」

恭弥の号令に全員が頷くと、一行はヴェーガスの出入り口へ向かう。

「ところでカノちゃん、いつの間に桂木曹長や織斑曹長と名前呼び合う仲間になったの？」

「え？いやあ、昨日一夏が懲罰受けてるところに行ってきた、そこでお互い名前呼び合おうってことになって」

思い出した様に訊いてくるフィルシアに、カノンは昨日の鬼戦に出る前のことを思い出す。

「なんだったら、ナイトウォーカーさんたちも呼び捨てで構いませんよ？俺はその方がやりやすいし」

「僕も。もちろん作戦中は今まで通りの方がいいんだろうけど」

「じゃあ、私も名前がいいよ！サクラも」

「ちよっ！何勝手に決めてるのよ!？」

一夏と恭弥の提案をフィルシアは嬉々として受け入れ、勝手に巻き込まれたサクラは抗議の声を上げる。

「たーく、朝からうるせえなー……」

「いいじゃん。仲のいい相手が増えるの楽しいし」

前を行く4人に辟易と呟くナガイに、カノンは言葉通り楽しそうに返す。

それぞれ多少のぎくしゃくを交えながら親睦を深めつつ、一行はヴェーガスを降りて極東支部の食堂へ向かう。

「……非特隊の合流は近いか……鬼の方々への支援も、大した成果は残せなかったしな……」

神殿に設置された円卓、そこに独り座るグリムは、目の前に置いた水晶玉を眺めながら口元を手で撫でる。

水晶玉には委員会基地から飛び立つレイディバードが映り、それがニコイチと交戦するゲッター、市街地で鬼・ルミエイラと大立ち回りを演じるカイザーに変わると、椅子の背もたれに体を預け、遙か遠い天井へと視線を向ける。

（赤い巨人はどうか知らないが、髑髏の巨人は非特隊と合流したようだな……ただでさえ厄介な連中が多い中で、こんな猛者が加わったら………空恐ろしいね……）

改めて視線を水晶玉に戻し、非特隊やヴァルキリーズと協力して鬼やクロイツリッターを殲滅していくカイザーに、グリムは背筋を震わせる。

が、そんな反応や心中の声とは裏腹に、その顔にはあくまでも笑顔が浮かんでいる。それはまるで、難しくなっていくゲームをとことん楽しんでいような、そんな無邪気さを感じさせる。

（それに加えて、この瞬時に再生する奴と合体する奴、こちらも面倒だな………）

アトランティア・ルージュの再生と、モモタロウの合体する様子を舐めるように観ると、再び思案顔を浮かべる。

（さて、どう出るか………）

その時、グリムの思案を遮る様に神殿の扉が開き、金刺繍のマントに身を包んだアリアが入ってくる。

「……アリア？」

「お忙しいところ失礼いたします。グリム閣下」

神殿の中ほどまで進んで跪くや、アリアは頭（こうべ）を垂れる。

「いや、構わないよ。しかし突然どうしたのかな？わざわざこんな所に」

「閣下にお願いがあって参りました」

「お願い…………？」

硬い声音で応じるアリアに、グリムは興味の眼差しを向ける。

「近い内、それこそ今日明日にでも、私に非特隊殲滅の任を与えていた  
だきたいのです」

「また随分と急な申し出だねえ」

「承知しています。しかしこのアリア・アンダーソン、騎士として『敗者』の汚名を返上することを望んでいます。その為にも、奴等に一矢報いなければ…………」

「まだこの間のことを気にしているのかい？気にするなど言ったのに…………」（いや、待てよ？）

その生真面目さに辟易したのも束の間、グリムは指を組んで水晶玉を凝視する。

「…………そういうことならば、次の攻撃指揮は君に任せよう」

「…………ありがとうございます！」

顔を上げたグリムの言葉に、アリアは深く頭を下げる。平常心を装いながらも、声音には多分な喜色が混ざっている。

「ただし、出撃のタイミングは僕の指示に従ってもらおう。もつとも、そう長く待つこともないだろうからねえ。いつでも出られるように準備だけは万全にしておいてくれ」

「はっ！」

ひと際活力のある声で応じると、アリアは神殿を後にする。

扉が閉まり、アリアが出て行ったのを確認すると、グリムは水晶玉に手をかざし、腰まで届こうかという長い金髪で顔を隠した、グリムたちと同じ意趣の、しかしやや装飾を抑えた貫頭衣を着た少女を映し出す。

「シャーラ、いいかな？」

『…………はっ。グリム閣下』

応じつつ、「シャーラ」と呼ばれた少女は深々と頭を下げる。

「確か、アレが現れるのはそろそろだったよね？」

『はい。私の予知では、もうそろそろ』

「うん……………」

質問に淡々と答えるシャーラに応じると、グリムはしばしの思案の後に深く頷く。

（非特隊というのは、ああいうのも任務の内みたいだからね。こちらとしては好都合か……………では、アリアはその後に出てもらうとするかな……………）「ありがとう。もういいよ」

『はっ』

応じると、シャーラは水晶玉から消え、それを見たグリムは再び水晶玉に手をかざす。

「じゃあ今の内に、アリアに任せる兵隊たちの“調整”をしておこうかな」

笑顔を浮かべたその顔は、どこまでも楽しそうなものだった。

グリムのもとを去った後、アリアはある場所へ向かっていた。

1つのドアの前で止まると、そこを2回ノックする。

「……………どなた？」

「私だ。少しいいか？」

「……………どうぞ」

部屋の主の返事を聞くと、アリアはドアを開けて入室する。

八畳ほどの広さに簡素なベッドとテーブルが置かれた部屋、その中央の椅子に腰掛けているのは、先ほどまでグリムが話していた長い金髪で顔が隠れた少女——シャーラだ。

「突然ですまない。お前の方も忙しいのに」

「……………平気……………アリアならいつでも歓迎……………座って」

「ああ」

互いに挨拶を交わすや、アリアはシャーラの勧めに応じてベッドに腰を下ろす。その表情は普段より心なしか柔らかく、シャーラの方もグリムと話していた時に薄っすら浮かべていた緊張は無く、互いが互

いをリラックスさせているようだ。

しかしそんな和やかさも長くは続かず、表情を硬くしたアリアが口を開く。

「それでだ、お前に頼みが——」

「あら？2人で秘密のお話？」

「!?!」

アリアの言葉を遮る様に挟まれた声に、2人はハツとしながらドアを見やる。

そこにはシャーラよりも過度な装飾を施した貫頭衣姿の少女——  
リイムが、開いたドアから顔を覗かせている。

「リイム閣下!?!……何故ここに?」

「貴女がシャーラの部屋に入るのが見えてねえ。『なんだろう?』と思つて近づいたら、面白そうな気配がしてねえ……ねえ、私も混ぜてくれない?」

アリアの問いに答えつつ、リイムは言葉とは裏腹に有無を言わせない視線を向けてくる。

「……………」

その視線が持つ独特の威圧感と、何よりも立場の関係から拒否することはできず、アリアはやむなくその状態で話を進める。

ヴェーガスからしばらく歩いて食堂のある建屋に入り、そこからさらにしばらく歩いて食堂の入り口をくぐった一行は、各々に注文したトレイを受け取り、1つのテーブルにまとまって座る。

早朝とはいえ同じくここで朝食を摂っているヴァルキリーズのスタッフも大勢おり、賑やかな光景を作り出している。

「……………こうやって見るとさ、なんか女の人の比率多くない?というか、ほとんど女?」

食事をしつつ8割方席が埋まっている周囲を見回したカノンは、その男女比の偏りに気づく。

「確か、DC戦争の影響で男手が不足して、その結果男性3、女性7の

職員比率になったそうですよ」

「えー、なにそのハーレム……ここで働いてる3割の男ども羨ましいじゃん……」

サクラの説明に、カノンは赤裸々な感想を呟く。それこそ食堂にいるなけなしの男性スタッフたちに羨望の眼差しを向けながら。

と、それを見た一夏が若干表情を曇らせる。

「いやいや、性別の比率が偏ったとこにいるのもキツイもんだぞ？特に慣れない内はさ……」

「……ということは、一夏はそういうシチュエーションに遭遇したことがあると？」

何かを思い出す様に語る様子に興味を持ったフィルシアの問いに、

一夏は視線を明後日の方へ向ける。

「ん？……まあ……こっちに来る前に俺がいた所も、そんな感じだったし……いや、こっちの方がまだマシか？」

「？……」

歯切れの悪い返答にフィルシアはカノンを見やり、カノンもわからないという意味を込めて首を傾げる。

その時、

「あら、みんな来てたのね。おはよう」

「カワシマ隊長。おはようございます」

第四分隊全員を引き連れて声をかけてきたノゾミに、恭弥が非特隊を代表して返し、それに続く形で各々挨拶を交わす。

それが済むや第四分隊一行は非特隊のそばのテーブルに腰を下ろし、各自トレイの上の朝食に手をつける。

と、アカネが隣に座る恭弥と一夏に顔を向ける。

「そういえば、恭弥くんと一夏くん、昨日私たちとは別に帰ったけど、なんかあったの？」

「着替え取りに行ってたんですよ。ノヴァ大佐の指示で。いつまでも服借りてるわけにもいかないし」

言いながら、恭弥は自分か着ている連邦軍の制服を示す。

「そういうアカネさんこそ、あれから大丈夫でしたか？」

「現場でモモタロウに何か叫んでましたよね？」

「！」

そう返した恭弥と一夏としては、別れる少し前の様子を心配して訊いただけなのだが、その事情を深く知っているノゾミと、帰還後の光景から自分たちが思っている以上にデリケートな問題であることを察していたカノンに、束の間緊張が走る。

「……うん。大丈夫だよ。心配してくれてありがとう！」

「……」

「……それならいいです」

努めて気丈に振る舞おうとするアカネ。その心境を察してか、恭弥と一夏は一瞬視線を合わせ、「これ以上訊いてはいけない」と互いの意見を確認すると、代表して一夏が一言だけ応じ、この話はこれで終了となる。

「「……………」」

その以心伝心が他の者たちにも共有された所為か、一行のテーブルが奇妙な沈黙に包まれる。

(……………いかん。この空気、なんとかしないと……………)

機械的に箸を動かしつつ、恭弥はこの居心地の悪い沈黙を払う術はないかと思案する。

その時、

「おお。みんなもういんのか。おはようさん」

「……………おはようございます」

「虎！飛鳥君も」(よかった……………！)

各々トレイ持ちで現れた虎次郎と飛鳥に、恭弥は沈黙を払うきっかけが来たと内心ほつとす。

2人も一行の近くに腰を下ろし、食事を始めると、虎次郎は昨日の夕食では見かけなかった一夏に気づく。

「あれ？お前確か……………あのパワードスーツの奴か？」

「え？……………えつと……………」

「昨日、女の子抱えて俺に道訊いてきただろう？」



「……ああ！あの時の？」

突然知っている様子で話しかけられて困惑したものの、すぐに説明した虎次郎に、一夏は昨日初めて極東支部に来た際、現場で救助したユイを抱えて、たまたま目に入った整備員らしき人に病院への道を訊こうとしたことを思い出す。

「そういえば、一夏君にはまだ紹介してなかったな。城田虎次郎、僕の幼馴染で、極東支部で整備班主任をやってる」

恭弥の簡単な紹介に、虎次郎は一夏を見やる。

「虎次郎だ。周りからは『虎』って呼ばれてる」

「織斑一夏です。連邦軍非特隊でパイロットやっています」

自己紹介を交えつつ、一夏は虎次郎に会釈する。

「イチカか。面白い名前だな……で？昨日どうだったよ？」

「？……どうだった、と言いますと？」

唐突に笑みを浮かべて顔を近づけてくる虎次郎に、質問の意図がわからない一夏は首を傾げる。

「だから、あの抱えてた女の子のどこ行ってたんだらう？」

「……そういや一夏、昨日の夕飯それで抜けてたんだよね」

「会って早々危機一髪のところを救われ、その王子さまが夜に部屋を訪れた……ってことは！」

虎次郎に続く様に、カノンとフィルシアも好奇心とも期待ともつかない目を向けてくる。

「……………ああ！」

ややあつてその視線の意図を察した様子の一夏は、ぽんと手を打つてそれに答える。

「そういえば、ユイとも名前で呼び合う間になりましたね。いやあ、正直困ってたんですよ。過去から来たってことは、俺らよりずっと年上と見るべきなのか、それとも聴取で言ってた15歳として見るべきなのかって。俺としては、今の距離感が親しみやすく助かりますね！」

「……………え？」

昨日のやり取りを思い出しながら、一夏は親しい者が増えた喜びに

顔を綻ばせる。が、全く予想外の返答に、虎次郎、カノン、フィルシアは面食らう。

「……………え？お前……………それだけ？」

「はい……………？あ、そういえば、夜もまだ悩んでるような顔してたような……………これ食べたらまた様子見に行ってみようかな……………」

3人を代表して虎次郎が言葉に困りながらさらに問うものの、一夏は「まだなにか？」とでも言わんばかりに首を傾げ、食事を再開しながら一人今後の予定を立てていく。

「…………………………」

「だから昨日も言っただろう？一夏君はそういうタイプじゃないんだよ」

その様子を見て呆然としている3人に、恭弥は昨日の茶化しに対する反省を覚えながら言い切ってみせる。

それに対して、カノンとフィルシアはやれやれと言いたげに肩をすくめ、虎次郎は一夏の肩に手を置くと、

「お前、女で苦勞するよ……………」

と、同情の声でそつと告げる。

「は……………はあ……………？」

(（貴方にだけは言われたくないと思う……………))

それに一夏は困惑しながら生返事を寄こし、一連のやり取りを聞いていた第四分隊の5人は虎次郎と第三分隊長アリスとの関係进行い出し、各自に自覚はないものの、一瞬心が一つになる。

「……………えつと……………それで君は？」

直後に場が再び妙な雰囲気にも包まれそうになるのを察したのか、虎次郎の横に座る飛鳥に気づいた一夏は、それを防ぐことも兼ねて声をかける。

「え？あ……………新田飛鳥です……………」

それまで蚊帳の外で黙々と朝食を摂っていた飛鳥は、急に話を振られたことに一瞬狼狽えるものの、すぐに手短な自己紹介を返す。

「アスカ……………カツコイイ名前だな！」

「……………どうも」

一夏の直感的な感想に短く応じると、飛鳥は食事を再開する。それに乗る形で、昨日の会話を思い出したカノンが話に加わってくる。

「そういや、一夏は昨日いなかったから知らないだろうけど、この飛鳥って子凄いなだよ！」

「なにが凄いな？」

「……」

若干興奮気味のカノンに、一夏は食事を続けながら問い、自分を話題にされた飛鳥は照れた顔を俯ける

「なんと！あのモモタロウを整備できるんだよ！そうだよ、虎？」

「おお。俺も昨日見たぞ。知らない型の端末片手に、こうパパーッとさ」

「へー！そりや確かに凄いなあ！」

「……だから、じいちゃんの手伝い程度で……」

虎次郎の補足も聞いて感心の目を向ける一夏。その視線にさらに照れながら、飛鳥はぼそぼそと付け加える。

直後、

「!?」

そんな声を掻き消す様なサイレンが食堂中——否、支部全体に響き渡り、一行はその後のアナウンスに耳を澄ませる。

『三浦半島南部にゴースト出現！各職員は警戒を厳に。救護班は出動準備の上待機を——』

続く放送を遮る様に、非特隊隊員各自が所有する端末が振動し、エリックの音が響く。

『各自、放送は聴いたな。非特隊はゴースト迎撃に出撃する。各々準備にかかれ！』

「了解！」

恭弥、一夏、フィルシア、サクラが同時に応じると、それぞれ席を立てて食堂の出口へ駆けていく。

「私も！」

「!?カノン……?」

「リグルはここで待っていて！」

それを追う様にカノンも席を立ち、不安がるリグルにそう告げるや  
恭弥たちの後を追う。

「よっしやー！あたしらも——」

「私たちの相手はあくまでも鬼。ゴースト迎撃は管轄外」

「……そうだった……チクシヨー！あいつらには助けてもらってるの  
に、あついらには何もしてやれねえのかよ……」

こちらも勢いよく立ち上がったアキラが、しかしミオの正論の前に  
悔しそうな顔を浮かべる。

一方その傍らでは、ノゾミがアゴに手を当てて何かを考えている。

「……アキラ、私と一緒に来て」

「え？……隊長——」

「いいから！」

「！……了解……」

「アカネたちはいつでも出られるように待機して。救助活動で出勤す  
るかもしれないから」

「了解！」

矢継ぎ早に指示を飛ばすや、ノゾミは未だ事態を呑み込めないアキ  
ラを伴って恭弥たちを追う。

後に残されたのは、早朝の非常事態にやや動揺を浮かべた飛鳥と、  
それを落ち着ける様に目配せする虎次郎、不安を一杯に浮かべた顔で  
食堂の出口を眺め続けるリグル、隊長命令に従って待機の準備に向か  
おうとするミオ、サヨコ、アカネら第四分隊の面々、そして、

「……貴方は行かないんですか？」

「……」

一連の騒ぎに動じることなく、飛鳥に声をかけられても淡々と食事を  
続けるナガイだけだ。

「連邦軍のみなさんは行ったんですよ？カノンって人も……あの人は  
連邦軍ですらないみたいなのに。ヴァルキリーズの人たちだって、自  
分たちにできることをしようとしてる！……なのに貴方は——」

「だから何だ？」

言葉を重ねるごとに熱を帯びてくる飛鳥の訴えを、しかしナガイはたった一言で一蹴する。

「あいつらが行ったのは、それが仕事だからだろう？昨日から聞いてる限りじゃ、今が正に働き時みてえだしな。カノンって奴についてはよく知らねえが、『困ってる奴は放っておけない』って、そんなご立派な奴なんだろうよ。あいにく俺は軍隊に入った覚えもなければ、この世界の見ず知らずの連中の為に戦う理由も無<sup>ね</sup>え。俺が戦うのは、あくまでも俺が戦いたいと思った時だけだ。ボランティア精神なんてこれっぽっちも無い。その辺間違えるな」

「……貴方はあ!!」

「!?……おい！飛鳥！」

ナガイのどこまでも淡泊な返答に、それまで頼りない表情だった飛鳥の顔が怒りに歪む。

ナガイの詳しい事情は知らないが、昨日からの会話で彼も大きな“力”を持っていることは大よそ察していた。そんな者が、多くの人々が危機に晒されている時に動かないというのは飛鳥の容認できることではなく、虎次郎の制止も間に合わずに腰を上げ、気づいた時にはナガイの顔目がけて右拳が走っていた。

が、

「クッ……」

顔面の手前で受け止められた拳はそれ以上進まず、飛鳥は悔しさに歯を食い縛る。

飛鳥も14歳にしては多分に鍛えているものの、喧嘩慣れしたナガイに激情任せの攻撃は通じないということか。

と、一連のやり取りを見ていたミオが、

「貴方の言い分は、一面では正しい。有事の際に行動する義務もなければ、見ず知らずの人の為に危険に飛び込む責任もない……でもそれなら、何故そうも落ち着かないの？」

と、テーブルの下で揺れるナガイの足を指さす。

「！」

「その貧乏ゆすり、非特隊の人たちが出て行った辺りからしてるけど

「煩つせえなっ！騒がしくてイライラしてただけだ！」

さらに指摘しようとしてくるミオに怒鳴り返すと、ナガイはトレイを持って席を立つ。

「ちよつと！何処行くのよ？」

「食い終わったから出ていくだけだ。心配しなくても、テメエらには協力しねえが邪魔もしねえよ。適当な場所で時間潰してる」

サヨコにそう言い切るや、ナガイはトレイを返却して食堂を出ていく。

「……まったく、捻くれ者」

小さくなつていく背中にサヨコがそう投げかける横で、アカネが呆然としているリグルと、さつきまでとは打って変わって静かになった飛鳥に呼びかける。

「リグル様たちも安全な所に避難しててください。何かあるかわかりませんか」

「承知しました……それでは、昨日と同じくシロサキという方の病室にいます。カノンが帰ってきたら教えてください」

「わかりました」

少し考えてから居場所を告げたリグルにアカネが応じる傍ら、飛鳥は困った顔を浮かべる。

「えっと……俺は……」

「姫様と一緒に病室にいりやいいだろう。一カ所に固まってもらった方が、こつちももしもの時対処しやすいし」

そう言った虎次郎の言葉を受けて、アカネはリグルを見やる。

「そうですね。リグル様、案内お願いできますか？私たちはこれからいろいろと準備があるので」

「道案内なんて、本来なら私の仕事ではありませんが……仕方ないですね。えーっと、アスカといましたか？こちらに」

「あ、はいっ……あートレイ……」

乗り気でないながらも一応引き受けてくれたリグル。その不機嫌さと高貴さの雰囲気当てられてか若干緊張しながらも、飛鳥もトレ

イを返却して後をついていく。

「それじゃあ、あたしたちも行きましょう。隊長の命令通り、いつでも出られるように準備しなきゃ」

「了解」

サヨコの号令にミオとアカネが応じると、最後の3人も食堂を出た。

その頃、食堂から離れた通路では、

「クソッ！」

不機嫌さを顔一杯に浮かべたナガイが、壁に蹴りを入れていた。

もつとも、それで胸に溜まったもやもやとした気持ち晴れることはなく、正体不明の不満にますます気分が悪くなる。

(なんなんだこの気分は……？赤毛の中坊といい、すまし顔の女といい、勝手なことばっか言いやがって！戦いたいから戦い、それ以外は知ったこっちゃない、それが俺だ。そんな俺に、『ヒーロー』だの『正義の味方』だのを求めてんじやねえよ……！……もつとも、それ以上にわかんねえのは……)「何で俺が、そんな目を向けられてそわそわしてるかってこと——クソッ！」

胸中に渦巻く気持ちの一端を声に出すと、不機嫌を再燃させたナガイは壁を力一杯殴った。

先に行く非特隊一行を捉えたノゾミは、その背中に声の限りに呼びかける。

「ちよつと待ってっ!!」

「!?!」

突然の大声に恭弥たちは足を止めて振り返り、アキラを伴って追いついたノゾミは、若干息を上げながら口を開く。

「貴方たちを格納庫まで送ります。少しは時間短縮になるでしょ」

「!」

「助かります！」

「なるほど。そういうことか！」

ノゾミの提案に非特隊一行を代表して恭弥が感謝を述べ、アキラは隊長の意図を知って納得の表情を浮かべる。

「確か、非特隊の機体は地下格納庫とヴェーガスに分けて収容されていたわね。私はヴェーガスに行くから、アキラは格納庫の方お願い」

「合点っ！」

「車はこっちよ。ついてきて」

「はい！」

アキラと非特隊一行それぞれに指示を飛ばすと、ノゾミは先頭を走って全員をヴェアルキリーズの公用車が置かれている車庫へ案内する。

「本当に助かるぜ。丁度俺が白式展開して恭弥さんとカノンだけでも運ぶかって話してたしな」

「脇に抱えられて運ばれるなんて格好悪いとこ見られなくてよかったよ」

一夏とカノンがほっとしながら語り合う間にも、一行は車庫に着き、ノゾミがシャッターの開閉装置を操作をしている間に2台の自動車に分乗する。

運転手も含めて4人乗りの中型車、その内の1台に恭弥と一夏、カノンが乗り込むと、それを追う様にアキラが運転席に収まって発車準備を行う。

後部座席にサクラとフィルシアが収まった隣の車にノゾミが乗り込むと、シャッターが開き切り、直後にノゾミの車は車庫から駆け出していく。

「ようし、あたしらも行くか！全員、シートベルトはちゃんと締めたな？」

「はい」「大丈夫です」「バッチリだよ」

「じゃあ……行くぜえっ!!」

その様子を見て気合いを入れ、恭弥たちの安全確認を行うや、アキラはアクセルを一杯に踏み、駆動音を轟かせて車を走らせる。



「一！」

いきなりの急発進に後部座席に座る恭弥と一夏、助手席に座るカノンが座席の背もたれに押し付けられるが、アキラは構わずハンドルを回して急激な左折を行い、支部敷地内に伸びる道路を地下格納庫目指して駆ける。

「緊急事態だっ！ちよいと急ぐから退いてくれえ！」

窓を全開にして叫びながらクラクションを鳴らし、一応進路上周囲の人々に注意を促すものの、その顔はどこか喜色を浮かべている。

「ちよ、ちよつとアキラさん！そんなに急がなくても……」

そんな運転手の様子と、時速数十キロの速さで行き過ぎる視界に、度胸はある方のカノンも流石に危機感を抱き、肝を冷やししながら声をかける。

が、

「事は一刻を争うんだろお!!」

「うおおお!!」

叫びで応じると共にアキラは正面のT字路を弧を描く様に左折し、そのドリフト紛いの走行に恭弥たち3人は目を一杯に開いて悲鳴を上げる。

と、

「痛てっ！……」

急激な左折の反動で運転席の後ろに座る恭弥の上体が右に引つ張られ、頭頂部を車窓上部の縁にぶつける。ゴーンという硬質な音が響き、瞼の裏に星が光った。

「大丈夫ですか恭弥さん!？」

「……なんとかね……」

心配する一夏に、恭弥はぶつけた辺りを擦りながら若干涙目で応じる。実際、強めにぶつただけでケガはなく、しかし痛みはしばらく響いた。

その間にも車は右へ左へと急カーブを繰り返し、地下格納庫に着く頃には恭弥たちはすっかり目を回していた。

「あたしにできるのはここまでだ。後は頼むぜっ！」

「は、はいい……」

「ありがとうございます……」

「任されて……ううっ!？」

全開にした窓から半身を乗り出してサムズアップするアキラに、一夏と恭弥は若干青い顔で応じ、カノンにいたっては逆流しそうになる何かを必死に堪える。

一行の返事を聞くやアキラは再び車を爆走させてその場を去り、少し休んでどうにか回復した恭弥たちは機体の許へ駆け出す。

「前言撤回、やっぱ一夏に抱えられた方がよかつたかも。少なくとも、白式つてのに運んでもらえばここまで気分悪くならなかつたんじやない?」

「まあ、朝飯食った直後だから尚更なあ……」

「今更言つても仕方ないよ。とりあえず僕は着替えてくるから、2人は先に機体へ」

「了解!」

恭弥の指示に同時に応じると、一夏とカノンはそれぞれの機体に搭乗し、恭弥も素早くパイロットスーツに着替えてシルフィードに乗り込む。

それを見計らっていたかの様に3人の機体にエリックからの通信が入る。

『桂木曹長、織斑曹長』

『はい』

『それと高槻カノン……』

『聞こえてるよ』

『……ならば』

カノンの呼びかけに一瞬迷った様子を浮かべながらも、次の瞬間にはエリックは指揮官の声で続ける。

『悪いがヴェーガスの発進にはもう少し時間がかかる。お前たちは先行して、ゴーストを海上の方に誘導しろ。できるだけ市街地から遠ざけてそこに留めるんだ。後のことは合流次第追って指示する。爆発の兆候が見られたらすぐに離脱しろ。以上だ』

『『了解！』』

エリックの指示に一齐に応じるや、3人は機体をエレベーターへ向かわせ、地上に出るやすぐに飛び立った。

病室で朝食を摂っていたユイは、突如鳴り響いたサイレンに身を硬くし、続くゴースト出現を告げるアナウンスに一夏を、それに続く様に非特隊の面々を思い浮かべる。

(また、みんな戦いに行くんだな。当然一夏さんも……私は……)  
昨夜一夏と交わした会話——今後のことを一緒に考えていこうという趣旨の記憶が脳裏を過るものの、自分にそんなことを言ってくれた人、その人の仲間たちに対して何もできない自分を否応なしに意識し、ユイは箸を握る手に力を込める。

(まだ体調が優れないとか、本調子でないとか、そんなこと言い訳には……)  
と、さらに後ろ向きになりかけていたところにノックの音が響き、

返事を待たずに開いたドアからリグルと、見覚えのない、自分と同年くらいの赤毛の少年が現れる。

「リグル様？それと……」

「あ、新田飛鳥っていいいます。今ヴァルキリーズにお世話になってます」

ユイの視線に気づくや、赤毛——飛鳥は慌てて自己紹介する。

「ニツタさん……？城崎ユイといいます。よろしく」

ユイも自己紹介を返す間に、リグルはベッド脇の椅子に腰を下ろす。

「またみなさん出陣されたようなので。しばらくお邪魔いたします」  
「……やっぱり、ですか……」

事態を簡潔に告げるリグルに、先ほど思い浮かべたことが現実になっっていることを認識させられ、ユイは小声で返しながら顔を俯ける。

「それにしても……」

「?……なにか……?」

思い出した様に不機嫌な顔を浮かべるリグルに、ユイは控え目に訊いてみる。

「あの様に人を不愉快にさせる輩は初めて見ました。強大な力を持ちながら、それを私利私欲の為に用いることしか考えていない、そんな態度を堂々と告げて恥じることを知らない……まさか異世界に来て、あそこまで酷い人物に遭遇するなんて……!」

(……そうとう面白くない人に会ったんだな……)

説明するというよりも、堪った不満を発散している様子の、徐々に熱を帯びてくるリグルの弁に、ユイはやや気圧されながら漠然と理解する。

と、

「……いや、そこまで言うほどでも……」

控えめに反論する飛鳥に、リグルは不機嫌さに陰しく歪んだ顔を向ける。

「貴方だって先ほど、あのナガイという人に怒ってらしたではありませんか。あまつさえ手を挙げて」

「いや、そうなんですけど……」

リグルの指摘と、何よりもその槍の先の様な鋭い視線に押されつつ、飛鳥は口籠る。

リグルが指摘する通り、飛鳥もナガイの言い分を聞いた時は腹が立ったし、殴ろうとしたのも確かだ。しかし、

「ヴァルキリーズの職員さん……なんていったかな?……とにかくあの人にいろいろ言われてからのナガイさん見てたら、少なくともリグル様が今言ったほど酷い人ではない気がして……それに、今思い返してみれば、あの時の怒り、その半分くらいは、俺自身に対しての気持ちだった気して……」

「貴方自身……?」

飛鳥の今一つ要領を得ない返答に、リグルは首を傾げる。

そんな2人の不明な部分が多くなってきた会話を横で聞きながら、ユイは顔を上げて非特隊メンバーの無事を祈った。

(みなさん……一夏さん、ちゃんと帰ってきてくださいね)

極東支部を飛び立ち、報告にあつたゴーストが出現した場所へ向けて全速力で駆けること数分。

恭弥はシルフィードのモニターに映る望遠映像越しに、幾何学模様を走らせた黒い巨体を確認する。

『あれがゴースト……デカい……！』

『昨日のと形が違う……鳥かな？』

その異様に、初めて直に目にする一夏は驚愕し、カノンは観察の目を向ける。

カノンの言葉を受けて恭弥も相手の細部に目を凝らす。2枚の大きな翼を広げて悠々と空を舞うその姿は、確かに鳥を連想させる。さらにその周囲には小さな浮遊物がいくつか浮いている様だが、この映像でははつきりとは判らない。

その時、

『「！」』

ゴーストの両翼から放たれた光弾の雨が地上に降り注ぎ、着弾した家屋やビルが崩れ燃え上がる。

「急ぐうー」

『了解！』

恭弥の号令の下に一行はゴーストと距離を詰め、恭弥は射撃モードにしたルミナ・グラティウスの照準をその黒い怪鳥に合わせる。

と、

(痛いっ！)(熱い！)(助けてえ！)

「!?……」

突然頭の中に複数の声——悲鳴の様なものが響き、その脳を直接揺さぶられる様な圧迫感に恭弥はしばし前後不覚に陥る。

『恭弥さん……？』

「！……あ、ああ……」

ユニコーン・白を介してシルフィードの肩を軽く揺すって呼びかけ

る一夏に気を取り直すと、恭弥は頭に手を添えて応じる。もつとも、パイロットスーツの一部であるヘルメットを被っている為に、結局頭皮に触れることはできなかつた。

『大丈夫ですか？ぼーっとしてたけど』

「なんか声が……否、さっきのドリフトの影響が今頃きたかな？」

映像越しの一夏に冗談半分で返しながら、恭弥は改めてゴーストに狙いを定める。

(いつもの空耳だ。偶にこんなのがある)

そう思うことで先ほど言いかけた声の件を呑み下し、完全に調子を整えると、マーカーが重なったゴーストにルミナのビームを一射する。

放たれたビーム弾は一瞬でゴーストの許に達し、頭頂を穿とうとする。

が、

「バリア!？」

ビームはゴーストの外殻に触れる直前に何かに弾かれた様に拡散し、その際の干渉によって東の間可視化した浮遊物間に広がる光の膜に、恭弥は驚愕の声を上げる。

『ちよっ！昨日の蛇もタダでさえタフだったのに、あんなのアリ!？』

『いや、あの周りを飛んでる奴——ビットがバリアの発生器なんだろう？アレさえ壊せば——!』

その光景と昨日のゴースト戦を思い出してカノンも動揺し、一夏が対策を練ろうとするその時、ゴーストの翼から放たれた弾雨が3機を襲い、各自反射的に三方に散ってそれをやり過ごす。

「いや、どう攻めるかは後回し。今はノヴァ大佐の命令通り、アレを海の方に誘導しよう。幸か不幸か、今のでこつちに注目してくれたしな」

『……ですね』

『了解!』

言いながら恭弥はシルフィードを海へ向かわせ、その後を返事をしながら一夏の白とカノンのアトランティア・ルージュがついていく。

それを追う様にゴーストも針路を海の方へ向け、さらに光弾を飛ばして一行に追い打ちをかける。

最後尾についた白がシールドを張ってそれらを掻き消し、背後から肩を掴んで牽引するアトランティアと自らの推力を合わせて後退する。

その陰から出たシルフィードがビットを破壊するつもりで散発的にビームを撃つてみるものの、対象は余りに小さく、大きく開いた距離も手伝って掠りもせず、徒にバリアとの干渉光を照らすだけだった。

同じ頃、準備が整ったヴェーガスは極東支部の滑走路を飛び立ち、飛行が安定したのを確認すると、エリックは昨日の昼以降、ずっと保留してきた事案に向き合うことを決める。

「アイン、しばらくブリッジを頼む」

「?……了解だ」

短く告げるやキャプテンチェアを立てて出ていくエリック。そんな艦長に一瞬戸惑ったアインは、しかしすぐにその心情を察して短く返す。

と、今度はカトリーヌが操舵士の席を立ててそれに続く。

「お、おい!?!」

流石に艦の操作を務める操舵士が席を立ったことにはアインも先ほど以上の狼狽を浮かべるものの、カトリーヌはあくまで涼しい顔で応じる。

「私も行くわ。エリックだけじゃいろいろ不安だから。舵はちゃんと自動に設定したし、細かい操作が必要な戦闘空域に着く頃には戻るか」

言うやカトリーヌもブリッジを退出し、その言い分にアインも一応納得する。

「……まあ、確かにエリックだけではな……」

「……なあ、何で艦長たちこのタイミングでブリッジを離れたんだ?」  
いまいち話についてこれていないレーダー士——レックニック・

ジョンソンが、半ば非難する様に訊いてくる。

もつとも、これから戦闘、しかも複数存在する敵性対象の中でも群を抜いて手強いゴーストと対峙しようとする直前に慌ただしい様子を見せるエリックたちの方が非常識なのも確かであり、その部分を理解しながらアインは察したことを告げる。

「このタイミングだからさ。ゴーストが相手となれば、昨日收容したネメシス08の少年も、いよいよどうなるかわからないからな。非常識は承知の上で、今できることをしておきたいんだろう……もつとも、エリックがどんな対応をするかは予測できんがな。そこはカトリヌを当てにするしかない」

「……そんなもんか……？」

応じつつ、その説明で少しは納得したのか、レックニックは非難の色を薄めた。

薄暗い部屋のドアが開いた。

廊下から差し込む人工的な、数時間ぶりに感知したまともな明るさの光に、ユウは目が眩んだ。

その目が慣れる前に、ユウは部屋に入ってきた人物に怒鳴りつけた。

「何なんですかあなたたちは!!勝手に收容して、手錠かけて、こんな部屋に閉じ込めて!!オレが一体なにしたらっていうんですか!」

溜まりに溜まった数時間分の憤りを含んだ怒鳴り声は、しかし入ってきた者を動じさせることなく、冷たい視線を送るヴェーガス艦長・エリックが静かに口を開く。

「軍用機の使用、無許可の戦闘行為、市街地の破壊、とまあこんなもんだ」

「これでも甘い方なのよ。軍っていうのはこういうことしないと気が済まないところよ」

傍らのカトリヌが手錠を外しながら優しげに言う。

エリックは相変わらず冷たい視線のまま目の前に立ちはだかつて



いる。

カトリーヌはそんなエリックの様子を見てフツと笑い、ユウの肩に手を添えた。

「コイツもその一員。こういう態度をとることしか知らないのよ」

「カトリーヌ……!」

「はいはい」

カトリーヌはエリックの後ろに下がった。

ユウは立ち上がってエリックを睨みつける。

顔ひとつ分程ある身長差が、ユウの視線を上に向けさせる。

「お前、名前は」

「ユウ・ヴレイブです」

短い言葉のやり取りが交わされたが、その後も沈黙が流れた。

そしてそれを破ったのはユウだった。

「帰してください」

「そういうわけにはいかない」

「何ですか」

「軍の機密に触れた。タダで帰すわけにもいかねえ」

「軍の機密って何ですか」

「それを聞いたら本当に帰れなくなるぞ」

「……………ッ!」

ユウは大人しくすることにした。

どう足掻いてもタダでは帰れないし、騒ぎを起こして刑罰なんてことにもなりたくないからだ。

その様子を読み取ったエリックは、先ほどよりも若干表情を緩め、付いて来いと合図した。

それに従い、ユウが部屋を出ようとした直後、突然大きな地震が発生した。

否、空を飛んでいる巡洋艦が揺れているのだ。

遠くに爆発音も聞こえる。

慌てて走るエリックとカトリーヌについて行くと、そこはこの艦のブリッジだった。

前方には青い空が映し出されていた。

警報が鳴り響く。

忙しそうにする乗組員を見ながらもどうすることもできず、ユウは入り口近くに立ち尽くす。

「思ったより早く着いたか……状況は！」

「ゴーストと会敵するなり被弾した。艦体に大きなダメージは無いが、少し厄介だ」

キャプテンチェアに着くや訊いてきたエリックに、レックニックがその手元のモニターに映像を送る。

射出した小型カメラが捉えた映像が再生されるや、エリックは思案する。

「飛翔性のゴーストか!? そもそもコイツ、何でなにも無い街を攻撃したんだ?」

「そこに街があつたから、だろう。ゴーストの行動理念は”破壊”だと考えられてるからな」

エリックの独り言の様な疑問に、アインがヴェーガスの迎撃システムを操作しながら答えた。

(ゴースト……?)

その単語にはユウも聞き覚えがあつた。

突然現れては破壊活動をし、48時間後に大爆発を起こす謎の生命体である。

その存在自体は広く知られているが、その詳細や処理については、報道に規制がかかっており、あまり知られていない。

「アイン、この艦の迎撃システムと空戦中の3機でなんとかできるか！」

「五分と五分だ！上手く支援砲撃して隙を作れば勝機もあるだろうが」

「カトリーヌ、できるか?」

「やるしかないんでしょ!!」

エリックの問いかけとアインの予測を受けたカトリーヌが大きく舵を切り、ヴェーガスはヨーイングするように回転しながら高度を下げていく。

「ホワイト3らにも伝えろ。連携を密に！」

その間にもエリックが指示を飛ばした直後、艦首が下の方を向き、幾何学模様を走らせた黒い怪鳥——ゴーストの全貌と、その周囲をビームを撃ちながらデタラメに飛び回る白い機動兵器3機の機影が正面モニターに映し出される。

大きな翼を広げたゴーストの動きは機敏であり、3機の死角からの攻撃も、ヴェーガスの艦砲射撃もことごとく避けてしまう。

さらに、周辺に小型のビットをいくつか展開していて、それが発生させるバリア——おそらくはエネルギーフィールドの類——によって攻撃自体防がれてしまうありさまだ。

「クツ……IADさえ使えれば……」

「……IAD?」

一連の光景にエリックは歯ぎしりし、苦渋の表情から漏れた単語がユウの耳に届く。

ユウは知る由もないことだが、非特隊に配備されたIADは対ゴースト戦も視野に入れてに開発されている。

そのIAD——テンペストとギガンテックを出そうにも、これら——というよりも通常のIAD——は飛行能力を持たない。技術的な問題から空中戦は全く想定していないし、そもそもこれまで飛行能力を有するゴーストが確認されなかった為に、する必要が無かったからだ。

そしてそれが今、裏目に出た。

現在のヴェーガスに、飛行能力を有するゴーストに対する決定的な策が無いのだ。ゴーストに対してのロングレンジ攻撃はほとんど効力がない。そのためのIADであるのだが、ほぼ唯一の対抗手段が空対空戦闘能力を持っていないのだ。

状況は切迫していた。映像を観る限り、交戦中の3機もすでに何ヶ所か被弾しているようだ。

「仕方ない、テンペストとギガンティックをそれぞれ第二、第三カタパルト固定！砲台として使う！」

「了解」

いつからいたのだろうか。パイロットと思しき2人の少女がエリックの指示を聞いてブリッジを出た。

ユウはどうしていいかもわからず、ただ自分が戦場にいるということだけが理解できた。

「何そこで突っ立てる！適当に座つとけ！」

エリックの怒鳴り声だ。キャプテンチェアからこちらを向かずに発した声は、十分に大きな声としてユウに届いた。

ユウは言われた通りにその辺に座り、近くにあった手すりにしがみ付いた。

そのおかげで、巡洋艦とは思えないアクロバット飛行の中でも怪我をすることはなかった。

「うッ……く……ッ！」

空酔いの中で正面モニターを見た。

脇の小窓には、テンペストとギガンティックというIADのコクピット内部が映し出された。

少女たちの表情は苦しいものだった。歯を食いしばり、額に汗を流していた。目は、操縦補助システムであるサングラス型のバイザーがかけられていて見えないが、きっと苦しいのだろう。

ヴェーガスは何ヶ所も被弾し、ゴーストには決定打を与えられていない。

そんな状況であったが故、ユウがブリッジを出たことに誰も気付かなかった。

「おい、どうやったら動くんだこれ？」

ユウはネメシス08のコクピットに乗り込んでいた。

しかし、肝心なネメシス08が起動しておらず、動く気配がない。

「動いてくれ！飛べるIADはお前しかないんだろ！」

先ほどのエリックの眩きを受けて叫ぶや、ユウは両の拳を操縦桿に振り下ろした。

すると、コクピットの全天周モニターが起動し、コクピット内を照らした。

そして正面に英文が表示された。

— Welcome the bravery —

モニターが周囲の状況を映し出した。

左右には無機質な壁、足元にはカタパルトデッキ、正面には閉じられたハッチが見える。

「よし、戦えるか？」

『おいお前何やってる！』

ネメシス08の起動に気付いたエリックが通信を入れてきた。

ユウは表情を変えずにネメシス08のスペックを確認していた。

ユウは幼い頃からメカニックには強く、将来的にも機械系の仕事に就こうと思っていた。

故に軍が使用する高度な技術も、少しなら理解できた。

「こいつなら飛べるんですよね。脚のホーミングビームを近距離で撃ち込めば痛手を与えられるはずですよ」

『お前まさか……！』

「出撃します。さつき見ましたが、こいつにはオレの生体反応が記録されてて、他の人にはもう動かせないんですよ」

『だが………本当に帰れなくなるぞ………』

エリックの声には心配の色があった。

だがユウの決意は変わらない。

「結構です。もう覚悟はできましたから。やってやりますよ」

『………分かった』

少し時間が空いてエリックが発した言葉に対し、画面の向こうで抑止の音が聞こえた。

だがこれを気にする必要はない。

ロングレンジが効かない相手に、ほぼロングレンジ攻撃一辺倒で攻めなければならぬ状況だ。勝つには近づくしかない。そして突撃

役は一人でも多い方がいい。

『右側にマウントしてあるマシンガンを使え。ハッチを開放する』

「ありがとうございます！」

『だが、本当にいいんだな』

「ええ、コイツとやらやれます」

ハッチが開放され、暖かい光が差し込む。

ユウはネメシス08の右側に固定されていたマシンガンを手に取り、るように操縦した。すぐにネメシス08がその武器を認識し、攻撃システムとリンクさせた。

『ネメシス08エイト』

「え？」

『そいつの名前だ。行ってこい、ユウ！お前の勇気、買ってやるぜ!!』

エリックが笑顔で言った。

ユウもそれに笑顔で返し、操縦桿を強く握った。

デッキ側壁のランプが赤から緑に変わった。

「ユウ・ヴレイブ、ネメシス08……いきます!!」

号令と共に、磁気駆動式ランチャーカタパルトが動き出した。

ユウに大きなGがかかったが、ユウの表情は変わらず、決意の表情だった。

ネメシス08が大空に飛び出した。

少し前——ユウがネメシス08に乗り込んだ頃。

恭弥はシルフィードを縦横無尽に飛ばして迫りくる光の弾幕を掻い潜り、何度目かわからないルミナのビームをゴーストに放った。

結果は遭遇した時から何度も見たように、エネルギーフィールドに阻まれて本体に届くことなく、徒にゴーストを刺激するだけに終始する。

白の荷電粒子砲やアトランティアのアークブレイズ、ヴェーガスの艦砲、先ほどから加わったテンペストとギガンテックの射撃も同様の結果を辿り、各々反撃の弾幕を慌てて回避する。4方向から攻撃して

いる為に、ゴーストの注意が誰か1人に集中しないだけマシといった  
ありさまだ。

(こんな空飛ぶ戦艦だか戦車だか相手に一人で挑む……全く願ひ下げ  
だな！)

一瞬浮かんだ光景を即払いつつ、恭弥は上昇して弾幕を避け、  
ヴェーガスとIAD2機の集中砲火によって動きが鈍くなったゴー  
ストに再度ビームを放つ。

今度は本体ではなく、エネルギーフィールドを発生させるビット目  
掛けて放たれた一撃は、しかし僅かに右に逸れて干渉光に変わってし  
まう。

『ダメかつー！』

『ええいもう！デカいくせにちよこまかとお！』

同じことを試みたのだろう、一夏とカノンの焦った声が通信越しに  
響くが、それに応じる間もなく一瞬後には再び弾幕避けに集中せざる  
を得なくなる。

「……………いけないな」

心なしか鈍くなり始めた動きに、恭弥は自身の疲労を否応なしに自  
覚し、モニターに映るシルフィードの状態を見やれば所々破損を示す  
赤い点滅があり、実際恭弥自身も該当する箇所鈍痛を抱えている。  
表示されたままの通信画面に目をやれば、一夏とカノンもかなり息が  
上がっている様子であり、消耗一辺倒な現状に焦りが募っていく。

(正にジリ貧ってか？……………どうすれば……………?)

その時、恭弥は視界の端にヴェーガスを——その中央格納庫のハッ  
チが開いている光景を捉える。

直後、

「!?……………えっ?」

そこから勢いよく射出されたネメシス08の機影に、束の間我が目  
を疑った。

## 17 その一秒 スローモーション

どうせ何もしなかったらやられるんだ。

どうせただでは帰れないんだ。

だったらやってやる。

ユウの頭にはこのような言葉が繰り返されていた。

怖くないと言えば嘘になる。

それでも彼の勇気は身体を動かした。

「飛べー！ネメシス08!!」

自由落下するネメシス08の背中と腰から光の布が発生した。

この青い発光現象は、近年発見されたイミュー粒子が圧縮されて起きるものである。

ネメシス08は、機体自体から多量のイミュー粒子が放出されるため、それをふんだんに使った独自の推進システムを駆使し、飛行が可能ということだ。

扱いが非常に困難なイミュー粒子を上手く扱えるようになったネメシス08だからこそできる芸当だ。この技術も奇跡と言われ、同系列のテンペストやギガンティックではこれは不可能だった。

「敵は……右か!」

ネメシス08が重厚な弾幕をくぐり抜けながらゴーストに接近する。

左右のカタパルトに固定されたテンペストとギガンティックは咄嗟に射撃のリズムをネメシス08に合わせ始めた。

『ネメシス08!?!まさか……あの子を出したの!?!』

『まったく何考えてるのかねウチのリーダー』

テンペストのパイロットであるサクラと、ギガンティックのパイロットたるフィルシアが互いに息を合わせながらそんなことを言う。彼女らは優秀で、ユウ同様に正規のパイロットではないものの、やはり機体との親和性が高く、戦闘での評価は高い。

『ノヴァ大佐!これはどういうことで——』

『説明は後だ。各機、ネメシス08をアシスト。本機を主力にして



ゴーストを撃退する』

巨大な蛇と戦った時に見かけた妖精の様な機体のパイロットの戸惑った声と、エリックの揺るがない意志を含んだ指示を意識の端に聞きながら、ユウは自分が現状の中心になっていることを直感的に理解する。

「オレの動きに合わせてくれた？よし！」

ネメシス08が四方八方に軌道を変えながら徐々に間合いを詰める。

が、直後に光の弾雨に捕まってしまう。

「！」

真っ只中に放り込まれると直感して身を硬くしたのも一瞬、上空から躍り出た白い一本角に翼状の大型スラスターを備えたPTらしき機体が左腕の装備を前に出し、そこからシールドを発生させて庇ってくれる。

『行つて！』

「！……おお！」

PTからの通信に応じるや、ユウはその陰から出て弾雨の止んだ空をさらに進む。

時折脚部からホーミングビームを撃ってみるが、ビットが展開するエネルギーフィールドに拒まれる。

しかし、距離が近づくうちに手応えが増していくのを感じていた。妖精と今の一本角、これまた蛇との戦いで見かけたマントを羽織った機体が各々光弾を放ち、本体にダメージこそ与えられないものの、その動きを狭い範囲に縫い付けてくれる。

それを察したユウは、近距離でマシンガンを掃射した。

「うおおおおお！！！」

叫びと共に放たれた弾丸はビットを撃ち抜き、瞬く間にエネルギーフィールドを破壊した。

ネメシス08は青い光の軌跡を残しながら空を自由に飛び回る。

その超次元的な光景と、手に持ったマシンガンという現実的な武器が、非常にミスマツチだ。

しかし、ネメシス08の戦う姿は美しい。  
非特隊のメンバーは誰もがそう感じた。

「あとは本体を……！」

黒い翼を羽ばたかせてこちらへ向かってくるゴースト。

その大きさは30メートルほどで、頭頂高15メートルのネメシス08と比べると約2倍の大きさだ。

ゴーストはネメシス08同様に大空を自由に飛び回りながら、翼から再び光弾を発射する。

「速い!? 追いつけるかネメシス！」

ゴーストの翼からは赤い光が溢れ、うっすらと空に軌跡を残しながら、自らに初めて手傷らしきものを負わせたネメシス08を翻弄する。

いくらネメシス08が高性能だからといって、パイロットが素人だ。

攻撃予測や回避行動などがまだ不十分で、未だ本体に直撃を与えていない。

「くっそ、どうするー！」

ビットによるエネルギーフィールドが消失した今、ロングレンジ攻撃も通用するはずなのだが、ゴーストもそれを警戒してか、先ほど以上に俊敏に動いて中々標準が合わない。

しかも、空中というのは非常に不安定な戦場で、火器の発射による反作用で態勢が崩れやすい。しかもゴーストからの攻撃をかわしなからだ。

「援護が不安定になってきた……長期戦はキツイのか？」

ネメシス08が放つホーミングビームは、弧を描くようにゴーストに向かっていく。

ホーミングビームは、ミサイルよりも高誘導かつ高威力なビーム兵器なのだが、そのエネルギー消費は激しく、そこまで多用できない。

現に、ネメシス08のコクピットには撃ちすぎの警告が鳴り響いている。

ユウは正直にこれに従うことにしたが、攻め手を一つ失ってしまった

た。

「他に武器はないのか！」

ネメシス08はマシンガンで迫り来る敵のホーミングビームを撃ち落としながら接近のチャンス伺う。

その間ユウは、回避しながら武装マニュアルを読み込んでいた。ビームランスとホーミングビームの他に、ソニックレールガンというものがあるらしい。

ソニックレールガンは、ネメシス08の両肩に装備されたシールドに内蔵されているものだ。威力は高いが連射はできず、しかも反動が大きい。

恐らくこの状況で使用して外せば、必ずゴーストはそれをチャンスと見るだろう。

「ソニックレールガンか……当てられるか、オレに……」

ユウはネメシス08に左肩のソニックレールガンを構えさせた。

そして一旦ゴーストから離れるように高度をとり、宙返りをしてから発射姿勢をとった。

その動きに脅威を直感したのか、ゴーストは他の機体に目をくれず、左右に大きく動きながら狙いを定めたネメシス08を追ってくる。

コクピットのモニターに表示されるロックオンマークが重なる瞬間を待つ。

その間にもゴーストは近づいてくる。

「早く……早く……早くしろ……早くしろ……早く……！」

ゴーストが大きな口を開けた。

その瞬間、ロックオンマークが一つに重なり、緑から赤へ色が変わった。

その時ユウには、この世界の時間が遅くなっていくように思えた。それほどに、冷静でいられた。

スローモーションの1秒で、ユウは極限まで集中力を高めた。

「……………見えた！狙い撃つ!!」

ロックオンから1秒後、ギリギリまでゴーストを引きつけてからソ

ニツクレールガンの音速の弾丸が発射された。

反動でネメシス08がきりもみ回転の状態になる。

ユウはそんな中でも冷静で、ゴーストを見ずに回し蹴りをいれた。

大口を開けていたゴーストは、その脆い部分に弾丸を喰らい、さらに回し蹴りをいれられ、無様に吹き飛んで行った。

「サクラさん、フィルシアさん！他の機体の人たちも!!」

『ほいほーい』

『私に命令しないで!』

『撃ちまくれっ!』

『了解!』

無抵抗のまま飛ばされたゴーストに、ヴェーガスからテンペストの左肩大口径ビームキャノンとギガンティックの背部キャノン砲2門が発射され、周辺を飛んでいた妖精、一本角、マントの機体からもそれぞれ光弾が放たれる。

それらの攻撃は一直線にゴーストへと向かっていく。

それが当たるのを確認する前に、ネメシス08は槍を構えて追撃に入った。

「これで、トドメだアアア!!」

ビームと実弾の集中砲火がゴーストの翼を貫き、巨大な体躯に深い傷をいくつも刻む。

まるで血のように赤い光が吹き出す。

そしてその光を斬り裂き、青い光のマントをなびかせながら、穴だらけになったゴーストを貫いた。

ゴーストは形状崩壊を起こし、消滅した。

「終わった……………」

その光景を見届けるや、ユウは全身の力を抜いてシートにもたれかかった。

息は荒い。気付けば全身から汗をかいている。

ユウ自身、気付かぬうちに予想以上の体力を消耗していた。

『ネメシス08は第一デッキに収容します。真ん中のハッチね。ナビゲートは機械が勝手にやってくれるから』

通信士の女性がナビをしてくれた。歳は20代後半くらいだろう。「わ、分かりました。レーザーセンサー確認……これでいいんですね？」

『確認しました。あ、そうだ、アタシはリン・スメラギね。よろしくっ』  
「……………」

返事はなかった。ユウはコクピットの中で眠りについていたので。その間にも、ヴェーガスは妖精——シルフィードらの収容を済ませ、ヴァルキリーズ極東支部へと舵をとった。

この日、ユウの高校生活は断たれ、戦いの世界へ飛び込んでいくのだった。

その頃、とある太平洋上空では。

「迷ったあああ!!」

空と海で青一色が埋め尽くす世界でひと際目立つ赤い巨人——新ゲッター1のコクピットの中で、イシカワが頭を抱えて絶叫していた。

「クツソー……いらん知恵回して余計なことするんじゃないよな……」

そう言いながら思い出すのは、昨日の夕方——リオン隊との遭遇戦の後のこと。

このまま真っ直ぐ進めば、インドネシア、あるいは別の地区のスクランブルとまた鉢合せしてしまう、それを面倒に考えたイシカワは、<sup>ひとけ</sup>人氣が無いと思われる太平洋側に針路をとり、迂回して日本へ向かうことを思いつくや、即実行していた。

しかし、地図も方位磁石も持たず、星や太陽の位置から方角を知る術もなく、さらには大部分の移動を夜間に行ったことから、自分がどの辺りにいるのか、そもそも今東西南北どっちを向いているのか、完全にわからなくなってしまったのだ。

「チクショー。ゲッターに乗ってんのに海の上で野垂れ死につてか？

恥ずかしくて死んでも死にきれねえよお……………」

独特の羞恥心を抱きながら、途方に暮れた目で周囲をあてどなく見回す。

と、

「……………ん？」

遠くの空を一直線に飛ぶ影を見つけ、イシカワは目を凝らす。

よく見ると、コンテナに翼が生えたような独特な形の飛行機のようにだ。

（また連邦軍か？メンドクセーなあ。潜って隠れるか？……いや、待てよ？アレを追えば、少なくともどっかの陸地には着くわけだよな……………？）

しばしの思案の後、イシカワはレバーを握り直す。

「なら、今はそうすつか。それでこっちの日本に着けばよし、着かなきゃ行った先でリベンジってことで……あ、そうだ。オープン、ゲッター！」

新たな方針を定めると、咄嗟に思いついたことに従ってゲッターを3機の航空機に分離させる。

「少なくとも、ロボットのままよりは目立たねえだろう。これくらいの距離離れて飛べばわかんねえだろうし」

楽観的に断じるや、その状態で連邦機の後を距離を保ちながら追う。

極東支部へ帰還後、非特隊は事後処理に追われた。

ユウのネメシス08搭乗の経緯報告と正式なパイロットとして扱ふ為の手続きは言わずもがな、シルフィードら先発機たちを地下格納庫へ移動させての整備——シルフィードは自然治癒、白はブロックの補充、アトランティアはリグルによるマントの補修——、IAD3機——特に先陣を切っていたネメシス08——の点検、各パイロットの報告のまとめ等々。

それらに忙殺されている間に時間は過ぎ、時刻はあつという間に昼

に差し掛かる。

その頃になつてようやく忙しさから解放されたユウは、極東支部の食堂で食事をとっていた。時間的には昼食だが、鳥型ゴーストの騒動で朝食を食べ損なつた身には今日最初の食事だ。

と、少し遅れて他の非特隊の面々も食堂にやつてきた。

「君がネメシス08に選ばれた適合者<sup>ヒーロー</sup>?意外と普通の男の子ね」

集団の先頭を歩くエメラルドグリーンのシヨートヘアが眩しい少女が声をかけてきた。声からして、ギガンティックのパイロットであるフィルシア・ナイトウオーカードだということはユウに理解できた。

「新型ロボットのパイロットはそんなもんなんだよ、フィルち」

「そういうもんなの?」

それにどこか嬉しそうな様子で続くのは、サイドテールが活発な印象を抱かせる男物の礼服を着た少女だ。こちらも声からしてマントの機体——アトランティアのパイロットとわかったが、ユウは彼女の名前は知らない。

その後ろには、連邦軍の制服を着た男2人とワンピース姿の少女が続いている。

いずれも年齢はユウと同じか、大して離れてはいないようだ。

それぞれに注文した品が載つたトレイを持った一行は、ユウが座っているテーブルに腰を下ろす。

その内、ベーコンレタスサンドを載せたトレイを持ったフィルシアはユウの隣に座つた。

「日本人だよね?ウチはアメリカの方の出身なんだよー」

「そ、そうなんですか」

妙にフレンドリーで脈絡のない話にユウは戸惑う。

しかし、その拍子抜けした感じがユウの緊張を解していたのも事実だ。

それを察知してか、他の面々も声をかけてくる。

「えっと、桂木恭弥っていいいます。一応連邦軍でパイロットやつてます」

「俺は織斑一夏。同じくパイロットやつてます」

「私は高槻カノン。なし崩しでなんか一緒に戦うことになっちゃったみたいだけど、一つよろしくねえ」

「よ、よろしく……」

未だ遠慮が抜けきらない男2人とは対照的に、フィルシアにも負けないフレンドリーな調子で話しかけてくる男装少女——カノンに、ユウは若干困惑する。

そして、

「……えっと、そちらのワンピースの人は？」

この場で唯一無言を貫いている少女に、ユウはその氷壁の様に硬い雰囲気にならなげに引けながらも、好奇心に負けて訊ねてみる。

「リグル・フォン・エルプールと申します」

「……はあ……」

名前だけを告げるや再び無言になる少女——リグル、その雰囲気以上に硬い態度に、ユウは声をかけたことを少し後悔する。

「リグル、いつまでもそんな態度じゃ、この先もたないよ？」

「……」

薄々自覚はあるのか、呆れ気味なカノンの指摘に、リグルはバツの悪い顔をする。

そんな中、もう一人のパイロット——サクラ・ルルも食堂に入ってきた。桜色の髪を後ろで纏めてある、まだ顔に幼さの残る少女。しかし、その態度は大人びている。

その後ろには、赤毛の少年とジャージ姿に「GUEST」と書かれた札を提げた少女が続いている。いずれも歳はユウより少し下、中学生くらいか。

「お、サクラあー！飛鳥も」

「食事中くらい静かにしてよ」

フィルシアの呼びかけに素っ気なく応じながら、サクラは野菜のスープを持ってユウの横に座り、赤毛——飛鳥もそれに続く。

「ユイ、もう歩いて大丈夫なのか？」

「はい。衰弱は回復したみたいだからいいだろうって。ひとりぼっちの食事も寂しくなってきましたし」



「それもそつか。確かに飯は大勢で食った方が美味しいもんな」

対して一夏と親しげなやり取りを交えた少女——ユイは、その隣に腰を下ろす。

その傍ら、サクラはユウをチラと見ると、野菜スープに口をつけた。

「キミ、ユウ君だよね。歳は？」

「16だけど……」

「んーやっぱり……適合者は子供に限られてるのかしら……」

サクラはそれだけ言って再びスープを飲んだ。

「さつきから気になってたんだけど、適合者って何のことですか？」

「僕も気になるな。さつきから出てくるけど、どういう意味なんだ？」

ユウと、それに続く形で訊ねてきた恭弥に、サクラは面倒くさそうにスープを置いた。

「ユウ君はともかく、桂木曹長は迂闊です。文脈から軍事機密だということはわかるでしょ？少なくとも、部外者がいる所でできる話じゃありません」

呆れた様子で言いながら、サクラはユイと飛鳥に硬い視線を飛ばす。

途端、ユイは居心地の悪い表情を浮かべる。

「……あの、私あっち行ってますね」

「俺も……」

飛鳥もそれに追従し、各々席を立とうとする。

が、その時、

「そんな必要無えよ」

やや強い調子で一夏が呼び止めるや、少し鋭くなった目線をサクラに向ける。

「サクラもそんな言い方ないだろう？ユイたちが邪魔みたいな態度して」

「そうは言っていません。ただ、機密を守ることも軍人としての務めです。私はそれに従っただけ。織斑曹長こそ、その辺の認識が甘いではありませんか？」

「……」

立場上の正論を説くサクラに、一夏は口籠ってしまふ。が、その目は未だ納得していない。

そんなギクシヤクした雰囲気になんて耐えかねてか、ユイが一夏の袖を引きながらやや強い調子で言う。

「いいんですよ一夏さん。私たちが聞こえない所に行けばいいだけなんですから」

「そうそう。今は空いてるから席も余裕あるし」

続く飛鳥が言う様に、昼食時のピークを過ぎた所為か、確かに食堂内は空席が目立ち、席を選ぶ余裕がある。

現に言う間にも、2人はトレイを持って椅子から立ち上がっている。

「……わかった。じゃあ俺も行くよ」

そんな2人の気遣いを察してか、一夏もトレイを持ってそれについて行こうとする。

「というわけで恭弥さん、俺あっちにいるんで、必要なことがあったら後で教えてください」

「わかった……その、悪いな」

「いいんですよ」

自分の発言が原因で場を悪くしたと軽く悔やんでいた恭弥にそつと返すと、一夏はユイと飛鳥を追って席を離れる。

と、一連のやり取りを見ていたカノンが、気まずそうにリグルと顔を合わせる。

「えつと……私らもあっちに行つた方がいいのかな？」

言いながら、カノンは窺う目をサクラに向ける。

「カノンさんは一応非特隊預かりの身だし、今後も共同で戦う機会が増えることを考えると、情報は極力共有しておいた方がいいかもしれません。その代わり聞いたら守秘義務が課せられるでしょうが。リグル様は……失礼ながら、遠慮していただけると……」

「わかりました」

後半は相手が相手だからか、やや歯切れ悪く告げるサクラに短く応じると、リグルもトレイを持ってユイたちの許へ向かう。

残ったのはユウ、恭弥、フィルシア、サクラ、カノンの5人だ。それを確認したサクラは、目でフィルシアに「説明して」と促すが、フィルシアは知らんぷりだ。

ユウに視線を移しつつ、仕方ないと自ら口を開いた。

「キミが乗ったIAD、ネメシス08系列の機体、通称“ネメシスタイプ”は、リリースと呼ばれる人工半生命体が基になって、そのリリースがIADとして起動した時に、HEROという文字と一緒にDNA情報提示されるの。そのDNAはリリースのものとの関連性は皆無なんだけど、そのDNAの持ち主以外が乗っても全く動かないのよ」

「そんなプログラム、開発者も組み込んだ覚えがないんだってさ。ただ単に電気信号を送れば動くはずだったのにね」

フィルシアの補足も含め、ユウは目を開いたり閉じたりしながら聞いていた。機械系に強いユウでさえも、理解するのに少々時間がかかることがあった。

それを見たサクラがスプの入った皿を持ち上げながら説明をまとめた。

「要は、ネメシスタイプが私たちを選んだってこと」

「選ばれた子供……どこかで聞いたことあるわね」

ユウはやっと、自分がネメシス08に乗り込んだことが偶然ではないと知った。

ネメシス08に彼の生体反応が記録されたのではなく、元々組み込まれていたということになる。

ユウはパンの一欠片をつまんで言った。

「つまり、オレたちがやるしかないってことですね」

「そーゆーことっ！」

「異論はないわ」

「またメンドーな機体だことで……」

「それなんて汎用人型決戦兵器？」

フィルシア、サクラ、恭弥、カノンの感想を聞くと、気になっていったことが解決したユウはまた食事を楽しみ始めた。

と、それに合わせる様にフィルシアはトレイを持って立ち上がる。

「言うことは言ったし、私もあとはあつちで食べるよ。面白そうだしね」

「それなら私も行くよ。リグルも心配だし」

カノンもそれに続くと、フィルシアはユウを一見する。

「そう、じゃあ一緒にいこう。あと、ユウ」

「はい？」

「敬語なんかいいよ別に。お互い同じ年なんだし、仲良くしよっ！」

「え、ああ。分かった！」

「そんじゃね。サクラもゆつくりと親密になりな。恭弥、フォローよろしくー！」

「うっさい」

「任されて、と言っておこうかな？」

各々の返事を聞くと、フィルシアはカノンを伴ってユイたちの許へ向かう。

そして2人がいなくなったのを合図に、一同の間には静寂が流れた。聞こえるのは食器が当たる音とスープが喉を通る音だけ。

サクラは見た目とは裏腹に大人っぽく、非常にテーブルマナーがいい。

ユウはそれを見て、パンくずを拾ったりしてみる。

気まずい空気を感じ始めたユウは横目でサクラを見た。

こうして見ると、普通に可愛い娘だなと思った。

「何」

その視線に気付いたサクラは、目を瞑ってスープの後味を味わいながら言った。

ユウは少しビクとしたが、怒ってる様子でもなさそうなので安心した。

「いや、黙ってれば綺麗な顔なのになあつて」

「いや、ユウ君それは……」

ユウの正直な感想に、それまで黙って食事をしていた恭弥が呆れた表情を浮かべる。

が、当のサクラは急に顔を赤くし、吹き出しそうになったスープを

飲み込んでから早口で言った。

「ば、バカじゃないの！……ここは軍の部隊なのよ！いつでも戦場に飛び込んでいくのよ！き、綺麗とか、そういうの、そういう余計なこと考えないで！」

綺麗という言葉にさほど動揺したのか、「黙ってれば」という半ば失礼な言葉には怒らない。

彼女自身、大人っぽい態度をとってはいるものの、まだ少女の心は持っているようだ。

サクラはスープを飲み干し、足早にトレイを片づけに向かった。  
が、

「ちよ、まさか聞いてたの!？」

「さあ、どーでしょうねえ」

3歩と歩かない内に移動したメンバー全員の視線に気づき、動揺しながらの問いにフィルシアのはぐらかす様な返事が返ってくる。

トレイを返して駆け足で食堂を出ていくサクラを見送り、ユウは「禁句だったか」と思いながら、天井を見上げてパンの最後の一口を飲み込んだ。

「なんか、楽しそうなとこだな」

「ホントに……一両日中に大分賑やかになったなあ……」

感じたままを呟いたユウに、恭弥が移動組を眺めながら感慨深い声を漏らす。

「……折角だし、僕たちもあっち行かないか？」

「え？……でも……」

恭弥の提案に、ユウは移動組を一見し、あの輪に入っていないものか躊躇してしまう。

「どうせ大事な話は終わったんだし、知り合いがこんなたくさんいて2人きりの食事つてのもなんか変だろう？これから一緒に戦うってことでも、親睦は深めておいた方がいいだろうし、さあ！」

「……そ、それじゃあ……」

やや強引に誘う恭弥に折れると、ユウはトレイを持って一同の許に移動する。

遡ってネメシスタイプの説明が始まった頃。

テーブルを移動したユイ、飛鳥、一夏は、それぞれ腰を下ろして改めて食事を始める。

移動する原因となったやり取りを思い出しながら、ユイは隣に座る一夏を見る。

「……あの、一夏さん」

「ん？」

「さつきは私たちの為に怒ってくれて、ありがとうございます。どうぞです。どうであれ、気にかけてくれるのは嬉しかった……ただ、それで部隊に亀裂が入るのは……」

「……」

申し訳なさそうに語るユイに、飛鳥も気まずさから顔を俯ける。

「そんな顔するなよ。お前らの為っていうより、俺がサクラの態度に腹が立って言っただけだし……それに、あいつの言うこともわからなくもないし……」

2人のそんな様子に一夏まで申し訳なさを感じていると、一同の許にリグルがやってくる。

「リグル様？」

「どうしたんです？」

「貴方がたと同じです。私も退席した方がいいと言われまして」

一夏と飛鳥に手短かに応じると、リグルは席に座って食事を再開する。

「「「……………」」」

相も変らぬ氷壁の様な態度に、ユイたち3人は圧倒され、自ずと口が重くなり、一同の間に気まずい沈黙が広がる。

と、少ししてフィルシアとカノンもやってくる。

「あれ？2人までどうして？」

「話は終わったからね。こっちで一緒に食べる方が面白そうだし」

「私はリグルが心配っていうのもあるしね」

「カノン……！」

飛鳥の問いにフィルシアとカノンはトレイを置きながら応じ、カノンに小さい子供の様に言われたリグルは羞恥に顔を赤くする。

と、フィルシアが一夏に、やや真剣な目を向ける。

「でき一夏、さっきのことなんだけど……」

「さっき？……なんだよ？」

「サクラだけどき、別に悪気があってあんな言い方したわけじゃないんだよ。あいつ真面目だから、それが高じてついキツイ言い方になっただけで……」

「大丈夫だよ。俺もその辺わかってるつもりだから」

柄にもなく狼狽えるフィルシアに、一夏は努めて平常心で返す。

「サクラの言う機密は守らなきゃいけないっていうのは、軍人やつてるなら当たり前だろうし、俺だって実際それを理由に恭弥さんやユイの質問をはぐらかした。俺の認識が甘いついていうのも正しいんだろうさ。ただ、もうちよつと言い方があるんじゃないかと思っただけ……それを言ったら俺もそうだった気がするし……ユイたちもごめんな。変な心配かけてさ」

「いいえ。私は別に……」

「俺も謝られても……」

軽く頭を下げる一夏に、ユイと飛鳥は反応に困ってしまう。

「……一応、後でサクラにも一言言っとくかなあ」

「謝るの？」

「謝るっていうか……まあそうかな。俺自身、『悪いことした』って気持ちがあるなら、謝つといた方がいいだろう。ユイたちが心配するほどじゃないだろうけど、こじれるとやっぱ後で面倒だし」

カノンの問いに、一夏は自分の気持ちを整理しつつ応じる。

「なんていうかさ、サクラって“大人”だよなあ……俺と大して歳変わんないのにさ」

「まあねえ。確かにそうだけど……」

天井を見ながら不意に思いついたことを呟く一夏に、フィルシアは意味深な笑みを浮かべてさつきまで一同がいたテーブルを指さす。

直後、

「ば、バカじゃないの！ここは軍の部隊なのよ！いつでも戦場に飛び込んでいくのよ！き、綺麗とか、そういうの、そういう余計なこと考えないで！」

「！！！？！！」

食堂全体に響き渡る勢いのサクラの叫び声に、フィルシア以外彼女に会って間もない面々は、初めて見るその狼狽した様子に目を丸くする。

その間にもサクラは早々に食事を終え、完食したトレイを返しに行こうとする。

が、歩いてすぐに移動組の注目の視線にさらされる。

「ちよ、まさか聞いてたの!?!」

「さあ、どーでしょうねえ」

「!!……」

一同を代表したフィルシアの返答に、サクラは顔を真っ赤にして、すぐにトレイを返すや食堂から逃げる様に走り去る。

「……………ふっ！」

一連の光景に呆然としたのも束の間、一夏が顔を綻ばせたのを合図に、一同の間に笑みが伝播する。リグルでさえ、手で隠したものの口を歪ませた。

「なんか、意外ですね。サクラさん?……に、あんな一面があるなんて」

「だな。なんか安心した」

一同の感想を代弁するユイに、一夏は大きく首肯しながら言う。“軍人”としてだけではない、自分たちと同じ年頃の、年相応なサクラの一面を垣間見えたことが、知らぬ間に抱いていたらしい彼女への“硬い”先入観を壊してくれたようだ。

そんな中、ついに恭弥とユウまでやってくる。

「どうもー」

「恭弥さん」

声をかけた恭弥に一夏が応じると、2人は手近な席に座る。



「……なんか、さつき出て行った人以外、またみんなそろっちゃいましたね」

「だねえ〜」

ほぼ移動前と同じ状態になった周囲に飛鳥は素直な感想を溢し、それにカノンも賛同する。

「いいんじゃない？ごはんは大勢で食べた方が美味しいっていうし。でしょ？一夏、ユイ」

「だな」

「ですね」

それを受けて気楽に告げるフィルシアに一夏とユイも続くと、一同は再度食事を再開する。

「そうだフィルち。ちよつと訊きたいんだけどさ」

「なに？」

「この世界のロボットアニメってどんなの？やっぱ本物があるから結構リアルな描写とかあるのかな？……まさかとは思うけど、本物があるが故に動きにリアリティーがないとかなんとかいって廃れていったとか!？」

「うーん、どうだろう……？私あんまアニメとか真剣に観るタイプじゃないし……」

カノンの割と真剣な問いに、フィルシアは天井を見上げながら思案する。

そんな光景に、ユウは再び呟く。

「本当、楽しそうなところだな」

『軍隊』って聞いて感じるイメージとはほど遠いですね」

それを聞いたらしい飛鳥に顔を向けると、ユウは彼とは互いに自己紹介がまだだったことを思い出し、自分から口を開く。

「えつと……ユウ・ヴレイブっていう。聞いたと思うけど、今日から連邦軍でパイロットやることになった……君は？」

「あつ……飛鳥、新田飛鳥です。じいちゃ——祖父の仕事の都合で、今ヴァルキリーズにお世話になってます……」

人付き合いに慣れていない者同士ぎこちなく紹介を交わすと、ユウ

はその中で感じた疑問を述べる。

「新田?……もしかして、新田源三の身内、とか?」

「あ、はい。今話してた祖父です」

「本当か!」

当てずつぽうな推測が的中したことに我ながら驚きながらも、ユウはさらに飛鳥と会話を重ねていく。

モモタロウ騒動で良くも悪くも有名になった飛鳥の祖父・源三だが、それ以前から複数の分野で権威として名を挙げていた。機械工学もその一つであり、機械好きのユウにとっては趣味の分野の著名人、その関係者と語り合えるというのは嬉しい体験だ。

話を重ねていく内に、飛鳥自身機械には興味があり造詣も深いことがわかり、ユウにとつてはいつしか「趣味の分野の著名人の孫」から「同好の士」にクラスチェンジしていた。

そんなふうになんか各々気ままに談笑を楽しみながら、非特隊の昼食は進んだ。

和気藹々とした昼食を済ませたユウは、そのまま非特隊メンバーとヴェーガスに戻り、与えられた個室のベッドの上で横になっていた。家から持ってきた私物などはなく、必要最低限の家具があるだけの寂しい部屋だ。

「ヒーロー………オレなんかで………」

昼食時、特に飛鳥との会話で覚えた興奮が落ち着いて冷静になったのか、電気も点けずにただ天井を眺めながら独り呟く。

と、部屋のドアがノックされる。

「はい?」

体を起こしながら応じると、恭弥と一夏が部屋に入ってくる。

「どうも」

「えっと……恭弥さんに、一夏さん………ですよ?」

声をかける恭弥に、ユウは少し頼りない様子で返す。短い間に大勢の名前を紹介された為に、やや混乱しているのだ。

「正解。一度にたくさん名前言われても混乱するよなあ」

「それとフィルシアちゃんも言ってただろう？敬語はいいよ。僕等もその方がやりやすいから」

「じゃあ……恭弥、一夏」

共感する様に頷きながら一夏が応じ、恭弥が昼食時のことを受けて指摘する。

それに応じて口調を改めると、ユウは2人の顔を交互に見ながら問う。

「どうしたんだ2人して？オレになんか用か？」

「息がてら、男4人でその辺ぶらつかないかと思つてさ」

答える恭弥に、ユウは新たな疑問を抱く。

「4人？」

「ヴェーガスの外で飛鳥も待つてるよ」

言いながら一夏は床を指さし、それが「ヴェーガスの外」を指しているのだと理解しつつ、飛鳥の名前を聞いたユウは少し心が躍るのを自覚する。

「……まあ、部屋にいてもすることないしな……わかった。行く」

「そここなくちやな！」

言いながら一夏は親指を立て、ユウが簡単に身嗜みを整えるのを待つて、3人はヴェーガスの外へ向かう。

ヴェーガスを出た恭弥たち一行は、艦体が収まっている格納庫入り口のそばに佇む飛鳥の姿を見つけると、やや速足でそこに歩み寄る。

「飛鳥君、待たせた」

「いいえ……大きな艦ふねですねえ……」

恭弥に応じつつ、一行の背後に停泊しているヴェーガスを眺めてやや感動を含んだ声を溢す飛鳥。それにつられる様に、飛鳥のそばに着いた恭弥たちも後ろを振り返り、改めてその巨大な、それでいて蒼を基調とした流線形がどこか優雅な雰囲気醸し出す艦体を眺める。

「ヴェーガス、だっけ……？」

「そう。ネメシスタイプの運用を前提に開発されたっていう、事実上の専用母艦」

「一応、詰めれば20メートル級までなら少し入るみたいだけどな」

改めて自分が乗ることになった艦の名を呆然と呟くユウに、恭弥と一夏も同じ表情を浮かべつつ、それぞれ知っていることを話す。

と、

「航空巡洋艦ヴェーガス。イミュー粒子を利用した発電システムを搭載した連邦軍の最新鋭艦ね」

「フィルシアちゃん？」

話を聞いていたかの様なタイミングで説明を述べるフィルシアの声に恭弥は振り向き、その後ろにサクラ、カノン、リグル、ユイの姿も認める。

「どうしたんだ。みんなして？」

「フィルちの提案で、女同士集まって親睦を深めようってことになってさ。ユイも折角退院できたんだし、少しは外の空気吸わせた方がいいでしょう？」

「どこも考えることは同じか……」

一夏の問いにユイを見やりながら答えるカノン。それを聞いて、ユウは思ったままを呟く。

と、飛鳥が若干の興味を浮かべた顔でフィルシアに歩み寄る。

「イミュー粒子？この艦、イミュー粒子の発電システムで動いてるんですか？」

「うん。大人たちからはそう聞いてるけど」

「イミュー粒子……？」

「……」

飛鳥の問いにフィルシアが答える傍ら、恭弥は首を傾げ、視線を向けられた一夏も肩をすくめる。

それが聞こえたのか、出会ってから今まで物静かな印象が強かった飛鳥が、何かに弾かれた様にやや熱のこもった声で語り始める。

「知らないんですか？DC戦争の頃に研究されてたっていう『イミュー粒子』。加熱すると多量の電子を放出する性質があつて、その

温度も1000℃未満と非常に低温なことから、この粒子を用いた次世代の発電システムに大きな期待が寄せられてるって……ただ、イミュー粒子の扱いが非常に困難で、実用化には十数年かかるって言われてるけど」

「へー、そうなんだ」

「またスゲー艦が回されたんだなあ、俺らんとこ」

「……って、今まで知らずに乗ってたのかよ……」

素直に感心する恭弥と一夏、そのどこか抜けている雰囲気を少し心配しつつ、ユウは控えめなツツコミを入れる。

一方、カノンは面白いものを見る目を飛鳥に向ける。

「流石スーパーロボットの整備士。先端技術もバツチリってこと？」

「EOT……でしたっけ？100年くらいで本当に飛躍的な進歩ですね」

「ああいや、別にそういうわけじゃ……祖父ちゃんが参考程度に調べたのを横から見たくらいで……そもそも、イミュー粒子関連の技術はEOTじゃありませんよ」

入院中に調べた言葉を語彙から引つ張り出して頼りなく述べるユイに、カノンの称賛にどう返していいか困っていた飛鳥は訂正を入れる。

「EOT——エクストラ・オーバー・テクノロジーの定義は、『現在の人類の科学力を超える技術の産物』です。イミュー粒子自体、もともとはイスダルン国で研究されていたもので、あくまでも『現在の人類によって発見・確立された技術』ですから、EOTの定義からは外れます」

「え!? そうなのか?」

「僕はてつきり、超技術をまとめてそう言うのかと……」

親切丁寧、それでいて簡潔に述べられた飛鳥のEOT講釈に、一夏と恭弥はそれぞれ鳩が豆鉄砲を食った様な顔をする。

「EOTの具体例としては、大陸から発掘される遺物が代表的ですね。あと鬼の残骸とか、モモタロウもそうかな。テスラ・ドライブもEOTから得た情報を基に完成を見たと言ったことがあります」

「……そこ行くと、シルフィードなんかもそうなのかな？」

「さあ？俺はちゃんと見たことないからなんとも……」

「……中学生に技術の講習されるって……大丈夫なのか？この部隊……」

さらに続ける飛鳥に、咄嗟に浮かんだことを訊ねる恭弥。そんな光景を見て、ユウは不安混じりに再度ツツコミを入れる。

その傍らでは、カノンが少し不安を浮かべながらサクラに耳打ちしている。

「さつきからいろいろ凄いい話してるけどさ、サクラ的には大丈夫なの？新型の発電システムとか、『機密事項だ！』とか言って怒らない？」

「別に……今新田君が話してたことも、ちよつと調べればすぐに出てきますし」

「今のが『ちよつと調べれば』、ねえ……流石この世界ってことか」

事務的に返すサクラの言葉に、カノンは遠くを見る様な目で呆然と呟く。

「ちなみに、このイミュー粒子の発電システムを搭載したADこそIAD——イミュニック・アーマードルであり、基本的な構造は同じでも、圧倒的な出力によって飛躍的に性能が向上することか知られていません」

「……要するに、心臓を変えるだけで大幅にパワーアップするってことかあ」

「それだけで20メートルもないサイズで特機並の活躍ができるっていうのか？……スゲエなイミュー粒子」

その間にも続いていた飛鳥の講釈に、恭弥と一夏も呆然と応じる。その時、

「？……あの、あれ何です？」

「何って——！」

空の一部が弧を描く様に歪むさまを見て訊ねるユイ、その指先を追った一夏は、直後にさらに巨大な黒い穴が開くのを見る。

「あの穴って!？」

すぐに他の面々もその異常に気づき、代表してカノンが驚愕の声を

上げる間にも、穴から黒い鎧の巨人——クロイツリッター、およびクロイツリッター・グランツハーケンが続々と現れる。

そして、

「……………ベネクティオ」

それらに道を譲られる様にして現れた黒いシルフィードというベキ容姿の機体——ベネクティオに、恭弥は無意識の内にその名を溢す。

黒銀の妖精を見据える目に数瞬前までの気楽さは無く、ライカ救援の際に初接触した時の手強さを思い出し、知らぬ間に汗ばむ手を握り締めた。

## 18 裏切りの決闘 前編

ベネクテイ才率いるルミエイラの部隊がヴァルキリーズ極東支部上空に現れる少し前。

水晶玉越しに格納庫からの報告を聞いたグリムは、少し渋い顔を浮かべていた。

（思ったより〃調整〃に時間がかかったね。非特隊に回復の時間を与えてしまったよ）

思いつつ、極東支部を上から俯瞰した映像を水晶玉に映す。

（まあでも、まだ完全じゃないところを見れば行けるかな？……さてと）

そう思うことで気を取り直すと、水晶玉をアリアに繋ぐ。

「アリア」

『はっ！』

「準備が整ったクロイツリッターを率いて、今すぐ出撃してくれ」

『了解致しました。グリム閣下』

準備万端といった様子で応じると、水晶玉に映るアリアは背を向け、格納庫へ向かおうとする。

が、いくら進まない内に足を止める。

『閣下、一つ確認しておきたいことが』

「何だい？」

『私に与えられた任は非特隊、及びそれに協力する者の殲滅ということでよろしいですね？』

「そうだね」

『そしてそのやり方は、私に一任されていると？』

「そうだね」

『それならば結構。アリア・アンダーソン、参ります』

言うやアリアは歩みを再開し、今度こそ格納庫へ向かう。

「確認事項が2つになつてないかい？……まあいいさ。細かいやり方は君に任せるよ……兵隊たちが君の言う事を聞いている間は、ね」

アリアが消えた水晶玉に向かって、グリムはイタズラを仕掛けた子



供の様な笑みを浮かべる。

グリムとの通信を終えたアリアは、真つ直ぐ格納庫へ向かい、自分の機体たるベネクティオに搭乗する。

（ついに来た、“次”が……非特隊——シルフィード、前回の雪辱晴らしてくれる！）

「張り切るのは結構だが、空回るなよ」

「……わかつている」

胸中の宣誓を読んだ様な赤毛に黒の上下の青年——ベネクティオの忠告に、アリアは少し不貞腐れた様子で返す。

その時、機体に通信が入る。

『アリア？？準備いい？？』

「はっ！勝手なお願いを聞いていただき、誠にありがとうございます」  
心なしか高揚しているリイムの問いに、アリアは姿勢を正して応じる。

『別にいいのよお？私は“面白いこと”がだ〜い好きだから。じゃあ、現地に着いたら手筈通りね！』

言うやリイムの方から通信は切れ、一部始終を聞いていたベネクティオは怪訝な顔をする。

「状況は理解しているが……本当に三柱さんちゆうの一人を巻き込むのか？」

「……本来ならシャーラに頼むつもりだったのだ。そこにリイム閣下が入ってきて、あとは向こうが……」

言い訳がましいことを承知で返すものの、次の瞬間にはアリアは表情を締め直す。

「だが、やることは同じ。ここで非特隊を討つ！」

宣言と同時に格納庫の奥の空間が歪んで黒い穴となり、先を行くクロイツリッターたちに続いてアリアもベネクティオを歩ませた。

クロイツリッターの大群に続いて現れたベネクティオ。それで全

てだと思っていた非特隊一同は、その後さらに穴から現れた機体に意表を突かれる。

細身の体型に巨大な翼とでもいう様な推進ユニットらしきものを背負ったその機体は、ベネクテイオとも、ましてやクロイツリッターとも違うものであり、戸惑う一同を俯瞰する様にさらに高度を上げて極東支部中央の上空に滞空する。

と、抱えていた円盤状の物体を離して足元の高さに固定する。

直後に円盤の下側から青みを帯びた半透明の膜が広がり、それは瞬間に支部全体を覆ってしまう。

一連の動きが終わると、それを待っていた様にベネクテイオは地上を見下ろし、黒銀の装甲越しに恭弥は聞き覚えのある声を聞く。

『非特隊に告げる。この砦にいるのはわかっている。そして……出てこいシルフィード!』

「!?……僕を指名してきた……?…」

突然自分のことを挙げられて困惑している間にも、ベネクテイオの声は続く。

『貴様に決闘を申し込む。その為の舞台は既に整っている。見るがいい』

言うやベネクテイオは傍らのクロイツリッターに目配せし、それに応える様にそのクロイツリッターは支部の周囲を覆う半透明の膜にマシンガンの一連射を放つ。

放たれた弾丸は膜にぶつかって弾かれ、その表面に束の間水の波紋の様な跡を浮かばせるだけに終始する。

「この膜……バリアってことか……」

その光景に、ユウが一同を代表する様に苦々しく理解を告げる。

『この通り、逃げることはできず、外から増援が来たところで加勢もできん。それでも出てこないというのなら、この砦を壊滅させる』

「クツ……!」

「あの野郎……!」

突き付けられる事態に恭弥は歯を食い縛り、一夏はベネクテイオを怒りの目で睨みつける。

『ただし、貴様が決闘に勝利したら、我々は軍を退こう』

「……………え？」

『5分だけ待つ。その間に貴様が出てこない、もしくは他の者が手を出した場合は、容赦なくここを壊滅させる。以上だ』

言い切るや、ベネクテイオは黙ってその場に滞空し、クロイツリツターたちも銃口を下ろして待機の姿勢を見せる。

「……………決闘って……………」

「また前時代的な発想ですね……………」

一方的な、それも自分が中心となってしまう流れに恭弥は困惑し、サクラは一連のベネクテイオの発言に思わず眩く。

直後、一同の携帯端末が鳴り響き、通信越しにエリックの声が響く。

『桂木曹長……………今の話、聞いていたな？』

「……………はい」

静かに問うエリックに、恭弥は若干舌を震えさせながらもはつきりと答える。

(あいつがここに来たのは、僕に決闘を挑む為。出て行かず、そしてあの口ぶりからして負ければ極東支部を壊滅させ、逆に僕が勝てば撤退してくれる……………そして、逃げ道は無し)

ベネクテイオの主張を整理し、膜に覆われた周囲を見回すと、恭弥は一つ深呼吸して、胸の中で何かが固まっていく感覚を覚える。

「……………僕、行きます。決闘を受けます」

「恭弥さん!？」

『……………いいのか？』

その固まったものを吐き出す様に静かに告げる恭弥に、飛鳥は息を呑み、エリックはどこか申し訳なさそうに訊き返す。

「正直、怖くないって言えば大嘘になります。今すぐにも逃げ出したいくらいだ。ベネクテイオの強さはそれなりにわかってるつもりですからね……………でも、逃げ場なんてないし」

『……………わかった』

歯を食い縛る様に応じたのも一瞬、エリックは指揮官の声を飛ばす。

『織斑曹長、桂木曹長をシルフィードのもとへ移送後、自機にて待機せよ。他も自分の機体に搭乗し、いつでも出られるようにしておけ』

「了解！」

その声にパイロット全員が応じると、一夏が思い出したように告げる。

「大佐、ユイたちがヴェーガスのそばにいます。艦内へ避難させてください」

『何？』

「細かいことは後で説明します。とにかく入れてやってください！」

『……了解した。フィルシア、近くのハッチまで案内してやれ』

「了解！じゃあユイに飛鳥、あとリグル様も、ついてきて」

強く言い切る一夏にエリックは根負けした様子で応じ、その指示にフィルシアは弾かれた様に走り出す。

「ま、待ってください！飛鳥君！」

「は、はい！」

「ほら、リグルも」

「……わかった」

それを見てユイと飛鳥は慌てて後を追いつつ、カノンに促されたリグルも渋々それに続く。

その間に白式を展開した一夏は、恭弥とカノンを手招きし、2人をそれぞれ両脇に抱える。

「じゃあ行きます！しっかり掴まって」

「いかにも〃荷物〃って感じだけど、ドリフトよりはマシ……だよね？」

カノンの不安を掻き消す様にスラストの轟音が響き、2人を抱えた一夏は一目散に地下格納庫の入り口へ駆ける。

「……思ったよりは快適だね。加速の衝撃もあんま来ないし」  
「だね……」

カノンの技術的好奇心に事務的に返しながら、恭弥は薄っすら汗ばんだ手を握り締めて上空の黒い機影を見据える。

(ベネクティオ……やってみせるっ！)

恭弥とカノンを抱えた一夏が飛び立ったのと前後して、ユウとサクラもヴェーガスへ駆け出す。

直後、ユウは隣を走るサクラから鋭い視線を向けられているのに気づく。

「他のメンバーはみんな和気藹々としてるみたいだけど……私、一応先輩だから。フィルシアたちとは違って、あくまで軍人としての態度でいて」

突き放すようなその言葉に、ユウは足を止めた。嫌悪とは違う、何か関わりたくないような雰囲気を感じた。

しかしユウ自身、早くこの非特隊のメンバーと親しくなりたいという想いがあった。

「ユウさん！何止まってるんです！」

「あ？……ああ……！」

振り返ってこちらの様子に気づいた飛鳥の叫び声に、ユウは再び足を動かし、サクラを追った。

ヴェーガスのもとに着くと、サクラが最寄りのハッチを指さす。

「キミは第一デッキ」

そして、ユウにサングラス型のバイザーを手渡した。

これはIAD操縦における補助装置で、内側にリーダーや自機の情報などが表示される仕組みになっている。

さらに、パイロットの思考を読み取る”Super Resonance Waving system”通称”SRWシステム”を搭載し、機体の反応速度向上に一役買っている。

ユウはバイザーをかけて指さされたハッチをくぐり、自身の機体、ネメシス08へ走った。

ベネクティオの操縦者の声が響き渡っていた頃、極東支部司令室では、リトスの指示が響いていた。

「出せる戦機人全てを緊急発進させて！今はスピード優先。実弾の装備も許可します。ただし、発砲をはじめとする攻撃行為は追って指示するまで、もしくは相手からの攻撃があるまで厳禁。あくまで警戒のみ行うこと」

一口に、特に攻撃に関する指示を強い口調で言い切り、それがアナウンスされるのを確認すると、リトスは近くのオペレーターを見やる。

「通信は使える？」

「はい。あの膜——バリアの外にも届くようです」

「なら、すぐに他の支部に……いいえ。連邦軍に救援要請を」

「連邦軍に、ですか？しかし……」

思わぬ名前に困惑しつつ、オペレーターは外の状況を映し出す大型モニターに顔を向ける。そこには先ほど、クロイツリッターの銃撃がバリアに弾かれる光景が映っていた。

「いいから！すぐに連邦軍に——伊豆基地に連絡を入れなさい」

「！りよ、了解！」

オペレーターの言いたいことを察しながらも、リトスは声を強めて強行させる。

（加藤大尉たちは別の用で支部を出ていると聞いている。彼らが来てくれれば……あるいは……）

朝食の後、非特隊やヴァルキリーズの面々と別れたナガイは、支部内をふらふら彷徨った末、気づけば地下格納庫に佇むマジンカイザーSKLの前に来ていた。

「……………デビルマシンのくせに、こういう時は妙に落ち着くぜ」

刺々しい外見のカイザーを眺め、そうした見た目から抱くには我ながら不自然な“安らぎ”とでもいうべき精神的平穏に、ナガイは自嘲気味に呟く。

知らないものに囲まれ、面倒臭いことこの上ない事態に直面して悶々としているナガイにとって、この世界で唯一知ったものである力

イザーは、物理的にも心理的にも安心材料なのかもしれない。

「……………何だあ?」

そんな中で唐突に響いたサイレンに、ナガイは続くアナウンスを片手間に聞きながら周囲を見回す。

と、隣の格納庫からそれぞれ武器を手にした戦機人が数機出て行くのを見る。

「また何か出やがったのか?」

思わず呟いていると、戦機人と入れ替わる様に、一夏に抱えられた恭弥とカノンが格納庫に飛び込んでくる。

白式を着た一夏が恭弥をシルフィードの、カノンをアトランティア・ルージュの足元に下ろし、自身も突っ込む様にユニコーン・白のコクピットに入ると、真っ先に起動したシルフィードがエレベーターへ向かう。

それに続いて白が歩き出す傍ら、それらの様子を見ていたナガイに気づいたのか、顔を向けたアトランティアからカノンの声が響く。

『あ、ナガイさんここにいたんだ。なんか上今危ないからさ、近くのシエルター入った方がいいよ』

「いったい何が起こってんだ?」

『ルミエイラの襲撃。と言っても、向こうのリーダーは恭弥との決闘を御所望みたいだけだね』

「ルミエイラ?……………あの鎧ロボットのことか?」

『そう。じゃ、私も行かないと』

言うやカノンはアトランティアを歩かせ、格納庫に残っているのはナガイとカイザーだけになる。

「……………シエルターよりこっちの方がまだ安全じゃねえか」

カイザーの足元を見ながら独り呟くと、ナガイは視線の先にある髑髏型航空機——スカルパイルダーに駆け寄る。

カイザーのコクピットたるそれに乗り込むと、すぐに垂直上昇を行い、ぽっかり穴が空いたカイザーの頭頂に位置する。

「パイルダー、オン!」

やや控えめな叫びに応える様にパイルダーは両翼を折り畳んで髑

體の下顎を形成し、そのままカイザーの頭頂に差し込まれて一体となる。

瞼が開く様に一瞬強い光が目<sup>くろがね</sup>に宿ったのを合図に、神憑りな、あるいは悪魔的な性能を誇る黒鉄の巨人——マジンカイザーSKLが起動する。

(コイツの頑強さは半端じゃねえからな。籠城するならこっちの方がいいだろうし、動けりや逃げること<sup>も</sup>できるしな。武器がありや戦うことも……)

そこまで考えると、先ほど出て行つた恭弥たちの様子が脳裏を過る。

「つて、何であいつらのことが浮かぶんだよ!?別に俺には関係無えだろうつー……あー、とりあえず上行こう。地下にいちゃ逃げたくても逃げられねえ」

言うやナガイはカイザーを歩かせ、50メートル級には窮屈な通路をエレベーターに向かって進む。

出動のアナウンスが響くや否や、パイロットスーツへの着替えも省いて戦機人のコクピットに飛び込んだノゾミは、最低限の点検を済ませるや、自機も含めた第四分隊5機を地上へと向かわせる。

エレベーターを上がって地上に出ると、穴から現れた時と同様に上空に滞空し続けるルミエイラの軍団をモニター越しに見据える。

(相手はベネクティオと、クロイツリッターの通常型が16、ビーム持ちが8、あとバリア装置に付いてる翼付き……合わせて26機か。ヴァルキリーズがあと出せるのは第三分隊の3機、非特隊は全部で6機とヴェーガス1隻——もつとも、空を制限されては飛行艦艇の本領は発揮できないか——計14機。高性能機が複数あるとはいえ、やはりルミエイラの方がやや優勢か……?)

周囲の様子と事前に知り得ている情報を総合しながら、あまり嬉しくない現状を否応なしに把握していく。

その時、



『オウオウ。ルミエイラだか何だか知らねえがな、いきなり人ンチにカチコミに来て、連邦の奴とタイマン張らせろって、あたしらは眼中に無えってか!?舐めてんのかこの鎧野郎っ!!』

隣の戦機人——アキラ機から怒声が響くや、その手にしたガトリングガンの銃身が持ち上がりそうになる。

刹那、

『!!……』

サヨコ機のチョップがアキラ機の頭頂に落ち、ノゾミは通信映像越しに激震に悶えるアキラを観る。

『サヨコテメエ!何しやがるっ!!』

『こっちの台詞よっ!何向こうを挑発してるの!!司令の命令忘れたの!?!』

『うっ……!』

怒られて上っていた血が多少は下りたのか、アキラはいくらか冷静になる。

が、ルミエイラを睨みつける眼光に衰えは無い。

『忘れちゃいけないがよ……攻め込まれて何もしいってのは、流石に悔しいだろう……?』

『そうだよっ』

アキラに続くようにカノンの声が拡声器越しに響くと、ノゾミはアトランティア、白、シルフィードがエレベーターで上昇してくるのを見る。

『機動兵器で決闘するって言うなら、肩に赤い布でも巻いて出直してこいー』

『……貴女が前にいた世界では、そんな風習があつたの?』

『ううん。そういうわけじゃないけど』

『じゃどういわけよ……』

ミオの好奇心からの質問とカノンの拍子抜けな回答、それに呆れるサヨコの声がそれぞれ響いたのと前後して、ベネクティオは地上に現れたシルフィードを見据える。

(今はともかく、ルミエイラ御指名の桂木曹長に期待するしかないわ

ね)

天と地に佇む対照的な色合いの両機を見比べながら、ノゾミは操縦桿を直に握る手に力を込める。

(こんな時でもマイペースだな。カノンちゃん……)

地上に出るやベネクティオに物申したカノン、そのどこかズレているのだろう発言と、敵の大群の前でそんな態度がとれる彼女の度胸とでもいうべきものに、恭弥は呆れと感心を五分五分に抱く。

もつとも、それが無意識に張っていた気をいい具合にほぐしてくれたのか、強敵を前にしながらもその心境は先ほどよりも落ち着いている。

「結果オーライ、かな?……ありがとう」

『何です?』

「いや、こつちの話」

通信越しに独り言が聞こえたのか、白の頭部越しに心配の視線を寄こしてくる一夏に応じると、恭弥は一つ深呼吸する。

「さて、僕が行かないと收拾つかないようだし………行ってくる」

『グッドラック!』

『………勝ってきてください』

アトランティアにサムズアップをさせるカノンと、静かだが力強く告げる一夏、言わずもがななことを言って強がる自分に応じてくれた2人を見据えると、恭弥はペダルに足を掛ける。

『……あ、そうだ』

しかし踏み込もうとする直前、一夏が何かを思い出した様に声をかける。

『じゃあ、負けたら恭弥さんは、そうだなあ……リグル様のワンピース着て1週間過ごしてもらいましょうか』

「なっ!?!」

藪から棒な、それでいて場違いもいいところな提案に、恭弥は思わず目を丸くする。

『えっ！一夏、アンタそんな趣味が!?……いや、私も人のこと言えない……かもしれないけど。いろんな意味で……』

カノンも動揺の声を上げ、ヴァルキリーズの戦機人たちも白を横目で見ながらひそひそ話を始める。

『……いや、悪い。冗談のつもりだったんだよ。俺も昔そんなこと言われて、いい感じに気持ちほぐれたから、良かれと思って……』  
一夏の方もこの反響は予想外だったらしく、周りの目に小さくなりながら弱々しく告げる。

『……一夏君もありがとう。ただ、準備はしなくていいよ。負けないから』

『……了解』

その意思を汲み、笑顔で強く応えた恭弥は、一夏の短い返事を聞くと、今度こそペダルを踏んで上昇する。

背部推進器を吹かして飛び立つシルフィード。その小さくなっていく後ろ姿を見上げている一夏に、カノンの声がかかる。

『心配? 恭弥独りで行かせるの』

『本当言うとな……』

単刀直入な問いに、即本心を答える。

「でも、俺たちまで行ったらルミエイラは攻撃を始めるそうだから……今の俺に——非特隊俺達にできるのは、ただ信じて待つことくらいだよ。俺もさっきの冗談言われた時、そうして見送ってもらったからな」

『へー? 「漢おんの友情」ってやつ? 熱いじゃん!』

「そういうカノンこそ、本当いつもブレないよなあ」

嬉々として告げるカノンに、一夏は今までのやり取りから感じた彼女に対する率直な感想で応じる。

カノンと一夏、それぞれに硬くなっていた気分を適度にほぐしても

らった恭弥は、しかしベネクテイオの姿が大きくなるにつれ、再び体中が硬直していくのを自覚する。

（落ち着け恭弥。初めて手合わせした時、ほとんど何もできなかったことは確かだ。複合盾こそ持っていて、機体性能に大した差は無いと考えていい以上、相手の方が上手なものも認めよう………それで僕だつてこの数日遊んでたわけじゃない。実戦だつて何度か経験して、こうしてここにいられるんだ。少なくとも、あの時よりはマシになったんだ！今はそんな自分を信じよう。見送ってくれた一夏君とカノンちゃんの為にも……）

心の中でそう自分に言い聞かせ、気持ちを鎮めていく間に、ついにベネクテイオと同じ高度に達する。

『来たか。決闘を受諾してくれたこと、まずは感謝しよう。それと、生憎こちらの決闘の作法は把握していなかったのな、赤い布は用意してこなかった。許せ』

（あ、カノンちゃんの言つてたこと聞いてたのか………というか、この人結構律儀だなあ……）

ベネクテイオの乗り手の態度、特にカノンの発言を受けた軽い謝罪に、恭弥は場違いと自覚しつつも感心する。

「それはどうも……確認するが、僕が勝ったら大人しく引き下がる、決闘中は双方手を出さない、それで間違いないな？」

渴きつつある口周りに意識を集中して、毅然とした声を出すように努める。

強がりでしかないことは百も承知だが、ベネクテイオから聞こえる自信に溢れた声に萎縮しそうな恭弥には、大事な抵抗行為の一つだ。

『そうだ』

「……なら」

ベネクテイオの短い返答を聞くや、恭弥は薄っすら汗が浮かんだ手で球形操縦桿を握り直す。

そんな一連の光景を、グリムは例の水晶玉越しに観賞していた。

「さて、そろそろだね」

シルフィードとベネクティオが対峙したその時、頃合いとばかりに  
呟くと、右手をゆっくりを上げる。

「悪いねアリア。君を傷つけることになって。でも、これは戦争だからね」

言いながら、その実微塵も罪悪感の無い笑顔を浮かべると、グリム  
はパチンツと指を鳴らす。

「勝つ為に利用できるものは、何でも利用しなくちゃ」

目の前に滞空するベネクティオが、腰に提げたルミナ・グラティウスと同型の剣を人のように抜き放つ。

「！」

それを見た恭弥もシルフィードにルミナを持たせ、いつでも斬り掛  
かれる態勢を整える。

そして、正にその時だった。

それまで周囲に警戒の目を向けていたクロイツリッターたちが突  
然項垂れたかと思つた次の瞬間、顔を上げると同時にある機体は剣を  
抜いて地上に突撃し、ある機体はマシンガンやビーム銃を撃つてそれ  
を援護した。

「!?!」

『何だあ!?!』

唐突な事態に恭弥は狼狽し、ベネクティオからも戸惑つた声が漏れ  
る。

その間にもクロイツリッターの1機が迫り、振り下ろされた剣を恭  
弥は脊髄反射でルミナで受け止め、胴部を蹴って距離を開けてビーム  
を撃ち込んだ。

「これって……………」

周囲を見回すと、地上の各地で非特隊とヴァルキリーズもクロイツ  
リッターの軍団と砲火を交えているのを確認し、その光景に恭弥は怒  
りの目でベネクティオを凝視する。

「騙し討ちかあ!!」

腹の底からの叫びと共にひと息に間合いを詰め、ルミナを振り下ろすものの、その一撃はベネクティオのルミナに防がれてしまう。

もつとも、その動きに以前見た時のキレは無く、非常に機械的で虚ろなものだ。

「決闘と言いながら土壇場で攻撃命令って、これがそつちのやり方かっ!!」

『……………違う』

そのままルミナを押し込みながらさらに叫ぶ恭弥に、ベネクティオの操縦者は震えた声で応える。

その声に先ほどまでの威風堂々としたものはなく、恭弥の攻撃にもたった今気づいたような動揺を含んでいる。

『違う……………違う。違う!違うっ!違う違う違うっ!!』

次の瞬間にはうわ言のように叫びながらルミナを払い、自分の剣をデタラメに振り回すベネクティオに恭弥は慌てて距離をとり、直後にベネクティオは近くに滞空している地上へマシンガンを撃ち続けるクロイツリッターを引き寄せる。

『何をしている!命令だ、すぐに攻撃をやめろっ!!』

若干湿気を含んだ怒声を飛ばすものの、クロイツリッターは聞く耳持たずと言わんばかりに銃撃を続ける。

『聞こえないのか!?攻撃を今すぐやめろっ!!』

さらに怒鳴り、マシンガンの銃身を下げようと手を伸ばそうとするや、クロイツリッターはベネクティオを払い除ける。

『!貴様あっ!!』

それで堪忍袋の緒が切れたのか、一気に懐に入ったベネクティオはルミナでクロイツリッターを頭から一刀両断し、落ちていく残骸を魂が抜けたように眺める。

(この攻撃……………少なくとも、ベネクティオの人の指示じゃないのか……………?)

一連の光景を見て、何よりも泣いているようなベネクティオの操縦

者の怒声を聞いた恭弥は、さつきまでの怒りを鎮めてそのように考える。

直後、背後に悪寒が走る。

「！」

咄嗟に左に動いて脇をビームが行き過ぎていくのを見ると、恭弥は振り返りざまにルミナのビームを散発的に放ち、攻撃してきたグラントツハーケンを牽制しつつ距離を詰める。

あと一息で懐に飛び込める間合いに差し掛かると、相手もそれを察したのか、右手のビーム銃を腰に提げ、代わりに左脇の小ぶりな棒状の装備を手に取る。

直後に棒の先が2つに割れ、そこから幅広のビーム刃が発生する。

「ビームの剣!?!」

予想外の装備に恭弥は一瞬戸惑い、それがシルフィードの動きを鈍くしてしまう。

そしてその隙を突こうと、グラントツハーケンはビーム剣の先を突き付けて突進してくる。

「しまっ……!?!」

悔いた直後、縮まりつつあった両者の間に太い光弾が割って入り、咄嗟に両腕を前に出してシルフィード本体を庇った恭弥は、腕の間から左腕の砲口を掲げながら上昇してくる白と、それに続くアトランティアを見る。

「すまないー!」

『お礼は後で!』

短いやり取りを交わすと、白はシルフィードの前に滞空して雪片を展開し、恭弥と、その隣に着いたアトランティアは背後から迫ってくるクロイツリッター2機に対峙する。

『決闘とか言っておいて、結局騙し討ち!?!』

「いや、どうも向こうも想定外みたいだ」

アトランティアを介して怒りの眼差しでクロイツリッターを睨むカノンに、恭弥は放心状態のベネクティオを見やりながら返す。

「とにかく今は!」

『ええ。コイツ等をどうにかしましょう！』

『だねっ！』

恭弥、一夏、カノンはそれぞれに告げると、各自一斉に正面の敵に距離を詰める。

ルミナの切っ先を突き付けて迫るシルフィードに、目の前のクロイツリッターは両脚からミサイルを発射し、追尾を始めた4発が軌道を微修正しながら突っ込んでくる。

「！」

咄嗟に止まった恭弥は射撃モードにしたルミナで迎撃を試みるものの、それを待っていたといわんばかりに今度はクロイツリッターが剣を抜いて迫る。

刹那、下から飛来した4本のビームがミサイルを火球に変え、1本がクロイツリッターの胸部表面を掠る。

「！」

それで動きが止まったクロイツリッターに、恭弥はペダルを一杯に踏んでシルフィードを突っ込ませ、一瞬で距離を詰めた加速の乗ったルミナを掠り傷がついた胸部に突き入れる。

引き抜くと同時に地上へ落ちていくクロイツリッターを見やった恭弥は、その視野の中にこちらを見上げるテンペストを捉える。

「サクラさん、助けてくれたか……」

後で礼を言わなければと思いつつ、次の敵を探しに移動した。

恭弥、カノンと言葉を交わした一夏は、すぐにスラスタを炊いて正面のグランツハーケンへ突貫する。

直後にグランツハーケンは左腕を伸ばし、手首のミサイルを2発放ってくる。

（！回避——いや、確かホーミングだ！）

相手の攻撃の性質を思い出して一瞬行動が遅れ、その間にもミサイルは間近に迫ってくる。

その時、



『そのまま行けえっ！一夏っ！』

「!?」

聞き覚えのある声の叫びと共に下から放たれた弾雨にミサイル2発は粉碎され、直感的に声に従った一夏はそのままグランツハーケンに迫る。

相手はビーム剣を横にして胸部の前に出し、その幅広のビーム刃で白の攻撃を受け止めようとする。

しかし、

「ビームならっ！」

言うや一夏は左腕の雪羅の指を真っ直ぐに揃え、5本の爪の先端からそれぞれエネルギー刃を伸ばす。

巨大な手刀となったそれはグランツハーケンのビーム刃を掻き消す様に貫き、そのまま本体胸部を貫く。

行動不能になって落ちていくグランツハーケンを確認すると、一夏は下界にギガンティックの姿を見つける。

「フィルシアか。助かった」

言いながらエネルギー刃を消した左の親指を立てると、一夏はその場を後にした。

正面から降り注ぐマシンガンの弾幕を、カノンはアトランティアを縦横に振って寸でのところでかわしていく。

「コイツッ……い！」

進めないっことに歯軋りする間にも脚部ミサイル4発が殺到し、咄嗟に両腕で本体を庇ったカノンは爆発の激震に揉まれることとなる。

少しして揺れは収まり、再生途中の腕の合間から正面を窺うと、

「……ヤバッ!!」

剣を突き立てたクロイツリッターが、推進力を全開にして突っ込んでくるのを見る。

(間に合わない！)

心中に断じるや、カノンは正面に構えた剣でクロイツリッターの突

進を受け止める。

しかし、

「今度は後ろ!?!」

罅迫り合いで身動きがとれないアトランティアの背後にグランツハーケンがつき、ビーム銃の銃口をその背中に合わせる。

刹那、

「!?!」

グランツハーケンの胸部を後ろから三又のビームランスが貫き、危機を脱したと直感するや、カノンは正面のクロイツリッターの腹部に蹴りを入れて間合いをとり、一気に上昇する。

「喰らえええ! 引力雷落としいっ!!」

腹の底からの叫びと共に急降下をかけ、頭上に掲げた剣を勢いを乗せて振り下ろす。

「あれえ? なんか違うなあ……」

直前の叫びに疑問符を浮かべながら、頭頂からまともに斬り込まれて真つ二つになったクロイツリッターが落ちていく様子を眺めていると、傍らにビームランスを持ったネメシス08が寄ってくる。

「ネメシス08? 今のグランツ潰してくれたのってユウ?」

『グランツ? ……ああ、ビーム付きの鎧か。ヤバそうだったから……』

「サンキュー! ナイスアシスト!!」

返答を聞くや、カノンはアトランティアに左拳を突き出させる。

『! ……オレだって、これくらいはしないとな』

それに対するユウの気持ちを引き写した様に一瞬戸惑ったネメシス08は、しかし一瞬後にはぎこちないながらも左拳を突き合わせてくる。

直後、

『各機、一度集結して! 風潰しじや罅が明かないわ』

通信越しにノゾミの声が響き、下を見るとヴァルキリーズ第三、第四分隊と、非特隊の機体たちが一カ所に集まっている。

『オレたちも行くこう』

「だね。あちらさんも態勢立て直すみたいだし」

ユウに応じつつ、上空、それもバリア発生器の近くに集結しつつあるクロイツリッターたちを確認したカノンは、ネメシス08と並んで地上へ降下する。

大陸の紛争抑止委員会の基地を飛び立って数時間。

光秋、ライカ、メイシール、ウォルターを乗せたレイディバードは小さなトラブルも無く、伊豆基地を目指した静かな飛行を続けた。

一行が集まるキャビンには、メイシールの端末操作の音と、壁にもたれて仮眠をとる光秋の寝息だけが控えめに響き、ウォルターとライカは目を合わせるわけでもなく、それぞれ窓の外を流れる景色を呆然と眺めている。

その様子は、さながら長距離旅行から帰ってくる際の疲れを溜め込んだ人々のようだ。

そんな静寂に終わりを告げたのは、出し抜けに響いたアナウンスだった。

『伊豆基地より緊急入電！ヴァルキリーズ極東支部にルミエイラの大部隊出現。至急救援に向かわれたし、です！』

「！」

操縦士の慌てた声に光秋は飛び起き、ライカも反射的に席を立ってコクピットのドアを開ける。

「極東支部が？」

「はい。至急向かえと」

確認する光秋に、操縦士は頷いて応じる。

「どれくらいかかります？」

「現在位置からですと……どんなに飛ばしても30分はかかるかと」  
(何でそんな位置関係にいる我々に、こんな指示を出すんですか……)

光秋の問いに答える操縦士。その回答に、ライカは口の中に呆れを漏らす。

一方、光秋はアゴを撫でて思案顔を浮かべる。

「……ランドルフ司令、“アレ”を当てにしたか？……恭弥君たち放っておくわけにもいかんし、やむを得んか」

「？」

小声の決断にライカが首を傾げた一瞬後、すぐに光秋のよく通る声が響く。

「マザー！これはは極東支部に向かつてください。以後の指示は伊豆の方に仰いで。ミヤシロさんは僕と格納庫へ。出撃する！」

「……了解」

操縦士の回答と光秋の指示内容の矛盾が引つ掛かったのも束の間、理解するよりも先に動き出した足が、ライカを格納庫、そこに収まるシウルフツエンへと運んでいた。

「今から出撃？」

「手はあります。あまり気は進まないけど……」

ライカと同じ疑問を抱いたらしいメイシールの問いに応じつつ、光秋はウォルターを見やる。

「コバックさんはここで待機してください。追って連絡します」

「待機って……？」

不安を浮かべるウォルターに、しかし対応する時間が無い光秋は皆まで聞かず走り出し、格納庫に出る。

すでにライカが乗ったシウルフツエンは起動を完了しており、光秋も懐から出現させたニコイチに乗り込むと、後部ハッチが解放される。

『ホワイト1、出ます！』

『バレット1、出ます』

言うや各々乗機を空に踊り出させ、直後に光秋の声が通信機から響く。

『ミヤシロさん、ニコイチの肩に掴まって』

『肩に？』

『いいからー！』

「……了解」

急かす声に応じると、ライカはレイディバードより上の高度に位置

したニコイチの後ろの回り込み、シウルフツエンの両手でその両肩を掴む。

『昨日2回、休息も不十分な気がするが……うしっ!』

不安を漏らしながらも最後には気合いを入れて気持ちを切り替える光秋。それに応じるように、ニコイチの節々が展開して赤い骨組みが露わになると、そこから発した燐光が2機を球状に包む。

(この光……まさか、救援に来てくれた時の……?)

モニター越しに燐光に覆われた周囲を見回しながら、ライカは伊豆への移動中、所属不明機たちと対峙する中で目撃した赤い光のことを思い出す。

直後、

『しっっかり掴まって!』

「?……!!」

光秋の叫びが響くや、レイディバードが遙か後方に遠ざかり、辛うじて見えていた日本列島沿岸が見る見る大きくなっていく光景に、ライカは言葉を失った。

その十数キロ後方では、赤い航空機——イーグル号のコクピットに収まったイシカワが、一連の光景を眺めていた。

「何だありゃ?火の玉……?おっと!」

流星にこの距離では赤い光の正体——転移早々に遭遇したニコイチとシウルフツエン——は判別できず、目を凝らしている間に速度を上げた輸送機に慌てて足を合わせると、ゲットマシン3機はつかず離れずの距離を維持しながら後追いを続ける。

非特隊とヴァルキリースの戦力を集結させたノゾミは、改めて周囲の状況に目を凝らす。

(極東支部全体がバリアに覆われ、出ることも入ることも不可能。ルミエイラ側——クロイツリッター12、ビーム付き5——は上空に集

結し、態勢を立て直してる。こつちにも空戦機はあるとはいえ、この数的不利に対処するのは厳しいでしょうね……やはり目下の問題は……」(「せめてバリアの発生装置させ壊せれば、増援の受け入れが可能なんだけど……その発生装置はバリアの外だし……」)

言いながら、翼付きの機体と共にバリアの外に滞空する円盤を憎々しげに見据える。

『なら、ヴェーガスの艦砲でも使ったらどうだ？あれくらいの主砲なら流石に通るんじゃない？』

『バカを言え！』

アキラの提案を、ヴェーガスの砲術士、アインの怒声が遮る。

『空を封じられた状態で飛行艦艇が出せるわけないだろう！こんなデカブツが地を這って、的にしてくれと言ってるようなものだ』

『それに、万が一防がれた場合、跳弾で被害が拡大する可能性も……』  
さらに怒鳴るアインに続いて、第三分隊隊長アリスが慎重な声で告げる。

「……確かに、2人の言うことはもつともね。でも、そうなるかどうか……」

アインとアリスの意見を肯定する一方、代案が浮かばないノゾミは言葉に詰まってしまう。

それは焦りとなって知らぬ間に視線を下げ、地下の格納庫、そこに力無く横たわるタロウを——未だその中にいる桃矢を幻視させる。

(このままルミエイラの攻撃を許せば、桃矢だって……)

その時、

『いや、もつとシンプルで確実な方法ありますよ』

「！それは本当？桂木君」

『はい。こんなのはどうです？』

すぐに顔を上げたノゾミの問いに、言い出しの恭弥は白を一見すると、通信越しに非特隊とヴァルキリーズの全機に自分の考えを述べた。

自身が提案した作戦を早口で述べる恭弥。

それをヴェーガスのブリッジで聞いたエリックは、アゴを撫でながら再度思案する。

「俺はネメシスタイプ以外の戦力を完全に把握しているわけではないが……本当にできるのか？」

『このメンバーでなら自信があります』

探る様な問いかけに、恭弥はやや緊張を含んだ、しかし明瞭な声で答える。

「……わかった。非特隊の指揮官代行としては実行してもいいだろう。ただし、全機必ず帰還すること。カワシマ分隊長とティグリス分隊長はどうか？」

『私は……私も、それが今できる最善だと思います』

後半は若干語気を強めながら告げ、ヴァルキリーズ側に確認をとるエリックに、ノゾミも迷いを断つ様に言う。

『私も同意見です。それに、向こうももう待ってくれそうにないし』  
アリスがそう告げる様に、上空に集まっていたルミエイラはビーム付き1、クロイツリッター2の分隊に分かれて再攻撃に入りつつある。

「なら、こちらもうかうかしてられん。作戦準備開始だっ！」

『『了解！』』

エリックの号令が飛ぶや、各機は自身の配置につく。

「ヴェーガスも格納庫から出せ。支援射撃くらいはできるだろう」

「正気か!？」

続くエリックの指示に、アインが目を丸くする。

「さっきも言っただろう？ 飛べない状況でヴェーガスを出しても的になるだけだぞ」

「そうだが、何でもかんでも子供らとヴァルキリーズに任せとくわけにもいかんだろう？ こちらにも面子というものがある」

「……………わかった」

体面を気にしながら、しかし深いところで違う意図を感じさせるエリックの言葉に折れたアインは、渋々ながら艦の武装のチェックを始

める。

「ヴァーガス、格納庫から出ます」

その横では、予め心得ていたようなカトリーヌが、満足そうな顔を浮かべて舵を握っている。

と、ブリッジのドアが開き、シンジに率いられたユイ、リグル、飛鳥が入ってくる。

「リーダー、連れてきたぞ」

「ああ、そういえば迎えを頼んでいたな」

シンジの呼びかけに緊急出撃が始まった頃に出した指示を思い出しつつ、エリックは少年少女らを見やる。

「シエルター代わりに来てもらって悪いが、本艦も機動兵器部隊支援の為に前に出ることになった。すまないが艦の奥に——」

「いえ、ここにいさせてください」

エリックの説明が終わらぬ内に、ユイが強い意志を含んだ声を出す。決して大きな声ではないものの、その目は梃子でも動かないと物語っている。

「やられる時は何処にいてもやられるものです。状況がわからない所において怖がるくらいなら、見通しのいい所において怖がる方がいい。それに一夏さ——非特隊のみなさんの戦いを観たい気持ちもあります。お願いします！いさせてください！」

言いながら頭を下げるユイに、飛鳥も続く。

「俺も、ユイさんと同じ気持ちです。お願いします！」

「……………わかった。その代わり、隅の方で大人しくしてもらおうぞ」「はい！ありがとうございます！」

説得された、という以上に、2人の言葉に引っ掛かるものを感じたエリックの許可に、ユイと飛鳥は再度深々と頭を下げる。

それを確認すると、エリックはリグルに顔を向ける。

「……………それで、リグル様はどうします？貴女だけでも奥に避難しますか？」

「……冗談を。さっきシロサキさんがおっしゃっていたでしょう？こうなってしまうえば、何処にいてもやられる時はやられます。それなら、



ここで私の騎士の活躍を観戦する方がずっと有意義です」

「……了解した。しかし戦闘中はその2人同様、隅の方で大人しくしていただきますよ」

「承知しました」

単純計算でも倍はあろう歳の差、そして艦長独特の威厳を醸し出すエリックに対し、物怖じしない態度を終始崩さずにやり取りしたリグルが首肯を返すと、ヴェーガスは完全に格納庫から出る。

「周囲への被害を考慮し、射撃は原則副砲のみとする。主砲と各ミサイルは封印、ホーミングビームはギリギリまで撃つな」

「また無茶な注文を……」

嘆息を漏らしながらも、アインは手元のモニターに指を走らせ、エリックの指示通りに各種火器の設定を入力していく。

その傍らでは、ユイたち3人がエリックとの約束に従ってブリッジの隅に移動し、近くの窓から外を眺めている。

「あの鎧みたいなのが敵のロボット……?」

「サイズと……外から見た限りの特徴でいったらPTに近いかな?でもあんな形の機体見たことないし、何処のメーカーが作ったのか……」

ユイと飛鳥がそれぞれ抱いた疑問を呟いていると、リグルが神妙な面持ちでクロイツリッターの1機を注視する。

「あの機体……何かを吸ってる……?」

「『吸ってる』?」

訊き返す飛鳥に、リグルは外を指さしながら応じる。

「わかりませんか?私もはつきりとは感じられないんですが、あの胸、丁度十字マークが描かれている辺りに向かって、周囲を漂う何か………力?………のようなものが一定間隔で吸われていつているよ  
うな……」

「!?」

リグル自身自分の感じたことを整理し切れず、それに基づいた要領を得ない説明に、飛鳥とユイはどう反応していいか困った顔を見合わせる。

## 19 裏切りの決闘 後編

恭弥の提案した作戦、それに基づいた配置を終えた非特隊・ヴアルキリーズ協同部隊は、早速行動を開始する。

『準備いいわね……作戦開始!』

戦機人の拡声器越しにノゾミの号令が飛ぶや、シルフィード、ユニコーン・白、アトランティア・ルージユ、ネメシス08が、各々得物を構えて急上昇する。

それに合わせる様に、上空からはクロイツリッター2、グランツハーケン1の分隊が5組、マシンガンやビーム銃を撃ちながら急降下してくる。

『行くぞユウ君!』

『了解!』

恭弥とユウの叫びを表す様にシルフィードとネメシス08が速度を上げ、地上からは一定間隔に散開したアキラとサヨコ、アカネの戦機人3機、ギガンティックのガトリングガンによる援護射撃が行われる。

戦機人の各自1挺、ギガンティックの4挺、計6挺による厚い弾幕が形成され、シルフィードらに向かっていたクロイツリッターたちが分隊ごとに散り散りになると、内2組が再度恭弥たちに迫る。

先行していたシルフィードとネメシス08を1組が囲むと、クロイツリッター2機がマシンガンを斉射し、それを縦横に動いてかわしつつ、恭弥もルミナのビームを、ユウもマシンガンを放って応戦する。

しかし、

『!?!』

互いに反射的な回避行動が続いて周囲把握が疎かになっていたのか、気づけば背中を合わせている状況に2人は驚愕する。

『しまったっ!』

『誘いこまれたか……!』

ユウと恭弥が歯ぎしりする間にも、その上空にグランツハーケンが着き、しっかりと両手持持したビーム銃の口を2人に合わせる。

その時、後方下から飛んできた大口径弾がグランツハーケンの右脚を付け根から砕き、衝撃でブレた銃口から放たれたビームは明後日の方へ飛んでいく。地上に展開していたノゾミとミオ、アリスら第三分隊3人の大口径レールガン装備の戦機人計5機、内ミオ機による援護射撃だ。

『！』

その隙を逃さんとユウはネメシス08を加速させ、移動中に持ち替えたビームランス、その三又の穂先をグランツハーケンの胸部へ突き入れる。

動力を焼かれたグランツハーケンが落下していく傍ら、恭弥はシルフィードの肩部レーザーキャノン撃つて正面のクロイツリッターの頭部を潰し、振り返りざまに後ろのクロイツリッターをルミナの横払いで胸部から両断、そのまま一回転して正面の機に間合いを詰めると突進の勢いのままルミナの切っ先で刺し貫く。

『一夏君たちは？』

クロイツリッター2機の落下を確認するや恭弥は周囲を見回し、こちらもクロイツリッター2機のマシンガン斉射に追われている白とアトランティアを捉える。

二方向から迫る銃撃を、白とアトランティアは不規則に動いて避けていく中、2機が背中合わせになる。

それを両側からクロイツリッターたちが挟み込み、4者が一列になった刹那、

『今——』

『——だあああつ!!』

一夏とカノン、2人分の叫びと共に白とアトランティアは駆け出し、それぞれ突き出した剣の切っ先を正面のクロイツリッターに打ち据える。

若干狙いが逸れた一夏は相手の左腕を肩から切断するだけに終わる一方、カノンは狙い通り胸部に命中させ、そのクロイツリッターは糸が切れた様に落ちていく。

その時、アトランティアの頭上にグランツハーケンが着き、幅広の

ビーム剣を振り下ろしてくる。

『ヤバッ!』

『カノオオオン!!』

それを見るや絶叫と共に一夏は2機の許に接近し、雪羅の指先から伸ばしたエネルギー刃をグランツハーケンのビーム剣目掛けて振るう。

零落白夜に触れたビームは瞬時に掻き消え、がら空きになった相手の腹部に右蹴りを入れて距離をとったのも束の間、一気に懐に飛び込んだ一夏は接近の勢いが乗った雪片式型を胸部に突き入れる。

『バカ一夏! あんま消耗したら——!』

その行動に、カノンは感謝以上に作戦遂行の観点からの焦りを覚えるものの、後ろから左腕を失ったクロイツリッターの銃撃が加わったために回避に専念する。

銃弾を撃ち尽くすやクロイツリッターはマシンガンを2人の方へ放り投げ、白がそれを払う間に右腕と両脚の全ホーミングミサイル6発を近距離から撃ち込んでくる。

(避けられない)

同時に直感するや、一夏とカノンはそれぞれ両腕を前に出して機体を庇う。

その時、2人に迫っていたミサイル群の前に胸部に穴を空けたグランツハーケンの残骸が躍り出る。

『!?!』

ミサイル6発の直撃を受けた残骸は木端微塵になるものの、白とアランティアは若干爆風に煽られるだけで事なきを得ると、慌てて残骸が飛んできた辺りを見る。

『アレって……カイザー……?』

『ナガイさんか?』

地下格納庫に続くエレベーターの近くに佇む黒鉄の巨人——マジンカイザーSKLに、カノンと一夏はそろって目を丸くする。

と、2人の横にシルフィードとネメシス08が寄ってくる。

『アレって……特機? あんなものまで……』

『ナガイさん、どういいうつもりだ……?』

初めて見るカイザーにユウは啞然とし、あれほど戦うことに消極的だった乗り手の意図を図りかねた恭弥は困惑する。

それに合わせる様に、散発的な支援砲撃が続くヴェーガスからエリックの声で通信が入る。

『ナガイ・ゴウト、貴様何をやっている！民間人が戦闘に介入するなど——』

『手組んでやる』

『……何?!』

エリックの怒声を遮る様に、ナガイの決して大きくはない、しかし明確な意志を乗せた声が響く。

『テメエら非特隊と手組んでやるつつつてんだ。このルミエイラといかいう連中、下で黙って聞いてりやあ、グダグダ口上垂れた上で、騙し討ちなんてクソつまんねえマネしやがって……気に入らねえんだよッ！そんな連中ブチノメせるんだったら、テメエらと手組んでやるッ!!』

揺れる気配が全く無い声色で言い切るや、カイザーの目でヴェーガスを見据える。

『………なんか、随分凄い理由で加わろうとしてるな。あの特機の人』

『いや、あれは要約すると……「べ、別にお前たちの為に戦ってやるんじゃないんだからね！」ってことじゃない? うくん、ツンデレ乙』

『とりあえずカノンッ！テメエ後で顔貸せっ!!』

さらに啞然とするユウにカノンが独自の解説を述べるや、一行を見上げたカイザーから怒声が響く。

『え? 顔貸せって……まさかの告白?! JC相手に、会ってまだ1日も経たずに?! いやくん、ナガイさん手が早くい! でもごめんねえ。私女の子しかそういう対象として見れなくて——』

『黙らねえと今すぐブレストリガーぶちこむぞッ!!』

『え? いきなりそんなブツといのを女の子にぶち込む?! あくんダメッ! 心の準備が……!!』

『…………つくづくマイペースだな、カノンちゃん』

『あの勢いは誰にも止められませんね……』

『オレ、このチームでこの先やって行けるのかな……………?』

どこまで本気かわからないカノンと割と本気な様子のナガイの会話に、カノンの言動に慣れつつある恭弥と一夏は遠い目で感想を溢し、ユウは先のことへの多少の不安を覚える。

そんな微妙な雰囲気を破る様に、地上に攻撃をかけていたルミエイラ機3組の内の1組が恭弥たちの許へ迫り、先頭のグランツハーケンがビームを撃ってくる。

『危ない!』

すぐに一同の前に出た一夏が白のバリアを展開してそれを受け流すが、シルフィードら3機は批判の視線を向ける。

『だから、一夏君はあんまり消耗するなって!』

『今なら上はマシンガン持ち2機だけだ。ここはオレたちに任せていけ!』

『すみません!』

言いながら白とクロイツリッターたちの中に入る恭弥とユウに応じると、一夏はスラスターを焚いて上昇し、その前面にアトランテイアがつく。

『一夏も結構お節介なところあるよねえ。上の2機は私が引き付けるから、その間に』

『わかってる。手筈通りに』

カノンの言葉を一夏が心得たとばかりに引き継ぐと、バリア発生装置の下に待機していたクロイツリッター2機が2人に迫る。

『あんたたちの相手は私だよ!』

叫ぶやカノンは速度を上げ、クロイツリッターの1機と鏑迫り合いを行い、それを抜けて白に迫ろうとするもう1機にも地上から戦機人のレールガンによる牽制が行われる。

そうして足止めをくらった2機の間を抜け、バリア発生装置との距離を詰めると、一夏は白の真後ろに集中させたスラスター4基を最大出力で吹かして一気に加速する。

『行つけええええ!!』

叫びと共に前に突き出した雪片からエネルギー刃を発生させ、巨大な矢となった白が発生装置へと吸い込まれていく。

エネルギー刃に触れたバリアは火を当てられた紙の様に掻き消え、スラスター4基の加速が乗った刀身が発生装置本体を貫く。加えてそれだけで白の加速を相殺することは叶わず、勢いを持って余した白本体の激突によって粉々に砕け散り、極東支部全域を覆っていたバリアは瞬時に消滅する。

『よしっ!』

『でかしたぞ一夏君!』

『伊達に可能性の獣が四枚羽根になったわけじゃないねっ!』

それを見てユウと恭弥は歓声を上げ、カノンは感心した様に言いながら鏢迫り合っていたクロイツリッターを蹴飛ばして距離をとる。

一方、一夏は白から送られてくる機体状況に、予想はしていたものの表情を曇らせる。

『すみません、今のでエネルギーがギリギリで……少し後退します』

『了解だ。なに、バリアは破ったんだ。これで援軍が来てくれれば一気に逆転できる!』

『それじゃあ、ヴェーガスに』

自分が立案した作戦が達成されたことへの満足感もあるのだろう。嬉々として応じる恭弥に返すと、一夏はヴェーガスへ向かおうとする。

が、バリア発生装置破壊の際に急速離脱していた翼付きの20メートル級の機体が、見るからに斬れ味のよさそうな大振りな剣2本を持って立ちはだかる。

『ふくん? 結界破りの白騎士ねえ? 面白そうじゃない! 私も手合わせ願おうかしらあ?』

『クツ……!』

拡声器越しに喜色満載な声を響かせながら今にも飛びかかろうとする翼付きに、余裕がないエネルギー状況を再度確認した一夏は焦りを浮かべながらも、両手でしっかりと持った雪片を前に出して身構え

る。

その時、

『ちよつと待ったあつ!』

叫びと共にクロイツリッターたちの相手を恭弥とユウに任せたカノンが、白を庇う様に割って入る。

『あんたの相手は私だよつ!!』

『あら〜?元気のいいお嬢ちゃんねえ……いいわあ!言ったからには私を楽しませてもらおうかしら!!いい声で鳴いてねつ!』

言うや翼付きは、その翼型ユニットを背部に向けて瞬間的に加速し、カノンも両手で持った剣を脇に引きながら、

『押して参るっ!』

叫びと共にアトランティアを突進させる。

両者が激突し、3本の剣が火花を散らしてぶつかり合うのを遠くに眺めると、一夏は苦い顔を浮かべる。

『悪い、カノン……落ち着いたら必ず加勢に来るからな!』

そう言つて気持ちを割り切ると、ヴェーガスへの後退を再開する。

アトランティアに剣を縦横無尽に振らせ、時には蹴りを交えて迫りくる2本を捌くカノンは、機体越しに翼付きの操縦者の歓喜の声を聞く。

『いいっ!いいわよお嬢ちゃんつ!!ああまで言うだけのことはあるわねえ。これで鳴いてくれたらもつと嬉しいんだけど〜?』

「生憎、ロボットとプレイは別腹なんだよ!っっていうか『お嬢ちゃん』って、声からして、あんたも私と歳そう変わないだろう……!がっ!』

『あんっ!』

応じつつ、翼付きの腹部に蹴りを入れて距離を離すと、カノンは正面に剣を構え直す。

自分では完全に防いでいたつもりだったが、相手の攻撃は何度か表面を掠っていたらしい。アトランティアの所々が再生の光に輝く傍



ら、くの字に曲がって飛ばされていた翼付きが体勢を立て直す。

『うくん……まだまだね。私鳴かされるのも好きなんだけど、今のは薄味ね……今度は私が手本を見せてあげるっ!!』

「私にそんな趣味は無いっ!!」

ますます気分を昂らせながら迫る翼付きに、カノンも再び剣を構えて踏み込もうとする。

が、その時、

『カノン！じつとしてろっ!』

「!」

ナガイの制す声と共に地上からカイザーの2丁拳銃——ブレストリガーが放たれ、反射的に滞空したカノンは大口径弾の列が翼付きに迫るのを見る。

(行けるか!?)

見たところ厚いとはいえない翼付きの装甲に、カノンは撃墜を予感する。

が、

『ウフフッ!3人でやるのもいいわねえ!!』

『……………マジかよ』

飛んでくる弾丸の数々を、翼付きはテニスの素振りでもするかのように次々を剣で弾き、その光景にナガイは呆れた声を漏らす。

直後、

『じゃあ、これはお返しね、髑髏ちゃんっ!!』

言いながら右手に持った剣を左肩の上に引き、何かを溜める様でその姿勢で固まったのも数瞬、翼付きは剣を勢いよく振り下ろし、それに連動する様に刀身が伸長する。

「の、伸びたあっ!?!」

『!?!』

予想外の光景にカノンは驚愕の叫びを上げ、弾丸並みの速度で迫ってきた切っ先を、ナガイはカイザーに地面を蹴らせて後退することで寸でのところで回避する。

『さあ、まだまだこれからよっ!!』

伸長の勢いのままカイザーが立っていた辺りに突き刺さって土埃を上げる剣、その機体の全長に対して不釣り合いなほどに伸びた刀身を軽々と掲げて意気揚々と告げる翼付き——厳密にはその操縦者に、カノンは戦闘によるものとはまた異質な恐怖を覚える。

「こいつ……………ヤバイよ……………」

ヴェーガスのブリッジで戦況を見守っていたユイは、白がバリア発生装置を粉碎するさまを見て、思わず両腕を引いて喝采を上げる。

「やったっ！一夏さん！」

「…………これが非特隊の戦い？……………凄い……………」

「私のカノンが助力しているのもありますが……………この世界の騎士たちもなかなかやりますね」

その横では、飛鳥が非特隊の機体たちの一連の戦闘に呆然としながら呟き、リグルは少しだけ——ほんの少しだけ見直した様子で告げる。

その間にも、白が若干キレを欠いた動きでヴェーガスに近づいてくる。

『こちらホワイト2。エネルギーの回復まで、近くで休息させてもらいます』

「了解。第三デッキに収めます。お疲れ様、織斑曹長」

『ありがとうございます』

通信士・リンの労いに応じつつ、一夏の操る白は開放された第三デッキに進路を向ける。

「一夏さん……………」

傍らの通信を聞いた所為だろうか、疲れを溜め込んだ様な白の動きと、よく見れば攻撃が掠っていたのか、所々爛れた装甲に、ユイは今すぐにも第三デッキに行って一夏の様子を見たい衝動に駆られる。しかし、

（今は戦闘中だし、観戦の代わりにブリッジの隅で大人しくしている約束だから、ダメだよね……………）

そう思い、半ば自分に言い聞かせることで、なんとかその衝動を抑え込む。

その時、

「クロイツリッター2機、こちらに向かってくるっ!」

「!?!」

レーダー士・レックスの叫びに近い報告がブリッジに響き、ハツとしたユイは辺りを見回し、2時方向上空から2機——内1機は左腕が無い——のクロイツリッターが迫ってくるのを捉える。

「副砲で迎撃。ホーミングビームはギリギリまで撃つな」

エリックの指示に応える様に、それまで機動兵器戦の援護に当たっていた全6基ある副砲——2連装圧縮粒子砲の内3基が向きを変え、計6門の砲口からやや太いビームが放たれるが、クロイツリッターは2機ともそれらを紙一重でかわし、五体満足な方は応戦のマシンガンを撃ってくる。

「!あ、当たったっ!?!」

「対ゴースト戦を念頭に置いた外装だ。20メートル級のマシンガンくらいということはない。心配するな」

艦体を叩くマシンガンの着弾音と強い振動に思わず狼狽える飛鳥に、エリックは正面から目を逸らさないうながらも安心させる様に声をかける。

『コイツらッ!』

一夏もデッキに向かうのを中断し、白の左腕からビームを撃って迎撃に加わるものの、合間を縫って飛ぶクロイツリッターの銃撃が止むことはない。

そんな中、ユイは不意に違和感を覚える。

(攻撃してくるのは1機だけ……1機?・片腕の方は!?!——!!)

違和感の正体に気づいて窓から周囲を見回した刹那、脳裏に自分たちの頭上から落ちる様に迫る片腕のクロイツリッターの様子が浮かび上がるや、考えるより先にリンの許に駆け寄り、彼女か着けていた通信機を奪うやそのマイク越しに一夏に呼びかける。

「ブリッジ直上、1機来ますッ!」

『!!』

すぐに反応した白が窓の上に消え、ブリッジからは見えないものの、ユイの脳裏には剣を持った右手を一杯に伸ばして体当たり同然に急降下をかけようとする片腕のクロイツリッターと、左腕を腰に引いて背中の大型スラスターを全開にした白が交差し、至近距離で左掌から吐き出された高出力ビームがクロイツリッターの胴部を跡形もなく蒸発させる光景が浮かぶ。

一瞬遅れてブリッジの天井越しに爆音が轟き、細かな破片が降ってくるのに混ざって白がブリッジの横、ユイたちが控えている辺りの近くに降下してくる。

直後、糸が切れた様に白は地上にゆっくりと着地し、そのまま力尽きた様に尻餅を着く。

「一夏さんっ!!大丈夫ですか!?!」

『アー……今のでやっちゃまったかあ。もともとエネルギー容量ギリギリだったからな。こりやししばらく動けねえわ……』

悲鳴に近い声でユイが通信機のマイクに呼びかけると、スピーカーから少し困った一夏の声が返ってくる。

「……よかったあ………」

『ありがとなユイ、さっきのよく見つけてくれて。俺もマシンガンの方に夢中で見失ってたよ。ただ……しばらくはヴェーガス援護できそうにないな……』

「いいんですよ!そんなのっ……」

気まずそうに言う一夏に、ユイは彼の無事を知った嬉しさと自分のことを顧みないことへの怒りが交ぜになった声を返す。

その間にも、副砲の砲撃を掻い潜ってマシンガンの斉射を続けているクロイツリッターが、横から放たれた戦機人のガトリングガンによる弾雨に巻き込まれて撃墜される。

『おいっ!そっち無事か?』

「ヴァルキリーズか。助かつ——!?!」

やや強い語調で呼びかけてきた戦機人にエリックが返そうとしたその時、戦機人のすぐ横を巨大な剣が地面を抉りながら行き過ぎる。

戦機人は慌てて跳躍して距離をとるが、着地の直前に上空から飛来したビームがガトリンガンに射抜いて残弾が誘爆、さらには右脚を付け根から焼き切られて、爆発に煽られてバランスを崩した機体を背中から地面に打ち付ける。

「非特隊各機！ヴアルキリーズの戦機人が1機行動不能。近くにいる者は救援に向かってっ!!」

ユイから通信機を取り返したリンが叫ぶ様に言う間にも、戦機人の傍らにグランツハーケンが降り立つ。

ガトリングガンの弾倉にビームが当たったと理解するや即手を離させたのは、その戦機人に乗るアキラの反射神経の賜物だった。

しかし、それ以上のことをするには時間が絶対的にならず、跳躍中に至近距離での爆発をともに受けたアキラ機はバランスを崩し、背中から地面に叩きつけられる。

「っ!!……………痛つててえ……………チクショー、油断した」

認識外からの攻撃を受けたことに舌打ちしつつ、機体の状態を確認したアキラは、自機の現状に愕然とする。

「おいおい、右脚持つてかれたのかよ……………細かい損傷も含めれば無事な所全然無えし……………ああ、隊長に怒られる……………」

手元のモニターに映る9割方異常を示す赤に塗られた戦機人の概要図に、目くじらを立てたノゾミを連想し、嘆息混じりに呟く。

その時、所々画像が荒くなつたモニター越しに、自機のすぐ近くにビーム付きのクロイツリッターが降下してくるのを捉える。

「ヤベッ！グダグダ言うのは後だ……………右脚が無いんじや、コイツはもう動けねえか……………」

その光景にすぐに気持ちを切り替え、状況から自分の足で逃げる判断を下すや、コクピットを開放して外に出ようとする。

が、

「痛つて……………!?!」

仰向けの体勢から起き上がろうとした途端、左の足首の辺りに激痛

が走り、アキラはそれ以上動けなくなる。

「……まさか、今の衝撃でどつかに打ち付けた？でもいつもならこれくらい——って、今回は普通の服だったっ！」

今更ながら、アキラは自身の身を包んでいるのがいつも搭乗時に着るパイロット防護機能を備えたスーツではなく、あくまでも普通の衣服たるヴァルキリーズの制服であることを思い出す。加えて、突然のルミエイラ襲撃に着替える間も惜しんで戦機人に乗ったこと、その先陣を切ったのが自分だということ。

そうしている間にも、ビーム付きはビーム銃を右腰に提げ、代わりに左腰の棒を抜くや、その先から幅広のビーム刃を発生させる。

「!!」

開け放たれたコクピットにビームの放射熱が流れ込んでくる中、アキラは周囲を見回して救援を乞おうとするが、一番近くにいる白は不調の為か動く気配が無く、ヴェーガスもアキラ機への余波を恐れてか発砲する様子が無い。他の動ける機体は翼付きやクロイツリッターの残存機の相手に忙しく、こちらに駆けつけられる余裕は無さそう

だ。  
「……………おいおい、マジかよ……………」

助けは来ない、足を痛めては自力で逃げることもままならない。“詰んだ”という理解と共に全身の血の気が一気に引き、こちらを警戒してかゆっくりとした歩調で近づいてくるビーム付きの地鳴りにも似た足音を遠くに聞きながら、アキラは自分の意思とは関係無く、口から渴いた笑い声が漏れるのを自覚する。

「ハ、ハハハ……昨日隊長見捨てた罰ほちが当たったかな……………?」

戦機人の横に佇んだビーム付き、その振り上げられたビーム剣を眺めながら、昨日の出動のことを思い出したアキラは呆然と呟く。

（ああ、あれで焼かれるんだ。熱いかな?熱いだろうなあ……………）

どこか他人事の様にならなそう思っていると、一杯に上げられたビーム付きの腕が振り下ろされ、灼熱粒子で形成された刃がコクピットに迫る。

刹那、

「!?」

頭側から飛んできた赤い光を放つ白い影にビーム付きの腰部が砕かれ、流れ込んできた突風にアキラは腕で顔を庇う。

直後に重量のある物が降り立った音を近くに聞き、腕を下ろすと、数瞬前までビーム付きが立っていた所に、節々を黒いカバーで覆った白い一本角の機体が、こちらに寄り添う様に片膝を着いているのを見る。

「コイツ確か……非特隊のメガネの……」

その独特の外観に昨日の地下格納庫での見送りを思い出していると、一本角の二つ目がこちらに合わさり、それと連動する様に無線越しに声がかかる。

『そのの戦……人、無事で……?』

「あ?……あ、ああ、何とか!」

戦機人側の通信機に不調があるのか、雑音混じりの呼びかけに、少し時間をかけて助かったのだと理解したアカネは慌てて応じる。

「ただ、見ての通り機体はボロボロだし、おまけに足痛めたみたいで動けないんだ。悪いけど離脱すんの手伝ってくんねえか?」

『わかりました。ちよつと待ってください』

応じるや、一本角の胸部が開き、座席ごと中から出てきたメガネ——光秋がワイヤーを伝って降りてくる。

「え?いや、あの……」

その行動に意表を突かれている間にも、コクピットに着いた光秋がこちらを見下ろしてくる。

「……目立った怪我は無さそうですね。足の方は?」

「え?ああ、どつかぶつけたみたいでさ……」

「なるほど………失礼」

「え?」

こちらの状態を確認し、数瞬の逡巡の後、コクピットに入り込んできた光秋は、そのまま両腕でアキラを抱えて一本角へ戻る。

「ちよつ!おま……!!」

唐突な抱えられての移動——いわゆる「お姫様だっこ」というもの

にアキラはこれまで以上の動揺を覚えるものの、光秋はそんなことを気にする素振りも無く一本角の左下に駆け寄り、そこにアキラを置く。ワイヤーを伝ってコクピットに戻り、開いた左手をアキラの許へ寄せてくる。

「すみませんが手に乗ってください！できませんか？」

「あ、ああ。それくらいなら」

露出したコクピットから大声で問いかけてくる光秋に応じると、アキラは足の若干の痛みを堪えながら這う様に一本角の左手に乗り込む。

「掌の中央辺りに寄って。それでこっちに上げます」

「わかった」

言われた通り掌の中央に移動し、落ちないように体勢を整えると、それを確認した光秋が左手をゆっくりと上げていく。

その時、

「アイツツ！」

コクピットを見上げていたアキラは、一本角の上空に下半身を失ったビーム付きが迫るのを見る。先ほどの白い影——一本角の攻撃で腰から下は失ったものの、動力部の破損は免れていたらしく、その右手には未だ煌々と輝くビーム剣が握られている。

「オイッ！後ろ——!？」

咄嗟に光秋に呼びかけようとするも、その言葉が終わらぬ内にこちらに斬りかかろうとしていたビーム付きに多数の弾丸が殺到し、それで動きが止まるや、間髪入れず弾丸の如き速度で接近してきた灰色のゲシュペンストが帯電した左手首のプラズマバツクラをその胸部に叩き込む。

途端にビーム剣の刃が掻き消え、胸周りが陥没したビーム付きは力無く地上に落ちていく。

「……………!？」

一連の、正に“瞬殺”というべき光景に啞然としていると、不意に掌が傾き、アキラは滑り台の要領で一本角のコクピットに収まる。

「あの灰色のゲシュペンスト、非特隊のだよな!？」



「ミヤシロ中尉のシユルフツェンですね。そういえば、昨日そちらに送りましたね」

興奮気味なアキラに思い出した様子で応じながら、光秋は手元のスイッチを操作してコクピットを機内に収容し、通信機に呼びかける。

「中尉、助かった。機体の様子は？」

『上々です。これより恭弥たちの援護に加わります』

「頼む。こちらもすぐに行く」

光秋が言い終えるや、一本角の上空に待機していた灰色のゲシユペンスト——シユルフツェンは踵を返し、アトランテアとカイザーを相手取る翼付きに向かう。

「適当な所で降ろします。揺れるからしっかり掴まって」

「いや、あたしのことはいい！」

シートベルトで席に体を固定しながら言う光秋に、アキラは強い語調でそう返す。

「見たところ、残ってる敵はザコが数えるくらいと、上の翼付きだけだろう。黒い奴はさつきから戦意喪失っていうの？動かねえし。それならそいつら片づけてから降ろしてくれた方がいいよ。そっちも、とつとと部下のこと助けに行きてえんだらう？」

「……」

凶星を突いたらしい。一瞬迷った顔を浮かべながらもすぐに気持ちを固めると、光秋はアキラに顔を寄せてくる。

「なら、お言葉に甘えさせてもらいます。ただし、どっちにしろしっかり掴まってください。あと、なんかの拍子に足をぶつけて痛んだらすみません！」

「上等だっ！」

アキラが応じるや、光秋は大地を蹴る様に一本角を飛び立たせ、散開して辺りを襲撃するクロイツリッターたちの方へ突撃する。

互いに背中を合わせながら、恭弥はルミナのビームを、ユウはマシンガンを斉射し、自分たち、あるいは地上の僚機たちに襲いかかるク

ロイツリッターたちを牽制する。

『もう何機もないっていうのにチョコマカと！あと何機だ!?!』

「ざっと数えたところ……クロイツリッター7、グランツハーケン2、計9機……!」

通信越しのユウの苛立った声に、恭弥も共感を覚えながら苦々しげに結果を告げる。

（早くカノンちゃんの援護に加わりたいのにつ！でも、こうも縦横無尽に動き回るものを放置して行ったら地上のみんなが……さっきの呼びかけにも、結局応えられなかったし……やられた戦機人の人、無事かな？）

未だ長大な二刀流に苦戦を強いられているアトランティアとカイザーを視界の端に眺めつつ憤りを覚える一方、少し前に入ったヴェーガスからの連絡を思い出した恭弥は、誰かは知らないがその戦機人のパイロットを心配する。

直後、

「!」

思考中に注意力が低下していたらしい。ビーム剣を抜いたグランツハーケンが直上から迫り、恭弥は慌ててビームを撃つものの、狙いが逸れた光弾は左脇腹を掠るだけで終わる。

（間に合わないっ!）

直感するや、反射的に目を閉じる。

刹那、

「!?!」

金属が碎ける音をシルフィード越しに聞くや、目を開けた恭弥は右脇腹にニコイチの飛び蹴りを食らったグランツハーケンを見る。

真一文字に伸びた白い左脚は槍の如き鋭さでグランツハーケンの装甲を突き破り、そのまま胸部にある動力源を潰すと、ビーム剣が消えて落ちていくグランツハーケンを背にしたニコイチがシルフィードとネメシス08に向かい合う。

「シユウさん!?!何でここに——」

『説明は後だ。残りは……8機か』

予想外の事態に動揺する恭弥を遮る様に、光秋はニコイチの頭部を振って周囲の状況を把握すると、オープン回線で周りにいる全機に呼びかける。

『こちらは非特隊主任、加藤大尉だ。地上の各機は持てる火力を駆使してルミエイラ残存機を牽制、その場に“縫い付けろ”！そこをニコイチ、シルフィード、ネメシス08で以って各個撃破する』

よく通る強い声で告げられた指示に地上部隊たちが応じる傍ら、恭弥はシルフィードのモニターの片隅に映る通信映像の中の光秋が、自身と、その隣に映るユウを見据えてくるのを見る。

『ネメシス08——グレイブさんか……いや、それこそ詳しい話は後だ。2人共聞いての通り、地上部隊が牽制してくれた各機をそれぞれ撃破する。1人3機がノルマだぞ。散開してかかれっ！』

『いや、でも、カノンたちは……』

戸惑いを浮かべたのも一瞬、すぐに指揮官の声で告げる光秋に、ユウが心配した顔で食い下がる。

と、光秋は少しだけ頬を緩め、

『それなら心配無い。“とっておき”が行ってくれたからな』

言いながらニコイチの右手で上空を指さす。

それを追って上——カイザー協力の下にアトランティアと翼付きが交戦する辺りを見上げ、そこに電光石火の速さで動き回る灰色の影を捉えた恭弥は、つられる様に口角を上げる。

「確かに。“あの人”が行ってくれるなら安心ですね！」

『……？』

唯一ユウだけ話についていけない中、表情を引き締め直した光秋が押し切る様に告げる。

『そういうことだ。各機、残存機の撃破のみに集中しろ。行けっ！』

「了解っ！」

『……了解！』

それに恭弥は意気揚々と、ユウは釈然としないながらも応じると、ニコイチ、シルフィード、ネメシス08は各々を背にして三方向へ飛ぶ。

真正面に戦機人のガトリンガンによる牽制に捕まったクロイツリッターを捉えるや、恭弥はシルフィードを加速させる。それを認められた戦機人の射撃が止むのと前後して、後ろからクロイツリッターの背中にルミナの切っ先を突き入れる。

(残り2つ！)

推進器をも切り裂いて胸部を貫かれたクロイツリッターの沈黙を確認するや、恭弥は胸の中で叫ぶ様に確認しながら次の目標を探す。

その時、

「後ろ?」

牽制をすり抜けたらしいグランツハーケンがシルフィードの真後ろに回り込み、感知した恭弥は慌てて振り返ろうとするものの、その前にビーム銃の銃口を向けられてしまう。

が、直後にニコイチが右脇に左拳を入れ、そのまま胸部を横から貫かれたグランツハーケンは沈黙、突きの衝撃で狙いが逸れたビームはシルフィードの左側頭部を過ぎて明後日の方へ飛んでいく。

「ありがとうございますー!」

『いい!次行け!』

礼の返事に返ってきた急かす様な光秋の指示に、恭弥は胸中で合点しながら返事をする間も惜しんで標的探しを再開する。

すぐにテンペストのビーム攻撃に足止めされているクロイツリッターを見付けるや、その許へ駆ける。

距離を詰めつつ、射撃モードにしたルミナの狙いを正面のクロイツリッターに合わせ、必中の間合いに入ったと思うや引き金を引く。

が、胸部を狙ったビームは僅かに逸れ、至近距離を掠った飛散粒子で左脇腹の装甲が溶けてバランスを崩したところにテンペストのビームが命中する。

(ブレた?……いや、狙いが甘かったか)

『狙いはもっと慎重に着けてください。今の確実に決めるところです』

「……すまない。次気をつけるよ」

丁度考えていたことをサクラにまで言われて、ぐうの音も出ない恭

弥は素直に応じて最後の目標を探す。

レールガン装備の戦機人と撃ち合いをしているクロイツリッターを見つけると、そこにシルフィードを駆けさせる。

その間にもクロイツリッターは地上に向けてマシンガンを斉射し、そうしてばら撒かれる様に放たれる弾丸を、戦機人は前後左右、大股小股織り交ぜた不規則なステップを踏んで紙一重でかわしつつ、移動しながらの不安定な体勢からでもクロイツリッターの装甲を掠る正確な応戦射撃を行ってくる。

(……………凄いな)

機体側の補正機能もあるのだろうが、素人目にも上級者とわかる見事な射撃に、いい条件下で撃ったにも関わらず外した先ほどの自分を思い出して恥ずかしくなったのも一瞬、恭弥は応戦を続ける戦機人――ミオ機に通信を繋ぐ。

「こっちで仕留めます。援護を」

『了解』

短く応じるやミオ機は大地を蹴って大きく後退し、それを追おうとするクロイツリッターに、恭弥はルミナを突き出して突撃する。

「オオオオ!!」

叫びと共にシルフィードの背部推進器が輝きを増し、気づいたクロイツリッターがマシンガンをこちらに向けてくるが、直後にそれはミオ機のレールガンによって右手ごと粉碎される。

衝撃で崩れた体勢を立て直す間も無くシルフィードの突撃を食らったクロイツリッターは沈黙し、胸部に深々と突き刺さったルミナを介して恭弥は確かな手応えを得る。

(取った!)

思う間にルミナを引き抜き、落ちていくクロイツリッターを一瞬だけ眺めると、恭弥は周囲に目を凝らす。

「シユウさんとユウ君は……………」

多少釈然としないものを感じながらも、白い一本角のパイロット――

「確か加藤大尉と呼ばれていた——の指示の応じてネメシス08を駆け出させたユウは、すぐにガトリンガン装備の戦機人の牽制射撃に捕まっているクロイツリッターを見つけ、ビームランスを両手でしっかりと持ってそこへ接近する。

「やってやるー！」

無意識に漏れた気合いと共に瞬時に間合いを詰め、戦機人からの射撃が止むと同時にランスを突き出すと、3つに分かれたビームの穂先がクロイツリッターの胸部を炙り、内蔵された動力源を蒸発させる。

「次！」

力無く落下していくクロイツリッターを確認するや、ユウは周囲を見回し、ギガンテイツクの弾幕に捕まったクロイツリッターを捉えるや、今度はそこへ向かう。

ネメシス08が接近する間にも、ギガンテイツクは両腕のガトリンガンを一斉射して広範囲の弾幕を形成し、巻き込まれたクロイツリッターは降りかかる弾雨に装甲を削られながら懸命に離脱を試みている。

と、クロイツリッターはおもむろにマシンガンを一連射し、殺到した弾丸がギガンテイツクの足元に着弾、その足場を砕く。途端にギガンテイツクはバランスを崩し、あらぬ方に向けて弾幕に穴が空くや、クロイツリッターは即刻離脱、そのまま背部推進器を吹かしてギガンテイツクの背後に回り込み、マシンガンから持ち替えた剣を突き立てて突進する。

「！させるかっ!!」

それを見るや、ユウは反射的にネメシス08の両肩のソニックレールキャノンを構えさせ、大よその狙いを定めるや、ロックオンの表示が重なる間も惜しんでクロイツリッター目掛けて発射する。

放たれた弾体2つはギガンテイツクに肉迫するクロイツリッターに豪速で迫り、しかし反動制御もままならない体勢から充分な照準もつけずに撃ち出された一撃は両者の間に割って入り、射線上の地面を抉って膨大な土煙を上げるだけに終わる。

が、認識外からの高威力な一撃はクロイツリッターの足を止めるに

は十二分だった。

「行つけえええ!!」

動きが止まった刹那、ユウはネメシス08を砲弾の如き速さで駆けさせ、その勢いが乗ったビームランスの一突きをクロイツリッターの胸部へ叩き込む。

『サンキュー、ユウ！助かったよ。やっぱすばしっこい相手とは相性——後ろっ!』

「!?」

礼を言いながら振り返ったフィルシアの絶叫に、ギガンティックの視線を追って上空を見上げたユウは、自分に向けて急降下しながら両手持ちにした剣を振り下ろそうとするクロイツリッターを見る。

直後、

「?」

頭部正面に瓦礫が直撃したクロイツリッターはバランスを崩し、動きが鈍った一瞬の間に白い一本角が懐に飛び込み、接近した勢いのままに胸部に右拳を打ち込む。

『今の足止め射撃、少し狙いが狂えばギガンティックに当たってたぞ』  
「!.....」

腕を抜きながら振り返りざまに言われた加藤の指摘に、その時は無我夢中だったユウは自分がしたこと、その危険性に思い至り、思わずギガンティック——その中にいるフィルシアを見やる。

と、

『もつとも、瞬間的な判断力と思い切りのよさは嫌いじゃない。次はもつと上手にな』

「!.....あ、はい!」

注意から一転、褒め言葉を残して飛び立った加藤に、ユウは慌てて応じながら、言われたことを吟味する。

「!.....もう少し、落ち着いて周囲を観るようにしよう」

短い間だが思案したことを自分に言い聞かせ、ユウは次の目標を探しに飛び立つ。

周りを見回し、戦機人2機のカトリングガンに足止めされているク

ロイツリッターを見つけるや、左右からのガトリングガンを放つ2機に通信を繋ぐ。

「そいつに仕掛ける。合図したら撃つのをやめて」

『了解！』

『トドメ頼んだわよ！』

女性2人——ユウは知るよしもないが、アカネとサヨコ——の返事を受け取ると、ユウはクロイツリッターの正面に位置し、ペダルに足を掛ける。

刹那、

「今だっ！」

叫ぶや弾幕が止み、同時にペダルを踏み込んでネメシス08を最大速度で突進させ、二方向からの弾幕によって狭い範囲に釘づけにされていたクロイツリッターの懐に入る。

「行けえっ!!」

気合いと共に突き出されたランスは胸部装甲を貫き、その奥に備わる動力部を焼失させる。

「他は!?.....コイツで最後か.....」

周囲を見回し、自分が落としたクロイツリッターが最後の1機であることを確認すると、横からシルフィードが接近してくる。

『ユウ君、大丈夫か?』

「ああ。恭弥は?」

『僕もなんとか。ちよつと危ない時があったけどね.....それでも、クロイツリッターは全機撃墜したみたいだ。あとは.....』

「.....」

言いながら空を見上げるシルフィードを追って、ユウも上を見やり、そんな乗り手の意思に連動する様にネメシス08も顔を上げる。

光秋に応じるや、ライカはシルフツエンを振り返らせ、アトランティアと頭頂に髑髏を付けた特機を相手取る翼付きの機体へと向かう。



(また見慣れない特機ですか……もつとも、今は翼付きですね。思った以上に面倒なようだ)

地上から拳銃型の武器で射撃を行う髑髏の特機、その独特なデザインに昨日のモモタロウや大陸の赤い特機を、その搭乗者たちの一方的な態度を思い出して一瞬警戒の目も向けるものの、アトランティアには当たらないよう最低限の注意は払っているらしい撃ち方にすぐにそれを解き、2対1という数的不利をもともせず飛び回る翼付きを注視する。

(あの伸び縮みする剣、厄介ですね……………)

相手との距離に合わせて自在に長さを変える大振りな剣2本、それを軽々と振り回しながらアトランティアと斬り結び、髑髏を牽制する翼付きの性能、なによりパイロットの技能に舌を巻きながら、ライカはどう攻めるか思索する。

と、こちらに気づいたららしいアトランティアが、翼付きから距離をとりつつ近づいてくる。

『あ、ミヤシロさん帰ってきたの!?!』

「事情説明は後。これより協力して翼付きを撃退します」

『了解っ! あ、それと、あの髑髏のロボットは一応味方だから。人相で敵と判断しないでね』

『一言余計なんだよテムエは!』

アトランティアで指さして説明するカノンに気づいたのか、髑髏のパイロットと思しき若い男がイラついた声を通信越しに投げかけてくる。

「了解……それならば……………」

髑髏の声を受け流し、カノンの説明に返すと、ライカは自分側の戦力を大まかに把握し、大よその算段を立てる。

「髑髏の特機の人、聞こえますか?」

『ナガイだ』

「ではナガイさん、引き続き牽制射撃をお願いします。カノンはアタック。私が援護します」

『了解!』

『チツ。俺だつて飛べりゃあ……………』

カノンの返事と髑髏のパイロット——ナガイの悔しそうな声を聞くや、ライカは翼付きにM90アサルトマシンガンを斉射し、髑髏の大口径弾がそれに加わる。

1発ごとの威力こそ控えめだが圧倒的な数を誇るマシンガンの弾幕と、その隙間を埋める様に迫る見るからに強力な大口径弾、二方向からの質の異なる攻撃は、翼付きの足を上手く封じたようだ。

決して広いとはいえない飛行範囲を右往左往しつつ、本体に見合った長さに縮めた剣で直撃弾を捌く翼付きを認めるや、ライカは通信越しに声を上げる。

「カノン、今ですっ！」

『オッシャーッ!!』

雄叫びで応じたアトランティアが翼付きに迫ると、ライカはマシンガンの斉射を止め、一拍遅れて髑髏もそれに続く。

一瞬できた弾雨の空白をアトランティアは瞬時に突っ切り、突進の勢いを乗せた一刀を振り下ろす。

が、翼付きは2本の剣を正面で交差させてそれを受ける。

『新顔く……こっちの逃げ場を塞ぐ銃撃に、その合間から突っ込んでくるお嬢ちゃん……いいわっ！ますます面白くなっちゃうっ!!』

(こいつ……戯れてるっ)

直後の通信から響いた翼付きのパイロットと思しき女の狂喜の声に、ライカは静かな怒りを抱くと同時に、こんな状況に置かれても焦り一つ見せない態度にわずかな恐怖を覚える。

(余程腕が立つ、ということでしょうか？先程も弾の一部を捌いていたし……ならば)

思うやライカはペダルを踏み込み、シユルフツエンを可及的速やかに翼付きの背後に回らせる。

強化された推進力はシユルフツエンを瞬時に目的の位置に運んでくれるものの、その分強力になった加重がパイロットスーツ未着用 bodies を襲う。

「……………っ!!」

横殴りの力が掛かる数瞬、ライカは歯を食い縛ってそれに耐え、「翼付き」という仮称の由来たる大型スラスターを備えた背後を正面に捉えると、宙を蹴る様にしてそこに肉迫する。

気づいた翼付きがアトランティアを押し払って振り返りざまに左の剣を振るうが、シユルフツェンは体を屈めてそれを避け、がら空きになった左脇へと右肩からぶつかっていく。

「カノンツッ！」

『一刀両断ッ!!』

翼付きのバランスが崩れた刹那、ライカの叫びに応じてアトランティアがその背に斬りかかる。

直後、翼付きは僅かに体を逸らし、頭頂に入るはずだったカノン渾身の一太刀は左スラスターを根元から斬り落とすだけに終わる。

『モオオオ、最高ッ!!……………でも、流石に戯れが過ぎたわね』

そのままシユルフツェンの体当たりの勢いをも受け流し、右スラスターを吹かして距離をとるや、左脇腹を深く凹ませ、片翼になった機体から歓喜と惜しむ声が響く。

それに応じる様に上空の一点が歪み、黒い穴が現れると、翼付きは真っ直ぐにそこへ向かう。

『またね、お嬢ちゃんたち。次はもつと楽しませてっ!』

去り際にそう告げるや翼付きは穴の中に消え、それまで魂が抜けた様に滞空していたベネクティオも機械的にそれに続く。

2機を呑み込むや穴は瞬く間に掻き消え、ライカは周囲に目を走らせる。

「……………2機は撤収、クロイツリッターは全機沈黙か……………終わったようですね……………」

言葉と共に安堵の息を溢すと、シユルフツェンを地上へ降下させ、アトランティアもそれに続く。

「……………終わった……………のか……………?」

「みたいですね……………」

ルミエイラ出現時にも出現した黒い穴、その中に消えてくる翼付きと黒いシルフィードを眺めながら、未だ緊張の残る声で呟くアキラに、光秋の疲労を含んだ声が返ってくる。

その間にも2人が乗る一本角はゆつくりと地上に降り立ち、極東支部敷地内の中央に佇む司令塔の近くに着地すると、乗り手たる光秋の状態を引き写す様に、一本角は崩れる様に片膝を着く。

「おい!?大丈夫かよ?」

「……なんとか」

アキラに応じつつ、若干朦朧としながら光秋はコクピットを機外へ出し、戦闘の傷跡が色濃く残る周囲を直に見回す。

非特隊・ヴァルキリーズ、ルミエイラ双方の流れ弾、あるいは撃墜したクロイツリッターの落下によるものか、程度の差こそあるものの、いずれの建屋もどこからしらが崩れ、道路は舗装が溶けたり深く抉れたりしている。

「極東支部、思った以上に傷つきましたね……こっちの方が大丈夫か?」

「確かにそうだけど……いや、設備以上に人だ。みんな無事かな?」

光秋の不安にアキラが別の不安で応じる間にも、各方向からニコイチを基点にするように、非特隊・ヴァルキリーズ双方の機体が集まってくる。

(第三と第四——ノゾミ隊長たちはみんな無事みたいだな。今はそれがわかっただけでも充分だ)

非特隊の方こそよくわからないものの、自分の同僚たちの無事にひとまず安心すると、アキラは少しぎこちない動きで光秋の顔を見る。床に腰着けた体勢で椅子に座った者を見るため、必然的に見上げる形になる。

「その、さ……遅くなったけど、ありが——」

「あ……」

足が使えないとはいえ唐突にされたお姫様だつこの件を思い出しつつ、柄にもなく照れながら告げるアキラ。それを遮る様に聞こえるか聞こえないかの声を漏らすや、光秋は糸が切れた様に頭を俯ける。

「?……おい?加藤大尉?どうした——!!」

言いながらアキラは顔を近づけると、操縦席から伸びるシートベルトに体を預け、ぐったりと動かなくなった光秋を確認する。

「……………嘘だろ…………」

力無く項垂れるその姿に、アキラは誰よりも自分に言い聞かせるつもりで呟くと、下から覗き込む体勢で恐る恐る光秋の肩に両手を伸ばす。

「おいっ—こんなのアリかよっ!?まだ礼もちやんと言えてねえんだぞ!?藪から棒にお姫様だっこしやがったことにもいろいろ言いたかつたんだぞ!!なのにつ!……なのになこんなオチって……………」

怒鳴る間にも両目からは涙が溢れ、機動兵器たちの移動が落ち着いて静かになった中、アキラの嗚咽が異様に大きく響く。

と、

「……………」

「……………」

自身の嗚咽に、それとも異なる微かな音が混じっていることに気づくと、アキラは一旦泣き止み、耳を澄ませて音のする辺り——光秋の顔の近くを探ってみる。

すると、

「……………すー……………すー……………」

「……………この音、加藤大尉の鼻からしてる?……………つうか寝息?!」

てつきり死んだと思っていた人間から発せられる呑気な呼吸音に、アキラは束の間混乱する。

と、一本角の傍らに佇んでいた灰色のゲシュペンストが膝を折り、少しは距離を詰めた——それでもこちらを見下ろす位置関係の——胸部コクピットが開くと、制服姿のライカが身を乗り出してくる。

「……………やはり、限界でしたか」

「やはりって……………?えっ?」

「加藤大尉、昨日からほとんど寝てないんです」

未だ混乱が治まらないアキラに、ライカは悪い予想が当たったといわんばかりの顔で応じる。

と、他の機体たちより遅れて一同の許に歩み寄ってきたユニコーン・白から、拡声器越しに一夏の声加わる。

『それとさつき、赤く光りながら飛んできたでしょう？あれ、結構疲れみたいなんですよ』

『それなら、昨日のゴーストとの遭遇戦でもやってたよな。カノンちゃんも見ただろう？』

『見た見た。バリアにして突っ込んで行ったよね』

『大陸でも光ってましたね。少々面倒な敵と遭遇したので』

一夏の掻い摘んだ説明に、恭弥、カノン、ライカ、それぞれの目撃証言が付加され、一連の説明にアキラは一つの結論に達する。

「要するに……………疲れて寝たってこと？」

「そういうことでしょうね」

「……………っ!!」

静かにかけられたライカの肯定の言葉に、アキラの中の羞恥心は一気に最高潮に達し、顔から火が出るの言い回しの如く、日焼けで浅黒くなっている肌がみるみる赤くなっていく。

『ところで一夏君、もう大丈夫なのか？』

『俺はなんとも。白の方も少しは回復しましたし。流星に飛ぶのはもうしばらくかかりですけど……………』

その傍らでは恭弥と一夏が拡声器越しに気楽そうな会話を交わしているが、それさえも今のアキラには遠くのことのように感じる。

そして、

「っつ……………このバカ大尉いつ!!」

裏返った声を上げながら、光秋の左頬に右ビンタを叩きつける。立てないために中腰で放たれたそれは、しかし日頃から鍛えられたアキラの腕力と腰の回転によってかなりの勢いを得て、パーンッ!という音を周囲に響かせる。

『アキラアアア!!あなた何てことをっ!!』

「……………えっ?」

直後に戦機人から響いたノゾミの悲鳴に、数秒ほど自失したアキラは我に返り、

「!?な、何だっ!?!」

目の前に左頬を赤くしながら慌てて周囲を見回す光秋を見る。

『軍の士官にビンタって、あんた何考えてるのよっ!しかもお世話になった部隊の指揮官に!連邦軍に角立てる気っ!?!』

「……………あっ」

同じく悲鳴の声で非難してきたサヨコに、アキラは自分が何をしたのかようやく理解する。

『私としては、お姫様だっこの件について詳しく知りたい』

「!あ、いや、それは……………その……………」

しかし気持ちの整理がつく前にかけられたミオの言葉に、戦機人からの救出から今までの記憶が脳裏を過ぎ、再び顔が赤くなって冷静さが低下していく。

「いや、だから……………ああっ、もうわかんねえよおっ!!!」

そうして混乱も極みに達し、思考が停止する中でそう叫ぶと、何故か光秋の腰に抱き着く。

「あの……………」

「ああああああ!!!」

寝起きで頭が回らないのも手伝って対応に困る光秋を尻目に、アキラは先ほどの嗚咽とも異なる、羞恥心と混乱、そして安堵がない交ぜになった号泣を上げる。

「大尉……………」

その様子をゲシュペンストのコクピットから眺めるライカは、呆れ顔を浮かべて頭を搔く。

それにつられる様に、各機体から思い思いの音が響く。

『……………あのメガネが、お前らのリーダーってことでもいいのか?』

『オレ、本当にこのチームで大丈夫かな……………?』

ナガイとユウは不安でいっぱいな声を溢し、

『まったく、ホントにウチのリーダーはねえ』

フィルシアは呑気そうに呟き、

『……………』

サクラは沈黙を守るが、それがかえって頭を抱えていることを表し

てくる。

『シュウさん……』

『まあ、寝てない上であそこまでよく動けば……』

恭弥は見ているだけで恥ずかしいと言いたげな声を漏らし、一夏は一応のフオローを入れる。

『ホント、抜けてる時はとことん抜けてるよねえ。シュウさんってさ』  
『でも、みんな無事でよかったよ………モモちゃんも』

カノンは言いながら笑みを浮かべ、アカネは安堵しつつ、最後に小声で呟いた。



## 20 屑鉄の少女、熾天使とまみえる

横浜でルミエイラと連邦軍の初めての交戦が行われた日。

横浜基地を訪れて迷子になっていた光秋ら非特隊一行を格納庫に案内した小柄な若い連邦軍少尉、リョウト・キサラギは、案内を終えるや次の作戦のブリーフィングが行われる部屋へと急いでいた。

(……あのメガネ……加藤大尉っていったっけ？やっぱ変わってる気がする……)

去り際に用件を伝えるや自分の無事を心配してきた非特隊のリーダー格のことを改めて思い出しつつ、どうにか時間に間に合ったりリョウトは空いている席に腰を下ろす。

ややあつて席は埋まりきり、ブリーフィングが始まると、室内は重苦しい空気に包まれる。

「近日中に、DC残党殲滅の為にスラムに攻撃を仕掛ける」

「作戦内容は？」

「とにかく見かけた人間を捕獲又は殺せ。奴らを炙り出す」

「了解」

室内に集まった人々が口々に応じ、細かな詰めに入っていく中、リョウトは誰にも語ることなく胸中に疑念を抱いていた。

(これが本当に正義と秩序の為……市民の為なのか……?)

リョウトとて、世界の現状は理解している。

鬼やゴーストといった得体の知れない存在たちが世界中で跳梁跋扈し、地球連邦内部は長く続いたDC戦争で多くの地域が情勢不安定に陥っている昨今、一刻も早く安定した秩序を打ち立て、連邦——あるいは人類共通の脅威に一丸となって立ち向かう土壌を整えなければならぬということ。その為に、多少強引でも速やかな行動が求められることを。

が、若き士官の志とは裏腹に、目の前では本来自分たちが守るべき連邦国民を巻き込むのもやむなしといった——“強引”と片づけるにはどうしても違和感のある——趣旨の作戦内容が練られていった。

そして時間は瞬く間に過ぎ、数日後。非特隊が日本で鬼やゴーストと戦い、大陸で赤い特機やモビルスーツといった異世界の機動兵器と邂逅していたその日。

リョウトはパイロットスーツを着込んだ体をパワードールのコクピットに収め、機体越しに伝わってくる輸送車の微振動に身を預けていた。

「……………」

ヘルメット下の表情は硬く、未だ迷っている心境を浮き彫りにしている。

しかしそんなリョウトの気持ちに関わらず、周囲をキャタピラを展開したアーマードール・ルークに護衛されたパワードール輸送車の一団は、一路作戦領域たる中東北東部の片隅にあるスラムへ向かっていた。

同じ頃、中東のとある荒地の廃墟、その地下を走る通路を、タンクトップにジーンズというラフな格好をした少女が歩いていた。

少女の名はユリン。今いる廃墟——もとい、第三次世界大戦の際に放棄されたらしい地下施設を基地としたDC残党に所属するパワードールのパイロットだ。

歳は14くらいだろうか。腰までかかる非常に長い黒髪に、大きくつぶらな瞳、針金のように細くも鍛えられた繊細な体と、普通に見てもかなりの美少女に当てはまる。

タンクトップから露出した肌には所々痣が浮かんでいるが、これは活動資金の都合でパイロットスーツを調達できず、今の様な平服で操縦してコクピット内の機器に体中をぶつけたことによつてできたものだ。ユリン自身、パイロットになった当初はその苦痛に悩んでいたが、今では完全に慣れ切ってしまったている。

そんなユリンだが、今は顔を不機嫌に歪め、数日前のブリーフィングで聞いた話を思い出していた。

(DC 残党を炙り出す為の無差別攻撃……何が秩序よ……何が世界の安定よ……こんなものって……それに……)

数日前に連邦軍内部に潜入しているスパイからもたらされた情報にしわを刻む一方、初めてこの話を聞いた際に感じた疑問も思い出す。

(スラムへの攻撃……DC 残党以外に何か目的があるはず……手がかりもないのにそんなこと……)

ブリーフィングの時と同様、いくら考えても答えは出ず、そうしている内に足の裏に違和感を覚えたユリンは歩を止め、踏んでいた薄い本を拾い上げる。

ページをパラパラと捲ってみると、どうやらファッション雑誌のようだ。

(こんなものあったっけ……？この間の物資搬入の時に誰かが置いてったのかな……？)

反政府武装組織の拠点にはミスマッチと思える色とりどりの服装の女性モデルが並ぶページを眺めながらそう推測する一方、不思議とその雑誌に興味を抱いたユリンは、そのまま通路を進んで格納庫へ移動し、部屋の端に腰を下ろしてしばらくそれを読みふける。

と、仲間の一人であるアレンがやって来る。同じパワードールパイロットであり、ユリンより少し年上の青年だ。

雑誌を読んでいるユリンを見つけるや、アレンは声をかける。

「なんスかこれ」

「わからないけど……色んな服を着た女の人の写真が載ってる」

「それが……どうかしたんスか？」

DC に加わる以前から反政府武装組織の一員として活動してきたアレンにとって、ファッションなど未知の分野であり、ましてやオシヤレに興味を抱く女の子の心境など想像の埒外だ。

もつとも、ユリンもユリンで物心ついた頃から中東の貧民街でその日を食い繋ぐだけの生活を数年間続けており、2年前にアレンたちに拾われてからもパワードールパイロット——それもこの組織内でエース——として暮らしてきた為、安定した地域に暮らす同じ年頃の

少女が覚えるような感覚を育む時間は無かったのだが。

「いや……………こんな服……………一度は着てみたいとか思ったりして……………」

それでも、一人の女の子として興味自体はあるらしい。言いながらぎこちなくユリンが指を指したのは、空色のフリル付きのワンピースだった。

「アレンとユリンか。どうしたんだ？」

そんな時、もう一人のパイロット仲間たるジークがやって来る。アレンよりも少し年上の男であり、ユリンにとっては兄の様な存在だ。

「あ、ジーク。ユリンちゃん、こんな服着たいらしいツスよ」

そう言ってアレンはユリンのファッション雑誌を取り上げ、ジークに見せる。

「な……………ちよつ……………」

それを止めようとして果たせず、ろくに口も回らず、ユリンは恥ずかしさで顔が赤くなっていた。

「へえ……………可愛いんじゃないか？」

「ふ……………ふぎけるなアアアア!!」

「ぐふつ……………」

「ぐあつ!？」

ジークが思ったままを告げるや、即座にユリンはアレンにドロップキックを食らわせ、着地した直後にジークの腹を殴った。

「はあ……………はあ……………」

「何故だ……………」

激痛にアレンが悶える横でジークはそう嘆くも、内心はユリンにちゃんと女の子らしい面があることに安心していた。

「もうそろそろ用意し……………どうしたんだ？お前ら」

そこにパワードール部隊の隊長・ハミルトンが現れ、ユリンが息を荒立てジークとアレンが横たわっている光景を目にしながら問うた。

「な、なんでもないツス……………」

「そうか……………なんだこの本……………ファッション雑誌か？何でこんなところ」

「余計な詮索はしないで」

「お、おう。分かった、ユリン」

パイロットメンバーのリーダー格たるハミルトンも、ナイフにも負けない鋭さを誇るユリンの眼力には敵わず、そのまま黙って拾い上げたファッション雑誌をコンテナの上に置いた。

「まあいい。出撃準備するぞ」

気を取り直してそう告げるや、ユリンと、激痛からある程度回復したらしいジークとアレンが各々のパワードール・アンタレスに駆けていく。

連邦軍によるスラムへの攻撃、それを迎撃するDC残党の出撃が始まろうとしていた。

(メインシステム通常モード。各武装オールグリーン。カメラモード通常モード。レーダーON、ECMは対誘導ミサイルのジャマーに限定。FCS起動。通信Chを3に設定。チェック完了……………)

DC戦争末期に連邦軍から鹵獲した輸送機・レイディバード、その格納庫の片隅に佇むパワードール・アンタレスのコクピットの中で一通りの確認作業を終えると、ユリンは目を閉じ集中力を高めていた。

と、こんな時に、あるいはこんな時だからか、脳裏に嫌な思い出が浮かんでくる。

(お父さんを…お母さんを…返してよ!)

燃え盛る廃墟で、一人の幼い少女が自分に対して悲痛な叫びを上げている。

(ごめんね…………)

そう言って彼女を抱き寄せると、その手に拳銃を渡した。

(代わりに…………その銃で私を殺して…………)

その時の自分は知らなかった。他の償い方を——少女に殺される以外の方法を。

(お父さんと……お母さんの仇……！)

(ほら……撃って……)

そして、渡した拳銃の先が自分に向けられる。

——……こんな最期なら悪くないかもしれない。

(……ッ！うぐっ……！)

思った刹那、鋭い銃声が鳴り響き、胸から大量の血が溢れてくる。

(……両親の仇……討てたね……)

苦悶に顔を歪めながらそう告げると、少女は銃を落とし、泣きながら謝ってくる。

(違う……こんなの……ごめんなさい……ごめんなさい……)

(いいんだよ……)

(ごめんなさい……私も死ぬから……それでおあいこ……)

言うや少女は拳銃を拾い、銃口を頭に当てた。

「ダメ……やめて——」

止めようと手を伸ばすも激痛に悶える体は思うように動かず、やつとの思いで絞り出した声も2回目の銃声に掻き消された。

(…………またあの日の……)

それはユリンが13歳の頃——まだDCの一員として活動していた頃の記憶。

ある街に攻撃を仕掛け、そして大勢の罪のない住人を殺した。その中で唯一生き残ったのが思い出に出てきた少女であり、彼女に殺されることでその罪を償おうとするも死ねず、それどころか彼女を自殺させてしまった、とても苦い過去。

(だから私は、あの子の死を無駄にしない為に生きることにしたんだ。ただひたすらに……)

その一件の後に抱いた想いを思い出しながら、ユリンはタンクトップの上から胸の辺りを撫でる。そこにはあの日の弾痕が未だ残っているが、本人は罪の証だと思っている。

そこまで考えると、今度は数日前、今回の作戦のブリーフィング後

にジークと交わした会話を思い出す。

（お前の言う“償い”には丁度いいんじゃないか？今度はお前が守る番だ）

（……何百人……いや、何千人救ったところで償える罪じゃないわ。人の命は守るより奪う方が簡単……だけど、奪う方がずっと重いんだから……一生かけて償い続けるつもりよ……その為にも死ねない）

直後、ハミルトンの声が通信機から響き、ユリンは思考を中断する。  
『目標確認。敵部隊はもう到着して攻撃を始めている。各員、パワードール投下するぞ。着地に備えろ』

指示を聞くやユリンは操縦桿を握り直し、力を入れる。

『投下開始！』

「……………ッ!!」

内臓がこみ上げてくるような不快感に耐えながら、足のペダルを踏みブースターを吹かし、衝撃を緩めて着地する。

「はぁ……はぁ……」

『相変わらず着地は苦手か？ユリン』

「だ、大丈夫……」

『無理はするなよ』

「了解」

ハミルトンとのやり取りで気を取り直すや、ユリンは戦闘態勢に入る。

「突っ込むから援護お願い」

『分かったッス！』

アレンの返事を聞くや、ユリンのアンタレスはマシンガンを構え、前方のアーマードール・ルークに突撃、勢いのままにその脚部を蹴り飛ばしてバランスを崩させ、近づいてきたコクピットにマシンガンの一連射を叩き込む。

『『なっ!?!』』

その光景を見て、他のチームのメンバーは驚愕する。

この世界における人型機動兵器の元祖・パワードール、その運用データを参考にしつつさらに上の人型機動兵器として生み出された

のがアーマードールであり、必然的に基本性能は後者の方が高い。不意打ちとはいえ、1対1の勝負ではパワーードールの方が不利であることが常識、旧式のアンタレスならばなおのことだ。

加えて、パワーードールの操縦はコクピットにかなりの負荷がかかる。それこそ通常ブーストでもGによる負担がかかるほどだ。特にパイロットスーツのない武装勢力ではそれが顕著になる。

それを、ユリンはパワーードールでの飛び蹴りという方法でその常識を破壊した。ユリンの無茶な戦いはある程度有名だったが、実際に目の当たりにすると驚きは隠せなかった。

「ちっ……次！」

ユリンは血反吐を吐くと、近くの最新型パワーードール・サジタリウスに向けてマシンガンを乱射、蜂の巣にした。

『第3部隊、ユリンに続け！彼女の後方を援護しろ！前方は足手まといにしかない！』

『了解！』

ハミルトンの号令の下、すぐさまユリン以外の3人は彼女の後方に配置、援護態勢に入った。

『第1、第2部隊はそれぞれ反対方向を遊撃！犠牲者を最小限に抑えろ！』

他の部隊もそれぞれ戦闘体勢に入り、本格的に戦闘が始まった。

その頃、戦場から少し離れた連邦軍部隊の待機地点では。

『敵が現れた。リョウト、準備は出来ているな』

「ああ……」

あるパワーードールのコクピットの中で、少し幼い顔立ちをした青年が出撃準備をしていた。リョウトだ。

(……これが本当に正しいのか……?)

『悩んでいるのか。これも秩序のためだ。割り切れ』

「了解」

通信越しの声に応じると、パワーードール輸送車のハッチが開き、彼



の機体が現れる。

白銀の装甲に、ところどころ赤があしらわれ、騎士のようなイメージを与える外観をした、いっそ趣味的ともいえるデザインをしたその機体は、実用性第一を信条とするパワードールにあっては異端といえた。

『今日はその機体のテストも兼ねている。何としてもその機体は持ち帰れ』

「了解。パワードール、セラフイム、出撃する！」

応じるや、リョウトは騎士のようなパワードール——セラフイムを輸送車から発進させ、最も問題となっている戦域へ駆けさせる。

ジークのアンタレスが撃ったスナイパーキャノンの大口徑榴弾が、正面のルークの右膝を歪めて摺座させる。

間を置かずユリンはそのルークに接近し、向けられたマシンガンの弾雨を左右に動いてかわしながら懐に入ると、左腕に装備されたパイロバンカーをコクピットへ突き入れる。

炸薬の爆発によって押し出された杭がハッチを貫き、マシンガンを構えていた腕が力無く下ろされるのを見てそのルークの沈黙を確認すると、ユリンはリーダー画面を見やる。

「これで5機……この反応……速い！」

丁度高速で接近する機体を感じると、ユリンはその対応に移る。

「あれは……新型!？」

少し移動した先で確認した新型パワードールと思しき白銀の騎士の様な機体に、思わず驚嘆の声が漏れる。

その新型パワードール——セラフイムは腕部のブレードを展開するや、ユリンのアンタレスに斬りかかってくる。それをユリンはパイロバンカーの杭で受け止めた。

「強い……!」

『投降しろ! そうすればこの戦いは終わる!』

「何が戦いよ……! 罪のない人を傷付けて……これがあなたたちの正

義なの!？」

『ッ……………!』

通信越しに聞こえたセラフイムのパイロットと思しき声に言い返しながら、ユリンはアンタレスにセラフイムを弾き返させ、体勢を立て直す。

そして、両機が再びぶつかり合う。

『お前たちが秩序を乱すから!』

「何の為の秩序よ!弱者を虐げて、それが秩序の為?冗談じゃない!」  
そんな口論の間にも両機は一進一退の攻防を繰り返している。

加勢に入ろうと接近した連邦軍のパワードール・サジタリウスが空振りした一太刀に腕を斬り落とされ、ルークがマシンガンの流れ弾を食らって碎け散る。DC残党からもアンタレスが突撃をかけるものの、両機の間に入ったその機は数瞬で穴と切り傷だらけのスクラップと化す。

それは、既に並の機動兵器乗りに近寄れる状態ではなかった。

『仕方ないだろ!鬼やゴースト——人類共通の脅威と立ち向かうには、一刻も早く人類を一丸にしなければならぬ。強い秩序を打ち立てなければならぬ!そうしなければ世界は守れないんだから!!』

「そんな事でしか守れない世界なら、脅威諸共私が壊す!この手で!」  
『本気で言ってるのか!?!その力がどれだけの人を傷つけた!お前たちのやっていることは秩序を乱す暴力でしかない!混乱を長引かせて、人外共の好き勝手を助長してるだけに過ぎない!!』

「あなたはそれで納得しているの!?!本当にそれでいいの!?!」

『いい訳ないだろ!でも、こうすることで少しでも早く脅威を除けるなら——必要最低限の犠牲で済むならそうするしかないだろ!』

「それはただの逃げよ!」

その時、アンタレスの腕がセラフイムの懐を捉え、拳を叩き込んだ。

『ぐあっ!』

「くっ……………流石新型ね……………」

その衝撃で、セラフイムが膝を着く。

「これで……………」

『ここまでか……』

その時、セラフィムのコクピットのモニターが突然光り出した。

《KIKYO SYSTEM MOTION》

「君は………一体………」

気がつくどリヨウトは、真っ白の空間にいた。そして、その目の前には、一人の少女が背を向けて佇んでいる。

「……………」

「君………何処かで………」

しかし、それを考える間も無くリヨウトの意識は暗転した。

『キキョウシステム起動。精神干渉を開始します』

「何だこれ!? どういうことだ!」

再びリヨウトが意識を取り戻すと、今度はコクピットにいた。そして、直後に聞きなれないメッセージが流れ、コクピットが赤い光に染まる。

「何だこの感じ………うわあああああ!!」

突然襲ってきた強烈な頭痛に、リヨウトは悲鳴を上げる。システムの精神干渉によるものだ。

『システムオールクリア。時空間兵器、起動します』

「何が……起こってるの……?」

目の前のパワードール、セラフィムの各部装甲が展開し、赤色に発光する。

そして突然、セラフィムの横にあった電柱が折れ曲がり、歪みながら潰れていった。そのまま、セラフィムの周りの空間がところどころ

歪んでいく。

「何なの……あれ……」

ユリンは未だに信じられずにいた。目の前のセラフイムに起こっていることが。

ユリンとて、鬼や時空崩壊といった、一見常軌を逸したような存在や現象を目にしているし、昨今の科学技術、殊に機動兵器の進歩は著しく、少し前まで夢物語の域だった機能が次々実用化されていることも承知している。

が、いくらそうした知識を備えていても、最新型であるといっても、目の前の機体は所詮性能では他の機動兵器に圧倒的に劣るパワードールでしかなく、そんな物に空間を歪める機能が搭載されているなど、ユリンには鬼や時空崩壊以上に世界の常識を超えているように見えた。

「今なら……やれる!」

声を出すや、ユリンは勇気を振り絞り、恐怖を押し潰してセラフイムに突撃する。

「うわああああ!!」

恐怖を振り払う為に叫びながらアンタレスのパイルバンカーを構え、立ち止まっているセラフイムに飛びかかった。

しかし、

「なっ!」

パイルバンカーの杭はセラフイムの寸前で止まってしまう。

「届かない……?」

何度もトリガーを引くも、セラフイムの前に見えない壁があるかの様に杭は進まず、攻撃は届かない。

「バリア……とでも言うの……?」

『……やめ……ろ……!』

セラフイムの手のひらで、空間が急激に歪み始めた。

「何を……まさか!」

刹那、その手でセラフイムはユリンのアンタレスを殴り飛ばした。

「ッ……!!」

その衝撃で、アンタレスの正面装甲は大きく歪み、コクピットにもダメージが来る。

「痛っ……………！反則じゃない……………」

強がってみせるものの、ユリンの体には大量の破片が突き刺さり、血だらけになってとどころどころ痙攣もしている。

「もう一発食らったら……………間違いなくあの世行きね……………」

そう言いながら、ユリンは力を振り絞りアンタレスの操縦桿を握る。

「……………やば……………力も抜けてきた……………」

視界が眩んでいくが、それでもユリンは強い意志で持ち堪える。

その時、

「あれは……………子供!？」

ユリンが見たその先には、死体の前でうずくまる少女がいた。

(あれに巻き込まれたらあの子は……………そんなこと……………させない!)

その時、ユリンの瞳が金色に染まった。

コクピットをスナイパーキャノンから撃ち出された榴弾で爆破されたルークが倒れ込み、その先にいたサジタリウスを押し潰していく。

その横では別のサジタリウスがロケット弾の直撃を受けて吹き飛び、あるいはマシンガンの斉射を受けて蜂の巣となっていた。

『こっちは全滅したツス!』

『こっちも終わった。ユリンは?』

『……………通信が届かない』

『何……………?』

目の前に広がる屑鉄の山を作り出した第3部隊——アレン、ジーク、ハミルトンは、敵を壊滅させてユリンの探索に入っていた。

『……………いたぞ。でもあれは一体……………』

『どうした?』

ジークがユリンを発見する。しかし、そこで見たのは余りにも現実

離れた光景だった。

装甲の歪んだ中破状態のアンタレスと、新型と思われる機体がなんと殴り合いの戦闘をしていた。

しかも、一発一発が大きな爆風を起こして。そして、その周りではところどころ空間が歪んでいた。その光景を、一人の少女が眺めていた。彼女は、一見危険に見えて、確実にアンタレスに守られていた。

『おいおい……少年漫画か？これは』

その光景を見て、ジークはそう呟く。

『どれどれ……って何すかコレ!?!』

アレンも、その状況を見て驚愕していた。

『ユリン……お前は一体……』

そんな中、ハミルトンは一人そう呟いていた。

ユリン同様、常軌を逸したような物事を見聞きしている彼らだが、同時にユリン同様、それでも目の前の光景は非常識的に見え、悪寒を感じずにはいられなかった。

「この力………一体………」

激しい戦いの中、ユリンは呟いた。それもそのはず、空間を操る力。それを今使っているのは、アンタレスではない。ユリン本人なのだから。

「あなた、その罪のない女の子も殺す気!?!それがあなたの正義!?!」

『正………義………?』

ユリンがそう叫んだとき、セラフィムのコクピットでようやくリョウトが正気を取り戻した。

「これの何が秩序よ!脅威への備えよ!こんな………!」

『俺は……何を………!』

その時、リョウトの目に映った。セラフィムを、自分を見て怯える少女が。

「あなたはその子を殺そうとした。その子に何の罪があるの?脅威を除く為なら子供を犠牲にするのも仕方ないことなの!?!」

『俺は……俺は……!』

『セラフイム、帰投しろ。データは取れた』

『くっ……! 帰投する……』

通信の帰投命令と同時に、セラフイムは撤退していった。

「……私……どう……しちやっただら……」

去っていく白銀のパワードールを見送ると、ユリンは気を失い、コクピットの中で眠りについた。

「何だあのシステムは?!」

集合地点と定められた最寄りの基地に到着するや、セラフイムから降りたリョウトは横浜基地から同行したスタッフの首元を掴み、壁に叩きつけた。

「不満かね? キキョウシステムは」

「キキョウシステムとは何だ!」

「機密情報だ。教える訳にはいかんな」

「チツ……」

リョウトはスタッフを手放し、舌打ちすると、ひとまず制服に着替えようと更衣室へ向かう。

「キキョウシステム……嫌な予感がする……探ってみるか」

その道中、誰にも聞こえない声でそんなことを呟きながら。

その頃、ハミルトンらDC残党は、作戦参加部隊と周囲の被害確認を済ませ、生き残ったアンタレスを迎えに来たレイデイバードに積んで基地への帰路についていた。

(……ユリン……お前は……)

自分のアンタレスのコクピットに座るハミルトンは、開け放たれたハッチから格納庫の片隅に横たわる包帯だらけのユリンを眺める。

停止したアンタレスから引き出した際、体中に刺さった破片で血まみれになっていたのを見て、応急処置を施した後、非常用の鎮痛剤を

注射して寝かせたのだ。

と、不安そうな表情を浮かべたジークが歩み寄ってくる。

「……どうしたジーク？ 浮かぬ顔して？」

仲間の不安を和らげようと、ハミルトンは意識して明るい声色で訊いてみる。

「いや、ユリンなんだが……大丈夫、だろうか……？」

「……………」

言葉を選んでいようような歯切れの悪い返答に、ハミルトンは未知の力を駆使して連邦軍の新型と戦っていたユリンの姿を思い出す。

（ユリンのあの力が危険ではないか、ということか？……否、ジークに限ってそれは無いな。となると……）

少し考えてその胸中を察すると、多少現実的な要素も加味した上で返す。

「確かに、今回の怪我はかなり危ういだろうな。それこそ基地に戻るまでは、俺たちにはああやって包帯巻いて止血して、気休め程度の鎮痛剤を打って楽にしてやるのが精々だ。だが、ユリンのしぶとさはお前も知ってるだろう？」 償う「までは何が何でも生き延びる、そういう奴だ。その執着を信じようじゃないか」

「……………そうだな」

ハミルトンの言葉に、心なしか不安の引いた顔で応じると、ジークはユリンの傍らに腰を下ろし、羽織っていた上着を掛け布団代わりに掛けてやると、疲れを浮かべた寝顔をそっと撫でてやる。

直後、レイディバードの操縦士の悲鳴に近いアナウンスが響き渡る。

『こ、後方よりリオン9機接近！ 連邦軍ですっ！』

（↑パトロールと鉢合わせ……否、こっちが無防備になった隙を突いてきたか……）

今というタイミングと9機という数に半ば確信的に断じつつ、ハミルトンは周囲を見回して事態に対処しようとする。

元来20メートル級のパーソナルトルーパーやアーマードモジュールの運搬を前提に開発されたレイディバードの格納庫には、今



は多様な装備を備えた多数のアンタレスが積まれている。

「……………」

それらを見てみると、不意にジーク機、それに装備されたスナイパーキヤノンが目に入る。

（あの長射程を上手く使えば、迎撃できるかもしれない……………もつとも、空中を自在に動き回るリオンにどこまで通じるか……………しかし、現状ではこれ以上の策は……………悩んでいても仕方ない！最低でも、あと数分飛ばばなんとかなるんだ。それなら……………）

若干の迷いを覚えながらも腹を括ると、ハミルトンは自機の無線をレイデイバードの操縦室へ繋ぎ、同時にざわつく格納庫内によく通る声を上げる。

「みんな、聴いてくれっ」

自身の中にある不安を見せないよう注意しつつ、考えたことを早口に述べていく。

「……………他に方法は無さそうだな」

「このままじゃ確実に墜とされるしな」

「何もしねえよりはマシか！」

「……………よし、じゃあ早速準備だっ！」

口々に肯定的な声が上がったことに安堵したのも一瞬、ハミルトンのひと声の下、レイデイバードに乗り込んでいる者たちはそれぞれ動き出す。

ジーク機を中心にマシンガンやマイクロロケットを備えたアンタレス数機が格納庫後部に並び、自機の装備がこの作戦に不向きだったり、自機が動かない、あるいは先の戦闘で失った者たちは前部側へ避難する。操縦士も何処かしらに通信を繋ぎ、無線越しの相手に現状を手短に説明する。

ややあつて各々の配置が完了すると、後部ハッチが開け放たれ、編隊を組んで迫ってくるリオン9機にそれぞれの火器を向ける。

その時、リオンの1機がおもむろにレールガンを撃ってくる。

『!!あいつら、警告も無しッスか!?!』

「御意見無用はお互い様だ。こちらも行かずっ!!」

『了解ッ!』

レイディバードの脇を豪速で掠っていく弾丸にアレンが裏返った声で叫ぶ傍ら、ハミルトンの号令に応える様にシーク機のスナイパーキャノンが火を噴く。

撃ち出された榴弾は瞬く間にレールガンを撃つたりオンの頭部に命中し、頭部を爆砕すると同時に推進器周りに不調を負わせたのか、見る見るその高度を下げさせていく。

連邦側には予想外の攻撃だったのか、僚機が陥った事態に他のリオンたちは慌てて散開するが、そこに多数のマイクロロケットが迫り、反射的に回避した1機の胸部にスナイパーキャノンの一撃が着弾し、空にひと際大きな爆発の光が広がる。

『オオ!!』

『思ったより行けるぞッ!!』

たちどころの2機撃墜に所々から歓声上がるが、ハミルトンの表情はあくまでもシビアだ。

「油断するなっ。マシンガン持ちは弾幕を張れ!」

その指示が終わるか終わらないかといった頃合いに、スナイパーキャノンの射線に入らないよう注意しつつ距離を詰めてきたリオンたちからミサイルが放たれる。

即席の機銃座となったアンタレスたちのマシンガンが四方八方から迫るミサイルを迎撃し、パイロットによってはスナイパーキャノンの射線にリオンを追い立てようと試みる者もいるが、肝心のジークは激しく揺れるレイディバードに声を荒げる。

『オイッ!あんまり揺らすなッ!狙いが定まらんっ!!』

『無茶言わないでください!こっちはただでさえ足の遅い輸送機なんですよ、すばしっこいリオンに囲まれようものなら……』

多分な恐怖を含んだ声に、ハミルトンは操縦士に賛同する。

「彼の言う通りだ。袋叩きに遭えばそれで終わりだぞ」

『だが墜とせないことには——』

「あと少しだけ時間を稼げれば充分だ。撃墜に拘らなくても、火力や飛行機能を奪えれば……最悪牽制だけでもできればそれでいい」

『……了解』

ハミルトンのやや強い語調と、先ほどの作戦概要を思い出してか、ジークはいくらか怒りの引いた声で応じ、レールガンに向けて接近してきたリオンの1発撃って追い払う。

が、直後に別の1機にレイディバードの上に回り込まれてしまう。  
(しまったッ!!)

ハミルトンが思う間にも、そのリオンは眼下のレイディバード、その操縦室にレールガンの狙いを定める。

刹那、横から飛び込んできたアーマードモジュールほどの大きさの光球がリオンを粉碎し、直前に撃ち出されたレールガンの弾が操縦室の脇を掠める。

「?……ガーションだ?!」

機体を包んでいた光——エネルギーフィールドが消えて現れた細身の、しかしリオンよりも人型に近い姿に、ハミルトンは思わず狼狽の声を漏らす。

よく見ればそのガーション——より厳密にはガーション・カスタム——には右腕と右脚が無く、左手にはアサルトブレードが握られている。

と、ガーション・カスタムが来た方向からリオンをより人型に近づけたような黒い機体——レリオンも現れ、ガーション・カスタムの後方につくや手にしたボックス・レールガンをリオンたちに向けて撃つていく。

不意の増援に困惑したらしいリオンたちの足並みは乱れ、その隙を突く様にガーション・カスタムは手近の1機の胴部をすれ違いざまにアサルトブレードで両断する。

『援護を!』

「!ジークっ!」

『りよ、了解!』

頭部を向けながらのガーション・カスタムのパイロットの声に、一連の光景を格納庫から啞然として眺めていたハミルトンはハツとしながら指示を飛ばし、ジークも未だ動揺を残しながらもスナイパー

キャノン撃つてリオンの左肩を砕く。

そうしてリオンたちの牽制——可能なら損傷を与える——が続くことしばし、不意に地上からリオンたちへ向けてマシンガンと思しき一連射が加えられる。

地上から上空の標的を撃つたこともあるが、もともと狙いが甘かったのか弾はどのリオンにも一発も掠りもしなかったものの、直後に響き渡った拡声器越しの声に、リオンのパイロットたちはこれまで以上の動揺を、ハミルトンたちレイディバードの乗員たちは歓喜を上げることとなる。

『接近中の連邦軍機に告げる。我々はイスダルン国国境警備隊である。先ほどの攻撃は威嚇だ。貴官等は我が国の領空に無許可で侵入しようとしている。至急転進して引き返せ。この警告に従わない場合、我々は実力を以って貴官等に対処する』

「……なんとか、持ち堪えたな……………」

眼下の荒野に並んだマシンガン装備のルーク数機、そこから響く有無を言わせぬ言葉に、自身の立案した目論見が成功したハミルトンは脱力した体をコクピットのシートに預ける。

(イスダルン国の領内に拠点を設けておくのは、こういう時に役に立つ。イスダルン国にとって、例え残党でもDCは連邦とやり合う上でまだ利用できるからな。上手く匿った上で、人外共が好き勝手やる今の情勢を逆手に取れば、連邦も迂闊には手を出せん)

目の前の事態のカラクリを胸の中で整理している間にも、国境上空すれすれで滞空したりオンたちから憤りを含んだ声が響く。

『領空侵犯というなら、まずそのレイディバードだろう！』

『そいつらはテロリストなんだぞ！ここまで追いつめてオメオメと見過ごせるかっ!!』

そんな叫びが響く間にも、ハミルトンたちを乗せたレイディバードと、その周囲を追従するガーリオン・カスタムとレリオンはリオンたちから離れていく。

『貴官等の主張するものについて、我々は関知していない』

『そんな台詞が通じると思ってるのかッ!!』

取り付く島もない警備隊の返答に、リオンの1機がレールガンに向ける。

が、

『停戦協定を破るか？鬼やゴーストの他に、この上我が国まで相手にするか？』

『……………』

その一言にレールガンを向けたリオンは砲口を逸らし、機体の挙動に口惜しさを滲ませながら、1機、また1機と転進していく。

「……………ふうー……………あとは基地に帰るだけ——いや、まだ一つあったな」  
一連の様子を見て危機が去ったことに安堵したのも束の間、ハミルトンは傍らを飛ぶガーリオン・カスタムとレリオンの見ると、後方からさらに2機、頭と両腕の無いレリオンの追いかけてくる。

「……………危ないところを助けていただき感謝する。貴官等もDCか？」  
『そうだ』

無線越しに問いかけるハミルトンに、ガーリオン・カスタムのパイロットが答える。

『ヨーロッパの方に潜伏していたんだが、疫病神にそそのかされて盗賊の真似事したらこのザマだ。おまけにアジトまで攻められそうになったんで、夜逃げしてイスダルン国に匿ってもらおうとしたら、貴官等が見えたからな』

「……………そうか」

心なしか自虐的に語るパイロットに、ハミルトンは短く応じる。

と、後方を飛んでいた頭と両腕の無いレリオンの1機の足取りが危うくなる。

『隊長……………』

『やはり、応急修理ではここまでが限界だったか……………』

不調になり始めたレリオンのパイロットと思しき声に、ガーリオン・カスタムのパイロットは惜しむ声を漏らす。

「……………」

それを見て、ハミルトンはしばし思案し、レイデイバードの操縦室に無線を繋ぐ。

「同志の機体が不調のようだ。乗せてやってくれ」

『いや、しかし……』

「積載量はまだ余裕があつたらう？　そうでなくとも彼らは俺達の恩人だ。恩を仇で返すのか？」

『……了解』

痛い所を突かれた様子で応じると、操縦士は機内放送で他のアンタレスたちに場所を空けるよう呼びかけ、不調なレリオンの受け入れ態勢を整えていく。

ハミルトン自身放送に従って端に避けると、アンタレスを降りて格納庫前部に避難させていたユリンの許へ歩み寄る。

先の戦闘の負荷は思った以上に強かつたらしい。一連の騒動に気づいた様子もなく、未だぐっすりと眠っている。

「二件落着……かどうかは怪しいかな……？」

格納庫に倒れ込む様に入ってくるレリオンを眺めながら、戦闘とは違う意味で騒がしくなる予感に、ハミルトンは嘆息を漏らした。

そんな乗員のことはつゆ知らず、ガールイオン・カスタムと2機のレリオンを伴ったレイディバードは、一路自分たちの基地を目指す。

「……………あれは一体……………」

セラフイムとの戦闘からどれくらい経つただろうか。重い目を開けたユリンは、自分が基地のベッドの上に横たわり、包帯だらけの体に鎮痛剤らしき点滴を打たれていることを把握する。

「それよりも……私は……」

直後に戦闘の記憶、特に後半の様子を思い出したユリンは、自分の事に疑問を抱いた。

金色の目、空間を操る力。どちらも人間という範疇ではない。

「あの敵……いつかまた……」

あの敵——セラフイムと戦えばいつか核心に辿り着けるかもしれない。直感的にそう考えると、ユリンは再び眠りについた。

## 21 伊豆、帰還

黒い穴を抜けた先——来た時と同じ、しかしクロイツリッターの数が一気に減ってすっかり寂しくなった格納庫に戻ったエリアは、普段の習慣のまま機械的にベネクテイオを指定の位置に収めると、出撃前の熱意に燃えていた姿が嘘の様な生気の抜けた目を焦点なく漂わせる。

その時、モニターにグリムの顔が映し出される。

『やあエリア、出撃ご苦労だったね』

「……グリム……閣下……」

数十分前に対面した時と変わらない、温和そうな笑顔。その自身とは正反対な上官の態度に、クロイツリッターの暴走以降鈍化していたエリアの胸中に、懐かしい“熱”が湧き出てくる。

「……どういうことでしょうか？出撃に用いたクロイツリッター全機の整備に不備があったようですが？」

“熱”を引き写した視線を鋭くしながらも、今にも荒れそうになる声をどうにか抑え、今一番の確認事項を問いかける。

『はて？不備とはなんのことだい？』

「あの暴走のことです。閣下も観戦していらしたのでしょう？」

明らかに恍けているグリムの態度に苛立ちを覚えながらも、エリアは平静であるよう努めながら尚も問い続ける。

『ああ、あれか。それなら「不備」というのは間違いだね。あれはどのように“調整”した結果だから』

「……調整……ですか？つまり閣下は、あのようなことになる……騙し討ちのような形になるとわかっていた上で、私を出撃させた……と!？」

あくまでも平然と答えるグリムに、エリアの声が徐々に強くなっていく。

『おっと、そんな怖い顔しないでくれよ。確かに君まで騙す格好になったのは悪かったが、まず味方を欺かないことにはね。これは戦争なんだ。勝つ為に最も有効な手段は積極的に使わなくちゃ』

「それは……………」

ゲームの定石を教えるような調子で言ってくるグリムに、話の内容そのものは理解できるアリアは、つい押し黙ってしまう。

確かに、自分たちは「安息の地を得る」という大義の下、地球連邦をはじめとする諸々の勢力と戦争を行っているのであり、戦争である以上、勝つ為に手段を尽くすのは道理といえる。

しかし、アリアの深い部分には、別の想いも確かに存在している。「それはそうでしょう……………」しかし、同時に私には騎士としての――戦う者としての誇りがあります。今回出撃を願い出たのも、突き詰めればその誇りを守りたいが故。それをこんな騙し討ちのような――」

『「誇り」とやらで戦争に勝てるのかい?』

「……………」

熱を帯びてきた主張を遮る様に再度告げられたグリムの言葉に、アリアは再び黙ってしまう。

『感情論では物事は動かないよ。そんなことより、帰ってきたのだから少し休むといい。疲れて気が立ってるのもあるんだろうしね』

「……………はっ」

アリアが短く応じると、グリムの方から通信は切れる。

すぐに静かになったコクピットを降りると、奥から過度に装飾された貫頭衣に身を包んだ少女――リイムが歩み寄ってくる。

「どうしたのアリア? 怖い顔して?」

「リイム閣下……………」

不思議そうな顔で訊いてくるリイムに、アリアは今一番の疑問を投げかける。

「二つ御聞かせください。閣下はこのようになるのとわかっていた上で、私に協力を申し出てくださったのですか?」

「このようなの?」

「クロイツリッターたちが勝手に動き出したことです」

「ああ。別に知らなかったけど? 大方、グリムが何か仕込んだんでしょうけどねえ……………もつとも、私は予想以上に楽しめたからよかった



けど。あのマント付きのお嬢ちゃん……次に会うのが楽しみだわく!!」

恍惚とした顔で告げると、リイムは満面の笑みを浮かべて格納庫の出入り口へ向かう。

「……………」

その背中を無言で見送っていると、アリアの横に黒ずくめの服装をしたベネクティオが現れる。

「……………その、だな……………今回のことは……………」

普段の人を突き放す様な語調を抑え、慣れない様子で声をかけようとするも、それはすぐにアリアの鋭い視線に遮られる。

「……………何か思いついたようだな」

「ああ」

すぐにそれが自分への怒りでは無く、別の気持ちの表れだと察したベネクティオは先を促し、アリアは声の大きさにいくらか注意を払いながらも、明確な意志を乗せて告げる。

「三柱——少なくともグリム閣下は……………信用できない」

すっかり西に傾いた太陽が、ヴァルキリーズ極東支部一帯を紅に照らしていく。

ルミエイラ撤収からすぐに被害状況の確認が始まり、それも終わって傷ついた建屋の復旧作業が開始されて久しい中、比較的損傷が少なかった司令塔、その執務室では、リトスと光秋が昨日ぶりの対面をしていた。

「遅くなりましたが、今回は駆けつけてくださり本当にありがとうございます」

「いえ、こちらは上の指示に従っただけですし……………それ以前に、若い衆が頑張ってくれましたからね」

机に額が着くギリギリまで深く頭を下げるリトスに、光秋は少し狼狽えつつ、恭弥たちのことを思いながら応じる。

「彼らが持ち堪えてくれたからこそ、僕とミヤシロさんが加勢できる

チャンスができたんです。ヴァルキリーズの方々もそう」

「それはそうですが……それと、復旧作業の協力についても、重ねて御礼を」

「ああ、それは……」

言われて光秋は、1時間ほど前までのことを思い出す。

戦闘が終了し、被害状況の確認が始まった頃、非特隊の全機は地下格納庫とヴェーガスに収容され、各所で点検作業が行われた。開始から30分もする頃にはそれもひと通り終わり、各機とも稼働に影響はないことがわかってくると、10代パイロットメンバーを中心に復旧作業を手伝いたいと申し出てきたのだ。

諸々の事後処理もあってすぐに移動できなかったこともあり、光秋はエリックの意見を仰ぎつつこれを承諾。以来、処理も終わって輸送機への機体搬入が開始された1時間ほど前まで、各々自分の機体を用いた復旧作業の手伝いが行われていたのだ。

「彼らもじつとしていられない様子でしたからね。ああいう時は動かしてやった方がいいと思ひまして。隊全体としても救助者の受け入れとか、一宿一飯の礼とか、いろいろ返さなきゃいけないこともありましたし」

自分がライカやヴェーガスのブリッジメンバーたちと関係各所への連絡や書類作成に追われていた横で、主に15から20メートル級のロボットたちが——あまつさえナガイのマジンカイザーSKLまでも——瓦礫の撤去や資材運搬などに駆けずり回っていた光景を思い出して、光秋は遠くを見る様な目に微笑を浮かべながら告げる。

「……………ただ、御礼をと言うのなら一つお願いが」

しかしすぐに笑みを消し、真面目な顔を浮かべながら、光秋は慎重に切り出す。

「何でしよう?」

「昨日こちらを訪れた際にも話した、鬼対策での協力についてなのですが、連邦軍——少なくとも我々非特隊とのより強い連携体制を整えていきたいと考えています。リトス司令におかれましては、この体制作りの協力をお願いしたいのです。具体的には、鬼に関する情報の共

有や、双方の人材の積極的な交流の機会を設けていただきたい。もちろん、こちらも可能な限り手は尽くします」

リトスの問いに、光秋は昨日この部屋を訪れた時から頭の片隅で考えていたことを述べていく。

「……………」

それに対して、リトスはしばしの逡巡の後に口を開く。

「加藤主任の仰りたいことは理解できます。今の情勢や双方の存在意義を考えれば、寧ろ自然な流れかもしれません。ただ、私の一存で全てを決められるわけでもありません。今の話の実現できるよう善処はしますが、具体的な返答はしばらく待ってください。各支部との協議もありますので」

「構いません。少なくとも、具体的な返事がいただけるまでは今まで通りということでもよろしいでしょうか？鬼の迎撃に出て現場で遭遇した場合、双方自主的に協力してこれに当たる、ということですか？」

「はい」

「わかりました。それでは」

深く頷くリトスを認めると、光秋は一礼してドアへ向かう。

その時、ノックの音が響き、返事を待たずに開いたドアから白衣姿の老人が入ってくる。顔に浮かんだ多数のしわがかなりの高齢であることを物語っている一方、180センチはある背丈と危な気のない足取りは歳の割りに元気そうな印象を与えてくる。

「おおすまんリトス君。取り込み中じゃったか？」

そう言っ引き下がろうとする老人を、リトスは光秋の横に移動しながら呼び止める。

「いいえ、話は今終わったところです。ただ、いい機会かもしれませんね。先生にも紹介させていただきます」

言いながら、リトスは光秋を示す。

「こちら、最近連邦軍に新設された非常事態特殊対策部隊主任の加藤光秋大尉です。加藤主任、こちらは私の学生時代の恩師にして機械工学の権威、そして現在はヴァルキリーズに御協力いただいている、新田源三博士です」

「軍人さんかの？新田じゃ。リトス君の話聞く限り、君たちの部隊がルミエイラとかいう連中から極東支部を守ってくれたそうじゃな。儂からも礼を言わせてくれ。ありがとう」

「いえ、それが仕事——というか、それは若い子たちに言っただけでください。あ、加藤といいます」

リトスの紹介の下、源三と光秋は握手を交わす。

「!?」

歳の割りにいい体付きから予想はしていたものの、それ以上に強く握ってくる源三に、光秋は少し戸惑ってしまう。

「ま、リトス君は『権威』などと言っていたが、世間では『変わり者』の方が通りがいいかもしれないがな。特にここ数年は」

「……………どういうことですか」

握手を解きながら自虐的に呟く源三に、しかしその意図がわからない光秋は首を傾げる。

「ほれ、『桃太郎が巨大ロボットだった』という説を発表して嘲笑された学者がおったじゃろう？あれが儂じゃよ」

「……………ああ」

言われて光秋は、昨日大陸へ向かうレイディバードの中でライカとメイシールが話していたことを思い出す。

「もつとも、この説が正しかったことは実証されたわけじゃがな……………幸か不幸か」

「……………そうですか」

またも自虐的に、最後は陰のある顔で告げる源三に、容易に踏み込んではいけないものを感じた光秋はそう返すのが精一杯だ。

「……………おっとすまん、話が逸れてしまった……………まあなんじゃ、助けてもらった恩もある。連邦軍全体への協力は儂個人のポリシーから遠慮させてもらうが、君たち非特隊に限っては個人にできる範囲でなら協力してもいいと思っとる。なにかあれば声をかけてくれ。リトス君、紙とペンを貸してくれ。紙はいらんものでいい」

「ほう」

言われてリトスは机に置いてあったペンと裏紙を渡し、それらを受

け取った源三はなにかを書いていく。

「これが連絡先じゃ。なにかあればここにな」

「わざわざありがとうございます。では、僕の方も一応……」

それを受け取った光秋も名刺の裏に電話番号を記入し、それを源三に渡す。

「では、今回はこれで失礼します」

そう言い残して今度こそ執務室を出ると、光秋は最寄りのエレベーターへ向かう。

「……………なんというか……………少し変わった青年じゃな？」

「先生もそう感じましたか。具体的にどこかと訊かれると困りますが、話しているところか違和感を感じますよね」

光秋が去ったドアを眺めながら呟いた源三に、リトスも昨日初めて会話した時のことを思い出しながら応じる。

「……………おまけに、今日きょう日の軍人は作家の副業などしとるのかの？」

そう言って源三が反した名刺の表には、「アマチュア作家 一条 秋」とあった。

エレベーターを降りた光秋は、極東支部中央に佇む塔の正面玄関から外に出ると、敷地内を走る道路に沿って非特隊の面々が待つ滑走路へ向かおうとする。

その時、クラクションの音が鳴り響く。

「？」

音のした方へ目を向けると、ヴァルキリーズの公用車が1台停まっております。後部席の窓が開くと見覚えのある濃い日焼けの女性が出ます。

「よ、よう。滑走路に集まってる連中に聞いたぜ。そろそろ帰るんだってな？」

「えっと……………あつ……………」

本人は普段通りに振る舞おうとしているようだが、どうしても気まぐさが浮かんでくる女性。それを見て数時間前に自分を平手打ちし

た人だと気づいた光秋は、つい身構えてしまう。

と、今度は運転席の窓が開き、別の女性2人が声をかけてくる。

「どうも、加藤大尉」

「この度はお世話になりました」

「……ああ、カンザキさんたちか」

2人の内、礼を言いながら深く頭を下げてくる方——ミオの姿を認めた光秋は、ようやく昨日この辺りで会った第四分隊の面々のことを思い出し、少しは肩の力を抜きながら公用車へ歩み寄る。

「どうしたんです、こんな所で？ わざわざ車まで出して」

「いや、その……」

公用車のすぐ横まで来た光秋の問いに日焼けが代表して答えようとするものの、すぐに口籠ってしまふ。

「ほら、アキラ」

「わ、わかってるってのっ」

助手席に座るサイドテールの声にやや焦った顔で返すと、気を取り直した様子で日焼け——アキラは再び光秋を見る。

「か、帰るって聞いたからさ……見送りついでに滑走路まで送ってこうと思って」

「まさか、それですつと待ってくれてたんですか？」

「い、いいから乗れつつ。ここから滑走路まで結構あるんだ。歩きじゃ部下の子供ら待たせるだろう」

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

3人の好意を無下にするのも悪いと思い、加えてアキラの指摘に内心頷いていた光秋は、応じながらアキラが内側から開けてくれたドアから後部右席に乗り込む。

「では、出します」

運転席に収まるミオが、光秋がシートベルトを締めるを確認してそう告げると、公用車はゆっくりと走り出す。

「……………その、さ」

「はいっ」

消え入りそうな声をかけてくるアキラに、光秋は少しでもよく聴き

取ろうと習慣的に顔を寄せる。

「って、近いってのっ」

「ああ、すみません」

言われて顔を少し引くと、アキラは照れ臭さを浮かべながら話す。

「その……事後処理でバタバタしてて言いそびれてただけどき……さつきはごめん、引っぱたいてさ……あたしもちよつと動揺してて……」

「いや、あれは僕の方も非がありました。疲れていたとはいえ、戦闘が終わってすぐに寝入ってしまうなんて……ましてや、アマネさんを乗せている状況で……」

謝罪するアキラを見て当初の強張りが和らいでいく一方、会話から数時間前の失態を思い出した光秋は胸中で反省する。

「ほらアキラ、もう一つ言うことあるでしょ？」

「だ、だからわかってるってっ。サヨコ少し黙ってるよっ」

助手席から急かす様に言ってくるサイドテール——サヨコを睨み付けると、アキラは咳払いして続ける。

「ゴホンッ……それとき、加藤大尉………ありがとな。危ないところ助けてくれて……」

「……いいえ。それが仕事ですから……」

若干目線を逸らしながらも明白に告げられた感謝の言葉、その一言に、光秋は少し救われた気持ちになる。

数分後、滑走路の近くに着いた光秋は、公用車を降りると後ろを振り返り、送ってくれた第四分隊の面々を改めて見る。

「わざわざありがとうございます。助かりました……あ、そうだなアマネさん」

「なんだよっ？」

「そういえば脚大丈夫ですか？さつきの戦闘で痛めたって聞いたけど」

「ああ……」

遅まきながらと思いつつも訊ねる光秋に、アキラは自分の左脚に視線を向ける。ヴァルキリーズ女性職員の制服たるスカートからはほどよく日に焼けた脚が伸び、その足首にはタオルが巻かれている。

「あのあと診てもらったら、打撲だってさ。アイシングするって保冷剤巻いてもらった」

「まだ痛みますか？傷は？」

「けっこう引いてきたよ。傷も無かったしな。そもそもあんたが助けてくれなきゃ、足が痛いどころじゃなかったんだ。これも生きてる証拠ってな！」

「ならいいんですが……………」

強がりではなく、本心からの肯定的な笑顔を浮かべてサムズアップしてくれるアキラに、までも救われた気持ちになる。

その時、後ろから声がかかる。

「光秋さーん」

「ああ、一夏君。恭弥君も」

振り返った光秋は、こちらに歩み寄ってくる連邦軍の制服姿の一夏と恭弥を見る。

「どうした？」

「車が見えたから、もしかしてシユウさんかと思って。ノヴァ大佐の指示で丁度迎えに行こうとしてたんです」

「そうか……………待たせたようで悪かったな」

恭弥の返答に、光秋は軽く頭を下げると、再び公用車を見る。

「では、今日はこれで。お世話になりました」

「おう！」

「帰路お気をつけて」

「……………」

アキラとサヨコの返事を聞き、ペこりと頭を下げるミオを見ると、光秋は一夏と恭弥を伴って滑走路へ向かう。

「カイザーの積み込みも終わってるんだよな？」

「はい。もう伊豆から来たレイディバードの中です」

「あとは俺たちが自分の機体に乗れば、全員準備完了ですよ」



「ならなおのこと、待たせて悪かったな。アマネさんたちの誘いに乗って正解だった……」

恭弥と一夏の返事にそれぞれ応じながら、光秋は非特隊メンバー全員に軽い罪悪感を抱く。

その間にも滑走路の脇に待機したヴェーガスとレイデイバードの許に着くと、恭弥と一夏は外に置かれたシルフィードとユニコーン・白にそれぞれ乗り込み、光秋もニコイチを出現させてコクピットに収まる。

座席に体を固定すると、すぐにヴェーガスに通信を繋ぐ。

「ノヴァ大佐、お待たせしてすみません」

『遅いからなにかあったのかと思ったぞ』

「少し話し込んでしまつて……」

『ならいいが……人と機体の収容は完了した。あとは飛び立つだけだ』

エリックにそう言われて、光秋はモニター越しにヴェーガスの格納庫を見やる。エリックの言葉を聞く限り、そこには本来の艦載機たるネメシスタイプのIAD3機に加え、シユルフツエンとアトランティア・ルージュも積まれ、その搭乗者たるライカとカノン、そしてリグとユイ、ナガイも乗り込んでいることになる。

さらに傍らのレイデイバードを見やれば、その格納庫に収容容量ギリギリのカイザーが窮屈そうに押し込まれている様子を想像する。

「了解。では、予定通り順次発進を。我々はお先に失礼します」

そこで一旦思考を打ち切ると、光秋は通信越しにそう返し、その意思を引き写したニコイチの目が白とシルフィードを見やる。

「ホワイト各機、先行して伊豆基地に向かう。行くぞっ」

『了解』

一夏と恭弥の返事を聞くや、光秋はニコイチを飛び立たせ、白とシルフィードもそれに続く。

母艦の艦載容量や各機の航続性、パイロットの体調などを顧みて、3人は乗機で直に伊豆へ向かうことになったのだ。

3機が飛び立って少しするとヴェーガスが、そのすぐ後にレイデイ

バードが続き、それをモニター越しに確認すると、光秋の顔に感慨が浮かぶ。

『光秋さん、どうかしましたか？』

それを通信映像に見たのか、左隣を飛ぶ一夏が声をかけてくる。

「ん？いやあ、昨日の午前中までたった4人だった非特隊が、一気に賑やかになったもんだと思つてな。事前連絡は聴いてたけど、あまつさえ飛行艦艇まで来たとあれば、いよいよ部隊らしくなってきたって……」

『確かに。懸案だったタイプの偏りも、サクラちゃんとフィルシアちゃんのお陰である程度はなんとかなりそうですしね』

ヴェーガスを眺めながら感慨を言葉にする光秋に、恭弥も以前出た話題とこれまでの戦いを思い出して呟く。

「そういうえばそんな話もしたな……」

言われて恭弥とライカが伊豆基地に来た初日の昼食での会話を思い出した光秋は、事後処理の合間に大まかに確認した非特隊の現時点での戦力を振り返る。

（僕をはじめ、近接戦に強い者が多いのは変わらずだが、そこに汎用性重視のテンペストと後方支援特化型とっていいギガンティックが、さらにいえば高威力火器を多数積んだヴェーガスが加わったか……まあヴェーガスは一旦置いて、後ろをカバーしてくれるメンバーが加わったのは正直助かる。が、全体のバランスを考えると、まだまだ不十分だよなあ。さっきのルミエイラとの戦いだって、ヴァルキリーズの協力があって成り立ってたようなもんだし……後方戦力の拡充は引き続き懸案だなあ……）

戦方面での一番の問題を再認識しつつ、光秋の脳裏には赤い四脚機の姿がちらつく。

しかし、一瞬後には違う、そしてより急を要する懸案が浮かんでくる。

（もつとも、今はそれ以上に……時空崩壊から出てきた人たちがどうすかだな……）

ヴェーガスのカノン、リグル、ユイ、ナガイ、そして先に伊豆に行

かせたウォルターの顔を思い浮かべながら、光秋はこのあとの手間に少し辟易する。

滑走路から白い巨人3体が茜色の空に飛び立ち、青い怪鳥といった趣の飛行艦艇とレイデイバードもそれを追う様に大空へ消えていく。その光景を、滑走路の近くの道路に停めた公用車、その開け放たれた窓から眺めていたアキラは、無意識に声を漏らす。

「行っちゃまったなあ……………」

言ってみて、その我ながら柄でない感傷的な色を含んだ声色に、自分が少し恥ずかしくなる。

「にしても、あんたが口籠るなんてねえ？ 私たちがいてよかつたわね？」

「うっせー……………」

そんな心境を見透かしたかのようなサヨコの茶々に、今のアキラはささやかな言い返しをするので精一杯だ。

と、それまで運転席に黙って座っていたミオが、背もたれの陰から顔を出してやや鋭い視線を寄こしてくる。

「ときにアキラ、戦闘中加藤大尉に、いわゆる『お姫様だっこ』というものをされていたようだけど……………」

「なっ！ お前っ、今更その話蒸し返すかよ?!」

「今までは事後処理諸々で忙しくて話せなかつただけ。全部片づいて暇な今、じっくり話し合いたい」

「勘弁してくれよ……………」

あくまでも普段の淡々とした口調で、しかし妙な圧力を秘めた目で訊いてくるミオに、同僚の普段とは違う雰囲気への戸惑いと、それ以上は今思い出しても顔から火が出るのではないかと思えるほどに恥ずかしい記憶を話題に上げられたことに、アキラは逃げたような顔を窓の外に向ける。

そんな2人のいつもと少し違うやり取りにやれやれといった表情を浮かべながら、サヨコはすっかり点になってしまった非特隊一行、

その先頭を行っているであろう光秋の機体を眺める。

(にしても、こうもタイプが違う2人の気を引きつけるなんて……  
やっぱり不思議な人ではあるわね、加藤大尉って……)

「おいミオツ、もうこの話は無しにしようぜ」

「そういうわけにはいかない。詳しく、丁寧な説明を要求する」

サヨコが光秋に対する印象を心の中で呟いている傍ら、アキラとミオの押し問答は盛り上がりを見せていた。

伊豆基地へ帰還した一行は、ひとまず機体を仕舞おうと各々非特隊に宛がわれている格納庫へ自機を歩ませる。

元来ヴェーガスでの運用が前提とされているネメシスタイプ3機以外の全てが格納庫に収まると、周りより一足先に収容作業を終えたカノンはアトランティアのコクピットを降り、がらんどうの屋内に並んだ多種多様な機体の数々を好奇心一杯の目で凝視する。

「いやあ、こうやって並べると、つくづくウハウハな光景だねえ。この光景だけでご飯3杯……いや、5杯はいけるかな………つと？」

率直な感想を呟いていると、天井すれすれの身を縮こまらせて窮屈そうに佇むカイザーの隣、丁度格納庫の端に置かれた橙色の丸みを帯びた機体が目に入るや、カノンの足は勝手に動き出す。

「アレって……もしかして……」

明かりに引き寄せられる羽虫の様に歩を進め、その正面に回り込むと、橙色の機体の全体像を目に収める。

曲線を主体とした輪郭に、左肩を覆う球状のアーマー、巨人の一つ目を想起させる頭部に備えられたモノアイ。

これらの特徴は、未だ靄が晴れ切らないカノンの記憶野を——それ以上に興奮の中枢を刺激した。

「やっぱり………旧ザクキターア!!」

その心境を表すように両手を一杯に掲げ、がらんどうに響き渡る勢いの歓喜の叫びを轟かせると、遅れて収容作業を終えたパイロットたちの注目がカノンに集まる。

「……………なんだありや」

「カノンちゃん、ああいうの好きみたいで……」

ひとしきり叫び終わるや橙色の機体——旧ザクに駆け寄って足に頬擦りするカノンを唾然とした顔で眺めるナガイに、恭弥が一応の説明をする。

「あの橙色の、大陸で回収したっていう奴ですか？」

「はい。でも、まさかカノンが知っていたとは……」

その横では、一夏の問いにライカが意外そうに応じている。

が、ライカはすぐにその顔を引っ込め、代わりにどこか納得する。

（でも考えてみれば、ゲシユペンストや白のことも知っていましたし……寧ろ知ってて当然なのでしょうか……？）

自分でも筋が通っているのかいないのかいまわからない理屈を胸の中に呟くと、ライカは周りを見回して光秋の姿を探す。

「ところで、加藤大尉は何処に行ったのでしょうか……？」

「……そういえばさつきから見かけませんね」

「いの一番に降りてすぐに消えちゃいましたよね……」

ライカの呟きに一夏と恭弥もその姿を探しながら返すと、ライカの端末の呼び出し音が鳴り響く。

「大尉？今どちらに？……了解しました」

通信越しになんらかの指示を受けたらしい。ライカは端末を仕舞うと、カノンを除くパイロット一同を見回す。

「今大尉から連絡がありました。全員片づけが終わり次第、非特隊の待機室に来るようにと」

「じゃあ、早速行きますか」

「機体は収めたし、着替えもしなくていいですしね」

「あとは、あいつだな」

ライカの報告に恭弥と一夏が応じると、ナガイは未だ旧ザクに頬擦り続けるカノンの後ろに歩み寄り、その太い腕で襟をがっちり掴む。

「いつまでやってんだ。行くぞ」

「ああつ。せめてもうちよつと、あと1分だけ……!!」

未練満載の声を上げるカノンに構わず、ナガイはその襟を引き摺って、先に行くライカたちの後を追う。

「……………！ノヴァ大佐？」

「あれ？ファイルたちも……リグルとユイまで？」

格納庫から歩くことしばし。非特隊の待機室がある建屋の前で鉢合わせたエリックとカトリーヌ、ユウ、サクラ、フィルシア、リグル、ユイに、ライカとカノンはパイロット一行を代表する様に意外そうな顔をする。

「大佐たちも加藤大尉に呼ばれたのですか？」

「ああ。ヴェーガスのクルー代表として来てくれと」

「私は付き添いで」

ライカの問いにエリックとカトリーヌがそれぞれ応じる横では、カノンがリグルとユイを注視している。

「いや、艦長さんたちや軍属のファイルたちはまだわかるけど、何でリグルとユイまで呼ばれるの？」

「さあ、私たちもそこまでは……」

「ただ、私と城崎さんは是非来てくれと言ってたけど」

自分が教えてほしいと言わんばかりのユイに続いて、リグルが呼び出しを受けた時の様子を思い出しながら答える。

「ユイたちに是非来てくれ、か……2人に共通することと言えば、時空崩壊から出てきたってことだけど……？」

「さつき格納庫で見た橙色の機体、アレのパイロットに関することじゃないかな？」

首を捻る一夏に恭弥が思いついたことを返す傍ら、一同は待機室へ向かう。

先頭に行くエリックがドアを開けると、中にはすでに制服姿の光秋が佇み、くたびれた緑の服に身を包んだ男がその近くの椅子に座っていた。

「ああ、みなさん来ましたね。適当な場所に座ってください」

部屋に入ってくる一行を見て光秋がそう告げると、一行は言われた通り手近な椅子に腰を下ろしていく。

全員が座つたのを確認すると、光秋は待機室内の一同を見渡す。

「今回集まってもらつたのは、大陸で新たに保護した異世界人についてみなさんに知らせたかつたからです。コバツクさん」

言うとき光秋は緑服の男を一見し、「コバツク」と呼ばれたその男は頷いて席を立つ。

「たつた今紹介にあずかつた、ウォルター・コバツクだ。大陸……だつたか？そこに迷い出たところを保護してもらつた。宿代代わりというわけでもないが、必要な手続きが済み次第、君たちと共に戦うつもりだ。それと、俺と同じ境遇の者が何人かいると聞いた。仲良くしてくれると助かる……以上だ」

独特のバリトンボイスをひと通り響かせると、男——ウォルターは席に座りながら、今自分が言つたことに内心可笑しくなる。

(これじゃあ、転校生の自己紹介だな……)

と、席に着いて以降、ウォルターに——より正確にはその服装に——観察の目を注いでいたカノンが、そつと声をかける。

「えつと、ウォルターさんだっけ？ごめん、もう一度立つてくんないかな？」

「？……構わんが……？」

騎士を連想させる独特の服装をした少女の頼みに、ウォルターは首を傾げながらも、断る理由もないので言う通りにする。

「……………」

ほつれ、擦り切れ、すっかり色あせたウォルターの服を凝視すると十数秒。緑地の中に辛うじて残っていた翼を模つたような金の刺繍を見つけるや、カノンは椅子から跳び上がってウォルターの懐に肉迫し、つまんで引き寄せた服をまじまじと見つめる。

「お、おいつ、何を……？」

「……………」

おの 慄くウォルターに構わず、カノンは服を凝視する。

そして、

「この色合いと、なによりこの金の刺繍、そして格納庫にあった旧ザク………ウオルターさんつてもしかして、ジオン公国軍人!？」

驚愕と歓喜の混じった声を上げながら、ウオルターの顔に自身の顔を寄せる。

「何でそれを!?……いや、そうだが……」

あとひと押しで互いの鼻の先が触れそうな極至近距離でかけられた思わぬ問いに、ウオルターは動揺しながらもどうにか答える。

「ジオン………こうこく………?」

「リグル様たちがいた世界の国ですか？」

「いいえ。ジオンなんて国、聞いたことありませんが」

聞き慣れない国名にユウは首を傾げ、思いついたことを訊く恭弥にリグルは首を横に振る。

その間にも、カノンはずっと掴んでいたウオルターの服を離し、そのまま空いた両手を一杯に挙げる。

「ジオン軍人キターー! 宇宙世紀の人キターー!! あっ! 握手してくださいっ!!」

「……………」

ひとしきり叫ぶや羨望の眼差しで手を差し出してくるカノンに、ウオルターは狼狽を浮かべながらもとりあえずそれに応える。

その一連の光景を見て、一夏は傍らの恭弥に耳打ちする。

「今のカノン、ライカさんと初めて会った時となんか似てませんでした?」

「一夏君もそう思うか? ロボット好きっていうのはさんざん聞いたけど、何だろうな? カノンちゃんのこのリアクションの上がり下がりはさ」

それに恭弥も耳打ちで返していると、狼狽から立ち直ったウオルターが付け加える様に告げる。

「一応補足しておくが、あくまでも元だ。こっちに迷い込むかなり前から、俺はジオンの名を捨てた」

「え? そりゃまたどうして——」

「カノンっ」



それを聞いてさらに質問しようとするカノンに、それまで様子を見ていたリグルがいよいよ止めに入る。

「あつ……その……ごめんなさい……」

それで興奮気味だったカノンもようやく我に返り、その質問がデリケートなものだと理解するや、頭を下げて気まずそうに席に戻る。

そうして室内が静かになると、全体を見渡した光秋が口を開く。

「というわけなので、みなさんよろしく。こちらからは以上ですね。他に連絡があれば……なさそうですね。じゃあ今回はこれで解散。各自食事なり休息なり、充分に摂っておくように。コバツクさんは必要手続きがあるのでこちらに」

「了解した」

応じると、ウォルターは光秋に続いて部屋を出、ライカもそれに続いていく。

「また異世界人か……」

感慨深く呟くとエリックも席を立ち、何も言わずともついてきたカトリーヌを伴って部屋を出ていく。

後に残されたのは、パイロットを中心とした未成年の面々だ。

「たくつ、ただでさえ厄介な連中がうようよしてるってのに、この上別の世界からも人やロボやら降ってきて……この世界はどうなってるんだ……」

「ナガイさん、それブルーメランです」

背もたれに体を預けてボヤクナガイに、サクラが律儀にツツコミを入れる。

「まあでも、同じ別世界から来た人間としてはナガイさんがそう言いたくなる気持ちもわかるかもね。実際この世界ってホントいろいろあるし。転移してすぐにロボットに乗ったテロリストと戦ったり、その時のことが準備運動にもならないような怪物と遭遇したり」

「……外から来た人間にはそう感じるのか」

「まあ、客観的に見るとそうなのかもしれないな……」

腕を組んでこれまでのことを思い返すカノンに、ユウは静かに応じ、恭弥は脳裏に複数勢力を思い浮かべる。

「鬼とか、ゴーストとか、ルミエイラもうそうだ。本気でシャレにならない連中がうようよしてるって時に、人間同士でも争って……」

革命者と思しきテロリストたちに初の投降勧告を行った時のことを思い出しながら、大きな脅威を目前にしてそんなことをしている自分たち“この世界の人類”に、呆れとも焦りともつかない思いを抱いてしまう。

そんな中、

「とりあえず、今は飯にしましょうよ。正直腹減ってたんだ」

「そうですね。腹が減ってはなんとやらとも言いますし」

一夏と、それに続いたユイ、2人の肩に力が入っていない一言に、心なしか硬くなりつつあった室内の雰囲気がつと和む。

「それもそうだねえ………そういえば、伊豆基地のご飯って結構いけるって噂だよね」

「そうなんだ……恭弥、なんかオススメってある？」

「そうだなあ………」

ファイルシア、ユウ、恭弥がそんなことも言い合う間にも、誰が言うでもなく各々席を立ち、そのまま列を成して食堂へ向かう。

「………あ、いけない」

「どうかしましたか？大尉」

待機室を出てしばし。ウォルターの細かな手続きをしようと別の部屋に向かっていた道中にハツとした光秋に、ライカは足を止めて訊ねる。

「いや、恭弥君たちに伝え忘れたことがあって……」

「戻るか？」

ウォルターの提案に、しかし光秋は手を振って返す。

「いえ、そこまで大したことじゃないんで。そもそも恭弥君たちとは後で部屋で会うから、その時伝えますさ。それより、早く手続き済ませちゃいましょう」

「……いいのか？」

未だこちらの勝手が掴めないウォルターは心配そうな顔を浮かべるものの、光秋は軽く頷いただけで歩みを再開し、ライカも黙ってそれについていく。

（まあ、本人がいいと言うのならいいのか……俺も他人の心配ができる立場でもないしな）

そう思うことで自分を納得させると、ウォルターも2人の後に続く。

同じ頃、ルミエイラの本拠地、その一角にある構成員たちの自室の1つでは、すっかり意気消沈したアリアが脱力した体をベッドに預けていた。

「はあ………グリム閣下を信用できないとは言ったものの……具体的に何をどうするべきか………」

極東支部から帰還して数時間。もう何度目かわからない自問を溜め息混じりに呟くと、おもむろに仰向けだった体を横に転がしてみる。

その時、ドアが控えめにノックされる。

「アリア、少しいい……？」

「……シャーラか？」

ドア越しの声に応じながら、ベッドから起き上がったアリアはドアを開ける。

「どうした？」

「……少しいい？」

「ああ」

応じると、アリアはシャーラを部屋へ招き入れ、テーブルを挟んだ椅子に向かい合って座る。

「それで？なんだ？」

「……帰ってきてから元気ないけど……なにかあった？」

「……………」

のほほんとした声音の、しかし単刀直入な問いかけに、アリアはし

ばし返事に困ってしまう。

「なに、大したことじゃない……ちよつと、その………疲れがな」  
努めて平静に告げながら、アリアは思う。

（三柱に不信感を抱いているなど、ここでは冗談でも言えることではない。迂闊に告げれば面倒なことになるからな……例えシャーラであつても………）

そう考えることで友への嘘を割り切るものの、やはり罪悪感に胸が疼く。

「そう……」

そんなアリアの気持ちを知ってか知らずか、シャーラは静かに応じると、長髪の合間から覗く目にやや力を込める。

「疲れたなら、明日出かけよう」

「なに？」

思わぬ提案に、アリアは一瞬ハツとする。

「聖戦が始まってから、アリアろくに休んでない。その前の偵察からずっと働いてる……少し気分転換した方がいい」

「気分転換か……」

シャーラの説明に、アリアは腕を組む。

（戦の最中に羽目を外すというのは、騎士としては体面が悪い。が、気分転換——自己管理の一環としてならば………）

しばしの思案の後、腕を解いてシャーラを見やる。

「そうだな、行こう。外出の連絡は私がやっておく」

「うん！」

自身の返答に安堵と喜びが混ざった笑顔を浮かべるシャーラを見ながら、アリアは思う。

（考えてみれば、短い間にいろいろあつたからな。情報や心境を整理するという点でも、外の空気を吸ってきた方がいいだろう………さて、道中どの店に寄ろうかな………）

その脳裏には、買い食いにいきたい店の数々が浮かんでいた。

深夜、太平洋側に面した日本のとある海岸。

夜の闇を引き写した漆黒の海の一角が盛り上がったかと思うや、全体に丸みを帯びた小山ほどの物体が浮かび上がる。

大福のような丸い頭、蛇のように多数の節を備えた長い腕、胴体に対して異様に短い三本足という全体像を露にししながら、それは人気ひとけのない海岸へゆつくりと上陸する。

往年の怪獣映画を彷彿とさせる光景ではあるが、鳴り響くのが大地を踏みしめる足音ではなく、キヤタピラの硬質な駆動音であることが、それがあくまでも機械——ロボットであることを物語っている。

「よしっ。どうにか到着つと。人は……………いねえみてえだな」

そのコクピットに収まって周囲の様子を確認するのは、大海のど真ん中から光秋たちが乗るレイディバードを追ってきたイシカワだ。

頃合いを見て海に潜った後、ひたすら薄暗い海底を進んでようやく陸の上に着いたその顔には、自然と安堵が浮かぶ。

「さーて、騒さわぎになる前にゲッターをどっかに隠すとすつか」

言うや手元のレバーを引き、自らの乗るロボット——ゲッターロボを3機の航空機に分離させると、各々後部推進器から炎を吹かしてこの場をあとにする。

残されたのはキヤタピラが通った跡だけであり、それも徐々に波にのまれて掻き消されていった。

## 22 日常の先の決意

非特隊が伊豆基地に帰還した翌朝。

恭弥をはじめとした非特隊の未成年メンバーたちは、私服に身を包んで基地近くの街に出ていた。

「しかし、昨日は驚いたなあ。部屋に帰るなりシユウさん、カノンちゃんたちの服買ってこいつて」

「ですよ。でも、私服とか諸々の雑貨とか、いずれ必要になりますからね」

「それはそうだけども……ま、お金は出してくれたからなあ」

自分の呟きに共感しながらもどこか納得もしている一夏の返答に、恭弥はズボンのポケットを叩き、そこに入っている光秋からもらった封筒、その中の買い物代を意識する。

「……すみません、お手数かけて……」

「ユイが謝ることじゃないって」  
「そうそう。案内にかこつけてウチらもショッピング楽しめるんだし」

身を縮めて言うユイに一夏は応じ、フィルシアも楽しそうに続く。  
ちなみに、私服を一切持っていないユイは現在サクラの服を借りて着ており、カノンとリグルもそれぞれフィルシアとサクラの服を借りて歩いている状態だ。

軍服や騎士の正装ではなく、一般的な平服を着て歩く一行のその光景は、普通の高校生たちが休みに集まって遊びに出ているようにしか見えない。

「それはそうと、ナガイさんが来ないとはねえ。『服なら今着てる分で充分だ』なんて言っちゃって」

「大勢でわいわいするのが好きなタイプじゃないんだらう？オレも少しだけなら気持ちはわかるけど」

未成年メンバーの中で唯一この場にはいないナガイとの出発前のやり取りを思い出すカノンに、元来あまり社交的とはいえないユウは若干の共感を覚えながら返す。

その時、

「……………ん？」

車道を挟んだ反対側の歩道に、恭弥は見覚えのある灰色のパーカーを着た人影を見つけ、足を止めて隣の一夏の肩を叩く。

「なあ、あれって」

「なんですか？……………あつ」

言いながら、一夏は恭弥が指さす方を見、同じく見覚えのある灰色のパーカーを捉える。

「やつぱり、だよな？おーい、アリアちゃん！」

「！」

一夏の反応を見て確信した恭弥の呼びかけに、パーカーは辺りを見回し、2人を捉える。

控えめな服装とは裏腹に、遠目にも目立つ金髪のポニーテールと白い肌は、間違いなく中華街で会ったアリア・アンダーソンだ。さらによく見れば、その隣にはもう1人似た服装の、こちらはフードを被っている人影が並んでいる。

「恭弥!?それに一夏もか？」

アリアもこちらに気づいたらしい。驚きの声を上げながら、車が来ないのを確認してこちらの歩道に渡ってくる。フードの方もそれについていく。

「奇遇だね、こんな所で。そっちは友達？」

「ん?ああ。幼馴染みのシャーラだ」

恭弥の問いに、アリアは傍らのフードを示しながら答える。

と、傍らの少女——シャーラはフードを下ろし、長い金髪を蓄えた白い顔を露にする。

「アリア……………この人たち、知り合い……………？」

「ああ、そういえばシャーラには話してなかったな。この間街を歩いてた時に会った……………」

「織斑一夏です」

「桂木恭弥です。シャーラちゃんだっけ?アリアちゃんの友達?よろしく」

「……………よろしく」

シャーラの問いに答えるアリア、それに続く形で一夏と恭弥は自己紹介を行い、シャーラはぼつりと返す。

と、立ち止まっていた恭弥と一夏に気づいたカノンたちが、アリアとシャーラを含めた4人の許に引き返してくる。

「ちよつと2人も、なに立ち止まって……………あれ？どちらさん？」

「ああ、ごめん」

不満を浮かべながらもアリアとシャーラに気づいたカノンに詫びながら、恭弥は少女2人を一行に紹介する。

「この間中華街を歩いてた時に知り合ったアリアちゃんと、その友達  
のシャーラちゃん。アリアちゃん、シャーラちゃん、この人たちは僕  
の友達の……………」

「高槻カノンだよ。恭弥と一夏の知り合いなんだ？」

「ユウ・ヴレイブ」

「フィルシア・ナイトウオーカーだよっ」

「城崎ユイです」

「……………サクラ・ルルです」

「……………リグル・フォン・エルプールと申します」

少女2人に自分たちを示す恭弥に、一行は各々自己紹介していく。

「……………えつと、だな……………」

「……………よろしく」

「まあ、いきなりこの人数全員覚えるのはキビシイよね」

6人分の自己紹介に圧倒されるアリアと、それでもどうにか応じた  
シャーラに、カノンがやや同情的に応じる。

「ところでさ、2人はこんなところで何してんの？」

「何をしているといわれてもな……………2人で適当に歩いただけ  
だ。特にこれといった目的はない」

フィルシアの質問にアリアが応じると、恭弥は咄嗟に言った。

「じゃあ、僕たちと一緒に行かない？ちよつどカノンちゃんたちの服  
とか買いに行くところなだけ……………」

そこまで言うと、恭弥は思い出したように非特隊の面々を見やる。



「もちろん、みんなが賛成してくれればだけど……………」

不安そうに一行の様子を窺う恭弥に、最初に応じたのは一夏とユウだった。

「俺はいいですよ。大勢の方が楽しいだろうし」

「オレも賛成。恭弥の知り合いなら、仲良くなっておきたい」

そんな前向きな返事をする2人に続いて、カノンも笑顔で応じる。

「私もいいよ。2人ともけっこう可愛いしねえ。これはいろいろお楽しみが——」

「カノンっ！」

後半は口元が異様に緩みながら告げる女騎士に、主リグルの叱責が飛ぶ。

「ウチも賛成に一票」

「私も」

「……………みんなが言うなら」

その光景に慣れつつあるのか、特に構うことなくフィルシアとユイも告げ、サクラも渋々といった様子で応じる。

「ありがとう、みんな！」

全員の首肯に表情を緩ませると、恭弥は今度はアリアとシャーラを見やる。

「ということ、2人はどうかな？もちろん、嫌だったらいいんだけど……………」

気遣いというよりも不安そうに問う恭弥に、アリアとシャーラはしばし考える。

「そうだな……………」

「……………私は、アリアに任せる。アリアの好きな方でいい……………」

「んーん……………」

シャーラに判断を託されてさらに悩むアリアだが、ややあつて返答を述べる。

「では、共に行かせてもらおうとするか。折角の誘いだしな、無下にすればアンダーソンの恥だ」

「じゃあ行くっかっ」

アリアの返事に恭弥は満足そうな顔を浮かべ、新たに2人加わった一行は歩みを再開する。

「……………えっと、アリアだっけ？なんか変わった子だね。話し方が独特というか……………考え方が古風っていうか。家のこととか気にしたりしてさ」

両隣に聞こえる程度の小声で、カノンはそっと呟く。

「まあ、確かにな……………」

「いいところの出身なんだろう？俺の知り合いにも似たようなのがいるけど」

ユウが共感を示す一方、一夏は大して気にした様子もなく返す。

「そういうもんかなあ……………？」

腑に落ちないながらもそう応じながら、カノンは歩き続けた。

恭弥たちとの買い物物を断ったナガイだが、必要手続きをひと通り終えた身になにかやらなければならぬことがあるわけでもなく、持て余した時間を伊豆基地内をぶらつくことに費やしていた。

光秋たちから事前に立ち入り禁止区域を聞いていたため、自ずと建屋の少ない開けた場所に足が向いていく。

「……………ここまで、か……………」

そうして宛もなく歩き続けた果てに、伊豆基地の内外を仕切る金網のフェンスに達する。

目測でも5メートルはあろう高さは見るだけで越えようという意気を失わせ、頂に引かれた有刺鉄線はそれに拍車をかけてくる。

「……………」

もつとも、ナガイには最初から「越えよう」などという意思はなく、壁があるなら今度はそれに沿って歩いてみようと思いを進めようとする。

その時、不意に金網の向こうからこちらを覗く黒い小さな影が目に入る。

「……………猫か」

それが黒猫だと理解すると、ナガイはゆつくりとフェンスに歩み寄り、膝を曲げて顔を近づける。

「ちつちつちつちつ」

「……………」

最初こそ腰を引いて警戒態勢をとっていた黒猫だが、舌を鳴らして誘ってくるナガイのなにに惹かれたのか、少しずつ距離を詰め、最後には金網の網目に顔を寄せて、指先であごを撫でられる。

「ゴロゴロゴロゴロ……………」

「へっ、やっぱり猫はいいぜ……………」

気持ちよさそうに喉を鳴らして表情を緩ませる黒猫を見て、ナガイの顔も少しずつ和らいでいく。

それは普段浮かべている威圧感を与えるものとも、ましてや戦闘中に浮かべる狂気をチラつかせるもの異なる、この何気ない現状を心底満喫しているものだった。

同じ頃。非特隊待機室では光秋とライカによるウォルターの必要手続きがひと通り終わり、各々部屋近くの自動販売機で買った飲み物をお供に休憩に入っていた。

「あと問題なのは、コバツクさんの乗機をどうするかですねえ……………」

暦の上では春でもまだ寒さが残るこの時期にはちようどいい温かい緑茶に口をつけながら、光秋は遠い目で呟く。

こちら側にいる間は共に戦ってくれたことになったウォルターだが、肝心の機体はこれから準備するのだ。

と、それを待っていたかのように、ホットコーヒーで口を湿らせたウォルターが遠慮がちに告げる。

「そのことなんだかな……………俺と一緒にこっちに来たあの機体、ザクを使えないか?」

「また藪から棒ですね?」

言いながら、ライカは愛飲の栄養ドリンクを一口飲む。

「無茶は承知だ。だが俺は、アレでいくつもの修羅場を潜り抜けてきた。この世界の勝手の違う機体に乗るくらいなら、アイツに乗る方がまだ安心できる」

「その気持ちはわかります」

自身すっかり旧式化したゲシユペンストに多大な愛着と絶大な信頼を寄せているライカは、迷いのない様子でそう告げるウォルターに強い共感を覚える。

一方で、冷静な部分の訴えにも耳を貸す。

「もつとも、実際にやるとなると条件は厳しいでしょうね。特に補給の問題が。マシンガンの弾はしばらく保つでしようけど、ミサイルは今装備している分しかありませんし、ザク本体に至っては予備パーツの一片もないときてます。破損した時の修理もそうですが、動かすだけで消耗していくパーツの都合をどうつけるか……………」

「俺もそれは考えていた……………」

ライカの指摘に、ウォルターはコーヒーを飲みながら返す。その顔が苦々しげに歪んでいるのは、コーヒーによるものだけではないのだろう。

「だが俺にとっては、この世界は不確かなものばかりなんだ。そんな中で戦うことに——命を懸けることになるのなら、少しでも確かなものに寄って立ちたい」

「……………」

その上でそのように告げるウォルターに、光秋は手を組んで逡巡する。

「……………とりあえず、パーツの件は軍と取引のあるメーカーに相談してみますか。マオ社…………と、ヴァルキリーズ御用達のアカツキってところも視野に入れておくか？パーツのデータさえ送れば、複製してくれると思いますけど」

「恩に着る」

やや不安の残る様子で告げる光秋に、それでもウォルターは深く頭を下げて応じる。

「実際どうなるかは訊いてみるまでわかりませんがね。コバツクさ

んを即戦力として迎えたいこちらとしては、ある程度そちらの要望に  
応えようとするのが筋でしょうし……さて、それじゃあ、ちよつ  
と行つてきますか」

「どちらん？」

言いながら背伸びついでに立ち上がった光秋に、ライカが問う。

「格納庫、コバックさんのザクの所ですよ。必要書類はひと通りま  
めたことだし、提出がてら行つて、パーツのデータが取れないか見て  
来ましょうや」

答えつつ、光秋はあちこちを動かして座りっぱなしで固まった体を  
ほぐしていく。

「……………いいですね」

自身肩が凝り初めていたライカもそれに賛成すると、椅子から立つ  
てテーブルの上の書類を束ねていく。

「なら俺も行こう。もともと俺のワガママが原因だしな。機体のこと  
でわからないことがあつたら訊いてくれ」

「頼りにしてます」

立ち上がりながら言つたウォルターに光秋が応じると、3人は飲み  
終えた容器を近くのゴミ箱に捨て、それぞれ脇に書類束を抱えて歩き  
出す。

「ふぁーあつ、眠みい……………」

豪快な欠伸をしながらゲッターロボを隠した森から道路に出ると、  
イシカワは道に沿つて歩き出す。

転移して以降ようやくとれた睡眠だったものの、その顔には多分な  
眠気が浮かび、未だ寝足りないことを物語っている。

一方、のんびり寝ていられないことも重々承知していた。

(いい加減この世界の情報集めねえとなあ。またわけのわかんねえ連  
中に絡まれんのも困るし……………)

そこまで考えると、それまでどうにか堪えていた猛烈な空腹感が  
襲ってくる。

「……と、その前に腹ごしらえだな。スーパーに行きや、試食品くらい食えるだろう」

道路の先に見えてきた背の高いビルや瓦の敷かれた家屋の数々、その文明的な街並みにそう目星をつけながら、イシカワは力の抜けそうになる身を鼓舞して歩き続ける。

アリアとシャーラを加えた少年少女一行は、それからしばらく歩いて中規模の服屋に入り、カノンとリグル、ユイの私服を選んでいく。

「これなんてよくない？」

「というか、これはサクラちゃん向きじゃないかな？」

「な、何で私が出てくるんですか！」

フィルシアの勧めた服を見て言ったカノンに、サクラは若干テンパって返す。

そんな光景を恭弥、一夏、ユウは離れた所から眺め、その傍らにはアリアとシャーラも佇んでいる。

「……サクラちゃんってさあ、基本真面目だけど、けっこう可愛いところもあるよな」

「ですよねえ。もう少し笑えばいいのに」

「なんて本人に言おうもんなら、余計に怒ると思うけどな」

恭弥の呟きに一夏は頷きながら付け加え、ユウの一言に男子三人は深く首肯する。

その横では、アリアが周囲の目を気にしつつ、隣に立つ恭弥にそつと耳打ちする。

「恭弥、少しいいか？」

「ん？……どうしたの？」

声の大きさに注意しながら恭弥が応じると、アリアは若干顔を赤くしながら告げる。

「……が済んでからでいいのだがな……この辺りで美味しいものを出す店があったら、連れて行ってくれないか？」

(……アリアちゃんって、ほんと食べるの好きだよなあ……)

中華街で初めて会った時の様子を思い出しながらそう思いつつ、恭弥は微笑んで応じる。

「うん、わかった………と言ってもこの辺かあ………」

自身まだこの辺の土地勘に疎いことを思い出しながら、それでもアリアの好みに合いそうな店はないかと端末で調べてみる。

そうしていると、ひと通り買う物を選び終えた女子一同が歩み寄ってくる。

「お待たせしました」

「じゃあ、レジ行こうぜ。恭弥さん、お金」

「ん？あぁ……」

ユイに返しながら呼びかけた一夏に、恭弥はズボンの封筒のことを思い出し、店探しを中断してポケットに手を伸ばす。

が、カノンとフィルシアの声がそれを止める。

「とー！」

「その前にいー！」

「……な、なんだ？」

言うやカノンは俊敏な動きでアリアに迫り、突然のことに緊張するアリアに構わず、その右腕をガツチリと押さえる。

「いやぁ、実は初めて見た時から『この子だっ！』って思ってたんだよねえ。アリアちゃんなかなかかわいいからさぁ、折角の機会だし、お姉さんたちといいことしない？てかしよう！」

「お、おいーなにをする!?!」

舌で唇を舐めながら邪な笑みを浮かべるカノンに恐怖しながら、拘束されたアリアは先ほどまで女子一同が使っていた試着室に連行される。

「シャーラー！助けてくれえ!!」

「……………頑張つて」

「シャーラーアア!!」

親友に助けを求める声も虚しく、アリアはカノンと共に試着室のカーテンの中に消えていく。

が、直後、

「おーつと！誰が君は大丈夫って言ったあ？」

「……………大ピンチ」

カノンとアリアのやり取りに気を取られている隙に背後に回り込んだフィルシアが、シャーラの華奢な体をそつと抱えて、アリアが連れ込まれた隣の試着室に運んでいく。

「や、やめろ！来るなっ!!」

「フッフッフ。何処へ行こうというのだねえ？」

「……………お願い……………やめて」

「フフーン！日本ではこういう時こう言うんだよねえ……………よいではないか！よいではないか！」

カーテンの向こうから、アリアとシャーラの震え上がった声と、カノンとフィルシアの嬉しそうな声がそれぞれ響き、それを残された一同は複雑な表情を浮かべて聞いていた。

「えっと……………助けに行くべきでしょうか？」

「行きたければ行けばいいでしょうけど、その場合城崎さんが2人の代わりになるでしょうね」

「じゃあやめておきます」

サクラの忠告に、ユイは諦める決心を固めた。

「あいつら……………男子と来てること完全に忘れてるな……………」

「はっはっはっ……………」

「アリアちゃん、シャーラちゃん……………ごめん」

「カノン、あなたは……………」

その横でユウは呆れ顔で感想を呟き、一夏は苦笑いを浮かべ、恭弥は手を合わせて頭を下げ、リグルは自身の騎士の所業に頭を抱えた。

関係各所に書類を送ると、光秋とライカ、ウォルターはザクが置かれている格納庫を目指す。諸々の箇所を巡りながらの移動だったため、気づけば一行は伊豆基地の外縁近くを歩いていた。

と、ウォルターがおもむろに足を止め、基地の内外を仕切るフェンスを見やる。



「どうかしましたか？」

「……………あれなんだが」

訊ねる光秋に、ウォルターはフェンスの一点を指さす。

「ナガイとかいうやつじゃないか？あのデカイ機体のパイロットの」

「え？何処です？」

つられて光秋もウォルターの指さす辺りを注視するものの、元来視力が低いせいかわそれらしい人影を捉えることができない。

一方、

「……………確かに、そのようですね。恭弥たちと買い物に行つたんじゃないんですね？」

「……………ミヤシロさんも見えるのか…………」

ウォルター同様にナガイらしき人影を捉えたライカに、光秋は若干羨む様な目を向ける。

と、ライカがふと疑問を呟く。

「何をしてるのでしよう？あんな所で。座り込んでいるようですが……………」

「行ってみますか？もののついでに」

それに答える様に告げられた光秋の提案に、ウォルターとライカは頷き、3人はフェンスの前に座り込んだナガイの許へ向かう。

金網のフェンス越しに黒猫を愛ではじめて、どれくらい経つただろうか。すっかりナガイに気を許したらしい黒猫は、その場に伏せてナガイに撫でられるままに身を任せている。

もつともナガイも網目から指くらいしか出せず、大した撫で方はできないのだが、猫の方はご満悦のようだ。

（ああ、やっぱり猫はいい……………）

普段の強面は何処へやら、すっかり表情が緩み切ったナガイは今、この世界に来て最も寛いでいた。

だからだろうか。背後から普通に近づいてくる人影に気づかなかった。

「ナガイさん？」

「!?」

突然かけられた聞き覚えのある声に、ナガイはハツとしながら後ろを振り向き、予想通り非特隊の主任だか隊長だかを名乗っていた光秋と、その左右にライカとウォルターを見る。

「お、お前ら……何でここに……!?」

猫を愛でているところを見られたかもしれない。その羞恥心に柄にもなく動揺を浮かべながら、なけなしの証拠隠蔽で黒猫を自身の陰に隠し、視線こそ鋭いもの上手く回っていない口で問う。

「いや、俺の用で近くまで来たら、お前が見えてな。何をして——？」

「ニャーオ」

「！お、おいつ！」

返答しつつウォルターが訊き返そうとしたその時、何という気まぐれか、それまで黙っていた黒猫がナガイの陰から出てよく通る声で鳴いた。

「……………猫、ですか？」

フェンス越しに新参3人をしげしげと眺める黒猫を見返ししながら、ライカが観察の目で告げる。

「……………もしかして、撫でてました？」

「なっ——!!」

光秋はあくまでも当てずっぽうで言っただけなのだが、凶星を突かれたナガイは誤魔化しどころか否定の言葉を発することもできず、困惑を顔一杯に浮かべて固まる。

と、

「……………いいんじゃないですか」

「……………？」

出し抜けに微笑みを浮かべながらそう告げた光秋に、ナガイは束の間理解が追いつかず、その間に目的地への移動を再開した光秋に続いてライカとウォルターも会釈してその場を後にする。

「……………ちっ、知ったふうに言いやがって……………」

小さくなつた一行の背中にそう投げかけながら、ナガイは黒猫の相

手を再開しつつ、不快感や苛立ちとは違う、しかし素直に喜ぶこともできない、そんな釈然としない気分を持て余した。

「さっきのことですが……」

「はい？」

格納庫への移動を再開してしばし。控えめに声をかけてきたライカに、光秋は顔を向ける。

「『いいんじゃないですか』……どういうことですか？」

「そのままの意味ですよ。猫を撫でるなんていいんじゃないかって……あと、ちよつと安心したってとこかな」

「安心？何にだ？」

ウォルターの問いに、光秋は少しバツの悪い様子で答える。

「正直、ナガイさんはもつと乱暴なタイプかと思ってたんですよ。第一印象というか、大した根拠のない偏見でね。でも、ああいう一面もあるって知ったら、それが少し和らいだというか……ま、今でもちよつと怖いですけど」

言いながら自嘲を浮かべる光秋に、ライカとウォルターは意外といった顔を向ける。

「……………大尉にも怖いものつてあるんですね？」

「まったく。まだ得体が知れなかった俺の前に生身を晒した男の台詞とは思えんな」

「いやいや、僕は根つからのビビリ、チキン野郎ですよ。あれはミヤシロさんって“保険”があつたからこそできたことで、そうでなきや絶対やりませんよ」

どこかお道化た調子の光秋の返事を聞きながら、3人は目的地たる格納庫の入り口をくぐった。

アリアとシャーラが試着室に連れ込まれてしばし。

当初こそそれぞれ連れ込んだカノンとフィルシアに抵抗する声が

漏れていたものの、今はすっかり静かになり、店の隅で4人を待つ恭弥は不安を抱いていた。

「いやに静かになったなあ……………アリアちゃんとシャーラちゃん、大丈夫かな？」

「まあ、カノンとフィルシアもそこまで無茶はしない……………と思いますけど……………」

「最初が騒がしかった分、確かに気になるよなあ」

恭弥の呟きに、一夏は自信無さげに返し、ユウも心配を浮かべる。

その時、2つの試着室のカーテンが開き、それぞれからカノンとフィルシアが出てくる。

「ほらっ、アリアちゃん、早く早く！」

「ま、待てっ！本当にこんな格好で人前に出るのか!？」

「ほーらシャーラ、お披露目の時間だよっ！」

「……………まだ……………心の準備が……………」

急かす2人に対し、カーテンの奥からアリアとシャーラの躊躇った声が返ってくるものの、手を引くカノンとフィルシアに負けて、地味な印象が強かった灰色のパーカーから着替えた少女2人が顔を出す。

「こ、こんな短い……………！どんな責め苦だ!!」

そう涙目で訴えるアリアの服装は、白いワイシャツと黒のスカートだ。本人は羞恥に顔を赤くして裾を引っ張っているものの、実際にはスカートの丈は膝までであるため、言うほど露出の多い格好ではない。寧ろ、上下共に飾り気の無いシンプルかつ質素なデザインであり、その組み合わせが、まだあどけなさを残しながらも整った容姿を誇るアリア本人を引き立てている。

「……………これ……………本当に似合ってるの……………?？」

一方、自分ではいまいち判断がつかないシャーラの服装は、銀色のワンピースだ。

こちらも丈は長く、長袖であるため大した露出はなく、アリアとは逆に胸元や袖周りに施されたフリルが柔らかな印象を与えてくる。

そんな見違えた、しかしどうにも自覚が無い2人に、恭弥は無意識の内に思ったことを告げた。

「2人とも、凄く似合ってるよ。アリアちゃんは綺麗だし、シャーラちゃんは可愛くなったっ」

「!!」

少し熱の籠った恭弥の言葉に、少女2人、特にアリアは余計に顔を赤らめた。

「確かになあ。女子ってホント、着るものが変わるとガラリと変わるよなあ」

「オレはカノンとフィルシアを見直したよ。てっきりもつとも変なところか……露出度の高い服を選んでくると思ってたから」

恭弥に共感しながら様変わりした2人に心底感心している一夏に続いて、ユウはカノンとフィルシアに関心の目を向ける。

「まあねえ、2つともカノチンのチョイスなんだけど……」

「いや、私もね、選ぶ時はそういうのも考えたんだよ」

「考えたのかよっ!!」

男子3人の見事な異口同音ハモリが成立した。

その傍らで、サクラが恐る恐る質問をする。

「……………それで、結局そういう案を却下した理由は？」

「春とはいえ、まだ肌寒いからね。私の所為でこんな可愛い子たちに風邪なんてひかせられないよ。私、これでも『紳士』ですからっ」

「本当、割り込まなくてよかった……………」

「カノン……………」

胸を張って、しかしどこか怪しい笑顔で応じるカノンに、ユイは戦慄しながら数分前の自分の判断に内心感謝し、自らの騎士のそんな様子にリグルはさらに頭を抱える。

そんな非特隊の面々の反応に、アリアは未だよそよそしさを残しながら問う。

「……………本当に、似合うのか？変ではないか……………?」

「全然っ。アリアちゃんもシャーラちゃんも、凄く似合ってるっ」

「そ、そうか……………」

「……………よかった……………」

アリアの問いに恭弥が首を大きく横に振って答えると、それまで羞

恥だけが占めていた少女2人の顔に、微かだが喜びが混ざる。

「……………」

その光景をユイが気難しそうに眺めていると、隣に歩み寄った一夏が訊いてくる。

「ユイもああいう服買わなくていいのかわ？」

「い、いえ……………私は別に……………」

思わぬことを言われて動揺したのも束の間、ユイは改めてアリアとシャーラを見ながら、心なしか沈んだ声で応じる。

「買っても着る機会がないだろうし……………そもそもあんな服、似合わないだろうし……………」

「そうか？アリアさんが着てるようなのなんて、ユイにも似合うと思うけど？」

「……………ありがとうございます」

一夏は思ったままを言っているのだが、お洒落という分野にはいまいち自信のないユイにはどうしても社交辞令にしか聞こえず、しかしそう言ってくれることへの嬉しさに、微かな喜びを含んだ苦笑を返す。

と、それを見ていたフィルシアが口元に両手を添えて言ってくる。

「ヒューー ヒューー 熱いねえ、お二人さん！」

「フィルシア、あなた……………」

「フィ、フィルシアさんっ!!」

それに対してサクラは顔をしかめ、ユイは瞬時に赤くなった顔で叫んだ。

「ふう……………人心地ついたぜえ……………」

森を抜け、街に着くや真つ先にスーパーの試食品を片っ端から食べまくったイシカワは、腹をさすりながら満足そうな顔を浮かべてそう呟いた。

試食品を食べていた際、店員や他の客から怪訝な目を向けられていたのだが、一心不乱に食べていたイシカワの知ることではなく、知っ

たところでそれを止めることも、因縁をつけてどうこうしようという気も起らないのがイシカワだ。

(さて、腹も膨れたことだし、次は情報収集だな。とりあえず、電器屋に行ってみるか。テレビがありや、ニュース番組とか観れるしな)

思い立ったが即行動、イシカワは周囲の建物を見回して電器屋を探す。

買う物を決めて会計を済ませると、非特隊の少年少女たちは手に手に袋を提げて服屋を出る。

その中に混ざったアリアとシャーラの手にも袋が提げられ、それを嬉しくも気まずそうに一見したアリアが隣の恭弥に顔を向ける。

「本当によかったのか？買ってもらって」

「いいよ。アリアちゃんたちが欲しそうにしてたっていうか……まあ、僕の“男”を立てると思ってさ」

アリアとシャーラの心境を察して意識的に冗談半分な調子で応じながら、恭弥は試着後の2人が悩ましげにそれぞれの服を見ていたことを思い出す。

そんな中、隣に寄って来たカノンが恭弥にしか聞こえない声で言うてくる。

「にしても意外だね。シユウさんからお金もらってるのに、アリアちゃんとシャーラちゃんの分は自分の財布から出すなんて？」

「まあ、カノンちゃんたちの分ならそれでいいんだろうけど……もともとその為のお金だしね……ただ、アリアちゃんたちに関しては流石に適用範囲外だろうからね。お嬢様かと思ってたけど——あるいはだからなのか——お小遣いが限られてるのか、服一着買うのにかなり渋ってて。いろいろ言っても大分気に入ってみたいだから、できれば購入させてあげたかったけど……だからといってそのことにこのお金を使ったとバレたら、なにかと怖いしね。それなら僕が人肌脱ぐさ」

「ビュー♪オトコマエー」

同じくらしいの声で応じる恭弥に口笛を吹きながら返すと、カノンは後ろを歩く女子たちの輪に戻っていく。

それを目で追った恭弥は、いつの間にか非特隊の女子の輪にアリアとシャーラが加わっているのに気づき、その嬉しそうな顔で買った服のことを語る2人の様子に、自然と口元が緩む。

(ま、よかった……かな?)

その横では、一夏がユイの手持ちの袋を見ながら控えめに声をかけていた。

「本当に、それだけでよかったのか?」

「いいんです。どの道、今日は普段着を買うつもりで来たんだし……」

そう応じながらユイが視線を落とす袋の中には、安さと実用性に重きを置いた服しか入っておらず、遠回しに「お洒落な服を買わなくてよかったのか?」と訊いている一夏の心境を察して少しバツが悪くなる一方、そんなふうに分を気にかけてくれることが嬉しくもなる。

だからなのか、胸の内に湧いた小さな欲求を堪え切れず、つい小声で言ってしまう。

「……もし、次のお休みの都合がよかったら……その時は、一緒に行ってくださいますか?」

「いいぜ」

「……本当に……?」

余りにもあっさりと思じた一夏に、ユイはつい狼狽しながら訊き返す。

「ああ。買い物くらいいくらでもつき合うさ」

「……ありがとうございますっ」

柔らかな笑みを浮かべる一夏に、ユイは若干論点がズレているような気がしながらも、頭を下げて笑い返した。

(……すごいな一夏って。あんな自然に女の子と関わらせてさ……オレもあんなふうにできてたら、今頃ユリと……)

そんな2人のやり取りを後ろで眺めていたユウは、ユイ同様に会話の論点に違和感こそ覚えたものの、一夏の自然体な態度にある種の羨



ましさを感じ、数日前に初めてゴーストに遭遇した直前のことを思い出した。

（鞆2つ分……たった鞆2つ分の隙間だったんだ。あの隙間を埋めてさえいれば今も一緒に、こんなふうに買い物に行ったり……）

「鞆2つ分の隙間」に象徴される、あの時の自分の勇気の無さと、どうしてもそれに繋がっているように感じてしまう今の現実——意中の相手の死——に、ユウは思わず手を握り締める。

と、

「……ユウ？どうかした？」

「！カノン……？」

気づいたら隣を歩いていたカノンにハツとするや、ユウはすぐに手の力を抜く。

「どうかって、なにが……？」

「いや、なんか険しい顔してるからさ」

「……何でもない。何でもないよ」

「……ならいいけどさ」

手の方は意識していたが、顔にも出ていたらしい。言葉に合わせるように「何でもない」表情を浮かべようとするとユウに、カノンも引き際を察してそれ以上追及してこなくなる。

その時、

「みんな、ちよつと脇に寄って」

「！？」

唐突にかけられた恭弥の声に、一行はその視線を追ってみると、正面から人が近づいてきていることに気づき、すぐに歩道の片側に寄って道を開ける。

距離が迫って改めて見ると、近づいてくるのは男、それも一行とそう変わらないかやや上といった歳格好だ。鋭い目つきがどこか厳つい印象を与え、何か探しているのか周囲をキョロキョロと見回している。

——ちよつと怖い……。

個々に多少の差はあるものの、それが男に対する一行共通の印象

だった。

電器屋を探して歩くことしばらく。未だ目的の店を見つけれないイシカワは、若干の苛立ちを覚えながらも根気強く探索を続けた。

（たあくつ、そこそこデケエ街のくせに、なんで電器屋の一つも無<sup>ね</sup>えんだよ……………ん？）

そんな時、自分が歩いている歩道の正面から、中高生くらいの少女の一人が迫ってきていることに気づく。

（なんだあ？ガツコの仲良しグループが昼間っから買い物かあ？……………にしてもコイツ等、邪魔くせえなあ）

狭いわけではないものの、それでも幅に限りがある歩道を横に広がるように進む一人に、イシカワは電器屋が見つからないのとはまた違う理由で不機嫌になる。

が、そう思った直後に一人は道の片側に寄り、こちらの気分を察したような態度に、イシカワの機嫌が少しよくなる。

（なんでえ。わかってんじゃねえかつ）

その思いを表すように口元を緩めながら、イシカワは一人の横に差しかかる。

そして、非特隊の少年少女たちと、イシカワがすれ違う。

「わりいなっ」

「いえ……………」

一人の面々を見渡しながら申し訳程度の微笑を浮かべたイシカワと、非特隊を代表して若干怖じけた様子の恭弥。

短いやり取りを交わして一人の横を通り過ぎると、イシカワはふと思う。

（てつきり周りのことなんてお構い無し of 傍迷惑な連中かと思っただが、意外といい連中じゃねえか！……………さて、電器屋は……………無え

なあ、チキシヨー……………)

すれ違った一団の印象を覆すと、未だ電器屋が見つからないことに頭を搔く。

一方、非特隊一行は。

「……………なんか、思ったより感じのいい人だったな。わるいなって」

「まあな……………顔は怖かったけど……………」

「確かにね。一瞬〃その筋の人〃かと思ったよ……………」

遠くなつていくイシカワの背中を見送りながら、一夏とユウ、恭弥はすれ違つた時のことを思い出しながらそれぞれ感想を溢す。

「なんか探してるのかな？ずつとキョロキョロしてたけど」

「でも、声をかけるのはやっぱり躊躇っちゃいますよね……………」

「……………そうね。私もそう思う」

首を傾げるフィルシアに、ユイは若干震え上がりながら返し、サクラが心なしか悔しそうにそれに頷く。

「……………こちらを圧するだけの覇気を放ちながら、あれで戦士ではなく、ただの民だというのか……………?」

「……………地球連邦……………恐るべし……………」

アリアとシャーラは声の大きさに注意を払いつつ、イシカワの独特の存在感に圧倒される。

「……………ところでカノン、さつきからどうしたの？難しい顔して」

「いや……………さつきの人さ、笑ったら……………心の底から本気で笑ったら、なんか凄い気がするんだよね」

「……………?」

真剣な顔で考えごとをするカノンの返答に、質問者たるリグルは余計に首を傾げることになる。

「それに……………なんか〃同類〃の匂いがしたような……………?」

「えっ!？」

はつきりしない様子で呟かれたカノンの一言に、アリスとシャーラ以外の全員が軽い驚きを抱き、代表して恭弥が傍らに近寄る。

「〃同類〃って、まさかさつきの人も異世界人？」

「いや、そういうことじゃなくて……………なんて言えはいいかな……………」

話が合いそう、とか……？」

「「……………」」

声の大きさを抑えた恭弥に問いにすぐに否定を返しながらも、その後のカノンの歯切れは悪く、やっと出た返事に一行はさらに疑問を深めることになった。

そんな奇妙な邂逅から十数分後。

恭弥主導の下、アリアとシャーラを加えた非特隊一行は近くのファミレスに来ていた。

テーブルを挟んで3人掛けの長椅子2つが向かい合う席、その1つに恭弥とアリア、シャーラ、ユウ、ユイ、一夏が、もう1つにカノンとリグル、サクラ、フィルシアがそれぞれ分かれて座ると、各々メニューを広げて食べたいものを選び始める。

「……………ハンバーグ……………オムライス……………フライドポテト……………？」

「ああ、それはなかなか美味だぞ。このデミグラスソースというのが私のおすすめだっ」

写真の品々を物珍しそうに眺めるシャーラに、アリアは一応抑えてこしているものの嬉々とした顔で説明していく。

その様子をテーブルを挟んで眺めながら、男子3人は互いに顔を寄せる。

「あのシャーラって子、ハンバーグに首傾げてるけど……………」

「そういう庶民的な食べ物とは縁がないくらい箱入りだったのかな？アリアさんもなんかはしゃいでるし」

ユウの指摘に、一夏はとりあえずの推測を返す。実は似たような表情はリグルも浮かべていたのだが、それぞれのテーブルに座る者たちが気づくことはなかった。

「というか一夏くん、アリアちゃんはもうさん付けで固定なんだな……………」

「いやあ、初対面で睨まれてから、なんか気安くできなくて……………」

一方で恭弥は素朴な疑問を呟き、それに答えながら一夏は我ながら情けないと思いつつ頭を搔く。

その間にもアリアとシャーラは頼む物を決め、ユイと恭弥たちも各々決めると、ユウが隣のテーブルに座るカノンたちに確認の声をかける。

「こっちは全員決まった。そっちは？」

「こっちもいいよ」

「あ、せっかくだし、ドリンクバーも頼もうよっ」

カノンの返事に続く形で、フィルシアが全員を見回しながら提案する。

「いいんじゃないか？」

「俺も賛成」

「ナイス！フィルち！」

ユウと一夏とカノンの返事を筆頭に、残りの面々も頷く中、シャーラは不思議そうな顔でアリアを見やる。

「ドリンクバー……？」

「あつ、えつと……それはだな……」

先ほどのような解説を期待したらしいが、これはアリアも知らないことだったらし。が、かといって視線を向け続けるシャーラに知らないとも言えず、アリアの顔に困惑と焦りが浮かんでいく。

それを見て、恭弥がテーブル越しにそつと身を寄せる。

「飲み放題のことだよ。好きな飲み物を好きな分持ってきて飲むの」

「……好きな分……？」

「うん。この店の場合は時間制みたいだけどね」

メニューを確認しながらの補足も加えた恭弥の説明に、シャーラは納得した様子で頷く。

「そんなものがあつたのか……」

「なるほど……」

その傍らでは、アリアが窮地から解放された安堵と新発見の驚きが混ざった表情を浮かべ、リグルがそつと手を打っていた。

「じゃあ、頼みますよ」

全員賛成したのを確認すると、サクラが呼び鈴を鳴らす。少しして店員がやって来ると、恭弥と一夏、ユウ、サクラ、アリア、シャーラはオムライスセットを、カノンとフィルシアはステーキセットを、リグルはハンバーグセットをそれぞれ頼む。

が、全員が少し早めの昼食を意識した注文をする中、ユイだけは単品のフライドポテトを頼む。

「本当にそれだけでいいのか？」

「はい。お腹そんなに空いてなくて……」

一夏の確認に、ユイはどこか控えめに応じる。

もちろんユイもそこそこの空腹を覚えているのだが、ただでさえ数着の服を買ってもらって、その上ご馳走になることに若干の引け目を抱いているのだ。

「……………そっか」

そんな思いを知ってか知らずか、一夏はそこで話を切り、他のメンバーもそれ以上追及せず、全員分の注文を聞き終えた店員が奥に引込むと、恭弥は席を立って一行を見回す。

「じゃあ、ドリンクバーには僕が行ってくるよ。この人数でそろそろ行くと混むだろうし。みんな何が飲みたい？」

「ならオレも行くよ。恭弥だけじゃ流石に大変だろうし」

そんな恭弥を見て、ユウも席を立つ。

「2人が行くんなら俺も……」

「いや、3人も行くと流石にさ」

「そうですか……？」

一夏も続いて立とうとするが、恭弥に止められて大人しく座り直し、各々が恭弥とユウに飲みたい物を頼む。

そんな中、一人怪しい笑みを浮かべたフィルシアが席を立つ。

「ウチは自分で行くよ。ちよつとやってみたいことあるしっ」

「そう？他のみんなは頼んだよな？」

「じゃあ、行ってくる」

恭弥が確認し、ユウが告げると、2人はうきうきしたフィルシアを連れてドリンクバーの装置のもとへ向かう。

3人が店の奥に消えると、ユイは再びメニューを広げ、どこか懐かしそうな顔を浮かべる。

「どうかしたか?」

「いえ……………こういうのは、ちよつとやさつとの時間じゃ大して変わらないんだなあつて……………」

その表情が気になった一夏の問いに、ユイはハンバーグセットの写真を注視しながら答える。

「……………ユイといったな。その口振り、最近まで違う場所にいたのか?」  
「えつ?……………えーつと……………」

「……………」

その様子に興味を抱いたアリアの問いに、ユイは困惑を浮かべて言い淀み、他の非特隊の面々にも緊張が走る。

ユイが言外に言おうとしていたのは、彼女がいた時代から100年経つてもということだ。

しかしそれを一般人——少なくともユイたちはそう認識している——たるアリアやシャーラに教える訳にもいかず、その間にも答えをせがむ視線を向けてくるアリアに、一同は焦りを抱く。

そんな時、一夏が声をかける。

「その、ついこの間までシベリアの方に行つててさ、最近帰ってきたんだよ。なつ」

「え?……………あ、はいっ。そうです。家の都合で行つたり来たりで」  
一夏の目配せを察して、ユイも努めて自然体に話を合わせる。

「だから、日本のファミレスなんて本当久しぶりで、変わらないメニューについ懐かしくなっちゃつて……………」

念を押すようにそう続けると、ユイは窺う目をアリアと、念のためシャーラにも向ける。

「……………そうか」

「……………」

一連の説明でアリアは納得してくれたいらしい。シャーラも黙ったままで何か言ってくる様子はなく、小さな危機を乗りきつたユイたちはほつと胸を撫で下ろす。

それに合わせるように、恭弥たちがドリンクバーから戻ってくる。  
「お待たせ」

「ありがとうございます。そのお盆は？」

コーラを置いた恭弥に礼を言いながら、一夏は恭弥とユウが持っている人数分のグラスを載せた盆を見る。

「ドリンクバーのところに重ねて置いてあった。こういう大勢の分を運ぶためのだろう」

応じつつ、ユウはカノンたちのテーブルに飲み物を置いていく。

「アリアちゃんはリンゴジュースだったよな。シャーラちゃんは任せると言ったから、とりあえずコーラにしといたよ」

「悪いな」

「……………コーラ…………？」

恭弥もアリアたちのテーブルに飲み物を並べる傍ら、シャーラは目の前に置かれたコーラを不思議そうに眺める。

そうして全てのグラスを配り終えて2人も席に着くと、少し遅れてファイルシアが戻ってくる。

「……………ファイルシアさん、それ……………」

その手に持っているグラスに波々と注がれた極彩色の液体に、リグルが思わず後退る。

「フフンツ、ファイルシア・オリジナル・ドリンクだよ！」

それに構わず上機嫌に応じながら、ファイルシアは極彩色の液体ファイルシア・オリジナル・ドリンクが入ったグラスを持って席に着く。

「一人で何やってるのかと思えば……………」

「いるよなあ。ドリンクバーでいろいろ混ぜる奴…………」

調理過程を思い出してユウは呆れ、一夏は遠くを見る目で呟く。

「泡立ってるってことは炭酸入ってるよね。緑色はメロンソーダで、赤はトマトジュース、白っぽいのは……………コーヒーに入れるミルクかな？細々浮かんでるのは……………」

「何でカノン冷静に分析してるの!？」

一方でカノンはグラスに顔を近づけてしげしげと眺め、場合によってはグラスの縁を扇いで匂いを嗅ぎながらしみじみと考え、その様子



にリグルは極彩色の液体を初めて見た時以上に驚愕する。

「フィルシア、それ自分で責任持つて飲みなさいよ。誰も手伝わないから」

「心配ご無用！お残り厳禁でねっ」

その横でサクラが釘を指すものの、当のフィルシアは変わらず嬉々とした様子で応じる。

それと前後して、各自が注文した料理が運ばれてくる。

「さて、みんな頼んだものは来たな？」

「はい」

恭弥の問いに、カノンを筆頭に返答、あるいは拳手がなされ、食事の用意が整ったことか確認される。

「それじゃあ。いただきます」

「「いただきますっ」」

「……いただき、ます……？？」

恭弥先導の下に各々食前の挨拶を告げる中、シャーラだけは見よう見真似といったぎこちない動作で周囲に続く。

もつともすぐに食事が始まって気に留める者はおらず、各自頼んだ料理や飲み物に舌鼓を打ち、

「うっ……!？」

「だから……」

あるいはフィルシア・オリジナル・ドリンクを飲んで顔を青くする様子をサクラに呆れられていた。

そんな中、頼んだオムライスを吟味していた一夏は、心底感心した顔を浮かべる。

「んー、こっちの店も大分美味いなあ！ユイもよかつたらどうだ？」

「」

「えっ？」

言いながら、唐突にオムライスのひと切れが乗ったスプーンを差し出されて、それまで淡々とフライドポテトをつまんでいたユイは束の間反応に困る。

「……いや、でも……」

「遠慮すんなって。ほらっ」

「……………そ、それじゃあ……………」

口籠るにも構わずなおも勧めてくる一夏に根負けして、ユイはそつと口を開けて差し出されたオムライスを受け入れる。

「……………」

実際、そのオムライスは値段の割にいい味をしていたようだが、妙に強張りだした舌では十分な吟味はできなかった。

「おっ、やってるねえ」

「ビュービュー！」

それを見たカノンと、少し回復したらしいフィルシアがニヤケながら茶々を入れてくる。

「ツ!!」

それできっきの自分の様子を顧みたユイは途端に羞恥に顔を赤くし、フライドポテトを黙々と食べることでどうにかこの場を誤魔化そうとする。

そんなユイに追い討ちをかけるように、一夏はあくまでも他意のない様子で言ってくる。

「そのフライドポテトも美味そうだなあ。一つくれよ」

「えっ? あっ……………」

返事を待たずに一夏は一切れ摘まみ、ユイが使っていたケチャップの器にその先を浸けて口に入れる。

「ツ……………!!!」

自分がさんざん使い、今や一夏も使ったケチャップの器を凝視しながら、ユイはこの後どう動くべきか顔を赤くしながら悩むことになる。

「……………」

その傍らでは、シャーラが未だ物珍しそうな目でコーラを眺め、恐る恐る口をつけていた。

「!？」

「シャーラちゃんっ?」

一口飲んだ途端目を丸くするシャーラに、恭弥がやや慌てて声をか

ける。

「ごめん、口に合わなかったかな……?」

「……口の中でパチパチしたのに驚いた……けど……」

申し訳なきそうに訊ねる恭弥に応じると、シャーラは再び慎重に、しかし先ほどよりも興味津々にコーラを一口飲む。

「この感じ……なんかいい……!……選んでくれて、ありがとう……」

「そりゃよかった。どういたしましてっ」

御満悦なシャーラに、恭弥は安堵しながら返す。

「……………」

そんな2組のやり取りを横で見ていたユウは、胸の内に服屋を出た後に抱いた思いが再び湧き上がってくるのを感じる。

(……鞆2つつ分さえ埋めておけば、オレだって……)

ユウ自身、今更であることは充分承知しているものの、胸に巢食った悔いはなかなか消える気配はない。

と、

「どうしたユウ? 食べないのか?」

「……………あ、ああ……………」

食事の手を止めたアリアの声に軽く驚きながら、ユウは我に返る。

「食べないのなら、お前の分も私がもらうが?」

「……………いや、食べる食べ……………」

戸惑いながらも応じた時、ユウは食事開始から3分と経っていないにも関わらずすでに7割方空いたアリアの皿に、思わず目を見張る。同時に一時的ではあるものの、胸中の悔いも引っ込んでくれた。

「えつと……アリアだっけ? 食べるの速いんだな……?」

「む? そうか? ……まあ確かに、このオムライスは美味だからな。つい次々口に運んでしまっているかもしれないが……」

感じたことを真っ先に言葉にするユウに応じる間にも、アリアのスプーンは皿と口を往復していく。

「……………奢った甲斐がある、ってことかな? 僕のも少しどう?」

「うむっ。ありがたくいただきます」

その食べっぷりに恭弥も啞然としながらも、口元に薄ら笑みを浮か

べて自分のオムライスを差し出し、アリアはそれにも嬉々としてスプーンを入れる。

一方、恭弥たちの隣のテーブルでは。

「ねえ、カノちゃん——」

「あ、ゴメン。ファイルシア・オリジナル・ドリンクソレは無理」

いよいよ顔色がおかしくなってきたファイルシアの呼びかけを、カノンが取り付く島もなく突っぱねていた。

「ちよつと！いつもならおふぎけの一つ二つ加えてくるじゃん。何でガチで断るのっ?」

「いやいやファイルち。ソレ、ガチで断なきやいけないヤツでしょ」

「そこをなんとかっ!もう無理っ!!」

「自業自得よ……」

「……これが、ドリンクバーというものですか」

平時においては珍しく真剣な顔するカノンになおも食い下がるファイルシアを見て、サクラ呆れ、リグルは戦慄する。

そんなにぎやかな、あるいはやかましい光景を繰り広げながら、年少女たちの早めの昼食は過ぎていく。

昼食を終えると、恭弥が全員分の会計を済ませ、一行はファミレスをあとにする。

「本当によかったのか?私とシャーラの分まで」

「……………」

「もともと全員分払うつもりだったし、お金は買い物代として知り合いに出示してもらったものだからね。気にしなくていいよ」

隣を歩くシャーラの分も含めて不安そうに問うアリアに、恭弥は知り合い——光秋の顔を浮かべながら応じる。

その後ろでは、

「うううう……………」

「ファイルちー?生きてるー?」

すっかり顔色が悪くなったファイルシアに、カノンが事務的に声をか

けていた。

「……フィルシアのやつ、大丈夫かな？」

「さあ……」

「やっぱり、ドリンクバーは普通に飲むのが一番ってことか」

「そうですね……」

その様子をさらに後ろから眺める一夏の呟きに、横を歩くユイは淡々と返す。

一夏としては半分独り言のつもりなので特に思うことはなかったが、ユイとしては気の利いた応対一つできない自分に少し腹が立った。

（ああ、もうっ。せっかく一夏さんが話題振ってくれてるのに……）

そんなユイの心境を知ってか知らずか、一夏はさらに話し続ける。

「それはそうと、あの店のオムライス美味かったなあ」

「！そ、そうですね。わざわざ分けていただいて、ありがとうございましたっ」

自省の矢先にめぐってきた機会に、ユイはやや力みながら礼を兼ねて相槌を打つ。

「ユイからもらったフライドポテトも美味かったしなあ………今度作ってみようかな……」

「えっ？一夏さん、料理とかするんですか？」

「そこそこな」

「へえ……」

応対への苛立ちこそ相変わらずな一方、一夏の知らなかった一面を知れて、ユイは少し嬉しくなる。

「その……台所に立つ男の人って、格好いいですね？」

「まあ、俺の場合、必要に迫られてっっていうかな。両親いなかったし、歳の離れた姉はずっと外で働いてたから」

「あっ……そう、でしたね……」

一夏の方は特に感慨なく告げるものの、ユイとしては意図せず相手のデリケートな部分に触れてしまった気がして、罪悪感から高揚し

つつあった気分が急に萎えていく。

「……………どうかしたか？」

「いえ、その……………すみません……………」

突然俯いたユイを心配して一夏は声をかけるものの、ユイにはか細い声で謝罪を告げるのが精一杯だ。

「なんで謝るんだ？」

「だって、変なこと言っちゃって……………」

「……………ああ」

言い辛そうなユイの説明を聞いて少し、一夏は元気がなくなった理由を察する。

「そんなに気にしなくていいって。俺にとってはそれが当たり前だったんだし」

「それは……………そうでしょうけど……………」

一夏の返事はしつつも、ユイの顔から罪悪感が消える様子はない。

「それに恭弥さんも、小さい頃にお父さん亡くしてるらしいし」

「えっ？」

藪から棒に一夏が告げたことに、ユイは思わずハツとする。

「本当は、本人以外があんまりこういうこと言うべきじゃないんだろうけど……………初めて会った頃、今みたいに家族の話題になってき、その時教えてくれたんだ」

「はい……………」

いまいち一夏の意図を凶りかねながらも、ユイはとりあえず相槌を打つ。

「そんなふうには、家族に関する事情は人それぞれだろう？もつと言うと、非特隊のメンバーってワケありな奴ばかりじゃん。ユイだってさ」

「……………そうですね」

タイムスリップのことを言っているのだと察して、静かに首肯する。

「だからさ、ワケあり同士、あんまり気にすんなよっ」

「っ!!」

言いながら、一夏はユイの頭をくしゃくしゃと撫で、唐突なスキンシップにユイの頭からは気まずさも罪悪感も吹っ飛んで真っ白になる。

「ちよ、ちよつと!?!」

「ほれほれえ〜!」

「わ、わかりました! 気にしません! わかりましたからッ!」

途中から明らかに面白がり始めた一夏に慌てて応じながら、ユイは撫でられから抜け出す。

「……………」

自分から抜け出たものの、その顔にはなぜか名残惜しさが浮かんだ。

と、突然アリアとシャーラがそろって足を止め、他の面々もそれに倣って2人を見やる。

「私たちはそろそろ戻らなければいけない。名残惜しいが、ここでお別れだ」

「そっか…………」

そう告げるアリアに、恭弥は微かに寂しさを覚える。

「……………あつ」

が、直後になにか思いつくと、すぐにズボンのポケットを探り、取り出した携帯電話をアリアとシャーラに示す。

「せっかくだし、連絡先交換しない?」

「いいんじゃないか」

「お! 美少女2人のメアド追加できんの? ラッキーッ!」

恭弥の提案にユウとカノンが反応すると、非特隊の面々から次々と賛同の声が挙がる。

「いや、それは…………」

「こうやって何度も会うのもなんかの縁だろうし、連絡先がわかればまた会う約束とかできるじゃん。ね?」

それを見ながらも返事を渋るアリアに恭弥はさらに畳みかけるが、そこでふと思う。

「…………もしかして、迷惑だったかな?」

「い、いや、そんなことではない」

「じゃあ、携帯持っていないとか？」

「いやいや恭弥、今どきそんな人——」

「……私、それ持っていない……」

「——いたね」

恭弥の心配にフィルシアがツツコミを入れようとした矢先、そつと手を挙げたシャーラに、フィルシアは言い切る前に前言を撤回する。

申し訳なさそうに手を挙げるシャーラを見ると、恭弥はアリアに視線を移す。

「もしかして、アリアちゃんも……？」

「いや、私は持っているが……」

「!？」

言いながらアリアはポケットからそつと携帯電話を出し、それを見たシャーラは驚きを浮かべて顔を寄せる。

「アリア、なんでそんなの持ってるの？」

「て、偵察の一環だつ。こつちの者の多くが持っていたのでな。なに特別な装置かと思つて……」

互いに非特隊一行に聞こえないように声の大きさに注意して言葉を交わす中、アリアは好奇心に駆られて買ってしまい、今日まですっかり持て余していたことを知られまいと内心緊張する。

そんな2人に怪訝な顔を浮かべたのも束の間、多少強引とは思いつつも、恭弥はさらに畳みかける。

「だったらさ、せめてアリアちゃんだけでも。その……中華街で別れてそれつきりだと思つてたのがさ、こうしてまた会えたわけ……僕としても、なかなか面白い縁だからさ、このまま終わらせろのは、なんか惜しいっていうか……」

「ん、ん……そういう、ことなら……」

若干照れ臭そうに告げる恭弥に何かを感じたらしい。多少の迷いを残しながらも、アリアは手の中の携帯電話を差し出してくる。

「！ありがと——」

「ただし、教えてもらうのは恭弥の番号だけだ」



それを見て恭弥がほっとした顔を浮かべたのも数秒、すぐにアリアは制す声で付け足してくる。

「えー！なんで？カワイイ子の連絡先が増えると思ったのに!!」

それに対してカノンが顔一杯に不満を浮かべるものの、アリアは構わず続ける。

「携帯を持っていない所為もあるが、シャーラは皆の連絡先を知りようがないのだ。そこに私だけが全員の連絡先を知っては、不公平だろう。一方で、縁を大切にしたいという恭弥の話にも一理ある。だから妥協点として、私と恭弥、二人だけが連絡先を交換する」

「いや、不公平って……………」

あくまでも言い切った顔をするアリアに、しかしカノンの不満は収まる様子がない。

「まーまー、本人がここまで言ってる以上、無理強いするのもなんだろう?」

「それに恭弥に連絡が行けば、自然とオレたちにも報告されるし、不便はないだろう」

「それはそうだけど……………」

一夏とユウに説得されて、カノンはしばし逡巡する。

「……………わかったよ。アリアちゃん困らせるのも嫌だしね。今回はやめとくよ」

「諦める気はないのね……………」

それでようやく納得したカノンの返答に、リグルが呆れ顔を浮かべた。

「じゃあ、さっそく」

「う、うむっ」

そんな様子を傍らに、恭弥は携帯電話を差し出し、アリアも若干の緊張を浮かべながら互いの連絡先を交換する。

「よし、ちゃんと来てる」

「こっちもだ」

そして互いに新たな連絡先が追加されているのを確認すると、アリアは改めて告げる。

「ではな……………また機会があれば連絡する」

「……………それじゃあ……………」

それにシャーラも続くと、2人は一行から離れて建物の陰に消えてしまう。

「……………行っちゃいましたね」

「うん……………でも、今回は『次の機会』を作れた」

おそらく、中華街での別れ際の時を思い出しているのだろう。どこか寂しそうに呟く一夏に、自分も同じ感慨を抱いていた恭弥は領きながらも、新しい連絡先が追加された携帯電話に微笑みを溢す。

「ヒューヒュー！よかったねえ恭弥、カワイ子ちゃんの連絡先教えてもらって……………爆発しろっ！」

「ホントホント！よっ！色男!!」

「……………いろいろと誤解招くからやめて……………あとカノンちゃん、今にも血を流しそうな目でこっち見ないで……………」

その光景を見て、若干嫉妬しているカノンと心底面白そうにしているフィルシアがはやし立ててきて、恭弥は対応に困りながら携帯電話をしまう。

「……………オレたちも帰るか？必要な物はそろえたし」

「それがいいかもしれないわね。遅くならない内に」

ユウの提案にサクラが応じると、他の面々も頷いたり相槌を打ったりして返し、誰ともなしに伊豆基地へ向かっていった。

伊豆基地に戻ると、少年少女たちは各々の荷物を片づけ、光秋に帰ってきた報告をしようと非特隊の待機室へ向かう。

恭弥と一夏だけは制服に着替える手間から一行より少し遅れて向かうと、いくらかも進まない所でユイと会う。

「あ、一夏さん。恭弥さんも」

「ユイちゃん？」

「こんな所において大丈夫か？誰かに見られたら怒られるんじゃない？」

思わぬ所での対面に恭弥は不思議がり、一夏は心配そうに周囲を見

回す。

現在非特隊預かりのユイであるが、扱いはあくまで「保護した民間人」となっており、基地内での行動には大きく制限が掛かっているのだ。

「その、実はお願いがありました……私を非特隊の待機室まで連れて行ってくれないか？今後のことで、加藤さんと相談がしたいので」

「……………」

「今後」という表現と、それ以上に何かを決心した様子の中に、恭弥と一夏は一瞬目配せする。

「……………わかった。こっちだ」

ひとまず一夏がそう応じると、ユイを加えた一行も待機室へ赴く。

しばらく歩いて部屋に入ると、室内には先に行った少年少女たち、光秋、ライカ、ウォルター、ナガイと、ヴェーガスのクルーを除いた非特隊のほとんどが集まっていた。

「光秋さん、今戻りました」

「ん。それと、もう『加藤大尉』と呼ぶべき場面だぞ」

後から来た3人を代表して告げる一夏に、光秋はユイを注視しながら応じる。

「すみません……それで、ユイが話があるって」

言いながら一夏はユイを見やり、ユイは若干緊張した足取りで光秋のもとへ歩み寄る。

「……………」

そのただならぬ様子に光秋をはじめ室内の全員が注目する中、ユイは光秋の目を真っ直ぐに捉えながら告げる。

「私の今後についてお話があります……私を……私を連邦軍に——できることなら非特隊に入れてくださいっ！」

一気に言い切ると同時に、上半身を直角に曲げて深々と頭を下げる。

「……………」

話があるといわれた時から皆薄々予感し、実際に告げられたその言

葉に室内が静まり返る中、光秋も深く下げられたユイの頭を見ながらゆっくりと口を開く。

「まず、頭を上げてください」

「はい……」

応じると、ユイはゆっくりと頭を上げる。大勢の前で大きな声を出したせいか、その顔は薄っすら赤くなっていた。

「随分と唐突ですね。訳を訊きたいけど……まあ、とりあえず座って」「はいはい、こつちねー」

言いながら光秋が近くの椅子に手を伸ばすと、それを見計らったようにファイルシアが2つ持ってきたので、それぞれその椅子に腰を下ろす。

「まず、何でそんな結論に至ったのか説明してもらえますか」

「はい……」

緊張しつつも光秋に向かい合うユイの脳裏には、今日一日のことが浮かんできた。

「ご存知の通り、私は第三次世界大戦の時代から飛ばされてきました。みなさんにとつては百年前の『歴史』でしかないかもしれないけど、私にとつてはつい数日前のことです。そんな私から見ると、この時代はすごく豊かに思えるものでした。今日実際に街の中を歩いてみて、ますますそう思いました……でも」

それまで生き生きとしていた声音に、僅かに陰が差す。

「その豊かさ——平和は酷く脆いものです。私がいた時代でもそうでした。今でもそう……ふと耳を傾ければ、何処かで武装蜂起事件が起こった、どこそこで小競り合いがあった、そんなニュースが一日一回は必ず聞こえてきます。その一回の事件で今日見た平和は簡単に崩れてしまいます。それにこの時代では人だけじゃなくて、鬼とかゴーストとか、ルミエイラとか、人かどうかも怪しい勢力までそういう事態を招こうとしている。それに対して、非特隊のみなさんは一生懸命足掻いて、今日見た光景が明日も続くように頑張ってるっ。私もその中に加わりたい。あの時代から今という時にやって来てしまった私だからこそ、そんなみなさんの力になりたい！……と、いうのが

理由です……………」

途中から単なる説明にしては声に熱が籠り出し、最後には思いの丈を言い切ると、そんな自分を振り返って照れたのか、ユイは少し小さくなる。

「なるほどねえ……………」

そんなユイを眺めながら、光秋はあごを撫でてしばし思案する。

「……………」

この中で最高の意思決定者の沈黙に、少年少女たちは多かれ少なかれ緊張を浮かべ、緊迫感には慣れていないはずのライカもポーカーフェイスを浮かべながらもわずかに体を強張らせる。プレッシャーには無縁なナガイでさえ、硬い静けさに居心地悪そうに微かに眉をひそめる。

その時、

「ちよつといいか?」

それまで部屋の隅で事態を静観していたウォルターが、光秋とユイのもとに歩み寄ってくる。

「今の自分の立場は充分理解しているつもりだ。人事に口を挟める立場でないこともな。その上で、敢えて口を挟みたいんだが……………」

「どうぞ?」

若干恐る恐る申し出るウォルターに、光秋は手を前に出して発言を促す。

「感謝する……………確か、ユイといったな?」

「は、はいっ」

突如交代した話し相手に、ユイは背筋を伸ばしながら応じる。

「自分がどういう道に進もうとしているのか、ちゃんと理解しているか?」

「…………一応、そのつもりです。私にとっては2回目の志願入隊ですから」

「そうか……………では、他の道に進むことも考えたか?俺もお前さんに関しては何しユウ大尉から聞いた凡そのことしか知らないが、少なくとも命拾いをしたことだけは理解している。そして、お前さんは

まだ若い。今から学校に入り直して、この時代で新しい人生を始めてもいいんじゃないか？それこそ、平和な時代だからこそ必要とされるような仕事に就けるような人生を……それはそれで大変で、今ここでこいつらと一緒に戦うことと同じくらい大切なことだと思いが？」

「……………」

ウォルターの問い掛けに、ユイはしばし逡巡する。

「……………コバックさん、でしたよね？あなたの言うことも正しと思います。むしろ、あの戦争の記憶を後世に語り継ぐことを目標に戦ってきた私には、その方が理屈に合ってるのかもしれない………それでもっ」

それまで俯き気味だった顔を上げ、ユイはウォルターの目を注視する。

「それでも私は、今、ここで戦っているみなさんの力になりたい。それもできるだけ直接的な力に。だから、私の気持ちは変わりません」

「……………そうか………わかった」

ウォルターの方もその視線と返答を受け止めると、静かに頷いて部屋の隅に戻る。

それを見届けると、光秋は改めて口を開く。

「コバックさんのお陰で、城崎さんの言いたいことはだいたいわかりました。ありがとうございます」

言いながら、部屋の隅のウォルターに一礼する。

「城崎さんも、その歳でそこまで強く自分のことを主張できるとは大した者だ。度胸も据わってるし。率直に言って、好きになれそうだよ」

「あ、ありがとうございます……………」

「いや、大尉。その言い方は……………」

「おまわりさーん、こっちはです」

真顔で言ってくる光秋にユイは戸惑いながらも応じ、そのやり取りに感じるところがあったのか、あるいは独特の緊張感にいよいよ耐えられなくなってきたのか、困り顔を浮かべるサクラに続いてカノンが明後日の方を向いて呟く。

「別に変な意味じゃないからな。我が道を行く——そういう気質の奴には好感を抱くつてことだよ。それが難しい道であればなおのこと」  
そんな少女たちに訂正を入れて、光秋は再度ユイに向き直る。

「まあとにかく……自分から志願してくれるのは、こちらとしても正直ありがたい。人手は多いに越したことはないんでね……その上で、最後にもう一度だけ訊きますが……本当に、いいんですね？連邦軍に——非特隊に入る、ということですか？」

「はいっ」

メガネのレンズ越しに目を見据え、念を押すようにゆつくりと問い掛ける光秋に、ユイは深く頷きながら明瞭な声で応じた。

「……承知しました……また机仕事が増えるなあ……」

それに対して光秋も深く頷くと、やや鬱屈そうに呟く。ただ、言葉とは裏腹にその表情はどこか嬉しそうで、同時にわずかながら後ろめたさのようなものも浮かんでいた。

もつともそんな顔をしていたのも数舜のことで、すぐに椅子から立ち上がって室内の一同を見回す。

「さてと、帰りの報告はこれで終了だ。各自解散して、食事なり休息なりとするように。明日からまた訓練の毎日だから、そのつもりで」

「了解っ」

光秋の言葉に少年少女たちは声をそろえて応じ、固まるように部屋から出ていく。

ユイもそれに続こうと椅子から立ち上がるが、すぐに光秋に呼び止められる。

「城崎さん。入隊についてだけど、明日中を目途に準備して、またこつちから連絡するから。それまでは今まで通り保護扱いで」

「わかりました。よろしくお願いしますっ」

腰を深く曲げて応じると、ユイは振り返って駆け出し、先に行く少年少女たちに追いつく。

「お疲れさん」

「どうも……」

一夏の劳いに応じながら、独自の重圧から解放された顔には一気に

疲労が浮かぶ。

「ということとは、これでユイも晴れて私たちのお仲間ってわけかっ」  
「加藤大尉じゃないけど、賑やかになるのはウチらとしても嬉しいよ。  
これからよろしくー!」

「よ、よろしくお願いします……」

何かを噛み締める様に、そしてそれ以上に嬉しそうな様子でカノン  
は呟き、それに続く形で肩に手を回してきたフィルシアに、疲労感も  
あつてかユイはたじろぎながら返す。

「フンツ。せいぜい犬死しないようにしろよ」

「ナガイさんっ!」

そう告げながら一足先に食堂へ向かうナガイの背中に、サクラが非  
難の声をかける。

「でも、なんか意外だなあ」

そんな光景を横に見ながら、恭弥は傍らを歩く一夏とユウだけに聞  
こえる大ききさの声で呟く。

「何が?」

「一夏くんがユイちゃんの入隊止めなかったこと。てつきりコバツク  
さんみたいなこと言うかと思ってさ」

「いや、まあ……確かにちよつとはそんなことも思ってたけど……」

ユウの問いに恭弥はさらに続け、それに対して一夏は未だにカノン  
とフィルシアに絡まれているユイを眺めながら応じる。

「それでも、ユイ自身が一生懸命考えて決めたことなら、俺がどうこう  
言うことでもないかなあつて。光秋さんが言つてたように人手不足  
の問題もあるし……それに、あんな真剣な目で来られたら、突き返す  
わけにもいかなかったし」

「確かに、あの時は思わず身構えたなあ」

一夏の言葉を受けて、光秋のもとへの道案内を頼まれた時を思い出  
した恭弥は深々と頷く。

「もつとも、いろいろ心配なのは今も一緒ですよ。その上で俺がユイ  
にしてあげられることといったら、あいつの思いが実現できるように  
協力してやるくらいですけどね。微力ながら」



苦笑いを浮かべながら告げると、一夏は再びユイの方へ顔を向ける。

ちょうどその時、カノンとフィルシアから脱したユイが3人のもとへ逃げるように駆け寄ってきた。

「もう、あの2人は……」

「大変だな、ユイも」

「今後はあのコンビに要注意だね」

先ほどまでとは違う意味で疲労困憊気味なユイに、ユウは軽い労いの言葉をかけ、恭弥は未だ元気があり余っている様子のカノンとフィルシアに苦笑を浮かべる。

「まあとにかく、これで正式に仲間になるんだ。よろしく頼むぜ」

「……は、はいっ。不束者ですが、よろしくお願いしますっ！」

自身諸々の不安はあれど、少なくとも今はその決意を温かく迎えようと微笑みを浮かべる一夏に、ユイは一瞬心臓を跳ね上げながら、今日一番の深い深い一礼をした。

少年少女たちが部屋から出ていくのを見届けると、それまで隅の方で一連の流れを見守っていたライカは、やや疲れを浮かべて椅子に背中を預けている光秋のもとへ歩み寄る。

「……今更かもしれませんが、よかったのでしょうか？承諾してしまっって」

「まあ、正直今でも少し迷ってはいますが……」

言いながら背筋を伸ばすと、光秋はライカに顔を向ける。

「さっきも言ったように、自分から入りたいと言ってくれるのはこちらとしてもありがたい。それに確か、三次大戦時代の軍人はみんなPDの基礎操縦技術を覚えた上で戦っていたんでしょう？前にそんな話を聞いた気がするんですが」

「ええ、まあ……当時最先端兵器だったパワードールの迅速な配備、場合によっては敵機を鹵獲してすぐに利用する為に、陣営を問わず全ての軍人はこれの基礎技術を修めた上で作戦行動に就いていたといわ

れています。それが確かなら、城崎さんも今すぐPDを『動かす』くらいはできるでしょうが……………」

歴史的なにかで聞いた雑学を思い出して応じながら、ライカは自分に向けられた光秋の目を見返す。

メガネのレンズで拡大されたその目には、ほんのわずかだが後ろめたさが浮かんでいた。

「短い訓練で即戦力として期待できるのは理解できます。他の機種に比べて相対的に性能低下が指摘されるPDも、装備を工夫し、援護に徹すれば、サポート役として十分な活躍ができるかもしれません……問題は、城崎さんを使うと決めた大尉の心境ですが……………」

自身若干言葉に詰まりながらも気になっていたことを投げかけると、光秋は目をつむり、しばし考える顔を浮かべる。

「まあねえ……………罪悪感というか、引つかかるものが何もないわけじゃないですよ。それこそその心情を無視して嫌われるようなことになっても、コバツクさんが示したような道を歩ませようとするのが大人として正解だったかもしれない」

「俺は別に、そこまでのつもりで言ったんじゃない」

半ば自分を責める口調で語る光秋に、話題に挙げられてしまったウォルターは気まずさを感じる。

「いや、そこまで強い意味で言ったんじゃないんですが……………とにかく、僕は大人としての正解よりも、さつき挙げたような彼女の即戦力性を取った。なににより、自分からやって来てくれた人を追い返せるほど、我々非特隊に人的な余裕はありませんからね。それこそ、目的達成の為なら何でも利用しようとする——そういう意味での“鬼”にならなければいけない。それが今の我々——少なくとも僕の立場ですから……………だいたい、城崎さんが志願してくれる前から、すでに訳ありとはいえ何人もの青少年を戦力として使ってるんですから、今更でしよう?」

「……………そうですね」

最後の方は自虐的な笑みを浮かべて告げる光秋に、ライカは静かに首肯を返した。

「その意味では、こちらの勝手に彼女を巻き込んだと言われても仕方ないわけだけど……そう思うのなら、こちらもいずれ、彼女の勝手に一つくらいは付き合わないとねっ」

そう告げるや、光秋は跳ねるように席を立ち、ドアへゆつくりと歩き出す。

「取り急ぎ、まずは必要書類の作成ですね。昼間からの机仕事でバテてるかもしれませんが、もうひと頑張りお願いします」

「……了解しました」

すでに気持ちを切り替えた――少なくとも迷いを心の隅に退かした様子の光秋に応じると、ライカもわだかまりを一旦忘れてそれに続く。

「大したことはできないかもしれないが、俺も手伝おう」

「ありがとうございます」

言いながらついてくるウォルターに2人同時に応じると、一行はユイを迎える準備を整えるために部屋から出ていった。

## 23 笑う黒い鬼姫、嗤う神官

とある屋敷の、庭の片隅。

「……………」

早朝、まだ辺りに朝靄が残るこの場所に人影が佇んでいる。

薄い青色の髪に変わったメカが着いた民族衣装を纏った少年が、限界まで引き絞った矢を的目掛けて撃つ。

風切り音を鳴らした矢は吸い込まれるように的である巨岩に穿たれ、次の瞬間粉々に砕いた。

フウッと息をつき、次の矢をつがえた時、

「アレン！朝ごはんできたで〜!!」

「え？もうそんな時間なの！」

自分を呼ぶ声に、慌てて弓の握り手部分を強く握りしめる。するとガチャガチャと音を立てみるみるうちに一枚のカードになったそれを腰のカードホルダーへ入れ、少年——アレン・ニーティは大阪弁のような口調で自分を呼ぶ少女の元へ駆けていった。

「……………【王都】へ戻るつてずいぶん急なんですネアンジユ様」

会話を交えながら、アレンは用意された朝食を口に運んでいく。

テーブルを挟んで向かい合うのは先ほどの声の主——白い長髪が特徴の女性、アンジユ・オーガスティア。なにか不満を抱えているのか、その表情は朝から優れない。

「うむ、おそらく件の星……………【テラン】で4年前に置かれた我らの拠点  
が20も破壊されたのに関する鬼神きしんしょう将会議だろう。幸い無人での派遣  
だったから人的被害はゼロや……………それよりもや」

「う、うわあ?」

「二人っきりの時は我に『様』をつけるな!アレン・ニーティ・オーガ  
スティア!!」

朝食を食べ終えてひと息ついた頃を見計らって、アンジユはアレンを強引にベッドへ押し倒し、耳元でそっと呟く。

もつとも、アレンとしては様づけで呼ばなければ他の鬼神将たちに示しがつかないという思いもあり、どうにか言い返しを試みる。

「で、でも……アンジュ様——」

「……ア・ン・ジ・ユ・ヤム」

しかしその言葉もすぐに遮られ、間近に迫ったアンジュの体から体温と呼吸が伝わってくる。白く長い髪から漂う甘い香でふわふわした感に捕らわれ、強く抱き締められながら眩かれては、アレンはもう諦めるしかない。

「う、アンジュ……」

そんな気持ちを表すように眩き、顔を上げると、頬を赤くしたアンジュの笑顔があった。

その表情でアレンを抱き締めてからしばし、ようやくアンジュは体を離す。

「くくアレン分補給完了や。これであの辛気くさい鬼神将会議に耐えられるわ」

「そんなに辛気臭いんですか鬼神将会議って」

「当たり前前だ！毎回毎回軍備増強だの世継ぎは誰にするかに無駄な時間を消費するしかない会議など行く気もないわ！」

「ご、ごめんなさい……でもこの4年間会議に出なかったのは僕の怪我を診てたからですよね」

ベッドに腰掛けてそう呟くアレンの肌には、いくつかの切り傷や火傷の痕が薄っすらと浮かんでおり、それを見てアンジュの顔が一瞬曇る。

「き、気にするでないアレン！それに……我は……」

『アンジュ・オーガスティア様、鬼神将会議の時間が迫っています』

「……わかった。すまんアレン我はこれからいかんとならん……」

言いながら通信用のウィンドウを閉じると、アンジュはベッドから立ち上がってクローゼットを開き、取り出した服に着替えてその上に黒を基調とした甲冑を纏う。

最後に白地に黒い6枚の翼が描かれたマントを羽織って翻すと、先ほどまでであった少女の面影は消え、将としての顔を浮かべて転移ゲ

トへと向かう。

が、すぐに立ち止まって振り返る。

「アレン、帰ってきたら我に久しぶりにあの美味しいのを作ってくれ」  
「魚介たっぷり鍋用意して待ってるよアンジユ」

「あ、ああ!!では行ってくる……アレン」

笑顔でそう告げると、アンジユは目が眩むほどの光に呑み込まれる。

それが【王都】へ向かう光景だと理解しているアレンは、特に表情を変えることなくアンジユを見送り、光が消えたのを見てから部屋の片づけを始める。

「アンジユ様と暮らすようになって4年経つんだね……」

誰に言うでもなく眩くと、掃除機をオートで作動させ、アンジユ・オーガスティアと出会った日を思い出した。

(ん?こ……こ……は?)

(目が覚めたか?)

記憶が混濁し、不思議な液体に包まれた自分の眼前に、白く長い髪の毛の子が心配そうにポットの半透明の隔壁に手を当てて問いかけてきた。

(あなたは?)

(……我はアンジユ・オーガスティア……お前の名はなんだ?)

(僕の……名前……僕は……ウツ!)

名前を思い出そうとした瞬間、何か断片的に思い浮かぶ。

眩い光、誰かに覆い被されて視界が真っ暗になる、何か焼ける匂い、血の匂い、黒く焦げた車、そして……ソシテアー。

(ウウーウウアアアア……!!?)

(ど、どうしたのだ!御典医殿早く来るんや!!)

激しい頭痛に苦しみながらも、その奥からオーガスティアの声が聞こえた。

それを最後に意識を手放し、次に目が覚めると病室と思しき部屋の

ベッドに寝かされていた。

起き上がろうとして違和感に気づき、手を見ると、

(~~~~~)

白く長い髪の子が、自分の手を握りながら眠っているのが見えた。

何故と思ったその時、少女はゆっくりと顔を上げ、しばらくぼーっとしていた目がみるみるうちに驚きに変わり、いきなり大粒の涙を流して泣き出した。

(よかった、よかったわ。もし目え覚まさんかったら我は、我は……あの者たちとの約束を……)

最後の方は嗚咽に紛れてよく聞き取れなかったものの、泣きじやくるオーガスティアを見て胸の奥で何かが痛んだ。

(あの、オーガスティア……さん？泣かないで)

(な、なんだ……我は泣いてなどな——え？な、何を!?)

(僕なら大丈夫だから……ね?)

(バカ者、傷はまだ癒えておらんのか……)

なぜかわからないが、オーガスティアが涙を流すのを見るとすごく心が痛んだ。だから、傷が痛むのも関わらず、優しく抱き締めていた。

昔自分が泣くと、誰かがこうして泣き止むまで抱いてくれていた気がする。だからこうしたのである。

しばらくしてオーガスティアは泣き止んだ。しかし、もう一つの問題があった。

(記憶喪失?)

(おそらく心のどこかで思い出さないようにしているか、あるいは脳に重大な損傷を受けたかによるものかと。後者の方は検査結果から無いと判断します。外見からして9〜10歳前後で、体力は信じられませんが我らに近いものを計測しました)

診断結果をオウム返しするオーガスティアに、医者らしき者は事務的に応じていく。

(そうなんか……なら我がこの子の——アレン・ニーティの身元引き受け人になろう)

(あの、アレン・ニーティって?)

自分が尋ねると、オーガスティアは少し顔を赤くしてそっぽを向きながら答える。

(ね、寝言で、『にいてい……あ……れん……』って呟いておったからつけた名や……だから今日から『アレン・ニーティ』。我の名をつけて『アレン・ニーティ・オーガスティア』や!)

(アレン……ニーティ……でも何でオーガスティアさんの名前があるんで——グハ!)

(わ、我からそのようなことを聞くでない!……お前に姓を与えたのは、わ、私の伴侶になるのだからな……)

ボディに重い拳が決まり、あまりの痛みに自分——アレンの意識は一気に遠退く。気絶する寸前、オーガスティアが顔を赤くしながら何ごとか呟いたが、あまりの小声に消え入る意識では聞き取れなかった。

「……………記憶がない僕の身元を引き取ってくれて、自分の姓を与えてくれたアンジュ様には返しきれないほどの事をしてもらった。僕はアンジュ様にいつか恩返ししなきゃいけない……」

記憶の旅から戻ってきてそう呟くと、アレンは台所に立ち、鍋の用意を始めた。

同じ頃、王都にある鬼神将執務室では。

「なんなんやあの決議は!——しろやと!!」

先ほどまで開かれていた鬼神将会議の結果に、アンジュが声を荒げて立腹していた。

「お、落ち着きなよアンジュ」

「そうですよ、何もすべて——しろって意味じゃないです。私たちと



「……………の状況は刻一刻と悪化してるのですよ？」

それを鎮めるのは、水色の長い髪が特徴の少女——ライカ・ヴァツサー・フェルデと、金色の長い髪が特徴の少女——セイジュ・ゴザ・ガベイラスツルヌ。どちらもアンジュの親友であり、付き合いの長い幼なじみである。

「わかつとる……………でもあのやり方は『アイツら』と同じや!!」

もつとも、アンジュの怒りは簡単には収まらず、ダンツと机を叩いて怒気を発散している。

その様子からライカとセイジュは、先ほど出た決議が余程気に食わないものだったことを察する。

「でもさ、あの白い巨神……………ムモムモツアローがボクたちの拠点でガ・ロズ、ガ・ナー、ガ・オを叩き潰す姿を見たら仕方ないよアンジュ」  
「あの白い巨神は私達の星『オルガス』に伝わるムモムモツアロー、キインツアロー、ウルスムツアロー、スーシイジュウ、オーディアスの内一体と酷似しています」

それでもどうにか落ち着かせようとライカが声をかける傍ら、セイジュは手元の球体を操作して空中に映像を映し出す。そこにはモモタロウが鬼の機動兵器群を蹴り、碎き、殴り潰し、切り裂く光景が映っており、鬼たちの装甲やオイルが撒き散らされる度に、3人は体を震わせた。

「……………ですがまだ一体しか目覚めてない今の内に倒せば……………例の軍勢の件もありますし」

「!・それやつ!」

セイジュの呟きに、アンジュは我が意を得たとばかりに声を上げる。

ちやうど映像にもちらほら映り出した、どこからともなく現れては鬼に助力する謎の機動兵器群。コレらの正体と真意を確かめるべきというのも今回の議題に挙がっていたのだ。

そしてアンジュにとって、コレらは厚意的に映っていた。

「なら我が行く。今から第二次テラン派遣軍へ参加申請を出してくる!そしてこの義勇の軍勢と正式に手を組み、あの白い巨神を倒してく

る!!」

言うやアンジュは席を立ち、そのまま部屋から出ていく。それを見送りながら、ライカとセイジュは溜め息をついた。

「ねえねえ、アンジュったら何でテランへ肩入れするのかな？それもわけわかんない連中当てにしてまで。やっぱり4年前の『テラン人調査作戦』の時、命令違反して連れてきたテラン人の子……」

「ライカ、あまりここでソレをしゃべったらいけません……この4年間、会議への招集を拒否し続けたせいでアンジュの立場は危ういんですよ?」

「あ、そうだった……それからだよ。アンジュが丸くなったのってさ」

「……そうですね。『黒翼の殲滅姫』『漆黒の恐怖』アンジュ・オーガスティアの心を変えさせたテラン人の少年……会ってみたいですね」

「そうだね」

互いに笑みを浮かべて語り合うと、しばらくしてライカとセイジュもアンジュの執務室を後にした。

「ただいまや」

「あ、お帰りアンジュさ……アンジュ……今日はとびつきりいいお魚が手に入ったから刺身もあるよ」

「刺身！食べる!!刺身は私の大好物なんや!!」

帰宅するや迎えてくれたアレンに応じると、アンジュは着ていた服を素早く脱いで私服に着替え、アレンと共に食卓に着く。

「いただきます!」

2人で手を合わせるや箸をとり、鍋のふたを開ける。いい匂いが鼻をくすぐり食欲を掻き立てる中、碗に具を入れて冷ましながら口へ運ぶ。

具から染み出た味がすうつと口に染み渡り喉を通る。

(はあ、この鍋はいつ食べても美味しい……)

4年前に意識を取り戻したはいいが記憶喪失となったアレンが唯

一思い出したのは、この鍋料理と弓術だけだった。元来偏食気味だったアンジュを見かねてさまざまな工夫がしてあるのだろう。食べる度に幸せな気分になる。

初めてこんな温かい食事を食べた時、思わず涙を流してしまったアンジュを、アレンは慌てて慰めてくれた。以来家族のいないアンジュにとつて、そんなアレンの暖かさは大事なものになっていった。

だからこそ、アレンが記憶を取り戻すことを心のどこかで常に恐れている。

(そうだったら今の生活は砕け、アレンは我に……………)

「どうしたんですアンジュ？ 今日のご飯美味しくなかったですか？」

「い、いや美味しいぞ！ いつもより数倍美味しいぞ!!」

知らぬ間に不安が顔に出ていたらしい。アンジュは誤魔化すように箸を乱舞させて具を口に運ぶ。そんなアンジュをじーっと見ていたアレンも少しして食事を再開し、やがて鍋を完食すると、後は風呂に入るだけになる。

「アレンく、先にお風呂入ってきいやく」

「はくい…………でも前みたいいきなり入って来ないでね」

「そ、そんなこと我がするわけないやろ！」

「…………絶対に入ってこないでよ…………」

念押しして浴場へ向かうアレンを見送ってしばし、アンジュは「アレ」に着替えると、予め仕掛けておいた転送式を起動させる。

(さてアレン、今日こそ我が隅から隅まで…………フッフッフ…………アハハハハハハハ!!)

「ウーなんかやな予感が…………まさかね」

得体の知れない悪寒を感じたのも一瞬、広すぎる湯舟に体を浸けながら、アレンは薄っすらと浮かんだ火傷や切り傷の痕を眺める。

意識が戻ってからの4年間、オーガステイアは自分と一緒に暮らしながら、リハビリにずっと付き合ってくれた。

もつとも、風呂の時間だけは嫌なものだった。はじめの頃は体があ

まり動かなかったので仕方なかったのだが、『あそこ』まで洗おうとするので必死に抵抗したのは今でも覚えている。

(あの時のオーガスティアさんの目は、翡翠色の瞳を爛々と輝かせていたからスゴく怖かったなあ……)

などと考えた刹那、背後に気配を感じ、振り返ったその時、

「フッフッフゝかまくえた♪」

光と共に面積が少ない水縞柄の紐水着を着たアンジュが突如現れ、満面の笑顔で抱きついてきた。

「ア、アンジュさんツ!? は、はなしてください? 当たってますから!」  
「何が当たってんや?」

「そ、その……む、む、」

——胸が当たってる、と言おうとするものの、先が言えない。言おうとするとさらに頭を胸に押し付けられて挟まれる。

「なあアレン、あの日アレンが目え覚ました日に泣いた我を抱き締めてくれたやろ……我ら『オルガス』の女にとって男からされるアレはな……『婚姻』を意味するんや」

「ふぐー!ふぐううう!」

くぐもった声で言いながら未だに暴れもがくアレンを、アンジュは再び抱きしめて呟く。

「つ、つまりや……アレンと我は……もう夫婦になつとるわけや……やからな……その……アレン?」

「キュウウウウウ」

そこで違和感に気づいて腕の中を見ると、アレンが鼻から滝のように血を流して朦朧としていた。

そんな様子にアンジュは、以前にもこんなふう<sup>に</sup>風呂に乱入して鼻血を出させてしまったことを思い出して苦笑いを浮かべながら、そつとアレンを抱き上げる。

4年前は筋肉のあまりなかった体が、今はがっしりとしている。あの頃は自分が肩を貸さなければキッチンに立てなかったのが、今では一人でしっかりと立って主夫をこなしながら、弓の練習にも精を出している姿を見て、アンジュは胸が熱くなる日々を過ごした。

4年ぶりにアレンを寝間着に着替えさせ、寝室に運んで寝かせる  
と、アンジュはその隣にスルツともぐりこんでアレンの頭を自分の胸  
に乗せた。

そうして暖かい温もりと心地よい鼓動を感じながらいつの間にか  
眠ったアンジュは、久しぶりに『あの日』の夢を見た。

そして次の日の朝、目を覚ますと横で寝ているアレンが鼻血を出し  
て気絶していた。

「…………この分やとアレンにいつあげれるかわからんやないか。まあ気  
長にまつか…………私の愛しき夫よ」

そう呟き、頬へ軽くキスすると、アンジュは再び眠りについた。

荒野の只中で、鋼鉄の巨人2体が剣による斬り合いを演じている。  
崩れかけたビルが乱立する市街地で、物陰から放たれた銃撃に巨人  
が蜂の巣にされる。

晴天の空の中を、撃ち合いを繰り返す巨人たちの一団が縦横無尽  
に舞う。

それら——現在地球上の各地で行われている戦闘の様子を映し出  
す水晶玉を眺めながら、グリムは頬杖をついて思案にふけていた。  
「……………さて、そろそろ動く頃かな」

大陸と思しき荒野を背景に、ホバークラフトを備えた下半身が特徴  
のHMMA S——紛争抑止委員会の主力機・ロトスの一団が次々と撃  
破されていく光景が水晶玉に映し出される。

それを眺めながら不意に呟くと、グリムはここ最近の定位置たる円  
卓から立ち上がり、なにか楽しいことが待ち構えているような微笑み  
を浮かべてこの場を後にした。

スラムで白い新型PDとの交戦が行われた数日後。

「ユリンか。もう立ち歩いて大丈夫なのか？」

「大丈夫…………」

DC 残党拠点の廊下で、ジークとユリンが鉢合わせた。

ユリンは今、頭などところどころに包帯を巻いて点滴を受けているが、それでも立ち歩いてても大丈夫なくらいには回復していた。

「特に理由がないなら寝ておけよ。後に響いたら困る」

「じゃあ、相談に乗ってくれる……？」

「お、おう。分かった」

「じゃあ部屋で話そう……」

唐突な誘いにジークが頷くと、2人はユリンの部屋へと向かっていった。

「で、相談って何だ？」

あの後ユリンの部屋で、ユリンはベッドに横たわり、ジークは近くの椅子に座っていた。

「アンタレスに……空間を捻じ曲げたりとか……そんな機能はあったっけ……」

「いやいや、あるわけねえだろ……あつたら強過ぎるだろ」

ユリンのあり得ないような質問に、ジークは完全否定を示す。いかにEOTによって科学技術が飛躍的に向上し、数年前までの空想が次々と現実になっている現在であっても、5メートルにも満たない旧式機動兵器にそんな大規模な機能を搭載するなどやはり無理があるだろう。だからユリンにとっても、ジークの返答は当然といえた。

「……希望的観測で言ったけどやっぱりないか……」

「あれのことか？あの戦いの」

「うん……アンタレス以外であの力の出処があるとしたら……私の身体しかない……もしそうだとしたら……私は人間なのかな……」

そう、ユリンは不安そうにジークに問いかけた。

「人間じゃないのか？仮にどんな力があろうと、お前は悲しい事があれば涙も流すし、傷付けば血も流れる。それに、そんな事を不安に思う気持ちがあるならそれは人間なんじゃないか？」

「ありがと……ちよつと気が楽になったよ……」

ユリンはうつすらと微笑みながら、ジークに言った。

「……手、握って欲しい……寝付くまでお願い……」

「ど、どうしたんだ？」

「……私だってたまには甘えなくなるの……おかしい……？」

「いや、おかしくない……」

ユリンの頼みを聞くと、ジークはそう答えてそっとその手を握った。

「ありがと……」

そう呟くと、ユリンはそっと目を閉じた。

(……結局はただの女の子ってことか……あの戦いのせいで自分が怖くなったのかもな……)

そう考えながら、ジークはユリンの頭を優しく撫でた。そうこうしているうちに、ユリンは深い眠りについいていた。そして、

「これは……日記か？」

ジークは、ベッドの横に置いてあった日記帳を見つけ、少し開いて目を通した。

「……まったく……まるで書いてないじゃねえか……まあ仕方ないか……」

それを見て少し笑うと、ジークは日記帳を元に戻して部屋を後にした。

紛争抑止委員会のEOT採掘基地強襲、および時空崩壊から現れた謎の特機と連邦軍との交戦によって、死神の乗機——HMMAS・タナトスは外から見てもわかるほどの多大な損傷を負うこととなった。

必然、所属する輸送機・ホーネットに帰還後は連日に渡る整備が行われたものの、修理主任のラドリーが当初1ヶ月と診立てた通り、未だ全快には程遠い状態だった。

ホーネットの乗員たちが時空崩壊に遭遇したのは、まさにそんな時だった。

雲一つない青空に空いた赤い穴からは無数の岩が降り注ぎ、ちよう

どその下を飛行していたホーネットはまともに呑み込まれてしまう。  
「総員、何かにつかまってください！落下物の回避に揺れ——っ!!」  
「このッ！次から次へと……!!」

落ちてくる岩を避けようと機体が激しく揺れる中、オペレーターのミシエルは座席にしがみつくようにして機内への注意を促し、それでも機体を掠っていく岩々に機長のジャスミン・ジャスコビッツは苛立った声を漏らす。

そして、

「！やっちゃまった！左翼のエンジンが停止、高度を維持できない！」  
ジャスミンが言う間にも、ホーネットは機首を少しずつ下へ傾け、高度が徐々に下がっていく。

「2時の方向に開けた土地があります。あそこなら」

「よし、軟着陸する。機内放送頼む」

ミシエルの示した方向へ操縦桿を向けると、ジャスミンはどうか機体を安定させ、少しずつ減速しながら地上へ近づいていく。

そして、

「着陸します。総員衝撃に備えて！」

ミシエルが機内へ呼びかけた直後、これまで以上の激震がホーネットを襲い、ミシエルやジャスミンをはじめ、機内にいる全員がその場に留まるだけで精一杯になる。

そして、軟着陸から1分後。

「……………どうにか、生きてるみたいだな……………」

「ええ……………時空崩壊も収まりつつあるようです……………各ブロック、被害状況を報告してください」

自分が生きていることにジャスミンが安堵の息を漏らす傍ら、降ってくる岩の量が減りつつあることを確認したミシエルは、すぐに機内各所へ呼びかける。

しかし一瞬後、機内に再び緊張が走る。

「！レーダーに感あり。時空崩壊からまだ何か来ますっ」

手元のモニターを見てミシエルが告げたその時、徐々に塞がりつつあった穴から3つの影が吐き出される。



「アレは……………機動兵器か…………？」

「そうみたいです。一応人型ですし…………でも、あんな型の機体なんてありません。……？」

その様子を眺めていたジャスミンとミシエルが顔を見合わせる間にも、時空崩壊から現れた影たちはそれぞれ推進器を噴かし、勢いを殺ぎながら太陽が照りつける荒野に着地していった。

前後不覚に陥りそうな激痛の後、不意に感じた浮遊感に、レイゼン・ハウゼンは脊髄反射で足元のペダルを踏みしめた。

それに合わせてレイゼンが乗り込んでいる20メートル級の人型機動兵器——全体的に紫を基調とした重厚な体躯と、末広がりの脚部、十字型のモノアイ軌道を備えた頭部が特徴のモビルスーツ・ドム・トローペンの背部と足裏の推進器が勢いよく噴射し、落下の加速を殺ぎつつ殺風景な荒野の只中に無事着地する。

「……は……………」

鈍痛の治まらない頭に手を添えつつモニター越しに周囲を見回すと、すぐ近くに見慣れた2種類のモビルスーツを見付ける。左肩に逆L字状のシールド、左肩に棘の付いたアーマーを装備した緑を基調とした機体——ザクⅡJ型と、全体的に同じ意趣を備えながらも両肩に棘付きアーマーを備えた青を基調とした機体——グフ・カスタムだ。瞬間、レイゼンは2機に通信を繋ぐ。

「アウラ、グレックリー、聞こえるか？無事か!？」

『…………ああ。よく聞こえるぜ。無事かどうかは微妙だけどな…………』

『こつちも同じく。頭痛い……………』

数秒の沈黙の後、若干の苦悶を含んだ男と女の声スピーカーから返ってくる。男の方はグフ・カスタムのパイロット——グレックリー・ベン、女の方はザクのパイロット——アウラ・ドレインバーグ。どちらもレイゼンのパイロット仲間だ。

『にしても、ここは何処だ？アイアン・ファーストの近く…………じゃないよな…………？』

「ああ。あそこも周囲は荒野だが、こんな景色は知らないぞ」

グフ・カスタムの頭部をキョロキョロさせながら呟くグレッツクリーに、レイゼンは今の故郷とその周辺の記憶を思い出しながら首肯を返す。

「それに……………ウォルター大尉の姿も見えない……………」

加えて自分も含め、ここに居る全員にとって欠かせない人物の不在に、年甲斐もなく不安を覚える。

と、

『ね、アレ何?』

「?」

言いながらアウラのザクが前方を指さし、それを目で追ったレイゼンは、遠くに1つの影を捉える。

「……………飛行機……………輸送機か?墜落したのか……………」

望遠映像に映し出された形から推測を呟いていると、影からまたべつの小振りな影が現れた。

「……………あの一目たち、どう見てもこっちに注目してるよな……………」

「ええ……………」

窓越しに前方数キロ先に佇む機動兵器たちを見据えながら呟くジャスミンに、ミシエルも不安と緊張を浮かべた顔で頷く。

「先日の特機の件もありますし、時空崩壊から出てきた機動兵器には一層の警戒が必要でしょう。可能なら関わるべきではない。しかし逃げようにも、エンジンを修理しないことにはそれも叶わない。少なくとも、今すぐホーネットで移動することはできない……………」

各所から挙がってきた報告を踏まえつつ、ミシエルは現状を整理するが、言葉を重ねるごとに顔色は悪くなっていく。

「となると、あとは……………」

その思考は、現状のホーネットがとれる唯一の、そしてミシエルにとって是最悪の選択肢を導くことになる。

(でも、このままではホーネットのみんなが……………)

そう思ったのも数瞬のことで、通信を格納庫に繋ぐと、重い口を動かして今告げるべきことを告げる。

「ブリッジより格納庫へ……………タナトスの出撃準備をお願いします」

出し抜けに流れた指示を聞くや、ラドリーは目を鋭くして近くの備え付けの通信機に駆け寄っていた。

「おい、ミシエル！今ので頭でもぶつけたんじゃないのか!?進捗状況はちゃんと報告しているだろう。まだタナトスは出せる状態じゃない！」

『承知しています』

自身の吹き込んだ怒鳴り声に、ミシエルの苦悶を含んだ声が返ってくる。

『しかし相手の出方がわからない以上、こちらは何らかの示威行為をしなければなりません。その上で私が様子を窺うので、みなさんはその間に左翼のエンジンを修理してください』

「……………」

その思惑を告げられて、ラドリーは言葉に詰まってしまう。

「……………わかった」

それでもどうにか返答の言葉を絞り出すと、格納庫全体に向けて呼びかける。

「タナトス出撃！それと同時に整備員は全て左翼エンジンの修理に向かう。準備にかかれっ！」

整備主任の号令に、格納庫のあちこちから工具や予備の部品を取りそろえる音が響き出した。

飛び込むようにタナトスのコクピットに収まった死神は、慣れた手つきで素早く機体を起動させる。

次々とモニターが点つていく中、明るくなり始めたコクピットにミシエルの声が響く。

『作戦内容を説明します』

出撃前の聞き慣れた言葉だが、今日のそれは今まで聞いた中で一番苦悶に満ちていた。

『現在ホーネットは墜落中。正面に時空崩壊から現れた未確認機3機が展開しています』

言葉に合わせてモニターの1つにホーネットを示す黒い大きな点と、その上に未確認機を示す赤い点が3つ表示される。

『タナトスは後部ハッチから出撃後、ホーネットと未確認機の間に移動。私対話を試みるので、3機に対して威嚇をお願いします。今回の目的は、左翼エンジンが直るまでの時間稼ぎです。機体の方も万全には程遠い状態です。万が一向こうが戦闘の意思を見せた場合はやむを得ませんが、くれぐれも無茶はしないでくださいね』

機体稼働音が耳に響く。それは言うなれば、レース前のアイドリング。しかし今回のそれは、いつもに比べてずっと弱々しく、機体の不調を端的に物語っていた。

『作戦開始！タナトス、出撃してください！』

それでも、死神は行かねばならない。弱い者は喰われる、それが大陸の摂理であり、抗うには行動するしかないから。

ブースターの助力を得られない重装甲機が、自らの体を引きずるように日の下にその姿を見せた。

輸送機らしきのもから現れた影——全長10メートルほどの黒い人型が自分たちと輸送機の間に住むと、拡声された女の声が響き渡る。

『正面の機動兵器3機、聞こえますか？こちらは傭兵団ホーネット。私はオペレーターのみシエル・レイクです。そちらの所属と名前を教えてください』

「女の声……？それに、傭兵だと？」

状況がまるでわからない中、出し抜けに与えられた情報に困惑しつつも、レイゼンはアウラ機とグレックリー機に目配せする。

『すぐにやり合おうって感じじゃなさそうだな。どうする？こっちも名乗っとくか』

「……そう思わせて、こっちの油断を誘ってるのかもしれないぞ？あの小さいモバイルスーツみたいなの、見た目以上に厄介そうな気がする」

人柄通りの呑気さで提案するグレックリーに対し、レイゼンは慎重な面持ちで黒い人型を見据える。実際指摘したように、ソレが装備する右手のバズーカと左手のガトリングガンは、倍近い体軀を誇るモバイルスーツにとつても脅威と感じられた。

「……アウラはどう思う？」

その上で、アウラに話を振る。

『……少なくとも敵意は感じない……かな？私たちだって状況がわからないんだ。相手が一応の話し合いを求めてきたんなら、応じてみるのもいいんじゃない？』

「………一理あるな」

状況がわからないという指摘も含め、実質賛成2票に素直に頷くと、レイゼンは自機を1歩前進させる。

「なら、コンタクトは俺がとる。この中で一番頑丈なのは俺のドムだからな。2人はもしもに備えて待機を」

『了解。一つ頼むわ』

『気をつけて……』

グレックリーとアウラの声を聞くと、レイゼンはペダルを深く踏み、円錐状の脚部に内蔵された熱核ジェットエンジンが唸りを上げて機体を地面から数センチ浮かび上がらせる。

枯れた大地を氷の上を滑るように数キロ進むと機体を止め、モニター越しに輸送機——ホーネットを見据え、いの一番の懸案を拡声器に告げる。

「ホーネットとやら。こちらはアイアン・ファイトの用心棒、レイゼン・ハウゼンだ。こちらからも確認するが、貴官等は地球連邦軍の関

係者か？」

『……地球連邦軍をご存知なのですか？時空崩壊から出てきたというのに？』

「……ジクウホウカイ……？」

予想外の展開に困惑しているような相手の反応と、その直後に出てきた聞き慣れない単語に、こちらまで動揺しそうになる。

ホーネットの付近に轟音と共に砂煙が上がったのは、その時だった。

『「!？」』』

アイアン・フィスト一行をはじめ、ホーネットのクルーたちも出し抜きの攻撃的な音に驚愕する中、レイゼンはドムの頭部で周囲を走査し、荒野の中に小さな影をいくつか捉える。

望遠映像に映し出されたのは、地面から数十メートルほどの所に滞空する両肩に筒状のものを備えた細見の機体と、その左右に浮かぶ航空機に手足が生えたような機体が2機、それらの下に鎮座する二脚式の砲台が1つだった。

察するに、今のは砲台による砲撃だったのだろう。

その間にも砲台は向きを変え、動く気配のないホーネットへ狙いを定める。

直後にタナトスのバズーカが足元に撃ち込まれ、放たれた砲弾はホーネットの機首すれすれを掠っていった。

「……狙われている……のか……?」

唐突な事態の連続に処理が追い付かず、レイゼンはいよいよ頭を抱えた。

2度にわたる砲撃未遂に見舞われたホーネットの機内では、ただでさえ未知の相手とのコンタクトというデリケートな役目を担っていたミシエルが、いよいよその忍耐力を超えて頭を抱えていた。

「このタイミングでどうして……相手はAMが4機……DCの残党でしようか？」

「機体だけ見ればね。でも何でDCが私たちを狙うんだ？大陸遠征隊との決戦では協力してやったじゃないか！」

誰に言うでもない愚痴を溢しながらも状況確認を行うミシエルに、ジャスミンは不義理への怒りを露わにする。

「所詮、私たちは傭兵ですからね。状況が変わればかつての雇い主と対立するのも普通のことです。それと、噂で聞いたことがあります。連邦軍の攻撃で大陸の本部を失ったDCは、その大部分が投降することなく大陸外へ脱出したそうですが、一部はそれに間に合わず大陸に取り残された。そして、大陸内で独自に残党狩りを行っている白虎帝国から逃れるため、それ以外の勢力に必死に取り入ろうとしている」と

「ああ、確かに。白虎帝国の反DC感情は凄まじいからな……」

言われてジャスミンは、以前立ち寄った集落で見かけた住人たちのDCに対する強い反感を思い出す。自分たちが「国土」と主張する大陸に勝手に本部を設け、強大な軍事力を背景に反抗分子を黙らせていたDCは、独自の国を興そうとしている白虎帝国の人々にとって憎き侵略者以外の何者でもなかったのだ。

「……なるほど。その為の実績作りってことじゃ、確かにウチの死神は狙い甲斐があるだろうね」

「ただでさえ戦闘に耐えられるコンデイションじゃないっていうのに……ラドリー。修理の方はどうですか？」

苦々しい顔で頷くジャスミンの横で、ミシエルは焦りの声で通信機に問いかける。

『目途はついたが、どんなに急いでもあと3分はかかるぞ』  
「っ……………」

返ってきた無慈悲な返答に、いよいよどうしていいかわからなくなつたミシエルは血が出る勢いで唇を噛み締める。

その間にも、遠くから様子を窺っていたガリーオンと2機のリオンが急速に距離を詰め、3機の後ろに陣取った二脚式砲台——バレリオンの砲口の角度が再び調整される。

刹那、バレリオンの付近に砲弾が撃ち込まれ、直後に放たれた砲撃

の狙いが再度逸れる。

「!?」

タナトスとは違う方向から放たれた攻撃を目で辿ったミシエルは、その先に機動兵器サイズの大振りなバズーカを構えた青い機体を捉える。

と、先ほどレイゼンと名乗った男の拡声が聞こえてくる。

『ホーネット、聞こえるか？我々はこれより貴官らを援護する』

そう告げる間にも、乗機たる重量機に持たせたマシンガン撃つて迫っていたガーリオンたちを牽制している。

「援護……ですか？」

ファースト・コンタクトも曖昧なまま終わってからの一方的な申し出に、ミシエルは思わず目を丸くする。

『状況からして、あのモビルスーツモドキはお前たちにとって敵なんだろう。なら、俺たちはその迎撃に協力する。代わりに、そちらは“ここ”に関する情報の提供と、安全圏までの空輸をお願いしたい。俺たちとて、こんな訳のわからない場所で終わるわけにはいかないんだっ』

半ば自分に言い聞かせるように告げた直後、リオンの1機がレールガンで反撃し、脚部のホバーを唸らせたレイゼン機はそれをギリギリでかわす。

その横では緑の機体がマシンガンを掃射してもう1機のリオンとガーリオンを牽制し、青い機体がバズーカを撃ち込んでいる。もつとも、空を自在に飛び回るAMにはそうそう当たるものではなく、それでも青い機体は諦めずにバズーカを撃ち続ける。

「……………」

一連の光景に、ミシエルはレイゼンの言葉が——それ以上に、彼らの『ここで終われない』という意志が本物であると理解し、しばしの逡巡の後、マイクを近づけた口を開く。

「了解しました。では、全機通信をオープン・チャンネルに合わせてください。以後のやり取りはそちらで行います」

言つてすぐ、今度はバレリオンへの砲撃妨害を続けるタナトスを見



やる。

「ホーネットよりタナトスへ。これより彼ら——アイアン・フィストとの共同戦線を展開、襲撃者を迎撃します」

ミシエルの指示通りに通信をオープン・チャンネルに合わせたレイゼンは、直後に黒い小型機——タナトスへの共闘報告を耳にする。

(これでこちらの意志はまとまった。後はどう乗り切るかだが……)

その間にも乗機たるドム・トローペンを縦横に走らせてリオンから放たれるレールガンを回避し、現状唯一の手持ち火器であるMMP—80マシンガンを撃ち返す。

が、予備弾倉も満足にない中、ろくな手傷も負わせられずに少しずつ弾を消費していくことに、内心焦りを感じていた。

そんな時、

『だあー！焦れってえ！』

通信からグレックリーの叫びが聞こえたかと思うと、次の瞬間には乗機のグフ・カスタムが持っていたジャイアント・バズを放り捨て、もう1機のリオン目掛けて飛び立った。

背部と脚部の推進器から勢いよく炎を噴き上げて上昇するものの、リオンもさらに高度を上げ、結局両機の間合いは多少縮まった程度で終わる。それでもと言わんばかりにグレックリー機は右腕をリオンに伸ばし、直後にその手首からワイヤーが射出される。

その先端がリオンの左脚部に接触した刹那、

『喰らえッ！』

グレックリーの叫びと共にワイヤーを伝って高圧電流が流し込まれ、機能を停止したりオンは木の葉のように地上に落下し、乾いた大地に墜落して四散する。

(ようやく1機か——！)

リオンの残骸を一見したのも束の間、鳴り響いた警報にレイゼンは咄嗟に右に回避し、すぐ横をバ<sup>二</sup>レ<sup>一</sup>リオンから放たれた大口徑弾が掠つていく。

直後に警報が鳴り響き、見上げると細身の機体ガーリオンがそれまで腰に提げていた銃器型の装備をこちらに向けていた。

(間に合わんっ！)

直感に舌打ちした刹那、別の方向から飛んできた大口径弾にガーリオンは慌てて回避運動をとり、その間に距離をとったレイゼンは上空にバズーカを向けるタナトスを捉える。

「すまない。助かった」

『いえ。いつもなら今のタイミングで命中させるところなのですが……』

レイゼンの感謝に、ミシエルの悔しそうな声が応じる。

その言葉を受けてタナトスに目を凝らしたレイゼンは、身を引き摺るようにノロノロと移動する黒い重装甲機を認める。

(あのタナトスとやら、本調子じゃないのか。運動性に問題が………ならっ！)

思うや、ペダルを深く踏み込む。

「グレックリー！アウラでもいい。使えっ！」

叫びながらマシンガンを手放すと同時に、ホバー走行で一気にタナトスのもとへ近づき、その身を背中から抱きかかえる。

「足は俺が務める。攻撃に集中しろ！」

通信機に叫びつつ、早速タナトスを抱えた体勢でガーリオンのマシンキャノンの掃射を回避する。

同時にタナトスもバズーカを撃ち、ガーリオンの胸部を粉碎した。

『ヨッシャア！残り2機！』

それを見たグレックリーは喝采を叫び、残りのリオンにもワイヤーを撃ち込もうとする。が、相手の方も僚機のやられ方を見て警戒度を高めたのか、小刻みに動き回ってなかなか狙いが定まらない。

そこに元から持っていたザク・マシンガンと、先ほどレイゼンが手放したMMP-80マシンガンの2挺を構えたアウラのザクが、リオンを囲うように掃射を加えてくる。

『今っ！』

『オオオオ!!』

弾に当たるまいとリオオンが動く範囲を狭めるやアウラは叫び、雄叫びと共にグフ・カスタムを跳躍させたグレッタクリーはワイヤーを撃ち込む。

先端が胸部に触れるや高圧電流が流し込まれ、推力の停止したりオンは落下を始め、いくらも落ちない内にアウラの放ち続ける掃射に巻き込まれて爆散する。

「あとはあの砲台かつー!」

叫ぶや、レイゼンはドム・トローペンをバレリオオンへ向かわせる。

「距離を詰める。確実に当たると思った所で撃つてくれ!」

言いつつ、レイゼンはタナトスを高く掲げる。

バレリオオンの方も接近に気づいて主砲を撃ってくるが、機体を左右に蛇行させることでギリギリでかわしつつ距離を詰めていく。

しかしある程度進んだところで、レイゼンはコンディション画面に表示された両腕の過負荷警報に眉をひそめる。

（モビルスーツの腕が悲鳴を上げているっ？外見から予想はしていたが、そんな重いも重いつていうのか、このタナトスは!?!……これは、早く決めないと不味いな……）

自機の腕が使い物にならなくなる恐怖を真剣に感じると、バレリオオンへの接近速度をさらに速める。

同時にバレリオオンも主砲を撃つのをやめ、入れ替わりに左右に1門ずつ装備された短砲身からビームを撃ってくる。速射性があるのか、あるいは搭乗者が機体の負担を考えなくなったのか、光弾の連射は途絶えることなく続き、蛇行を続けながら距離を詰めるドム・トローペンの装甲を少しずつ掠っていく。

その時、バレリオオンの足元に砲弾が撃ち込まれる。

『行けっーレイゼンツ!!』

同時にグレッタクリーの叫びが通信から響き、ジャイアント・バズを構えたグフ・カスタムを一見するや、レイゼンは着弾の爆発で体勢を崩したバレリオオンに肉迫する。

そして、抱えていたタナトスのバズーカが火を噴き、放たれた砲弾が一直線にバレリオオンに命中する。

レイゼンたちアイアン・フィストの面々は知るよしもないが、航空機から発展したアーマードモジュールは機動力が高い代わりに防御力が低い傾向にある。

その中であって例外的に見た目からもわかるタフな重装甲を誇るバレリオンではあったが、流石に近距離から撃たれた戦艦の主砲並みの威力を誇るタナトスのバズーカを耐え切ることはできず、その重厚な機体を四散させた。

「終わった……か……」

『周囲に他の機影がないことを確認。襲撃者の撃退は成功です。みなさん、お疲れ様でした』

黒煙を上げるバレリオンの残骸を見、ミシエルの報告を耳にする  
と、レイゼンは安堵の息を漏らしながらタナトスを置く。

『ホーネットの修理も完了しました。状況確認をしたいので、みなさんは一度本機の前に集まってください』

「……了解した」

アイアン・フィストを代表して応じると、レイゼンはタナトスと共にホーネットへ向かって歩き出す。

（状況確認はこちらも望むところだ。さて、どんな話を聞くことになるやら……）

改めて見覚えのない景色の広がる周囲を見渡しながら、レイゼンは漠然とした不安を抱いた。

とある都市に佇む高層ビル。その一室では、10人ほどの老若男女が円状に並べられたテーブルを囲み、互いに渋顔を突き合わせていた。

大陸で活動する勢力の一つ——紛争抑止委員会、その幹部たちの定例会議である。

「例の採掘基地を失ったのは痛手ですな。DC戦争が終わってからこっち、ただでさえ我々の拠点が他の勢力によって潰され続けているというのに」

「採掘できる遺物の量も年々減ってますしな……」

「それを言ったら、我々が所有する採掘場からもう何年も新たなEO Tが発掘されていないことの方が問題でしょう。この前そのことで、イスルギの役員から露骨に嫌な顔をされましたよ……」

「かといって、目ぼしい場所はもう他の勢力が押さえている。士気の低い兵隊クズレが主体の我々の軍では、力づくで奪うのは難しいだろう」

「それどころか、基地によっては現状の体制を維持することも難しくなってきたようです。業務をボイコットする者が相次いでいて。傭兵を雇ってどうにか繋いでいるようですが、それが経費を圧迫して……」

「……………」

現在自分たちが抱えている問題が次々拳がるものの、誰一人それに対する解決策を示すことはできず、時間の経過に比例して室内は重苦しい空気に包まれていった。

行き詰っている——彼等の今の様子は、正にそれだった。

唐突にノックの音が鳴り響いたのは、そんな時だった。

「失礼します」

幹部たちの返答を待たずにドアは開かれ、黒いスーツに身を包んだ男が部屋に入ってくる。男といってもその顔には多分な幼さが残っており、見る者に「子供が背伸びして大人の格好をしている」という印象を与えてくる。幹部の中にも20代のメンバーはいるものの、入ってきた男はそもそも成人にすら達していないだろう。

一方で、立ち振る舞いには余裕があり、大の——そしておそらくは真つ当とは言い難い——大人を大勢前にしても物怖じする気配は一切見せず、ある種の貫禄を備えていた。

「部屋を間違えているのではないかな？ここは入社試験の会場じゃないぞ」

幹部の一人が皮肉げに言うものの、男は気にする様子もなく応じる。

「いえいえ。僕はビジネスの話をしに来たのです。紛争抑止委員会の

みなさん」

その何もかも心得ている口調に、ある者は身構え、ある者は興味の目を向ける。

「そうそう、紹介がまだでしたね。僕はグリム。ルミエイラという組織のまとめ役を務めています」

「！ルミエイラ……だと……っ？」

その口から出た名前に、驚愕の声を漏らした1人を筆頭に、幹部一同は戦慄する。いずれもそれなりの情報網を持っている者たちである。つい最近連邦に宣戦布告し、主に極東方面で小競り合いを繰り返している謎の勢力を知らない者はいなかった。

「そう怖い顔しないでくださいよ。そうだ、忘れるところでした」

多かれ少なかれ敵意の籠った幹部たちの視線を涼しい顔で受け流しながら言うと、グリムは指を鳴らし、それに合わせて開け放たれていたドアから全身を黒い大きな布で覆った一団が入ってくる。

「な、何だお前らっ！」

その異様な風貌から醸し出される恐怖はグリムの比ではなく、加えて本来は自分たちのテリトリーであるビル内をこのような者たちが歩き回っている現状に、幹部の1人が思わず腰を上げる。

「僕の配下の者たちです。妙な格好なのはご容赦ください」

グリムがそう言う間にも、黒布の一団は幹部一人一人のもとへ音もなく歩み寄り、抱えていた金属製の鞆をテーブルの上に置いていく。その際に幹部の何人かは黒布たちの手元や顔を見ようとするものの、いずれも布で隠れていて素肌の部分を窺うことはできなかった。

「我々からのほんの気持ちです。ご確認を」

グリムの言葉が示すように、鞆の持ち手には鍵がぶら下がっており、幹部たちはそれを鍵穴に差し込んでふたを開けた。

「!?!」

そして現れた鞆の中を埋め尽くす煌びやかな輝きに、全員が息を呑む。

「この輝き、そしてこの重さ……これはもしや……」

中身を手にして注意深く観察していた1人が恐る恐る訊ねると、グ

リムは笑顔の首肯を返す。

「ええ。お察しの通り、金塊です。それも混じりつけなしの純金ですよ。なんなら後できちんと鑑定してもらっても構いません」

「二……………」

？偽りが一切なく、揺るぎない自信を感じさせるその表情に、幹部たちは互いに顔を見合わせる。

普段は自身の利益と保身しか考えない面々ではあるが、この時ばかりは互いの心境が手に取るようにわかった。

——これは、チャンスなのではないか？

——このグリムとかいう者と手を組めば、今の閉塞状況を打開できるのではないか？

——得体の知れない勢力と組むことに不安がないわけではない。だが、このまま淀んでいるよりは……。

そして、ちようどグリムと正面から向かい合う位置にいた幹部が、先ほどまでの猜疑心など忘れ去ったような、とても好意的な表情を浮かべて言ってくる。

「ビジネスの話がしたいとおっしゃいましたな。具体的には？」

その問いに、グリムは影のある微笑みを浮かべて応じた。